

泉鏡花

転成する物語

秋山
稔

序論 転成する物語

7

第一章 泉鏡花の出發

『冠彌左衛門』考

45

『貧民俱樂部』と慈善の時代

69

明治二十七年の鏡花・忍月・悠々

111

『乱菊』の成立

133

『乱菊』本文考

154

『秘妾伝』の成立

224

『義血俠血』の背景

263

『取舵』考

275

第二章 豊饒な物語をめざして

『照葉狂言』懐旧と離郷

299

『勝手口』試論

317

『七本桜』本文考

339

〈越中もの〉の素材

410

『黒百合』の生成

424

『風流線』の一考察

452

『湖のほとり』から『風流線』へ

467

第三章 自然主義への抗い

自然主義と鏡花

491

『無憂樹』の語りとイメージ

509

『春昼』『春昼後刻』における夢

532

第四章 招魂へ向かう文学

『桜心中』の素材とモチーフ

549

『夫人利生記』の周辺

569

『夫人利生記』の成立

590

〈目細てると子どもたち〉の物語

611

『縷紅新草』招魂の機構

629

結論 紅葉門下における〈転成〉

662

あとがき

672

初出一覧

674

序論
転成する物語

泉鏡花は、典拠・素材を換骨奪胎して多くの固有の物語を生み出した。処女作『冠彌左衛門』（『日出新聞』明25・10・11・20）以来、作品の典拠は、曲亭馬琴、柳亭種彦、山東京伝ほかの文芸作品、能楽などの前代文芸、民間伝承、実録など多岐に渉る。作品成立論の観点からすれば、このように、典拠・素材を転じて成立する文学、原拠を離れて独自の作品世界を創出する鏡花文学を、「〈転成〉する物語」と捉えることができよう。

作品の典拠・素材には、土地の伝承、祭りなどの民俗や同時代の出来事、さらには、自身の発表作も含まれる。昭和十四年七月に発表した生前最後の発表作品『縷紅新草』（『中央公論』昭14・7）は、明治二十七年四、五月の体験や新聞雑報に基づくとともに、『鐘声夜半録』（『四の緒』所収。春陽堂、明28・7）、『女客』（『中央公論』明38・6、11）、『桜心中』（『新小説』大4・1）といった自身の発表作から転成した物語である。『田縁の女』（『婦人画報』大8・11・10・2）は、発表作を基にしたいわゆる（金沢もの）の集大成であり、「〈転成〉する物語」を代表するものといえよう。また、周知のように、鏡花は近代作家では珍しく、多くの草稿や校正刷りを出版社から取り戻し、手元に保管した。初期の下書き原稿も残されている。こうした草稿や校正刷りから作品本文への転成も跡付けることができる。

本研究では、作品の成立背景を検証すると共に、典拠や素材、さらには自身の発表作を基に、独自の作品世界に転成する過程、草稿や校正刷りから作品本文に転成する過程を検証し、その実態と意義を解明したい。

このような転成の物語を鏡花が描いた契機について、興味深い証言がある。それは、幼馴染で風流な文人として知られる細野燕台の次のような証言である。¹⁾

鏡花は紅葉のところにおいて紅葉におれのつくつた小説は一切読むことならんといわれ、そして古い文化文政時代からの小説をきょうはこれまで読めと二冊とか三冊とかを読みます。一年ばかりはこれを読むのが専門であつたらしいです。そして五日目ぐらいでは里見八犬伝なら……どこまで読んだか、これまで読んだ、それでは

その話をせい、なんの何左衛門が……と話すと、それではお前はどうかおもっているか、お前が小説を書いたらあれをどうするとそういうことをきく。いいともいわず悪いともいわず、ただ鏡花の話を書くだけで、それはそうではないことやということは一言もいわぬ。

(対談・細野燕台・深田久弥「鏡花の思い出」『北国文化』昭26・7)

細野の証言によれば、鏡花は、尾崎紅葉から『南総里見八犬伝』を始めとする前代文芸を読む前代文芸を讀むよう指導され、通読した作品を基にした独自の作品の構想を問われたというのだ。前代文芸を基に独自の美と構造を持った物語として転成する『冠彌左衛門』以下の作品の方法に通じる証言として興味深い。鏡花が転成する物語を書く契機は、以上のような玄関番時代の紅葉の指導によるものと思われる。こうした指導は、後述するように、鏡花以外の門下生にもあったと考えられる。しかし、鏡花の場合は、それを自己の創作法として自家薬籠中のものにしたのであった。たとえば、近年紹介された初期の断片、『四十八艘』(石川近代文学館蔵)の冒頭(A種)は、次のように書き出されている(「資料1」)。

越前国敦賀港大黒屋の店頭へ黄昏頃に入来る年紀尚少き旅商人、荷ふに余る油団包をどつさり下ろして腰打懸け、「やれ〜草臥た」と眩きけるは能登白尾在の商人に三郎平と謂へりし者、例年の如く其年も彼地の名産輪鳴塗を嚮がむとて京洛へ上る途なりけり、

此折恰も近江なる長浜の祭祀にて近郷近在或はまた遠国より参詣する保養がてらの旅人多く上下の客落合ひ

て旅店の取込一方ならねば、常花主の三郎平が今着きたるをも知らず顔に下婢ども応接に遅な(く)

(『新編 泉鏡花集』別巻一所収。岩波書店、平成17・12)

右のように、『四十八艘』は、能登から輪島塗を売りに行く白尾在住の若い旅商人三郎平が、敦賀でなじみの旅館大黒屋に到着したところから始まり、近江長浜の祭り見物の客で混雑する店内で相手にされないようすを語って

いる。商人、三郎平の旅先での物語が展開するであろうことががわかれる。原稿は、読点のみで句点を欠く。また、会話文のカギカッコを改行していないという状態から、明治二十七年四月から七月の執筆と思われる(松村友視「鏡花初期作品の執筆時期について」の分類による。「三田国文」昭60・10。拙稿「新編 泉鏡花集別巻一 解題」参照)。この年鏡花は、一月九日に父清次が亡くなり、九月初めまで帰郷し、作品を執筆しては、紅葉の添削を仰いでいた。書き出しだけで終った『四十八艘』は、添削を受けた形跡もない。紅葉の許に送付されることはなかったと思われる。この作品の出典は、内容からして、金沢で刊行された石井一蛙『いろは大尽』(刊行年月不詳)と考えられる(「資料2」)。同書「序文」の一節を引く。

連子窓から、ぱったり飛込んで来た財布の黄金が資本となり、五本の指を折るか折らぬ年間に、一廉の船持と成上り、追々帆に帆が重つて、千石以上の船を四十八艘迄浜辺に列べ、いろは大尽と世に持囃されて、一時全盛を極めた、加賀国河北郡の白尾浜の唐人屋三郎平も、盈れば欠る運のつき、俄かに黒雲現はれ出で、忽ち起る颶風の為に、其身代を捲取られ、元の藻屑の空阿弥陀、折角附きし金箔も、落ちて流る、人の行末、測り知られぬ白尾の大尽乞食、

右のように、『いろは大尽』は、加賀国河北郡白尾浜の唐人屋三郎平が旅先で思わぬ金運に恵まれ、四十八艘の千石船で北前船による交易をして富を築いたが、病床の妻の願いで、浜辺に四十八艘の船を並べたところを台風に見舞われ、全ての船が大破し乞食にまで成り果てたという顛末を描いた三百ページほどの活字本である。タイトル『四十八艘』、「能登白尾」の「三郎平」という登場人物が共通することから、『いろは大尽』を典拠とみてよい。鏡花は、『いろは大尽』を基に独自の作品を構想したが、何らかの事情で放棄したものと思われる。

注意すべきことは、こうした転成によって成立する作品の多くが、複数の原拠を持つことだ。大正七年四月「中

と唄い、「矢をはぎ、斧を舞はし、太刀をかざして、頤から頭なりに首を一つぐるりと振つて、交るぐに緩く舞」つた後、「臨兵闘者云々と九字」を切つて悪魔払いをするというようにである。ここには、二つの出典がある。祭礼の「やしこばゞ」と童謡の「火婆々」である。

「やしこばゞ」は、金沢の祭礼の余興として行われた。明治大正時代には、市内各所の神社の祭りで見られ、「弥彦婆」、「悪魔払い」ともいう。「悪魔を払う趣意」だと作中で、語り手が説明するとおりである。和田文次郎「弥彦婆物語」〔郷史談叢 昭4・11〕によれば、藩政時代「夏の土用から秋の初めにかけて」、山伏の一人が「武士の居る町々」を巡回する「悪魔払い」の行事があった。「笈を負ふた者は或は太刀を佩き或は弓を持ち或は斧鉞を持つてゐて交るぐ笈を下に卸て笛太鼓に合せて」舞う。弥彦婆という名称は、新潟の弥彦山の僧徒が疫病神を追い払う「弥彦送」が転化したものともいい、文化十二年三月二十八日の「大衆免」の大火を契機に、「山伏に倣ふて悪魔払いの扮装をなし悪魔退散災難除を叫び廻つたのが追々滑稽化」して「祭礼の余興」に弥彦婆を催すようになったという説があるという。なお、作中「やしこばゞ」の三人について、「大河を一つ、橋を向ふへ越すと、山を屏風に繞らした、「翠帳紅閨の衢がある。おなじ時に祭だから」とある。この「翠帳紅閨の衢」は、東廓をさす。明治三十一年十月七日付「北國新聞」掲載のびよこ助「観東廓百鬼夜行」によれば、「東廓では毎年鎮守卯辰神社の祭礼最終の夜十二時頃より芸娼妓一同業を休み嫖客と一緒に種々奇妙変態な仮装をして踊り狂ふを例とし」とある。この三人も、東廓の仮装踊りの連中の可能性があるだろう。

『茸の舞姫』では、やしこばゞの連中が法螺貝と横笛に拍子を合わせて「やしこばゞ、うばゞ」と唄うが、実際の祭礼でそうした唄をうたう風習はない。別個のものを、鏡花が作中で結びつけているのである。唄の出典は、金沢に伝わる童謡「火婆々」である。「火婆々」は、「手真似、指わざ、手拍子唄」の一つで、

火婆々火婆々／火一つたのむ／火はまだ打たぬ

あの山越して／この谷越して／下にちよろ／火が見える

と唄いながら、「両手の指を組み合せ、唄につれて指わざをなす」もの（金沢地方の童謡選集 昭5・2）である。「火婆々」という他界の存在が妖しい火を点じる唄と捉えられよう。『茸の舞姫』では、童謡の「火婆々」の「婆々」祭礼の「やしこばゞ」の「ばゞ」との音の共通点を軸に、両者を結びつけている。また、「やしこばゞ、うばゞ、／うば、うばゞ」を「火婆々」の歌詞の前後において、「火を一つ貸せや、／火はまだ打たぬ、／あれ、あの山に、火が一つ見えるぞ、」というように、対話に改めている。火婆々と対話するのは、天狗がふさわしい。

興味深いのは、作中、同じ歌が、杵若の招待された茸の国の紅茸の「お姫様の踊」でも歌われるということである。杵若が、境内で披露する茸の国の歌は、笛や鼓の「ひゆうら、ひゆうら、ツテン、テン、おひやら、ひゆうい、チテン、テン、ひやあら／＼、トテン、テン」という軽快な調べに合わせて唄われる。法螺貝と横笛に拍子を合わせて、「交るぐ緩く」舞い、「臨兵闘者云々と九字」を切る「やしこばゞ」の悪魔払いとは対照的である。同じ三人が、今度はこの境内で茸の国と同じように、杵若の紹介する囃子の声色に調子を合わせて踊りだす。踊る姿は、「手足の科しなした」山伏が「腰を入れ、肩を撓め、首」を振るもので、現世の悪魔払いとは正反対の「しなやかなもの」である。ここに至って、地上の悪魔払いは、杵若を介して、茸の国という山中他界の陽気な祭礼の踊りに転じたのである。

その後、「天狗風」が吹き降ろすとともに、「蜘蛛の囀の虫」が「晃々と輝いて、鏘然、珠玉の響」が境内をつつむ。それは、杵若の商う蜘蛛の糸が、茸の舞姫、紅茸の「薄らと裸体に巻く宝もの、美しい衣服」、「金銀珠玉」を「織込んだ、透通る錦」に転換したことを意味する。と同時に、その瞬間、境内は茸の国の魔界・他界と化す。現

世の「銭」は魔界では何の価値もない。現世の衣服を脱ぐこと。現世のしがらみを象徴する衣服を脱ぐことで、蜘蛛の糸の「美しい衣服」を手に入れることが出来るのだ。山伏の衣装を脱いで、「裸体」に「蜘蛛の巣」を「被いて、大旗の下を行く三人の姿」が、神官の目にも「紅玉、碧玉、金剛石、真珠、珊瑚を星のごとく鑲めた羅綾の如く見えた」というのも、李若を仲介して境内が魔界・他界と化したからであろう。地上の掟に厳格な神官が、一部始終を目撃して日常の感覚を喪失し、李若を模倣して巫女の「衣を剝」いで、頭に「虫の掟に厳格な神官」をかざした後発狂するのも無理はない。

後日、李若が「門から手招き」すると、町内の娘が一人「宝玉の錦」を求めて、衣服を脱ぎ、「格子」を出る。それを皮切りに、「幾人となく女」たちが李若の小屋に「舞込」み、女性たちが「白い陽炎の如く」に李若を取り巻いていると記して、作品は終わっている。李若は、女性を魅了する非日常の他界を、現実世界に持ち込んだ。それは、李若を介して、他界が現世に侵入する拠点を持ったこと、町が他界に侵食されるであろうことを意味するだろう。

『茸の舞姫』は、神社の秋祭りに李若が他界の蜘蛛の巣でできた「美しい衣服」の商いを始めたのを契機に、李若を介して、他界が現世に参入し、町が他界化する現世への脅威を描いた作品といえよう。魔の進入を許さないはずの神域、境内でそれが可能になったのは、悪魔払いの唄を他界の祭礼の踊りの唄に転じたことによる。魔を払う唄が、魔を呼び込む唄に転換したのである。

以上のように、『茸の舞姫』は、『三州奇談』の神隠しと天狗の憑依を描く「幽冥有道」(または、「天狗妖怪」、金沢市内の祭礼の余興としての「やしこぼッ」、童謡「火婆々」の三つの典拠を基に、現世と他界を往来する李若を造形し、悪魔払いを意味する「やしこぼッ」を他界の消息を伝える「火婆々」と結びつけ、火婆々を改作したやしこぼッの唄を他界の祭礼の最大の呼び物としての「お姫様の踊」の陽気な唄に転換して、境内に魔を呼び込む物語に〈転成〉したのであった。結びの一文は、李若を介して、女性を魅了する妖しい他界がますます増殖し、現実世界の大きな脅威になるであろうことを示唆するだろう。

2 『妙の宮』——草稿からの転成

草稿からの転成の例として挙げられるのは、『妙の宮』(『北國新聞』明29・6・14)であろう。ここでは、『妙の宮』を継承、発展させた『蓑谷』(『少年世界』明29・7)、『龍潭譚』(『文芸倶楽部』明29・11)と併せて、検討したい。引用は、初出による。

『妙の宮』は、鏡花の描いた最初の異界訪問譚と考えられる。おそらくその始まりは、随筆「飛花落葉」(『太陽』明31・3)、「野宿」に記す作者の体験によるだろう。「六部巡礼など、諸国をめぐるもの」が、野宿する際不気味だと感じるのは、「火葬場、墓原、寺の境内」よりも、「宮、社」であり、「水の音、風の声の他に、何ともなく物音する」のが「不思議に耳」について不安になると聞き、「宮は間近なれば其不気味さ加減を試みむ」と出かけた体験を、次のように記している(引用は、初刊本『春宵読本』春陽堂、明42・5)。

月のあか、りしに、高き石段をのぼりて、暗き森の中を潜り出で、やがて社縁にのぼりぬ。額はあれど見え
ず、狐格子の奥は限なく遙かにて、身に染む思ひありしが、斯くてもひるまず、欄干につきて左の縁に曲らむ
として、一目見て、ゾツとして立窘みぬ。朽ちたる縁の上に、ちぎれ々なる蓆ありて、其上に椀と、皿と置
きたる、皿は一所欠けて白く、椀の禿げたる色の赤ささへ月あかりにあかるく認められたるなり。これにこそ。

『妙の宮』では、月の「あからさまに照ら」す夜、「うつくしき少年土官」が「二百十六段」の「石階」を上り、神社の「廻廊を左にめぐりて、横に折れて出」ようとして、「廂の下の薄暗き」ところにいる幼児を見て驚嘆する。後述するように、石川近代文学館蔵の草稿では、幼児のいる回廊には、「皿一つ箸を添へて折敷にならべ」てあり、「茶碗」や「鉢、米櫃など」があったと記し、月光を浴びて「焼きもの、の模様まで、あざやか」にみえるとする。「野宿」には、『妙の宮』同様、「暗き森」も、「狐格子」も出てくる。山中の高台にある神社の縁で、「不気味」な体験をする点が共通し、発表は前後するが、「野宿」との関連は明らかである。『妙の宮』は、高台にある神社を深夜に訪ねた体験を核として、成立した作品と考えられよう。

石川近代文学館には、『妙の宮』の草稿八枚と別稿一枚の計九枚が収蔵されている(資料3)。八枚の草稿は、訂正が多いものの、冒頭から末尾まで完備している。別稿一枚は、冒頭八行を記したもので、巻頭に「(上)」とあるほかは、草稿八枚の冒頭とほぼ等しく、草稿の清書稿と見られる⁴⁾。

これらの草稿については、国田次郎「目細家資料校異考(一) 妙の宮」(『鏡花研究』昭51・3)が全集本文との校異を示した上で翻刻し、田中勳儀「妙の宮」成立考—明治二十九年の鏡花」(『鏡花研究』平元・3)が、抹消の痕を解読し、訂正の推移を検証して、本文成立の過程を明らかにした。さらに、美濃部重克・横田忍・水野重紀子「泉鏡花の跳躍—『妙の宮』の鏡花作品史上での意味」(『国語と国文学』平成21・10)は、草稿から初出本文への改稿を八カ所にわたって取り上げ、その意義を検討している。

田中論文の指摘にあるように、草稿段階で鏡花が「最初に考えていた構想」は、「あまり月の良かりしかば、あてなうてうかれ」て外出した「うつくしき貴公子」が、「山中の社」である「杉の宮」を訪ねるところから始まる。神社の「石階」で「金時計」を掏られ悔しい思いで鳥居まで来ると鼈甲の櫛を見つける。一度は手にしたが、また

元にもどす。その後、境内の社の回廊で、食器類が散乱したなかに、幼児がいるのに、慄然とする。「大声で泣かれ、取り戻すのをあきらめた若者が踵を返すと、時計の礼のつもりか、履いてきた下駄が揃えてあり、幼児には緋縮緬の扱帯が結びつけられてあった」(田中論文)という結末である。「うつくしき貴公子」を「うつくしき少年土官」に変更し、「鉢や米櫃といった生活臭を消し、櫛を置き下駄を揃えた」「夜稼ぎの母」の行動を削除する「こと」によって、「掏摸の物語」から「女神の物語」への転換が図られた」(田中論文)のであった。

「貴公子」から「少年土官」の物語に転じ、さらに櫛や鉢・米櫃といった女性の存在や生活臭を削除して、「掏摸の物語」から「女神の物語」へと転換した草稿を清書し、校正を経て、初出本文が成立したものと考えられる(資料4)。

草稿から初出本文への過程で注目されるのは、草稿と初出本文の異同、特に冒頭と末尾の異同である。

主人公が、妙の宮に参道に臨む場面の草稿の訂正から初出までを示せば、次のようになる(草稿第一、第二は田中勳儀氏の翻刻に基づき、若干の補足を加えた。以下、同じ)。

① 草稿の第一段階

あまり月の良かりしかば、あてなうてうかれ行きしうつくしき貴公子の瘠ぎすなるがこ、を杉の宮と思ふ時、手にしたる杖を□(不明。以下同じ)麓の叢□小松の傍なる女松の幹によせかけり。腕を拱き頭を垂れて、しづかに坂道をのほりかけぬ。

② 草稿の第二段階

あまり月の良かりしかば、こ、を妙の宮と思ふ時、少年土官は帽を脱してしづかに坂をのほりかけぬ。

③ 草稿、別稿(第二段階の清書)

あまり月の良かりしかばこ、を妙の宮と思ふ時、少年士官は帽を脱して心静に坂をのほりぬ。

④ 初出本文

こ、を妙の宮と思ふ時うつくしき少年士官は、帽を脱して、心静に坂をのほりぬ。
一昨日は誰、昨夜は彼、数へて五人まで、この士官の友の心猛きが皆こ、に来て、事なく帰りたるはあらざりし。

今夜ぞ、其六日目の月の夜なりける。

右のように、草稿の第一段階では、月の良夜に浮かれて外出した貴公子が、杉の宮に来合わせ、礼拝したあと社に向かう。第二段階及びその清書（別稿）では、少年士官が月の良夜に惹かれて、妙の宮の社に向かう。それが、初出紙では、「一昨日は誰、昨夜は彼、数へて五人まで、この士官の友の心猛きが皆こ、に来て、事なく帰りたるはあらざりし」という、肝試しに転じている。いずれも冒頭に、「夜に入れば人の来まじき処ぞ」とある。深夜に参入すれば何がしかの異変に遭遇するという記述に異同はない。しかし、初出本文では、可能性ではなく、すでに五人まで、異変に遭遇しているのであり、六人目の「うつくしき少年士官」が何らかの異変に見舞われるのは確実である。少年士官は、人間を拒む存在に向き合う覚悟を決めているにちがいない。

このように、初出本文では、草稿とは異なり、人間と人間に脅威を与える他界の存在とが同じ空間で向き合う作品の構図が、冒頭に示されているのである。したがって、作品の読解に際しても、人間に脅威を与える他界からの視点を持つ必要がある。少年士官が、「帽を脱して、心静に坂」を上るのも、他界の存在を充分意識してのことである。初出紙の少年士官は、草稿の主人公とは、まったく異なった心境にあるといえるだろう。

次に、宮に向かう途中、金時計を何者かに奪われた少年士官が、回廊で「坊主天窓の児」に出会い、幼児が奪われた金時計を持っているのに気づく物語の帰結を検討しよう。国田氏、田中氏の翻刻を参考に、石川近代文学館蔵の草稿の結びの一節を引く。

① 草稿の第一段階

わかものは身の毛よだちぬ。さきに失ひし金時計はこのをさなごの手にありたるなり。

「どれ、お見せ、お見せ。」

とすかして時計に手をかくるに、児はわつと泣き出しぬ。

わかものは耳を蔽へり。

「あ、あ、取りはしない。堪忍、堪忍、な、な。」

と其うなじを搔いなづれば、なめたる時計を□してをさなごは莞爾と笑へり。

心着けば其胸をひしと巻きて勾欄にしかと片端を結へたるが燃え立つ如き緋の縮緬の扱ありき。

「あ、いゝものを、かあちゃんに貰ったか。坊やちよいとおみせ、どれ取るんじやあ無い〜。」

一時見たるばかりにてわかものは時計をすてつ。立去るとて見返りしものは、惜しきにあらざりし。月をはをさなごを照らしたる。やがて階をおりむとせしに脱すたりし下駄の一足何物の手ぞ怪し揃へて（完）

② 草稿の第二段階

わかものは身の毛よだちぬ。さきに失ひし金時計はこのをさなごの手にありたるなり。

「どれ、お見せ、お見せ。」

とすかして時計に手をかくるに、児はわつと泣き出しぬ。

わかものは耳を蔽へり。

「あ、取りはしない。堪忍、堪忍、な、な。」

其うなじを搔いなづれば、水晶の如き眼色して、(色白く)愛らしきをさなごは莞爾と笑ひぬ。

「あ、い、ものを、かあちゃんがくれたのか。」

と声うるみ、引寄せんとしたためらひつ、其ま、此方に踵を返せば、あとを慕ふて這ひよりわかものは引かれて伏しまろびし、危ふき所に這ひ去らざるよう其胸をひしと巻きて片端を夜稼の母が堅く欄干に結へたる燃え立つ如き縮緬の扱なりける。(完)

③ 草稿の第三段階

少年士官は身の毛よだちぬ。さきに失ひし金時計はこのをさなごの手にありたるなり。

「どれ、お見せ、お見せ。」

とすかして時計に手をかくるに、児はわつと泣き出しぬ。

士官は驚きて耳を蔽へり。

「あ、取りはしない。堪忍、堪忍、な、な。」

と其うなじを搔いなづれば、水晶の如き眼色して、愛らしきをさなごは莞爾と笑ひぬ。

「む、い、ものを、かあちゃんがくれたのか。」

と声うるみ引寄せむとためらひて、其ま、踵を返したる、あとを慕ふて這ひよるを後より留めしは、誰が手ぞ危ふき所に去らざるよう堅く欄干に結へ置ける燃立つ如き縮緬の扱なりける。(完)

④ 初出

さきに失ひし金時計はこのをさなごの手にありたりき。

ひとたびは身の毛よだちぬ。ヤ、心の静まりたれば、

「どれ。」

と時計に手をかけ、屹と其顔をみつむるに、児はおそれけむ、わつと啼きぬ。士官は驚きて耳を掩へり。

「何もしやせん。堪忍しろく。」

と其うなじを搔撫つれば、水晶の如き目の冴々しく、愛らしき顔して莞爾と笑ひ、

「あ、あ。」

と掌なる時計を示しつ。よき手遊をほこるなるべし。

少年士官は頷きぬ。

「む、い、ものを。取つておけく。」

再び其頭をなで、。おのが膝に抱かむとするに、誰が手ぞをさなごの独這ひて危き所に動かざるやう、堅く勾欄に結へくる、燃立つ如き縮緬の扱帯の見えき。(完)

右のように、草稿の第一段階では、片端を勾欄に結わえた扱き帯で胸が巻かれているのに気づいて、「あ、い、ものを、かあちゃんに貰つたか。」と幼児に問いかけ、時計を一瞥して階段を降りると下駄がそろえてあったという展開になっている。第二段階では、幼児を「引寄せ」ようとしたがためらい、そこを離れようとしたところ、幼児があとを慕つて這いよつてきた時、何かに足がかかかつて転ぶ。そこではじめて、「夜稼の母」が、幼児の安全のために「堅く欄干に結へたる燃え立つ如き縮緬の扱」に気づく。第三段階では、同じくそこを離れようとしたところ、幼児があとを慕つて這いよる。それを留めたのは、「危ふき所に去らざるよう堅く欄干に結へ置ける燃立つ如き縮緬の扱」だったといい、扱き帯を結わえた人物を「夜稼の母」から「誰が手ぞ」というように暗示的な表現

に改めている。いずれも、失くした時計を手にかけている幼児に戦慄し、時計に手をかけて幼児が泣き出すと驚いて「取りはしない」と謝り、機嫌を直して笑う幼児に「む、い、ものを、かあちゃんがくれたのか。」といって帰途につく展開になっている。田中氏の指摘のとおり、第三段階に至って、女性の存在や生活臭を削除して、〈掏摸の物語〉から〈女神の物語〉へと転成したのであった。

初出本文を第三段階の草稿と比べると、次のようなことがいえる。

① 初出では、幼児が失くした金時計を手にかけているのを見て戦慄し、動揺が収まってから時計に手をかける。草稿では、「どれ、お見せ、お見せ。」と「すかして時計に手」をかける。この時間の経過が草稿にはない。

② 次ので、初出では幼児が泣き出すが、その理由は、時計に手をかけたからだけではない。「屹と其顔をみつむる」、つまり顔を近づけたことに「おそれ」て「わつと啼」くのである。したがって、少年士官のせりふも、「何もしやせん。堪忍しろく。」となる。草稿では、時計に手をかけたために、泣き出す。したがって、少年士官は「あ、取りはしない。堪忍、堪忍、な、な。」というように、時計の放棄に言及する。

③ さらに初出で、機嫌をなおして笑顔を見せた幼児が、「あ、あ。」と「掌なる時計を示し」て、「よき手遊をほころ」のを見て、少年士官が頷くやりとり、「む、い、ものを。取つてをけく。」と「再び其頭をなで」て、「膝に抱」こうとするやり取りが草稿にない。草稿は、「む、い、ものを、かあちゃんがくれたのか。」と時計を与えた母親に言及し、「声」をうるませて「引寄せ」ようとするが、「ためらひて、其ま、踵を返」す。「あとを慕ふ」幼児を顧みない。扱き帯に気づく契機が全く、異なる。

このように見てくると、戦慄から驚きと困惑、謝罪と交流へという幼児と少年士官のやりとりを描く点に異同はない。しかし、初出本文は、二人のやり取りを詳細に描き、草稿よりもさらに一層、深い相互理解に到達した様子を描いているといえるだろう。

以上のやり取りは、他界からの視点を導入すれば、次のように考えられよう。

時計の喪失、蟹や蛇の脅威にもひるむことなく境内の社、さらには回廊まで侵入した少年士官は、他界の支配者（幼児の母親）からすれば、最愛の我が子に危害を加えるかもしれない危険人物である。他界は、大きな危機を迎えたといっている。我が子に危害を加えられるか、手遊びに与えた金時計を奪い取られる危機を迎えた。一方、少年士官には、今までの五人以上に酷い眼に遭う危険が迫っているともいえる。少年士官は、生死の分岐点にあつたかもしれない。その危機をどう乗り越えたかといえは、自力で危機を乗り越えた、切り抜けたといえよう。金時計を手放し、さらには、幼児と心を通わせることで、危機は消滅したとみられる。

『妙の宮』は、母子によって形成された他界への参入をえがいた作品、さらには少年士官の無事な帰還をも示唆した作品といえる。それを可能にしたのは、人間を越えた存在を認め、敬う少年士官のあり様である。少年士官は、誰の力も借りずに危機を切り抜けた。しかし、意識し、努力したのではない。金時計に象徴される世俗的な価値に捉われず、純粹な人間らしい交流によって幼児と心を通わせた結果である。この点に関して、幼児が時計を手にして少年士官と向き合う点を根拠に、幼児を少年の過去の姿と捉えて、少年士官は過去の自分と向き合うという見解があるが、賛同できない⁷。作品の構造から、他界への参入と帰還がいかに可能かを描いた作品とみられること、時計は金時計であることにこそ意味があり、それを放棄して他界と心を通わせることで帰還が可能になると捉えるべきではなからうか。

3 『妙の宮』から、『蕨谷』『龍潭譚』へ

『妙の宮』で、他界への参入と帰還を構造とする物語を完成させた鏡花は、翌月『蕨谷』（初出の表記は『蕨谷』だが、全集本に従い『蕨谷』とする）、五ヵ月後には『龍潭譚』で『妙の宮』を転成した物語を発表する。

『蕨谷』は、黄昏時に螢狩りに出た少年「予」（みねが、「螢一つ」を追いかけて蕨谷に「うか〜と迷ひ来」て、母から、「蕨谷の螢には主ありて、みだりに人の狩ることをゆるし給はず、主といふは美しき女神にておはず」と聞いていた「女神」に遭遇する。始め「瀑たきに面して背を此方に向け」ていた「怪しの姫」は、「予」が姫の背中にとまったを見て、「其螢われにたまはずや」と言おうとする直前「此方を見向」くと、驚いて一歩後退し、「瀑たきを其頭にあげ」る。このように、蕨谷の「女神」は、少年の来訪を予期していなかったことがわかる。少年も、他界に参入する意図は全くなかった。文字通り、少年と女神の遭遇を描いた作品である。少年は、どのように危機を切り抜けたのだろうか。

右のように、「姫なる神」の背中に少年が追いかけてきた「螢一つ」がとまったところから、「予」と「怪しの姫」のやり取りが始まる。まず、振り向いた「姫」が「小さき予が姿」に驚いて「一足つとすさる」。『妙の宮』の少年士官が、回廊で「坊主天窓の児」を思いがけず発見して「驚きて一歩退」いたのと同じである。しかし、子どもの年齢（前作が二歳、本作が七歳）、男女（少年士官、姫の異同がある。また、前作で子どもが他界の存在、少年士官が現世の存在であったのに対し、本作では子どもが現世の存在で、姫が他界の存在というように、男女や属する世界を入れ替えている。

振り向いて退き、瀧水を浴びている姫に、「予」は、「螢、下さいな」と「恐気もなく前に進」む。これも、幼子が「ひかるもの」を握っているのに気づいた少年士官が「つか〜と寄添」う『妙の宮』と同じである。「予」は「螢一つ下さいな」と一途に同じ言葉を繰り返し、「身近に立寄る」。無言のまま、自分の顔を見つめる姫の瞳に「螢の光が凄く冴え」ているのに気づいたに「予」は、「少しく恐気立」ち、「神の稜威みあつを犯」した罪を問われることを恐れ、「御免なさい」と謝る。「うちへ帰してくださいよう」と懇願すると、姫の「顔の色や、解けて、眉のび、唇ゆるみぬ」というように、姫は心を許し、螢を「上げましやう」と語りかける。このように、姫は、不意に少年が姿を現したのに驚嘆したものの、「螢一つくださいな」と繰り返す一途さと「こんだつから来ないから」と「来るまじき処」に来たことを謝罪する真率さに心を打たれたものと思われる。

こうした経緯は、『妙の宮』で金時計を手にした幼児が「人見しり」をせず、「なつかしげ」に這い寄るのは対照的だが、その後、少年士官が泣き出した幼児に謝罪し、少年士官と幼児とが心を通わせるのは共通する。異なるのは、『妙の宮』で少年士官が奪われた金時計を幼児が手にしているのを見て戦慄するのに対し、『蕨谷』では、姫に不意に抱きしめられて戦慄（手足思はずふるひぬ）することである。その後、年齢や名前に関する応答があり、「もう、こんな処へ来るぢやありません。母様がお案じだらうに、はやくお帰り」とやさしい言葉をかけられる。籠に入れようとして空へそれた螢を二人で追う「蒼き光の見えがくれに、姫は予が前後また右左に附添ひつ」という一節には、一体感さえ感じられる（資料5）。無事帰還した「予」が、後年、「恐ろしき魔所」といわれても、「優しく、尊く、美しき姫のおもかげめにつきて、今もなつかしき心地ぞする」という感慨を抱くのも、当然だろう。

このように、『蕨谷』は、『妙の宮』同様、「来るまじき処」としての他界に参入した主人公が、他界の存在と心を通わせることによって危機を乗り越える物語である。しかし、肝試しのために意識して他界に参入していった少年士官に対して、「予」は、螢に導かれて不意に他界に参入し、螢を追って、現世に帰還する点が異なる。年齢や

名前についての問答にはじまる対話や二人で空へそれた螢を追う姿に、前作以上の心の通い合い、交流の深化がみられる。『蓑谷』は、他界の存在の男女や年齢や所属する世界を入れ替えて、前作にはない現世への帰還を描いた転成の物語といえよう。

続く『龍潭譚』も、『蓑谷』の「みね」と同年齢（七歳）の少年千里を主人公とし、現世から他界に参入し、再び現世に帰還する物語である（資料6）。しかし、現世に帰還しても、家族や使用人と融和できず、暴風雨の寺院で過ごした夜、姉にすがりつくことにより、本来の自己をとり戻す。帰還後の主人公、帰還後も他界に魅了される主人公を描いており、『妙の宮』、『蓑谷』を発展させて独自の作品世界に結実させている。

『龍潭譚』を『妙の宮』『蓑谷』から「転成」した他界訪問譚の発展と捉えると、次のような見方ができる。『妙の宮』が肝試しで意志をもって他界に参入する物語、『蓑谷』が螢に導かれて無意識のうちに他界に参入する物語だとすれば、『龍潭譚』は「九ツ苜」の「うつくしき人」が「躑躅か丘」に一人でやってきた少年千里を他界に導きいれる物語、他界にいざなう物語であるということだ。「うつくしき人」には、少年千里を求める理由があった。そこで、眷属の斑猫やかくれ遊びをする子どもたち、さらには「丈高き女」に命じて、千里を現世から引き離し、他界に導いた。そのように考えると、さまざまな不思議が解消される。

斑猫は、姉でさえ弟の顔を識別不能にする役割を負う。子どもたちのするかくれ遊びは、捜すものとしての鬼がかくれたものを全て探し出して振り出しにもどる遊びである。かくれた子どもたちが姿を消せば、捜すものは、振り出しにもどれない。かくれ遊びは、鬼になった千里の現世との交流を断つ意味があるだろう。そこに、救世主のように登場した「丈高き女」は、本堂の奥にある稲荷神社の「孔の如き空地」に千里を導く。それは、坂下の町から捜しに来た人々から千里を引き離すことになる。ここで、注目すべきことは、千里が「丈高き女」を、「こ、に

潜め、助かるべし」と導いてくれると信じ、坂下からくる人々を「恐ろしきもの」、「われを捕へむとする」ものというように逆に捉え、現実感覚の混乱と逆転が生じていることであろう。ようやく会えた姉から「違つてたよ、坊や」と誤認されて、混乱は極点に達し、現世との絆を喪失した千里は、他界の思惑通り、大沼のほとりにひた走ることになる。

では、なぜ、「うつくしき人」は、千里を必要としたのだろう。描かれてはいないが、推測は可能である。水浴を終え、千里に「気分は直つたかい、坊や」と尋ねた後、「うつくしき人」は、次のように語る。

「お前あれは斑猫といつて大変な毒虫なの。もう可ね、まるでかはつたやうにうつくしくなつた、あれでは姉様が見違へるのも無理はないのだから。」

右の一節から、女は少なくとも「躑躅か丘」に斑猫が姿を現わす前から、千里の行動を見守っていたことがわかる。そればかりではなく、全ては、千里を他界に導きいれるために女が指図したことを、この発言は示唆する。間もなく水を飲みに来た「つゞれをまとふたる老夫」が「はい、これはお兄さまがござらせえたの、可愛いお兄じや、お前様も嬉しがる。」というのは、「うつくしき人」が、「可愛いお兄」を求めていたことを知る老夫が、女の喜びを寿いでいるものとみられる。

千里はそのあと姉に懇願して許してもらえなかったものを、「うつくしき人」から与えられる。おそらく、それは「うつくしき人」が求めていたことでもあった。母代わりの姉の許さなかったもの、それは次のように、与えられる。まず、

やがて添臥したまひし、さきに水を浴びたまひし故にやわが膚をりく慄然たりしが何の心もなうひしと取縋りまゐらせぬ。

というように、千里が添い寝する「うつくしき人」に「何の心」もなく取りすがると、「うつくしき人」は「をさな物語二ツ三ツ聞かせ」た後、「一ツ笹」から「八ツ笹」まで「一緒に数え、ここが「九ツ笹といふ処」だと教えた後、「さあもうおとなにして寝るんです。」といい、「背に手をかけ引寄せて玉の如き其乳房をふくませ」る。

姉上に「乳をのまむ」と懇願して退けられていた千里にとって、「乳房」は、母が亡くなつてから三年間求め続けたものであった。「乳房」は、母と子の絆の象徴であろう。それは、「うつくしき人」もまた、求め続けていたものと推測される。おそらく、千里とは逆に、「うつくしき人」はかけがえのない幼子を、何らかの理由で亡くしたのだろう。乳房を与えることだけではない。幼子に添い寝して取りすがる子に「をさな物語」を聞かせ、言葉を交わし、乳房を含ませること、そして、守刀を胸において幼子と一緒に眠りにつくこと、母と子の絆をもう一度結びなおすことを、「うつくしき人」は希求していたのではなからうか。願いがかなつたのは、千里ばかりではない。我が子を喪つて以来他界の女が求め続けていた願いが、この夜、叶えられたと考えられないだろうか。女は、千里にそれ以上のことは何も求めていない。千里が女に母親を重ねて臨終の様を思い出して「声高に、母上、母上」と呼びかけても、何の反応も示さないことが、その証左である。

千里が他界にいざなわれたのは、千里が、姉に母に代わる乳房を求め、求めて得られない少年であるからであろう。とすれば、「一人にては行くことなかれ」と「優しき姉上」から止められていたにもかかわらず、「躑躅か丘」に行ったのも、他界からの導きであつたかもしれない。少なくとも、「躑躅か丘」に足を踏み入れたときから、「九ツ笹」で一夜を過ごす運命になつていたといえよう。

翌日、千里が目覚めたのは、「九ツ笹」ではなく、「顔のあかき老夫」の背中で、すでに家に帰される途中であつた。「家に帰るべきわが運ならば、強めて止まらむと乞ひたりとて何かせん」というように、「九ツ笹」に未練を残しながら、家路に着く。千里はなお、「九ツ笹」にとどまりたいと願っているが、「うつくしき人」には、そのようなぞぶりは見えない。舟に乗るとき、千里が「一所ならではと、しばしむづか」っても、「めまいのすれば」といつて、乗らない。しかし、「うつくしき人」に、千里を求める気持ちが消え去つたとは考えにくい。それをうかがわせるのは、船出したあと、千里の目に映る映像を描いた一節である。

初めて舟に乗つた千里は、「水を切ることに眼くるめくや」というように、眼をまわし、「背後うしろに居たまへりとおもふ人」が「大なる環にまはり」、「前途ゆくてなるの汀」にいるというように極めて不自然な感覚に捉われる。次いで、「うつくしき人」は左手から右手の「汀」に回り、「旧もとのうしろ」、つまり、舟出した汀にもどる。さらに、「うつくしき人」もろとも大沼が「環を描いて廻転」し、「急になりて、疾くなり」、しだいに「こまかくまわる」。女が「二尺」先の「松の木」にすがっているのを見、最後に「眼の前」で「莞爾にっことあでやかに笑」う顔が見えたという。おそらく千里が眼を回しただけではなく、女が文字通り、汀を移動し、回転していると捉えれば、説明がつく。はじめは、船出した汀を左から右回りに回っていたのが、速度を増し、「箕の形」をした大沼をらせん状にめぐり、千里に接近する。「龍潭」のタイトル通り、「うつくしき人」は、本来の霊力を現し、龍に化して、沼の周囲をめぐるのである。「うつくしき人」が小舟の周囲をめぐる理由、それは、千里への執着、未練であろう。千里に笑顔を見せ、「その、ちは見えざりき」というように姿を消すのは、断ちがたい執着を抑制したのかもしれない。こうして、千里は、「うつくしき人」に翻弄されたまま、帰還する。

現世にもどつた千里は、伯父の奈四郎を始め、遊び仲間からも、「さらわれもの」「氣狂」、「狐つき」として、差別され、危機を迎える。『妙の宮』や『蓑谷』は、他界での危機をいかに切り抜けたかが描かれていたのに対し、『龍潭譚』では、危機は現世に帰還してから訪れたのであつた。

暗室に幽閉された千里は、周囲のものに不信を募らせ、「姉とてまことの姉なりや」とまで思う。自ら発狂を疑い、「怪しき糸」が「十重二十重にわが身にまとふ心地」になり、食事さえ取らない。最後の手段として、加持祈祷が選ばれたのである。幸いにも、本堂で、千里は自己を取り戻し、危機を乗り越える。では、危機の克服は、本作ではいかになされたか。

激しい雷と暴風雨にさらされた本堂で、千里は恐怖の余り「今は姉上を頼まてやは」と「膝にはひあがりて、ひと其胸を抱」く。すると、姉は千里の背中に腕をまわして「組み合は」わせてくれる。緊張していた「気も心も」緩み、読経の声を聞くうち、「あはれに心細くもの凄」くなる。「身の置所」がなくなつて、「からだひとつ消えよかし」と「顔もて其胸を押しわけ」たところ、姉が「襟をば掻きひらきまたひとつ、乳の下にわがつもり押入れて、両袖を打かさねて深く」千里の背中を覆う。千里は、「御仏の其をさなごを抱きたまへる」姿を重ねて、うれしくなり、心を落着かせ、「心地すがくしく胸のうち安く平らになりぬ」というように、危機を乗り越える。千里が姉に救済を求め、それを姉が受け入れたことがその理由である。姉が千里に対して、「御仏の其をさなごを抱きたまへる」姿、鬼母神と思われる母神の子を抱く母子の位置に立つことを受け入れたことにより、千里は現実意識を回復する。換言すれば、それは、千里が、「からだひとつ消えよかし」というように、他界に惹かれる身体を捨てて、姉を求め、姉が母の形代になることを受け入れたということであろう。では、他界の「うつくしき人」は、千里が危機を乗り越える経緯に無縁かといえ、そうではないだろう。

千里に、他界に惹かれる身体を捨てて、姉を求めよう促したのは、読経の声ではなく、お経の高まりと同時にどろく「はたがみ」雷である。「今は姉上を頼まてやは、あなや」と追い込まれるのは、「瀧や此堂の上にかゝるか」と思われるまでの雨が降り出し、「渦いて寄する風の音」が、遠方から呻ってきて、「満山」に当たるように、感じられる時、特に、「本堂青光して、はた、がみ」が「堂の空をまろびゆく」時であった。「九ツ筈」の谷が、大雷と暴風雨の後、「忽ち潭」になったことと結びつければ、大雷と暴風雨をもたらしたのは、「九ツ筈」の「うつくしき人」であろう。「うつくしき人」は、千里に姉との絆と本来の自己を取り戻す契機をもたらし、自らも本来の棲家としての「潭」に帰ったと見ることができる。

以上のように、『妙の宮』では、意志を持って他界に参入し、他界を支配する姫神の子との交流によって、危機を脱するが、帰還は描かれなかった。『蓑谷』は、蛭を追ううち意志なく他界に参入し、姫神と遭遇し、一途さと真率さで姫神の心を打った少年が、一体感さえ感じさせるほどに心を通わせ、蛭を追ってまた現世に帰還する。他界の支配者が姫神であることに変わりはないが、子どもの年齢や、男女、現世と他界との所属を入れ替え、金時計を蛭に変えている。『龍潭譚』は、他界を支配する龍神が、少年を他界に積極的に導きいれる物語である。姫神は、おそらく我が子を喪い、添い寝して「をさな物語」を語るなどして一夜を共に過ごす少年を求める。選ばれたのは、母を喪い、乳房に象徴される母性を求める少年千里であった。姫神は、斑猫、鎮守の社の子ども、「丈高き女」に指示して、千里を現世から引き離して他界にいざない、一夜過ごした後、現世に帰還させる。『蓑谷』とほぼ同年齢の少年を登場させながら、姉や伯父夫婦、遊び仲間などを登場させるなど、小説としての幅と興行きを備えている。このように『龍潭譚』では、現世に帰還した後、危機に直面し、他界からの働きかけを契機に現世との絆を取り戻し、本来の自己を取り戻すまでを描いたのであった。三つの作品は、作品の構造をほぼ同じくしながら、異同も少なくない。前作を変奏させながら、独自の作品世界を創出しているといえよう。

本研究で、以下に取り上げるのは、作品の成立背景の検証及び、次の三つの「転成」する物語」となる。

- 1 先行文芸・伝承・実録・雑報等からの〈転成〉
- 2 自身の発表作からの〈転成〉
- 3 草稿からの〈転成〉

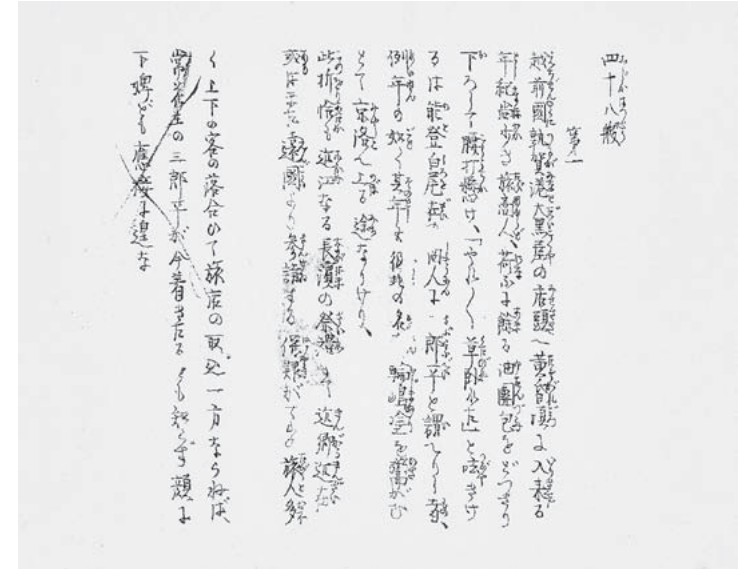
鏡花文学の多くは、右の「1 先行文芸・伝承・実録・雑報等」の典拠を〈転成〉して独自の構想と主題をつむぐという方法による。本研究の大半も、その具体的な検証となるが、1に2を加えた作品も少なくない。したがって、1〜3の項目ごとの区分けではなく、作家活動を四つに分け作品発表順とした。なお、3は作品執筆過程の検証であり、1、2の転成とは次元を異にする。とはいえ、成立論の一環として本文成立の過程を検証することは、『妙の宮』にみるように、一考に価するのではなからうか。

注

- (1) 「鏡花の思い出」で、細野は「泉が名をなしていた時分」、「小倉が大学から暑中休暇にきていたので久しぶりに三人」であったと述べている。小倉は、小学校以来の共通の友人で住友総理事から大蔵大臣になった小倉正恆である。神山誠「小倉正恆」(日月社、昭37・11)によれば、小倉は、明治二十七年九月に東京帝国大学英法科に入学し、三十年七月に卒業している。鏡花の帰郷時期から三人が会ったのは、明治二十八年六月から十月まで鏡花が帰郷していた時と考えるのが適当である。燕台が、鏡花から紅葉の創作指導法を聞いたのも、この時の可能性が高い。
なおまた、「小学校卒業帳より(十四) 泉鏡花」(「北國新聞」大9・11・10付)には、紅葉の指導について、次のような記事がある。
先づ筆をとる前に書物を読まなければ不可なりと紅葉から云はれるので「里見八犬伝」「源氏物語」の如な極めて古臭いものばかりで、一向新しい匂ひのあるものを読まされなかつたらしい、そして一巻を終ると読了後の感想を屹度紅葉の目前で喋らなければならなかつたさうだ。
- (2) 明治二十七年の帰郷中に執筆した作品「乱菊」も、石井一蛙「金城美談如月雪」(明18・4・19・3、「加越能新聞」連載、北溟社、明19刊)を典拠としている。本書第一章「乱菊」の成立」参照。一蛙は、「加越能新聞」や「北陸新報」の記者で、加賀を舞台にした実録ものを刊行している。
- (3) 本文の引用は、『続帝国文庫 近世奇談集』(博文館、明36・3)による。金沢市立玉川図書館蔵の「加賀怪談 雨夜の灯」は、前引の「四十八艘」の原拠「いろは大尽」と合綴されている。なお、「天狗妖怪」では、金子玄庵の長男の名前は、道俊である。「加越能三州奇談」(中島亀太郎、明28・6)では、意俊となっている。
- (4) 清書稿一枚は、振り仮名を欠き、読点が少ない。訂正の多い草稿冒頭の「麻島を横ぎりて路の程六町行きたる」の「路の程」を欠く他、「枝を組み、あいろも分かず」の「あいろ」が「あやめ」になっており、「あやめ」で途切れている。漢字表記などに多少の違いがあるが、その他はほぼ同文である。訂正の多い草稿を清書した一枚とみてよい。
- (5) 田中論文は、全集本文との比較をしたうえで、「妙の宮へ出向いた動機」が、当初「月を賞でて散歩に出掛けたもの」から、「五人の友と競った肝だめし」となったと指摘する。
- (6) 鏡花「金時計」(尾崎紅葉「侠風児」博文館、明26・6)は、失くした金時計を拾った礼に「金百円呈上」する広告標を出す外国人を描くところから始まる。現実世界における金時計の価値を認識していたことがわかる。なお、明治二十三年十月二十二日付「東京朝日新聞」の「金時計の行方」は、「陸軍参謀本部の課長某氏」が自宅の座敷に置いていた金側時計「二十形」が盗難にあったことを報じた記事で、「代価凡そ百六十円の品」とある。
- (7) 野口武彦「本文鑑賞『妙の宮』」(鑑賞日本現代文学 泉鏡花「角川書店、昭57・2)及び美濃部重克・横田忍・水野亜紀子「泉鏡花の跳躍——『妙の宮』の鏡花作品史上での意味」(前引)。
- (8) 二年後に発表された「鶯花径」(「太陽」明31・9、10)の前半では、鬼子母神の寺の山門で、亡くなった母を慕う少年と死んだ兄を忘れられない母が向き合い、擬似的な母子関係を結ぶ。鬼子母神の寺(金沢、東山の真成寺を想定)は、「龍潭譚」後半に登場する。「鶯花径」は、「龍潭譚」から転成した物語とみることができよう。
- (9) 丘は、「蹴飛ばしたる石」が「小砂利をさそひ、ばら〜と谷深くおちゆく音しき」とあるように、断崖の上にあり、転落する危険があったために、姉が一人で行くことを止めたものと思われる。「新をかつきたる漢」が「危ないぞ〜。」と注意するのも、同様の理由であろう。



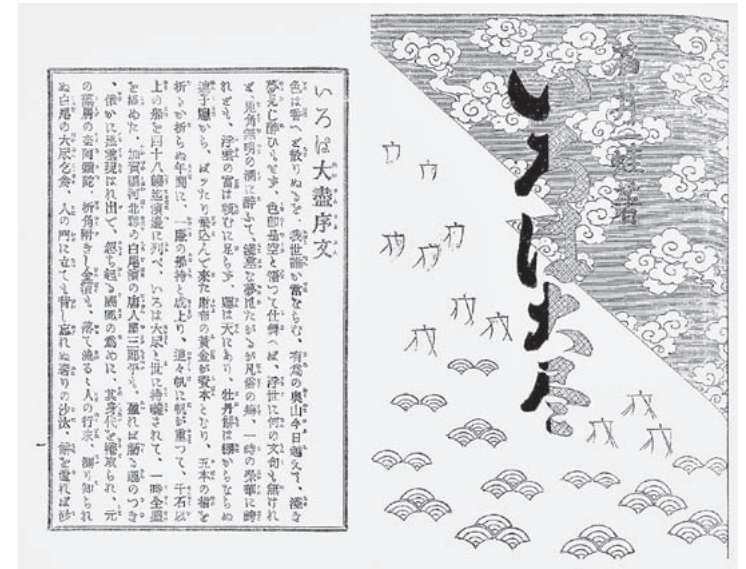
【資料3-①】



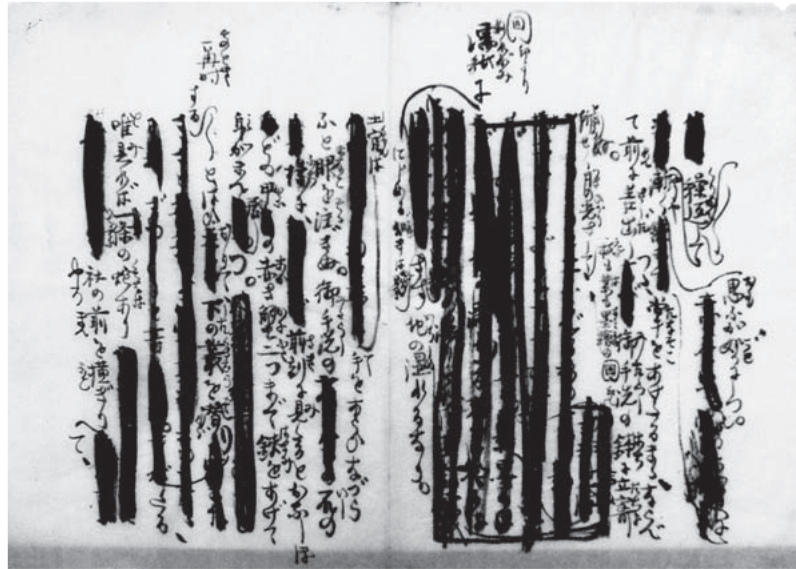
【資料1】



【資料3-②】



【資料2】



【資料3-5】



【資料3-3】



【資料3-6】



【資料3-4】

妙の宮
 夜ふ入れば人のまきつき感也。妙の宮は太
 川に流れて名も橋四つありけり。麻呂と
 横きりて六所行きける山中の社なり。
 亦あり月のまかりかばこそ妙の宮と
 思ふ時、少年士官に情を脱く心許し攻
 めのけり。
 んぬ一町ばかりの市のさへ樹立兩側よ
 り蔽ひ亭り、透筵く枝を組み、あやめ

【資料3-⑨】

のさうりぬを、
 衣ふくすの、
 打さかると思は
 妙の宮

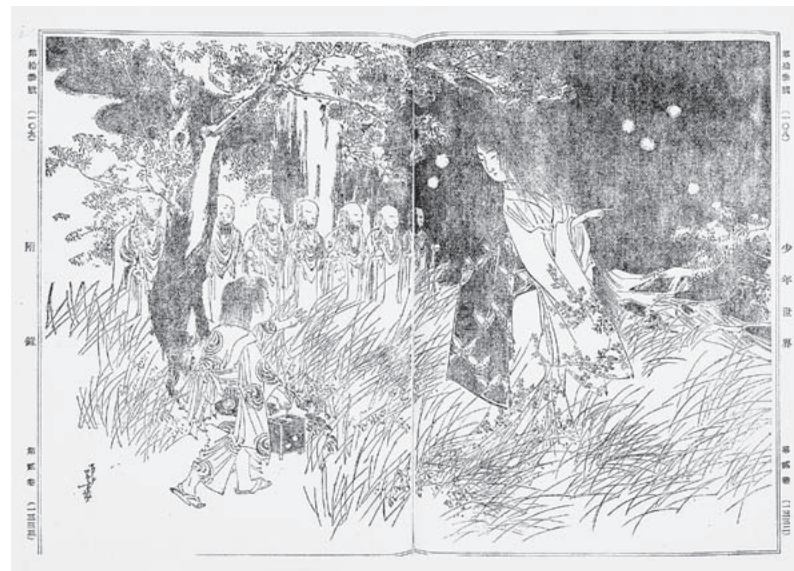
【資料3-⑦】

【資料4】

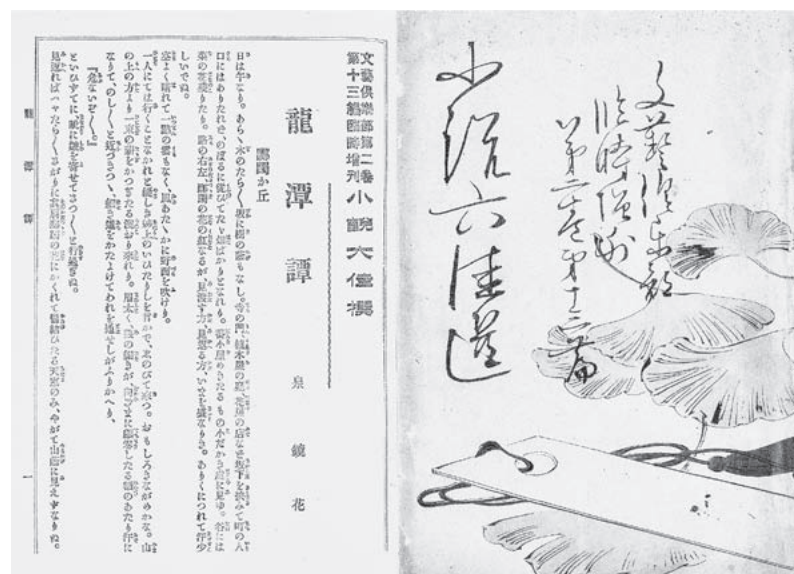
水晶の如き
 妙の宮

【資料3-⑧】

第一章 泉鏡花の出發



【資料5】



【資料6】

『冠彌左衛門』考

『冠彌左衛門』は、明治二十五年十月一日から十一月二十日まで、四十二回にわたって京都の「日出新聞」に連載された泉鏡花の処女作であり、初出、初版（明29・9、田中宗栄堂刊）、春陽堂版全集、岩波版全集との間に多少の本文の異同がある。本稿では初出本文を用いる。

この作品の梗概は、次の通りである。

鎌倉長谷村では、村の土地のほぼ全てを掌中におさめた分限者石村五兵衛や、領主暗殺を画策する執権岩永武蔵が、建長寺（春陽堂版全集以降、権燈寺）住職頑鉄と結び、村人を虐げていた。これに対して、義民の遺子で光明寺（同、高妙寺）是空上人秘蔵の美少年である靈山卯之助は、極楽寺近辺の俠客、権五郎組の親分まふ猿の伝次まはの依頼を受けて、一揆を指導する。が、事前に察知され、窮地に陥ったところを仏師冠彌左衛門に救われる。忠臣沖野新十郎らによる岩永殺害計画の失敗した後、彌左衛門に主導された卯之助、伝次は、配下の者や村人と共に、ついに石村・岩永一味の討伐に成功する。以上の展開は、基本的には、

- (1) 石村五兵衛に対する農民一揆
- (2) 岩永武蔵を中心とするお家騒動

(3) 靈山卯之助の岩永に対する敵討ち

の三つに整理できる。このうち、(1)については柳田泉「鏡花の読み初め」が真土騒動との関わりを、(2)、(3)については小池正胤「泉鏡花―冠彌左衛門」と「新局玉石童子訓」が、曲亭馬琴『近世説美少年録統篇 新局玉石童子訓』との関わりを指摘されている²⁾。

小論の目的は、こうした成果をふまえて『冠彌左衛門』の素材を洗い直し、馬琴を中心とした前代文学の継承の過程をたどることによって、鏡花文学の方法と特質の原型を見出そうとするものである。

1 真土騒動

『冠彌左衛門』の素材とされる真土騒動は、明治十一年十月二十六日深夜、神奈川県大住郡真土村(現、平塚市真土)の冠彌右衛門以下六十余名の村人が、元区長兼戸長、松木長右衛門一家を焼き打ちした事件である。その概略は、『大野誌』(平塚市教育委員会発行、昭33・6)によれば、左記の通りである。

明治六年の地券発行時、区長兼戸長であった分限者松木長右衛門は、旧村役人を証人とし、借金を返せばいつでも土地を返却することを約束して、小前の村人に質取地の地券を松木名義とすることを承諾させる。しかし、明治九年になって松木に質地返還の意志がないことがわかり、同年十一月、質置主は訴訟をおこす。明治十一年四月、横浜裁判所は質置主勝訴の判決を下すが、同年六月、松木側は上告。地券を松木名義とした際、村人が質流れを承諾した証書を提出し、九月三十日、東京上等待判所は松木勝訴の判決を下す。さらに松木は、裁判経費、小作延滞料請求の訴訟を小田原裁判所におこす。大審院に提訴する金力もなく、万策尽きた六十余名の村民は、十月二十六

日深夜木砲を使って松木家を襲撃し、家屋十二棟を焼いたうえに長右衛門ら六名を殺害し、四名に重傷を負わせる。冠彌右衛門以下の捕縛者に対し、明治十三年五月二十日に下された判決は、斬罪四名・懲役十年八名・懲役三年十四名ということだったが、県令野村靖は事情を斟酌して六月一日減刑を命じ、斬罪四名は終身刑となる。質取地・松木家所有地は、県会議員海老塚四郎兵衛が買い上げ、後に旧地主が県からの借入金により買い取った。終身刑に服していた冠彌右衛門は、明治十五年二月、養親を理由に出獄を許され、帰郷。彌右衛門は、明治十七年三月に鎌倉の光明寺で出家した後、全国の寺社を巡礼し、明治二十一年十二月、郷里の長善寺で没した。三年囚は刑期を終えて出獄、十年囚・終身囚は、明治二十二年二月、帝国憲法発布時の大赦令によって全員放免された。

この事件は、例えば、

○如何なる意趣遺恨の有るにもせよ開明の今日私に暴行をはたらき快しと思ふなどハ最有るまじき事なれど爰にひとつ其暴行をなしたる事のもとハわからねど去廿六日の夜の十二時頃神奈川県下相模国大住郡真土村平民松木長右衛門の住居を何者ともしれず五六十人の人数にて追取り巻き手ごとに得ものを携へてうち破壊しました火をバ所々に放ちしかバ家屋ハ残りなく炎となりて焼のぼるに戸主長右衛門実父良助弟源三郎ハ周章て火をさけむと逃出るを多人数のものが取囲んで滅多うちに打殺し其余家内の者も或ハ重傷を負ひ半死半生にて辛く逃しもあれど無疵の者ハ一人も無き程にて近辺の騒動も大方ならざりしが乱暴ものハ其儘何方へか離散して行方知れずと聞えましたが若実事なれば近來の一大珍聞であります

(『東京絵入新聞』明11・10・30)

というように、諸新聞に大きく取り上げられ、赤穂義士の討ち入りや佐倉宗吾の事跡を連想させる事件と捉えられ、管見によれば、続き物二種の他六種の文献が残されている。

以下、これらの文献を掲げて、『冠彌左衛門』執筆にあたって鏡花が参照した作品を明らかにすると共に、撰取

の様相を検討したい。

二種の続き物とは、事件直後に「仮名読新聞」に掲載された『真土村長右衛門謀殺一件』（全六回、明11・11・5～10）と判決減刑後の「読売新聞」の続き物『神奈川県下真土村騒動の始末』（全十三回、明13・6・3～23）であり、双方共無署名である。

「仮名読新聞」は連載にあたって、

○諸新聞で委しく載た去る十月廿六日の夜神奈川県下相州大住郡平塚在真土村元戸長を勤めた当時村惣代松本長右衛門が殺害にあつた一件を猶くはしく探訪者より書送りましたがチト古聞ながら書載ます（明11・11・5付）と記している。この続き物では、「暴動の隊長」を「同村の仏師屋」福田小左衛門とし、松木家出入りの大工兼吉を「先鋒の隊長」としている。このことは、明治十一年十月三十日付「東京日日新聞」（福田小左衛門と木挽職の兼吉が巨魁・同三十一日付「東京絵入新聞」（同前）・同年十一月二日付「東京日日新聞」（福田小左衛門）・同四日付「東京さきがけ」（愚民の隊長福田小左衛門）の各雑報にもある。長右衛門が「村中での豪富」で、「前々から小前より田畑を書入にして金を貸附」けていたことは、同年十一月一日付「東京日日新聞」にみられるうえに、襲撃に際して木砲でなく三挺の猟銃を使用したこと、長右衛門が用心棒として山明権六、源二郎を雇ったことは、同年十一月二日付「横浜毎日新聞」・同四日付「東京さきがけ」にある。『真土村長右衛門謀殺一件』は、こうした諸新聞の報道を基に、福田小左衛門の妻子との別れに交えて、「義士伝の大石を見聞の福田」という一節、村人が長右衛門の「家蔵の絵図面」を入手したり、「血判」をしたという風評等によってわかるように、「忠臣蔵」の挿話を取り入れて読者の好尚に応えようとしたものである。『神奈川県下真土村騒動の始末』は、「仮名読新聞」の続き物に比べてかなり史実に即したものとなっているが、長右衛門殺害の場面等に脚色が施されている。冒頭には、

一人貪戻なるよりして一村其害毒を蒙ふり農民離散に立至らんとせしを死を顧り見ぬ義者ありて終に其身ハ典刑に触るゝの罪人と成るも夫が為小前農民が其土を離れずして生活を立るを得るに至りし彼神奈川県下相摸国真土村の騒動を委く聞くに（明13・6・3付）

とあって、「貪戻」な長右衛門に対して冠彌右衛門らを「死を顧り見ぬ義者」と規定する（資料1）。これは、村人を「暴徒」とする『真土村長右衛門謀殺一件』と比べれば対立的な構図を鮮明にしているといえるが、斬罪が減刑されたのみで「義者」は結局罰せられることには変わりがなく、単に勧善懲悪を描いているとはいえない。なお、この続き物の結末で、減刑された四人との対面を終えた親族が海老塚四郎兵衛を訪問したという記述は、明治十三年六月九日付「東京絵入新聞」の新報をほぼそのまま、即座に取り入れたものである。

『神奈川県下真土村騒動の始末』が掲載された後に刊行されたものとして、

伊東市太郎『相州奇談 真土迺月暈之松蔭』（守屋正造刊、活版刷り、全五冊、明13・6～9）

雑炊亭狸雄『絵入真土村義農精心』（錦松堂刊、活版刷り、全二冊、明13・8）

武田 交来『冠松真土夜暴動』（錦寿堂刊、木版刷り、全六冊、明13・10）

早川 弘毅『真土村冠松木』（金英堂刊、木版刷り、全二冊、明15・9）



がある。このうち『真土村冠松木』は、『冠松真土夜暴動』と本文が同一であり、歌川国峯の挿絵も同作の大蘇芳年画を模倣したものであることから、同書の改竄本とみられる。その他、神奈川県立図書館蔵の無署名の写本『真土村騒動』は、内容からして「読売新聞」の続き物を筆写したものといえるが、「大騒動となる話しハ引続いて次号に書き載すべし」といった読者への呼びかけ等は省略されている。又、後年の刊行ではあるが、講談速記本として松林伯知『真土村焼討騒動』（今村次郎速記、大川屋刊、明31・12）がある。

これらの文献は、『相州奇談 真土迺月豊之松蔭』についていえば、「緒言」に
元も読売の新聞へ数回を重ねる奇事全報抜翠著者の伊東氏が古事来歴の妙趣を交へ喜怒哀憂の常情を綴り梓
たる這乃小冊

というように、「読売新聞」の続き物をもとに増補したものである。『絵入真土村義農精心』も発端で、
一人貪戾なりしより一村の農民その害毒に煩惱され父母兄弟妻孥叔姪に至るまで窮迫離散せんとすること茲
に幾箇の義者ありて自身の死亡を眈顧す終に其身ハ典刑と成るを恐れずしてその窮民を救へる緯諒に殊勝のこ
とになん

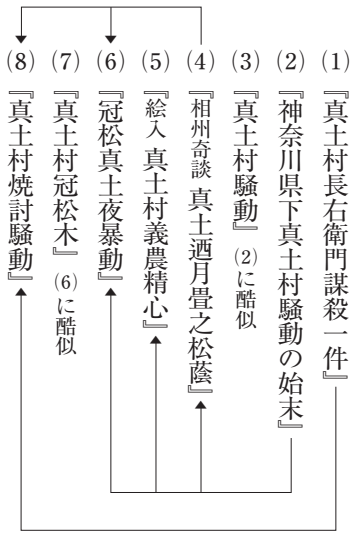
と記し、「読売新聞」の続き物に基づいていることは明らかである。次にやや長いが『冠松真土夜暴動』の冒頭を
引用する。

○壹人貪戾なるよりして一村其害を蒙り農民離散に及ばんとせしを死をかへりみぬ義者廿余名全村数人の身命
に換りて事発し終に其身典刑に觸るゝの罪人となるも夫がために小前の農民が其土を離ずして生活を立るに至
りし彼相州下相摸の国大住郡真土村の騒動を委敷聞に此真土村といへるハもと徳川家より春日の局へ化粧
料として賜ハリし地にて其後堀田家（佐倉侯）再興の際に及び此地も堀田侯の領地となりしが当村に数代連
綿として棟高門広く住なす松木長右衛門といふ者あり祖先ハ甲斐国に住て武田家隆盛の頃殊に有福にして彼甲
州金鑄造の際ハ専ら大権をにぎりたる者にて甲金に松木の文字あるハ該家の極印なりと歟云伝ふ然るにいつの
頃よりか此所に移住して猶数代連綿して家富栄え堀田家の領分となりし頃も用達を勤めて村内に勢ひ並ぶ者な
く⁽³⁾（傍線、引用者。——線は「読売新聞」の続き物、……線は「相州奇談 真土迺月豊之松蔭」と共通する表現を示す）

右に明らかかなように、『冠松真土夜暴動』は、『相州奇談 真土迺月豊之松蔭』を基礎に、『相州奇談 真土迺月豊之

松蔭』によって周辺のエピソードや後日談を補足したものと見てよい。「読売新聞」の続き物は、以上のように、
真土騒動に取材する刊本の祖型となっているのである。なお、『真土村焼討騒動』は、主として『相州奇談 真土迺月
豊之松蔭』に拠りながら、「仮名読新聞」の続き物等を取り入れて様々に脚色を加えたものである。

上述の文献における影響関係は、



というように図示できる。このうち、鏡花が参照したのは、土地問題に端を発した一揆を「義拳」とする規定⁽⁵⁾、農
民を「愚」とする点や襲撃時の使用人の動向⁽⁷⁾、一揆の対象となる分限者の人間像⁽⁸⁾といった共通性、襲撃に用いた「木
砲」と「破裂弾」の類縁性等からして、武田交来『冠松真土夜暴動』とみられる。冠彌左衛門の造型は、交来作中、
冠彌右衛門ハ当年三十六歳にて分別盛りといひ農間にハ庭造りを渡世なし生来至ッて器用のものにて読書も
出来近頃村うちに勧請してある下総佐倉なる宗吾の宮を信仰し義気強き性質
と紹介されている主謀者の、「器用」から「仏師、不世出の名工」に、「信仰」から「禪門に帰依して捨世の心深く」

というように敷衍したものと考えられる。「氏神として生涯奥殿に祭るべし」という、鏡花作結末での相模の守の言説も、右の「宗吾の宮」に示唆を得たものだろう。登場人物名についても、冠彌右衛門を冠彌左衛門、冠伝次郎を猿の伝次、冠峰松を小峰の猿松、村用掛九右衛門を長谷村名主六右衛門と改変すると同時に、農民冠彌右衛門を仏師に、同じく農民冠伝次郎を俠客へと置き変えて活用している。なお、『相州奇談 真土通月暈之松蔭』では、主謀者を「分別もあり義気もあり」と記しているにすぎず、『絵入 真土村義農精心』は農民の性格規定や使用人の動向に関する記述を欠き、『冠彌左衛門』と合致する点は少ない。したがって、現時点では諸家の指摘するように、『冠彌左衛門』執筆にあたって、鏡花は『冠松真土夜暴動』を主要な素材としたと考えるのが妥当である。交来作からの転成に際して、時を江戸時代に移し、場所を江戸の小説類における主要な舞台であると共に種々の伝承を持つ鎌倉に移行させ、上述の共通点等を生かし、農民の集団対分権者という『冠松真土夜暴動』の単純な対立の構図を、仏師・美少年・俠客と配下の者・農民の集団対分限者・執権と配下の者というように、重層化させているということが¹⁰⁾できる。

ところで、『冠松真土夜暴動』は新聞の続き物を母胎として成立しているわけであるが、明治十年代にはニュース性に富む事実譚が流行していた。当代の戯作についてみても、虚構性の強い仮名垣魯文『高橋阿伝夜叉譚』(明12・2)等にも事実性が重視されている。そうしたなかで、この作品は、笈笠漁隠『大沼耕地義民譚』(明13・9~10)、雑賀柳香『蓆簾群馬嘶』(明14・4)等の農民一揆物の先駆的作品で、殊にニュース性豊かな実録物として好評をもって迎えられたのである。さらにいえば、その好評の背後には、例えば明治十一年十月三十一日付「郵便報知新聞」の真土騒動の続報中の、

追々開明に進む風潮に誘はれ水飲百姓までが少し宛民権の有ることを知るに従ひ長右衛門の所置を理に適は

ぬ事と思へど

というように、農村にも広汎な浸透をみせた自由民権運動の高まりがあることは、いうまでもない。なお、この実録には読本的な趣きがあり、転々堂主人高島監泉は後篇の「序」に「此物語を^{あきか}祥明に。勸懲の理を論し」と述べているが、「細民の難を救」った「義者」の罪は許されたわけではなく、勸善懲惡とのみいえない点は読売新聞の続き物同様である。

では、なぜ鏡花は『冠松真土夜暴動』を素材としたのであろうか。その理由として、次の二つを考えることができる。一つは、鏡花が真土騒動の主謀者冠彌右衛門についての何らかの情報を得ていたと推測される点である。冠彌右衛門は、明治十七年三月に鎌倉の光明寺で出家した後、黒衣の身となって全国を巡礼し、明治二十一年十二月に病没している。¹¹⁾「自筆年譜」によれば、鏡花自身も又、明治二十三年に光明寺と同じ乱橋にある妙長寺で一夏を過ごしていることがわかる。光明寺は、卯之助の育った場所、冠彌左衛門の滞在する寺、最初の一揆の集合場所となっている。小澤彰『鎌倉歴史文学散歩』(有峰書店新社、平4・10)によれば、妙長寺住職の「法弟」である「比企ヶ谷の妙本寺にいた坂本日喜という修行僧が「真土村松木事件」の詳細を伝えた」のだという。とすれば、日喜は、『冠松真土夜暴動』に拠ったか、後日同書を読んだかのいずれかであろう。初出紙最終回の挿絵には、砂浜に座して富士山を見上げる黒衣の旅僧(見上げ西行の構図)が描かれており、「冠彌左衛門其終る處を知らず」という結語の絵解きとなっているのであり、冠彌右衛門の履歴が投影されていると考えられる。

ところで、光明寺は、『仮名手本忠臣蔵』で塩治判官の菩提所となる寺でもあるが、『冠彌左衛門』初出「第二十六」には顔世御前の名がみられ、「第四十」で岩永武蔵が長持に入り込んで逃亡をはかるのは、『仮名手本忠臣蔵』十段目で、大星由良之助が長持から立ち現れてくる設定をふまえたものである。真土騒動は、事件直後から赤穂義士の

討ち入りに擬され、『冠松真土夜暴動』には『忠臣蔵』との類似が指摘されている¹²。この実録と光明寺からの連想が働いて『仮名手本忠臣蔵』を取り入れていたものと推定できる。もう一つの理由としては、権力をかさに弱者を虐待する強者に対し、弱者が力を合わせて集団で立ち向かい、ついに討伐する実録の展開が、単なる好尚以上に深い所で鏡花を捉えたものと考えられる点である。それは、鏡花個人に内在する、権勢を誇って民を虐げる者への激しい憤りと弱者に寄せる限らない同情が赴かせたといってもよい。しかしそれは、そのまま作品化されるのではなく、さまざまに趣向を凝らすことによって、作品の中に生かされているのである。次章では、前代文学の受容と転成の実態を検証して、趣向の内実を明らかにしたい。

2 前代文芸からの受容と転成

『冠彌左衛門』のもう一つの素材とされているのは、曲亭馬琴『新局玉石童子訓』（文政12〜嘉永元）の殊に「巻之二十、第五十回以降」であり、詳細については小池正胤氏の論考を参照されたい。当該箇所は、上州甘楽郡部領荘にやつてきた大江成勝・峯帳通能が、韓錦樞二郎・奈良桜八重作ら義士侠客と共に、阿甕寺の閑廂和尚の庇護の下にある旧主部領朝臣武茂の遺子轍魚丸を奉じて、武茂を倒して領主となった鎬野郡司範射の子で悪政をしく範的、さらには範的を殺害して後継者となった曾根見健宗を討伐し、郡領となった魚丸が鷲森松煙斎の娘梭手を妻とする話で、武勇に秀でた挿絵の活躍、成勝の用いる奇妙の仙丹、枉津神女と弁才天の対立等が描かれている。以下、小池論文が触れられていない点について、転成の実態を述べる。

まず、「嬋娟たる嬢子と見紛ふばかりの少年」である卯之助は、「鞍馬の御曹子」とも形容されており、魚丸のみでなく、「牛若御曹子の、後身¹³」と喩えられる美少年で悪郡領討伐の戦いを指導する大江成勝を複合している。同様に、「残忍」「性急¹⁴」な「奸物」である岩永武蔵は、「悪虐なる、奸詐¹⁵をもて人を欺き、威権¹⁶をもて民を虐げ」る範的のみでなく、「人を欺く才ありて、民に與るに私恩をもて」する範的をも複合しているとみられる。遺子の後見をし、一揆に協力する是空和尚も生まれたばかりの卯之助を拾い取る点で、閑廂和尚のみでなく、魚丸を妊娠中の垣衣を助けた趙心入道を複合させていると考えられる。但し、卯之助を救助する場面については、他の素材の影響もある。これらについては、後述する。

設定の上では、範的が梭手に心を寄せて配下の韓錦・奈良桜に媒酌を依頼する経緯が、卯之助を想う小萩に岩永が横恋募し、沖野新十郎がなかだちをする形に改められていることがあげられる。その結果、卯之助と小萩の恋愛が前面に出、岩永討伐は卯之助にとって亡き両親の敵討ちであると同時に恋敵を討つことにもなり、馬琴作になかった新しい展開を獲得している。又、馬琴作では、

我々郡司の非法に堪ねば、命を免れん為にのみ、已¹⁷ことを得ず囚牢¹⁸を破りて、絹捕¹⁹の士卒を撃走せしを、快とは思はざりしに、魚丸君の奉為²⁰に、後の戦ひを做す時は、義兵にして忠孝の名あり。孰²¹歟叛逆といふべきや。というように、魚丸登場によって範的討伐は「叛逆」から「義兵にして忠孝」へと止揚されるが、鏡花作では、

石村を滅すは所謂暴を以つて暴に替ゆるの所業罪²²を論ずれば最死なり、末頼母敷壯俊に此事は為せたく無し。引替へて岩永を討つは相模一国の為、太守への忠

と、石村襲撃と岩永討伐は截然と区別されている。これは、卯之助を前郡領の子でなく、権力者の犠牲となった義民の遺子とし、討伐の対象を二人設定したうえで冠彌左衛門を指導者として登場させたための改変である。その他、鏡花作は、馬琴作の奇妙の仙丹や枉津神女等の非現実的要素や範的殺害に関する煩雑な展開を削除する一方、お家

騒動が計画されている段階に移して、岩永の対立者として忠臣沖野新十郎を、是空和尚の対立者として建長寺住職頑鉄を、それぞれ新たに布置している点があげられる。

このように、鏡花は『新局玉石童子訓』の構想の一部に基づいて、登場人物の複合をはかり、奥行きあるものにして躍動感をもたせた。又、お家騒動を計画段階に移してプロットを明確にし、その上で新たな対立者を配することによって、劇的な広がりや劇的な盛り上がりを作り出すことに成功している。さらに、設定上の改変によって新味を出し、『冠松真土夜暴動』等から得た農民一揆のプロットと融合していることができる。

後年鏡花は、「いろ扱い」で『近世説美少年録』を「抱いて寝る」ほどの「いろ、扱い」にして、愛読していたと述べている。¹⁶ 当然読んでいたと推測される統篇『新局玉石童子訓』巻之二十以降は、美少年・俠客・勇婦等が集団で悪虐な権力者を討伐する話で、『冠松真土夜暴動』と類似する点を持っており、同様の理由で鏡花の大いなる共感を呼び、素材として取り入れたものとみられる。

『冠彌左衛門』における馬琴文学からの摂取は、右一作にとどまらない。沖野新十郎の妻阿浪は、経師ヶ谷の土牢に夫の自害を見届けた後、愛犬と山に籠もる。初版本以降にはみえないが、初出「日出新聞」(明25・11・6)には、「しいをりと行く柳腰は荆棘も避けて通しぬ、伏姫の年増なりなり。時に八房無きにしもあらず」という一節があり、両者を「伏姫」「八房」に見立てているのである。「憤犬の斑犬」である愛犬「魔陀羅」は形状においても「八房」を連想させるが、拷問の後放置された阿浪の死体から、密書を口に含んだ首を噛み切って彌左衛門に届ける経緯等々に、『南総里見八犬伝』(文化4〜8)がふまえられていることは明らかである。なお、阿浪拷問については、『出景清』の小野姫拷問の場面からの影響とする指摘がある。¹⁷ 次に、是空和尚が卯之助を拾い取る事情は、

去ぬる年腰越へ托鉢に参り一人てぽか／＼朝比奈の切通しへ懸る、と首の無き女襦袢一枚に剝かれて數ヶ所の切疵、疵口破れて脇腹から今生れたといふ嬰兒ひく／＼と動く。和尚當時読本中の人物と成済まして、件の着物片袖を引切つて嬰兒を包み、耻を隠して遣らうと衣を脱ぎて死骸をばくると巻きのよいと背負、として歸る (資料2)

と説明されているが、右にいう「読本」とは馬琴の『石言遺響』(文化2)で、相当箇所は第七篇の

斯る所に鉦鼓の音ちかく聞えて一個の法師忽然と出来れば(中略)時に小石姫の傷口より八月の赤子生れ出初聲たかく泣ければ法師ハこの光景を見て且く躊躇したりしが遂に赤子を抱きとりいづ地ともなく行過けり¹⁸

を基にし、両作共、殺された女の敵は「情人」が討つことになっており、「嬰兒」が成長して敵討ちをする『冠彌左衛門』とは異なっている。しかし、いわゆる佐夜中山伝承には、井原西鶴『一目玉鉾』(元禄2)巻三「泣子坂」のむかし此里の賤の女金谷の宿にまありて夜道を通ひしに山盜是をうちける此腹より男子の出生して後母のかたきをうちて其身は出家せしと語り傳へり

というように、鏡花作同様、殺された女の「男子」が敵討ちをするものが多い。浅井了意『東海道名所記』(万治2?)、秋里離島『東海道名所図会』(寛政9)も同趣旨である。又、実録、『石井常右衛門』(別名『西国順礼女仇討』)や『さよの中山長歌』(湊敷座之戀)所収。延宝4)等では、成長した子供が刀研ぎ屋にいるうちに敵と出会うが、刀研ぎ屋は卯之助の亡父の職業、刀鍛冶を想起させる。この形態をとるものとして特に注目されるのは、『越前名跡志』南条郡府中(現、越前市)龍泉寺の開基通幻和尚に関する次の記述である。

通幻和尚胎内に在し時、其母佐夜の中山を通りし時に、牢人の侍に行逢けるに、彼牢人其母を切殺して逃失

ぬ。通幻は其胎中より出て、不死して有りけるに、其近所に住ける研屋、其子を拾ひ取て養ひ置ける。夫より廿五年目に、彼牢人右の女を切し刀を研屋の所へ持参し研せける時、むかし中山にて、詮なき女を斬ける由を懺悔せしを、彼子聞て研屋に其刀を乞ければ、渡しける故に、其刀にて母の敵を討て、夫より峨山和尚の弟子に成、名を通幻と云¹⁹⁾

この伝承は、柳田国男が『赤子塚の話』(文芸社、大9・2)で北国の雲水が携帯し広めたとする、比較的有名な話である。又、武生 現、越前市は鏡花上京の折に通った場所でもあり、通幻和尚の伝承を耳にしていた可能性は否定できない。なお、龍泉寺は、夜叉ヶ池の伝承とも関わりがある。意識的にそれとわかる「読本」を示唆しておきながら、北陸の伝承、佐夜中山伝承等結びつけ、周到に改変しているといえよう。

こうした馬琴文学の受容と転成には、『南総里見八犬伝』の場合のように、初出と初版以降とで多少の違いがある。その異同は、「伏姫」「八房」が初版以降削除されたこととわかるように、露骨な撰取の痕跡を消すことによって、かえって馬琴的世界へのイメージの喚起性を強めることになっている。又、受容の実相をみて気づくのは、素材を生地のまま用いることをしないで、必ずといっていいほど他の素材と合成して書きかえている、ということである。沖野新十郎が土牢に幽閉される場面にも同じことがいえる。これは、『新局玉石童子訓』で韓錦が二重牢に閉じこめられる点をもとに、景情入牢の話を合わせ、さらに加賀騒動の実録『北雪美談金沢実記』(栄泉社、明19・5)で鳥屋万助が土牢に閉じこめられた大槻内蔵之丞を自害させる挿話を付加したものである。このようなさまざまな素材は、それぞれ共通点をもって結びついている。これらは、作品構築の過程で、それまで味読あるいは見聞していた前代文芸の中から、自然と鏡花の脳裡に想起されてきたものと考えられ、自在な換骨奪胎の才の広さと幅めかがうことができる。

同様の指摘は、馬琴文学以外の素材についてもできる。『冠彌左衛門』には、「冠扇を颯と開きて、(謡景清)君の仇思知れと、三刀ばかり差し通し」というように、「謡景清」からとされる詞章が引かれ、景清浄瑠璃の影響が指摘されている。この他、沖野家にかくまわれた小萩が奥書院で目にする「東領主」の「肖像」²⁰⁾絵は、「十種香に思を籠めたる勝頼が面影ある」ものとされている。この一節は、明らかに近松半二他『本朝廿四孝』(明和3)第四「道行似合の女夫丸」の、

申し勝頼様。(中略)月にも花にも楽しみは。絵像の傍で十種香の。煙も香花となつたるか。回向せうとてお姿を絵には描かしはせぬものを。²¹⁾

をふまえたものである。『冠彌左衛門』劈頭の「此石に指でもさした奴輩は、赤子でも病人でも、持たさにや置かぬ村の定法」²²⁾だという、「昔景政が、手玉に取りしと言伝ふる、力石」も、『本朝廿四孝』第二の「其石に腰をかくれば其豪い石を上げねばならぬ」という、下諏訪神社社前の大石を基にしている。この大石をめぐる喧嘩によって、有髪の老人斎藤道三が、横蔵こと山本勘介の力量を知って血判を求める設定は、「力石」にまつわる喧嘩から猿の伝次が卯之助の力量を知り、一揆への協力を依頼する形に生かされているとみていい。ところで、『冠彌左衛門』冒頭の舞台となっている御霊神社の祭神鎌倉権五郎景政は、「奥州の役に義家に従ひ、敵に左の眼を射られしが遂に其矢を拔ずして其敵を討て高名を顕はす」(新編相模国風土記稿)という伝承で有名な独眼の勇士である。権五郎景政と諸国の御霊神社との関連を追究する柳田国男「目一つ五郎考」(『民族』昭2・11)は、自ら目をくり抜いた景清を祭る日向の生目八幡の伝承に言及し、「これもまた一個後期の権五郎社であった」と言い、同じく「二目小僧」(『東京日日新聞』大6・8)では、「甲州では権五郎の代りに山本勘介をもって片目神の旧伝を保存させていた」と指摘

している。このことからわかるように、景清・山本勘介・権五郎景清は、いずれも眼に関する伝承の持ち主なのである。御霊神社は、彌左衛門の指導する一揆の集合場所であって、光明寺に劣らず重要な役割を果たす。鏡花が御霊神社を舞台に選んだ時、景清の眼に関する伝承から「景清浄瑠璃を、同様に山本勘介を想起し、「力石」も機縁となつて『本朝廿四孝』を導入したものと考えられる。『冠松真土夜暴動』や光明寺から『仮名手本忠臣蔵』を取り入れている例にもみられたように、主として共通点をもった種々の素材の関連と換骨奪胎によって『冠彌左衛門』は、起伏に富んだ展開を獲得しているのである。

3 《詩的正義》の実現

以上のように、『冠彌左衛門』は、基本的には真土騒動の実録『冠松真土夜暴動』と滝沢馬琴の読本『新局玉石童子訓』を主要な素材としている。他の素材は、右二作の融合に際して導入され、作品を波瀾に富んだものとしている。両作には、農民の怨敵松木長右衛門宅への討ち入りと民を虐げる鎭野郡司範的の討伐という、類似点がある。これを接点として、双方の時と場所を移し、さまざまな改変を加えて『冠彌左衛門』は成立しているのである。本作には、初出段階で「馬琴一寸口上に出で」（『日出新聞』明25・11・11）という一節があり、馬琴の読本の影響は無視できない。しかし、さきに掲げた「和尚当時読本中の人物と成澄して」も、この「馬琴一寸口上に出で」も、多分に揶揄的であると同時に諧謔的であつて、馬琴の読本そのものを再現しようとしているのではない。むしろ、ここで用いられているのは、談話「むかうまかせ」⁽²³⁾のなかで、

私はずつと以前から考えて置く一箇^{ひとつ}の材料が有りますと、それへ何か新らしく感じたことか、偶然に起つた事件かゝあつて、恰度^{ちやど}甘い塩梅に連絡^{つな}りました時、初めて描いてみやうといふ心持になります。畢竟^{つまつ}取つておきの古い材料と、新しい材料とがふとした動機^きに、思ひもよらず宜い工合に結合つて、稍纏つた一箇の面白脚色^{しくみ}が成立つ……と、描きたくなる

と語る、鏡花の創作方法による転成とみることができよう。本作に照らしていえば、『新局玉石童子訓』、『冠松真土夜暴動』から得た材料が、鎌倉滞在時の冠彌右衛門に関する見聞等によつて、あるいは、両主要素材を融合し展開させる種々の素材導入の契機となつたであろう「力石」「土牢」といった、鎌倉の伝承等にふれたことによつて、創作意欲が発酵し、「思いもよらず宜い工合に結合つて」『冠彌左衛門』の「脚色」すなわち構成が成り立ったということである。

さて、こうして世に問うた『冠彌左衛門』に描かれているのは、何であろうか。いうまでもなく、この作品の中で最も重要なのは、霊山卯之助と冠彌左衛門の意味である。まず霊山卯之助は、伝次の依頼をうけて最初の一揆の指導者となつているが、石村・岩永一味によつて両親を殺害された当事者でもある。『冠彌左衛門』では、敵討ちがそのまま家騒動の阻止となる。したがつて、卯之助は、作品の基本的な展開全てに関わつていのである。卯之助は、「敵一倍の力」を持ち、「血氣鬱勃せる年頃の殊^{まこと}に依^よる生得^{なま}」で白井権八に諭えられる「手利の美少年」であり、作中、最も美的で華々しい活躍を示す。結末で、冠彌左衛門捕縛に向かうにあつて、「一見婦女子を脳殺」する「眉目清瀟^{せいしょう}」な「女装の好男子」として描かれる卯之助は、『冠彌左衛門』における、いわば〈美の体現者〉といつてよい。卯之助は、自ら「我身は乳臭き少年にて。大義を謀るに足らざる」と言い、終始、表立って積極的に戦いを指揮することのない馬琴作の魚丸や、もともと「他郷の旅客」であつて、参画の動機を「義を見てせざるは勇なきなり」とする大江成勝と同等に考えることはできない。鏡花が独自に造型した美少年として描かれている

のである。馬琴作をふまえつつ、美少年の恋愛、お家騒動の計画段階への移行といった設定の改変も、こうした鏡花の意図の反映とみられる。これに対して冠彌左衛門は、卯之助の指導する最初の一揆の計画が発覚し、石村・岩永方に包囲された窮地を救うところから、前面に現れてくる。彌左衛門は、基本的には直接の当事者ではなく、隠棲する仏師、「不世出の名工」であって、「見懸けはけち、に瘦こけて、風が吹くと飛びさうな、親父様」でありながら、「度胸といひ、技挿といひ」はかり知れない力量を秘めた「希代の英雄」とされている。その力量を見込まれて、一揆の指導を求められるのである。注目すべきことは、それとほぼ時を同じくして卯之助が、一步舞台から退く形になっていることである。しかし、彌左衛門は、石村襲撃の際を除いて、卯之助のように華々しく活躍することはない。小萩の岩永刺殺計画をはじめ、追手を逃れて海に飛び込んだ阿浪を助ける等、時として彌左衛門は、作者の傀儡と考えられる程に全ての事柄を掌握して、一揆の主導につとめている。しかも彌左衛門は、是空和尚と相談して卯之助に岩永を討伐させることとし、「岩永追討の墨附」も阿浪に依頼して「靈山の為に戴か」せている。さらには逃亡した岩永を捕えて卯之助及び伝次に討たせ、再び舞台の前面に卯之助を押し出した後、飄然と姿を消す。このような彌左衛門の行動が、一方では、卯之助を活躍させ、際立たせているといえることができる。卯之助を《美の体現者》とすれば、彌左衛門は《美の創出者》なのである。『天守物語』（『新小説』大6・9）の工人、近江之丞桃六が、傷ついた獅子頭を修理することによって、失明した天守夫人富姫と姫川図書之助を救い、天守の美的世界を作り上げるのと同様の役割を、彌左衛門に見出すことができるのである。猿の伝次は、卯之助に体現される《美》を支える助力者と考えていいのだが、以上の三名は、いずれも、叛骨の精神によって弱者に荷担し、作品の美的性格を形成している。換言すれば、本作に描かれているのは、叛骨精神によって非道な権力者に反抗し討伐する、美的世界の実現なのである。言葉をかえていうなら、《詩的正義》の実現である²⁴。その観点からみると、この作品に

は、たしかに読本的な枠組があるとはいえ、鏡花の意図は、勧善懲悪の世界の現出ではなく、それを標榜する語句もみられない。そうした枠組を越えて、如上の《美》を実現する《詩的正義》に鏡花の意図があったのである。本作の主要素材である『冠松真土夜暴動』は、農民の《事実》が近代の裁判、すなわち為政者のいわば《法的正義》によって認められなかったところから生じた騒動の顛末を描いたものと私は読む。斬罪宣告後の一節に、「冠等が斬罪八法に依て至当といふべし然れ共其情実を察すれば又決して傍観すべきにあらず」とあるが、最終的には、「長右エ門の奸謀に陥入られたるもの」であって、「全く一己の私怨を逞ふし又ハ賊心より生じたる者と其趣意を異にする」と認められるものの、斬罪から終身刑に減刑されるにすぎない。勧善懲悪を謳ってはいるが、内実、「極悪非道の長右衛門」を「衆に代りて」討ちながら、「法律を犯した」ということで彌右衛門らは罪を問われるのである。「悪人は亡び」たが「善人栄ふる」結末とはいいたい。勧善懲悪に納まりきれないものが、『冠松真土夜暴動』には存在するのである。至純の情を無上のもとする鏡花は、この実録にみられる「情実」、すなわち人間の真実と相容れない《法的正義》の非道に、大いに《詩的正義》をかき立てられたにちがいない。《法的正義》の非道に対する憤りは、初めて裁判を扱った『義血俠血』草稿（B稿）に、

あ、天公をして其罪を論ぜしめば、出刃打を死罪に処してお玉を無罪とし且つ放免せむ、（中略）然れども社会に法の無情なるは天よりも寧ろ一段甚だしきものあるを奈何せむ、法は渠を殺せり我は情のために死す

と端的に述べられている²⁵。右の「天」は、《詩的正義》と言いかえてもいい。鏡花の美意識の独自性と関わるものである限り、《詩的正義》は、世俗の掟である《法的正義》と合致するものではなく、むしろ『義血俠血』のように明らかな対立を示す集合の方が多のである。この観点でいえば、『冠彌左衛門』では、《法的正義》の「無情」に太守を凌駕した権勢者の悪を置きかえ、「永年の暴虐固より棄置くべからず」とする彌左衛門らの《詩的正義》

を対峙させて、美的世界の実現を可能としたのである。

4 作品の位相

泉鏡花の処女作『冠彌左衛門』は、前章にみたように、後に「むかうまかせ」に語る創作方法がみられ、二つの主要素材に共通する権勢を誇って民を虐げる者への集団的な反抗は、本作において、鏡花独自の美意識と結びついた（詩的正義）による反抗へと転成した。（詩的正義）による美的世界の実現は、『冠彌左衛門』のみで止まるものでなく、以後の作品では、叛骨精神を持った特異な集団が俗悪な偽善者に反抗する形で、『貧民俱樂部』（北海道毎日新聞）明28・7・12（8・28）、『黒百合』（読売新聞）明32・6・28（8・28）、『風流線』（国民新聞）明36・10・24（37・3・12）、『風流線』（同前、明37・5・29（10・5））、『龍胆と撫子』（女性）大11・8（12・9）等に脈々と流れつづけていく。これらの作品には、『貧民俱樂部』で愛犬「じゃむこう」を同伴する「無縁の阿転姿」お丹、『黒百合』の女賊白魚のお兼、『風流線』のお龍、『龍胆と撫子』の蛇つかいの菖蒲等、いずれも『冠彌左衛門』で、卯之助とは別に華々しい働きをみせる阿浪を原型とする「大胆不敵の女」が登場し、縦横無尽の活躍を示す。異形の集団こそあらわれないが、俗物を相手に活躍する妖婦お舟を描いた『芍薬の歌』（やまと新聞）大7・7・7（12・7）も、この系譜に位置付けられよう。又、『黒百合』、『風流線』、『龍胆と撫子（続篇）』には、それぞれ、若山拓、三太、雪松謙吉というように、いずれも眼の不自由な人物が登場してくる。なかでも、雪松謙吉は「目一つの神」と形容されている。鏡花は、「旧文学と怪談」で上田秋成の「目ひとつの神」（春雨物語所収）に言及しているが、早く『冠彌左衛門』にこの伝承へ関心が示唆されていたことは、上述の通りである。波瀾万丈の起伏に富んだこれらの作品は、『冠彌左衛門』を継

承し、展開させた作品といえることができるのではなからうか。

この他にも『冠彌左衛門』には、後年の鏡花文学と関わりを持つものがある。「おばけずきのいはれ少々と処女作」のなかで、「観世音に無量無辺の福德ましまして、其功力測るべからずと信ずる」と語る鏡花には、観音に対する特別な信仰があり、このことを示す作品も多い。²⁷ 本作にも、

時機も熟したなり、彼等は首の座に坐りて白刃頭に望むの境遇、此所で念ずれば彼観音様さへ気紛れに飛出して扶け給ふ

とあり、観音に対する信仰があらわれている。これは、京三条の巖にかけられた景清の首が、日頃の信心のおかげで千手観音の御首に変わっていたという『出世景清』の一節をふまえたものだが、『壇浦兜軍記』にも「念彼観音の御力」が類出し、景清は観音を深く信仰する者として描かれている。『右言遺響』も、赤子を拾い取るのが観音の化身であったことでもわかるように、「全体をつうじて常に観音信仰が流れている」作品とされている。²⁸ 一部の素材導入については、観音への信仰が働きかけているのは明らかである。又、鏡花の作品には、『響の一心』（餅むしろ 冬の巻）博文館、明28・1）、『悪獣篇』（文芸俱樂部）明38・12）、『神鑿』（文泉堂書房、明42・9）、『歌仙彫』（新小説）明45・7）、『参宮日記』（春陽堂、大3・1）、さらには、さきに掲げた『天守物語』等々、名工、彫刻師の登場するものが少なくない。「不世出の名工」である仏師彌左衛門は、言うまでもなく、その嚆矢である。

このようにみえてくると、『冠彌左衛門』は、諸家の指摘するような完成度の低さといった難点があるとしても、素材の形象化という面では、新旧文学交替期といった文学状況を反映しながら、後年の豊饒な実りを予感させる鏡花固有の方法と美的構造の原型と主題とをつかむことに成功した作品と、評価できるのではなからうか。

注

- (1) 「鏡花の読み初め」(「解釈と鑑賞」明12・9)、「政治小説以前の政治的文学」(「時事小説」(「政治小説研究」上巻 春秋社、昭42・8)。
 (2) 「泉鏡花——『冠彌左衛門』と『新局玉石童子訓』」(「解釈と鑑賞」明54・12)。
 (3) 『明治文学全集』第二卷(筑摩書房、昭42・6)所収の本文に拠る。以下同じ。
 (4) 『冠彌左衛門』における「揆の発端は、十七年前石村五兵衛が長谷八ヶ村の田地を不相応の高価で買い上げ、石村の小作人となった村人に重税を課し、思いのままに虐待するところ」にあり、『冠松真土夜暴動』の松木長右衛門が、土地の所有権を占有する真土騒動の経緯をふまえていることは明らかである。
 (5) 『冠松真土夜騒動』では、「彌右衛門等を義拳なりと賞して」とあり、『冠彌左衛門』では、「固^{もと}霊山を下りしは、義の為に死なむため」とある。
 (6) 『冠松真土夜暴動』では「浅間敷もまた愚かなり」とあり、『冠彌左衛門』では「愚にして直なる輩」とある。
 (7) 『冠松真土夜暴動』では「素より農家の雇人殊に八日頃非道に追廻ハされ快よからず思ひ居れハ斯る時の役にハ立ず」とあり、『冠彌左衛門』では「仰せござなく候でも通げる目算でをりました、と心懐かぬ者共ゆゑ今殺さるべき主人を棄てて哄と庭に飛出せば」とある。
 (8) 『冠松真土夜暴動』では「原来強慾非道の曲者」、『冠彌左衛門』では「暴虐」とされている。
 (9) 柳田泉『政治小説研究』上巻(前出)、村松定孝「作品解題」(岩波書店版『鏡花全集』別巻、昭51・3)。
 (10) 『冠彌左衛門』における農民は、一人として際立って活躍することがなく、固有名詞で呼ばれることもない。集団としての存在に終始している。
 (11) 冠友吉「先代冠彌右衛門事跡」(大野第一、第二高等小学校編『我等の郷土 中郡大野村』昭8・4)参照。
 (12) 石川巖「明治初期の戯作から」(「新旧時代明治文化研究」昭2・6)は、「正義と公憤とに決定的徒党を組んで目指す仇敵の一家に乱入した行動は恰も元禄の赤穂義士が吉良邸の夜襲を想起せしめる観がある」と指摘している。和田繁一郎『近代文学創成期の研究』(桜楓社、昭48・11)等にも同様の指摘がある。
- (13) 注(2)参照。
 (14) 『叢書江戸文庫』(8) 新局玉石童子訓「下」(国書刊行会、平13・6)。以下同じ。
 (15) 結末でも「仏師表徳は一揆の巨魁^{みかぢ}漫に徒党を結びて火を放ち人を屠^{ほぶ}る、罪最死なり。行て速に捕縛すべし」とあり、名目的にはこの論理が貫かれている。
 (16) 「新小説」(明34・1)。
 (17) 三瓶達司「鏡花の湘南物における素材について」(『近代文学の典拠』笠間選書、昭49・12)。
 (18) 野村銀治郎翻刻『小夜中山石言遺響』(鶴声社、明17・8)に拠る。
 (19) 『大日本地誌大系』第十三冊(同、刊行会、大6・4)に拠る。
 (20) 注(17)参照。
 (21) 名著全集『浄瑠璃名作集 下』(同、刊行会、昭4・2)に拠る。
 (22) 現在も、鎌倉長谷の御霊神社境内には「手玉石・二八貫、袂石・十六貫」がある。
 (23) 「文章世界」(明41・12)。
 (24) 芥川龍之介「鏡花全集に就いて」(『東京日日新聞』大14・5・5、6)。
 (25) 「泉鏡花自筆原稿目録」(『鏡花全集』別巻所収)。
 (26) 「時事新報」(明42・12・27)。
 (27) 「新潮」(明40・5)。
 (28) 大高洋司「石言遺響論」(『国語と国文学』昭53・11)。

○ 神奈川縣下真土村懸影の結末 第一回
 一人貧民あるよりして一村其害毒と云ふ貧民懸影に
 立至らんばし死に死に懸影者ありて終に其身の
 身刑に觸るもの窮人と成るも夫が小前農民が其土に
 離れ去りて生活を立て得るに至り或神奈川縣下相
 模郡真土村の懸影委に聞くに此真土村の懸影は
 より裕の局へ化け料として賜はり地にて其後ち堀
 田家 佐倉家の立つに及び此地も堀田家の領地と
 りしが此村に數代連綿として極高く門閥に住す松木
 長右衛門といふ者あり堀田家の領分あり頃も用達と
 勤めて村内に勢ひ並ぶ者き御難儀後區長兼兵長必
 得と命ぜられて村内の事務一として任ぜぬもの無
 きより積んでこそく願ひ人の性質を顯はし小前
 者 懸影か貧民高村に貸し付けては苛酷く責め債若
 し期月に返済の滞はる者短侯の如く追ひ遣ひて人の
 歎ら見も逃ら又村の精進に渡る石松外して庭
 石に引入れ宮寺の境内に狹めて我田地と謂の押手
 をかき入れ種を振舞ひしが斯計りの事にて中
 中飽き足らぬ此真土村一村の草萬六百石程のうち己
 が所有地十五町半餘と小前農民より買ひ取れし田地廿
 五町半程と合され二百石餘され一村三分の一
 我所有地かと買ひ取れし地面にて未だ全く我地所
 といふべからん折ぐあら小前の者懸影にて此實地を
 我目前に再改めんと思ふるも明治六年の地勢御難
 儀で好機得として地味を盗計り功びより大に功と
 話しの引續いて次第に書き載すべし

【資料1】



【資料2】

『貧民倶楽部』と慈善の時代

正宗白鳥は、明治三十九年七月八日付「読売新聞」の「文芸時評」(筆名、劍菱)で泉鏡花に言及し、鏡花氏も一種の人生観を有す。江戸時代を好み新文明を厭ふ。(中略)政治家慈善家海老茶式部など文明の産物を卑しめ、趣味に於て性質に於て江戸子肌の男女を愛するの意諸篇にほのめく。

と述べている。四谷鮫ヶ橋の貧民窟を本拠とする女乞食のお丹らが、貴婦人令嬢による婦人慈善会を蹂躪し、名譽ある地位とは裏はらな私生活の頹廢を糾弾して、華族社会の欺瞞を暴く『貧民倶楽部』(北海道毎日新聞)明28・7・12(9・6)は、白鳥の指摘するような傾向の極めて顕著な初期作品といふことができる。この作品は、処女作『冠彌左衛門』(日出新聞)明25・10・11・20・『金時計』(新国民)明26・3・『活人形』(春陽堂、明26・5)等に続いて明治二十六年末から翌年初めにかけて執筆されたことが、尾崎紅葉の鏡花宛書簡によって知られている¹⁾。これら鎌倉を主な舞台とする作品を発表していた鏡花が、初めて当代の東京を対象とした『貧民倶楽部』の貧民と貴婦人の対立的な構図の背後には、当時の社会への固有の認識があったとみられる。この作品は、松原岩五郎の貧民ルポタージュ『最暗黒之東京』(民友社、明26・11)の直接的な影響下に成立したことが、すでに東郷克美氏によって検証されている²⁾。たしかに内容からして単行本を参照したことが明らかだが、同時に刊行後間もない同書に取材した鏡花には、先行

する問題意識があったとみるべきであろう。『最暗黒之東京』には、貧民の実態は描かれているが、婦人慈善会の欺瞞性や華族階級の腐敗とその暴露、さらには貧民の上級階級への反抗等にはほとんど触れられていないことからみて、鏡花の独創と考えるべき部分も多いからである。しかし、これらの点についてもなお検討する必要がある。小稿では、はじめに、本文の成立について考察し、次いで、短時日のうちに『最暗黒之東京』を基に創作しえた背景、すなわち『貧民倶楽部』成立の基盤を考察し、併せて鏡花文学における位相について考えたい。

1 本文の成立

『貧民倶楽部』は、初出「北海道毎日新聞」以降、春陽堂版『鏡花全集』巻一(昭2・4)に掲載されるまで、刊本に収録されることがなかった。周知のように、前半の一部、婦人慈善会に貧民の集団が乗り込む前後が、『慈善会』と題して「新著月刊」(明30・12)に発表されている。全集編集に際して、初出本文が鏡花の手元になく、大信田落花筆の初出写本を春陽堂編集部が借り、鏡花が筆写、清書の上、全集本文が成立した。この間の経緯については、田中勳儀「資料紹介」天理大学附属図書館蔵 泉鏡花草稿四種——『貧民倶楽部』「熱海の春」「光堂」「九九九会小記」——(『同志社国文学』62号、平17・3)に詳しい。同論文で、田中氏が所在不明とされた大信田落花筆の初出写本は、現在石川近代文学館に収蔵されている。

現在確認されている草稿及び初出本文を成立順に示せば、次の通りである。

- ① 石川近代文学館所蔵 『貧民倶楽部』草稿(和紙墨書十五枚)
- ② 慶応義塾図書館所蔵 『貧民倶楽部』草稿(和紙墨書二十八枚)

③ 北海道立図書館所蔵 『貧民倶楽部』初出本文(全三十六回のうち二十四回分)

④ 石川近代文学館所蔵 『貧民倶楽部』初出写本(函館図書館蔵書名の罫紙百十八枚。大信田落花筆)

⑤ 天理大学図書館所蔵 『貧民倶楽部』草稿(文芸春秋社出版部特製原稿用紙ペン書五十二枚)

右の五種類の草稿・初出本文は、(A)下書き原稿①・②と(B)初出本文及びその写本③・④・⑤とに分類できる。⑤については、前掲田中論文がすでに委曲を尽くしている。本稿では、①から④の本文をA・Bに分けて、検証し、本文の成立過程を考察したい。

◎(A)下書き原稿

① 石川近代文学館所蔵の草稿

石川近代文学館所蔵の草稿は、新保千代子「新資料紹介」(『鏡花研究』昭55・5)で紹介された十枚(新、と略記する)、小林輝治編『石川近代文学全集1 泉鏡花』(石川近代文学館、昭62・7)の新資料一枚(小、と略記する)、さらに拙稿「資料紹介——石川近代文学館蔵泉鏡花草稿、『貧民倶楽部』『乱菊』『大和心』——」(『金沢学院大学紀要 文学・美術・社会学編』5号、平19・3)で紹介した四枚(秋、と略記する)の計十五枚である。これらの草稿を、岩波書店版『鏡花全集』巻二(昭17・9)と照合すると、次のように五つに整理できる。

(一) 全集本百二十五頁六行目「先刻に兇徒の手籠に逢ひしは、黄昏の頃なりき。」から百二十七頁三行目「こ、屠犬兇の働場にして」までに相当する三枚(秋・小・新)。

冒頭には、【資料1】(秋)に示したように、「第十八、幽冥界」(今日前 浅ましや)という小見出しがある。この形式は、②慶応義塾図書館蔵の草稿の見出し(第一毎夕新聞社「御苦勞だね」等)と等しい。『浮木丸』(『読売新聞』明26・

1・1～31、『紫』（同、明27・1・1～2・16）など、尾崎紅葉の書式に倣ったものであろう。冒頭、「姉御、猿轡はこのまゝにして置きませうじや無いか。」と男が女（お丹）に問い、女が目隠しも猿轡も取るよう命じて去る。このやり取りは、全集本にはない。また、お丹が拉致した老婦人は、草稿の「微妙院様」が、全集本文では「駿河台の御隠居様」に改められている。全集本文百二十六頁以下で、老婦人に犬や猫の頭部や手足が散乱する屠犬児の仕事場の悲惨を見せて、嫁光子への非道な扱いを改めるよう促す展開は、草稿でも同じで、「蛆」や「毛むし」が衣服を這う草稿の醜惡な描写が全集本で削除された他に、大きな異同はない。なお、北海道立図書館蔵の初出紙は、欠号で相当箇所はない。

(2) 全集本文百三十二頁七行目「お丹は袴と光子の胸に片膝乗懸け、笞しちを挙げて打たむとしつ、」から百三十三頁五行目「もう用は無之、帰してやる。」までに相当する二枚（新・秋）。

お丹の笞に打たれる光子を目の当たりにしても、老婦人が「華族」の身分に拘泥し、打ち所が悪く光子が失神する経緯、老婦人の解放を描く場面に大きな異同はない。ただ、【資料2】（秋）、「今や老婦人の胸には良心と（中略）名利心と互に相戦ひて苦痛の色は表に顕はれ」というように、「良心」からくる同情と華族の身分からくる「名利心」との葛藤に言及した一節は、全集本文百三十頁五行目「惨絶残存なる一場の光景を見たりし刹那、心挫け、氣阻みて、おのが嘗て光子を虐待せしことの非なるを知りぬ。」に続く一節、「今斯く虜の辱を受け（中略）屈従して城下の盟ひを潔しとせず、断然華族の位置を守りてお丹の要求を却けたるなり。」に移動している。草稿では、「光子の身体を滅多打」したのが、あくまで「演劇」であることを明記していたが、全集本では削除されている。北海道立図書館蔵の初出紙「第二十四回」（全集本P131・1～133・5）の後半に相当する箇所である。

(3) 全集本文百三十六頁九行目「これに氣を得て勇を為し」から百三十七頁三行目「一部始終を告げ知らせば」までに相当する一枚（新）。

光子を棺桶にいられて駿河台の老婦人の邸に乗り込んだ貧民の一群を、書生が邸内に入れまいと鉄拳をふるうち、老婦人が自害したと聞いて、貧民らが鮫ヶ橋のお丹に急報する場面で、初出紙の「第二十六回」（全集本P135・6～137・8）後半に相当する。大きな異同はない。

(4) 全集本文百六十一頁一行目「来れる二個の眷属は三界無宿の非人にて、魔道に籍ある屠犬児、鳩槃茶、毗舍闍を引従へ」から百六十六頁六行目「綾子は茫然瞳を据えて、石に化するもの数分時、俄然跳起きて、

「あ、懊惱い。」までに相当する七枚（新・秋）。

冒頭に「窮の極「自殺も出来ず」という見出しのあるものが二枚あり、「今訪来れる二個の眷属、鳩槃茶、毗舍闍を左右に従へ」にはじまる一枚よりも、「今訪来れる二個の眷属、三界無宿の非人にて、魔道に籍ある屠犬児、鳩槃茶、毗舍闍を引従へ」に始まる草稿の方が、全集本文に近い。いずれも、全集本文百六十一頁九行目「綾子様、今私が改めて貴女に御尋ね申し度は、先月の末頃まで此邸に勤めました、お秀という小間使ね、彼は何処へ参りました」という一文を欠く。これに続くのが、秀が殺害された経緯を問い詰め、ついに綾子が発狂する場面までである。醜聞を新聞雑報に掲載すると綾子を責めるお丹は、綾子に国外に脱出して「露西亞」に行くことを勧め、【資料3】（秋）のよつに、「虚無党の動静」を「觀察なさいな」といい、綾子が帰国する十年後までに「不平等の社会を毀す」という野心を述べている。全集本文では、この過激な一節は削除されている。なお、この一節については、初出の写本、さらには本稿第三章で、改めて検証する。

(5) 残る二枚（秋・新）。

草稿の最終場面で、全集本に相当箇所はない。全集本文では、綾子が発狂した後、百六十七頁十一行目「なに未だ、

彼様な目に逢はせるのが二三人あるよ。」とお丹が「自若として」答えるところで終わっている。しかし、【資料4】のように、草稿では、小浜照子と在原貞子が貴婦人代表として高徳の尼「柳心尼」に「鯨ヶ橋」の「女夜叉」との交渉を依頼し、柳心尼とお丹との交渉により、節句や催事のある折り目、節目に、華族階級から「五円」以上の「冥加銭」「税金」を貧民が徴収することで決着した事情が記されている。かくして、「銭無きものにはたゞ飲ませる」し、「融通」もする無法者の悪魔、集団の根城としての「濁酒屋」が誕生し、文字通り「貧民倶楽部」が誕生して権力に対峙し、「爆裂の兆」があることを描いて終る。最後の一句、「拾遺一束読まざるも可し」には、「四悪を甲論乙論し、怒号し悲泣」する「紛然たる一団」を点描した覚え書き風の断片とともに、作者の切迫した心情が反映されている。

② 慶応義塾図書館蔵の草稿

慶応義塾図書館蔵の『貧民倶楽部』草稿は、岩波版『鏡花全集』別巻(昭51・3)所収、「泉鏡花自筆原稿目録」の通り、冒頭五十八頁一行目から全集本八十一頁四行目「これぢや十両がものはあるわね。」までの二十八枚で、全七章に小見出しがある。同草稿は、初出の六日分の連載に相当するが、初出では小見出しは削除されている。以下、「泉鏡花自筆原稿目録」の指摘を踏まえて、草稿と初出を比較検討したい。まず、小見出しを含む草稿と初出を対照すれば、次の通りである。

- | | | | | |
|----|--------------|------------------|---|------|
| 第一 | 毎夕新聞社「ご苦労だね」 | (P 58・1～P 61・6) | — | (第二) |
| 第二 | 婦人慈善会「おい、姉様」 | (P 61・7～P 64・3) | — | (第二) |
| 第三 | 半身の裸美「傍若無人」 | (P 64・4～P 66・10) | — | (第二) |
| 第四 | 背を不意打「モシ貴女」 | (P 66・11～P 69・8) | — | (第三) |

第五 中村福助「私はもう」 (P 69・9～P 73・15) — (第四)

第六 屠大兎「屹度敵を」 (P 74・1～P 76・12) — (第五) ※「第六」と誤記

第七 通信文「十両の価はあるよ」 (P 76・13～P 81・4) — (第六)

右のように、草稿の「第二」「第三」を初出紙では「(第二)」というように合体している他は、区切りに異同はなく、草稿同様、初出紙でも全集本の「六六館」が「鹿鳴館」、「毎晩新聞」が「毎夕新聞」になっている。慶応義塾図書館蔵の草稿は、石川近代文学館蔵の草稿に比べれば、はるかに初出紙・全集本文に近い。この草稿を推敲してなったのが、初出紙本文であろう。推敲に当たっては、紅葉の果たした役割が大きいようだ。「泉鏡花自筆原稿目録」の指摘にあるように、草稿「第一」・「第二」に紅葉の朱筆がみられる。草稿を初出と比較すると、次のように鏡花が紅葉の指示に忠実に従っていることが、わかる。

(1) 「第一」で在原伯夫人貞子が二頭立ての馬車で鹿鳴館に向かう途中、屑屋が馬車の前途に倒れている場面、「脛は馬糞の上に乗せ」に紅葉が「再考」と朱筆したのに応じて、初出紙では、「脛は地を執り」(全集本はP 58・9「脛は地を蹴り」)に改めている。

(2) 同じく「第一」で、馬車が通過後お丹が登場する場面で、「衣服の裳浮世をなぶつて風に捌き」に紅葉が朱筆を加えたのに応じて、「衣服の裾、寛闊に蹴開きながら」(全集本P 59・7「衣服の裾、寛闊に蹴開きながら」と改変している。

(3) 「第二」で、深川綾子が担当する喫茶店に三令嬢、一夫人が加わって華やかであることを説いた一節「此だけの顔を揃へて女義太夫を仕組むならば、東京の富は我が所有と飛んだ妄想を起すもあり」に紅葉が「再考」と記したのに応じて、「之も五十銭の見世物とは冥加恐ろしきことぞかし。」(全集本P 61・14「これにて五十

錢の見世物とは冥加恐ろしきことぞかし」と改めている。

(4) 「第二」で、繁昌する慈善会場に水晶の数珠を手繰りながら「端座」し、「淋しげに扇を商う老女」がいて、「茶人」が声をかけると「南無阿弥陀仏、これも浮世の義理でござるよ。」と答えたのに対して、語り手が「さりとはお笑止千萬な。」と評する一節に、紅葉が「実際に無き事なり」と朱筆で記している。この一節は、初出紙では削除されている。

(5) 「第二」の終わり、慈善会場にお丹が頭巾をかぶって、姿を見せる一節、「店頭に此度は婦人肩掛を被きて頭巾を冠れば」に、紅葉が「貴婦人慈善会に入るもの男子といへども脱帽せざるを得ず」と記している。初出本文では、これに依えて、「店頭に此度は婦人、斯会場に入るものは、位貴き有髯男子も脱帽して、恭敬の意を表せざるべからざるに渠は何者、肩掛を被き、頭巾目深に面を包みて、」(全集本P63・15)「店頭に今度は婦人、斯の会場に入るものは、位ある有髯男子も脱帽して恭敬の意を表せざるべからざるに、渠は何者、肩掛を被き、頭巾目深に面を包みて」と改めている。

右のように、紅葉は、軽佻な表現や事実とかけ離れた表現について、「再考」を促したのであった。朱筆の残っていない「第三」以下でも、右と同様の表現の補訂や削除が行なわれている。

(6) 「第四」の終わり「フムこいつは此骨がある。」(全集本P69・8)の後に、草稿では
と勝つても驕らぬ老兵、慇懃に会釈して、「はい、難有う存じます」と声も婦女に生れ替れり。「い、え、ほんのお茶一つ」と軽くあしらう芸達者、「交際の女王、いよ、出来ました」と隅の方にてぬかすは誰ぞ。
と続いていたが、初出では削除している。(3)と同様の趣旨で削除されたものと考えられる。

(7) 「第五」で、お丹が深川綾子の案内で、階下の談話室兼事務所に去った後の会場で、「扇屋の老女」が「事件には眼も触れず」に「修禪の如き無言の端座」をしているという記述を墨書で「トル」と記しているのも、紅葉の指導に倣ったものといえよう。(4)の削除と連動したものと見える。

この他、「第五」で、深川綾子の話の聞き手だったお丹が、毎晩新聞が配達されるや態度を豹変させる場面では、草稿「新聞の三枚目を読むで見な、お前達の葉があるよ。」(全集本P73・6)の後、「計り難き対の胸中、」断つてはお止め申しませぬが何だかちつと物足りません。お住家はせめてお名だけと余儀なくいへば」という一節を、「之を捨て台辞にして去らむとするを、綾子は押し止め、「お待ちなさい。」婦人は冷淡に、「何も用が……。」というように、初出以降で綾子とお丹との対話形式にするなどの改変がみられる。字句の異同はたしかに多いが、以上に挙げた改訂のほかには、構想等に及ぶ大きな異同はない。

最も注目されるのは、(4)、(7)の扇を商う老女の存在を慈善会場から消し去ったことである。老女は、石川近代文学館の草稿の「柳心尼」、初出紙・全集本の「駿河台の御隠居」であろう。慈善会場に登場させなくても、黒瀬ぬいに孫の秀が亡くなったことについて、因果を含める役割を果たすことは可能であり、華やかな会場に「修禪の如き無言の端座」をしている「老女を登場させるのは、不自然であり、削除はうなづける。

◎(B) 初出本文及び初出写本

③ 北海道立図書館所蔵『貧民倶楽部』初出本文

『貧民倶楽部』は、上述のように、明治二十八年七月十二日から九月六日まで、三十六回にわたって連載された。このうち道立図書館には、二十四回分が収蔵されている。同館所蔵の初出の掲載日と章立て、全集本文の相当箇所を示せば、次のとおりである(引用は、初出本文)。

- 七月十二日 「第一」 (P 58・1 「鹿鳴館にて」 ～ P 61・6 「麟々として走りぬ。」)
- 七月十三日 「第二」 (P 61・7 「深窓の」 ～ P 66・10 「照子は無言。」)
- 七月十四日 「第三」 (P 66・11 「天下」 ～ P 69・8 「骨がある。」)
- 七月十六日 「第四」 (P 69・9 「兵法に」 ～ P 73・15 「お転婆さ。」)
- 七月十七日 「第五」 ※「第六」と誤記 (P 74・1 「婦人慈善会」 ～ P 76・12 「思案投首。」)
- 七月十八日 「第六」 (P 76・13 「撲殺して」 ～ P 81・4 「ものはあるわね。」)
- 七月二十日 「第九」 (P 83・12 「一列の」 ～ P 86・4 「入つた〜。」)
- 七月二十一日 「第十」 (P 86・5 「商品」 ～ P 89・4 「極めたり。」)
- 七月二十三日 「第十一」 (P 89・5 「此時」 ～ P 92・3 「帰れり。」)
- 七月二十五日 「第十三」 (P 95・7 「大分賑ぢやの。」 ～ P 99・6 「参ります。」)
- 七月二十六日 「第十四」 (P 99・7 「じやむこう」 ～ P 102・6 「風邪を感勿。」)
- 七月二十七日 「第十五」 (P 102・7 「杉戸遣戸」 ～ P 106・3 「存じます。」)
- 七月二十八日 「第十六」 (P 106・4 「一人の父は」 ～ P 110・3 「奥へ来や。」)
- 七月三十日 「第十七」 (P 110・4 「お丹突然」 ～ P 112・15 「足る。」)
- 七月三十一日 「第十八」 (P 113・1 「撲打」 ～ P 116・5 「娑婆じや無え。」)
- 八月七日 「第二十三」 ※「第十四」と誤記 (P 127・9 「語を寄す」 ～ P 130・14 「入んな。」)
- 八月九日 「第二十四回」 (P 131・1 「良ありて」 ～ P 133・5 「帰してやる。」)
- 八月十日 「第二十五回」 (P 133・6 「駿河台の」 ～ P 135・7 「早軒。」)

- 八月十三日 「第二十六回」 (P 135・7 「仔細は」 ～ P 137・8 「尼になりきといふ。」)
- 八月十五日 「第二十七回」 (P 137・9 「麴町の」 ～ P 140・10 「合点だ。」)
- 八月十七日 「第二十八回」 (P 140・11 「門内の」 ～ P 142・13 「其結果。」)
- 八月十八日 「第二十九回」 (P 143・1 「寺院は」 ～ P 144・13 「威張つたもの。」)
- 八月二十七日 「第三十回」 (P 144・14 「老婆は」 ～ P 149・5 「答へたり。」)
- 八月二十八日 「第三十一回」 (P 149・6 「そりや」 ～ P 152・15 「雨瀟々。」)

右のように、道立図書館蔵の初出は、冒頭【資料5】から深川綾子の邸に居候するお丹が綾子から「子を持つたことがあるのかい。」と問われたのに対して、「墮胎薬も存じて居ります」(全集本では「お薬」と答えるところ)【資料6】までを収蔵している。全集本八十一頁五行目「在原夫人の」から八十三頁十一行目「囁きぬ。」までと百十六頁六行目「今まで」から百二十七頁八行目「打笑ひぬ。」まで、さらに、百五十三頁一行目「翌朝になると」以下末尾の百六十七頁十一行目「二三人あるよ。」まで、岩波版全集で百九頁のうち、二十八頁分、約四分の一を欠く。

初出から全集本への移行に際しては、字句の訂正と削除が多い。「第十三」のはじめで大木戸伯爵を紹介した初出「嘗て北面に朝参して国の政事を」を全集本では「嘗て政事を」(全集本P 95・11)に改めている。また、小浜照子が大木戸に「維新の頃の戦の談話を遊ばせな。」とねだる初出は、全集本で「戦の談話を遊ばせな。」(同、P 98・4)に改めている。「第十六」では、初出の「白日闇の木賃宿に爾き閑日月あるは怪むべし。」を「白日闇の木賃宿に爾き姿あるは怪むべし。」(P 107・6)と改め、「第二十三回」では、外面のいい人間を批判した一節「外に忠実なる僕の如きは内に暴戻なる君主なり」の「君主」を「旦那」(P 127・9)に、「他人の妻には私の如く、民力休養を説く舌は却つて奴婢を叱責せずや」の「民力休養」を「動物愛護」(P 127・11)に改めている(「民力休養」については、田中勳儀「新

進作家時代の鏡花」にすでに指摘がある。「論集 泉鏡花」有精堂、昭62・10。さらに、「第二十六」の「柳田光子様御遺骸」が、「塚町光子様御遺骸」(P135・10)に改変され、「貴顕方」が「華族様」(P136・1)、「光子様はあれつきり娑婆へは出られぬいて。」が、「光子様はあれつきり……。」(P137・7)に改変されている。「第三十回」では、宗福寺で開催された施米について初出「貴顕方の下され物」を「下され物」(P146・6)に、「お丹大明神様の御託宣だ。」を「お丹様のお言だい。」(同・11)に、「交際社会の女王」を「交際社会の明星」(P147・1)に、深川綾子が、慈善会以来の不如意を思ふ初出「天堂の幸福を受けつゝ、ある有爵婦人と衝突なし今にも破裂爆発して、不平等の社会を紛摧し」を、「世の幸福を受けつゝ、ある婦人級と衝突なし、今にも破裂爆発して」(同・3)に改めている。

最も大きな改変は、「第十六」末尾、お丹の経営する木賃宿で、鉄蔵が娘の竹坊を新網の仁三に売った事情を語る次の場面である。

「あの、家の阿魔に犬をしかけての。」二人、「え、……。」と反返る。／鉄蔵は落着き払ひ、「妙な子を拵えさして其をば見世物に出さうといふのよ。」／「途方も無え。」「恐ろしい。」「何と異なるものが折込もうか。」「そりや何うだか。」「うむにや、／滅法美しい男の児が生れるよ。」「はてね。」／「鉄漿黒々と細眉毛年紀は十六といふのが笛を持つて御誕生だ。」／鉄蔵は希有な顔色、「へえ、そんなことが三世／相に出てるかい。」「はて、野暮なことをおつしやるもんだの、それ、(敦盛卿はいんの子)だス」酒／落じやねえ。」「しかし幾許だ。」「十と九両ス。」／「売切つたのなら、犬には限るめえ。」／「勿論、馬とでも、牛とでも。女もなに泣面は掻か／無いで一昨日去つた。」と煙管をはたく。／背後にすつくと突立つお丹、一部始終を聞きしなり。一声鋭く、「鉄、談話がある。奥へ来や。」

とあつたものを、全集本(P109・13～P110・3)で、

(引用者注、斜線は改行を示す)

「あの、家の阿魔に犬の皮をの。」二人、「え、——。」と反返る。／鉄蔵は落着き払ひ、「妙なものを拵えさして其をば見世物に出さうといふのよ。」／「途方も無え。」「恐ろしい。」／「勿論、女もなに泣面は掻かぬいで一昨日去つた。」と煙管をこつ／背後にすつくと突立つお丹、一部始終を聞きしなり。一声鋭く、「鉄、談話がある。奥へ来や。」

というように、改変している(資料7)。初出では、娘が動物との交わりを強要されるのを知っていて興行師に売つたわけで、お丹が長煙管で鉄蔵の「額を砕けよ」と撲つのも無理はない。とはいえ、平敦盛伝承に付会した点や倫理の逸脱も甚だしい初出本文の改変は、当然のことであろう。

鏡花が初出紙をどのように改変したか、石川近代文学館所蔵の初出の写本を取り上げて、検討を続けよう。

④ 石川近代文学館所蔵『貧民倶楽部』初出写本について

『貧民倶楽部』初出写本には、「東京麹町下六番町十一 泉内」から「盛岡市下小路一番地 高瀬方 大信田金次郎」に当てた書留小包の封筒もあり、石川近代文学館に写本と一緒に収蔵されている。

写本巻頭には、【資料8】のように、初出紙と同じく「貧民倶楽部 乙羽生・鏡花子 合作」と作者名が併記されている。但し、初出写本には、初出にあった「第一」「第二」などの章立てがなく、掲載日ごとの区切りが反映されていない。また、初出紙は、総振り仮名だが、初出写本は朱筆による部分振り仮名である。誤字・欠字については、欄外に同じ筆跡による朱筆の書き込みがある。おそらく筆写終了後に、改めて初出紙と照合しつつ、振り仮名と補訂を加えたものと思われる。前章で検討したように、初出から全集本文への移行の過程で、削除された箇所が少なくない。綾子らが小浜照子に秀を殺害させたことを、お丹が責める場面で、初出「照子に殺させたに違ひありません。番町のは罪はない。」の「番町のは罪はない。」を全集本で削除した例(P162・3)などがある。なお、こ

の点については、天理大学附属図書館蔵の草稿を検証した田中論文にも指摘がある。

注目されるのは、次のように、墨による抹消が三カ所あることである。

(1) 初出の「第十七」で、鉄蔵が娘を見世物興行師に売ったことを語る一節、「はて、野暮なことをおつしやるもんだの、それ、(敦盛卿はいんの子)だス」「洒落じやねえ。」の「それ、(敦盛卿はいんの子)だス」を抹消している。上述のように、この一節は、全集本では削除されている。

(2) 深川綾子の邸でお丹が贅沢三昧するのを三太夫が嘆く一節、「我が一家を預りながら、飛んだ悪魔をお抱へあるを諫めなんだが不念至極、」(P159・9)の後、五行の抹消があり、「外道が為に汚されておいたはしや一室へ御籠、昨日から家は闇だ、此月の入用を」と続く。抹消部分は、解説不能である(資料9)。

(3) お丹が、深川綾子の醜聞を新聞雑報に掲載すると綾子を責め、国外脱出を勧める場面、「何なら露西亞へでもお出なすつて、」(全集本P164・11)の「露西亞」が抹消され、「お出なすつて、」の後にさらに三字の抹消がある。続いて「の動静でも観察なさいな、其内御帰国になりますまで、私が生命さへござんしたら」の後に、二行の抹消がある。これらの抹消は、石川近代文学館蔵の草稿によって、「虚無党」、「見事平等等の社会を毀して冥利心といふもの、無いやうにして置ませう」であったことが確かめられる(資料3、10、11)。

これらの抹消は、いつ、だれがしたのか。たとえば(2)の「不念至極。」の後の三行抹消の二行目の下には、欄外に朱筆で「鳴」という書き込みがある(資料9)ことから、「不念」に振り仮名を付し、「鳴」の誤字を訂した後で抹消したことがわかる。このことから、初出でも、これらは伏字にはなっていないものと考えられる。さらに注目されるのは、(3)で、「露西亞」が抹消されているのに、全集本文では「露西亞」が抹消されていないことだ。大信田落花は洩れなく筆写し、振り仮名を朱筆で補い、誤字を欄外で訂した写本を春陽堂編集部に送付したのでは

なからうか。とすれば、鏡花が全集本文作成のために初出を転写した際には、抹消はなかったものと思われる。抹消は、鏡花が筆写した後であろう。抹消した当事者は誰か判然としない。

以上のほかに、お丹が深川綾子に仕える三太夫相手に封建的な主従関係の理不尽を批判する「考えたがい、高が百石や二百石で命と引き換にして堪るものかね。」を全集本で「たかがぼんぼち米少々で命と取換へてたまるものか。」(P154・6)とした後、「私は素より忠義で無いが恩知らずとはいひなさんな。」の前に、次のような一節があったが、全集本で削除されている。やや長いが、紹介したい。

魔道の教にだまされて、主人に忠は盡さにやならぬと思込むが可愛相だ。／貴族的の制裁や其弊いふべからず。少許の禄を与へて以て巨大の責任を被らしめ、生殺与奪の権を握り、压制し、束縛し、甚だしきは死をいたさしむ。もしそれ休息を求めむか、賊といひ、不義と称へ不忠と称し、反すと謂ひ、軽きは流し、重きは殺し、或は社会を放逐す、恣横度無く、暴戻極無く、然して怜悯に立廻れば賢君良主の美名を占む、何等の怪事ぞや、世に人の奴隷たるもの忠臣義僕の名を欲す勿れ、皆汝を釣る漁夫の餌なり、但其義務を完うせよ。心を傾けて忠なる勿れ。／黙つておいで憎まれるよ。作者の出でくる幕ぢやア無えの。

右の後半部(「戻極無く」以下)は、天理大学附属図書館蔵の鏡花自筆の初出写本に存することが、前掲田中論文に指摘されている。矯激な忠孝批判で、作中人物お丹が「作者」の発言を制止する一節で、削除されても仕方がない。しかし、執筆時の「作者」に制しがたい為政者への批判精神があったことがうかがえる点で、興味深い。二行後の「少時足を洗った為に、乞食仲間を省かれた」(全集本、同・8)の直前には「へぼ侍の刀の様に無暗に出したり入れたりされて、血のある人間が黙つてもんかよ。」という一文もある。

このように初出・初出写本及び全集本を比較検討することで、鏡花が、大信田落花の筆写した初出紙の過激な場

面を削除しつつ、作品としての完成度を高めながら推敲を重ね、清書して全集本文を完成させた経緯をうかがうことができる。

『貧民倶楽部』本文は、明治二十七年一月九日の父清次の死去をはさんで、東京と金沢で十一月末から二月にかけて執筆され、下書き原稿が一応の完成を見た。下書き原稿は、鹿鳴館の婦人慈善会を貧民の集団が占拠し、嫁を虐待する華族の老婦人を自殺に追い込み、殺人を隠蔽する貴婦人の醜聞を暴露すると責めて発狂に至らしめる貧民と貧民集団のリーダーを描くばかりではなく、貴婦人から特異な税金を徴収して融通する『貧民倶楽部』誕生を物語るものであった。同年九月の上京前後に、紅葉の添削指導に忠実に従うなかで、推敲がなされ、翌年夏、大橋乙羽との合作の形で「北海道毎日新聞」に連載された。大正十三年全集編集の際、落花が初出紙写本を所有していた関係から、借覧し、時局を鑑みた訂正、推敲を経て現行本文が成立したものと考えられる。

2 婦人慈善会の虚と実

『貧民倶楽部』は、二頭立て馬車に乗った伯爵夫人在原貞子が、春陽堂版全集以下でいえば「六六館に開かる、婦人慈善会」に向かう所からはじまり、作品の初めの三分の一が、婦人慈善会を中心に展開している。上述のように、慶応義塾図書館所蔵の自筆原稿及び初出で「六六館」が「鹿鳴館」となっていることから、鹿鳴館で催された婦人慈善会に取材したものであることがわかる。作中の婦人慈善会は、「冬枯」の時期に「三日続きの予定」で開かれ、入場切符は「一枚五十銭」、「収入額は育児院へ寄付」することになっている。又、会場の二階は「商品陳列場」であり、「第三区」では「毛糸の編物」「襯衣」「肘付」等を商い、「前面」には「喫茶店」、「階下」には「談話室兼

事務所」があると記されている。「深窓の美姫、紅閨の艶姐」が、「綾羅錦繡の袂を揃」へ「梅桜桃李の花を咲かせて、暗香堂に馥郁」として華やかに賑わう婦人慈善会は、しかし、語り手によれば、「我に諂ひ我に媚ぶる夥多の男女を客として尊き身を戯に謙り、商業を玩弄びて、氣随に一日を遊び暮らす」貴婦人令嬢の「氣保養」と記されるのみならず、「位貴き有髻男子も脱帽して恭敬の意」を表する会場で、強引に高価な品物売りつけ「剩銭を出ださむ気色」もない「体のいゝ盗人だ」とされている。

実際に鹿鳴館で開かれた婦人慈善会(バザー)の概要を諸新聞・雑誌等によって整理すれば、次の一覧表のようにまとめられる。

鹿鳴館における婦人慈善会一覧表

名称(別称)	期日	寄付の対象(金額)	売り場	入場料	入場者	備考
(1) 第一次婦人慈善会 (貴婦人慈善会、バザー、 レヂスフエヤ)	明17・6・12〜14	①有志共立東京病院 (一八三六四円余)	第一番、 第十五番 (十四、十五番は茶店)	十銭	①一万九百 ②二十二人	①女学新誌14号、明18・1 ②郵便報知、明17・6・20
(2) 第二次婦人慈善会	明18・11・19〜21	同右①(二五〇〇円) 育児院(二〇〇〇円) 養育院(二〇〇〇円) 訓盲啞院(二〇〇〇円)	第一番、 第十一番 (十一番は茶店)	三十銭	①四千六百人	①女学雑誌11号、明18・12 ②時事新報、明18・11・26
(3) 養育院慈善会	明20・5・20〜22	東京府養育院 (一六五六一円余)	第一区、 第七区(七区は茶店)	二十銭	①一万四百 ②五十五人	①女学雑誌7号、明20・8 ②東京絵入、明20・5・25
(4) 第二次婦人慈善会 (慈恵医院婦人慈善会、以下同じ)	明20・11・17〜19	東京慈恵医院 (一五二九円余)	第一区、 第十区(十区は茶店)	不明	①三千二百 ②二十八人	①朝野、明20・11・23 ②同右

(5) 第四次婦人慈善会	明21・12・6〜8	同右	①(〇〇〇〇円)	同右	不明	②二千二百 三十人	①郵便報知、明21・12・16 ②女学雑誌140号、明21・12
(6) 第五次婦人慈善会	明22・11・14〜16	同右	①(完上七〇八六円)	第一区 第六区(六区は茶店)	不明	②二千 四十三人	①読売、明22・11・19 ②女学雑誌188号、明22・11
(7) 第六次婦人慈善会	明23・11・13〜15	同右	(不明)	同右	①三千銭	不明	①朝野、明23・11・14
(8) 第七次婦人慈善会	明24・11・12〜14	濃尾震災患者治療	①(六七〇〇円)	不明	不明	不明	①郵便報知、明24・11・15
(9) 第八次婦人慈善会	明25・11・11〜13	東京慈恵医院	①(六五〇〇円)	第一区 第六区(六区は茶店)	不明	②千三百 八十人	①女学雑誌233号、明25・11 ②同右

鹿鳴館での最初の婦人慈善会は、貧窮者の救養を目的として明治十七年四月十九日に開院した有志共立東京病院(明20・5、東京慈恵医院と改称)の施療費に充てるために開催された。六月十日付「東京日日新聞」は、

今回我国の貴顕紳士の婦人方が相会せられ一の婦人慈善会と云へるを設け愛宕下町の有志共立東京病院へ金円を寄贈の爲め特に手製の品のみを集め今月十二・十三・十四日の三日間内山下町の鹿鳴館に陳列して売捌かる、よし此事は欧米各邦の貴女中に行はる、慈善の美拳にして人或は中輻社会きんかくに発したる文明の光輝と云へり
今日我国に此事を見る誠に悦ぶべく賀すべき事なり

と報じている。冒頭に引用した白鳥の言のように「文明の産物」としてこの慈善事業は、大山捨松・伊藤梅子・井上武子の各参議夫人及び津田梅子等を発起人とし、一方では井上馨らによって推進された不平等条約改正の施策に呼応するものでもあった。バザーを採用した理由は、「余財」をなげうつよりも「公衆の救恤」を期して「世上の人心を鼓舞」しようという意図があったためだといふ⁴。後述するように、一般的に慈善が世人の注目を集め人口に膾炙したのは、この慈善会を通じてであった。鹿鳴館二階の大広間を売り場とした会場は、「緑葉を以て装飾し日章旗を交叉して裁縫箔物を始、玩弄遊戯の諸品を陳列(中略)出品の総数は三千有余」(郵便報知新聞 6・12付)であり、一階の食堂には「喫煙茶菓水水の店」(同前)がおかれていた。平生は深窓に隠れてまみえる機会の少ない貴婦人令嬢が、手製の品を販売することが評判となった。そのことは、例えば飯頼山人『婦人慈善会』(瑞穂屋卯三郎発売国会図書館本は刊記を欠く)の「コノ会ノ第一趣巧トイフハ(中略)ソノ売人ニアリ」という一節に明らかである。事実「来観者は場の内外に充満して其雑沓云ふべからず故に時々入場中止を標示して僅に其雑沓を制す」(婦人慈善会第一次報告書)という盛況で、そのありさまは、揚洲周延の錦絵「鹿鳴館貴婦人慈善会図」(明17・6、古市之親刊)によって今日伺うことができる。このような成果を基に、鹿鳴館の婦人慈善会は、ほぼ同様の形式・内容で明治二十五年まで全九回開かれたのであった。特に一覧表の(4)以降は、毎年一回十一月か十二月に三日間開催されることが恒例となり、その初日には皇后が訪れている。収益の寄贈先は、一覧表の(3)・(8)を除いていずれも有志共立東京病院、つまり東京慈恵医院である。他の施設へは、(2)の際に育児院・養育院・訓盲啞院へ千円ずつを寄付したにすぎない。入場者は、(1)・(3)が一万人を越える賑わいであったが、回を重ねるごとに減少し、明治二十六年には会場を慈恵医院に移した「慈善美術展覧会」(10・24〜30)に姿を変えている。これに対して収入がさほど減っていないのは、岩崎弥之助等の紳商が大量に残品を買い求めたためであった。

諸新聞の伝える婦人慈善会の評価は、第一回終了直後から芳しいものではない。明治十七年六月十六日付「郵便報知新聞」が、貴婦人たちの対応を「どうでもかうでも買はねばならぬやうに仕向け互ひに競ふて売付ることの巧みなるには事を解さぬ来客は甚だ猥りにもぶしつけなる所業と物やく者もあり」と記し、さらに「義理づくにて物

を買ふに方り釣銭を乞ふこともならず」と嘆じたのをはじめ、十九日付「読売新聞」の無有居士「レヂスフエヤ」も強引な売り方を「校書輩の口吻に似たり」と批評し、併せて品物の値段の高さを指摘している。開会前から、バザーを「西洋などの例にては大抵二三四五倍の高価に売り剩へ釣り銭を出さぬが法」（『時事新報』6・11付）と紹介したこともあって、以後「今回は相場外れの値段を云はず且つ釣銭をも出し総て市中の商店同様」（『郵便報知新聞』明18・11・19付）という趣旨を謳いながらも、「兎角に慈善会には実用にもならぬ同種類の玩弄物を持ち寄りて来会者に押し又は十銭乃至二十銭の品物を一円以上の高値に売付る」（同紙、明20・5・20付）と毎回批判された。このことは、明治二十五年の最終回においても同様であつて、

時流に趨しる若紳士も鹿鳴館の慈善会へ行き給はずと勧める、に逢へば真平御免を蒙るとて遁げ出すとは抑も如何なる訳あるか例年開かる婦人慈善会を見て帰れる人々は花の如き夫人令嬢の優さしき手に袖を捉られて市価より数倍のものを買い来たり不平を語らざるものなかりき
（『郵便報知新聞』明25・11・11付）

というように敬遠されていたことがわかる（資料12〔資料13〕）。

以上のように『貧民倶楽部』は、冬枯れの時期、期間、会場のありさまのみならず、その実態についても、鹿鳴館の婦人慈善会と合致する点が多い。が、仔細にみると入場料や喫茶店の位置等において相違点がある上に、前引慶応義塾図書館蔵の草稿に「貴婦人慈善会に入るもの男子といへども脱帽せざるを得ず」という紅葉の訂正のための添え書きがみられ、鏡花はこの規則を関知していなかったことがわかる。又、明治二十三年十月二十八日に上京し、彷徨の末紅葉の女関番となったのが翌年十月であつたこと、二十五年の慈善会開催時には、金沢に帰郷していたこと等を考慮すると、鏡花は鹿鳴館の婦人慈善会を実際に訪れたことはなく、新聞・雑誌その他で知識を得たのみでよい。その可能性として考えられるのは、周延の錦絵であり、作中にこの会を描いた作品——殊に当時最も多

く読まれた作家の一人である須藤南翠の『緑蓑談』（改進黨、明21・5）である。たとえば後者の前篇の最後には「名譽ある貴婦人令嬢の会衆を募りて、慈善医院、養育院、福田会、育兒院等、無告の窮民を救済すべき諸院へ義捐せんが為めに、（中略）玉腕を勞し、纖手を疲しめ、製作したる物品を鬻がん為に開きたる」鹿鳴館の婦人慈善会場の様子が第二次婦人慈善会（二覽表②）を基に記されており、お茶代の高いことや強引な売り方にも触れている⁵。ただし、「数年前には大いに増りて婦人の動作熟練なし、嬌態あれども卑猥ならず」として全体的に諸新聞の伝える実態よりも婉曲な筆致で描かれ、『貧民倶楽部』の挿話との直接的な関わりは指摘できない。品代の高さや強引な売り方という点から逸することのできないのは、紅葉が『紅白毒饅頭』を掲載していた二十四年十一月十六日付「読売新聞」の「田舎漢ならざるも亦吃驚」と題する地方出身者の慈善会訪問記である。やや長いが、同年十一月十二日付の婦人慈善会雑報と併せて、全文を引く。

○慈善医院第七回婦人慈善会 同会ハ今十二日より三日間山下町の鹿鳴館に於て開き會員其他の慈善家より寄贈せる諸品を売捌き其売上高の利益を震災地窮民へ惠与することなるが今会場の模様を記さんに同館の入口に紅白染分の大幕を張り階上に登り舞踏室の南の入口に通れバ陸奥、三宮、田中三夫人の受持なる第一区にて店場に陳列せる物品ハ大抵縮緬類にて拵へたる婦人の袴襟又ハ鼠地に菊、鳳凰、白鶴等の紅白の模様ある幅紗ハンカチーフ或ひハ西洋童子の玩弄人形等にて店の正面に「慈善会」と書きたる額を掛く第二区ハ後藤伯爵、山尾、榎本両子爵夫人等の持場にて其売品ハ大抵第一区同様の物なり第三区ハ小笠原、戸田両伯爵夫人の持場にて品物ハ絹ハンカチーフ朱塗の香台、小箱十五夜の月の如き朱盤紙にて製したる風船等にして此場ハ毛利侯爵夫人松方伯爵夫人、同令嬢、伊藤伯の令嬢にて末松夫人なる生子^{いぐ}等の方々関所を据て（ちよいとあなたお買ひなさいな）と嬌声に呼び留むれば此所は中々素通なるまじ第四区ハ蜂須賀侯爵前田侯爵士方子爵夫人等の受持なり

此所も亦第一区第二区と同一様の品物なるが中にハ錦画もあり西洋蠟燭、ペン、ペンシル、革の上草履等処狭きまで陳列せり第五区ハ井上男爵杉子爵花房從三位等夫人の持場にして売品ハ絹ハンカチーフ西洋小間物にて中にハ緋地に紅葉を染貫きたる七円以上のハンカチーフもあり階上ハ之を限りとしきて階段を下れば第六区川村、大村両伯高島、仁禮両子爵等夫人の持場にて即ち例の茶店なり、此茶店にハ二十五人の窈窕たる淑女令夫人、名々襷掛にて通行の客に対し御茶一ツ召上れと勧むる処にして其の茶店ハ青色の絹もて家台を出来ハ紅色の幕を張り或る貴顕の揮毫せる「喜久の雫」てふ額面を掲げ四方にハ傍まばゆき紅茶と爛漫たる桜花の造り枝を挿置す此処に張札あり曰く日本茶菓子附金十五錢、紅茶菓子附金二十錢、コヒー菓子附金二十錢、アイスクリーム金二十錢、リモンド金十五錢、土産菓子金十錢と此茶店を過ぐれば煙草店なり此店も亦茶店の姉さんと同一の売子なり、此外未だ店に陳列せざる品物ハ鹿鳴館の応接間に堆きまで併列しあり中にも妙齡兒女の翳すべき紅黄白の菊の簪又舞曲にある若菜摘の籠数荷ありて何れも青々たる緑葉を摘込みあるなど目新しくして上出来のもの多しと

〔読売新聞〕明24・11・12第三面。同一紙面に、尾崎紅葉『紅白毒饅頭(二十三)』掲載。

○田舎漢ならざるも亦喫驚 此程鹿鳴館に開きし婦人慈善会を見んとてわざ／＼遠き九州より上京したる人より左の一書を本社へ贈られたれば録して雑報に代ふ

〔前畧〕十四日ハ雨止みて天気も佳く風も穏かなれば田舎者のお江戸見物にハ屈強と朝より同行の友人と支度疎かなく案内を記したる貴社の新聞是れ忘れてハと固く懐中に入れ開会(慈善会)の時刻遅しと詰掛け候処前後左右の綺麗美やかにハ先づ第一に一驚を喫し申候傍第一区より順次に観覧いたし候処評判に違はず名も知れぬ立派の洋服を裾長に着流したる令嬢とも夫人とも中々凡眼にハ見分け難き程窈窕たる御婦人綺麗星の如くに居列

び鶯の様なる御声にてお買ひなさいなどと勧む是れハ多く洋服の御婦人に限る様にて日本服のお方は何程か扣へ目の様に存じられ寄候生等も縦覧の手形ハ兼ねて所持致し居り候へば何処の富樫の左衛門にても通行差止の権利ハ無之と存じ候得共流石素通りなり難く且つハ此の如き場所不馴の事とて少しく躊躇してウロ／＼するをそれと推してや一人の令嬢矢庭に同伴の友人を捕へて到頭束髪用の薔薇簪一本普通三四錢位なるを大枚三十錢に売渡され候日頃吝嗇の友人少しくシヨゲて見え候を隙さず令嬢ハ馴々しく近寄りてその花簪を友人の左胸に縫附ながら上衣の皺さへ叩き呉れ候此の御恩神ぞ嬉しかりしと見えそれより友人ハ急に大得意の容体を繕ろひ此の花見て呉れと云はぬばかりに振舞ひ候可笑さハ今も小生の目前に顕れ居候猶歩を移して第五区へ参り候へバ此所ハ名に負ふ若手の御連中常にハ無作法の小生すら思はず密と衣紋を繕ひ黒き顔をポツと致させ候ちと草臥れしま、立ち寄り候へバ日本茶の御馳走中々街道の婆が酌む洪茶とハ違ひ風味格段と吞打ち致居候処へ美しい姫様が袋入のお菓子六袋御持参なされて之を取れ餌ハ一円ぞと宣ふそれハ飛んでもない事駄菓子三百三錢のこと買ますれば一月の来客が勤りますと後込すれど中々お世辞と御愛敬がお上手にて逃げ切れずト二人にて二袋づゝ頂戴する事になり六十錢差し出して過不足を尋ね申せしに令嬢は冷くお笑ひなされて七十錢なりと仰せらるゝに田舎者の無丁法御免下されと猶十錢を置足して逃る様に此区を立去りし見苦しさ宿の嬢に見られぬが先々仕合に御座候長居せバ鬼の首売付られて可憐目を廻はしてハならずとソコ／＼に門外に出候へば今まで只きよと／＼して口も碌に吐こと叶はざりし友人莞爾に例の簪を指し反身になつて先の令嬢を頬に賞め立て其故か如何やら薔薇に香氣がある様ぢやと申し候ゆゑ小生も訝かりながら鼻をひよこつかせ候へば成程馥郁として辺にときめき候アナ不審やと能く／＼眺め候へば畜生め！矢張真の薔薇の花にて九州の家娘に喜びたりし土産の簪こ、に色も香も褪め果申候是ハ同会の人が徽章にとて用ゆる残物を売付けられしならんと初めて友人

が心付き候も可笑しく今になりて見れば何やら彼の令嬢もチト古……らしかつたと眩やきしハ猶更物笑にて御座候云々

〔読売新聞〕明24・11・16

右のように、「窈窕たる御婦人綺羅星の如くに居並び鶯の様な御声にてお買ひなさいなと勸」めるなかで、第一区で「不馴の事として少しく躊躇してウロ／＼するをそれと推してや」一人の令嬢にたちまち「東髪用の薔薇簪一本普通三四錢位なるを大枚三十錢に売渡され」たり、第五区の茶店で「美しい姫様が袋入のお菓子六袋御持参なさされて之を取ればハ一円ぞと宜ふそれは飛でもない」といったが、「逃げ切れず」に菓子二袋を買って「六十錢」出したら「七十錢」だと笑われ、予想外の高さに金を置き足して「逃る様に立去りし」といったさまが描かれている。右の「読売新聞」の記事を、鏡花が読んだ可能性は高い。こうした一節が『貧民俱樂部』において「眩座」を押し売りされる「五ツ紋の年少紳士」の挿話に生かされたかと推測される。同月十二日付同紙の会場紹介記事では、第三区を特に「(ちよいとあなたお買なさいな)と嬌声に呼び留むれば此所は中々素通なるまじ」としている点も『貧民俱樂部』で強引な売買が行なわれるのが同じ第三区であることから注目される。

この他にも、例えば延春亭主人『散浮花』(我楽多文庫)明21・11に「婦人慈善会へ行て一円束髪用の花簪を売付られて困り切つた」という一節や川上眉山『黄菊白菊』(文庫)明22・4に「氣位は慈善会の品物よりも高く」という一節が散見する。鏡花の意図は、こうした世評を基礎として、特定の年次のものではない華族階級による婦人慈善会を仮構し、これを蹂躪するところにあつたはずである。実際、「厄病神」と記した旗を竹に結んだ三十数名の貧民が、「疾鬼横行」の如く隊をなして会場に押しかける場面は、『貧民俱樂部』のなかでも主題とかかわる重要な位置を占めているのである。この作品に先立つ『冠彌左衛門』や『金時計』にも、すでに集団的な反抗が描かれているが、『貧民俱樂部』には両作におけるような直接的な反抗の理由は、ない。「お前様方が人中で面を曝して、

こんな会をしなざるのはあゝ、彼の夫人は情深い感心な御方だと人に謂はれたいからである」というような婦人慈善会の慈善のあり方への疑問、さらに、「無暗に施行^{ほどこし}々々といひなざるが、ありやお前人を乞食扱にするのだ。目下の者を憐むんぢや無くつて軽蔑するのだ」といった慈善そのものの否定に起因した行動なのである。このように、作中の貧民は、慈善という行為が名誉欲に発する悪事であり、華族階級が貧民を不当に蔑視し、華族階級自体を利する行為だとして慈善を否定し、拒否しているといふことができる。

次章では、ここにみられるような慈善と貧民の状況についてやや広い視点から検討し、作品成立の基盤・背景を探ることとする。

3 慈善の時代と社会問題

婦人慈善会が始まった明治十七年から『貧民俱樂部』が執筆された二十六年までの十年間の慈善の展開を検討すると、次のようなことが言える。

まず第一に大評判となった最初の慈善会の後、大阪・横浜で同種の会が計画されたのをはじめ、明治二十年には京都・滋賀で、二十一年には金沢で、二十二年には横浜で婦人慈善会が結成され、地域的な広がりがみられるという⁶⁾ことである。滋賀県長浜を舞台とした宮崎三味「慈善」(大阪毎日新聞)明21・12・29(31)は、こうした動向と無関係ではないだろう。第二に慈善の名称を冠した様々な会——慈善音楽会・慈善演説会・慈善舞踏会・慈善演劇会・慈善美術展覧会等々が、婦人慈善会をきっかけに開かれるようになったという⁷⁾ことで、「慈善を名とし(中略)種々の名儀を附し演芸興行等の手段によりて不正の利を網する奸譎の徒」が出現し、その戸締まりを要するほどであっ

た（郵便報知新聞「明23・11・15付「偽慈善会の取締」」。第三には、寄付先その他のあり方に対する疑念や批判が二十三年を中心に続出したことである。十八年十一月十九日付「時事新報」汎愛道人の投書「婦人慈善会」が「一方に偏する慈善は真成の慈善とは申し難き」と述べて寄付先の偏向を遺憾とし、凶作と経済恐慌によって米価の高騰した二十三年六月の「国民之友」八十四号「貴婦人の慈善会」は、「貧民の為」の慈善会開催を求めた。同じ月の「日本人」四十九号では、加賀秀一「促貴婦人慈善会檄」が「魏々の壮、輪奐の堂」たる鹿鳴館での開会を虚飾として「博く慈善を施さんとせば（中略）卿等親しく玉趾を枉げて、細民の居」に直接赴けと主張する一方、秋風子「婦人道德の改良」は「洋風を模倣し」「華を衒ひ、豪を競ふ」慈善会を「其名は美なるも其実なく、其外面は善なるも其裏面は醜悪なる者」と批判している。当初婦人慈善会に好意的であった「女学雑誌」も同年十一月には、

自腹を痛めず手足を勞せず面白半分人の囊中を弄し而して幾許の金錢を得て之れを人に施与するも以て慈善といふを得ば慈善は余り立派なることには非る也（中略）盛粧炫服四辺を輝かすの婦人三々伍々相群りて（中略）冗談半分強て他へ売付けん」とす。⁷²

〔慈善の事業〕240号

とそのあり方を批難している。こうした論調は、貧民問題が顕在化するにつれて婦人慈善会の偏向と欺瞞が暴き出された結果であり、右のような世評の動静をふまえて、さらに鏡花は慈善そのものの否定にまで踏み込んでいるのである。その契機を考える時注目されるのは、鏡花が愛読していた森田思軒がしばしば寄稿した雑誌「国民之友」の社会問題を扱った記事である。以下、同誌の記事を中心に慈善と貧民の状況についての言及を吟味し、『貧民倶楽部』との関わりを検討することとする。

吉田久一『日本社会事業の歴史』勳章書房、明35・9）によれば、慈善は、公的救済の過渡的な段階と考えてよい。我が国での国家権力を背景とした公的な救済事業は、不十分ながらも明治四十一年に成立した中央慈善会によって

開始された。それまでは、いわば華族や富豪を中心とする個人及び私的な団体に貧民救済を恃む慈善の時代であった。例えば東京市参事会は、個人的には慈善家である会員が少なくないにもかかわらず、二十三年の恐慌時に提出された貧民救助案を否決した。当時の為政者には貧民問題に対して「私財は以て抛つべきも、公費は以て施すべからざる」（東京市参事会の貧民援助案否決）「日本人」49号、前出）という貧民惰民観に拠った根強い考え方があったのである。そして、このような救済の対象である貧民、特に『貧民倶楽部』に取り上げられた四谷鮫ヶ橋のような貧民窟が社会問題化したのは、松方正義の紙幣整理に起因する経済的沈静と士族・農民・職人などの封建的諸階層の没落を経た明治二十年前後からである。十九年三月三十日付「朝野新聞」は、

今東京市街の趣を見るに表通りは高楼大厦を立て連ね馬車人力の往来賑はしき地も少しく裏に入れば破屋矮家軒を連ね恰も錦の裏に異ならざる処少なからず

（「府下貧民の真景」）

として鮫ヶ橋を含む貧民窟の実態を報じ、二十二年六月の「国民之友」二十三号には「窮民府下に集る」とある。地方から東京への貧民流入の増大は、当時看過できない大きな問題となりつつあったのであり、二十三年五月の同誌八十一号は、この点を「社会問題の端」と指摘して注意を喚起したのであった。特に深刻な不況にみまわれた二十三年には二月の浜田健次郎「貧困ノ原因及ヒ救治策」が下層社会の窮迫は「不測ノ変乱禍難ヲ醸成スル」として窮民一揆への危惧を表明した。立場を異にする「日本人」も同様で、同年五月の棚橋一郎「貧民の救済其策如何」（47号）が「竹槍席旗の騷擾」を懸念している。但し、「日本人」は事態の深刻化の原因を米価騰貴と雇用下落に帰することが多く、この問題を現象的に捉えていた形跡がある。これに対して、すでに二十二年三月「富人ト貧人ノ競争ハ競争ニ非ズ、貧人ノ汗ヲ絞ツテ富人ノ懐ヲ富マスニ外ナラズ」（富と道德）44号）としてしばしば貧富の格差拡大を説く「国民之友」は、二十三年一月にも「文明の伴ひ来る」（富と福音）69号）貧富の差を指摘して歴史的必然と

して捉え、翌年三月には「社会党瑣聞」(113号)が貧民問題への社会的関心の高まりに言及するなどして、(貧困)を本質的に、そして西欧特に英国の状況を基に、把握しようとしている。こうしたなかで『貧民倶楽部』との関連で注目されるのは、同じ二十四年の四月に無署名で掲載された「罪悪は貧賤者の専有物にあらず」(114号)である。前年一、二月の同誌に連載された森田思軒訳のユーゴー『クラウド』への共感を記した筆者は、貧民を「庇補」しない「社会は残酷なり」と述べ「最も罪悪を犯かすの境遇に在る」貧民にかえって「人間の本領」や「偉大なる道念」を看取し、「最も罪悪に遠かる可き」上流階級の頽廃を指摘して、

若し上流社会を以て道徳に富む者とせば、其理由は只罪悪を隠匿し若しくは罪悪を塗飾して以て道徳たるを得ば道徳の極意は、即ち偽善の極度なり

と不信の目を向け、犯罪を犯して「法の外」に立つのは、「法を潜ぐるの術」を知っているからだと批判している。これは、『貧民倶楽部』の中でお丹が、不倫を隠すために小間使お秀を殺害させた深川子爵未亡人綾子を詰問して「人殺をしても仁者といはれ、盗人をしても善人といはれ(中略)法網を潜る」のは、「外でも無い、貴女の位置は罪を隠す事が出来る(中略)法律で罰することの出来ない貴族方」だという一節に符合するものである。「罪悪は貧賤者の専有物にあらず」は、言うまでもなく、翌五月の「国民之友」に掲載された思軒「社会の罪」(118号)の先鞭をなすものである。初期の鏡花が思軒のユーゴー翻訳や「社会の罪」から少なからぬ影響を受けていることは、手塚昌行「泉鏡花と森田思軒」によって指摘されている。思軒訳『クラウド』は、「法律は唯だ便宜と姑息とより外能く何物なるぞ」と述べ、「飢寒の苦み」が貧民を罪に陥れる現状を「社会的脱疽」と名付けて、これに対する法の無力と限界を指摘した作品だが、『貧民倶楽部』の構想に際して、この作品に加えて「国民之友」の記事「罪悪は貧賤者の専有物にあらず」の影響を考えてよいのではなからうか。⁹⁾

ところでこの記事及び思軒「社会の罪」掲載以後の同誌は、翌二十五年四月の「社会の自殺」(150号)、六月の「社会的立法の時代」(157号)、十月の「社会問題の新潮」(169号)等々で「今や貧富の懸隔益々甚しく、社会的の罪悪漸やく長せんとせり」(同前)というように貧民の問題を社会的罪悪として捉えるようになり、こうした見解がこの問題に対する基本的認識として定着している。と同時に、「他日級指間の大論争起る」(同前)というようにそれまでの単なる窮民一揆ではなく、貧富の格差という社会的罪悪解消のための闘争勃発を示唆するようになる。例えば二十六年七月の酒井雄二郎「社会問題」と『近世文明』との関繋に就きて(197号)は、

「近世文明」の最後の産児たる「多数」てふ一種の新勢力は、深くその根帯を社会の最下層に発して、行々將に天下を席捲せむとする

と注意を促し、八月の公平庵主人「三大社会問題」は「慈善家ハ社会ノ下層ニ憐憫ヲ垂レ、貧富ノ軋轢ヲ和ゲ之ヲ未発ニ防クコトヲ勉メサルヘカラス(中略)一歩ヲ過ラハ社会ノ下層ニ屈伏セル不平ノ火力ハ轟然噴出シ其生命財産挙ケテ危害ニ遭ハンモ知レス」(199号)と述べている。こうした記述も、『貧民倶楽部』初出「第三十回」の

予てより人類の最下層に鬱積せし、失望不平の一大塊、頃日不思議の導火を得て、天堂の幸福を受けつゝ、ある有爵婦人と衝突なし今にも破裂爆發して、不平等の社会を紛摧し、玉石一様ならしめむと、企つる

(傍点、引用者)

という一節を想起させるに充分である。この一節は、直接的には「下層の融液は苦熱の度を加ふに随つて発作し、突然意外の処に沸騰するの奇観あるべし」「下層の噴火線」という『最暗黒之東京』に拠るとしても、上流階級への言及は『最暗黒之東京』にはない。貧民には「発頭人、巨魁たるべき人物」がないという同著の記述をヒントに、「不思議の導火」たるお丹を置いて華族階級に挑ましめる設定の背景には、「国民之友」の一連の記述の影響を考えう

るのである。これらの記事に触れ、鏡花は改めて上流富裕階級と貧民との格差拡大についての憤りを覚えると共に、認識を得ていったものとみられる。さらに、同作品との関連で見のがせないのは二十六年九月以後「国民之友」誌上を飾った相馬事件関係の記事である。九月には「我が華族の醜態未だ此の如く甚しきに到らざるが如し」と述べた「華族、現在及び未来」(203号)、「華族なるものは、遂に一個の社会問題となり来れり」としてその墮落を指摘した「社会上の新問題」(同前)をはじめとして、十月の「社会の良心」(206号)、十一月の「御家騒動」(207号)、公平庵主人「華族二望ム」(208号)等がいずれも華族の腐敗を糾弾しているのである。『貧民倶楽部』に華族階級の頹廢が描かれたのは、「国民之友」その他の世論を取り入れたためであることは、ほぼ疑いない。なお、「華族、現在及び未来」は、華族の最も適当な職業として「名誉の報酬」を主とする「慈善事業」あげているが、鏡花は、華族階級自体を否認する矯激な見地に立って、華族の貴婦人と貧民との接点である慈善をきっかけとして作品を展開させたといえよう。又、十二月の同誌「個人の名誉と新聞紙」(210号)は、十一月二十九日付「時事新報」の「人間の名誉と言論の自由」を引きながら、

一個人の名誉に関する事柄を遠慮なく記載して只管世間好奇の人心に投ぜんとするは当今新聞紙の弊習なり

というように、相馬事件を契機とした新聞報道に個人の私行の暴露を主眼とする傾向の生じたことを問題としている。これは、上流階級の暴露記事をセンセーショナルに掲載した黒石涙香の「万朝報」を念頭に置いたものだが、こうした新聞のあり方が『貧民倶楽部』に取り入れられていることは明らかで、「万朝報」と同じ京橋にある「毎夕新聞」の探訪員でもあるお丹が慈善会に赴く在原貞子の無慈悲を雑報に掲げて恥辱を与え、深川綾子に「何物か我々社会の挙動を探つて世に暴露しよう」と企てるものがある」と言わせるだけでなく、結末では頹廢した生活の結果「寡婦」の身で妊娠した「交際社会のクイン」綾子の醜聞を実名で新聞に暴露するとして責め、狂気に至らしめる。

このように、「国民之友」の記事をヒントに、鏡花は逆に新聞のもつ暴露という武器を積極的に作品に生かしたものとみられる。

以上のように、鏡花はこの作品執筆に際し、『最暗黒之東京』だけでなく、「国民之友」等を中心とする社会的な問題に関する世論の動向を巧みに作品世界に取り入れて転成したと考えられるのである。

4 『貧民倶楽部』の試み

前章までにみたように、『貧民倶楽部』が『最暗黒之東京』刊行後間もない時期に執筆された背景には、それ以前に「国民之友」等によって触発されていた婦人慈善会の欺瞞性・華族階級の腐敗・貧民問題の深刻化・貧富の階級対立と貧民蜂起の可能性等に対する鏡花独自の問題意識を先行させていたとみられる。そうした鏡花が、『最暗黒之東京』を直接的な素材に選んだ理由としては、鏡花自身上京して紅葉に入門するまでの一年間、貧窮のうちに東京を彷徨した生活体験からの共感が作用しているであろう¹⁰⁾。慈善に対する疑念は、鏡花にとつては貧民救済によって名誉を得たと捉えられていたであろう金沢の慈善家、小野太三郎に関する幼時からの見聞からすでに導き出されていたと考えられる¹¹⁾。又、社会の変遷が人間を犠牲として行われるとした森田思軒の「社会の罪」は、上述の『クラウド』の貧民観と共に鏡花に影響して、貧困を社会的視野から再認識させていたものとみられ、『貧民倶楽部』と同時期の執筆と考えられる『怪語』(『太陽』明30・7)にも、飢え凍える乞食の少年を描いて「社会は全く残酷なるか」という一節を指摘できる。松原岩五郎は、「社会の罪」が「国民之友」に掲載された直後に「国民新聞」(明24・5・16付)に「批評——社会の罪」を寄せて、「其観察は(中略)『クラウド』と伯仲」するとし、「今日まで思軒先生に依て導

かれたる開発されたる、日本文学の第一標本と為さんと欲するものなり」と絶賛している。『最暗黒之東京』の初出である「芝浦の朝烟」でも、貧窟の住民は「新旧社会の変遷に心着かず（中略）唯我独尊を立てしもの」（同前、明25・11・16）で、いわば「文明社会」の「無用者」であると規定しており、思軒の影響が認められる。鏡花も又、そのような社会の犠牲者としての貧民を『最暗黒之東京』に見出し、鮫ヶ橋の住人に「越中、越後、加賀、越前等多くは北陸道地方」出身者が多いという記述もあって、同書の章題を借りて『貧民倶楽部』の直接的な素材としたものと推測される。⁽¹²⁾ なお『貧民倶楽部』は、同書九章にあるが、その直前、「(八)貧民と食物」末尾には、残飯が貧民の人命を救う現実を紹介して「店の主人」を「小さき慈善家」と呼び、世上の慈善を否定する一節があり、本作構想の原拠となった可能性がある（資料14）。

『貧民倶楽部』以前に婦人慈善会と併せて貧民窟を描いた作品としては、さきに触れた須藤南翠『緑簑談』がある。「貧富の懸隔の著明なるは独り地方と中央首府とのみにあらず、齊しく帝都みやこのうちにして少しく市区を遠ざかれば勿ち貧民群をなし」として、下谷山崎町及び万年町の惨憺たる実態と鹿鳴館の婦人慈善会の華やかさの一端を描いてはいるが、両者を対照的に描いてはいない上に、中心的な話題は別の所にある。思軒訳のユーゴー作品から影響を受けた原抱一庵『闇中政治家』（春陽堂、明24・6）も婦人慈善会に言及するが、「俠拳」と記すにとどまり、この作品のように上からの慈善会を悪（名譽欲）と裁断し、貧民を上流階級と対立させて戦いを挑み、その欺瞞を暴くという構図を持った作品は、同時代にはない。芥川龍之介は、お丹に率いられた貧民が結束して慈善華族富豪の「自己弁護の機会」を退ける点に、「大正何年かのプロレタリア」に共通する貧民の姿さえ看取している。⁽¹³⁾

ところで、右に指摘してきた貧民が華族に挑む構図は、貴婦人からすれば本来救養の対象であるべき貧民をなおざりにして慈善会を催し、貧民の働きかけによって真に貧民に目を向けた時実は彼らが敵対していることに気づく構造となっている。婦人慈善会と宗福寺での施行という二つの慈善のモチーフが、その契機となっていることはいうまでもない。こうした反復は、冒頭の在原夫人の馬車前における層屋の昏倒と旅行帰りの深川夫人の車前におけるお丹のそれ、鹿鳴館と駿河台の隠居邸への貧困集団の闖入、配下を従えたお丹の隠居と深川夫人への詰問というように、作品展開上重要な位相でみられ、この作品の特徴の一つとなっている。ここに、鏡花独特の様式の整合と均衡という美的構成に対する配慮を伺うことができる。以上のモチーフの反復のなかで、お丹は貴婦人社会の中心人物である駿河台の隠居を自害に、同じく深川綾子を狂気に追い込んでゆくのである。お秀の祖母の遺骸を松の木に吊すなど、手段を選ばないほど強烈なお丹の追及の根底にあるのは、娘を「野師」に売った鉄蔵を改心させる場面に明示されているように、〈至純の情〉とみることができる。お丹の追及をうける貴婦人は、すでに述べたように「人殺をしても仁者といはれ」て「罪を隠す事が出来る」のであり、「法律で罰することの出来ない貴族方」、つまり、世俗の掟である法律で罰しえない者とされている。とすれば、貴婦人を裁きうるのは世俗を超えた倫理の他はない。愛犬「じゃむこう」を伴って自在無礙な活動をするお丹は、慈善会場で「半身」を晒す作品の前半部分から超俗の倫理のもとに行動しているといえよう。換言すれば、お丹には世俗の倫理に捉われない、鏡花の美意識に基づいた〈至純の情〉を称揚し、情の不純・掩蔽を弾劾する「詩的正義」があるのである。⁽¹⁴⁾

綾子を狂気に至らせた作品の結末で、下層社会から「噴火」する熔岩の色の如きお丹の詩的正義は、配下の「酷いぢや無えか。」という不審をよそに「なに未だ、彼様な目に逢はせるのが二三人あるよ。」と「自若として」答えるほどの熾烈さが認められるのであるが、上述のように、石川近代文学館蔵の草稿では、綾子を裁くお丹は、洋行を勧めて

何なら露西亞へでもお出なすつて虚無党の動静でも観察なさいな。十年も経つて御帰国になりますまで、私が

生命さへごさんしたら、見事不平等の社会を毀して名利心といふもの、無いようにして置きませう。

と述べている。如上の詩的正義はもとより、ここには「名利心」を生む「不平等の社会」に対する鋭い批判と不逞転の変革への情熱が、充溢している。さらに同草稿の末尾では、すでに指摘したように、人肉・獸血を盛った皿や蓋を前に「人間□(界)の劣等動物」であり、「道德孔法義理人情の何たるを解せざる四大魔王の眷属」たる二十三人の無法者たちが、鮫ヶ橋の酒場で「殺生」を談ずる設定になっている。これこそ『貧民倶楽部』という表題にふさわしい、貧民の特異な社交楽部といえよう。そして、そこからは「火山鳴動爆裂の兆」である「一団の雲」が立ち上り、「栄花に驕れる」貴婦人紳士は「枕を高くして眠るべからず」と記されている。上述のように、草稿段階では「貧民倶楽部」の誕生までを描くところに主意があつたのであり、貧民集団による上流階級への逆襲、社会の不平等打破が、まさに本格的に実行されようとする予兆が、はっきりと描かれていたのである。定稿でこの部分が削除されたのは、栄花に驕る貴婦人を一応は綾子に収斂させたように、その対極にお丹を置くに止めて作品の美的構成を保つ意図が働いたためと推測されるが、いずれの結末にもその続篇を予定させる余響が色濃く残されている。さて、この草稿の余白には、貧民の倶楽部での会話が「殺生、忘語、偷盜、邪淫、四悪を甲論乙談し、怒号し、悲泣し哄笑す」と描かれているが、このような無法者集団が縦横無尽に活躍するのは、約十年後に発表された『風流線』『続風流線』(『国民新聞』明36・10・24〜37・3・12及び明37・5・29〜10・5)においてである。「百が九十九人までは、どれも無宿もの同然で、殺人に放火をかねた、夜叉羅刹」という北陸線の鉄道工夫たちが、その系譜をひく者たちであることは紛れもない。又、慈善家巨山五太夫の背徳を暴露する点でも、『風流線』は『貧民倶楽部』と共通する。『貧民倶楽部』は、鏡花文学の最も豊かな収穫の一つである最大長篇『風流線』の明らかな源流をなす作品であり、ほとんどの作品の時代設定を当代に捉えた鏡花の、現実社会に対する鮮やかな視座を獲得した作品といえるのでは

なかるうか。特にこの作品を通して形成された社会矛盾に対する積極的な姿勢が、『夜行巡查』(『文芸倶楽部』明28・4)その他の観念小説を生む母胎となったといっても過言ではなく、その意味でも『貧民倶楽部』は、注目に値する作品である。

なお、この作品は『湖のほとり』(『新小説』明32・4)、『風流線』を含めて、いずれも慈善に取材した(慈善の時代の文学)といえる。鏡花以外にも、慈善の時代の文学は、『緑簑談』をはじめとして、山田美妙『ふくさづつみ』(『以良都女』明20・10〜21・2)、『長久菖蒲草』(『都の花』明22・5)、前引の宮崎三味『慈善』、毛布野女史『こころづくし』(『以良都女』明22・10〜23・2)、幸田露伴『好因果』(『心のかがみ』明23・11〜24・1)、樋口一葉『うもれ木』(『都の花』明25・11〜12)、川上眉山『うらおもて』(『国民之友』明28・8)等があり、慈善を賛美し、善人の属性として肯定する作品から悪人の偽装としての慈善を描く作品への移行を指摘することができる。そうしたなかで、鏡花文学にあつてはこのモチーフが他作家にない尖鋭さを持った一つの系譜をなしており、白鳥の言ではないが「諸篇にほのめく」のである。

注

- (1) 明治二十七年一月三十日付書簡に、「貧民倶楽部書肆出版取急居候」とある。『鏡花全集』月報14(岩波書店、昭49・12)参照。
- (2) 「泉鏡花・差別と禁忌の空間」(『日本文学』昭59・1)。「最暗黒の東京」は、以下の「国民新聞」連載を基にしている。二十三階堂「芝浦の朝烟」(明25・11・13〜12・14)、「最暗黒の東京」(明25・12・10〜26・1・14)、「東京雑俎」(明26・3・1〜4・23)、「二市談東京と大阪」(明26・5・7)、「乾坤一布衣」探訪実記 東京の最下層、「探訪実記 夜の東京」(明26・7・22〜8・5)、「東京最暗黒の生活」(明26・8・9〜23)
- (3) 上述のように、この部分は後に「慈善会」と改題して「新著月刊」に掲載された。「六六館」は、「西洋館」と改められている。
- (4) 「婦人慈善会第一報告書」(『女学新誌』4〜14号、明17・8〜18・1)参照。

「如御、鏡花はこま、にして置ませうじや無い、わん／＼泣えられるとお前膝が薄いから戸外へ知れやす可、下司じや無いの、組板の上へ乗るじつと居らあな自隠も取つて上げ(知)や」

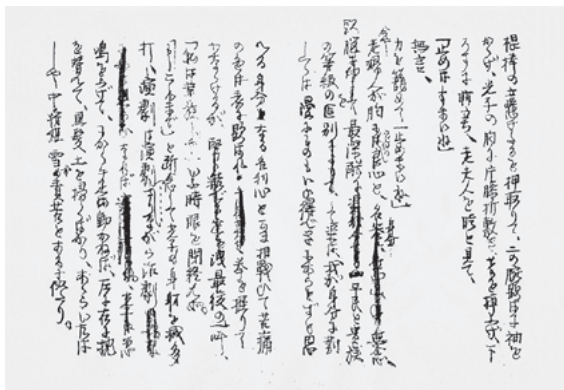
斯くて男女の、戸を閉切て、外より、鎖を、あせし音のみ、胸に、あへぬ、後は、それより、寂して、天地に、声無し、

眼は、開たれども、物を、弁せず、暗闇、さへ、昏も、盲／＼に、似たり、先刻に、兎徒の、手籠に、あひしは、黄／＼、昏なり、きさは、早夜、ならむ、此處は、方向、之、方角を、知らず、坐る、處は、天か、地か、或は、蔵か、密か、老夫人、一度、はた、／＼、闇より、暗きに、入る、が、如く、茫然、として、自失、せり、されども、心、案、にして、氣、韻、高き、性、なれば、切、なく、声、を立て、て、顛倒、し、を、亂、し、／＼、給、へり、

海、や、既に、仏、果、を得、て、勇、猛、精、進、の、行、堅、固、に、信、心、不、退、転、の、行、者、なれば、爾、き、黒、暗、闇、幽、冥、に、裡、に、処、して



【資料1】



【資料2】

棍棒の立懸けたるを、押取りて、二の腕を、頭は、に、袖、か、け、光子の、胸に、片、膝、折、敷、き、□を、掉、上、げ、下、す、に、す、に、ろ、す、に、前、立、ち、老、夫、人、を、睨、と、見、て、

「止めはすまいね」

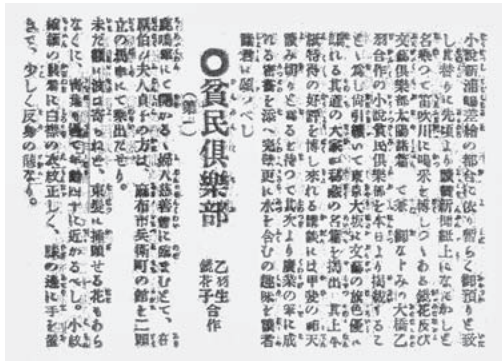
無言、

力を、離、ち、て「止めまいね」

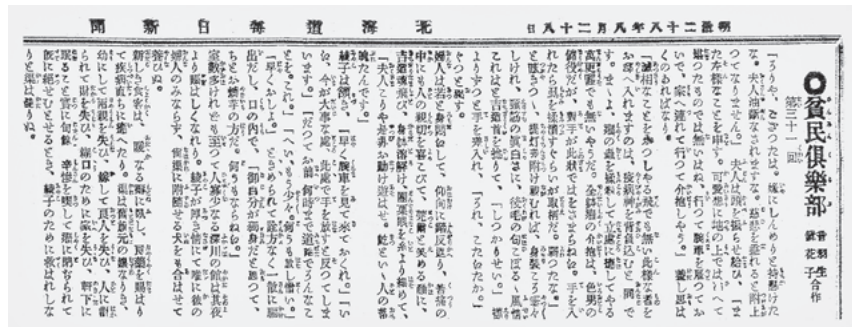
今や、老、婦、人、が、胸、は、良、心、と、(名、聲、)位、置、無、念、頭、腦、に、印、し、て、身、分、最、深、酷、に、裏、が、分、て、る、平、民、と、貴、族、の、等、級、の、区、別、に、よ、り、て、を、し、て、果、は、我、が、身、分、に、対、し、は、／＼、し、て、は、な、い、も、い、ひ、得、べ、き、と、あ、ら、ず、と、思、へ、る、身、分、な、名、利、心、と、互、に、相、戦、ひ、て、苦、痛、の、色、は、表、に、頭、は、推、考、振、り、て、わ、な、／＼、け、る、が、堅、結、べ、る、前、を、池、最、後、の「吽」は、華、族、じ、や、い、ふ、時、間、を、閉、終、ん、ぬ、

「もう、こ、桂、で、」断、念、し、て、光、子、の、身、体、を、裁、多、打、演、劇、は、演、劇、さ、り、な、が、ら、濡、脚、の、ま、な、／＼、に、は、□、ら、む、な、れ、ば、実、に、痛、く、し、光、子、は、悲、鳴、を、上、げ、て、も、が、く、手、足、の、動、か、ね、ば、左、に、右、に、枕、を、替、へ、て、黒、髮、土、を、擲、へ、ば、か、り、あ、ら、い、た、は、し、や、中、將、姫、雪、が、喜、容、と、あ、る、に、似、た、り、

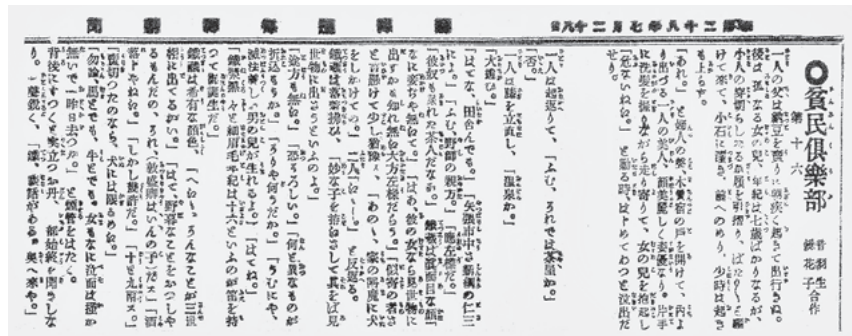
- (5) 明治文学全集『明治政治小説集(二)』(筑摩書房、明41・10)による。
- (6) 『日本社会事業史大年表』(刀江書院、昭11・3)等参照。なお、金沢婦人慈善会は、金沢在勤の陸軍高等官夫人たちが月一回軍医から繻帯の使用法等の講習を受けたもので、バザーを開いた記録はない(『女学雑誌』明20・8及び『市史年表 金沢の百年 明治編』明21・4参照。金沢市刊、昭40・6)。
- (7) 貴婦人の手製の品の多かったのは第一回のみで、明治二十一年には「お手細工の毛糸編物類は余程少なく相成り」(『読売新聞』明21・12・7付)というありさまで、現金を寄せることが多かった。
- (8) 「泉鏡花と森田思軒」(『国文学研究』昭38・9)。
- (9) 『思軒全集』巻一(金尾文淵堂、明40・5)による。以下同じ。
- (10) 作中、宗福寺の場面で「麻布の今井町」の貧民が描かれているが、明治二十三年末鏡花は麻布今井町の寺に仮住まいしており、これはその体験をふまえた記述と考えられる。
- (11) 本書第二章「風流線」の一考察」参照。
- (12) 「貧民倶楽部」という「最暗黒之東京」の章題は、明治二十五年四、五月の「国民之友」(152-153号)に連載された「倫敦窮民救済事業現状の一斑」に紹介されているイーストエンドの貧民窟に設けられた様々な貧民の「社交倶楽部」、「労役者倶楽部」に基づいていると考えられる。『最暗黒の東京』では、前書きにも「貧民倶楽部は誰に由りて組織されしか」とある。
- (13) 芥川龍之介「鏡花全集に就いて」(『東京日日新聞』大14・5・6)参照。
- (14) 同右。及び本書「冠彌左衛門」考」参照。



【資料5】



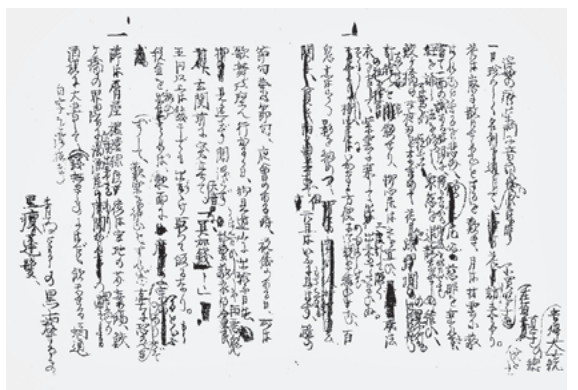
【資料6】



【資料7】



【資料3】



【資料4】

今蘭開にされても日本には居られぬと思つてね、私のがほんの寸志、此を進やうから、外國に進なさい、(其れまでは)しばらく記事見合はせて、貴女が袖を出なすつた時、電報を打つて下さると同時に、紙上を通じて同胞に分ちます。定めてし諒と風説をまじらして、一先く機関車の首に粉を貴女の耳には入りますと早い手廻し、後子に肯かす。吾人が私を罵るに善の下手で、定かたにさぐる。お丹毒を思つてそれは堪忍して、清き御眼に涙ありお丹毒として、不可不せん。私は毎分新聞社の探訪で、貴女の事を一通信するのは、大要な価値があります。貴女の秘密を授けたい人に一人、私に授けたいと願つて、お丹毒から断つてお丹毒へ切つて居れば、また私からお丹毒を差し上げます。何なら露西亜へでもお丹毒をすつて、無党の勤奮をなさる可い、いな。十年も経つて御蘭國になりすまで、私が生かす(よきん)したら、みこと平等社会、不平等の社会を打倒して置

一口珍らしく名利を通して浮園(柴門)を訪れる浮世の花小濱照子と在原夫人(夏子)貴婦大統の辭として訪れられ、花は風に散られんとするを歎き、月は雲に蔽われむするを悲み、尼公願はば、遊眼を垂れよ。嘗て一面の識ある好男子、惺りながら「足が勞む。経を誦し、衆怨を退散せしめ給ひ、殿橋の上の親を、下は後文をなだめ、説いて花月経遊山(さくらげ)の遊行を、なだめ給へし願ひ、柳心尼は之を責む、三度礼して願く法衣を召しよとの袖を縁合せ業に乗して出来ししたまひぬ。そのそもそれより柳心尼はいかゝる方便にて説き給ひけむのおはけむ、百鬼はよく影を納めて、そ々の貴婦人が館の女・間に、貧民向々相むむで、元旦はいふに及ばずさらなり、雖の節句菊の節句夜会のある時、祝儀のある日、或は歌舞夜座へ行か、日、物買遊山を出給ふ日、見過す開渡らず(亂髪弊衣の貧民、人々)はんたひじやと問答、又開前に突ちて、大音に「冥冥に！」五人以上は燈子でも出だすたけ取つて眠る。もし税金を出されば(す)て、飲樂を得むとすれば、觀面に、麗土の直ちに悲なき(あり)こととあり、酒旗に大書して、白字を染抜き、錢無きものはたゞ飲ませる地獄(左下余白)青面なるもの黒せするもの(黒梅蓬髪)

りまへ人」と早い手廻
綾子は背かず、「否、人が私を罵る聲は苦の下まで
定かに聞こはる。私の身軀とお前と違ふから生肌
を刺して火で焚くとも、逆に釣って干殺すともす
べし斬つて肉を喰ふとも、血を絞つて吸るとも
お前の手ご出来るだけのこととして、何うでもし
て埋忍せよ」と清き御眼の時涙あり
お丹は冷然として、「不可ません。私は探訪員の義
務として貴女のことを通借するのは、大變な價值
がある。此度の新聞材料は人の生命を買つた
くらゐ、何うしても堪忍しませぬ。唯私の謂ふこ
とを聞いて海外へ去らるしやい、何なら

お丹は綾子を睨りて、「よくおいひなすつた。其の
言葉があつたら差上げやうと、此を用意して置
きました。御覽なさい。海外旅行券です。交際社会の
女王とまで謂はるゝ貴女、今醜聞を新聞に出され
ては、とても日本にお出なまるとは出来ないと
思つて、私か他人の寸志比を遣げますから外圍へ
お逃げなさい。而すは暫時記事を猶豫してあげ
ませう。其代其代が横濱を出帆する時、電報を懸
けて下さい。其と同時に紙上へ載せて同胞に分ち
ます。東京市中は破れるばかり幕々と風説をしませ
う。しかしまあ荒波の音に紛れて貴女の耳には入

【資料10】

鹿鳴館にて開かる、婦人慈善會に臨まむとして、在
原伯の夫人貞子の方は、麻布市兵衛町の館を二頭
立の馬車にて乗出させり。
未だ鐘に波は寄らぬと、東髪に挿頭せる花もあら
なく、青葉も過て年齢四十に近かるべし。小紋
縮緬の襲着に白襟の衣紋正しく、膝の邊に手を置
きて、少しく反身の態なり。
對の袂袋の袖を連ねて侍せ二人陪乘し、御者臺に
は燕尾服に煙突帽を戴きたる蓄聲の漢あり。曇子
の御者の場々をらして主人公の威權想ふべし。淺

貞生 鏡花子 合作

高橋 貞生
大信 金海 評
泉鏡花 内

【資料8】

てお出なすつて、其の動靜でも觀察を
な、其内御館國になりまして私が生命を、こぞ
んしたる、
綾子は眩しく、「其ては宛然日本から放逐される
やうなものだ。」先づさうですわね」と冷笑一番、
いやく、何うしても外國へ行く氣は無い、ては斯
うしておくれ。今此處で、お前の眼の前で、自
！自殺をする。身軀は死てしまふから、唯名譽だ
け助けたくれよ。」と肺肝を絞る熱淚滴然以て人類
の石心を和ぐべく鐵腸と溶解すべし。
お丹の心に思ふのなる、何時でもなさいまし、毒藥
と飲むの？咽喉を突くの、笛を掻く時後へ戻る
と、もう手が利かなくなつて死損いたす、北背後か
死なれる分量を、御存しなくは見破つて私の堂か
ら飲ましてあげませうか。これは免言なり。
綾子は唇を色すり、「其てはモルヒネ……お
前眼が飲まして飲ましてくれるか。」「お安御用です
何時でも。」而して彼の件は新聞へは出さない
「否、其はなりませぬ。貴女が自殺をなさればまた
に、毒殺させます。」

【資料11】

貞子の方は最不興氣に其儘歸らせ給ひける。綾子
は再び出来らず、膳を進らせむと入行きたる下婢
のお松を我めて固く人の出入を禁じぬ。其後宜味
沈靜にて些々たる物も聞こぬ事あり、時あり
ては疊を蹴立て、瞞がし響の發る折あり、突然
さいさいと悲鳴を擡げてさも悔しげに泣きも
聞こゆ。
「あ、申譯の無い事だ、御主人は女性なり私が一
家を覆りながら、稀に悪魔をお抱へあると、來め
るが不念更だ、
綾子は「あ、これ、と血を絞る聲を立て
られしが、御坐立ちて驅出せし、一室の戸を障
より閉ぢて自から其身を控禁せり。
「綾子、こりや何處のお婆様か。」
綾子は堪らず、「あれこれ」と血を絞る聲を立て
より閉ぢて自から其身を控禁せり。

【資料9】

慈恵醫院慈善會 来る十一、十二、十三の三日間
午前十時より午後五時迄鹿鳴館にて催はす同會各
區受持は左の如く決定せり

第一區 毛利翁夫人、川村翁夫人、杉野夫人
第二區 土方翁夫人、仁壽子翁夫人、丸正三位夫人
第三區 井上翁夫人、田中翁夫人、花房三位夫人
第四區 伊藤翁夫人、上村翁夫人、高島子翁夫人
第五區 戸田翁夫人、堀本翁夫人、三好子翁夫人
第六區 松方翁夫人、鍋島翁夫人、一條翁夫人
樋田翁夫人、藤田翁夫人

○同會の出品 又同會の出品はいよいよ本日よ
り陳列する由なるが本年同會の買入物品は六百圓
内外にして他は悉く貴婦人方より寄附せられたる
ものにて代位の如きも例年と比較して三四割位は
廉價ならんといふ

【資料12】
(明治25年11月9日付「東京日日新聞」)

今回の慈善會
東京慈恵醫院婦人慈善會を例の如く明十一日より
三日間鹿鳴館に於いて開設せらるゝことは既に前
號の紙上に報し置きたる如くなるが尙ほ今回慈善
會の方針の一二を摘舉すれば第一、物品を精選し
殊に其價額を廉にす第二、購買する否とは屬
り其人の意に任じ荷初にも強ひ買がましきことな
し第三、賣店茶店とも其待遇を極て丁寧にする等
り尤も此れ等のごときは毎會委員に於いて疎議を盡
すことなるが今回は特に數次の委員會を開きて精
密に評議を蒙られたる趣なれば定めて一層の好況
なるべしと思はる

【資料13】
(明治25年11月10日付「東京日日新聞」)

人々は彼等が三日の假使から其感に如何なる慈恵の美言が湧きしかを疑ふべく聞きし。蓋
し其の儀を名づけて予が其れを「マントラ」と呼びし時に其の主人が如何に其儀なる珍
であるかを聞かせし、而して其れが「一經五回に買られし」味物の精が猶多く用者有ら
し。尙たる感が其の如くはらりし。

「如何に甚だ感に満ちて居る事でありしよ、予は予が心に於て感に満ちる事の其れ
が能かに人々を感動の一つであるべく予をして予を慈恵家と思わせし。然るに是れが將
して是れたる儀、尙たる味物、用ち茶の食物及び、然る食物を以て感に満ちるべく不
爲を犯すの餘儀なき場合に陥らしめたり。若しも故等が其れに向つて大なる眼を開く
らば、彼の貧民救済を以て音楽を唱へて音楽を唱へる處の人、亦は其れを目として感に満ちる所
の貧民人々等の常に道徳を語り又又慈善を爲す事の其れが必ずしも道徳、慈善であらぬか
を見るであらう。

(九)貧民俱樂部

【資料14】

37

文學者と交はれば文學者を聞き、政治家と交はれば政治家を聞き、同じく貧民と交はれば
亦同じくものは貧民なり。人は各々其れに其社會に於ての義務を聞き合ふものなり、語り合
はざれば其れかざるものなり。世に如何なる文學俱樂部、何れ政治俱樂部、又は何れ社會所、何
れ貧民俱樂部なる諸所に其社會の人々の名を以て、失敗等は勿論其外寄附金一切の發售も新
聞編輯理事が報し來して報するが如く、貧民の社會所於ても亦同じく貧民に關す
る一切の事は日毎に滿ちる如く流れて來て後等の社會に於ける新聞紙の第三欄に於て
すものなり。予が居る所の貧民俱樂部は常々其の入會の社會俱樂部とも言ふべきものにして下
男の俱樂部ありしは即ち其の寄附金なりしなり。

如何に貧民俱樂部が、社會の多を以て困はしよ。彼等の困はしよは一箇の團體、二箇の俱、
或は小團體、或は俱樂部、を手にし、携へて、俱樂部の處に訪み、或は應接、或は立な
らば其の時間を待たざる間に於て各々其社會の義務を以て其の義務を盡すに
ありき。

如何に彼等が貧民の材料に當り居るよ、試みに予をして其の二三を記せしめよ。

明治二十七年の鏡花・忍月・悠々

明治二十七年一月、泉鏡花は、父清次の死に際して帰郷し、九月初めに上京するまで、約八カ月間金沢に滞在す
る。鏡花の師尾崎紅葉は、同年一月三十日付の書簡で、

此後の孝行は名を成し家を興し父祖を輝かすに如くはあるまじく千僧万部の供養も之に過ぎず候へば随分勉強
なさるべく及ばずながら助力可致候
(岩波書店版全集「月報」14)

と述べて激励した。紅葉は、これに続けて、「貧民俱樂部書肆出版取急居候」として同作の「脱稿」を急ぐこと、「春
夏秋冬の原稿一章」(三十枚以内)を「試み」ることを勧め、さらに「其内に新聞世話可申」とも記している。『貧民
俱樂部』は、前年十二月以来執筆中の作品で、二十七年二・三月頃と推定される鏡花宛書簡に「春松堂の貧民くら
ぶはなか／＼刪潤むづかしく、そのまゝに相成をり」とあることから、二、三月ごろには脱稿し、紅葉の許に送付
されていたものと考えられている。また、同年三月十七日付書簡では『亀の細工』刪正の上博文館春夏秋冬の原
稿にいたし申候」とあり、紅葉の勧めにしたがって「三十枚以内」の原稿(聲の一心)を三月初めまでに書き上げて
いたことがわかる。

このように、金沢に帰った鏡花は一月三十日付書簡における紅葉の勧めを忠実に受け止め実行していた。このこ

とは、同書簡にあったもう一つの添え書きにいう「其内に新聞世話可申」についても、同様である。「新聞」とは、新聞小説に他ならない。いうまでもなく紅葉は、明治二十二年十二月に「読売新聞」に入社し、多くの作品を同紙に発表した。すなわち、作品の多くは新聞小説であった。その題材も、『三人妻』（読売新聞）明25・3・6～5・11・7・5～11・4）について『読売』の雑報からヒントを得たのです。（中略）大体は雑報から思ひついて趣向を立てたのです」（作家苦心談、「新著月刊」明30・6）というように、新聞雑報から得たものが少なくない。これは、坪内逍遙「新聞紙の小説」（読売新聞）明23・1・18～19）にいう「小説にも当世の事情を報道するの意を含ませ、成るべく当世を本尊とし現在の人情風俗又は傾き等を示すべし（中略）娯ましむると同時に当世の有様を報道するから然らざれば多少教へ導く心ありたし」を承けたものであった（土佐亨「紅葉初期小説の方法」参照。「日本文学」昭48・5）。こうした紅葉の考へ方は、明治三十二年二月十三日付同紙「紅葉氏の新聞小説論」に「新しい当世の出来事を持つて来て、それを題にして筋を仕組み、半分は新聞、半分は小説といふやうにしたならば、種の尽きる気遣もなく、至極面白からう」とあることから、明治二十七年当時も変化していなかったとみてよい。明治二十四年十月以来尾崎家の玄関番として、日夜紅葉の指導を受けていた鏡花が、新聞小説の題材を地元金沢で発行されている新聞に求めるのは、当然のことであった。同年三月以降に執筆された『大和心』（幼年雑誌）明27・8～12・『鐘声夜半録』（四の緒）春陽堂、明28・7・『予備兵』（読売新聞）明27・10・1～24）については、「北國新聞」に掲載された次の雑報がその素材となったことが、すでに指摘されている。

『大和心』——「洋人教師の悪意不敬事件」（明27・5・16、17付）

『鐘声夜半録』——「金沢に於ける攘夷的事件」「醜体なる注文品」（明27・3・19付）、「醜体なる注文に就きて」（同、3・20付）、「百間堀の身投げ」（同4・16付）、「身を投げた別嬪の素性」（同・4・18付）

『予備兵』——「女子従軍を願ふ」（明27・7・5付）、「山本直子」（明27・7・8付）

このように、鏡花が、明治二十七年の金沢滞在中に「北國新聞」を読んでいたことは確実である。しかし、雑報の悪意不敬事件」にはない。同年四月一日付の論説「朝日に匂ふ山桜花」（夢裡生）の「記せよ世人朝日に匂ふ山桜花は是れ即ち我国粹なることを將た大和心を失ふの時は是れ即ち我国を亡すの時なることを」によっているものと考えられるし、「おぼけずきのいはれ少々と処女作」（新潮）明40・5）には、

其年即ち二十七年、田舎で窮してゐた頃、ふと郷里の新聞を見た。勿論金を出して新聞を購読するやうな余裕はない時代であるから、新聞社の前に立つて、新聞を読んで居ると、それに「冠彌左衛門」といふ小説が載つて居る。これは僕の書いたもの、うちで、始めて活版になつたものである。（中略）それが絵ごとそつくり田舎の北國新聞に出て居る。

とある。これは、当時「北陸新報」に改題の上掲載された『義民実伝 仏師表徳』をさす。このように、雑報はもとより論説や続きものすなわち新聞小説にも明治二十七年の鏡花は目を向けていたのであり、雑報以外のものについても鏡花文学との関わりを改めて検証する必要があることがわかる。

明治二十七年当時金沢で刊行されていた新聞は、「北國新聞」・「北陸新報」・「金沢新聞」であるが、「北國新聞」以外の残存資料は極めて限られる。石川県立図書館所蔵資料についてみれば、「北陸新報」は、六月九日と九月十三日の両日、「金沢新聞」は、二月初めの三日間（2・1～3）しか残っていない。「北國新聞」の場合は、一月、八月が欠号であるが、その他の六カ月間のマイクロフィルムは残っている。したがってこの時期の新聞の検証は、「北國新聞」を中心とせざるを得ない。

ところで、さきに引用した同年四月一日付の論説「朝日に匂ふ山桜花」の筆者夢裡生とは、前年十一月以来「北國新聞」編集顧問として着任していた石橋忍月の別号である。⁴ 忍月は、明治二十六年十一月八日付同紙に「初めて読者諸子に見ゆ」を発表したあと、社説・論説はもとより、小説や随筆さらには雑記に至るまで様々な記事を執筆している。また、後述するように忍月に見いだされた桐生悠々（当時第四高等学校の学生。鏡花と同じ明治六年生まれ）も、明治二十七年二月以降、評論や論説、小説その他を掲載している。⁵ つまり、鏡花が目をつけていた「北國新聞」の紙面には、忍月や悠々といった文学者や文学志望の若者の記事が掲載されていたのである。

小稿は、以上をふまえて鏡花が金沢に滞在した明治二十七年を中心に、忍月と悠々との関わりを「北國新聞」の小説や評論・論説・随筆・雑記その他を通じて検証し、鏡花文学との接点を見いだそうとするものである。

1 忍月と悠々

悠々は、「自伝」で忍月との交流の始まりを次のように回想している。⁶

「紅花染」という一篇の小説を氏の許に郵送し、新聞紙上に掲載することを頼んだ。すると、氏は私に会って見たいといふ手紙をよこしたので、私は喜んで、氏の滞在しつゝある旅館に氏を訪問したが、間もなく、この短篇小説が新聞紙上に掲載された。（資料一）

このように、忍月と悠々との交流は、悠々が小説の掲載を忍月に依頼したことから始まった。このことは、忍月『仲左』に題す（『北國新聞』明27・5・2）によっても確かめられる。忍月によれば、『紅花染』（同前、明27・3・25・4・21）掲載を依頼する際悠々の添えた「書」には、「拙作素より万の欠点あるべし然れども感情主人公を支配する

が如き失策はあらず先生若し一点の同感を起さば希くば之を採れよ」とあったという。こうした言説は、悠々が忍月の文学論を認識し、意識していたことを示す。忍月が「北國新聞」に載せた最初の文学論は、明治二十六年十一月十二日から二十二日まで八回にわたって連載された「戯曲論」だが、小説についての言及はない。小説に対する見解は、同年十二月八日付の同紙『蓮の露』序言に明らかにされている。そこで忍月は、「詩人の言未だ必ず構想感觸の由つて来る所なきはあらず」として、小説に「感念」と「意匠」が不可欠であることを述べたあと、

小説は人の感に訴ふるの哲学なり歴史の解説者なり世俗より一等進歩したる眼を以て人文の必然を發揮する者なり人生の運命を説明し宇宙の機微を發揮する者なり

と定義付けている。⁷ 悠々が忍月宛の「書」に記した「感情主人公を支配するが如き失策はあらず」といい、「一点の同感を起さば」とは、「小説は人の感に訴ふるの哲学なり」を踏まえているものと考えられる。つまり、悠々は自作においては「感情」は主人公ではなく読者に向かって働きかけており、その結果として読者に「一点の同感を起こ」しうるはずだというのである。悠々が忍月に『紅花染』の掲載を依頼したのがいつかということは、はっきりしないが、『蓮の露』序言「掲載以後のこととみられる。忍月は、「北國新聞」着任早々「初めて読者諸子に見ゆ」でその抱負を「健全の思想を以て天地人生を觀察」し「之を啓発誘導することだとし、「至誠鬱勃として内より湧けば我招かざるも彼来らん」と述べていた。悠々は、期待した通りに忍月の許を訪れ、その「誘導啓発」をうけ、「北國新聞」にしばしば寄稿することになる。管見によれば、明治二十七年二月十一日付同紙「ヴィクトル、ユーゴが戯曲に於ける意見」がその第一作で、署名は桐生愈虐である。悠々は、「観劇者」を「婦人」・「思索家」・「普通の観劇者」に分類し、それぞれが演劇に求めるものを「感情」・「性情」・「脚色」としたうえで、「戯曲の目的」を「性情及び感情と自然の大法則との衝突に於て、人間の生活を發明し（中略）所謂おもしろみなるものを感情に訴

へ、また道德の真理を精神に注入することだとする。この見解は、忍月の「戯曲は美術中、人に『同感』を与ふることの最も切なるものなり」といい、「戯曲の巧拙は亦た同感を与ふることの厚薄によりて判別するを得」としたうえで、「戯曲の目的」を「人生の運命及び自然の法則を説明すること」「外来的の想念即ち同感を高強にするに在り」とする上述の「戯曲論」に酷似している。また、忍月は、悠々「ヴィクトル、ユーゴが戯曲に於ける意見」(以下、「意見」と略記する)掲載の三日前にあたる明治二十七年二月八日付同紙「戯曲の価値」で、「戯曲の目的」を「人間行為の本性と被行為の種類とを発露して以て外来的の想念を高強にするにあり」として、「戯曲は他の美術中に同感を与ふることの最も深きものなり自然の法則を表はすことの最も著しきものなり」というように、前年十一月の「戯曲論」の主張を要約し、繰り返していた。その意図は、「叙事詩の一部分なる小説の盛にして戯曲家の興らざるを憾みし為め」であり、「今後生ずる新戯曲家の常に此目的を抱持せむことを望む」ところに起因していた。忍月の「戯曲の価値」と悠々の「意見」の相次ぐ掲載は、偶然とは考えられない。少なくとも読者には、忍月の持論に呼応するものとして捉えられたはずである。このように悠々は、忍月の文学論に「誘導啓発」され、深く感化されつつあったものとみられる。

ここで、悠々を感化した忍月の小説論を、先に言及した『蓮の露』序言』及び『仲左』に題す』によって確認しておきたい。忍月は、『蓮の露』序言』において「小説の主要なる目的物は人物にありて結構にあらず」といい、『仲左』に題す』において「『人』を描かざる可らず」として「音に結構脚色の奇構に耽りて人物の性情意思を忘れた」結構小説』を否定し、「性格小説』を高く評価している。また、先の引用文にあったように、前者で小説を「人生の運命を説明し宇宙の機微を發揮する者なり」と捉え、後者で『宇宙』を写さざるべからず『運命』を説明せざるべからず」として人物と行為の相関関係と結果を「自然の法則」に「反照」させることが重要だと考えてい

た。忍月の小説論の二点めは、「戯曲の目的」を「人生の運命及び自然の法則を説明する」にありとする「戯曲論」とほぼおなじである。このように、忍月の小説論は、戯曲論とほぼ同趣旨であるとみてよい。忍月は、こうした観点から悠々の小説『仲左』(明27・5・2)を「人物、光景共に躍如として活動す」として評価し、最初に忍月の許に寄せられた『紅花染』よりも「優ること数等」だとして読者に推奨しているのである。

一方「意見」発表後の悠々は、『北國新聞』に掲載された忍月の作品『東髪娘』(明27・6・20～7・14)と『惟任日向守』(明27・11・28～12・11)に対して、批評『東髪娘』に就きて忍月居士に望む』(明27・7・6～7)及び『惟任日向守』(明27・12・14)を寄せている。『東髪娘』は、金沢市内の唐物屋、野崎商店の次女秀子をめぐる対照的な二人の青年を描いた作品で、秀子に熱心に働きかける軽薄男子の嬌之助が芸者遊びにうつつを抜かしているのを秀子に知られて、縁談の対象から振り落とされる経緯を描く。この作品に対する悠々の批評で注目されるのは、「人物」を「点檢」して「善悪、美醜の二類が恋情の点に於て相容れざる光景を写」す着眼と趣向を評価し、作中に「活動する処の人物は各個々の性情、意志を有す」と述べて「人物の性情意思を忘」れた「結構小説」ではなく、「性格小説」であると認めたとうえで、「人誰か之れを読んで可憐なる秀子の為め豈一掬の涙を灑ぐなからむや」と記している点である。これは、善・美を体現する秀子に対する同情を、読者が喚起されるということである。このように悠々は、忍月の作品評価の基軸を受け入れるなかで、特に同情を喚起するかどうかを重視していた。この点は、『惟任日向守』を讀みて』でも同様である。『惟任日向守』は、暴虐で猜疑心の強い主君信長に御恩・奉公の篤い思いを抱きながら、「我は逆賊と言はる、とも乱臣と呼ばれる、とも心に信する所あれば露厭はず」と述べて反逆を決意する明智光秀の胸中を描いた作品である。悠々は作品掲載直前に「偶々居士が寓」を訪問した際、光秀についての忍月の「胸臆」を聞き、悠々「自らも亦同情の境遇に彷徨するの幸福を得た」が、作品に接して「居士が弁論を耳にした」

時の「同境遇に彷徨」したとして高く評価している。これを批判した骨々生に対する悠々の反論「骨々生に与へて『惟任日向守』を論ず」(明27・12・18、20)では、さらに明確に小説評価の基準について「小説が必ず具へざるべからざる処の要素とは何ぞ、(中略)曰く同情是なり」と述べて、「同情」を喚起するかどうかを問題にしているのである。これに対して忍月は、「惟任日向守」に就て(明27・12・8付。署名は、美眼子)で

同情を不必要と説く骨々生、末技たる外形(文章を重んじて小説の精神を軽んずる骨々生等の毀貶素より毫も「惟任日向守」を左右するに足らず

といい、さらに「悠々庵の声と骨々生の声を美眼子の美眼より視るときは鶯の声と蛙の声の如し」と述べて、「同情」を評価の基準に置かない骨々生を批判し、悠々を高く評価している。

このように明治二十七年の「北國新聞」紙上における悠々の批評は、明らかに忍月の文学評価の基軸のうえに立っているのである。しかし悠々は、忍月の作品であるからといって全て肯定したわけではない。前引の『東髪娘』に就きて忍月居士に望む』には、『東髪娘』の前作『臯月之助』(明27・4・6～5・12)を「類想の化物屋敷」と呼んで批判し、「骨々生に与へて『惟任日向守』を論ず」では、『惟任日向守』の前作『訥軍曹』(明27・10・25～11・19)を「同情」を喚起しないという理由で「拙の拙なるもの」と評している。おそらく、悠々が忍月との交流によって手に入れたのは、作品評価の基軸であった。どのような作品でも忌憚なく評価を下す姿勢も含めて、悠々は忍月の誘導感化を受けていたものとみてよい。そのような両者の接近を端的に示すのが、悠々「美文と歴史との限界を論ず」(署名は、悠々庵 明27・5・28)と忍月「美文と歴史との間に一線を画す」(太陽)明28・3)である。それぞれの冒頭は、悠々作が

始めて歴史を学びたる輩は、歴史上の事蹟及び其人物を尺度として、美文上に描写せられたる人物の行為、及び其性情意志を是非し、悉く之を過誤非実の墳墓中に押込めむとす、とあり、忍月作が、

始めて歴史を学びたる輩は、歴史の上に写されたる事蹟及び其人物を尺度として、美文の上に描かれたる事蹟及び其人物を非実なりとして斥け、あらゆる詩美神の写影を挙げて、悉く荒誕の墳墓中に埋葬せんとす。⁹⁾

とあることからわかるように、忍月の評論は、悠々筆の字句を多少改め、箇条書きにして整理し加筆したもので、悠々が「自伝」にいう「氏(引用者注、忍月)が東京の文壇に寄稿した論文中には、私が代筆したもの」もあつたという一例に相当するだろう。「交遊いよいよ密」であつたのみならず、悠々は忍月の代弁者のような役割を果たすに至っていたのである。

次に悠々の小説『紅花染』と『仲左』について検討したい。『紅花染』の梗概は、次の通りである。¹⁰⁾

数学者を志す学生三輪新太郎は、親友石田の従妹下枝と相思相愛となり、恋と学問との葛藤の末学問を選び上京して大学に入学する。一方新太郎との結婚を夢見る下枝は新太郎の卒業を待つが、親の勧めを断りきれず官吏と結婚する。それを知った新太郎は、衝撃をうけ講義にも出ず数学研究に没頭するうちに落第し、除籍処分となる。母の求めに応じて金沢に帰った新太郎は、高等中学の助教員となる。進藤の計らいで再会した新太郎と下枝は、酒の勢いもあつて一夜を過ごす。翌々日、「良心」に責め苛まれていた新太郎は、前々日の出来事が「醜行」として新聞に暴露されたことを知り、絶望する。

タイトルの『紅花染』は、新太郎と下枝の恋の情熱を意味するものと思われる。しかし、二人の恋の情熱は一貫性を欠いている。この作品が、忍月からさほどの評価を受けなかった理由は、「一念の恋」を貫くといえながら下

枝は、婚約したわけではないとして別人と結婚し、「魂をやかん」とする恋心を抱いたはずの新太郎は、三年後に再会して一夜を過ごした後「正しき我れを駆りて此の淫池に沈めたるは、かの賤しむべき恋」であるとし、「我が清き心を、不義の泥土に穢せしものはかの下枝なり」と恋人下枝を否定する。この間の心情変化の説明が不十分であったこと、さらには新太郎の破滅が、雑報による暴露によってもたらされ、自身の性情や意思とは別の、第三者の介入によることだろう。再会して一夜を過ごすのも偶然である。又、人の心のうつろいやすさを描く点においても、上述の作品評価にいう自然の法則、つまり必然の原因によって必然の結果が生じるというあるべき展開を示していないのである。

悠々の小説の第二作『仲左』は、父親を蔑ろにして金を貯めることばかりに熱中する青年仲左が、叔父に誘われて遊廓で遊び、遊女小金に魅かれ「流連せんこと」と「家に留守する金箱の顔」を見ることとの間で葛藤するものの、後者を取り帰宅する¹⁾。金箱が消えているのに驚いた仲左は、狼狽して父を詰り、後を追いかけてきた小金を追いつ返す。その姿を見て、叔父は呆れ果てる。ほどなく、仲左は不治の病で病死するという守銭奴の末路を描いた作品である。叔父の働きかけによって人間としての情愛に目覚めながらも、「さりながら万事は金づく、色も金なれば情も金なり」というように、拜金主義を捨てられないことが原因で死に至る。注目されるのは「貴様の様な守銭奴は、一生嬢も持たず、子も持たず（中略）朽果べし」、「病気の折などには誰も勦^たはりてはくれまじ」、あるいは「慳貪者の揚句は、必ずよい目には逢はざるべし」というように、作中しばしば仲左の最期、特に病死が暗示されていることである。この作品は、『紅花染』とは対照的に、忍月の説く必然の原因によって必然の結果が生じるという自然の法則によって人間の運命を描いた性格小説であり、忍月の小説観に即したものとなっている。『仲左』掲載にあたって、忍月が推薦文「『仲左』に題す」を新聞第一面の冒頭に掲げるまでに高く評価したのは、当然であった。

ところで、忍月が「北國新聞」に発表した小説は、どうか。『仲左』は人間らしい情愛・感情を捨てて「今金を物をいふ世界」だとし、「兎角此世は金ぢや金ぢや」と即物的な欲望を追求する青年の悲惨な末路を描く点で、金銭至上主義の世相への風刺・批判を意図する教訓的な作品である。忍月にも、着任第一作の『俄分限』（明26・11・12、14、15）や『怪奴と蝙蝠』（明26・11・29、30、12・3、4、5）、『狐狗狸さん』（明27・3・15～18）など、社会のあり方や世相に対する揶揄・風刺・批判をこめた教訓的な作品が少なくない。『俄分限』は、貧しい百姓蟹助が、ドクトル先生から金箔の看板に仰々しい肩書を書けばドクトルになれると聞いて実行し、「物識博士」として有名になり、莫大な財産を得るという作品である。また、『狐狗狸さん』は、生活に窮した代言人古根義松が変装して人力車の乗客から金を奪う。奇しくも義松が捨てた変装の道具を三次郎という若者が拾って身につけているところを捕らえられる。三次郎の弁護を引き受けた義松は、予審の日に同じ変装をして出廷し、「何人にまれ、此帽を戴き、此髻を付けたる者は、皆盡く盗賊です」と述べ、外見で人を軽率に判断してはならないことを弁じて無罪に導き、その後自首するという作品である。いずれも、外見や肩書で人を判断する世俗の皮相な見方を風刺し、批判する意図が明らかである。こうした風刺や批判には、千葉真郎「金沢時代の忍月（二）」（千葉真郎「金沢時代の忍月（二）」、「目白学園女子短期大学研究紀要」、平6・12）の指摘にあるように、「レッシング風比喩談」が「活用」されているだろう。例えば、獣と鳥の戦争に際して「利欲」を追って孤立した蝙蝠に、お化けが自身の境遇を重ねてかこつ『怪奴と蝙蝠』の末尾には、

比喩談の詩人曰く当年赤毛髻^{あかけこ}を被りて相門に出入せしもの、待合に密会して賄賂を貪りしもの（中略）誰か此怪奴ならざらん又誰か此蝙蝠の失敗を招かざらん

とある。千葉氏の指摘されるように、『怪奴と蝙蝠』は、刊本『蓮の露』（春陽堂、明27・6）収録時に『蝙蝠（比喩談）』

と改題されており、「レッシング風比喩談」を「活用」した作品であることは明らかである。

「比喩談」^{フアペル}は、忍月が「北國新聞」紙上にしばしば掲載したもので、「瞽者」(明26・11・28)以下、明治二十七年五月までに二十作を数えることができる。忍月は、「烈真虞の比喩談」(「国民之友」明26・8)で比喩談の「本旨はペルソニフヒカプチョン」にあつて「禽獣界の生活行為、若くは全然生なき物を捉へ来りて、之に霊を加へ、活を入れ、以て人事となす」というように述べている。¹²⁾そしてその「特有の妙」は、「諷諫刺譏」、風刺にあると指摘している。比喩談は、世相への批判や風刺・教訓を意図した寓話と捉えてよい。具体例に続いて筆者の見解を述べる比喩談の形式は、読者を「誘導啓発」しようとしていた忍月にとって最も都合のよいものであつたと考えられる。

忍月筆と推測される比喩談二十作において「ペルソニフヒカプチョン」されたもの(題材)と内容・意図を検証すると、忍月は「禽獣」だけでなくさまざまなものに取材した比喩談を発表していることがわかる。まず、特定の権力層を風刺や批判の対象とすると思われるものに次の七点が挙げられる。「盲者」が、「明者」こそ逆にものが見えていないと嘲る「瞽者」(前出)は石川県会を、猿が猿回しに死後も墓参りをするというのに、大臣・華族の取り巻きにはそのようなものがないという「狙公と猿」(明26・12・5)は大臣・華族の取り巻きを、正直清貧な蟻を貪欲な山鼠が嘲笑する「左団扇」(明26・12・12)は貪欲な権勢者を、孔雀の羽を拾つて身につけた雄鳥が、孔雀の群れに忍び込むが忽ち見抜かれる「孔雀及鶏(レッシング比喩談)」(明27・3・17)は強顔浅慮の新吏属を、長州閥で新たに力を得た人物と金に左右される魚の動向を指摘する「妖天狗の鼻(高サ三千丈)」(明27・3・21)は長州閥の有力者(妖天狗の鼻)を、弁慶が畠山重忠に年越しの援助を手紙で要請する「鬼の念仏」(明27・3・25)は或藩の家令に借金を申し込んだ某頭領を、芸妓おりが芸だけを売ると称しながら、男たちと密会を重ねると指摘する「自由楼のおりか拍子」(明27・5・13)は自由党(?)を、それぞれ風刺・批判し、特定の権力層を対象としている。

その他の十三作は、世相や世人のあり方に対するものである。俗世の桜・桃などに嘲笑される梅(堅節)と松(清品)の交情を描く「梅と松」(明27・2・7)は「堅節」と「清品」を欠く世俗を、少年に御されるままの馬を猿などが嘲笑する「賢馬」(明27・2・26)は君子の大量を知らない世俗を、年老いた梅干の醜さを、今咲き匂う梅の花が嘲笑する「梅干」(明27・3・6)は老人を蔑視する若者の思い上がりを、未熟な天狗が囲碁の腕を互いに誇り相手を嘲笑する「碁天狗」(明27・3・24)は、謙虚さを忘れがちな世俗を、戦死して腐敗した駿馬から生じたことを蠅が自慢する「系図自慢」(明27・3・26)は家柄を誇る世俗を、観古会に出品される甲冑が富士川で河水と往時をしのび世の変遷を嘆く「甲冑と河水の懐旧」(明27・3・27)は澆季の世相を、驢馬が獵馬との競走の敗因に二ヵ月前の軽傷をあげて口実にする「口実(驢馬の負け惜み)」(明27・3・28)は愚と拙を隠蔽しようとする世俗を、牡鹿が可憐気に見せるために病苦に悩むふりをする「あはれ気を装ふ(牡鹿の痴)」(前出)は空虚な痴漢を、若い狼が戦死した父の死因を英雄の一瞬の過失だと狐に語るが公平にみれば当然の敗北に過ぎないという「勇武なる狼」(明27・4・2)は身内をひいき目で見える世俗を、褒め言葉を真に受けて田螺を助けた鳥を、助けられた田螺が罵倒する「田螺と鳥」(明27・4・6)は徳義の頹廢した世相を、妙音を聞いてもらおうと山中から街に出た燕だったが、聞くものはなく鳴くことを忘れてしまったという「燕」(明27・4・13)は自らの才能と価値観を閉却した世俗を、それぞれ風刺批判しているものとみられる。その他、鶯に牧羊者が鳴かない理由を問うと蛙が騒いからと答える「牧羊及鶯」(明27・3・19)は、現実から逃避する文学者を対象としている(資料2)。また、雀が妻子を失い海に入水して蛤になり蜃気楼を現出させたために誰も友人になってくれないという「蜃気楼」(明27・3・23)は、余人の追隨を許さない際立った能力の持ち主に對し、その才能を発揮する時と場所を選ばべきだということを説いたものと思われる。

以上のように、比喩談は、特定の権勢者及び世俗・世人に対する批判を痛烈な寓話によって忌憚なく表現するも

のとなっている。こうした多彩な比喩談と平行して、これらを発展させた連載小説を、忍月は発表していたのであった。悠々の『仲左』も、このような忍月の影響下に創作されたことが、明らかである。しかし、金銭を失うまいと他との交渉を断絶する仲左には、叔父からその守銭奴ぶりを非難されて直ちに謝ったり、盗まれたと思つた金箱が見つかる。「小躍りする」点で、未成熟な幼児性がある。また、「兎角此世は金ぢや金ぢや」として貯蓄を何よりも優先する仲左には、生の不安も看取できる。こうした点は、忍月にはみられない。

忍月と悠々の関わりでさらに注目されるのは、明治二十七年七月に忍月が日清戦争取材のために金沢を離れると、その後、悠々が「譬喩談 天才」(明27・7・18)・「比喩談 此多難なる時代」(7・30)を執筆していることである(資料3)。前者は、猿がその賢さを認識していない馬に嘲笑されることを述べ、天才が評価されにくい現状を批判する。後者は、この世を「泥土」とみる僧とそれを批判する記者の応酬を記し、価値観の混迷を指摘する。以下、悠々は、翌二十八年五月までに「譬喩談三則 蛙の嘆息・池辺の犬」(2・1)、「譬喩談三則 猿と蟹・捕鳥・猫と犬」(2・8)、「譬喩談四則 網裏魚・鴉と杜鵑・夏草」(5・23)を発表している。悠々の比喩談には、忍月のような特定の個人・団体を対象にしたものはみられない。世人の軽薄さ(「天才」・蛙の嘆息)・猿と蟹・「捕鳥」や底の浅い繁栄の虚しさ(「夏草」)を批判して、「常日の逆運」を耐え(「猫と犬」)、時機を見極めて行動すべきこと(「鴉と杜鵑」)を説く。いずれも忍月の比喩談を悠々なりに受け止めたものといつてよい。

以上のように悠々は、忍月との交流によって「北國新聞」紙上に発表の機会を得たのみならず、小説や評論、比喩談への眼を開かれ、さらには忍月の代弁者、さらには後継者として成長しつつあったといえることができる。

2 鏡花文学とのかかわり

明治二十七年の帰郷時に、鏡花が忍月や悠々と直接的な交流があつたという確証はない。しかし、冒頭で述べたように、忍月や悠々の作品や論説を含めた「北國新聞」に眼を向けていたことは確実である。ここでは、前章にみた点を中心に、明治二十七年一月から九月上旬まで(実質的には二月から七月まで)の同紙を検証して鏡花文学との接点を三つ指摘したい。

まず、前章で述べた忍月・悠々の比喩談からの摂取である。明治二十七年二、三月頃と推測される紅葉の鏡花宛書簡には、「少年もの、短編あらば書いてみるべし」とある。少年ものの執筆を勧められていた鏡花に、上述の忍月筆の「賢馬」や「田螺と鳥」などが何らかの示唆を与えた可能性を考えてもよいように思われる。また、悠々の比喩談も含めた多くの比喩談やその応用としての小説に、世俗への批判や現実社会に対する問題意識を文学化する方法を見いだしていったと考えられないだろうか。こうした観点から、同じ二十七年十一月に発表された鏡花『譬喩談』(幼年玉手函拾式編)『海戦の余波』(付録 博文館刊)は、そのタイトルからしても看過できない(資料4)。

『譬喩談』は、「何に寄らず、己が意の如くならむことを欲する」主人公が、意のままにならないのが不快だとして「官職を辞」し、友人も妻子も下女下男もみな遠ざけ、「無心の器械」のように働く「小僧」を雇う¹³。しかし、近所の家が放火されるのを座視したのみか、奉公先の家が類焼しそうになっても主人の命令がないとして何もせず叱られてその場から逃げだす。「小僧」にかわって、妻子や下男下女が駆けつけ、事なきを得るまでを描く。こうして主人公は、「不如意なりと思へりし者の遙かに優りて如意なること」を悟つたという内容で、「欲を節する」ことの大切さを説く。「へい、唯今」という冒頭からも明らかのように、会話を中心とし、「世にも、不如意なるほ

ど不愉快なることはあらざるべし」というように地の文の語り手が積極的に作品世界に介入し、解説を加えて展開する点、末尾で語り手が読者に、

然り、人生何かよく如意なるべき。たとひ衣食住盡く意に満つるとも、天気風雨の不如意あり（中略）濫に意の如くならむことを欲する者は、語を替へてこれを造物者たらむことを希ふものといはざるべからず。諸子静かに思へ、これ到底所詮出来得べきことにはあらざるなり。

と呼びかけ、具体例に続けて独自の見解を付け加える点も、比喩談の形式に倣ったものといえることができる。また、内容的には外見や肩書によって人事を判断する愚かさを批判する忍月『俄分限』や『狐狗狸さん』よりも、人間としての情愛を省みない悠々『仲左』に近い。しかし、「世にも、不如意なるほど不愉快なることはあらざるべし」といい、「人生何かよく如意なるべき」と指摘して「欲を節する」ことを勧めながら、「節する能はずして、如意を欲して休まざらむか。可、我に一法あり」として、「我といふ者を、断然此世より取去りて、円満なる天堂に生れ行き、如意宝珠を抱くにあるのみ」とする結末は、節欲の果ての自殺を示唆している点で特異である。ここには、如意ならざる世をいかに生きるかという『鐘声夜半録』や『義血俠血』に連続した鏡花自身の克服すべき問題と死への志向とが投影している。比喩談に鏡花が見いだしたのは、少年ものの方法としての有効性だけではなかったのである。

『譬喩談』以外の作品では、明治二十七年九月頃の執筆とされる『旅僧』（少年世界 明27・4～5）が比喩談の形式・方法の応用として挙げられよう。『旅僧』の草稿末尾には、「そも此僧の談話いかむ、酸きか、甘きか、はた苦きか、或は淡々として無味なるか、心に問へ。舌は知らじ」という一句が付け加えられていた¹⁴。内容的にみても、旅僧が船客にいう「人を持つより、神仏を信するより、自分を信仰なさるが一番じや」という主張も教訓的である。一人坊主という凶兆によって「暴風」「火災」「難破」という「危難」を「憶測」する乗客は、外見や肩書によって人事を判断する愚を批判する忍月『俄分限』や『狐狗狸さん』に近い。『旅僧』と同じく草稿末尾に「艤を取りて賢明なるほど渠は然らざる時に暗愚なり、生理上人の脳力は一方に傑出すると、もに他に其缺点を生ずることを免れず」とある『取舵』（太陽 明28・1）も、比喩談の応用と見ることが出来る。『取舵』の執筆も『旅僧』と同時期と考えられている¹⁵。『譬喩談』も、内容的・方法的に『取舵』・『旅僧』と共通すること、同年土月という刊行年月日からして両作と同じ二十七年九月ごろに成立した可能性がある。さらに付け加えれば、『夜行巡査』（文芸倶楽部 明28・4）の「趣向をつけた」のも「二十七年の九月頃」だと、鏡花は「処女作談」（大阪日報 明40・1・1付）で述べている。周知のように、主人公の八田巡査は「怪獣」に譬えられている。これを上述の「ペルソニフィカプチョン」の逆、つまり人間を怪獣に変えて「千万言に優るの効」をめざすものとも考えられる。「比喩寓意的の倫理」を説く比喩談の発想が、『夜行巡査』の構想時にあった可能性を指摘しておきたい¹⁶。

以上の他にもう一点、「北國新聞」紙上の論説と鏡花の評論「醜婦を呵す」（文芸倶楽部 明28・10）との関わりを指摘したい。「醜婦を呵す」は、女性の「天命の職分」は「花の如く、雪の如く、唯、美」であるとして、「貞操」・「淑徳」といった「心の美」を認めず、「艶にして美」ならば「薄情なるも、残忍なるも殺意あるも亦害なきなり」という極端な主張を述べ、鏡花の唯美主義を明らかにしたものとよく知られている（資料5）。この評論の書き出しは、村夫子は謂ふ、美の女性に貴ぶべきは、其面の美なるにはあらずして、単に其意の美なるにありと、何ぞあやまれるの甚だしき。

とあって、村夫子への反論の体裁をとっている。これに相当する論説についての指摘は今日までない。そこで、一つの仮説を提示しておきたい。それは、「北國新聞」掲載の無署名の論説「貞女を求むる醜婦に於てすべし」(明27・3・19)及び忍月(署名は、人文子)「村夫子論」(明27・5・10)への鏡花の反論である。「貞女を求むる醜婦に於てすべし」は、「世人、女の優なるものを評する、才色并高の語を以てし、才色并高をば美人の上乗とはなせり」として才色兼備をよしとする女性評価を「俗想」「短眼」「皮相」だとして斥け、

才色并高とは、其才幹の秀と其容色の美とを謂ふものにして、其の心の美德即ち、節操貞淑等を謂ふにあらざればなり。(中略)女に取る所は、容の美にあらざりて心の美にあり(資料6)

と述べて、最後に「女を択むに、色の美に取る不可、心の美に取る可」と主張している。「醜婦を呵す」は、「貞女を求むる醜婦に於てすべし」の趣旨を全面的に逆転させ、鏡花独自の女性美論を展開させたものとみることができ。この論説の同じ紙面には、『鐘声夜半録』の素材として知られる「醜体なる注文品」という雑報があり、鏡花がこの論説を読んだ可能性は高い。しかし、この論説は先にふれたように無署名である。そこで注目されるのが、忍月「村夫子論」である(資料7)。「村夫子論」は、都会に遊学する学生が帰郷しないことへの批判である。忍月は、若者は「故郷を健全」にすべく帰郷すべきで、「覚束なき青雲を望む」のは、「迷想」だと断じている。さらにこの論説は、「村夫子」に「安心の地」を与えんと欲しての議論だとして、次のように結ぶ。

都の花は郷関の花よりも塵にまみれたり雲雀の声は、都門に於て聞くべからず(中略)公等何に誘はれて都門に恋々たる乎

こうした忍月の主張は、『義血俠血』などに顕著な当時の鏡花の上京願望とは相いれない議論であり、二カ月前の「貞女を求むる醜婦に於てすべし」と併せて鏡花の反論「醜婦を呵す」となって金沢滞在時に覚書が書き留められていたのではなかったか。

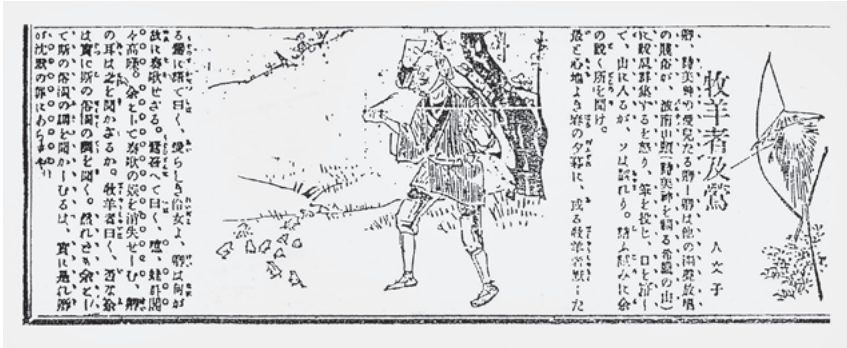
以上は、明治二十七年における「北國新聞」を舞台にした、忍月・悠々の交流と、両者の作品その他に紙面で接していた鏡花の作家として方向を模索するなかでの享受の一端の検証である。悠々は、明治二十八年九月に上京し、東京帝国大学法科大学に入学する。鏡花「百物語」(『文芸倶楽部』明29・8)には、悠々が大塚の鏡花宅を訪れたことが記されている。金沢に生まれた同年の鏡花と悠々の交遊のはじまりが何時かはわからない。今回取り上げた明治二十七年の時点では、直接的な交遊関係はなく、悠々は忍月の薫陶をうけて文筆活動を開始したのであり、鏡花は紅葉の励ましと指導のもとに忍耐強く創作を続け、「北國新聞」紙上の比喩談や「貞女を求むる醜婦に於てすべし」「村夫子論」を鏡花なりの意識でうけとめて自己の立場や文学を模索し、それぞれの道を着実に歩んでいたものと考えられる。

注

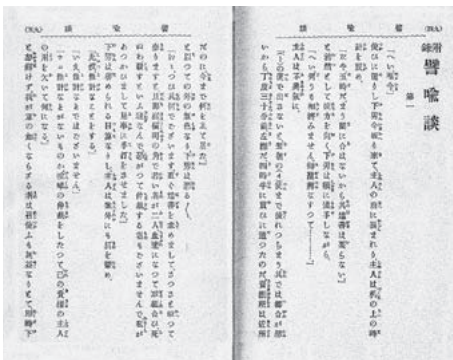
- (1) 「北海道毎日新聞」(明28・7・12)9・6)掲載。
- (2) 『春夏秋冬 冬之巻』(餅むしろ)博文館、明28・1)所収。
- (3) 石川県立図書館には、『義民実伝 仏師表徳』を掲載した明治二十七年六月九日付の「北陸新報」が収蔵されている。
- (4) 千葉真郎「金沢時代の忍月(二)」「目白学園女子短期大学研究紀要31」平6・12)参照。忍月については、同論文他を収録した『石橋忍月研究 評伝と考証』(八木書店、平18・2)に負うところが大きい。
- (5) 明治二十四年十一月十六日付「北陸新報」には、愈庵自任生『娑婆鬼(七)』という小説が掲載されている。愈庵は、悠々の別号でもあり、同作が悠々の作品である可能性がある。



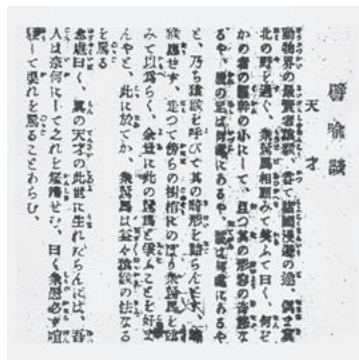
【資料1】



【資料2】



【資料4】



【資料3】

- (6) 悠々生「思ひ出る儘」(五)〔他山の石〕昭14・8) 参照。
- (7) 以下、特に注記がない場合、忍月・悠々の引用は「北國新聞」による。
- (8) 引用は、『石橋忍月全集』第一巻(八木書店、平7・5)による。
- (9) 引用は、『石橋忍月全集』第三巻(八木書店、平7・8)による。なお、この点については同書「解題」参照。
- (10) 引用は、『石川近代文学全集』12 三宅雪嶺・石橋忍月・藤岡東圃・桐生悠々等(石川近代文学館、昭63・8)による。
- (11) 引用は、『文芸倶楽部』(明29・2)による。
- (12) 引用は、『石橋忍月全集』第二巻(八木書店、平8・2)による。
- (13) 引用は、初版による。初期の鏡花文学における森田思軒の翻訳文体の影響を指摘した手塚昌行「泉鏡花と森田思軒」(『国文学研究』28、昭38・9)、『泉鏡花とその周辺』所収。武蔵野書房、平元・7)は、『譬諭談』について「思軒の文体は些か薄れている」といながら、「問題提起」と「教訓をふくんだその解答という順」に「最後に至って思軒的技巧をかなり長く用いている」とされる。
- (14) (15) 「泉鏡花自筆原稿目録」(岩波版『鏡花全集』別巻所収) 参照。
- (16) 本書第一章収録「取舵」考」参照。
- (17) 忍月「烈真虞の比喩談」による。
- (18) 悠々「自伝」によれば、悠々は鏡花の依頼で弟斜汀に英語を教えたという。

『乱菊』の成立

『乱菊』は明治二十八年二月十日から三月二十七日まで「近江新報」に掲載され、同年七月「女刺客」と改題されて「北陸新聞」に掲げられた泉鏡花の初期作品である。¹⁾「北陸新聞」再掲時には、鏡花は金沢に帰郷中であり、同じく地元の「北國新聞」に『黒猫』(明28・6・22〜7・23)を連載していた。²⁾ということは、同時期に故郷金沢で、二紙に作品を発表していたことになる。『乱菊』が執筆されたのは、尾崎紅葉の鏡花宛書簡(岩波版『鏡花全集』月報14所収 明27・4・5頃カ)に、

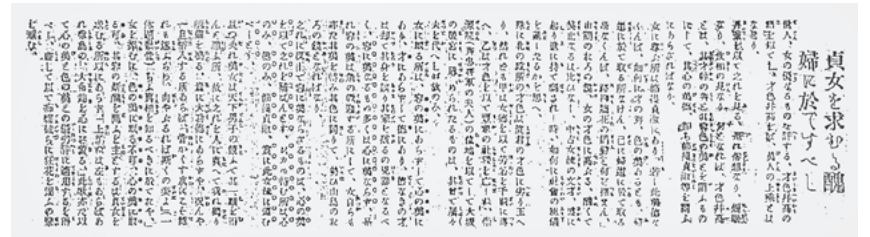
問者乱菊は手をいるゝに難く悶着中なり。今日寄送の入水物になりさうなればあとをおくらるべし。春松堂の貧民くらぶはなかく刪潤むづかしく、そのまゝに相成り度々催促を受け迷惑に候

とあることから、『貧民俱樂部』よりも後、『入水』すなわち『鐘声夜半録』よりも前であることがわかる。³⁾松村友視「鏡花初期作品の執筆時期について」(『三田国文』昭60・10)の指摘されるように、この作品は、明治二十七年四月頃に執筆されたものと考えてよい。作品の概要は、次の通りである。

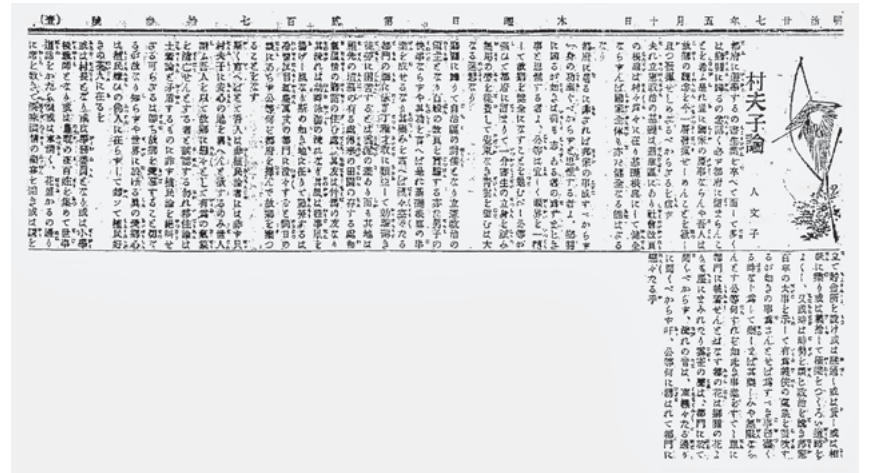
幕府老中松平左京の密命をうけた問者秀松は、女順礼に身を賣して手取川にやって来る。そこで出会った鮎取りの若者は、同じ密命を受けた白峰丈助であった。翌日、秀松は、金沢城の物見下に向けて藩主前田重教が戯れに鉄



【資料5】



【資料6】



【資料7】

砲で狙い撃ちにしても動じない胆力を買われて城下にひきとめられ、二カ月後、乱菊という名前を与えられて重教の義母実貞院の腰元に召し使われる一方、丈助を城中に呼び入れることに成功する。⁽⁴⁾老中松平左京は、藩主重教が病と称して江戸に参勤しないため、隠居させたうえで將軍家ゆかりの者を養子にしようと企て、その際邪魔になる重教の弟大音^{おおと}の君の殺害を乱菊に命じたのであった。「当代の光源氏」大音の君は、九月一日に催された歌会で乱菊を見そめるが、大音の君を恋する義母実貞院はそれに気づいて乱菊を折檻する。実貞院は、霜月一日再び訪れた大音の君に恋歌の返歌を求めて得られない怨みから、毒茶を盛って大音の君を殺害する。死に際に大音の君と乱菊は愛を確認し、来世を誓う。一カ月後の深夜、大音の君の墓前で妖怪と間違われた乱菊は、吉田大蔵の弓に倒れる。乱菊は、折から江戸より帰った丈助から老中の企てが成功したことを聞き、大音の君の墓前に合掌しつつ息絶える。全三十五章からなる作品の構成は、

- (1) 乱菊と白峰丈助との出会い
- (2) 乱菊・丈助が城中に召し使われるまでの経緯
- (3) 実貞院の大音の君への恋と乱菊への折檻
- (4) 大音の君の毒殺と乱菊との恋
- (5) 乱菊の死

というようにまとめることができる。村松定孝「鏡花小説・戯曲解題」〔岩波版『鏡花全集』別巻所収〕は、「お家騒動に取材した近世小説の構想を継いだ手法として一応完成している」とされるが、作品の完成度という点からみて問題がないわけではない。「三十三」で実貞院の言葉に「例の老女が御身を捕へて、(中略)活み殺しみするを見て、いはれを聞けばまたしても、菊を手折りに挿頭せし由、御身は白状せざれども、大音の君より貰ひしを、老女がちらと

見たりしとよ」とある三回めの乱菊への折檻は、大音の君の夢のなかの出来事とされており、それを実貞院が語るの、明らかな矛盾である。また、歌会が催されたのが「九月一日」で、次に大音の君が実貞院を訪れるのが、「翌月第一の日、即ち(中略)霜月朔日」とあるのも不審である。⁽⁵⁾

従来『乱菊』については、村松氏の「解題」を越える言及はないに等しく、同氏が説かれるように『秘妾伝』〔近江新報〕明28・3・28〜4・10)と同じく、「近世小説風の作柄である」という見方が一般的である。⁽⁶⁾しかし、もう一度作品成立の時点にもどって、『貧民倶楽部』『鐘声夜半録』『義血俠血』という重要作品との関わりを考察する必要があるのではないか。

小稿は、以上の観点から『乱菊』の典拠を中心に再検討し、併せて作品の位相を考察するものである。

1 史実からのへだたり

『乱菊』には初出が新聞連載であることを如実に示す「先刻よりこゝに演ぜられたる對話に就きて考ふるに」〔二十〕や「読者願はくば記憶せられよ」〔二十五〕といった作者の読者への呼び掛けがある。注目されるのは、乱菊の死を語った結末に「此の一篇些^{すこ}も史実によらず」という付記があることである。こうした付記は、例えば『秘妾伝』末尾の

記し終りて筆を置き柴田羽柴佐々徳川前田等諸公の霊に向ひて不文漫に其英名を傷けたるを謝す

と同様、作者が改めて『歴史離れ』を注したものと考えられる。ここでは、いわゆる『歴史離れ』と『歴史其儘』の差異を確認してみたい。

上述のように、『乱菊』は明らかに「加州金沢」を舞台にした「重教公」の時代の出来事として設定されている。『加賀藩史料』第七編（前田育徳会、昭9・10）、同第八編（同、昭10・10）、『石川県史』第二卷（石川県、昭14・3）、『加能郷土辞彙』（北國新聞社、昭31・8）などによって、史実に照らして検証すれば、次の通りである。

前田重教について『石川県史』第二卷は、

吉徳の第六子にして、第十世の藩主なり。寛保元年十月二十三日金沢に生る。母は藩士木曾氏の女実成院とある。主として、『加賀藩史料』により重教に関わる事項を左に示す。

- 寛保元・10 重教、金沢に生れる
- 3・12 弟利実（異腹）金沢に生れる
- 延享2・1 利実、大音氏を相続
- 6 第六代藩主吉徳金沢に卒す
- 7 大槻朝元、蟄居、閉門
- 3・1 第七代藩主宗辰（むねとよ）急死
- 寛延元・7 真如院を金谷御殿に幽閉
- 9 大槻朝元、自殺
- 2・2 真如院死去
- 宝暦3・4 第八代藩主重熙（しげひろ）死去
- 10 第九代藩主重靖（しげのぶ）死去
- 4・2 大槻朝元の関係者の刑を定む

重教家督相続（第十代）

- 5・4 弟利実の大音氏相続を止め金谷御殿に住せしむ
- 9・3 真如院の子勢之助死去
- 4 金沢大火
- 10・8 重教の母実成院死去
- 明和3・5 利実死去
- 4・9 重教江戸に着す。老臣らに養子縁組を出願せんとするの意あることを告ぐ
- 5・3 重教実弟治脩（はるな）を以て嗣子たらしめんとするの意を近臣に告ぐ
- 天明6・6 重教死去

右のように、重教は、大槻朝元・真如院など加賀騒動の関係者の処罰が一段落したところで藩主となったわけだが、騒動の余韻は色濃く巷間に漂っていた。その明証が、宝暦九年四月十日の大火の際の噂である。『北雪美談金沢実記』（栄泉社、明19・5）には「其頃下々の噂に此災害ハ全く勢之助殿の怨霊の為す所なり」とあり、大火の半月前に死んだ真如院の子勢之助との関わりがささやかれたと記されている。鏡花は、この大火を脳裡に『朱日記』（『三田文学』明44・1）を著し、『由縁の女』（『婦人画報』大8・1～10・2）では具体的にこの大火を取り上げて言及しているが、『乱菊』で問題とされるのは、『石川県史』の言に従えば『継嗣問題』である。同書によれば、

侯は多疾にして鋭意政務を視ること能はざりしのみならず、齢已に二十七歳に達して継嗣なかりしかば、明和四年將軍の子を養ひて国を譲らんと志あり

とあり、跡継ぎを徳川氏から迎えようとした。その理由を同書は、

去年重教の弟利実の逝去するや、老中等重教に継嗣を定むるの議を上つりしが、偶將軍の子を養はんとの意見を有するものありて、重教も亦之に従はんとしたるに由るなり。

と説く。結果的には「老臣等、物議の沸騰せるを聞いて大に驚き、重教に哀訴し」沙汰止みになった。そして、吉徳の八男で越中の勝興寺にいた高丸が還俗して、第十一代藩主治脩となったわけだが、『乱菊』においても、こうした史実を根底に《歴史離れ》がなされていることは、明らかである。すなわち、作中重教は「江戸参観の煩しきを厭ひ、致仕隠逸の下心」を抱いているのであり、それを察知した老中松平左京が「將軍家の御連枝」を養子として下す「遠謀」の実現をはかるのである。次に、作中の大音の君についても、右に示したように史実の上でも重教の弟利実（異腹）は大音氏を継いでいる。「小立野の大音なる別業に居給へる」と作中にあるが、利実もまた宝暦九年の大火で小堀牛衛門宅に身を寄せるまで「小立野の新宅」にあった（『加能郷土辞彙』）。《継嗣問題》は、そもそも利実の死を発端とすることはすでに述べた。この問題が表面化した明和四年を一応作品内の時間設定とすれば、利実の前年の死を遅らせた上に、もう一人の弟の存在を消去し、さらに松平左京の「遠謀」を成功させるといふ史実の改変が作品の基本にあることは、明らかである。なお、利実の死因は、「御病氣被為重、独參湯被召上、御医師も段々替り」（『加賀藩史料』）とのみあつて病氣ということ以外、不明である。また、利実は作中の大音の君が十七歳であるのに対し、享年二十四歳であつた。

ところで、重教の性向について『乱菊』では、「人と為り磊落不羈」「武を好み、御心飽くまで猛くして」「我儘」（以上「四」）、「御性急」（「五」）、「一国荒々しき予ての御氣象」（「八」）、「放縦」（「九」）とあつて、あまり芳しくない。また、前引『石川県史』の「多疾」とも趣きを異にする。しかし、『加賀藩史料』には「世に隠れなき豪将」とある上に、次のような逸話が掲げられている。

御露地の松の枝を伐らせられ、袖梢高く上り居るを御覧じて、鉄砲を持って、袖の髻を打て見すべしとの御意なり。御近習より色々御諫め申上、万一御ねらい違時は、人命にかゝり不便の事とため申せども、我打損ぜざるを見よとの事にて、既に鉄砲御取寄せなり

右の逸話から重教の「我儘」で「放縦」な性質は明らかだが、それよりも作中で近習の止めるのも聞かず、「お物見の窓より、道行く婦人を狙ひて、戯に其元結を射」る重教を想起させる（この点については次章でもふれる）。

以上の他に、『乱菊』の登場人物のうち、小森牛山と吉田大蔵は、モデルを推定できる。牛山は、「加藩随一の剣客」とされ、重教に齒に衣着せぬ諫言をし、「毛虫親仁」として嫌われるのだが、先に言及した小堀牛衛門について『加能郷土辞彙』は、「宝暦八年致仕して牛山と称し、隠居料三百石を受け、明和二年十月四日八十二歳を以て歿した」と記す。小森牛山は、小堀牛山を書き換えたものと考えられる。また、作中「累世弓術の名門」で「年紀なほ少けれど、父祖の業を襲ぎ、中興の達人と謂はれ」る大蔵について同じく『加能郷土辞彙』に吉田茂雅の通称として大蔵の名が見える。「宝暦十年先弓頭に任じ、家芸を伝へて射に精しかつた」とある。時代のうえでも合致するので、茂雅をモデルとしたものとみられる。

以上のように、『乱菊』は重教の弟を実際より短命とし、大音の君殺害の密命を帯びた問者や継母の継子への恋を設定するなど、史実の改変が著しい。しかし、一方第十代藩主重教の《継嗣問題》という史実をあくまでも根幹としていることも明らかであり、実際に重教に仕えた「家土の名士」（『加賀藩史料』）を配する点からして、結びの付記にいう「些少も史実によらず」という一節から連想される全くの架空譚ともいきれない。

ところで、鏡花は後年『由縁の女』で上述のように宝暦九年四月の金沢大火に言及しているが、同作「十九」の末尾で、「作者申す。（此の前後五六回、お家騒動の一章は史実に拠らず、流布の俚伝を採る。）」と述べている。『乱

菊』も「史実によらず」とするならば、『由縁の女』のように「流布の俚伝を採る」ものであるかどうか。次章では、典拠について考察したい。

2 典拠『金城美譚如月雪』

第十代藩主重教の時勢に取材した近世実録物に『加陽忠考実録夢』（作者不詳、安永9・8一部成立カ）、東武講師『金城失繩編』（成立年代不詳）、浪華文清堂『加陽太平記』（天明年間成立）、『両家越路雁金』（作者、成立年代不詳）などがある。⁽⁸⁾これらは、いずれも安政九年二月八日の高田善蔵刃傷を扱ったものである。『加陽太平記』を除く三作を収めた『稗史小説集 下編』（石川県図書館協会、昭10・12）の日置謙「解説」によれば、高田善蔵刃傷は安永九年二月八日金谷御殿内で表小姓をつとめていた若者高田善蔵が、近習中村万右衛門を誘い出して刺殺した事件で、善蔵は同十五日切腹を申し付けられた。高田が中村を討ったのは、「万右衛門の存在が、金谷御殿の主たる老侯前田重教の操行を誘悪し、藩治を危殆に陥れるものと考へた」ためという。以上の顛末を描いたこれらの実録に、重教のいわゆる『継嗣問題』は全く触れられていない。また、『加陽太平記』は、「重教公御隠居」（拾四巻）に言及するが、治脩への相続が描かれ、利実のことはみえない。しかし、明治期の実録風の戯作でこの事件に触れた芳流軒石井一蛙『金城美譚如月雪』（『加能越新聞』付録、明18・4〜19・3。北溟社、明19刊。以下、『如月雪』と略する）には、『乱菊』同様この問題が描かれている。⁽⁹⁾同作「序」（資料一）には、

本編説く処の譚話は彼の大概以来の一大騒動奸臣中村万右衛門なるもの金谷御殿の隠居殿に媚諂ふて当代の主前田治脩公を毒殺せんとの陰謀を企つるに当り御小姓組高田善蔵氏能く人臣たるの道を守り国を愛して家を

忘れ軀を殞して難を救ひ死して名を後世に残したる一大美譚にして先づ最初は重教公還勤の紛紜及び村井又兵衛氏の卓見博識確乎不拔の行為より説起し善蔵氏が万右衛門を刺殺して切腹さるゝに終り其間粟ヶ崎の木屋騒動木田初太郎小松の仇打ち等の事あり

とあるように、「安永・天明頃の主だった事件を（中略）ひとつの筋にまとめつつ描いたもの」（青山克彌「近世の実録物（その一）」で、本文六百ページに及ぶ大作である。序文にいう「重教公還勤の紛紜」が前章で述べた『継嗣問題』にあたる。以下、『乱菊』との照応を検討してみたい。

『如月雪』は、全三十七齣からなる。重教の『継嗣問題』が描かれているのは、「第一齣」から「第十七齣」まで（北溟社刊本で179ページまで）である。梗概は、次の通りである。

御用部屋を勤める山崎七郎左衛門は、同役結城巨を誘って、重教が「遊惰を事として」江戸参勤を嫌うことから「隠居を勧めて將軍家より御養子を迎え奉つり其功に依て立身出世を計」るべく、粟ヶ崎の富豪木屋藤右衛門を士分に取り立てると称して二千両を調達させる。⁽¹⁰⁾この資金を基に、山崎は江戸参勤の供をした折りに「老中松平右京の大松平周防の守等を取入れ」た上で、「甘言をもて重教公に隠居の事を勧め」て承諾をうけ、重教から「還勤一条」に係るすべてを委任される。「此の上は一日も速く大音殿と古国府殿とを亡きものにし奉らざるべからず」として、重教の二人の弟の殺害をはかる。大音殿（喜六郎と記されることが多い）は殺害したものの、古国府殿の殺害は失敗する。しかし、「出家の身分なれば養子下賜邪魔にならじ」と老中に願い出て、下賜されることに決定する。山崎は金沢に帰って藩士に説くが、村井又兵衛らが強硬に反対し、村井に同調する湯原藤左衛門に山崎は斬殺され、松平右京の大夫の進言で「養子下賜」は取りやめになる。かくして古国府殿が還俗して第十一代藩主となり、結城が狂死したことを述べて、「第十七齣」は終わっている。

『乱菊』との照応において注目されるのは、大音殿の殺害を描く「第七齣」である。「孝心厚き」喜六郎は、「毎月十五日には必ず此母君(引用者注、実母実妙院の御機嫌伺ひとして二の丸へ参上し玉ふと例とす)とあるが、『乱菊』の大音の君もまた「御孝心篤くして、母子の礼を重んじ給ひ、月三回、一の日には、缺かさず二の丸に詣で」(「十五」)て継母実貞院の「御機嫌」を伺うのが例であった。『如月雪』では、これに続いて「次の間に扣へて看経の終る」のを待つ喜六郎が腰元正木の持つてきたお茶を飲む。そして、

茶碗を取上げて一口飲み玉ひしに何か土臭き匂ひしたれども母上より賜はりし御茶何の粗忽のあるべきやこは我鼻の悪けるならんと少しも疑念を抱かず飲み干し玉ひけるが母君に対面して金谷御殿へ引取らるゝ迄にも微妙しく腹痛み何となく心地常ならず

ついに「吐血して苦しみ」死に至る。こうした経緯が、『乱菊』に生かされているのは疑いない。『乱菊』の大音の君は、乱菊が持参した毒茶を「母上より某(それ)に賜りたる」ものとして口にし、死に至る。「茶碗を戴き、一口飲ませ給ひける、茶に泥の如き匂ひあり」とほぼ同様の表現もみられる。腰元正木は、「悪人の問者(まはしもの)」で「江戸飯田町に住居する浪人赤松孝之進と名乗る撃剣家の妹」だが、実は山崎が金沢に差し向けた刺客である。乱菊のように、老中の遣わした刺客ではない。しかし、上述のように、『如月雪』には「老中松平右京の大夫」が登場していたのであり、鏡花の豊饒な想像力は、山崎・結城ら加賀藩の奸臣を消し去って『継嗣問題』自体を幕府の立案とした上で、老中の密命をうけた問者乱菊を造りあげたとみてよい。

この他にも、『如月雪』からの転成が指摘できる。『乱菊』で重教について「最も砲術に達せられ、お物見の窓より、道行く婦人を狙ひて、戯に其元結を射給ふに、百発一として中らざるはなかりし」(「四」)とあることは前章に述べたが、これも『如月雪』に、

此君砲術に妙を得玉ひ百発百中意の如く(中略) 歩行する人の元結を撃切り玉ふに一として撃損じ玉ふこと無しと云ふ程なり

とある一節を書き換えたものであろう。また、前章で小森牛山のモデルとしてあげた小堀牛山の名も『如月雪』の「第十四齣」にみえ、「無二の忠臣にして隠居したる後にも片時も君恩を忘却せず常にお家の事を心頭にかけて」るものとして登場している。ただし、「梅鉢と銘ぜし兜」(「十三」)の逸話の記述はない。次に、『乱菊』で重教は夜実貞院を訪ねて江戸参勤の暇ごいをし、翌朝早々出発の触れを出して家臣の「不意を驚かし、慌つるを見て笑うてやらむ」(「二十三」)という。これは、『如月雪』の「第一齣」で江戸参勤に際して「人の意外に出る」ことを好む重教の性質を説明した一節の「翌日而も未明より弥々御出立との事に御供廻りの人々大ひに慌てふためきたれど」によるものであろう。また、『乱菊』で重教が近郊に狩りに出た時「駿馬に一鞭打ちあてて疾風の如く駈出し」たため、徒歩の「陪徒(とも)」が「力の限り疾走」(「十四」)したという点についても類似の場面がある。『乱菊』では、白峰丈助だけが付き添う。『如月雪』では「陪徒」は皆遅れてしまうのだが、挿絵(資料2)には一人の侍が疾走する馬に並んで駈ける様子が描かれており、『乱菊』における丈助の逸話は、この絵から発想されたものと考えられる。さらに、『如月雪』の「第廿七齣」では重教公主催の「和歌の会」に「御広式の女中にも出で、会に列(ら)なるべき旨達せられ女中は今日を晴れと着飾りて会に列り各々智囊を振ひ脳髓を絞つて思い／＼の和歌を詠じたる」とある。この歌会を契機に高田善蔵と絹江が出会い、結納を交わす仲になるのだが、それよりも前に再会した絹江が善蔵に恋歌を詠んで「自己が心中の切なるを知らしめん」とするが、「物堅き善蔵なれば返歌をなさざる」とある。こうした歌会や恋歌に関わる一節が、継母実貞院の大音の君への恋を描く場面に投影しているものとみられる。そのように見ると、『如月雪』の結末で善蔵が切腹して八日後、善蔵の墓前に詣でて「用意の懐剣」で「南無阿弥陀仏去来導(い)き玉へと六字

の名号唱へつ、喉咽を深く刺し貫ぬ」いて死ぬ場面も、乱菊が、大音の君の墓前で丈助に助けられながら、「南無」とばかりに唱名の名残の声も絶果てたり」という『乱菊』の結末に生かされているとみることが出来る。この他、泉鏡花記念館「泉名月氏旧蔵 鏡花遺品展図録」（平23・10、泉鏡花記念館）の「解説」（拙稿）で指摘したように、『乱菊』草稿には、將軍家から養子をもらうことを、加賀八家に中村が伝える場面がある。これは、『如月雪』の「第十齣」で山崎の發議を重教公が受諾。その旨を、真田求馬が、金沢に帰って、八家で評議するが第十一齣によるだろう。

以上のように、『如月雪』の『乱菊』への影響は、『継嗣問題』を描いた「第十七齣」までに限らず、第十八、二十七、三十七、などにも明らかである。鏡花は石井一蛙の大作全てに目を通した上で、自作に取り入れたことがわかる。なお、同じ明治二十七年の帰郷中に執筆された『妖怪年代記』（『文芸俱樂部』明28・3〜6）について、小林輝治『妖怪年代記論』（『鏡花研究』昭52・3）は、石井一蛙『加賀怪談 雨夜の灯』に「啓発」されたと推定されている。『乱菊』についても、石井一蛙の影響があるものと考えられる。本研究序論の始めで取り上げた『四十八艘』に限らず、鏡花は、一蛙作品を積極的に取り入れて作品を構想したとみられる。

『如月雪』以外に、『乱菊』に影を落としているとみられるのは、いわゆる加賀騒動ものである。三度に及ぶ美女乱菊への折檻は、『加々見山田錦絵』（天明2・1初演）以来の「草履打ち」の反映であろう。また、乱菊の死を描く場面、大音の君の死後その墓に毎夜詣でるところを「妖怪」に誤り伝えられて弓術の達人吉田大蔵の「白羽の征矢」に倒れる場面も、『北雪美談金沢実記』において真如院旧宅で毎夜女の呻き声が聞こえるという「怪事」が起こった時、「当家随一の達人」吉田勘左衛門が、妖怪「憂婦女鳥」を弓で射落として退治したという「吉田勘左衛門射術の事」をふまえたものと考えられる。

そもそも『如月雪』には、大音殿殺害を描いた「第七齣」に「大槻の余類の為す業にはあらずや」「大槻の変治まりて未だ間もあらざるに斯様な事あり実に容易ならざる大変なり」として、ことさら加賀騒動に結びつけた表現がみられる。また、高田善蔵に討たれる中村万右衛門は、「大槻の二の舞を演じ出す」（第廿三齣）とあるように、安永七年九月隠居後の重教に若君教千代が誕生したのを契機に「当主治脩公を害し奉つりて幼主教千代君を世に出し自己後盾となりて百万石の実権を自己の掌中に弄そばんと企てる。しかも、側室お安の方（教千代の母）と結託してお茶会の折りに治脩の毒殺をはかる展開は、『北雪美談金沢実記』でお貞の方（真如院）が勢之助の「身分所置の儀」を大槻内蔵之丞に依頼し、「宗辰公を亡ひ次に嘉三郎殿をも無きものに」して「勢之助殿を太守と仰ぐ」ために、毒殺をはかると同工であり、加賀騒動の再現といっても過言ではない。

ところで、『北雪美談金沢実記』でお貞の方が内蔵之丞を頼るのは、元文三年二月二日お貞の方が金沢で、同月七日お菊の方が江戸でそれぞれ出産し、次男であるはずの勢之助が「国と江戸との隔りにて其報知の後れしより」三男とされたことが原因である。一方『如月雪』の場合は、「今少し出生の早かりせば行く／＼は百万石の主人」となるべきはずのところを、「生涯取らで朽ち果つる」のを惜しむお安の方の嘆きが中村の奸計と結びついていた。これらと同様に、高家の《継嗣問題》を発端とする浄瑠璃に菅専助「撰州合邦辻」（安永2・2初演）がある。

河内の大名高安左衛門には先妻の子で世継ぎの俊徳丸と外戚腹の次郎丸がある。次郎丸は「高安の惣領とは生まれながら外戚腹ゆゑ次男」となったため、「折もあらば家国を横領せん」として父の病中の「どさくさに俊徳丸ぶち殺すか毒害か」とたくらむ。『乱菊』との関わりで注目されるのは、この浄瑠璃に継母の継子への恋が描かれている点である。高安の奥方玉手御前が継子俊徳丸と住吉参りに行った先で、「お前の母君先奥様に宮仕の私。（中略）心迷うて（中略）此儘ならば恋煩ひ焦れて死ぬる私が身。不便と思うて」と秘めた思いを告白するのに対し、俊徳丸は「血こそ分けね現在の。子に恋慕とは何事ぞ」と拒む。さらに看過できないのは「恋の叶わぬ怨み」（黒木勘蔵「浄

瑠璃名作集下「解題」に神酒と偽り「秘方の毒酒」を俊徳丸に飲ませることである。こうした経緯が、「母親の分として、大音の君を恋参らせ（中略）歌に託け思ふだけ、打附けに挑みしを、和子は何とて肯入るべき、恥搔かされし口惜しさ」（三十三）に実貞院が大音の君の毒殺をはかる『乱菊』に影響しているものと考えられる。

以上のように、『乱菊』は『如月雪』に描かれた重教の《継嗣問題》を中心に問者乱菊及び白峰丈助を設定し、『白雪美談金沢実記』をはじめとする加賀騒動ものを取り入れている。注目されるのは、両作共に《継嗣問題》を発端とすること。さらにそこから、お家騒動の筋立てを持つ高名な浄瑠璃『撰州合邦辻』への連想が働いて、継母の継子への恋のモチーフを『乱菊』に導入しているとみられることである。問者ないし刺客は加賀騒動ものにも『如月雪』にも登場するが、中心人物として登場することはない¹²。老中のつかわした女問者乱菊を主人公とした点に鏡花の独創があり、自在な構想力を発揮し、物語性豊かな独自の作品に転成したということができる。

ところで、『秘妾伝』について、延広真治「鏡花と江戸芸文」（『国文学』昭60・6）は、

本作は、「絵本太閤記」五篇等より得られた利家伝に、架空の小侍徒を点じたのであるが、（中略）本作における「歴史離れ」は、（中略）総て小侍徒を引立てるために成されたのである。

と述べ、鏡花「草双紙に現れたる江戸の女の性格」（『新小説』明44・4）を引いて、小侍徒を「短刀をさし、刀を懐に入れて居る（略）如何にも強い気象であつたのが、一転していかにも、優しくなる『白縫物語』の若菜姫に紛う女性」として設定していると指摘されているが、それと同じことが、『乱菊』についてもいえる。つまり、『乱菊』は、『如月雪』その他をもとに架空の女問者乱菊を創造して成立した作品である。また、上述の「歴史離れ」も乱菊を際立たせる効果をあげている。大音の君の臨終に際して恋を確かめる以前の乱菊は、まさに「短刀をさし、刀を懐に入れて」大音の君殺害の機会を狙うのであり、以後は、「身を殺しても母の操を全うさせたきねがひ」を抱

いて死んだ大音の君の「苦心」に応えるために、実貞院の「御身其罪を被りて、主殺となつてたべ」（三十三）という理不尽な願いを聞き入れて、城を出、大音の君の墓前に息絶えるというように一転する。このように、『乱菊』は、延広氏の指摘される『秘妾伝』とほぼ同様の方法によって造り上げられている。しかし、『乱菊』には『秘妾伝』にはない重要な問題が残されている。それは、大音の君と乱菊の恋を通じて示唆されている。次章で、この点について考えたい。

3 大音の君と乱菊との恋

前章で述べたように、『乱菊』執筆にあたって鏡花が直接構想を得た契機は、『如月雪』にあったと推測される。しかし、『如月雪』作中に大音殿に関わる恋は一切描かれていない。乱菊が典拠と考えられる文献のいずれにも登場しない架空の存在であったように、大音の君との恋も鏡花独自のものと考えてよい。しかし、『如月雪』における高田善蔵と絹江の恋は、無視できない。というのも、乱菊は大音の君の墓前で弓に倒れた時「恠る処を夜深の徘徊、仔細を語れ」と問われて、「私死すべき仔細あり、語るも無益、問はる、も効なし」と答える。乱菊の答えは、死ぬために墓前を訪れたというのも同然であり、絹江の死との連関を思わせるからである。絹江が善蔵の後を追うのは、善蔵の書き置きに「縁だにあらば後の世に生れ変つて其時は必ず夫婦になることあらん今世の縁は無きものと断念らめ」「良き縁を求めて嫁き玉へ」とあつたのに対し、絹江は「殊更左様に言ひ玉ふは妾を嫌ふて二世三世の誓ひを破る心か（中略）よもや左様にては候まじ」といい、「黄泉へ参りて御目もじ致し其節緩々御話し申しな」と語りかけて自害する。このように絹江は、善蔵の書き置きの裏に隠された心情を酌んだうえで、現世を越え

ていく。絹江が善蔵の死後、自問自答のかたちで「二世三世の誓ひ」を確認するのに対し、乱菊は直接死にゆく大音の君とこの誓いを交わす。この時、乱菊の恋は、絹江のそれと全く異なった地平に立つ。

大音の君が乱菊への恋を自覚するのは、二の丸に控えているうちに見た夢のなかである。その日の早朝（二十五）、大音の君は「園生」で乱菊に会い、実貞院秘蔵の菊を乱菊の髪に挿す。この時乱菊は、大音の君を殺害しようとして果さず、かわりに菊を大音の君からもらったことを口外してもいいかと尋ねる。「内証にては請けまじきか」と大音の君にいわれて、乱菊は「わな、きなながら」礼をいう。ここに默契に近い恋が生じたとみてよい。その後大音の君は、恋歌の返歌をしないことで怒った実貞院が出て行ったところで夢を見る。その夢の中で、禁忌の菊を取ったことで乱菊が折檻されるのを見て、はつきりと乱菊への恋を自覚する（三十）。そして、実際に大音の君が恋を告白するのは、夢の覚めた後毒茶をそれと知りつつ飲み、「時を過ぎて世を去るべき」（三十一）時である。「あはれ最期の思出に恋を許すと唯一言御身の口より聞かせよかし」という問いかけに、「私は君を刺さむとて、隙を窺ふお家の仇」といつて正体を告げ、「慕はれ参らすことは出来ず」と拒む。大音の君が息も絶えだえに、最後に「唯つれなきは御身ぞ」（三十二以下同じ）と言った時初めて乱菊は、「私とても心の中に君を思ひ参らすこと、何とて君に劣るべき」と胸中を漏らす。それでも「御仰に従ひますと申し難し」と大音の君の意に添えない旨を述べる。いうまでもなく乱菊が刺客で、大音の君がその対象であるからに他ならない。現世の掟によって恋を全うすることは許されない関係にあるからである。それは、「君とてもお家に仇なす私を恋ふと謂ひ給ふは、御先祖に対し後暗く思さずや」という乱菊の言葉にも明らかである。とすれば、現世を越えた他界で恋を貫く以外にない。したがって、乱菊は、御傍に齊眉むしづ参らすことの、此世ならでは出来ぬことかは。二世も三世もあるものを、火宅に迷はせ給ふなよといひ、大音の君も「言ふ言毎に頷き」他界での恋の成就を誓うのである。

以上のように、乱菊と大音の君の恋は、至純の情を根底として現世の掟を越えて他界で成就されるものであり、その意味で『義血俠血』や『外科室』に結実する愛のモチーフの先蹤とみることができる。しかし、これらの作品と比べてみると不十分な点がある。『義血俠血』や『外科室』では、死は至純の情に発する恋を貫くにあたって、唯一絶対の選択肢となっている。『乱菊』における大音の君の死も、基本的に自主的な選択には違いない。つまり、乱菊が持参したお茶を一口飲んで「泥の如き匂ひ」（三十一）を察知し、毒茶であることを認識すると同時に、「きつと母上が下されしな」と確認したうえで飲み干すのであり、自ら選び取った死といつてよい。しかし、大音の君が毒茶と知りつつ飲み干すのは、乱菊との恋を成就するためではなく、継母実貞院が「名を惜しみ給ふ」（三十二）ところに「良心」の残映を見、その名誉を守るためであった。このように、継母の名誉を守るために大音の君は死を選択し毒殺という与えられた死を自覚的に選んだ後、乱菊に愛を告白する。この点で『義血俠血』や『外科室』との決定的な違いがある。とはいえ、『乱菊』に『義血俠血』以降に顕著な鏡花文学の最も重要なモチーフの最も早いあらわれ、ないしはその予兆をみることができる。なお、乱菊の刺客という使命を義務・職責としてみるならば、乱菊が「園生」で大音の君と言葉を交わした際（二十五）、懐剣を手にして「斬懸けむ」として「我知らず、一足後に退る」点に情との葛藤、相克という『義血俠血』をはじめとする作品で展開されるテーマの片鱗を読みとることもできる。

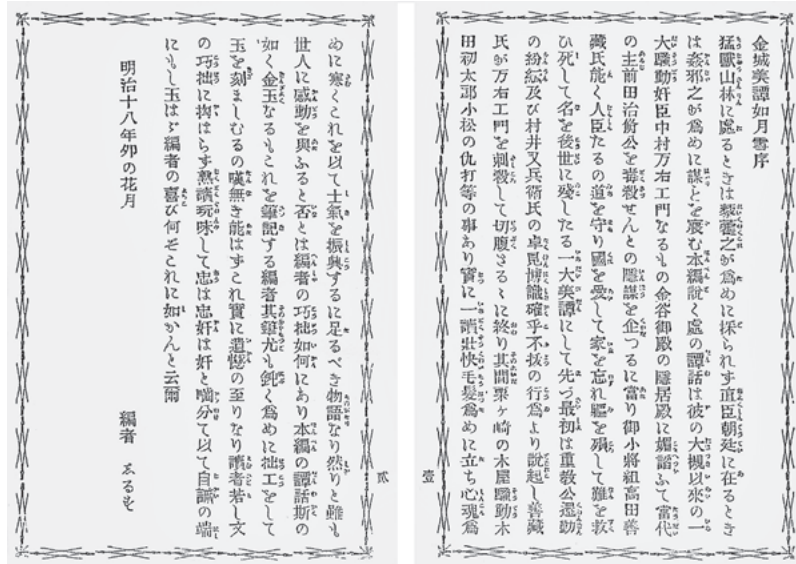
以上述べてきたことは別の観点で、『貧民倶楽部』や『鐘声夜半録』（四つの巻）春陽堂、明28・7）との連関を指摘できる。『貧民倶楽部』は、上述のように、明治二十六年末から二十七年二月頃にかけて執筆された作品である。作中、貧民集団を主導するお丹が、貴婦人のリーダー深川子爵未亡人綾子の邸に小間使いとして送り込むのは「秀」という娘だが、この命名は乱菊の本名「秀松」を想起させる。また、同作の結末では秀からの知らせに基づいてお丹が醜聞を公表するとして綾子を責める。その一節で「自殺をする。身体は死んでしまふから、唯名誉だけ助けておくれ」

という綾子の最後の願いが拒絶された場面に「あゝ、窮の極、自殺も出来ず」とある。これと類似した表現が、『乱菊』にもある(三十三)。実貞院が大音の君の死後、「はじめて前非を悔い」たものの自殺をすればかえって「世間」が「かにかく沙汰」をし、「妾ゆゑに、家を汚して和子の苦心も無になる」として「死にたいにも死なれはせず」という。ここにいう「沙汰」とは、本文でいえば「微妙わびたき家の家系の内には、其子に恋を仕懸けたる、言語道断の継母あり」(三十二)をさす。これも、『貧民倶楽部』同様醜聞にほかならない。しかし、この「死にたいにも死なれはせず」という心境は、作品の文脈を離れて、執筆当時の作者の肉声でもあったと考えられる。いうまでもなく「おぼけずきのははれ少々と処女作」(新潮 明40・5)にいうように、父の死によって帰郷した鏡花は家計の困難により、「屢々自殺の意を生じて、果ては家に近き百聞堀といふ池に身を投げよう」とさへ決心したことがあった」といい、『女客』(中央公論 明38・6、11)では「死なうと思ひ、助かりたい、と考へながら、(中略)濠端を通つた」と回想している。周知のように、そうした心境を直接反映した作品が『乱菊』につづいて執筆された『鐘声夜半録』であった。この作品を読んだ尾崎紅葉が、明治二十七年五月九日付鏡花宛書簡で「一種死を喜ぶ精神病者の如」き心情を危んで、「破壁断軒の下に生を亨けてパンを飲み水を飲む身も天ならずや。其天を楽め！」と一喝したこともよく知られている。現世で恋を貫けず、世の掟に抗せずして他界に赴く男女を描く。とはいえ、二人を見送る実貞院の佇つ位置は、死への誘引を覚えながら「名を成し家を興し父祖を輝す」(紅葉書簡、明27・1・30付)べく文学に精進する鏡花のそれに近いものがある。『乱菊』にも明らかに死への傾斜は伺われるのであり、その意味で『乱菊』は、登場人物全てが死んでいく『鐘声夜半録』の意外に近いところにある作品と考えることができる。

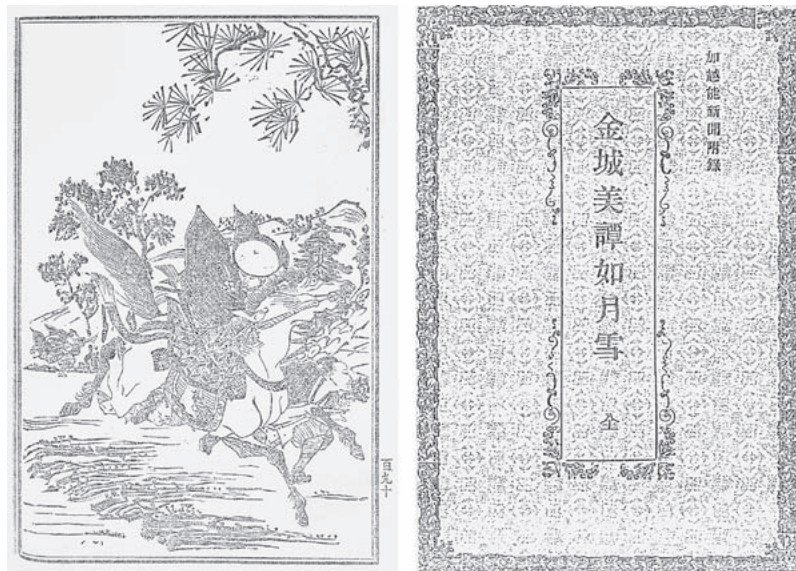
以上のように、『乱菊』は従来一顧だにされない作品であったが、明治二十七年四月の時点にたつて座標軸を設定するとき、成立の時期というだけでなく、内容的にも『貧民倶楽部』を引き継ぐ一方で、同作から『鐘声夜半録』に連なる帰郷時の現実との格闘の投影を伺うことができる。また、数カ月後に執筆される『義血俠血』に顕著な鏡花文学の最も重要なモチーフの萌芽をも、垣間見ることができる。加えて、その成立に際して金沢で出版された明治期の実録的な要素の濃い戯作『金城美譚如月雪』その他の先行作を取り入れて、独自の世界に転成していることがわかる。処女作『冠彌左衛門』でも明治期の実録その他をもとに作品を構想していたことを考えれば、史実や現実から出発する鏡花の自在な想像力の構図を再確認できよう。明治二十七年帰郷時の作品について、当時の金沢ないし鏡花周辺で起こった出来事との関わりとともに、『乱菊』のような先行作品からの享受についても、更に検討する必要があるのではなからうか。

注

- (1) 初出紙、再掲紙ともに確認できない。引用は岩波版『鏡花全集』巻一による。なお『乱菊』は、「花弁が入り乱れて咲いている菊の花」(『日本国語大辞典』)という他に『信太妻』『蘆屋道満大内鑑』のように狐を導き出す意味がある。後者の「我は実は人間ならず」というせりふではないが、鏡花もそうした点をふまえて正体を偽る女問者の名としたものか。
- (2) 明治二十八年七月二日付「北国新聞」に次のような記事がある。
- 先月泉鏡花脚氣を以て郷に帰れり。鏡花とは昨年読売新聞に「予備兵」「義血俠血」を載せ、近ごろ文芸倶楽部に於て名誉噴々、諸先輩をして顔色ならしむる者、彼の文を北国紙上に掲するを得、亦地方新聞の為に気炎を吐くに足らん
- (3) 弦巻克二「鐘声夜半録」小考(『光華女子大学紀要』17号、昭54・12)参照。
- (4) 作中、重教は「しげのり」とルビがあるが、「しげみち」が正しい。
- (5) その他、本文の上でも会話のカギ括弧の不統一やルビの明らかな誤植など、問題がある。
- (6) 松村友規「鏡花初期作品の執筆時期について」は、『秘妾伝』も『乱菊』と同時期の成立と推定する。



【資料1】



【資料2】

- (7) 藤沢秀幸「泉鏡花『朱日記』論序説」(『国語と国文学』昭63・6) 参照。
- (8) 青山克彌「近世実録(その一)」藤田福夫監修『金沢の文学』北國新聞社、昭46・4) 参照。
- (9) 『金城美譚如月雪』は、現在金沢市立図書館と石川県立図書館に収蔵されている。同県立図書館所蔵の『加陽忠孝実録夢』(表紙奥付及び本文の一部欠く)もまた、『如月雪』と本文が全く同一の活字本である。相応に、流布したものと考えられる。
- (10) 同書「第五齣」(第六齣)は、木屋藤右衛門の出自と富豪になる経緯が描かれている。木屋は、木谷が正しい。後年鏡花は、栗ヶ崎の豪壮な木谷家に取材して「湖のほとり」を書いた。本書第二章「湖のほとり」から「風流線へ」参照。
- (11) 『浄瑠璃名作集下』(日本名著全集、昭4・2)による。以下同じ。
- (12) 『如月雪』では、腰元正木の他、「第十六齣」で「徳川氏の政略」としての「隠密」に言及、「第廿七齣」にも「問者の役目は命を俟たず」とある。

『乱菊』本文考

石川近代文学館所蔵の初期作品『乱菊』の草稿を取り上げて、現行本文の成立について検証したい。『乱菊』（近江新報）明28・2・10（3・27）は、尾崎紅葉が鏡花に宛てた書簡（明27・5か）の一つに、

「問者乱菊」は手を入れる、に難く悶着中なり。今日寄送の入水物になりさうなればあとをおくらるべし

とあることからわかるように、明治二十七年帰郷中に執筆された。『入水』は『鐘声夜半録』の原題と思われ、同作の執筆が同年四月下旬と推測されることから、『乱菊』は、それ以前、四月には脱稿して紅葉の許に送付されていたものと思われる。この作品は、前田家第十代重教の後継問題に取材した作品で、徳川幕府と加賀藩の微妙な関係を反映した史実を踏まえた作品だが、重教が徳川家から「養子」を迎えた事実はない。結末に「此一篇少も史実によらず」と但し書きがあるように、史実を踏まえながら、女刺客乱菊を創造した虚構の作品である。背景や主題、同時期の作品との関連については、前稿を参照されたい。

「乱菊」の草稿は、石川近代文学館蔵と個人蔵の二種類がある。石川近代文学館蔵の草稿については、小林輝治『妖怪年代記』論―『高野聖』の系譜（一）（『鏡花研究』昭52・3）掲載の別表「明治二十七年帰郷中執筆推定作品と『な』の字」に、草稿二十二枚が石川近代文学館に所蔵されているとの記載があり、早くから草稿の存在は知られていた。

また、個人蔵の草稿のうち、「別冊現代詩手帖 泉鏡花」（昭47・1）に「初期作品『乱菊』の原稿」一枚が、掲載されている。尾崎紅葉が句読点を付すなど、添削の跡がうかがえる（本章「付記」参照）。岩波版全集巻一、「九」章末尾の一節である。翻刻にあたり二種の草稿を照合したところ、個人蔵の草稿は、石川近代文学館の草稿の一枚目と連続していることが判明した。すなわち、文学館の草稿は、全集本「十」の書き出しから始まっているのである。参考として、「別冊現代詩手帖 泉鏡花」掲載分を含めて、二十三枚の翻刻を以下に掲げ、本文成立の過程を考察する。なお、個人蔵の草稿は、泉名月氏旧蔵資料で、泉鏡花記念館刊「泉名月氏旧蔵 泉鏡花遺品展」図録（平25・10）に記すように、草稿十一枚がある。左に引く「参考」より前、全集本「四」から「五」の前半の草稿もあり、いずれも紅葉による添削がある。

翻刻に際しては、次の四点に留意した。

- 1、草稿一枚ごとに（1）（2）のように番号を付して区別した。
- 2、仮名遣いは、旧仮名遣いのままとし、漢字は、一部を除いて新字に改めた。
- 3、改行は「／」で示した。「／」のない改行は、段落の始まりを意味する。
- 4、削除部分で解読可能な場合は、丸括弧内「（）」に注記した。
- 5、解読不能の文字は、「□」で表示した。
- 6、明らかな誤りは正し、括弧内に注記した。誤記や脱落により意味の通らない箇所は、「（ママ）」と注記した。

草稿は、全て和紙墨書で、一行二十二字内外、二十行からなる。読点のみで句点はない。会話表現は改行せず地の文のなかに組み込まれており、会話の文末に句読点がない。松村友視「初期自筆原稿執筆時期推定一覽」（『三田国文』昭60・10）にいう「b」「B」型で、明治二十七年二、三月から七、八月の間に執筆された草稿と共通している。

字体は丁寧で、(1)から(5)までが総振りがないで、(8)(10)(11)(12)(15)～(17)(19)(20)の九枚にそれぞれ一、二箇所振りを付す、「見えざらむ」(20)のように、特殊な読み仮名が多い。

〔翻刻と考察〕

【参考】——「別冊現代詩手帖 泉鏡花」掲載の影印。(1)鏡花の草稿、(2)紅葉による添削の反映、(3)全集本の順に本文を引く。

(1) 女、お次に叩へさしましてございまする、いかが遊ばします」／と伺ひける、重教公は頷き給ひ、「胆の据りし女頗る／見所あり、此方にて召使ひ、奥の守護に仕れ」と素／より色を愛で給ふにあらず、女の沈勇が英武なる御意／に恢ひしなりけり、されど老女は眉を擧め「素性／も知れませぬ女なれば、御召使ひの義はいかがあらむ。」と君／の無雑作に驚きけり。

然るに放縦なる君なれば、「素性などは何うでも可い」／と更に頓着し給はず、老女は猶懸念なり「身分に似／合ひませぬ容只いかに不審に思はれまするが」と恐／る／推返せば呵々と笑はせ給ひ、「顔などは何う／でも可い、唯彼の肝玉が入用じや」とます／無頓着、老女は衝と膝をすすめ「もしや隣国の間はし／な、そこ／を御分別遊ばしませ」と皆までは聞給はず、「問者で／も何でも可い、予が使へば予が家来、忠義を盡すに／かはりはあるまい」と御心中蟠無きこと、竹を割りたる如く四辺構はず御声襖の外に漏れて、お次に叩へし巡礼女前刻には頭上に落ちたる弾丸に／さへ自若たりし女丈夫が、此一言を聞くとも、もにギツクリ／したる様子。

(2) 女、お次に叩へさしましてござりまする。」／と伺ひける、重教公頷き給ひ、「胆の据りたる女／見所あり。此

方にて召使ひ、奥の守護に仕れ」と素／より色を愛で給ふにあらず、女の沈勇なるが太く御意／に称ひたるなりけり。されど老女は眉を擧め「素性／も得知れませぬ女なれば、御召使ひの義はいかがあらむ。」と心に君／の無雑作を驚きぬ。

然るに放縦なる君なれば、「素性などは何うでも可い」／と頓着し給はざるほど、老女はいと懸念して、「身分に似／合はしからぬ容只、いかに胡乱に思はれますれば」と恐／る／推返せば、呵々と笑はせ給ひ「顔などは何う／でも可い。唯彼の胆玉が入用じや」とます／取合ひたまはざ(欠落とみて補)れば、老女は衝と膝を進め、「もしや隣国の問者、な、そこ／を御分別遊ばして」と皆までは聞給はず、「問者で／も何でも可い。予が使へば予が家来、屹度忠義を盡さして見せう。」と御心中の蟠無きこと竹を割りたりとも謂ひつべし。四辺構はず宣まひし御声襖の外に漏れて、／お次に叩へたる順礼は、前刻には頭上に落ちたる弾丸に／さへ自若たりしに、此一言を聞くとき、心騒げる気色あり。

(3) 女とやらむ、お次に控へさしましてござりまするが。」と御顔を見て伺へば、重教公頷き給ひ、「胆の据りたる女見所あり。此方にて召使ひ、奥の守護に仕れ。」と唐突の御仰に、老女は眉を打擧め「素性の得知れぬ女にて候、お召使ひの儀はいかゝあらむ。」と心には太く君の無雑作を驚きぬ。

然るに放縦なる君なれば、「素性などは何うでも可い。」と少しも頓着し給はざるほど、老女はいと懸念して、「身分に似合はしからぬ容貌、いかに胡乱に候へば。」と恐る／推返せば、呵々と笑はせ給ひ「顔などは何うでも可。唯彼の胆玉が入用なり。」と取合ひ給ふ気色なければ、老女は衝と膝を進め、「もしや隣国の問者、な、そこは御分別遊ばして。」と皆までは聞給はず、「問者でも何でも可、予が使へば予が家来、屹度忠義を盡さして見せう。」と四辺構はずのたまひし御声襖の外に漏れて、お次に控へし順礼は、

思はず手足をわな、かせり。

「参考」は、岩波書店版『鏡花全集』巻一（以下、全集本と呼ぶ）五〇九頁二行目から十一行目まで、「九」章の末尾、乱菊が前田重教に召抱えられる場面に相当する。全集本、紅葉の添削、鏡花の草稿の順に、校異を掲げれば、以下の通りである（行頭の数字は、岩波版全集本「九」五〇九頁の行を示す）。

〈校異〉

全集本	↑	紅葉による添削	↑	鏡花の草稿
▽2 女とやらむ、	↑	女	↑	女
▽2 ござりませうが。」	↑	ござりませう。」	↑	ござりませう、いかが遊ばします」
▽3 と御顔を見て伺へば、	↑	と伺ひける、	↑	同上
▽3 重教公	↑	同上	↑	重教公は
▽3 胆の据りたる女	↑	同上	↑	胆の据りし女
▽4 仕れ。」と唐突の御仰せに、	↑	仕れ」と素より色を愛で給ふにあらず、女の沈勇なるが太く御意に称ひたるなりけり。	↑	仕れ」と素より色を愛で給ふにあらず、女の沈勇が英武なる御意に恢ひたるなりけり。
▽4 眉を打響め「素性の得知れぬ女にて候、	↑	眉を響め「素性も得知れませぬ女なれば、	↑	眉を響め「素性も知れませぬ女なれば、

▽5 心には太く君の無雑作を驚きぬ。	↑	心に君の無雑作を驚きぬ。	↑	君の無造作に驚けり、
▽6 と少しも頓着し給はざるほど、	↑	と頓着し給はざるほど、	↑	と更に頓着し給はず、
▽6 いと懸念して、	↑	同上	↑	猶懸念して
▽7 身分に似合はしからぬ	↑	同上	↑	身分に似合ひませぬ
▽7 いかにも胡乱に候へば。」	↑	いかにも胡乱に思はれますれば」	↑	いかにも不審に思はれますが」
▽8 入用なり。」	↑	入用じや」	↑	同上
▽8 取合ひ給ふ気色なければ、	↑	ますく取合ひたまはざれば、	↑	ますく無頓着、
▽10 屹と忠義を尽さして見せう。」	↑	屹度忠義を尽さして見せう。」	↑	忠義を尽すにかはりはあるまい」
		と御心中の蟠無きこと竹を割りたりとも謂ひつべし。	↑	と御心蟠無きこと竹を割りたる如く
▽11 お次に控へし順礼は、	↑	お次に控へたる順礼は、	↑	お次に控へし順礼女
▽11 順礼は、思はず手足をわな、かせり。	↑	順礼は、前刻には頭上に落来る弾丸にさへ自若たりしに、	↑	順礼女、前刻には頭上に落ちたる弾丸にさへ自若たりし女丈夫が此一言を聞くと、もにギツクリしたる様子、
		此一言を聞くと齊しく、心騒げる気色あり。		

右のように、『乱菊』の本文は、例えば草稿冒頭の「女、お次に控へさしましてござりまする、いかが遊ばします」と伺ひける、」を、紅葉が「女、お次に控へさしましてござりまする。」と伺ひける、」さらに全集本で「女とやらむ、お次に控へさしましてござりまするが。」と御顔を見て伺へば」に改めている例のように、紅

葉添削がいったん簡潔な表現に改めた後、場面を髣髴とさせるように留意した表現に再度改めているということが出来る。

右草稿から全集本への転成で注目されるのは、次の三点であろう。

まず、乱菊を「胆の据りし女」と認めた重教が「奥の守護」をさせる理由を説明した草稿の一節、

「奥の守護に仕れ」と素より色を愛で給ふにあらず、女の沈勇が英武なる御意に恢ひしなりけり。

を、紅葉の添削は、

「奥の守護に仕れ」と素より色を愛で給ふにあらず、女の沈勇なるが太く御意に称ひたるなりけり。

に改めている。草稿は、乱菊の「沈勇が英武」つまり、乱菊の並外れて落ち着いている上に勇気があること、そこが「御意」になかった。容色ではなく、「沈勇の英武」さが「御意」になかったということを強調しているといえよう。それを、紅葉は乱菊の「沈勇」の「英武」には言及せず、「沈勇」そのものが「太く」重教の「御意」になかったことに書き改めている。いずれにしても、これは、重教の「胆の据りたる女見所あり。」を、語り手が言い換えたものに過ぎない。全集本が、

「奥の守護に仕れ」と唐突の御仰せに、

というように、語り手の言いかえを削除して、「仰せ」の「唐突」さに転じたのは肯える。

次に、終盤で、老女が乱菊を「隣国の間者」ではないかと疑うのに対して「予が使へば予が家来」だとして、重教が進言を退ける一節、草稿が

「忠義を盡すにかはりはあるまい」と御心中蟠無きこと、竹を割りたる如く四辺構はず御声襖の外に漏れて、

お次に叩へし巡礼女前刻には頭上に落ちたる弾丸にさへ自若たりし女丈夫が、此一言を聞くと、もにギツクリ

したる様子。

とあって、「予が使へば予が家来」だ、「忠義を盡すにかはりはあるまい」というように、「家来」なら「忠義を盡す」ものと受け止める、無頓着な重教の性格を印象付けている。乱菊が「ギツクリ」するのは、「間者」とは相容れない忠義心への言及に不意を衝かれた驚きを描くだろう。紅葉添削は、

「屹度忠義を尽さして見せう。」と御心中の蟠無きこと竹を割りたりとも謂ひつべし。四辺構はず宜まひし御声

襖の外に漏れて、お次に叩へたる順礼は、前刻には頭上に落来る弾丸にさへ自若たりしに、此一言を聞くと齊しく、心騒げる気色あり。

というように、乱菊の過去や出自に拘泥せず、今後は「屹度忠義を尽さして見せ」という自信あふれる重教の「心中」を焦点化している。乱菊が「屹度忠義を尽さして見せう」と聞いて、「心騒げる気色」を見せるのは、「間者」としての使命を帯びた胸中に生まれた不安を表わすだろう。全集本は、

「屹度忠義を尽さして見せう。」と四辺構はずのたまひし御声襖の外に漏れて、お次に控へし順礼は、思はず手足をわな、かせり。

というように、無頓着な重教の性格にも、「心中」にも言及せず、簡潔に、「屹度忠義を尽さして見せう」という自信あふれる言説だけを記すにとどめる。また、草稿や紅葉添削が、重教に元結を鉄砲で撃たれても「自若」としていた乱菊との比較で「此一言」を聞いた乱菊の反応を語るのに対して、全集本文はその一節を削除し、現在襖の外に控えた乱菊が、此一言を耳にした名状しがたい戦慄を描く。草稿の驚き、紅葉添削の不安、全集本の戦慄と、その優劣はいうまでもない。

第三に注目されるのは、重教と老女との会話の記述である。この場面では、次のように四つの問答が描かれて

いる。

- ① 女を次の間に控えさしていることを老女が告げて対応を問い、重教が「奥の守護に仕れ」と命じる。
 ② 老女が素性の知れない女を召し使うことへの疑問を口にしたのに対し、重教が素性などはどうでもよいと答える。

- ③ 老女が身分に似合わない容貌を懸念したのに対し、重教が顔などどうでもよい、胆玉が入用だと答える。
 ④ さらに老女が、「隣国の間者」の疑いがあるのではないかといかけたのに対して、重教が、家来として「忠義を尽す」ようになる(する)という。

いずれも、老女の問いに対して、重教が答える会話になっている。会話の受け答えの内容としては、草稿・紅葉添削・全集本に大きな異同はない。異なるのは、会話の流れである。草稿と紅葉添削の①の会話は、老女の「伺ひける、」に対して、重教が「領き給ひ」て答える。このやり取りは、全集本では、「お顔を見て何へば」に対して、「領き給ひ」というように呼応する形になっている。これに続く重教の命令について、全集本は「唐突の御仰せに、老女は眉を打撃め」て②の疑問を口にする。この一節、草稿・紅葉添削ともに、重教が乱菊を「奥の守護」に就かせる理由を説明しているだけである。②から③への展開で、草稿は「更に頓着し給はず」という重教と「老女は猶懸念なり」というように両者それぞれの表情を描き分けていて、連関性が希薄である。紅葉添削は「頓着し給はざるほど、老女はいと懸念して」、全集本は、「少しも頓着し給はざるほど、老女はいと懸念して」というように、老女は明らかに重教の態度・姿勢を見て「懸念」しているのである。③から④にかけて、草稿の重教は「ますく無頓着、老女は衝と膝を進め」る。それに対して、紅葉添削は「ますく取合ひたまはざれば老女は衝と膝を進め」るのであり、全集本は、「取合ひ給ふ気色なければ、老女は衝と膝を進め」る。内容的にはかみ合うことのない問

答だが、会話と会話の関連性、緊密性をめざした本文の転成をたどることができるのではなからうか。

以上のように、説明が多く、会話と会話の連関性の希薄な草稿が、簡潔な表現・会話の連関性を紅葉添削で深め、さらに全集本で、説明的な言説を削除するとともに、会話としぐさを連関させた迫真性をもたせる表現を付け加えて、襖の外と内によって形成される場面構成を意識させる本文が成立しているといえよう。

次に、石川近代文学館蔵の翻刻と全集本との校異を掲げ、異同を検証する。なお、草稿を本論巻末に掲載した。

草稿(1)は、全集本の「十」章の始めに相当する。

草稿(1)——【参考】の続き。石川近代文学館蔵、以下同じ

第四

巡礼女は不図せしことより重教公に思はれ／参らせ断つてのおふせにて其より(御□に)召使はるゝことに定まり実妙院と申して二の丸に住ませ／給ふ当代の母君の□□□□召され、君が鉄砲に／て射給ひし時挿頭の菊の散りたるに因みて乱菊と名／を給ひつ、城中に双なき美人なりけり。

重教公は御自□引上げ給ひし乱菊なれば殊の外／御鼠眉にてお表にても近習の者に乱菊がことを語／□□常に賞賛□給ひけり、此の日も例の如く乱菊は／天晴なる女よなど、語出で給ひけるが何かお心に領き給ひ／□□好□□鉄砲□□して□□ま、傍に置き何／□□□□□□御物語を続け□□、近習□□の御心を計り

かね彼の弾丸いかになりゆかむと／戦々兢兢々として安き心無し、
 斯る処へ御氣に入□弥助参り、「唯今出仕候ふ」／と御前に平伏して未だ顔をも上げざるに重教公物／をも謂はず彼の鉄砲を取るより早く／ドンと金□の襖を打抜き給へり、近習等は不意に驚き着／くなりて飛退る、

〔草稿(1)の校異〕

全集本

↑ 鏡花の草稿

▽509・13 思はれ、其のまゝ召使はるゝに定まりて

↑ 思はれ参らせ断つてとおふせて其より召使はるゝに定まり

▽509・13 実貞院

↑ 実妙院

▽510・1 名を乱菊と賜ひしが、

↑ 乱菊と名を給ひつゝ、

▽510・1 城中無双の美人なりと、噂は忽ち高かりけり。

↑ 城中に双なき美人なりけり。

▽510・2・3

重教公は太く乱菊の人となりを受給ひて、足繁く二の丸にならせられ、常に其胆勇を賞し給ひけるが、

▽510・3・5

↑ 重教公はご自□引上げ給ひし乱菊なれば、殊の外御鼻眞にてお表にても近習の者に乱菊がことを語□□常に賞賛□給ひける、

一日また母公の前にて腰元どもを打集へ、傍なる乱菊の却りて迷惑がるに介意なく、例の如く賞めそやし、「子に家来は多くあれども、恐らく汝の如く胆の据はりたる者は得難からむ。」とのたまひけるに、乱菊は遮りて、

↑ 此の日も例の如く乱菊は天晴なる女よなど、語出で給ひけるが

※五一〇頁五行目〜五二三頁五行目まで異同多し。本文参照。

▽513・6 一朝のことなりし、丈助少し後れて出仕なし、

↑ 斯る処へ御氣に入□弥助参り、

▽513・6 君の御前に畏みける、

↑ 「唯今出仕仕候ふ」と御前に平伏して

▽513・6・7

耳許にドンと一発、鉄砲の音轟然として、襖、天井に響渡れり。

↑ 未だ顔をも上げざるに重教公物をも謂はず彼の鉄砲を取るより早く、ドンと金□の襖を打抜き給へり、近習等は不意に驚き蒼くなりて飛退る、

草稿(1)本文十九行は、後掲の影印から明らかなように、四行目から十八行目まで破損(破れ)がはなはだしい。特に十二、十三行目はほとんど解読不能である。全集本の「十」章の冒頭部分、全集本五〇九頁十三行目から五一〇頁十行目まで、鉄砲を向けられても平然としていた「天晴なる」乱菊を重教が賞賛する場面に相当する。前田重教は、加賀前田家第十代藩主である。「石川県史」第二卷(石川県、昭14・3)によれば、重教の母は、「藩士木曾氏の女・実成院」であるが、右の草稿では「実妙院」とある。全集本では「実貞院」と改められている。草稿後半では重教がもう一人「御氣入」の「弥助」を召し出し、いきなり鉄砲で襖を撃ちぬく場面が描かれている。全集本五一三頁六〜八行目に相当する。この間、全集本では、乱菊の勧めによって隠密仲間「丈助」が重教に召抱えられる経緯が記されている。草稿では、乱菊の仲間「弥助」は、乱菊より先に重教に召し抱えられる設定になっていたと推測される。「丈助」は、草稿の「弥助」を改変したものである。愛用の鉄砲を側に置き、近習を驚嘆させようとすする重教公と、謙虚に「城中の勇士達」を称賛する乱菊の発言に感銘をうける重教公と、草稿と全集本の差は大きい。しかし、この一節は、乱菊の発言を契機に丈助を登用させる筋立ての改変によるものといえよう。

なお、泉名月氏旧蔵草稿には、「第二」と冒頭に記した草稿(1)と重複する本文十一行があり、紅葉の添削がある。草稿(2)は、「十三」、「十四」章の一部に相当する。

草稿(2)

傷も附かざりけり、牛山は面皮を欠き額に汗して／平伏すれば御目通をも遠ざけられむと近習は笑止に／思ひける、重教公は大度量、「牛山、汝も強情者よな」／と高らかに笑はせ給ひ敢て咎めむとはし給はねど、牛山は自から恥入り、「恐入つて候ふ」と過言の罪を謝しスゴ／と退出(せり)しける、其夕御殿を下る／とて御門前町を通りけるが、御前の不首尾心／外に堪へず道を行く／切齒をなし満面に朱を灌ぎ(て)、「牛山老たるか」と一喝して来国俊／を抜打ちに土塀の石垣に斬附くれば、拳の牙か修／鍊の妙かはた或は気の精か、さしもに硬き石塊に一寸／ばかり斬込むだり「ウム、然らざれば我死せむが斯く／ては生命に頼あり」と雀躍して／皈るとぞ、斯る手腕を有しながら得て兜を斬らざりしは／什麼これ他なし最初一氣(呵成)の鋭刀は弥助のため／に支へられて次なる躊躇の切尖の鈍りしたためなり、／重教公も御眼敏ければ牛山が(先刻の)氣腕／を見て鉄をも断兼じと危み給ひ、御身の利なきを／知ろしめて太く口惜がり給ひしに、弥助がサソクの頓才にて／

〈草稿(2)の校異〉

全集本

↑ 草稿

▽518・2 切附くることだに得せず、 ↑ 傷も附かざりけり、

▽518・2 3

背に冷き汗を流して、「死罪。」といひさま刀をすてて恐入りてぞ領伏しける ↑ 牛山は面皮を欠き額に汗して平伏すれば御目通をも遠ざけられむと近習は笑止に思ひける、

▽518・4 毛虫親仁の屈したるを快く思ひ給ふのみ、過言のお咎めもなかりしかど、

↑ 大度量、「牛山、汝も強情者よな」と高らかに笑はせ給ひ敢て咎めむとはし給はねど、

▽518・4 5

牛山這々の体にて退出し、恥ぢて同僚にも面を合はさず、

▽518・5 6

↑ 牛山自ら恥入り、「恐入つて候ふ」と過言の罪を謝しスゴ／と退出しける、

其のま、家路に就きけるが、お塚の石垣に添うて歩行みつ、

↑ 其夕御殿を下るとて御門前町を通りけるが、

▽518・6 思はず無念の齒がみをなし、憤然たる雄たけび高く、「牛山老たるか?」

と大喝して、

↑ 御前の不首尾心外に堪へず道を行く／切齒をなし満面に朱を灌ぎ、「牛山老たるか」と一喝して

▽518・7 石垣に切附けしが、刃も溢さず、石二三寸斬込みたりとぞ。

↑ 石垣に斬附くれば、拳の牙か修練の妙かはた或は気の精か、さしもに硬き石塊に一寸ばかり斬込むだり「ウム、然らざれば我死せむが斯く

▽518・9～12

牛山もし其言の如く一刀の下に兜を両断したらむには、重教公は到底渠に対して威厳を保ち給ふこと能はざるにいたりしならむ。／はじめの牛山の氣勢にては、誠に鉄をも斬得つべく見えしかば、君も手に汗握り居られしに、丈助が機転にて

↑ 斯る手腕を有しながら得て兜を斬らざりしは什麼これ他なし最初一気の鋭刀は弥助のために支へられて次なる躊躇の切先の鈍りしたためなり、重教公も御眼敏ければ牛山が気魄を見て鉄をも断兼じと危み給ひ、御身の利なきを知ろしめして太く口惜がり給ひしに、弥助がサソクの頓才にて

ては生命に頼あり」と雀躍して飯をとぞ、

(2)は、藩随一の劍客「小森牛山といふ一国者」が主君の「我儘」を諫めようとして「梅鉢の兜」を斬ろうとして失敗する場面、全集本五一八頁二行目から十二行目、「十三」章末尾から「十四章」の冒頭に相当する。牛山が名刀来国俊で傷つける石垣が、草稿では「御門前町」のどこかであるのに対し、全集本では「お塚の石垣」であるほかには、内容上の大きな異同はない。御門前町は、金沢市内の松原町及び西町の一部の別名。寛永二十年金沢城内に東照宮別当寺を建立した際、その門前にあたる同町を「御門前町」と呼ぶようになったという(『加能郷土辞彙』参照)。全集本は、草稿の近習の心中思惟や牛山の心理の説明などを削除し、簡潔な表現に改めている。

なお、泉名月氏旧蔵草稿は、(2)の前後、五一六頁一行目から五一七頁七行目までの一枚が存する。冒頭に「第五」とある。

草稿(3)は、全集本「十五」の冒頭に相当する。

草稿(3)

第六

奥女中ほど人の悪き者は無し御奥は城中に別／世界を形造りて男を知らぬ婦人天下、／お転婆どもの寄合ひて我儘に日を暮し／さしたる用事あるにあらねば(狐疑、嫉妬、我慢、偏／狭)良からぬことのみ考えをりいはゆる小人閑居して不善を／為すもの嫉妬我慢偏執など渠等が特性を發揮／するに屈竟の魔窟たり、二の丸に住ませ給ふ実妙院殿は重教公の母公とは申せども／産の親御にてはまします重教公は先代の妾／腹なり、されば御名を聞きて思ふ／如きなる老年にはまします未だ三十二の御盛殊に石婦にて／おはしければ三ツ四ツ若やぎて見へ給ひ水々しき／美人なるが賢明伶俐に渡らせ給へば人の／尊敬大方ならず御威勢御奥に輝きて夜を司る月／は是なり、こ、にまた重教公と同腹の／御弟、大音の君と呼べるあり、小立野の大音に／居給へるが御孝心篤き君にして月三載一の日には必／

〈草稿(3)の校異〉

全集本

↑ 草稿

▽521・2 却説乱菊が事へたる二の丸の実貞院は、

↑ 奥女中ほど人の悪き者は無し御奥は城中に別世界を形造りて男を知らぬ婦人天下、お転婆どもの寄合ひて我儘に日を暮しさしたる用事あるにあらねば良からぬことのみ考えをりいはゆる小人閑居して不善を為すもの嫉妬我慢偏執など渠等が特性を發揮するに屈竟の魔窟たり、二の丸に住ませ給ふ実妙院は

▽ 521・3 当主は

↑ 重教公は

▽ 521・4 五つ六つ

↑ 三ツ四ツ

▽ 521・4〜6

見え給ふ。最も当家の妻妾中に、きこえし艶婦なりけるが、重教公御

孝心浅からねば、おのづと母公の御威勢備はり、御奥に輝く月とや謂

はむ、人皆光を仰ぎたり。

↑ 見へ給ひ水々しき美人なるが賢明利発に渡らせ給へば人の尊敬大方ならず御威勢御奥に輝きて夜を司る月は是なり、

▽ 521・7 乙の君とも謂ひ習はし、

↑ ナシ

▽ 521・8 別業に居給へるが、

↑ 居給へるが

▽ 521・8 母子の礼を重んじ給ひ、

↑ ナシ

(3)は、「第六」の冒頭で、全集本では「十五」、五二二頁一行目から九行目までに相当する。全集本の「十五」の書き出しで、重教の義母実妙院及び弟大音の君について記した二節である。草稿の実妙院の住む二の丸の「御奥」

が「男を知らぬ婦天下」で、「嫉妬我慢偏執」の「魔窟」だという紹介を全集本は削除している。実妙院について、草稿は「美人」で「賢明利発」ゆえに「尊敬」されているとあるが、全集本の実貞院は「きこえし艶婦」とあるだけである。義理ある子に恋愛感情を抱く継母という設定と乖離するため訂正したと考えられる。草稿の「ましまさで」を「ましまさず」、「見え給ひ」を「見え給ふ。」に改めるなど、全集本は、長い一文を短く区切っており、明快な表現を指向している。

なお、泉名月氏旧蔵草稿は、(3)に続き、五二二頁九行目から五二二頁四行目まで存する。

草稿(4)は、全集本「十五」章後半に相当する。

草稿(4)

若君判者となり給ひ御一座に歌への御催と／聞くより女中達は皆飛立つ思ひ、「モシ夕栄どの／貴女はお歌がお上手で羨しいきつとお目が附きま／せう」と一人が謂へば一人が横合より、「左様さ露野どの／おつしやる通り夕栄どのには予て御名歌が出来て／居ります直ぐ其を御目に懸けなさるが可い」とざれ／懸る、夕栄は真面目な顔、「おや未だ御題を戴き／ませぬに」楓、「御題は何でも構ひませぬ、ソレ何と／やらに寄する恋」と抱附く、夕栄は突飛ばして、「ヲホ、／お人の悪い」など、姦し這の般のお使はなほ恕／すべきもこゝに一群憎むべきヒソ／談話、「お歌会と／は好き折からアノ順礼乞食を一坐させ恥掻かして／遣りませう」と豕の如く肥へたる腰元、囁かれたる方／は連に領き、「それがようございます成上りの乱菊歌／など知らう道理は無い、ねえ貴女」とまた一人を顧／みる、これも領き、「真赤にさしてやりませう

ねオ、おも／しろい」とこれでも行儀見習ひのため家中の歴々よ／り上り居る嬢の子なり、

〈草稿(4)の校異〉

全集本

↑ 草稿

▽522・15 御一座の歌会

↑ 御一座にて歌会の御催

▽522・15 523・1

色に騒ぐは恕すべきも、こゝに憎むべきひそ〜談話、

↑ 「モシ、夕栄どの貴女はお歌がお上手で羨しいきつとお目が付きませう」と一人が謂へば一人が横合より、「左様さ露野どののおつしやる通り夕栄どのには予ねて御名歌が出来て居ります直ぐ其を御目に懸けなざるが可い」とざれ懸る、夕栄は真面目な顔、「おや未だ御題を戴きませぬに」楓、「御題は何でも構ひませぬ、ソレ何とやらに寄する恋」と抱附く、夕栄は突飛ばして、「ヲホ、お人の悪い」など、姦し這の般のお侠はなほ恕すべきもこゝに一群憎むべきヒソ〜談話、

▽523・1 お歌の会とは耳寄な、

↑ お歌会とは好き折から

▽523・2 と老女より謂出せば、豕の如く肥えたる腰元連に領き、

↑ と豕の如く肥へたる腰元、囁かれたる方は連に領き、

▽523・2 「其がなにより、成上がりの

↑ 「それがようございます成上がりの

▽523・4 と勇み立つ。

↑ とこれでも行儀見習ひのため家中の歴々より上り居る嬢の子なり、

(4)は、二の丸を訪れた大音の君を判者として歌会が開催されると聞いた「女中達」が、乱菊を辱める相談をする一節である。(3)と同じ「十五」章の後半で、全集本五二二頁十五行目から五二三頁四行目に相当する。草稿では、夕栄、露野、楓といった「女中達」が歌の上手下手についてやりとりする会話があるが、全集本は「色に騒ぐ」と簡略化している。末尾の「女中達」が、「家中の歴々」の「嬢様」だという出自に言及した記述も削除されている。なお、泉名月氏旧蔵草稿は、(4)に続き、五二三頁五行目から五二五頁二行目までの二枚が存する。

草稿(5)は、全集本「十六」章の後半に相当する。

草稿(5)

介せず聞かざるもの、如くなり、紅はさも軽蔑せる／語氣を以て、「歌を知らぬ分際で何故歌会の中へ／出られました」乱菊、「墨なりとも磨らうと存じましたて」／青柳は急に差出で、「墨を磨るより殿様にゴマを／おすり遊ばせオホ、」と冷笑す、斯くても乱菊は平／然として顔の色さへ常に変わらず、(此)時しも歌を読／しまひて手を空しうせる腰元どもは呉竹(の)に耳打／(によりて)され青柳等に応援せむと二人三人(おひく)此／処に集り来りて多人数乱菊を取囲り、
紅は到底言のみにては目的(を)の達し難きを慮り、／「ナニゴマをおすりとえ、青柳どの、お口の悪さ如彼いふ／憎らしい口は斯うしてお遣り遊ばせ」と乱菊が堅く／結べる唇を力の限り捻り上げ、「ソレ斯うし

て」とまた／捻返せり、
 斯りしかど乱菊は痛しと思へる状も無く手も出さ／ねば足も動かさず、死灰の如く立ちつゝも、眉は我知らず一閃して思はずも眼を閉ぢたり、花顔柳腰の年／少婦人其態のたほやかなる風にも堪へずと見えな／がら、其肝の大なるは爾き害迫を容るゝ余裕あるなり。

〔草稿(5)の校異〕

全集本

↑ 草稿

▽525・2～3

介せず、知らざるものの如くなり。

↑ 介せず聞かざるもの、如くなり、

▽525・4 卑めたる

↑ 軽蔑せる

▽525・4～6

と謂へば青柳合を入れ、「墨でも磨らうといふ氣か知らぬ。」紅は急に出で、「なに墨を摺る隙があれば殿様にごまをお磨り遊ばす。おほ、」と冷笑す。

↑ 乱菊、「墨なりとも磨らうと存じて」青柳は急に差出で、「墨を磨るより殿様にゴマをおすり遊ばせオホ、」と冷笑す、斯くても乱菊は平然として顔の色さへ常に変らず、

▽525・7 青柳等に応援せむと、

↑ 呉竹に耳打され青柳等に応援せむと

▽525・8～9

青柳は氣兢ひ出し、「紅どののお口の悪さ、如彼いふ憎らしいこといふ口は斯うしてお遣りなさるが可い。」

↑ 紅は到底言のみにては目的の達し難きを慮り、「ナニゴマをおすりとえ、青柳どの、お口の悪さ如彼いふ憎らしい口は斯うしてお遣り遊ばせ」

▽525・11

乱菊は死灰の如くに立ちつゝも、眉は我知らず一閃して、思はずも眼を閉じたり。

↑ 斯りしかど乱菊は痛しと思へる状も無く手も出さねば足も動かさず、死灰の如く立ちつゝも、眉は我知らず一閃して思はずも眼を閉じたり。

▽525・12～13

害迫を容るゝに足るか。

↑ 害迫を容るゝ余裕あるなり。

(5)は、「歌を知らぬ分際で歌会に出た」乱菊を、青柳と紅が責め上げる場面で、全集本の五二五頁二行目から十三行目に相当する。草稿では歌会に出た理由を乱菊が「墨なりとも磨らうと存じて」というのを全集本は、青柳の発言に改めている。また全集本は草稿の青柳と紅の発言を入れ替え、草稿で二回描いていた乱菊の「平然」とした様子を全集本では一回に改めるなどの異同がある。草稿の老女呉竹を単に老女と表記していることも含めて、簡潔性を高めている。

草稿(6)～(8)は、「十七」章に相当する。

草稿(6)

「こは(母公)勿体なき仰(に候ふ)かな」と折目正しく扣へらる、／実妙院は短冊を取上げて筆を持たせ給／ひつもかさねて若君に念を入れ、「此歌人に沙汰／せまいぞや」若君、「御念には及び申さず」ときつと言／を番へ給へばなほ推返し「きつとかい」若君、「誓文／に候ふ」と微笑みながら誓ふが如くに答へられたり／これにて心を安し給ひけむ、さら／と(筆を染め)色紙を／染めて筆を閑き給ひ一度口中にて読返し少時／猶予ひ給ひしが、「いざ」とある声少しく震ひ御膝／をしり、と寄せて玉の腕をさしのべて……若君／はハッと坐を開き件の色紙を推戴きて読み(て読み返／し)給ひしが(御顔)色を变じ、「こは……母(公)上」と思はず其方を見給へば、実妙院殿は面を蔽／ひ、袖を重ねて俯伏し給ひぬ。

若君はふと思出でたる状にもてなし、「もはや腰元／等の詠出でつらむ」と眩く如くたまひつ、庭の面に／立出て給ふ其後姿を眩と見し実妙院殿の眼／の色は常に変わりて見えたりけり。

斯くて若君は菊畑の(彼方此方を漫歩行きし給／ひしが)枝々に結べる短冊を一ツ／取上げて読もて

草稿(7)——(6)の続き

行かせ給ひけるが腰元等の心々に我歌こそと思設けしに／も関はず是ぞと御眼の止まりたる秀逸とて／はあらざりしが最後の一葉には眼を注ぎて幾度／か打誦し裏を返して見給ふに読人の名は記して／なし、若君は傍なる腰元に示し給ひ、「誰かこれ／を讀出でたるぞ」と問はせ給へば打視め、「つひ見たこ／との無い手迹、青柳どの楓どのモシ御存じでは無い／かい」と呼懸けられて立集ひ、「一寸お見せ遊ばしまし」／と若君の手より賜はりて額を鳩めて右瞻左／瞻「なるほど見事に書きました私が私どもではござり／ませぬ」と口々に申しけ

る、若君は打領き、「此(処に)處／に漏れたる女等の未だ他には無きか」とあれば呉竹／は小腰を屈め、「乱菊と申す新参の(お)腰元ばかり／他に漏れたるはござりませぬと彼は下賤の女にて歌／など知るべくも存せられず」と(自分極めの口上)可い加減なあて推量、「フン其女／呼んで見よ」と若君の仰の下、紅は勸声高く／「乱菊どの、若君が召しまする乱菊どの」と呼立つる、／紅葉の茂みに木蔭れて涙を飲みたる乱菊はお召しとあるに(氣を取直し)衣紋を正し直ちに参らむとし(たりしが)けれども、太／く髪の乱れたれば、君の御前には憚りありと手早／

草稿(8)——(7)の続き

く扱きてくる／と巻附けしがとゞめに挿すべ／き櫛笄は先刻に微塵に碎かれたりよりて清／けなる白菊の間近なるを何心なく一枝手折りて髪の束にグイと挿し／其儘御前に馳参せり、

武士ならば差物とも謂ひつべき挿頭の花の目覚まし／きに類希なる美人なれば乱菊が風情際立ちて／袂を連ねて腰元ども色をも香をも蹴落されぬ、／若君は乱菊の艶なる態^{すがた}を御覧じてものをもいはで／おはせしが、老女が少しく声高に、「此が召しました乱／菊」と申し上ぐるに心着きそれよと以前の短冊を(乱／菊に見せ給ひ)「此歌汝は知らざるか」と乱菊に見／せたまへば、仰見て言清しく、「唯、^{はい}名も無き者が詠み／ました」若君、「さては汝が作りしよな」乱菊、「イエ聞覚／の歌にて候ふ」誰かこれを謙遜にあらずして実／に聞覚えの歌と思はむ、「さるにても草書／の美はしさ」と若君感に堪へたまへば、桔梗刈萱女／郎花赤くなりまた蒼くなる。

草稿(6)〜(8)の校異

全集本

↑ 草稿

▽ 527・5〜6

大音の君は畏み給ふ。

↑ 折目正しく叩へらる、

▽ 527・6〜7

実貞院は色紙を取りて、筆を染め給ひつゝ、「此歌、人に沙汰あるな。」

と若君を戒め給へば、

↑ 実妙院は短冊を取上げて筆を持たせ給ひつゝもかさねて若君に念を入れ、

「此歌人に沙汰せまいぞや」

▽ 527・7

若君、「心得候ふ。」と言を番へ給ひけるを、

▽ 527・9〜10

「いざ。」とある声少し震へつ。

↑ 若君、「御念には及び申さず」ときつと言を番へ給へば

↑ 「いざ」とある声少しく震ひ御膝をしり、と寄せて玉の腕をさしのべて

▽ 527・10

若君は

↑ 若君はハツと

▽ 527・11

と言ひ懸けて、母公の顔を窺ひ給へば、実貞院は面を蔽ひ、差俯向き

給ひしが、

↑ と思はず其方を見給へば、実妙院は面を蔽ひ、袖を重ねて俯伏し給ひぬ。

▽ 527・11〜528・1

良ありて顔を上げ、「返歌を給へ、大音の君。」とのたまふ色は火の如し。大音の君は打案じ、「今歌枕候はず、またの日に仕つらむ。」と辞

ふを聞きて気色を損じ、「譬ひ否ぢやとおいやつても、御身が母を強ひたる通り返歌聞かねばなりませぬ。」と強いられて若君は、固此方より強ひしなれば、言免れむに言無く、「さりながら。」とばかり口籠りて俯向き給へば、実貞院も返事を待ちて、双方とも黙然たり。

↑ ナシ

▽ 528・2

「最早腰元のが揃ひつらむ。」 ↑ 「もはや腰元等の詠出でつらむ」

▽ 528・5

菊の枝々に結付けたる、銘々の短冊を一葉々々検め給へば、

▽ 528・5〜6

↑ 菊畑の枝々に結べる短冊を一ツ／＼取上げて読みもて

腰元等は心の内に我歌こそと思へりしに、一首も是はと若君の、御眼に留まるはなかりしが、

↑ 腰元等の心々に我歌こそと思設けしにも関はず是ぞと御目の止留まりたる秀逸とはあらざりしが

▽ 528・8

此歌最めでたし、

↑ ナシ

▽ 528・9

青柳どの、紅どの、

↑ 青柳どの楓どの

▽ 528・12〜13

女中頭の老女ずらりと見渡し、

↑ 呉竹は小腰を屈め、

▽ 528・13

腰元、此処に居合はせ申さねど、

↑ 腰元ばかり他に漏れたるはござりませねど

▽ 528・14～15

若君は兄重教公が御自慢の腰元乱菊、一度は見て置かむと思ひ給ひ、

↑ ナシ

▽ 528・15 青柳甞声揚げ、↑ 紅は勸声高く

▽ 529・2 乱菊は召に応じて、直ちに参らむとはしたりしけれど、

↑ 紅葉の茂みに木蔭れて涙を飲みたる乱菊はお召しとあるに衣紋を正し直ちに参らむとしけれども、

▽ 529・3～5

砕かれたれば、髪を握りて四辺を見るに、恰も可し清けなる白菊の咲出でたるが手近にあり。これ屈竟と折取りて、黒髪束にぐいと挿し、其ま、御前に参りける。

↑ 砕かれたりより清けなる白菊の間近なるを何心なく一枝手折りて髪束にグイと挿し其儘御前に馳参せり、

▽ 529・6 戦場の武士が差物とも

↑ 武士ならば差物とも

▽ 529・6～7

城中一の美人なれば、一層引立つ乱菊の風情に蹴落され、腰元等は顔色なし。

↑ 類希なる美人なれば乱菊が風情際立ちて袂を連ねて腰元ども色をも香をも蹴落されぬ、

▽ 529・9 あふぎ見て、

↑ 仰見て言清しく、

▽ 529・10 「汝か。」「いえ聞覚えの歌にて候。」渠は美に手爾遠波を解せしなり。

▽ 529・11～12

頻に見惚れ給にぞ、老女をはじめ青柳、紅。え、それだから憎い奴。

↑ 若君、「さては汝が作りしよな」乱菊、「イエ聞覚えの歌にて候ふ」誰かこれを謙遜にあらざして実に聞覚えの歌と思はむ、

↑ 若君感に堪へたまへば、桔梗刈萱女郎花赤くなりまた蒼くなる。

(6) から (8) は、連続しており、草稿でいえば実妙院が恋歌を大音の君に披露した後、腰元の短冊を通覧した大音の君が「秀逸」と感じた歌の作者が判明する経緯を描いている。(6) は全集本の五二七頁五行目から五二八頁五行目まで、(7) は同じ行から五二九三行目まで、(8) は同じ行から十二行目まで、全集本の「第十七」の末尾までに相当する。全集本で、実貞院が大音の君に恋歌を見せてその「返歌」を求める一節(全集本五二七頁十一～十五行)が草稿(6)にない。この一節は後日加筆されたものとみられる。この他、(7) で大音の君が乱菊を召す場面で、「兄」の「自慢」の乱菊を「一度は見えて置かう」と考える記述も草稿になく加筆である。また、大音に応待する女中は、草稿で「呉竹」とされているが、全集本では「女中頭の老女」に改められている。草稿(5) に準じた改変である。(8) で、乱菊が「手爾遠波を解」していると説く一文は、草稿では「誰かこれを謙遜にあらざして実に聞覚えの歌と思はむ」という反語文になっていた。さらに「十七」章末で、大音の君が乱菊を称賛するのを聞いて、「それだから憎い奴。」とある末文は、草稿の「赤くなりまた蒼くなる。」を改めたものである。このように、(6) から(8) は、作品のプロットを明確にする改変が少なくない。

なお、泉名月氏旧蔵草稿は、(7) に続き、五二九頁十四行目から五三〇頁十行目まで存する。

草稿(9)(10)は、全集本「十八」章の終わりから「十九」章始めに相当する。

草稿(9)

乱菊は歯を切り苦痛を堪へて声立てず身も動／かさずじつとして責倦むをぞ待ちたりける、されば／老女も実妙院も人形を折檻する心地して張合な／ければ手を止めつ掴み起して突飛ばせば、乱菊／は顔を上げ、「申訳も無き不調法、これで／お免し下さいますか」と謂はせも果てず、実妙／院は冠を振り、「イヤならぬ」と眼注せする、老女は／早くも其意を得て、「なか／、花盗人の成敗は此／からじや何するか見てくされ」と狼心未だ満たざる／様子、乱菊は頭を垂れぬ、あ、其胸中いかならむ／老女はお次に扣へたる腰元どもを呼寄せつ願に／て乱菊を指示し「其大胆者仔細ある、お庭に引出／し縛り上げや」と命くれば花にむら／がる毛虫ども乱菊の両手を取つて左右より、「チャツと立／ちませ」と引立てられ乱菊は身を起して脛も露はに引か／れ行く、後に二人は額を鳩め、花盗人を□するに／とやせむかうやせむとヒソ／く談話、

草稿(10) —— (9)の続き

第六 我一人、「問者と見た」

月は見ざらむと欲すれども蔽ふべき雲なければ下界／に於ける乱菊の惨なる状を見すへはあらず、美人は／石灯笼に繋がれて唯一人庭にあり、蓋し腰元等／の老女の下知をも待たずして思ひ／／に毒手を／振舞ひ半死半生になし果て、漸く立去りたる／後なれば、乱菊は形を崩してがつくりと俯／伏したる、衣紋は背の半ばに抜けて雪の肌のあらはなる／に此処彼処皮破れて筈の痕の紅を点ぜり白く艶／やかなる両の腕は背に捻ちて縛め

られ丈にも余る／黒髪は逆に乱れて地に溢れ風にもまれて脉々／たり、虫はいろ／／の音を鳴きて草の葉に置く露／清く黄菊白菊爛漫と今を盛に咲き香ひて景／色は見所多けれど眼も当てられぬ人の身の上、時しも月前に旅雁一行ひらく／と横たはりて／もの悲しげに鳴渡れり、乱菊は屹と顔を上げ、うる／さき髪を振分けて石灯笼に仰ぎ倚りつ蒼空を／望み見て断腸の情に堪へざりけむ、清き眼に涙／ぐみて苦しげなる呼吸を吻とつきぬ、
爾時肩を掴む者あり、「コリヤ心地は何うじや」

〈草稿(9)(10)の校異〉

全集本

↑ 草稿

▽ 532・7 斯れば、

↑ されば老女も実妙院も

▽ 532・7(9)

煙管を落して実貞院、疲れし腕をさすり給へば、髻を掴みて引起され、乱菊蒼き顔を上げ、「これでお許し下さいますか。」とちつと見られて実貞院は、其眼光に身を竦め、「あれ睨むよ。」と身ぶるひせり。

↑ 掴み起して突飛ばせば、乱菊は顔を上げ、「申し訳も無き不調法、これでお免し下さいますか」と謂はせも果てず、実妙院は冠を振り、イヤならぬ」と眼注せする、

▽ 532・10 老女は此位にては満足せず、「汝、御前様を睨むよな。可し、眼も眩む

やう仕置をして遣る。」 ↑ 老女は早くも其意を得て、「なか／＼、花盗人の成敗は此からぢや何すするか見てくされ」

▽ 532・11 乱菊は首を低れたり。予め未来の苦痛を知る、現在の苦痛は更に甚だし。其胸中はいかならむ。 ↑ 乱菊は頭を垂れぬ。あ、其胸中はいかならむ。

▽ 532・12 老女は腰元どもを呼出だし、 ↑ 老女はお次に叩へたる腰元どもを呼寄せつ

▽ 532・13 青柳等御意は可と、乱菊の両手を取つて、左右より引立てられ、脛も露はに曳かれ行く。 ↑ 花にむらがる毛虫ども乱菊の両手を取つて左右より、「チャツと立ちませ」と引立てられ乱菊は身を起して脛も露はに引かれ行く、

▽ 532・14 後に二人は額を鳩めて惨なる刑を相談せり。 ↑ 後に二人は額を鳩め、花盗人を□するにとやせむかくやせむとヒソ

く談話、

▽ 533・1 十九 ↑ 第六 我一人、「問者と見た」

▽ 533・2 身の上を虫に鳴かせて乱菊は石塔籠に縛められつ、唯一人月夜の庭に在り。 ↑ 月は見ざらむと欲すれども蔽ふべき雲なければ下界に於ける乱菊の惨なる状を見すへはあらず、美人は石塔籠に繋がれて唯一人月夜の庭に

あり。

▽ 533・2 5 恐らくは腰元等の好き犠牲を得たりとなし、老女の指図を待たずして、

思ひのまゝに責め苛み、半死半生にしたりしならむ、乱菊はハヤ弱果てて、腰の紅ちらめくばかり、居住ひ崩せる膝を枕につくりと打伏したる、 ↑ 蓋し腰元等の老女の下知をも待たずして思ひ／＼に毒手を振舞ひ半死半生になし果て、漸く立去りたる後なれば、乱菊は形を崩してがつくりと俯伏したる、

▽ 533・5 6 衣紋背の半ばに脱げて、真白き肩の露はなるに、血紅点々皮破れて、答の痕を印したり。 ↑ 衣紋は背の半ばに抜けて、雪の肌のあらはなるに、此処彼処皮破れて、答の痕の紅を点ぜり。

▽ 533・6 7 雪の腕は背に捻ぢて、堅く蔽く縛められ、丈に余れる黒髪はふさ／＼と地に溢れて、投出したる脛を蔽ひ、風に戦きて最凄絶し。 ↑ 白く艶やかなる両の腕は背に捻ぢて縛められ丈にも余る黒髪は逆さに

▽ 533・7 8 菊香薫じ露白く、月明かに冴えながら、目もあてられぬ惨状かな。 ↑ 虫はいろ／＼の音を鳴きて草の葉に置く露清く黄菊白菊爛漫と今を盛んに咲き香ひて景色は見所多けれど眼も当てられぬ人の身の上、

▽ 533・9 10

斯る時しも同一庭の紅葉の茂を搔潜り、拔足しつ、四辺を見廻し、立頭はれたる忍扮装の壮士、屹と頷き進寄りて、乱菊の耳に口をあて、「秀松どの、秀松どの、」 ↑ 時しも月前に旅雁一行ひら／＼と横たはりてもの悲しげに鳴渡れり、

乱菊は屹と顔を上げ、うるさき髪を振分けて石灯籠に仰ぎ寄りつ蒼空を望み見て断腸の情に堪へざりけむ、清き眼に涙ぐみて苦しげなる呼吸を拔足し吻とつきぬ、爾時肩を掴む者あり、「コリヤ心地は何うじや」

(9)は全集本五三三頁五行目から十四行目で「十八」章の末尾、(10)は五三三頁一行目から十行目に相当する。「十九」章の冒頭であり、連続している。(10)には、「第六、我一人、『問者と見た』という見出しがある。この見出しは、前出『貧民倶楽部』草稿と酷似したのだが、石川近代文学館蔵の『乱菊』の草稿には、見られない。但し、草稿(7)の後、全集本「十八」冒頭に相当する泉名月氏旧蔵草稿には、「第五花盗人『許しは置かじ』という見出しがある。(9)は、「花盗人」乱菊を折檻する場面だが、草稿では乱菊が自分で「顔を上げ」て「御免くださいますか」と問い、「イヤならぬ」と実妙院が拒絶するが、全集本では顔を「引起され」た乱菊の眼光に、実貞院が「身ぶるい」する。(10)では、草稿で「石灯籠に繋がれ」た乱菊が「旅雁」を仰ぎ見る場面が、全集本では丈助の立ち去った後、「二十一」章の末尾に移動している。また、乱菊の様子を見に来た「者」が、草稿では「かたを掴」んで声をかけるが、全集本では「耳に口をあて」て呼びかける。草稿の「月は見ざらんと欲すれども」や「景色は見所多けれど」といった一節を全集で削除している点に明らかのように、草稿の説明的な表現を簡潔な表現に改める傾向がここでも顕著である。

草稿(11)～(15)は、全集本「二十二」章に相当する。

草稿(11)

第七

実妙院は忍びやかに庭に出で芝生を歩みて近づき／給ひ、「もはや時分は可からうぞや、先刻に申附けたる／通り女めをそれ可いやうに」と頤を以てお指揮ある、傍／に引添ふ紅は手に責道具を掲げたり老女は委／細畏り、紅を顧みて、「其細帯を解いて貸しや」紅、／「何になさいます」老女、「泣喚くとやかましい口に結へて／吠へさすまいため」と聞く紅はニコ／顔、「しつかりと／遊はしませ」と解いて渡す細帯を丸げ乱菊の腮／を擡げて口に捻込まむとしたりける、差俯向きて黙／せし乱菊声を懸けて、「ア、およしなさいまし紅さんのお細帯しじきが台なしになると悪い、左様なことな(ら)さら／ずとも声を立てはいたしませぬ」と悪怯わるびれもせ／で押留めたり、老女は少しく極悪気げに、「フンさすがだ／の、可、猿轡さしきは止めにする」と細帯しじきを返せば実妙院、「大事ないかへ、人を呼ぶと悪いそよ」と氣遣はしげに／(のたまへば)見え給ふ、老女は乱菊を知る者なれば、／「ナニ、女らしき女ではおざりませぬ其御配慮御無用」／と謂ひつ、燈籠に巻附けたる縄の余を引解き／松の樹(の)枝に投懸くれば枝を潜りて垂下る其片端を受／

草稿(12) —— (11)の続き

取る紅、「乱菊どの御上意」と力任せにグイと引け／ば後に捻ぢて縛めたる手は空そらまに空を掴みて／(筋も骨も傷くばかり苦と叫ぶ声□や□中の□／□)踵は地を離れたり総身の筋も断れ骨も砕け／むばかりなれば、さすがの乱菊「苦」と叫びしが口中に／死して聞こえず、顔色変じて草の如く呼吸づかひもいと／苦しげなるに

独り魂は自若として、「花盗人御仕置／は斯うあそはすのが御家風か」と土色なせる唇に冷／かなる微笑を洩らせり、

実妙院は眦を釣り、「え、憎らしいアの口にもな／いはせそ打て打て」と芝生を蹴つて苛立ちたまへば、紅が／差出だす弱竹のしなへるを老女手早く引取り、「お、家風でやる斯うするが」と罵りながら振かざすトタンにお錠口の方に声あつて、「乱菊、乱菊は居らぬ／か」と呼ばせ給ふは重教公、
夜更の御入おんいり図に無いこと彼はいかにと三人が不審の／耳を欷つれば、声はたしかに重教公、「母上に至急逢／いた、案内を頼むコリヤ乱菊まう寝をつたかいづれへ／参つた、乱菊々々」と呼ば、り給ふ、
いづれもハッと顔見合はせ実妙院は慌しく走りて

草稿(13) —— (12)の続き

内に入り給へば老女も狼狽へ、「後を頼む」と謂棄て、トパクサと駆込みたり、後に紅アツケに取られ思はず／も手を放てば釣上げられたる乱菊は身を翻して／どうと落ち石燈籠に脾腹を打ちてうむとばかり／に呼吸絶え(たり)ぬ紅は慌てふためき／重教公の召す女此状知れては悪からむと走寄つ／て抱起こし胸を押したり腹を撫でたり、「モシ乱／菊どの、コレ後生だから気を儘に乱菊どの／く」と呼／び活くるさへ忍び声、
「唯々々、今開けまするでおざります」と老女お錠口の／戸を開ければ先刻より(昔立て)唐戸を打敲き苛ち給へる重教公、／待兼ねて衝と御入あり、恐入つて平伏する老／女を見向きもし給はで其ま、実妙院の御居室へ／とならせ給へり、

実妙院は逸早く坐に復り、端然として威儀を／繕ひ何食はぬ、顔にておはせり、重教公は例の如／く無雑作に、
「夜半(に驚かせしは)の推参は余の儀にあらず、／(予は)予て江戸参勤のうるさ、に二年続／けて不参なし今年も参らざるつもり処、江戸の風説穩／かならねば公儀の思はくもいかゝあらむと老臣どもが(断つ)日夜の心配／

草稿(14) —— (13)の続き

余り不便に存すれば過日やう／諫を容れ、江戸に上るに極めしが、うる／さく急かすが氣に入らず、今日は明日(「日」の脱落を補う)はと日を延ばし散々な／ぶつて遣つたれば、明朝は未明に立つ、もり、(未だ此事／渠等には聞かさず)此より直と表に販り俄に左様触／を発だして彼等が不意を驚かしあはつる状を笑ふてやら／むと(存するが、もはや)自分心を定めしゆゑ、一寸／暇乞に参りしなり、来々御目に懸るまで安らかにお／はせ母上」と足許から鳥のおたちとある、蓋し御／存じの御氣象なれば実妙院敢て驚きもし／給はず、「御心を直されて江戸御参勤あらる、とや／俄のわかれお名残は惜しけれど思立ち給ふ明日の日／は黄道吉日、お家のためには祝着します」と母は母／だけの見識なり、重教公はあたりをながめ、「お、／先刻より乱菊の見えざるは」と急に思出して眩き給ふ(に)、実／妙院は思はずどきり

草稿(15) —— (14)の続き

第八

乱菊を呼べなどありては此場合に一大事重教／公を紛らさむと実妙院、「さりながら卒急の御供触、／侍衆の難儀思ひ遣らる悪い戯を遊ばすことの、ヲ／ホ、」と故と他をいふ、重教公も打笑ひ、「十二愉快い左／様い

たさねば出発榮なし、時に乱菊はいかゞせし／な、此へ呼び給へ彼にも名残を惜ませむ」と驚破や／御難題
 実妙院は太く窮して、「のう／＼、呉竹は／居やらぬか」と乱菊は呼ばで老女を召出したり／老女もテツキリ
 其事と競々御前に出でけれ／ば実妙院素知らぬ顔して、(重教)「殿様が御意／遊ばす乱菊は何うしやつた」と
 自分の当惑を人に／譲る、老女もとむねを吐きけるが、「はい、病氣じや／とて臥り居ります」と咄嗟の言抜、
 何の効も無く／重教公、「コリヤ推して参れと左様申せ」老女は真顔／になり、「いかう取乱しをりますれば御
 目見えの儀／は御容赦ありたう存じまする」と躰の可い中返事／重教公は肯入れ給はず、「余計な遠慮いた(さ)
 を誤記とみて訂正すな、形を構ふやうな女で無い其方早く行て連れ参れ」と一旦言出し給ひては曲げ給はぬが
 御気性なり、

〈草稿(11)〜(15)の校異〉

全集本 ↑ 草稿

▽ 539・7〜8

斯る時しも乱菊の肩を掴みて動かす手あり。「こりや待遠かつたであ
 らうの。と乾びたる声を懸けて、石灯笼の後より、顛はれ出づるは老
 女なり。これに続いて実貞院、紅傍に引添うたり。

▽ 539・8〜10

↑ ナシ
 実貞院は老女に向ひ、「最早時分は可からうぞや。先刻申附けたる通
 り、女めをそれ可いやうに。」と頤をしゃくつてお指揮あれば、

▽ 539・10 老女は委細畏まり、責道具を携へたる紅を顧みて、

↑ 実妙院は忍びやかに庭に出で芝生を歩みて近づき給ひ、「もはや時分
 は可からうぞや、先刻申附けたる通り、女めをそれ可いやうに」と頤
 を以てお指揮ある、

▽ 539・12 「さあ／＼汚れても大事ない。」

↑ 「しつかりと遊はしませ」

▽ 539・13〜14

乱菊は眼を睜き、「左様な事をなさらずとも声を立てはせぬわいな。」と
 細き声にて押留めたり。

↑ 差俯向きて黙せし乱菊声を懸けて、「ア、およしなさいまし紅さんのお
 細帯が台なしになると悪い、左様なことをなさらずとも声を立ては
 いたしませぬ」と悪怖れもせて押留めたり、

▽ 539・14〜15

「可し其なればやめにする。」と細帯を返せば実貞院、

↑ 「フンさすがだの、可、猿轡は止めにする。」と細帯を返せば実妙院、

▽ 540・2 一条縄では行かぬ奴

↑ ナニ、女らしき女ではおざりませぬ

▽ 540・3 紅を磨き、「それ紅。」「合点でござんす。」

↑ ナシ

▽ 540・5〜6

縄を手繰りてぐいと引けば、縛められたる乱菊の、手は空さまに空を掴
 みて、
 ↑ 力任せにグイと引けば後に捻ぢて縛めたる手は空さまに掴みて、

- ▽ 540・7～8 何かは以て堪るべき、さしもの女丈夫苦と叫び、顔色草と変じけるが、呼吸づかひ最苦しげに、
↑ さすがの乱菊「苦」と叫びしが口中に死して聞こえず、顔色変じて草の如く呼吸づかひもいと苦しげなるに独り魂は自若として、
- ▽ 540・8 朱を奪ひて紫なす其唇は戦きたり。
↑ 土色なせる唇に冷かなる微笑を洩らせり、
- ▽ 540・10 紅が齎したる、女竹を老女引取りて、
↑ 紅が差出す弱竹のしなへるを老女手早く引取りて、
- ▽ 540・11 戸を敲きて、
↑ 方に声あつて、
- ▽ 540・12 確に君の御声にて、
↑ 声はたしかに重教公、
- ▽ 540・13 いかゞいたした。
↑ いづれへ参つた、
- ▽ 540・14 実貞院先づ慌たゞしく走り入る。
↑ 実妙院は慌しく走りて内に入り給へば
- ▽ 541・1 呼吸絶えける。
↑ 呼吸絶えぬ紅は慌てふためき重教公の召す女此状知れては悪からむと走寄つて抱起こし胸を圧したり腹を撫でたり、「モシ乱菊どの、コレ後生だから気を慥に乱菊どの〜」と呼び活くるさへ忍び声、
- ▽ 541・6 何喰はぬ顔色にて、威儀厳かなり。
↑ 端然として威儀を繕ひ何食わぬ、顔にておはせり、
- ▽ 541・6～7 重教公が突然参られしは母公に暇乞をし給はむためなり。御言には、
「予て
↑ 重教公は例の如く無雑作に、「夜半の推参は余の儀にあらず、予て
↑ ナシ
- ▽ 541・9 早御出立候へと、
↑ ナシ
- ▽ 541・10～11 ものに託け日を延ばし、散々気を揉ませて遣つたればさまではと存じ、
よ〜
↑ 今日明日はと日を延ばし散々なぶつて遣つたれば、
↑ 自分
- ▽ 541・12 既に
↑ 自分
- ▽ 541・13 母上。」と唐突に申されける。
↑ 母上」と足許から鳥のおたちとある、
- ▽ 541・13 卒急を好ませ給ふ、
↑ ナシ
- ▽ 542・1 心静に発程給へ。
↑ ナシ
- ▽ 542・3 どぎり。乱菊を
↑ どぎり／第八／乱菊を
- ▽ 542・3～4 今此場合に妙ならずと、実貞院は笑に紛らし、
↑ 此場合に一大事重教公を紛らさむと実妙院、

▽542・4 余り急な御供触、侍衆の狼狽思ひ遣らる、
 ↑ さりながら卒急の御供触、侍衆の難儀思ひ遣らる
 ▼542・6～7
 なか／＼動き給はぬにぞ、実貞院は太く窮し、
 ↑ 驚破や御難題実妙院は太く窮して、

▽542・7 「喃、老女は居やらぬか。」 ↑ 「のう／＼、呉竹は居やらぬか」

▽542・10 あはよく言抜けしが ↑ 咄嗟の言抜、

▽542・10 病気でも大事な、推して参れ ↑ コリヤ推して参れ

▽542・12 其方早く行つて連れて来い。 ↑ ナシ

(11) から(15) は、実妙院が呉竹・紅に命じて「花盗人」乱菊を松の枝に吊るし折檻するところに、江戸参勤を決意した重教公が暇乞いにくる場面である。(11) は全集本五三九頁八行目から五四〇頁五行目まで、(12) は、同じ行から十四行目まで、(13) は、同じ行から五四一頁九行目まで、(14) は、同じ行から五四二頁三行目まで、(15) は同じ行から十三行目までに相当する。(11) には、「第七」と見出しがあり、実妙院が老女に「指揮」するところから始まるが、全集本ではその前に老女が乱菊に声をかける一節を加筆している。草稿の「ア、およしなさいまし」や「フンさすがだの」などを削除するなど簡潔な表現に改めている。草稿で乱菊が紅に猿轡は不要だと「悪怖れもせ」でいうが全集本では「細き声」でいう改変もある。(12) では、松の木に宙吊りにされた乱菊が「斯う遊はすのが御家風か」と「土色なる唇に冷かなる微笑をも洩ら」す草稿を、全集本では、「紫なす其唇は戦きたり」と改め、

乱菊の女性としての一面を印象づけようという意図が見られる。草稿の乱菊は、顔色や息づかいは苦しげだが、「独り魂は自若として」いるのである。(13) では、重教の来訪に驚いて、紅が綱を持つ手を離し乱菊が地面に落下した後、紅が乱菊を「抱起こし」て「気を慥に」と呼びかける草稿の一節を全集本は削除している。紅はこの後、重教公の前に乱菊が出るよう、「宥める」ことを老女から命じられる。その際の「陪臣の悲しさ」(16) を強調するため削除であろう。(14) (15) では、語句の異同、会話部分に多少の入れ替えはあるが大きな異同はない。

草稿(16) から(21) は、全集本「二十三」章の末尾から「二十五」章の前半に相当する。

草稿(16)

とどぎまぎするを見て取る老女、「詮方おぢやらぬ長い／ものには巻かれると諺にもいふ通り御前様の御威勢で／罪を其女におつ被せる、と其処は陪臣ままとのの悲しさで其女は／口もきかれまい、苦しい時の身代も御奉公と断念めて／往生したがよからうぞや」とかさに懸つて無理をいふ(心)は／紅をして乱菊を宥めさせ御前の首尾を繕はむ／づ下心、果たせるかな紅は(苦しい時の神依頼かみだのみ) 乱菊の背／撫擦り、「モシ切なうござんすかへ、お腹が立たうが堪忍してや、／今御前へ出なすつたら、病気でこんなに取乱すとか何／とかおつしやつて彼のごとは忘れても謂はずにおいて下さいましよ、此ま／でつれなうあたりまして憎いやつとお思ひだらうが御老女様が／無理ばかり私の身にもなつて見て何うぞ庇うて下さいまし」／と苦しい時の神依頼手かみだのみを合はしてぞ拝みける、

此時までも死したる如く正躰なかりし乱菊は紅の肩に／凭たせたる頭を上げて莞爾と笑み、「殿様へ告口して

／貴女方を困らすやうな卑怯な女と思ふてか、慮外な／がら乱菊さもししい心は持ちませぬ」と言清しく承諾／きて身の節々も砕くるばかり苦痛に堪へぬをじつと押へ、解けて乱／る、帯引占め、しやむと立ちたる気丈の烈婦、紅は／嬉しさの余り、「お、難有い」も曇声、お廊下に立ちながら／

草稿(17) —— (16)の続き

己が櫛にて乱菊の髪を撫附け束ねて遣り、「これで／少しは落着いた」と後姿をつく／く視め、あ、／さてもいたはしや年端もゆかず城中には頼にするもの／も無い女、然もやさしい志、前の世の敵なりしか何とて／此までいぢめしぞと悔悟の涙を泛めつ、前へ回して／乱菊の顔を差覗き、「お顔の色が——悪いねえ」と／保ち兼ねて一雫、乱菊は却つてこれを慰め、「病／気だと申しませうお配慮遊ばすな」と謂ふになほ／さら堪兼ね、「え、まう一層私等の邪慳なのをいふて退／けたが可うござんす」と思切つて泣きながら介抱しつ、行きたる後に老／女は腕を拱きて、「ても恐ろしい女ぢやな」

紅は襖のそとに耳傾くれば乱菊が重教公に謁見／しておのが姿を病気ゆゑと言繕ひしを聞くより／も、「なんにもいはぬ」と口の裡、

草稿(18) —— (17)の続き

第八

乱菊が病と謂ふに重教公は其容躰を憂慮ひ給ひ／医師のことなど懇におふて置かれ養はせよとて休息を／賜ひし後母公に辞してお表に皈られけるが即夜直ちに／発足の命を伝へて飽食の諸士が安眠を驚かし迅／雷耳を蔽

ふに違あらず金沢の城を発足せ給ひぬ、

乱菊は其より以来己が部屋に引籠りて身の疼痛を／養へるが、紅は其恩に感じてまた旧の如き紅ならず、

草稿(19)

第九

乱菊が守護神なる重教公は深夜の供触に飽食／安眠の士を攪破して迅雷耳を蔽ふに違あらず翌／(朝早)金沢城を(朝に)発足せ給ひぬ、

乱菊は部屋に籠り身の疼痛を養へるが、紅は其思／に感じ且つ其徳に化せられて復た旧の紅ならず、(日夜)／公務の違さへある時は日夜枕頭に附添ひて母の／如くに親切を盡し徒然を察してヨモヤマの物語或は／己が見聞せる城中の出来事など洩らさず語り慰め／たり、されば乱菊はみづから聞きみつから見ることを／せざれども城中日々の出来事一つとして乱菊が耳目を／免かるゝはあらざりき、

然する内に粗癒へて手足も旧に復したれば起出／で、勤をせむと乱菊の謂ひけるを、紅は強て押留／め、「未だ何ごともたまはねど御前様の御気色計り／難しまた老女の心も知れざればし此まゝに籠り給へ、」と身の為をいふ言に従ひなほ出仕せざり／ける、

斯くてあること殆むど旬日翌月第二の一の日即ち乙の君が参りたまふべき一日の朝までは何事もあらで

草稿(20) —— (19)の続き

過ぎつゝ、さるほどに、乙の君は先達つての歌会に、母上実妙院(より)／の御手より一葉の色紙を賜はりしが

読むに其心解し難く、(実 是否の判断すべきやうなくまた(其)の日と言逸れて其(翌)一日は館に飯り給ひつ其より人知れず頭を脳ましとさまかうさま考へ給へど歌の意味は判し兼ねたり、例によりて今日御殿に伺候せば必ずや御歌の評を促し給ふに相違なし然る時は何とかこたへむ我知らずと謂はむには固此方より強いて歌を求めしなれば母を弄ぶとて怒り給はむさればとて可と申さむか更に其意を得ざるをやいかはせむととつおいつ、人に謂はじと誓ふたれば誰に相談せむやうなしさらば此窮苦を免れむため母上に逢はざらむか重教公は御留守(なり)の内殊に見えざらむは子の道ならずといかなる歌か知らねども身も瘦するまで弱らせ給ふ

氣を励まして朔日(の朝早)には早朝二の丸に来らせ給へ(ば)りお錠口の戸は開きたれど腰元等は四辺に見えず、遠慮あるべき御身ならねば其まづつとお通りあり早腰元の来れかし母上に案内を請はむと彼方此方を見給へど広き御奥殿森として未だ一人も出来らず、

草稿(21) —— (20)の続き

侘しけにイみ給ひけるに、朝寒の風一陣明放したる庭口より得ならぬ薫香はしく御袖に音信る、にぞふと其方を見給へば、朝露重げに園生の菊咲乱れたる花壇を前に後姿の美人あり

小袖の(縞柄も)縞も帯の地も身に合ひて見好げなるが東の空に立向ひ天を拝する状なりけり、若君は之を見て何とか思ひ給ひけむ(声をも懸けで背後に近)庭下駄を引懸けて徐かに渠に近附き給ふ美人は聲音を聞きながら冷然として見も返らず、

若君は背後に寄り、少時ためらひ給ひしが思切つてしなやかに御手を肩に懸け給ふ、斯くても未だ見返へらず、若君は声低く、「相見しは唯一度ながら覚えてしりぬ御身は乱菊」さても見事に咲いたるかなコヤ母上には内証にて其花一枝与へずや」とそと揺動かし給ふ時、やうく此方を顧みしは、今朝しも床を離れたる雨後の海棠病後の花、一しほ艶なる乱菊なり光源氏と唱はる、乙の君にしか謂はれて袖と袂は相触れながら更に恥らう気色もなく、「御前様／＼に問ひ給へ、私(のま、にはなりません)はチットも存じません」と素気な(く謂)

〈草稿(16)～(21)の校異〉

全集本

↑ 草稿

▽ 543・11 斯ういふことの身替も、 ↑ 苦しい時の身代

▽ 543・12～543・1 紅を困らして渠をして乱菊を宥めさせ、己が首尾を繕はむず下心。 /

▽ 544・8 心を励まし、 ↑ 紅をして乱菊を宥めさせ、御前の首尾を繕はむづ下心、果たせるかな

▽ 544・9 紅は胸撫下し、 ↑ じつと押へ、解けて乱る、帯引占め、

▽ 544・10～11 姿ばかりか心さへ、やさしき者をいかなれば、今まで邪慳にしたこと

ぞと、悔悟の涙を浮べつ、 ↑ あ、さてもいたはしや年端もゆかず城中には頼りにするものも無い女、然もやさしい志、前の世の敵なりしか何とて此までいぢめしぞと悔悟

▽ 544・13 お憂慮なさんすな。 ↑ お配慮あそばすな、
の涙を浮べる泛めつ、

▽ 544・14 一層殿様へ、いうて退けたが可うござんす。

▽ 544・14 ↓ 15 ↑ 一層私等の邪慳なのをいふて退けたが可うござんす。

打泣きながら導きたる、後に老女は腕を拱き、「てもした、かな女ぢやな。」 ↑ 思切つて泣きながら介抱しつ、行きたる後に老女は腕を拱きて、「てもも恐ろしい女ぢやな」

▽ 545・1 ↓ 3

紅は襖の外に密かに竊聞して、乱菊が重教公に謁見せる様子を窺ふに、君は果たして渠が状の尋常ならぬを訝り給ひ、其仔細を問はるゝに、乱菊は約を違へず、病氣と言繕ふを聞くよりも、紅は伏拝みて、「なんにも謂はぬ。」と口の裡。

▽ 545・5 ↓ 6

即夜直ちに命を伝へて、飽食の諸士が安眠を驚かし、

↑ 第九ノ乱菊が守護神なる重教公は深夜の供触に飽食安眠の土を攪破して

▽ 545・7 爾来乱菊は渠が部屋に引籠りて

↑ 乱菊は其より以来己が部屋に引籠りて

▽ 545・7 其恩に感じ

↑ 其思に感じ且つ其徳に化せられて

▽ 545・8 妹の如き深切を盡し、 ↑ 母の如くに親切を盡し

▽ 545・10 間者の耳目を ↑ 乱菊が耳目を

▽ 545・12 ↓ 14

殊に紅は城中の風説なりとて、左の数言を洩らせし時は乱菊は我知らず蹶起きたり。ノ曰、「重教公は予てより隠居の望おはせしが、此度の参観を機として、世を辞し給ひ、家督は御弟大音の君に譲り給ふべき御心なり、」と。 ↑ ナシ

▽ 545・15 乱菊はこの風説を聞くとともに、俄かに病氣癒えたりとなし、勤をせむと謂ひけるを、紅は強て押留め、

↑ 然する内に粗癒へて手足も旧に復したれば起出で、勤をせむと乱菊の謂けるを、紅は強て押留め、

▽ 546・6 却説小立野なる大音の君は、往にし日の歌会に、実貞院のお手づから

↑ 一葉の色紙を賜りしが、 ↑ 斯くてあること殆むど旬日翌月第二の日即ち乙の君が参りたまふべき

↑ 一日の朝までは何事もあらで過ぎつ、さるほどに、乙の君は先達つての歌会に、母上実妙院の御手より一葉の色紙を賜りしが

▽ 546・7 返歌はまたの日 ↑ またの日と

▽ 546・9 ↓ 10

寧ろ歌の作者たる母公の心中を計り兼ね給ひしなり。読者願はくば記

憶せられよ、実貞院は大音の君の継母にして、且つ閨淋しき寡婦なることを。

↑ ナシ

▽ 546・11～13

他に見すべき歌ならねば、堅く心に秘め給ひつ、返歌の責を免れんため、再び見えざらむには、母公を恥かしむるものに肖てこれ却つて悪からむと、固より御孝、心篤き若君なれば、進まぬ足を励まして、

↑ 例によりて今日御殿に伺候せば必ずや御歌の評促し給ふに相違なし然る時は何とかこたへむ我知らずと謂はむには固此方より強いて歌を求めしなれば母を弄ぶとて怒り給はむさればとて可と申さむか更に其意を得ざるをやいかゞはせむとつおいつ、人に謂はじと誓ふたれば誰に相談せむやうなしさらば此窮苦を免れむため母上に逢はざらむか重教公は御留守の内殊に見えざらむは子の道ならずといかなる歌か知らねども身も瘦するまで弱らせ給ふ／＼氣を励まして

▽ 546・14 腰元どもの出迎へず、暁の夢を食るなるべし。

↑ 腰元等は四辺に見えず、

▽ 547・1 誰ぞ来よ

↑ 早腰元の来れかし

▽ 547・2 四辺に人は無かりけり。

↑ 未だ一人も出来らず、

▽ 547・3 得ならぬ薫を齎せり。

↑ 得ならぬ薫香ばしく御袖に音信るゝにぞ

▽ 547・4 東の空に手を合はせて、ものを念ずる状なりし。

↑ 小袖の縞も帯の地も身に合ひて見好げなるが東の空に立向ひ天を拝する状なりけり、

▽ 547・6 若君は衝と進み寄り、背後より声低く、

↑ 若君は背後に寄り、少時ためらひしが思切つてしなやかに御手を肩に懸け給ふ、斯くても未だ見返へらず、若君は声低く、

▽ 547・7 其菊一枝与へずや。」と背打ち叩き給ふ時、

↑ 其花一枝与へずや」とそと揺動かし給ふ時、

▽ 547・8～9

光源氏と唄はれ給ふ大音の君と面を合はせ、

▽ 547・9～10

↑ 光る源氏と唱はるゝ乙の君にしか謂はれて

「菊がお欲しく候はば、御前様に問ひ給へ。」

↑ 「御前様に問ひ給へ、私はチツトも存じません」

(16)から(21)は、折檻の痛みを病氣と偽つて重教との対面を果たした乱菊が、療養の日々を過し、起きたした日の朝、実妙院を訪ねて二の丸を訪れた乙の君(大音の君に声をかけられるまでを描いている。(16)は全集本の五四三頁九行目から五四四頁九行目、(17)は、同じ行から五四五頁三行目まで、(18)は、同頁四行目から七行目まで、(19)は、(18)と同じく四行目から五四六頁三行目まで、(20)は、同じ行から五四七頁二行目まで、(21)は、同

じ行から十行目までに相当する。

(16)では老女が紅を論す一節の草稿「其女に」を全集本で「和女おまへに」、同じく「其女は口もきかれまい」を「御前ごまへには□も利かれまい」に改めているが、「其女」の読みは「そなた」と考えられる。内容上の異同はない。(17)では、(16)で乱菊が「告口」しないという言葉に心を動かされた紅が、改めて乱菊を「あ、さてもいたはしや年端もゆかず城中には頼にするものも無い女」と感じる草稿の一節を削除、重教と乱菊の対面を描いた一節、「君は果して渠が状の尋常ならぬを訝り給ひ、其仔細を問はるゝに、乱菊は約を違へず」を全集本は加筆している。(18)は、冒頭に「第八」とある。「第八」章は、(15)の冒頭にもあり、本文も七行にとどまる。「第九」の誤記の可能性が高い。別稿ないしは、書きかけたもの途中で放棄して改めて(19)を「第九」として書きだした可能性がある。(19)では、冒頭の「乱菊の守護神なる」を全集本では削除、献身的に看病する紅をたとえて草稿で「母」とあったものを全集本で「妹」と改めている。また、草稿では、乱菊は療養の結果傷も「粗癒へ」て「起出」したとあるものを、全集本で重教が大音の君に「家督」を「譲」という「風説」を聞いてはね起きるといふ一節を加筆している。また、全集本では、大音の君が二の丸を訪問したのは、「翌月第一の日」、「霜月朔日」とあるが、草稿は、「翌月第二の日」(十月十一日)となっている。霜月は、菊の開花にふさわしいが、歌会が九月一日に催されたことから考えると草稿のほうが矛盾がない。(20)では、実妙院の歌の真意を理解できない乙の君の苦悩の内容に異同がある。草稿では、「御殿に伺候」すれば必ず「御歌の評を促し給ふに相違なし」として、「何とかこたへむ我知らず」と苦悩する。全集本では、「母公の心中を計り兼ね」ている大音の君が「返歌の責を免れ」たいと願うと改変された。孝心から不本意な訪問をするという葛藤は共通している。草稿の「歌の評」を全集本では「返歌」に改める大きな違いがある。また、全集本では、語り手が「読者願はくば記憶せられよ、実貞院は大音の君の継母にて、且つ閨淋しき寡婦

なることを」と読者に呼びかける一文を加えて注意を喚起している。(21)は、乙の君が庭先にたたずむ乱菊に声をかける場面である。草稿では、東の空に拝する乱菊を「小袖の縞も帯の地も身に合ひて見好げなる」と描写するが、この一節を全集本は削除する。草稿で乙の君は、乱菊に近づき「思切つてしなやかに御手を肩に懸け」て「そと揺動か」すが、全集本では大音の君は声をかけて、「背打ち叩き給ふ」と改めている。

草稿では、はじめ「相見しは唯一度ながら覚えてしりぬ御身は乱菊」とあったものを削除したことで併せて、乙の君の乱菊への好意を抑制した表現に改めているといえよう。(19)の加筆、(20)の「歌の評」を「返歌」に改変するなど、作品のプロットを明確にする重要な訂正が、これらの一節にみられる。

なお、泉名月氏旧蔵草稿には、(21)の後、全集本「二十六」冒頭に相当する「第十」一枚がある。

草稿(22)

(を見る)に近づくことに飛蒐つて刺通し自殺をするは易か／りしが、御姿を見る(毎には、)時はおいたはしさに目もくらみ、つひ／にはたさで過ぎました、先達ては重教どの江戸に参勤／なされたれば、此図をはづさず彼(処)地にて還勤を／す、め参らせ、既に御承知なされしより風聞もはや御／城に(隠れて)聞こえて隔も候はず今あなたをさへ／亡き者にしてのければもう成就父は嘸かし首を伸べて／吉左右を待ち候はんと心を鬼にいたしたればたとひ此／お茶召さずとも、とても／免れはし給はじ、父のいひつけ重ければ、毒と知りつ、／持て参り見す／飲ませ参らせられたれば、妾が毒殺したるに／同一、これにて役目は遂げました。妾の自害／は心中立、今朝賜はりし挿頭に酬る参らす／寸志、受け給へや」と握りたる手をしめつけて身を／震はし血汐に誠を絞りける、

若君は聞くことごとくに心激して(見悶へすれば毒／は疾くも五躰に廻りてものいひに)ものいはむとはしたまへ／ど毒の利目か舌硬りてたゞ唇のわな、くのみや、あ／りて花房姫は若君の手を離し衣紋を繕ひ給ふ／時、若君は苦と叫びて口に手をあて給ひしがどつ

〈草稿(22)の校異〉

全集本

↑ 草稿

▽561・2～6

いかに誤り給ひたる、私は君を刺さむとて、隙を窺ふお家の仇、固より毒と知りつゝも、薄茶を召すを留めざりしも、仕方は撰はず若君の失せ給はむを願へばこそ、譬ひ毒茶を召さずとも、私が胸の剣もて刺し参らせむず今日の覚悟、さすれば毒は母公様の装ひ給ひたるものは云へ、私は私が若君を毒殺したる思ひなれば、慕はれ参らすことは出来ず。

↑ に近づくごとに飛蒐つて刺通し自殺するは易かりしが、御姿を見る時はおいたはしさに目もくらみ、つひにはたさで過ぎました、先達では重教どの江戸に参勤なされたれば、此図をはたさず彼地にて環勤をすゝめ参らせ、既に御承知なされしより風聞もはや御殿に聞こえて隔も候はず今あなたをさへ亡き者にしてのければもう成就父は撫かし首を伸べて吉左右を待ち候はんと心を鬼にいたしたればたとひ此お茶召さずとも、とても免れはし給はじ、父のいひつけ重ければ、毒と知りつゝ、持て参り見す／＼飲ませ参らせられたれば、妾が毒殺したるに同一、

▽561・6～10

と襦袢の袖を噛み占めて、君を瞻る眼の中に堪へぬ涙ぞ満ちたりけり。

これにて役目は遂げました。妾の自害は心中立、今朝賜はりし挿頭に酬み参らす寸志、受け給へや

／＼三十二／大音の君は乱菊が語れる由を聞き召して、何か謂はんとし給ひしが、鳩毒の効能恐るべし、早く既に先刻よりしてキヤ／＼胸先に差込みたるが此時俄に烈しくなりて、虚空を掴み給ふと見えし、両手を咽喉を搔撈りて、どつと血汐を吐きたまひ、

↑ と握りしめたる手をしめつけて身を震はし血汐に誠を絞りける、若君は聞くことごとくに心激してもものいはむとはしたまへど毒の利目か舌硬りてたゞ唇のわな、くのみや、ありて花房姫は若君の手を離し衣紋を繕ひ給ふ時、若君は苦と叫びて口に手をあて給ひしがどつ

(22)は、毒の入ったお茶を乙の君が飲んだ後、花房姫が乙の君の刺客だと告白する場面である。全集本の五六一頁の二行目から十行目に類似した場面がある。全集本で、実貞院が大音の君を殺害しようと毒入りのお茶を乱菊に給仕させ、毒茶と知りつつ大音の君が口にして、死を前に乱菊に恋心を告白する。草稿ではお茶を給仕する女性が「乱菊」ではなく、「花房姫」となっている。しかも、乙の君の殺害を命じるのが「父」という。全集本の乱菊は、幕府の「我君松平左京の殿様」(十九)の密命を受けて加賀藩に潜入したという設定である。

全集本では、乱菊の本名は、「秀松」(十九)であった。草稿で「花房姫」は、「姫」とある以上、高禄の武士の娘にちがいない。草稿では、乱菊は、松平左京の殿ないし、側近の娘で、刺客となって、重教の弟大音君殺害の密

命を受けて金沢に來た可能性が考えられる。

以上をまとめれば、次のようになる。

個人蔵の草稿一枚(参考)に、石川近代文学館蔵の草稿二十二枚を加えた二十三枚の草稿は、全集本「三十五」章、八十頁のうち、「九」〜「十三」章、「十五」〜「十九」章、「二十二」〜「二十五」章、「三十一」章に相当し、全体の三分一強に相当する。

乱菊が奥女中の一人として重教に召抱えられる「参考」が全集本「九」章に相当し、重教が二の丸御殿で乱菊の胆勇を賞賛する草稿(1)の見出し「第四」が全集本「十」章、大音の君が二の丸を訪問する草稿(3)の見出し「第六」が「十五」章、石灯笼に縛られて折檻される草稿(10)の見出し「第六 我一人、問者と見た」が「十九」章、松の木に宙釣りにされる草稿(11)の見出し「第七」が「二十二」章、老女が乱菊を宥めるよう紅に命じる草稿(15)の見出し「第八」が「二十三」章、重教が参勤交代のため江戸に出発したことを記す草稿(18)の見出し「第八」と草稿(19)の見出し「第九」が「二十四」章に対応する。「第六 我一人、問者と見た」は、前作『貧民俱樂部』の慶応義塾図書館蔵草稿の見出し、「第一 毎夕新聞社「ご苦労だね」」、「第二 婦人慈善会「おい、姉様」」に類似するが、見出しを除けば後出の原稿影印の通り、他の草稿本文との形態上の異同は認められない。草稿(6)以降、振り仮名の大半を欠くのは、下書きを書き終えてから振り仮名を付す作業を中断したためと考えられる。草稿一枚当たり、二十行前後、読点のみで、会話の「」内の句読点を欠くという共通点から、二十三枚ともに、同時期に執筆されたものと考えられる。

「参考」の本文異同の検証から、説明的な表現が多く、会話と会話の連関性の希薄な草稿を、紅葉添削が簡潔な表現に改め、会話と会話の連関性を高め、全集本文で、さらに説明的な言説を削除するとともに、会話と仕しぐさを連関させた迫真性を持たせる表現を付け加えていたことを指摘した。これを踏まえて、石川近代文学館蔵の草稿から全集本への本文の転成をまとめれば、以下の通りである。

筋立て・構想、人物像の問題点は、草稿(1)で寵臣弥助が登城するや否や室内で発砲する重教を、全集本で乱菊の話に耳を傾け、丈助に関心を示する重教に改め、乱菊の手引きで登用されるように改めていること、草稿(3)で、「賢明利発」で人々から「尊敬」されている「水々しい美人」実妙院を、「きこえし艶婦」実貞院に改めていること、草稿(6)で実妙院が大音に恋歌を見せただけでなく、返歌を求めるよう全集本で加筆したこと、草稿(19)で江戸に赴いた重教が家督を大音に譲る決意を固めたという「風説」を療養中の乱菊に腰元紅がもたらす一節を全集本で加筆していること、草稿(20)で二の丸御殿の継母に挨拶に行く大音の君が「歌の評」ではなく「返歌の責」に苦悩することに改めていること、さらに最後の草稿(22)で、大音の君に毒茶を運んで死に至るのを見届け、自らも自害する決意をかたる乱菊を「花房姫」と記していることである。

当初の構想では、老中松平左京ないし側近の娘「花房姫」を加賀藩に「問者」として潜入させ、仲間の弥助共々藩主重教に召抱えられた後、重教の後継を徳川家から迎えるために、大音の君の殺害を謀るものであったことをうかがわせる。推敲の過程で、花房姫を松平左京の派遣した問者秀松に改め、仲間の丈助を重教に召抱えられるよう幹旋し、大音殺害の機会をねらうことに改めたものである。大音に継母が求める歌の批評を返歌に改めるなどの構想上の転成も、推敲ならびに紅葉の添削を通じて行われたものと想像される。

この他、草稿(2)で重教を諷めようとして、「梅鉢の兜」を斬ろうとした小森牛山を描く一節で、近習の心中思惟や牛山の心理説明を削除し、草稿(3)で長文を短文に区切り、草稿(4)で歌会に望む女中たちの会話や出自を

削除、草稿(5)で折檻にも平然としている説明を一回に改めるなど、説明が多く時にはわき道に逸れようとする草稿を削除整理して、全集本は簡潔な表現を指向し、作品の筋立てや主題を明確にする加筆をしているということが出来る。会話については、「参考」の検証結果と同様のことがいえる。草稿(5)で歌会に乱菊が参加したことを腰元達が語る一節、草稿で

紅はさも軽蔑せる語氣を以て、「歌を知らぬ分際で何故歌会の中へ出られました」乱菊、「墨なりとも磨らうと存じて」

青柳は急に差出で、「墨を磨るより殿様にゴマをおすり遊ばせオホ、」を、全集本は、次のように記している。

紅はさも卑しめたる語氣を以て、「歌を知らぬ分際で何うして歌会へ交つたらう。」と謂へば青柳合を入れ、「墨でも磨らうといふ氣か知らぬ。」紅は急に差出で、「なに墨を磨る隙があれば殿様にごまをお磨り遊ばす。おほ、」と冷笑す。

右のように、草稿では、紅と乱菊の問答は、並列されているに過ぎない。全集本では沈黙する乱菊を前にした紅・青柳の会話に改変し、紅の問いに青柳が乱菊の「氣」を推測し、「合を入れ」る。紅も真意を意図的に曲解して、二人で眼前の乱菊を愚弄する。巧みな改変といえよう。また、草稿(6)で大音の君が継母に歌の披露を願う場面、継母が継子に恋を打ち明ける場面は、

「こは勿体なき仰せ仰かな」と折目正しく扣へらる、実妙院は短冊を取上げて筆を持たせ給ひつゝ、もかさねて若君に念を入れ、「此歌人に沙汰せまいぞや」若君、「御念に及び申さず」ときつと言を番へ給へばなほ推返し「きつとかい」若君、「誓文に候ふ」と微笑みながら誓ふがごとくに答へられたり、これにて心を安し給ひ

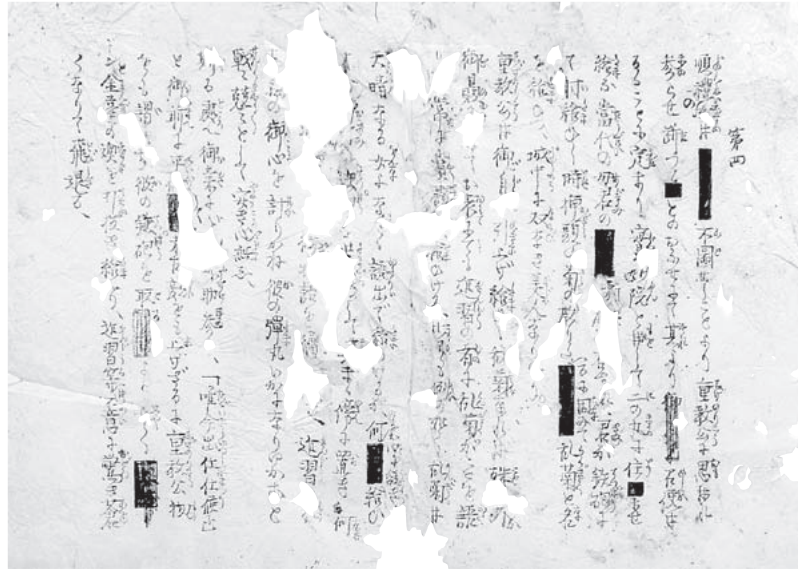
けむ、さら〜と色紙を染めて筆を闇き給ひ

というように、実妙院は、若君に何度も歌について他言しないよう求め、確約を得てから「筆を染め」るが、全集本は、

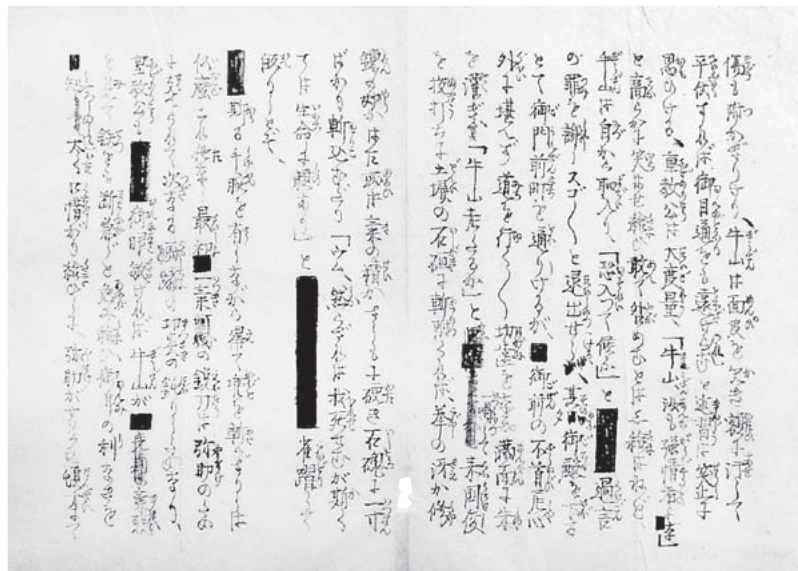
「勿体なきおほせかな。」と大音の君は畏み給ふ。実貞院は色紙を取りて、筆を染め給ひつゝ、「此歌、人に沙汰あるな。」と若君を戒め給へば、若君、「心得候ふ。」と言を番へ給ひけるを、母公なほ推返して、「きつとぞや。」と念を入れたり。若君は微笑みながら、「御念に及び申さず、慥に心得候。」と誓ふが如く答へらるれば漸く心を安し給ひ、色紙を染めて筆を闇き、

というように、実貞院が「筆を染め」ながら若君に他言しないよう求め、確約を得る。また、「此歌人に沙汰せまいぞや」若君、「御念に及び申さず」と「きつと言葉番」えるというように紋切り型の表現になっている草稿の問答に対して、全集本では、「此歌、人に沙汰あるな。」と「若君を戒め」と、若君が「心得候ふ。」と「言を番へ」る。また、草稿の若君は、「御念に及び申さず」、「誓文に候ふ」というように始めから強く確約するのに対して、全集本の若君は、「心得候ふ。」、「御念に及び申さず、慥に心得候。」と「誓ふが如く答」えるというように、段階を追い深化する。「参考」でも指摘したように、台詞を並べた草稿の問答を、全集本では、しぐさや表情と連関させた迫真性を持たせる会話表現に改めているといえよう。

右のように、石川近代文学館蔵の草稿は、紅葉の添削を受けた泉名月氏旧蔵の原稿とほぼ同時期に執筆されたものと考えられる。紅葉の添削や指導により、説明や本筋と無縁な一節を削除して簡潔性を高め、重教の後継に関連した幕府の間者の活躍、継母の継子への恋という筋立てを際立たせ、会話と会話を結びつけるしぐさや表情の迫真性を高めるなどの改変によって、全集本文が成立したものと考えられる。なお、泉名月氏旧蔵草稿は、「鏡花遺品

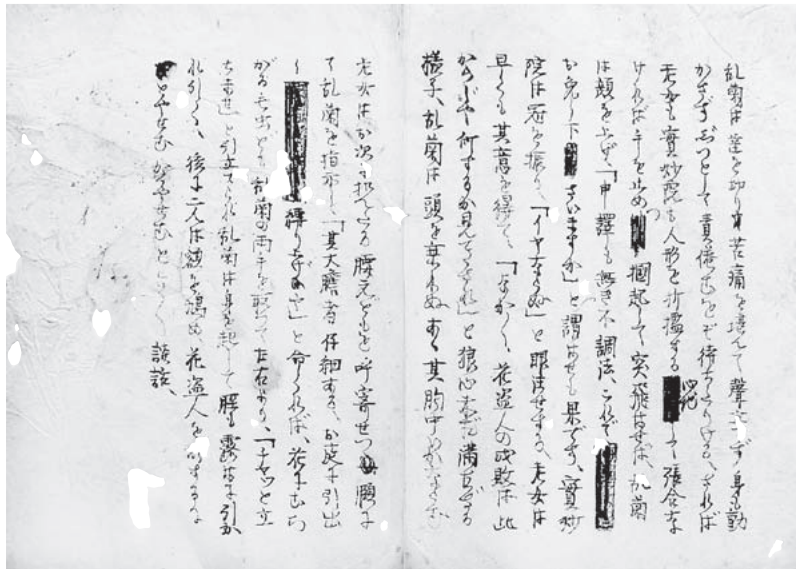


草稿(1)

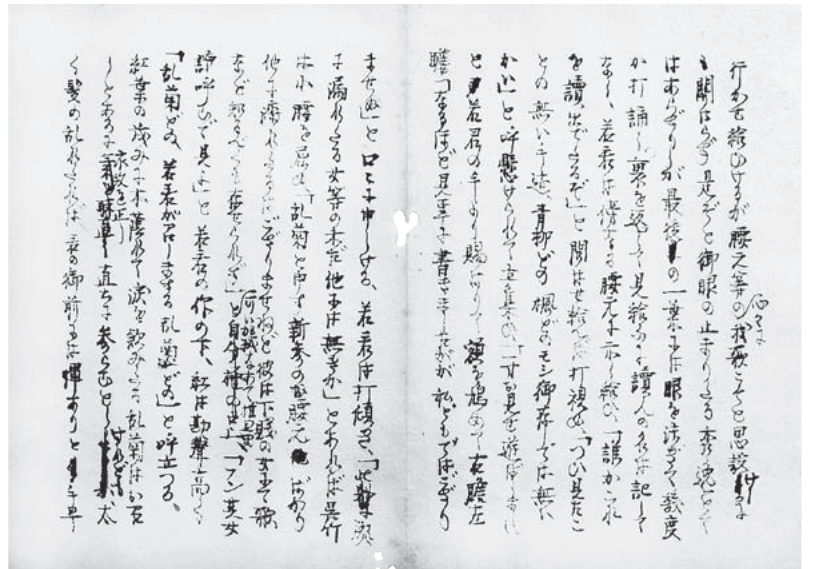


草稿(2)

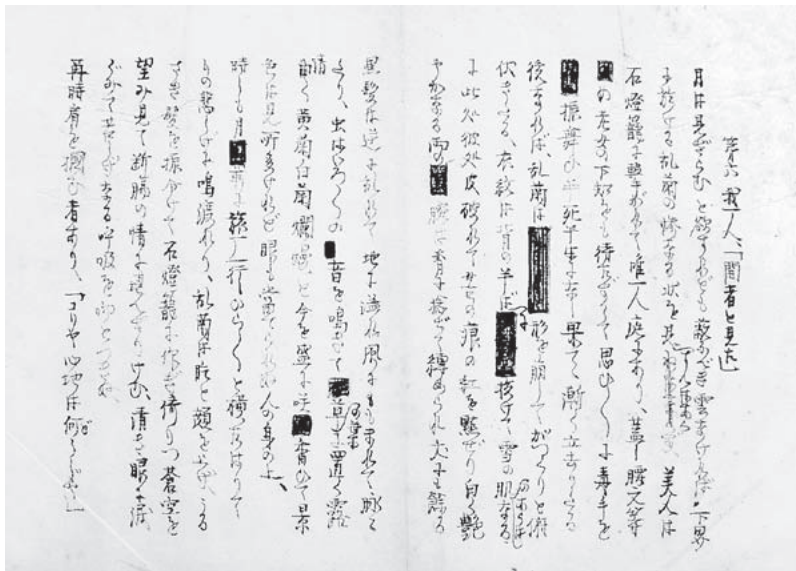
展」図録では、十二枚が確認された。以上をまとめれば、「現代詩手帖」の一枚の他に、全集本から「四」から「五」の前半の三枚、石川近代文学館の草稿(1)と重複する一枚があり、以上四枚には、紅葉による添削がある。その他の草稿は、「十二」から「十三」にかけての一枚、「十五」の前半の一枚、「十五」の後半から「十六」の前半にかけての二枚、「十八」の冒頭、「二十六」の冒頭の各一枚、計十枚の他にもう一枚、徳川家からの養子受け入れの是非を城内で加賀八家の重臣が評議する場面を描くものがある。全集本「二十四」の「城内の風説」に相当するもので、「三十三」の後半にも関わるが、草稿段階で削除されたものと考えられる。



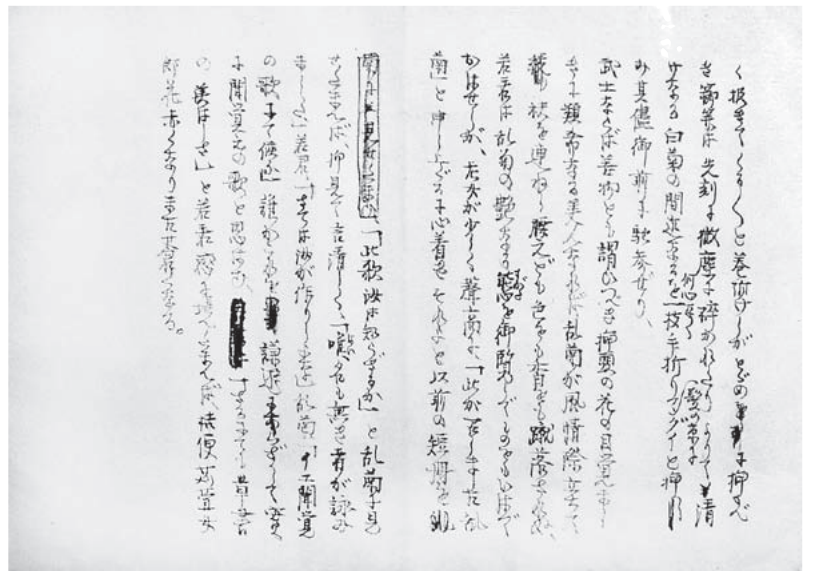
草稿(9)



草稿(7)



草稿(10)



草稿(8)

『秘妾伝』の成立

泉鏡花『秘妾伝』は、明治二十八年三月二十八日から四月十日まで十一回にわたって「近江新報」に連載された初期作品である。¹⁾『乱菊』（近江新報）明28・2・10～3・27、『鐘声夜半録』（四の緒）春陽堂、明28・7）と同じく父清次の死去による帰郷中の二十七年四月前後に執筆された。経済的な理由から、鏡花が最も追い詰められていた時期の作品である。²⁾

明治二十九年四月には、「文芸倶楽部」に再録、初出の「兼六園主人」に代えて、「畠芋之助」と署名した。田岡嶺雲「秘妾伝」（青年文）明29・5）は、鏡花に「濫作」を戒めた上で、「匿名して一時を瞞着せん」としたことを批判、作品についても、「一場の説話に過ぎずして詩的の色彩を認めず」といい、「拙劣の作」だと評している。

再録本文は、初出十一章のうち「第八」を除いた十章に改編して発表、初刊である春陽堂版『鏡花全集』巻一（昭2・4）でも踏襲された。初出の「第八」は、昭和四年三月、「愛書趣味」に「秘妾伝（第八）」として掲載、岩波書店版『鏡花全集』巻一（昭17・7）は、春陽堂版全集本文に初出「第八」を加えて収録された。³⁾ 自筆原稿は慶応義塾図書館、初出は石川近代文学館に収蔵されている。石川近代文学館蔵の初出本文には、後掲【資料1～8】のように、少雨荘（斎藤昌三）「由来記」の他、旧蔵者（少雨荘）から購入者（松尾禎三）宛の書簡二通（封筒欠）と岩波書店編集部（長田

幹雄）から所蔵者（松尾禎三）宛の書簡三通が添付されている。参考として、概要を後述する次第である。なお、本稿では、初出本文を採用する。⁴⁾

『秘妾伝』は賤ヶ岳の合戦と末森合戦、利家の臨終に取材した作品で、以下のような構成である。

- ① 賤ヶ岳の合戦で豊臣秀吉に敗れた柴田勝家が、北の庄城に帰還する途次、越前府中の前田利家を訪ねて、忠臣毛受家照の妹小侍従を託すところから北の庄落城までを記す前半（初出「第一」～「第五」）。
- ② 落城を知って姿を消した小侍従が、能登の末森城を佐々成政が攻めるのを知って末森城に急報、籠城に参加、尾山（金沢）の利家に末森の苦戦を知らせ、戦場に向かう利家に妾となることを求める後半（「第六」～「第十七」）。
- ③ 末森合戦と越中での戦いに勝利した利家を賞賛する秀吉の書状を紹介、利家の臨終に小侍従が立ち会う結末（「第十一」）。

タイトルは、小侍従が利家の秘妾となつて、前田家第三代の英君利常の生母となつたことに由来する。⁵⁾ 再録「文芸倶楽部」以降削除された初出「第八」は、末森城内での籠城の場面、特に小侍従・奥村永福の妻の活躍、小侍従が佐々成政の末森攻撃を通報するため尾山に向かう経緯を描く。

『秘妾伝』の研究として、鈴木勇「鏡花自筆原稿解析1」（『鏡花全集 月報26』岩波書店版『鏡花全集』巻26、昭50・12）、延広真治「鏡花と江戸芸文——講談を中心に」（『国文学』昭60・6）がある。鈴木論文は、慶応義塾図書館蔵の自筆原稿と岩波版全集本文との異同を検証し、全集本「第十一」の末尾「記し終りて」以下の一節が原稿では全集本「十一」の末尾「明君微妙院殿利常これなり」に続いていること、岩波版全集本「八」に相当する末森城内での小侍従と奥村永福の妻との対話や活躍を描く場面が、全集本「九」の「最後に綴じられている」こと、再録の「（八）」に小侍

従が尾山に向かう事情を説明した一節が加わり、岩波書店版全集「九」でも踏襲されたことなどを指摘、初出紙と「文芸倶楽部」・春陽堂全集本文を「校合した」とみられる岩波版全集本文は、「八」「九」章の「叙述に一部の重複・矛盾が生じた」と述べている。延広論文は、鏡花が少年時に『末森軍記』の講談を聞いたという証言（鏡花座談会「文芸春秋」昭2・8）を『北陸七国志』（宝永4、馬場信意）と照応させるとともに、史料として『末森軍記』『加越登記（末森記）』などを指摘し、鏡花の「軍記趣味」が「藩祖一代記中の圧巻を小説化しようと思いついたのであろう」と執筆契機に言及、本作が『繪本太閤記』五編等より得られた利家伝に、架空の小侍従を点してなった「作品だ」と指摘する。この他、出典を検証したものととして、三瓶達司「鏡花の歴史小説」（『東京成徳大学紀要』平6・3）がある。

『秘妾伝』は、「成功作」（延広論文）という一方、「拙劣の作」（前述、嶺雲の同時代評）という評価もあるが、注目されることの少ない作品ではある。しかし、「軍記趣味」が嵩じたにしても、なぜ鏡花が、藩祖前田利家を取り上げたのか、また初出の「第八」を再録で欠く理由は何か、典拠をどう捉えるべきか、さらには作品の主題や同時期の作品との関連など、追求すべき問題は、少なくない。

小稿の目的は、先行研究の指摘を踏まえて、『秘妾伝』の初出「第八」収録をめぐる岩波版全集編集の経緯をたどり、「文芸倶楽部」以降、初出「第八」が削除された理由や作品の典拠、前田利家に取材した背景を検証し、主題を考察して、明治二十七年帰郷時の執筆作品『鐘声夜半録』『乱菊』との関連を検討することである。

1 石川近代文学館所蔵・初出本文と関係資料

石川近代文学館には、初出「近江新報」の切り抜き製本が収蔵され、「由来記」と書簡五点が添付されている。

包装紙の一枚目に「秘妾伝 泉鏡花作／近江新報 所載（滋賀）／明治28年／松尾禎三氏蔵」（横書き。／は改行を示す）、二枚目に「泉鏡花作 兼六園主人／梟芋之助／秘章伝／秘妾伝／少雨荘（縦書き）」という墨書による紙片が貼付され、所蔵者を示す。初出切抜き製本の表紙には、「泉鏡花作／秘妾伝／少雨荘主人」とあり、表紙裏見開きと裏表紙見返しに少雨から松尾禎三宛の書簡二通（部分）が貼付されている。見開き貼付の書簡は、七月八日付で、「新聞切抜にて小生久しく愛蔵の鏡花の「秘妾伝」も御希望でしたら一緒に送ります」とあり、この「新聞切抜」をすでに「展望誌か愛書趣味かで紹介」していること、「単行本には一部が欠章になつてゐる筈のもの」で、「全集とも随分相違してゐるか」と存じます。全集がもし同一文なら、本稿に依り訂正を見たものであると述べている。「紹介」したのは、昭和四年三月の「愛書趣味」であることは、すでに触れた。七月三十一日付の書簡（資料4）では、「秘妾伝、ア、して頂くと自分ながらほしくなりましたが、光栄でもありません。いつも有り合せの筆と墨のなぐりがきで申し訳ありませんが、その辺が又小生の身上と墨の濃淡もわきまえないの所をお笑ひ下さい」とある。「由来記」の記載から、いずれも、昭和十六年七月の書簡であることが判明する。七月末日付けの書簡は、製本した切り抜きが松尾から送られ、少雨荘主人こと、斎藤昌三が、題字や「由来記」を執筆した返信と思われる。

「由来記」（資料1～3）を以下に引く。

この「秘妾伝」ハ史伝的な前田利家の戦場挿話で、鏡花氏の作としてハ最も初期に属し、著者の年表二ハ不明とあれど、余の調査した結果でハ、明治二十八年三月二十八日から四月十日まで、十一回にわたり、兼六園主人の名に於て「近江新報」に連載したものである。これが一括されて後二発表されたのハ、翌二十九年四月十日発行の「文芸倶楽部」であつたが、それ八十回にされてゐる。即ち新聞の切抜きが一回分不明に帰し、去りとして後日に追補するも、当初の気分と多少異なる結果を生ずるといふ、作者の潔癖から、結局不足を不足と

したま、二、一回飛ばして発表して了つた。この時ハ、兼六園ならで別号の島芋之助の名ニ於て発表したものである。

右の結果で最初の全集に於ても完璧を期しながらこの一回ハ終ニ模糊となつてゐる。余が小閑ニ任せて対照した結果でハ、即ち第八回目が逸されてゐたのだ。その意味ニ於て当時の切抜と云、製本した本帖ハ、鏡花党ならずとも珍重すべき稀品である。

昭和十六年七月二十四日 / 書痴少雨荘 / 認之 印

右のように、「由来記」は、初出切抜きの「第八」が、再録「文芸俱樂部」および「最初の全集」春陽堂版全集で「飛ばして発表」されたのは、「一回分不明」になつたからだと推定、「後日ニ追補するも、当初の気分と多少異なる結果を生ずるといふ、作者の潔癖」から、補われなかつたと捉えている。

岩波書店編集部部長田幹雄から松尾禎三に宛てた書簡は、①昭和十六年十二月二十三日付（資料5-8）、②同二十六月付、③同二十九日付の封書三通からなる。住所は、「名古屋市千種区田代町城山一七五」である。①は、「現在刊行中の鏡花全集の事」で「助力」を乞う事情を記している。『秘妾伝』は春陽堂版『鏡花全集』本文を原稿に使うつもりだったが、「愛書趣味」によつて「新聞の切抜きが一回分不明の為落ちて居たことが発見された」が、「ルビが附して」ない。図書館等にも問い合わせたが所蔵が確認できないと述べた上で、「出しますには鏡花独特のルビによらなければ」ならないので、「是非近江新報が必要」だと延べ、斎藤昌三に問い合わせたところ、譲渡したと知つた。「名古屋の松尾様と仰言る鏡花党の方が大切に御保存の由承り、随喜した」のだとして、「校訂本（新聞）」を「四、五日」借りたいので書留で送付してほしいという依頼である。松尾は、早速長田宛に送付したらしく、翌日付けの特殊郵便物受領証も添付されている。②二十六日付書簡は、当日「拝受」した知らせと「四五日の拝借」

を依頼、「当方も鏡花全集に万全の力を注ぎ、全国の読者の御期待に添ひ奉りたいと努力致して居ります」と添え書きしている。③の二十九日付書簡は、「貴重な御所蔵の品本日写し終りましたから早速別便書留にて御返送致しました」という書き出しの礼状である。「こうした有力な鏡花党の方があつてこそ文学史上に於ける鏡花研究にその完成を期する点に貢献少なからざると申しても決して過言ではないと信じております」といい、深い謝意を表している。

現在においても、『秘妾伝』の初出を掲載した「近江新報」の所在は確認できない。石川近代文学館の初出切り抜きの貴重であることに変わりはない。名古屋在住の鏡花党松尾禎三田蔵の本作切抜きが、岩波書店に送られ、欠落していた「第八」が補われたわけで、本資料の意義は大きい。太平洋戦争開戦直後の時局において、「鏡花全集に万全の力を注ぎ、全国の読者の御期待に添ひ奉りたい」という編集者長田幹雄の熱意も伝わってくる。

2 〈利家伝〉の執筆背景と典拠

明治二十七年一月九日、鏡花の父清次が亡くなり、鏡花は九月初めまで金沢に帰郷して、家内の整理と作品執筆の日々を送つた。師匠の尾崎紅葉は、三月十七日付の書簡で、

以来は四五十枚までの短編の事実おもしろきを作るべし。精々著作の上送らるべし。物のよろしきは筆を入れ候上若干金になるやう世話可致

と「事実おもしろき」短編の執筆を勧めた。これより先、一月三十日付の書簡では「其内に新聞世話可申」とも記していた。また、二、三、月ごろと推定されている書簡では「少年もの、短編あらば書いて見るべし」ともあつた。

このように、紅葉が、鏡花に勧めたのは、新聞小説にふさわしい小説と「事実おもしろき」短編、「少年もの、短編」であった。鏡花は、こうした指示に従い、題材を求めて金沢の伝承や新聞雑報、貸本に題材を求めていったものと考えられる。「いろ扱ひ」(『新小説』明34・1)でいうように、鏡花は井波塾に在籍した明治二十年ごろから貸本屋に入り浸り、「難波戦記流の作」など「昔の本を活版に直したものを無暗に読んだ」という。明治二十七年の帰郷時に再びそうした戦記ものや実録に注目して取材したのが、『秘妾伝』、『乱菊』、『鉄槌の音』(草稿では「梅音信」。「少年世界」明30・6)といった作品だったのではなからうか。『乱菊』は、第十代重教公、『鉄槌の音』は第十一代治脩公に取材した作品で、「軍記趣味」としては、「秘妾伝」が唯一のものといえよう。なお『乱菊』は、石井一蛙『金城美譚如月雪』(『加能越新聞』付録。明19刊、北冥社、明18・4・19・3)に拠る⁶⁾。

(1) 執筆背景

これらの作品で前田家の当主を取り上げたのは、明治二十四年十月に「金沢開始三百年祭」(10・11・15)、二十六年九月に「前田慶寧贈位慶賀祭」(9・4・6)が尾山神社を中心に市内各所で開催されたことを契機として前田家や藩政時代への関心が高まったことがあげられよう⁷⁾。

「金沢開始三百年祭」では前田利嗣公爵夫妻を始めとする前田一族を金沢に迎え、利家の遺品や書状の展示、尾山神社の高徳公(利家)の神輿渡御及び総勢九百二十四人からなる備押し(軍備の陣立て)も市内を巡り、大いににぎわった。金沢市民にとって、藩政時代の記憶をよみがえらせる契機になったに違いない。上森捨次郎編輯・発行『金沢開始三百年祭記事』(上森刊、明29・1)によれば、この催しは、「文禄元年旧藩祖前田利家公故ノ尾山城ヲ改修シテ金沢城ヲ築キ始メテコノ市街ヲ開カレシヨリ本年ハ正シク其第三百年ニ相当スル」ことから企画された。利家の業

績に注目が集まったのは、いうまでもない。

明治二十四年十月十二日付の地元紙「北陸新報」は、「前田利家卿」(年譜)を第一面に掲載、末森合戦を取り上げた菊の家主人『劔勳開梅鉢』(つるぎのいさおひらくめばち)を連載している(一〜三回、14日まで確認)。鏡花は、すでに上京しており、この時金沢にいなかった。しかし、二十六年九月に「前田慶寧贈位慶賀祭」が開催された時、鏡花は金沢に帰郷していた。第十五代藩主慶寧公(明7・5没)が従二位を贈位されたのを祝う祭で、「金沢開始三百年祭」同様、市内各所で趣向を凝らした出し物があった。この時前田公爵は帰郷していないが、藩政時代の重臣本多政以・横山隆平・奥村栄滋を中心に加賀八家が揃って出席して尾山神社で慶賀祭が執行され、「参勤交代」も再現された(『北國新聞』9月7日付)。鏡花の自宅近隣の尾張町では、「白に黒の劔梅鉢の紋付たる提灯を家毎に吊」したという(同紙、9月7日付)。同年十月四、五日、長谷川準也市長が前田公爵に金沢帰住を要請する「前田公爵に対する建白」を「北國新聞」に掲載したのも、「前田慶寧贈位慶賀祭」の開催と無縁ではないだろう。鏡花が、「慶賀祭」の賑わいを目の当たりにし、前田家に対する関心の高まりを実感した可能性は少なくない。

〈利家伝〉執筆のもう一つの契機となったと想像されるのが、翌明治二十七年、『秘妾伝』執筆の頃「北國新聞」に連載された歴史小説である。同年二月十一日から四月一日にかけて、「北國新聞」には弦斎居士(村井弦斎)『木村長門守』が掲載された⁸⁾。『木村長門守』は、慶長十八年、関が原の合戦後、淀君と秀頼の居城大坂城を舞台に、秀頼の後見に木村長門守が抜擢されることから始まる作品で、利家が、「せめて今五年命あらば秀頼が天下となして快く眠るべきに不起の大病あら、口惜し」と嘆く『秘妾伝』末尾が連想される。『木村長門守』連載に先立って、記者(石橋忍月であろう)は、「木村長門守重成の如きは実に男子の手本なり、其妻真野氏の如きは亦た実に女子の手本なり、是れ弦斎居士が此二人を主人公として巧みに大坂の末路を写したる所以なるべし、(中略)歴史小説の利益多

き点に就ては今さら予の喋々を要せず」と述べている。当時「北國新聞」編集顧問だった石橋忍月は、大坂の陣での功名をめぐる幕臣の旧悪を大久保彦左衛門が暴く『江戸自慢』（明27・1・？～2・10）や主君の名譽を守るため他藩の使者を討ち、病気の母と出奔した主人公が旅先で恩顧を受けた城主の敵を討って自害する『臯月之助』（同・4・6～5・12）、隣国の城主の画策で滅亡した藩の家臣が旧主の敵討ちを果たす『葉越の月』（同5・13～6・19）などの歴史小説を連載していた。『木村長門守』連載に先立って、忍月は、右のように「歴史小説の利益多き点に就ては今さら予の喋々を要せず」と述べている。それは、忍月『蓮の露』序言（明26・12・8付）で、忍月が「小説は人の感に訴ふるの哲学なり歴史の解説者なり」と述べた自身の小説論とも関係するだろう。千葉貞郎『石橋忍月研究』（八木書店、平18・2）が指摘するように、明治二十七年春に忍月が発表した歴史小説のテーマは、「武士としての義、人の子としての義」、「お家大事の大義、かつての恩に報いんとする忠義や信義」であり、「不義」を憎む利家（第一）と「義烈の美人」小侍従を描く（第二）『秘妾伝』とも共通するところがある。鏡花が、同紙掲載の雑報だけでなく、評論や短文（比喩談）にも目を向けていたことは、すでに指摘した⁹。連載小説にも注意を払っていたと考えてもよいのではなからうか。

以上のように、鏡花が、〈利家伝〉を発表した背景には、前年の金沢帰郷中に目にした「慶賀祭」や前田家への関心の高まり、さらには二十七年帰郷時の「北國新聞」に連載された歴史小説の影響もあると考えられる。

(2) 典拠

次に、『秘妾伝』の典拠について検証したい。前引延広論文が、「絵本太閤記」五編等」から「得られた利家伝」に「架空の小侍従を点した」ものと指摘しているように、典拠は一書にとどまらない¹⁰。鏡花は、「泉鏡花座談会」で、

末森合戦で利家が末森城に近づく「東雲の海砂浜の松の梢に前田の旗が」というあたりまで聞いたというが、『秘妾伝』に描くのもそのあたりまでであることを考慮すれば、戦記ものなどを手がかりに講談で聞いた記憶を喚び起こして執筆した可能性もある。現段階で指摘できるところを報告したい。

『秘妾伝』は、賤ヶ岳の合戦と末森合戦、利家の臨終に取材している。武内確斎『絵本太閤記』（寛政9～享和2）には、賤ヶ岳の合戦と末森合戦は出てくるが、秀吉没後の利家の臨終は描かれぬ。他の『太閤記』、すなわち小瀬甫庵『太閤記』（寛永2）、『川角太閤記』（川角三郎右衛門、元和7～9）、『真書太閤記』（成立年不詳）も同様である。『真書太閤記』では、末森合戦も割愛されている。岡本慶雲『末森記』（文禄3～慶長16ごろ成立）などの末森合戦記では、賤ヶ岳の合戦、利家の臨終への言及はない。賤ヶ岳の合戦、末森合戦、利家の臨終のいずれにも言及して、鏡花が読むことができたとおもわれる文献で最も一般的なのは、富田景周編『三州志』（越登賀三州志 文化2）であろう。藩史と地誌を兼ね、注釈が多く、引用文献も豊富である。金沢・津幡間の距離（四里）に言及し、奥村永福の妻の出自を「加藤氏」と記す共通点や、合戦の期日などを吟味して明記するなど、類書にない特徴があり、『秘妾伝』への影響が指摘できる。『三州志』は、明治十七年四月から七月にかけて四巻本として金沢片町の益智館から初めて出版された。同書に『太閤記』と並んでしばしば引用される馬場信意『北陸七国志』（別名『北國全太平記』）も、賤ヶ岳の合戦、末森合戦、利家の臨終に言及している。越前朝倉氏の勃興から徳川家康の天下統一までの百五十年間の「北陸道七ヶ国の治乱を記録したもの」で、通俗軍書としてよく読まれたようだ¹¹。とはいうものの、『三州志』には、『秘妾伝』冒頭の毛受勝助家照や柴田勝家と小谷の方の最期への言及がない。『北陸七国志』には、毛受勝助家照への言及はあるものの、柴田勝家と小谷の方の最期への言及がない。この他『三州志』が引く河内山昌実『前田創業記』（延宝3）にも、利家の誕生から大坂夏の陣までを取り上げ、逸話が多く記されている。同じく『三州志』が引く出

口武信『菅家見聞集』（貞享元）も同様で利家の死までを含む。講談を聞いた記憶に、『三州志』『北陸七国志』『絵本大閤記』他、貸本屋や石川県博物館の図書館などで閲読した実録や利家伝により、架空の小侍従を創造して独自の『利家伝』に転成させたものと考えられる。架空の小侍従といっても、毛受勝助に妹がいたことは、『大閤記』巻六（上村六左衛門尉裁判之事）に「毛受勝介、無比類遂忠死たりと再三御感有て、母妹などに堪忍領聊か恩師あり」と記載がある。¹³⁾

以下、作品の構成にしたがって、賤ヶ岳の合戦と末森合戦、最終章の三つに分けて典拠を考えたい。

① 賤ヶ岳の合戦

『秘妾伝』は、柴田勝家が、秀吉軍に敗れ、毛受勝助家照を身代わりにして小谷城に帰還する途次、越前府中の前田利家を訪ねる場面から始まる。初出冒頭を引く（後掲〈初出〉）。

栄枯盛衰時なる哉、さしも北国を管領して、鬼と呼ばれたる柴田修理亮勝家も、賤ヶ岳の合戦に猿冠者が智恵袋に盛込められ、既に討死と決せし時、勝家恩顧の愛臣なる毛受勝助家照、漢の紀信が義を重んじ、金の御幣の馬印出沒自在に敵を支へ、其場に命を致せし間に、勝家主従八騎にて、柳ヶ瀬より十三里、越前の国府中まで心静かに落行けり、
（傍線、引用者。以下同じ）

右の一節に酷似した詞章を含む大閤記ものがある。それは、『真書大閤記』である。『真書大閤記』は、『秘妾伝』の執筆されたと思われる明治二十七年春の時点でいえば、写本以外に、「帝国文庫」の三巻本『校訂真書大閤記』が、明治二十六年四月に博文館から刊行されており、閲読は可能であった。貸本屋を通じ、「昔の本を活版に直したものの一つとして読んだ可能性がある。¹⁴⁾

冒頭は、九編巻七及び、巻之八の次の三箇所に掲げるものであろう。

- (1) 毛受勝助家照只一人進み出で（中略）早々北の庄へ夜をこめて引返し玉べく候（中略）御馬印と御姓名とを勝助申し預り此処にて一戦仕るべく
- (2) 只今修理進どのと名乗り玉ふは三十未滿の若人なりさては匠作を落し玉はん為に誰人か仮に修理進殿と申し玉ふことのけなげさよ天晴漢土の紀信我朝の佐藤忠信村上彦四郎にておはしけり
- (3) 修理進勝助に引き別れ馬をはやめけるに廿一日の八過る頃柳ヶ瀬より十三里越前国府中城に馳せ付きたり

右の傍線部は、『秘妾伝』の冒頭の傍線部と共通する。鏡花は、これらを接合させて転成したものと考えられる。次に、『秘妾伝』で利家と対面した勝家が、自らの宿命を悟る初出「第一」に次のような一節がある。

我勝家十三歳の初陣より今五十七歳に到るまで大小の合戦七十余度遂に不覚を取りし事無し然るに猿冠者が悪智恵に脆くも敗を取る斯くまで頼み少くなく成果てしは、これ天我を亡ぼし給ふなり

右の一節は、『真書大閤記』巻之七で敗軍の将勝家が毛受勝助らを前に来し方を振り返る次の一節に酷似する。

勝家十三歳の時初陣し五十七歳の今歳まで大小の軍に会ふこと七十余度いまだ一度も不覚を取らず然るに今日猿冠者のために追つめられ斯の如く見苦鋪敗北に及ぶこと全く以て戦の拙きに非ず是天の勝家を亡ぼし玉ふ時日到れるとおもへば更に口惜とも存せず候

右のように、勝家が語る相手に臣下と利家との違いはあっても、表現上は、ほぼ同文といってよい。この後、勝家が利家に秀吉との和睦をすすめる一節も酷似している。

初出「第二」「第三」の北の庄の場面では、小谷の方が、敗軍の将として帰還した夫勝家との対面を拒み、秀吉

からの密書を受けて三人のわが子とともに城から脱出する意志を示す。こうした構想の基になったのも、『真書太閤記』九編巻之九「三女子北の庄を出る事」とみられる。『真書太閤記』では、勝家は小谷の方に「御身は故殿の御妹におはしませば筑前守にも主君にましますつらく当り奉ることはよもあらじ早出城あらせ玉ふべし」と勧める。小谷の方は「浅井が妻として年頃になり子息もありつる中を故殿の為にさき別けられ浅井と共に死を同じくせざりしを世上に爪弾きさるゝを心苦しくおもひしに（中略）今また筑前守の方へ出てよ頼めよと宣ふことの恨めしさと云ひつゝ、懐刀を引抜」いて自害する。『秘妾伝』では、「義烈の美人」小侍従を中心に、小侍従と対照的に生き延びることに執着する小谷の方を描く。異同は少なくない。しかし、それは小侍従の活躍を描くための改変であり、「浅井と共に死を同じくせざりしを世上に爪弾きさるゝを心苦しくおもひし」という『真書太閤記』を基に城から脱れようとする小谷の方を描いたものと思われる。

この他、「第四」終わりから「第五」のはじめにかけて、賤ヶ嶽の合戦に勝利した秀吉が、始め単身、まもなく加藤虎之助が加わって、二人で利家のいる府中城に乗り組み、「又左又左」と呼びかけ和睦を図る一節も、『真書太閤記』九編巻之八「嶋左近毛受勝助を討事併前田利家柴田羽柴両将へ対面の事」に、

翌廿二日未明に府中の城に到り見玉へば城門を閉ぢ静まりかへつて居けるにより加藤虎之助只一人召し連れ
 大手の門を打ち叩き大音に又左〜と呼ははり玉ひしほどに又左衛門尉只一人立ち出て面目もなき次第に候追
 つ付け切腹いたすべく候と申されしを聞き玉ひ夫は余所〜として入城あり書院に入りて柴田を暇明次第又左
 と共に天下を補佐し申すべし只今ほど空腹なり湯漬玉はり候へ

とある一節を基にしているものと見られる。

このように、『秘妾伝』の前半、「第一」から「第五」までは、『真書太閤記』と対応する箇所が少なくない。鏡花は、主に『真書太閤記』を参照して、「第一」から「第五」までを構想、執筆したものと思われる。『真書太閤記』以外に摂取したものととして、以下の点を指摘できる。

まず、「第一」で、勝家を府中城に迎えるのを機会に、勝家を討ち取って秀吉に差し出すよう近臣目賀田又右衛門が進言し、利家が「不義なること」として退ける場面は、『真書太閤記』にない。『三州志』、『北陸七国志』、『前田創業記』にこの記述があり、いずれも大井久兵衛の発言になっている。これに対して利家は、『三州志』では「義士を知らずや」といい、『北陸七国志』では「好交の友」を討って「子孫の面を穢す」ことはできないという。『前田創業記』では、年来の交友及び「不義ニ与」する事になるとして怒りをあらわにしている。慶應義塾図書館蔵の自筆原稿では、最初「丹羽三藏」とあったものを「目賀田又右衛門」に改めている。丹羽・目賀田の両名は、利家から鳥越城を任されていた家臣だが、末森城が落城したと思ひ込んで鳥越城を脱出し、佐々成政が退却する際それに気づいて占領されるという失態を犯し、利家の不興を買った武将である。鏡花は、そうした経緯をふまえた上で、ここに登場させたものと思われる。「第三」で、落城を前に人質だった利家の娘（後の秀吉の側室加賀殿）が府中城に帰る話は、『前田創業記』の秀吉が利家と和睦する一節に「利家女自北庄来」とある。「第四」では、秀吉の命令で利家との交渉役に堀尾茂助が派遣されているが、『三州志』、『前田創業記』にも同様の記述がある。しかし、二書ではいずれも堀秀政が交渉役を担うことになっている。

② 末森合戦

佐々成政と前田利家との対立を描く「第六」から「第十」までは、次のように考えられる。「第六」の「サラ〜越」は、『三州志』、『末森記』にあるが、『北陸七国志』、『前田創業記』には記載がない。『絵本太閤記』では、末森合戦

後のことになっている。「サラ／＼越」から帰った成政は、利家を油断させるため娘の婿に利家の子供を望み、次男又若利政との縁談が決まるが、挙式を延期させる。この間の経緯は、『三州志』、『末森記』、『北陸七国志』、『前田創業記』、『菅家見聞記』のいずれにも記載がある。又、侵略を開始した成政軍の道案内をする小侍従が、故意に道を誤まり成政軍を混乱させる話は、利家に味方する農夫田畑兵衛が成政軍を山中の難所に導く話として、『三州志』、『北陸七国志』、『前田創業記』に出ている。

「第七」で、成政軍が末森城を攻めたとき、土肥茂次とその従卒が城外に出て戦い戦死する話は、『三州志』、『北陸七国志』、『前田創業記』に土肥伊予とその従卒のものとして記載がある。同章の城主奥村永福夫人の活躍は、『太閤記』、『絵本太閤記』の他、『三州志』、『北陸七国志』、『前田創業記』にみえる。『秘妄伝』では、上述のように奥村夫人を「奥村の夫人加藤氏」と表記している。同じ表記が見られるのは、管見では『三州志』、『剣敷開梅鉢』だけである。「第九」で、小侍従から末森急襲を知らされた利家が援軍に向かおうとしたとき、夫人芳春院が鎧の袖にすがりつき「御勢を揃へられて後打ち給ふとも遅からじ」というのに対し、利家が「女が何を知る者ぞ女々しい奴め」と叱咤する話は、『北陸七国志』、『前田創業記』にある。『北陸七国志』では眼を怒らせた利家が「御辺女の身として、何ぞ軍事を知るべきぞ」という。『前田創業記』には、「婦人何ソ武ヲ知」とある。

「第十」で、津幡城の城主を『絵本太閤記』だけが、不破彦三とする。津幡城主前田秀次らが援軍に向かうよりも、津幡で成政軍を迎え撃つべきだと主張、利家がそれを退ける経緯も、戦勝を占う淡島黙扇の話のいずれも、『三州志』、『北陸七国志』、『前田創業記』にある。ただし、『三州志』には「良卜」、『北陸七国志』、『前田創業記』には「山伏」、『絵本太閤記』には「占の上手なる山伏」とあるだけで、名前を記した文献はない。同じく「第十」で、休息を命じられて一時金沢にもどっていた小侍従が、利家に追いつく話は、病気のため金沢で留守を守るよう仰せ

つかった篠原勘六が従卒を従えて利家のもとに馳せ参じる話として、『末森記』、『三州志』、『北陸七国志』、『前田創業記』にある。¹⁵『三州志』、『前田創業記』には特に記載はないが、『末森記』では「乗物」、『北陸七国志』では「駕籠」を用いたことになっている。『秘妄伝』の「早駕籠」も、こうした記述ないしは講談の記憶によるだろう。

③ 最終章

最終章「第十一」は、天正十三年九月二十一日に秀吉が利家に宛てた書状、末森に利家軍が姿を見せたとき上原清兵衛が発見、転落しながら狂喜した逸話、利家の臨終からなる。

上原が利家勢を発見して狂喜した逸話は、『三州志』、『前田創業記』に見える。『三州志』は上原勘兵衛、『前田創業記』は上原藤五郎で、利家軍をいち早く発見する点は共通する。しかし、転落して骨盤を挫いた記述はない。誇張であろう。

秀吉が利家に宛てた「感状」の一節は、『三州志』に「引用者注。越中の三郡ハ貴殿ヘマイラセ候(中略)所ニ折紙トトノヘ候ヘドモ若シ邪魔ニ候ハバ如何様ニモ其方次第ニ候」というように一部が引用されている。同書の補注は、『菅家見聞集』にこの書状が記載されていると言及している。実際『菅家見聞集』(加越能文庫蔵)の天正十三年の項には「自筆にて申入候」にはじまり、「九月十一日／秀吉判／羽柴筑前守殿」に終わるが書状全文記されている。日付を除いて『秘妄伝』とほぼ同文であり、鏡花は『三州志』の記載によって利家宛の「感状」を知り、『菅家見聞集』にも目を通したのか。なお、『加賀藩資料』は、『袂草』を引くがその日付も「九月十一日」である。

利家の臨終は、『三州志』、『北陸七国志』に本作同様の記載がある。しかし、『三州志』には利家が、「せめて今年五年命あらば秀頼が天下となして快く眠るべきに不起の大病あら、口惜し」と嘆く一節がない。『北陸七国志』は、

秀頼自体への言及がないなど、鏡花作とは、多少の異同があり、延広論文の指摘する『明良洪範』などに拠るものと思われる。

以上のように、賤ヶ岳の合戦後の勝家と利家、秀吉と利家の対面から北の庄落城までについては、主として、『真書太閤記』第九編に基づくといえよう。末森合戦に関しては、特定の典拠を指摘できないが、利家の援軍到着後の合戦が描かれないうところに特徴がある。鏡花が聞いたという末森合戦の講談も同じ箇所までだということを考慮すれば、『三州志』を主とし、『北陸七国志』、『前田創業記』、『末森記』など諸書に拠りつつ、講談の記憶と併せて構想した可能性も考えられる。最終章は『三州志』、『北陸七国志』に拠り、『菅家見聞集』『袂草』などの写本類や『明良洪範』などに目を通した可能性を指摘しておきたい。

3 「第八」の削除と小侍従の(回生)

『秘妾伝』は、タイトルからして小侍従の伝記を意味する。『太閤記』に前引のように、「毛受勝助、無比類遂忠死たりと再三御感有て、母妹などに堪忍領聊恩賜あり」と、その存在が一言記されただけの毛受勝助家照の「妹」を、鏡花は、主人公として設定し縦横無尽に活躍させたのである。構想力は評価に足る。

『文芸倶楽部』の再録で削除された初出「第八」は、上述のように、末森城内での籠城の場面、特に小侍従・奥村永福の妻の活躍、小侍従が佐々成政の末森攻撃を通報するため尾山に向かう経緯とを描いている。「泉鏡花自筆原稿目録」(岩波版『全集』別巻、昭51・3)によれば、慶応義塾図書館蔵の自筆原稿では、「第八」に相当する三十五・三十六丁が「第九」の末尾にある。草稿段階とはいえ原稿は手元にあつたのであり、「一回不明」(由来記)になっても、補

うことは困難ではない。「第八」相当部分(第三十五・三十六)は、三十四丁の「表七行まで」で終わった「第九」の後ろに綴られており、利家が末森に向かう途中、金沢市街と郊外の境界、大樋で疲労困憊した小侍従に休息を命じる「第九」末尾とは時間的に前後し、直接結びつかない。鈴木「鏡花自筆原稿解析」掲載の翻刻によれば、原稿「第八」では、小侍従が「周章騒ぐ腰元等を励ま」し、「義を重むること磐石の如」き城主奥村助右衛門が「敵を近寄せ」ず、「賢夫人」が「内」を「守る」姿が簡潔に描かれている。初出「第八」に相当する三十五・三十六丁は、鈴木氏の指摘されるように、後で「書き足したもので、別稿とみてよい。初出に採用されたのに、なぜ再録ではこの一節を欠くのか。

「第八」で奥村夫人は、「音に聞へし賢夫人美にして勇なり」と紹介され、小侍従も「貴女は天晴な御魂」の持ち主だと奥村夫人を賞賛する。一方夫人は、小侍従に「イエ貴女こそ、府中のお城で秀吉公に討懸け給ひしことあるよし人伝に聞きました」と「第五」に描く秀吉の殺害未遂を取り上げる。小侍従が秀吉を討とうとしたのは、秀吉が、主君柴田勝家の「怨敵」だからであった。「烈婦の魂」の持ち主として、主君の仇討ちを果たすのは、当然の行為といえよう。小侍従は、「兄に恥ぢざる義烈の美人」(第二)、[窃窕たる美人なれども毛受勝助家照と一所に育ちし希代の勇婦」(第三)というように、「義」を重んじ、勇氣のある美人という設定である。奥村夫人も「美にして勇」ある点で、小侍従の設定に近い。しかし、「義」を重んじる小侍従が、劣勢を挽回するためとはいえ、初出「第八」で、「倒れし者」を「後抱きに抱き起こし」て「抱かれて寝たい女があるぞえ」といって「其首筋にからみつ」くのは不自然であろう。「花柳の腰元等」も、これに倣うというのが、「第八」の後半である。文学界の中心的な雑誌の一つ「文芸倶楽部」への再録に際して、「第八」は、鏡花自身の意志によって削除されたものと考えられる。理由は、「兄に恥ぢざる義烈の美人」小侍従の人物像と齟齬するからであろう。削除は、鏡花自身の判断だったと考えるのが至

当ではないだろうか。しかし、原稿及び初出の段階でなぜ小侍従は、瀕死の従卒の「首筋にからみつ」くのか。「奥村側の描写を補強する」（鈴木論文）ために「書き足した」だけではないだろう。本文に照らせば、小侍従が奥村夫人与共に瀕死の従卒の「首筋にからみつ」くことにより、「死者蘇生りて勇を振ふ」とある。従卒は、共に籠城する女性の力で蘇生し、末森城は持ちこたえたのであった。このように、瀕死の者を蘇生させる「回生の良薬」（第十二）としての役割、回生の力を与えるところに小侍従らの役割があったと思われる¹⁸。このように、初出「第八」は、当初作品の論理として必要とされたものと考えられる。

〈自死から回生に向かう小侍従〉

最後に、利家と小侍従の人物像を検証し、同時期執筆作との関連を考えたい。

延広論文は、作中の利家を「単純明快な行動の武将として描く」と指摘している。末森城に向かう「第九」にこうした利家の面目躍如だが、さらに、子細に検証すれば、「不義」を退け（第二）、「恩を重んじ」（第四）、「私の心」がない「好漢義気金鉄の如」き人物、「女々しい」ことを嫌い（第九）、「利あらずとも敢て闘せず」として末森城の救援に向かう、「勇氣」（第二）と家臣を思う情にあふれた武将（第十）といえることができる。

一方、前半「第一」から「第五」までの小侍従は、「兄に恥ぢざる義烈の美人」（第二）、「窈窕たる美人なれども毛受勝助家照と一所に育ちし希代の勇婦」（第三）というように、「義」を重んずる勇氣ある美人として描かれている。小侍従の人物造型は、「義気」と「勇氣」の武将、利家と共通する。

小侍従に関して見逃せないのは、前半を中心に死の影を濃厚に漂わせていることである。作中、「自殺」ないしは「自殺」に相当する語句が五回も出てくる。勝家の居城を脱出しようとする小谷の方の「未練」と「卑怯」を批

判する小侍従は、「第二」で、「お城と、もに焚死ぬ覚悟固より命は惜からず」と決意を語る。主君勝家の敗北が、小侍従の運命を決定したといえよう。しかし、「第三」で小谷の方を殺害した後、自害する寸前で勝家から止められる。その理由は、小谷の方が「自から身を殺せし躰」にするためであった。この場面では、「思はず自殺の手を留む」、「我儘の自殺は思留まり候へば」、「罪を贖はむため自殺することあひならず」と「自殺」が三回も出てくる。にもかかわらず、小侍従は「死ぬことも得ならぬ」というように、自殺しようにも自殺できない。「天寿を全うせしめて家照が後弔をさせむ」（第一）という勝家の意図による。自殺を願いながら自殺できないのが、前半の小侍従である。勝家の願いは、利家に継承され、利家は小侍従に「勝家が情けのほどを丁寧反復して説き聞か」せて、「辛うじて」納得させる。「第五」では、「怨敵」秀吉に切りつけ失敗、小侍従が「勝家の愛臣」家照の妹であることを利家が明かすと、秀吉は加藤虎之助に「手を弛めな、放たば即座に自殺せむ」と注意する。ここでも、小侍従は「自殺する事も得ならず」悔し涙を流す。その後勝家助命の旨を伝える使者を仰せつかったときも「情に刃向ふ刃も無く死後（にぞ）死なれもせぬ」といって、北の庄に向かう。秀吉からも自殺する機会を与えられないのである。このように、「第五」までの小侍従は、再三自殺の意志を固めながら、主君勝家と勝家の遺志を継いだ利家、さらには秀吉によって、自殺する機会を得られず北の庄落城後、失踪し、能登の山中に潜むことになる。では、「第六」以降の後半の小侍従はどうか。

「第七」では、北の庄落城を知ったあとの小侍従について、次のように説明している。

万事休せりと絶望し既に死せむと思ひしが予て利家に諭されて能く勝家の意を知れば自から死せざるはさすがにて纔に生を保ちながら身は無きものと棄果て、（中略）遍歴して能登の山中に分入りつ彼処に幽寂の地を下して、こゝに仙たらむと欲せしなり、

右のように、小侍従は北の庄落城後、「能登の山中」に幽居して「仙」(女仙)になろうとしたのであった。「第六」には、成政の士卒が道案内を求めて深山の「茅屋」に踏み込む一節に、「経机に肘を凭たせて美人」が「一人居睡」の様子を見て、小侍従を「神か仙かはた妖か」と怪しむ場面もある。現世で自ら命を絶つことの叶わなかった小侍従は、俗世を脱して、山中他界に身を潜ませていたのであった。

「第六」で「怪しき婦人」として再登場した小侍従は、後半では利家から給わった「往日の恩」を返し、利家を「亡国の君」としないため、全力を尽くす。成政軍が来襲した際には、「機を得て死なむ」として、攻撃の矢面に立つ決意を示すが、それは、自殺とはいえない。末森城における小侍従は、奥村夫人と一緒に戦闘を支え、瀕死の従卒を「蘇生」させ、勇気を奮い立たせる役割を果たす。このように俗世に帰還した小侍従は、死の影を脱して回生へと、大きな変容を遂げる。利家に末森城の苦戦を伝えるのも、利家を「亡国の君」から救済することにつながるわけで、小侍従は、利家に「回生」の機会を与える存在といえよう。「第十一」で利家の臨終の場に同席した小侍従が、秀頼の補佐役を全うできない無念を嘆く利家に「新藤五国光」の脇差を渡す場面も同様で、「回生の良葉いざ召しませ」という言葉は、後半の小侍従を象徴するものとなっているのである。

以上のように、『秘妾伝』は、「義氣」と「勇氣」と情愛にあふれた利家に、「義烈の美人」小侍従が「回生の良葉」を与え、「先途を見届け」て終わる。利家は、「勝家の情」を小侍従に説いて「自殺」から救い、小侍従は利家が「亡国の君」となる危機に身を挺して「回生」をもたらし、利家と結ばれ、「秘妾小侍従の伝」は全うしたのであった。

同時期に執筆された作品、『貧民俱樂部』、『鐘声夜半録』、『乱菊』にも『秘妾伝』同様、「自殺」の問題が共通して取り上げられている。明治二十七年一月の帰郷後執筆を終えたと考えられる『貧民俱樂部』の後半で、深川子爵夫人綾子は、鮫ヶ橋の貧民を代表する「毎晩新聞」の探訪員お丹に「不品行」を暴露すると責められた時、「自殺

をする。身体は死んでしまふから、唯名譽だけは助けておくれ」というが、お丹に拒否され、「窮の極、自殺も出来ず」、発狂に至る。『乱菊』では、恋の遺恨から継子大音の君を毒殺した実貞院が、乱菊に懺悔し、「前非を悔い」て「身を果さむ」、つまり自殺を決意したものの、「世間」の「沙汰」を考えると「死にたいにも死なれはせず」として「神仏の目に見えぬ咎に打たれ」て生きると語る。『鐘声夜半録』では、宣教師ハレスの依頼で縫ったハンケチの刺繍が新聞で国辱と報道されたために刺繍した吉倉幸、仲介した女教師近藤定子、ハンケチを取り戻そうとした篠原勘六が自殺し、主人公の豊島も、ハレスを討って自殺する決意を語るといように、主要な登場人物すべてが自殺する。このように、「自殺」が、この時期の執筆作に再三取り上げられるのは、尾崎紅葉の鏡花宛書簡(明治27・5・9付推定)にいうように、「かゝる人物を点出するは畢竟作者の感情の然らしむる所」に他ならない。こうした作品群に自死願望から回生への転換を描く『秘妾伝』をおく時、主要な登場人物全てが自殺を図る『鐘声夜半録』に投影された死に傾斜する心境からの脱却がうかがわれよう。

『貧民俱樂部』は帰郷してからまもなく脱稿、四月から五月にかけて『鐘声夜半録』が執筆されたのに前後して、『乱菊』『秘妾伝』が脱稿したと考えられている。作品に作者の内面の反映をうかがうとすれば、死の願望から生への転換を描く『秘妾伝』は、『鐘声夜半録』の後に執筆されたと考えられるのではなからうか。

注

- (1) 休載日は、四月一日のほか、四日または五日、七日または八日の三回。田中勳儀「著作目録」(『新編 泉鏡花集』別巻二)所収。岩波書店、平18・1)参照。「近江新報」では、『乱菊』『秘妾伝』と二作続いて鏡花の作品が連載されている。
- (2) 松村友規「泉鏡花初期作品の執筆時期について―『白鬼女物語』の執筆時期をめぐって―」(『三田国文』第4号、昭60・10)参照。
- (3) 初出には、読点だけで句点がない。全集本文との異同として、初出では章の表記が「第一」というように、「第」が付してあること、

- 全集本、六六六頁五行目「留めつ、」が初出では「留めつも」(以下同じ)、六七〇頁十行目「無邪気なる」が「可憐無邪気なる」(再録も同じ)、六七三頁九行目の「家」が「御家」(再録も同じ)、六七四頁四行目「斯くて」がない、六七五頁九行目「引立てて」が「引出て、」、六八五頁九行目「馬引き給へ」が「馬引き給へ馬引き給へ」、六八七頁五行目「利家公」、六八九頁十二行目「と云ふ」がない(再録に同じ)、六九〇ページ十一行目「天正十二年」が「天正十三年」になっている(再録、春陽堂版全集に同じ)、六九二頁十三行目「時としては」が「死すれば」になっている(再録に同じ)ことが指摘できる。このうち、秀吉の利家宛書簡が出されたのは、史実の上でも「天正十三年」であり、岩波書店版全集本文のみが一年早いことから考えると、岩波版全集本文の誤植と考えられる。
- (4) 連載最終日の初出紙には、「新小説の披露」として、次のような予告が掲載されている。
連載の秘妄伝本日にて終局を告ぐ明日より連載する小説は、是れ何ものぞ「夏野」と題する極く面白き世話もの筆者は残星夜白とて其道の人不相愛イヤ一層旧に倍して御愛説を願うと云爾
- (5) 小侍従というヒロインの命名は、平安時代の女房名の他、戦国時代にも、毛利隆元の正室、細川ガラシャの侍女、足利義輝や島津義久の側室にもある。前田家の関連では、慶長十年四月八日、前田利常が初めて徳川家康に謁見した際「松平」の姓とともに任ぜられた「従四位下侍従」によるものか。「加賀藩史料」(前田育徳会、昭4・4)には、「四月八日。前田利常侍従に任じ、松平氏を称す」とある。史実では、利常の母は、寿福院といい、越前の上木新兵衛の女である(加能郷土辞彙)参照。北国出版社、昭31・8。
- (6) 本書所収「乱菊」の成立」参照。
- (7) 『秘妄伝』発表後の明治三十二年には、四月二十七日から五月三日まで金沢で「前田利家公没後三百年祭」が開催されている。本書所収「湖のほとり」から「風流線へ」参照。
- (8) 確認できた掲載日は、二月十一、二十、二十三、二十五日、三月九、十四、十八、二十五日、四月一日である。
- (9) 本書所収「明治二十七年の鏡花・忍月・悠々」参照。
- (10) 『黒百合』は『絵本太閤記』記載の佐々成政の愛妾小百合姫虐殺に基づく「ぶらり火」の伝承を取り入れている。鏡花が『絵本太閤記』を読んでいることは、『黒百合』に照らしてみても明らかだが、後述するように『秘妄伝』においては、『絵本太閤記』は主な典拠とはいえない。なお三瓶論文(前引)は、「大部分の構成は『絵本太閤記』に拠っている」と指摘している。
- (11) 「解題」(戦記資料 北陸七国志・加能越軍記集)歴史図書社、昭54・9。
- (12) 明治二十六年九月二十日付「北国新聞」によれば、石川県博物館の書庫には「二万九千部」の図書があり、「古昔より明治三四年までの図書ならば何くれとなく殆ど蔵せざるものなし而して之を衆庶に縦覧せしむる」とある。写本の類は、貸本屋にも相当あったと想像されるし、図書館を利用した可能性も考えられよう。
- (13) 『絵本太閤記』では、秀吉が「褒美」を与えるのは、「母並びに妻」である。引用は、檜谷昭彦・江本裕校注「太閤記」(新日本古典文学大系)岩波書店、平8・3)による。
- (14) 明治十九年七月に刊行された『絵本太閤記 賤ヶ嶽七本槍』(編集人未詳、出版人、野村銀次郎。開花堂発売)は、『真書太閤記』第九編卷之一「柴田勝家佐久間玄蕃を呼返す事」から卷之十「幸若大夫の事」までを収録したポール表紙本で、表記に多少の異同はあるが、見出しも本文も同一である。鏡花が『絵本太閤記 賤ヶ嶽七本槍』を参照した可能性もある。
- (15) 篠原勘六は、同時期執筆とされる『鐘声夜半録』にも登場する。鏡花は、「忠義」(北陸七国志)な利家の家臣篠原勘六を、外国人の横暴に悲憤慷慨する壮士の名前として用いたのであった。
- (16) 『菅家見聞集』の引く秀吉の書状では、「内蔵助」や「御本城どの」の後に人名を補う記述はない。同書を参照したとすれば、鏡花の補筆と考えられる。また、『秘妄伝』で「中略」とした部分には、利家の家臣の名が列挙されている。『加賀藩史料』では「袂草」を引く。
- (17) 鈴木勇「鏡花自筆原稿解析1」の翻刻にあるように、原稿では、奥村夫人が小侍従に「貴女の御容色でお酌を一番願ひたい」として「軍兵にいきづきの水」としての酒をふるまった後、夫人も小侍従も、「故と裾短かに裳裾を端折り、雪の膚もあらはなる両肌脱ぎ」になって「士卒に抱附」くことになっている。
- (18) 自筆原稿では、「今生死の境にも色には脆き人心、血眼に笑を湛へて気を取直しつ防戦す」とある。全集本文では、「花柳の腰元等」の働き振りを描く一節にはぼそのまま生かされている。

秘妾傳

第六回 主人

（第五）
「我がために我死せむと利家が死敵と思へる秀吉の輩
身勝門を破りて又左々々と呼立てたる他意無き腹
無き可憐無邪氣なる振舞に又左衛門利家心解けて急
き槍を喰んで下り城門左右に押付けば秀吉少しも運
歴する色なくつかへと城に入る。此時加藤虎之助
後を率て追入れり。
利家は秀吉主従を突内して直ちに書院に遁し主客の
坐も未だ定らざるに秀吉は大胡座又左左連じやが
湯漬を振舞へものに紛れて昨夜より何も喰はねば我
甚だ空腹あり」と二度腹を打て給ひカラ〜と高
笑。虎之助腹を向きて吹出せば利家は思はずす
〜何が扱わけも無い事早速お振舞ひ申すまし〜
と手を叩きて腹を叩きせよと云ふれと遊めたるに
秀吉珍重分々を吃させながら腹が美食を得たる如
く呼吸をもつかでさら〜と振込み給ひて〜
いことあり痛替へて眠はるべし〜と腕を死出し著を
着かひてせらる。時、疾風一陣後の外より留木の雷
轟と来りて頭上に閃く金光輝。秀吉とのお鬼溜あれ
とすつく立つは小侍従あり。
秀吉危く身を交はせば討損じて空を突く其手を虎之
助が無手を取り〜こは幾つたる御給仕か〜と片頬
に笑みつゝ取つて伏せる利家はそれを見て〜
大事起つたると心中に驚きながら勝家が思に我に托
せし婦人あれば此處合に棄置し難しと太刀に手を懸
け片膝立て虎之助を乾と叩ひ、虎之助も認め返し後
見ももに黙然たり。
後色の平氣に答を置き〜又左〜何しや〜と其顔
を贈り給へば利家黙して答へし、相敷かれたる小
侍従を懸け〜利家は御存じか〜と云ふに、妻は徳の
庄より使者きて〜當りに給りし者、我君若利家の徳の
秀吉こゝに見えられしは天の興へ〜太刀怨むと近

秘妾傳

第六回 主人

（第六）
北國の亂平らきて後利家は加賀二郡能美石川並びに
能登の國の主となりて文徳元年名を金澤と更めしが
其頭未だ尾山と謂へし尾山の嶽に入給ひつゝ、天
正十一年夏五月加藤能第一の要害たる能州木峯に城
を築き御家の名臣奥村助右衛門水瀧をして固くこれ
を守らしめたり。
時に越中富山の嶽には北越名代の大健兒佐々内藤助
成政あり濁度餓蚊の態を逞しくして常に天機を變ふ
處に今や尾張の秀信公日に増す秀吉の威徳を感み徳
川家康を頼らひて遠三尾の兵を備ふし一度活きたる
海面に怒りて波濤を起し長久手小牧の合戦最
中勝敗未だ分ち難し、内藤助成の時來れりとも勇み立
ち先づ越中の間道とて音に名高きヲ〜越より越
に美濃に忍び出で秀信に申すやう「我北國より切つ
て出で公の御味方申すはは時の間に秀吉を討滅し
し本意を遂げ給ははは必定あり然らむには加藤能三
ヶ國は我成政に賜はるべし」と、またこれを家康の
耳に懸きて雖と約束取極め再びヲ〜越より越中
に引返せり成政が路の間道に取りて太く此業を登し
たるは蓋し利家に懼ればありき。
斯くて成政飯國して直ちに兵を發ださむと思へども
敵に取つては面倒ある利家加賀にて押へたり先づ
これを討たざれば出づることを得じ故に加賀
に使者を遣はし、成政己に四十を越えて未だ一人も
鬪しあらず幸ひ女二人あり一人は秀吉に賣したる
が姉ある女の家にあれば御子息一人賜はれかし養ふ
て家を繼がしめ長く兄弟の國とやらむと懇願にいは
しめたるに、利家元來佐々とは左朋たり且つは
國國の好直もあれば快くこれを諾し二男又若利政を
ば遣はすことに定まりけり、

附きしに討預して最口惜し、女あれば御容赦あつて
徳目の恥見せ給ひて、ハヤ御太刀を汚されよ」と
覺悟ありし徳助の嘆、虎之助其聲に感し入り
〜心憎し名を名生れ、利家一某が申すべし其ある婦
人は小侍従と勝家と申せりし毛受勝助家照が姉
北の庄に遣はし置らば人算を昨夜逃つて参りしが
少しく仔細ありて留置せ給ふべしと秀吉に向ひ申さ
れけるに秀吉は聞きあへま〜虎之助大事に其手
を放て〜とおふせの下、虎之助も猶疑は走静かに小
侍従を引寄せたが指指め〜待て、待て、手
を強め放たば即座に自殺せむのつかりと押へて居よ
〜イヤ小侍従とやら出来したる、秀吉を討たうどは
ア、愉快い〜と秀吉は顔に輝がる小侍従刃以
手にしから虎之助に舞へられて自毀することを得
からざるも口掛けは濁り秀吉は語を續き〜され
を御身が死勝助家照白山に崩さし秀吉が大軍を三
度まで追跡せし叔群の武勇樂田が鬼の名に恥ぢ走然
も目から勝家と名告り其身に立ちたればこれ勝家
を討ちしも同然されば家照の忠義に面せせよ〜と
又左の、顔も立て、北の庄の鬼さのは我助けけむ
思ひ居れば、小侍従今より馳歸りて此匠匠に申す
べし、兄に劣らぬ御身も花をたせて作るあり〜
と四海を呑むべき大膽中、死敵を容る、度量あり、
小侍従は首を低れり、虎之助は聲を厲せし〜小侍
従斯くても裏があるか〜小侍従漸く鞘を上げ〜槍
に刃向ふ刀も無く死後後には死かれぬせぬおし遊
ばせ愛感無〜と刀を納め容を更め、豊ひ左膝に申
しても我君勝家何として命を助かり給ふべき、され
ばどておふせの願傳へせぬも道ならねば先づ申上
げ見せせう〜と不承々に形引けるはさてはとて利
家驢馬を引かせ一時後には間に合ふまじ御刺行け
〜と促し給へば小侍従は身支度おし〜とんから御
免罪はせ〜と馬に跨る風流美者、北の庄指して馳せ
出だす、其後を見返りて秀吉利家虎之助顔を合はせ

〈初出5〉

「利家よ備置あるに、固より成政野心得ありて
其慮を討たむと謀議されば此月八日は成政の月にあ
るに備は九月に延ばし置るべしと何れも感ずる處
へ置き其油断あるを見済してヌツ打立てといふま
に〜と備は感へたり鐘響へたる甲兵二萬手見の
如く出だして天正十二の秋九月八日不意に未暮
に馳はむと謀議されしを聞き、山路に想りて日は
暮れむと、山また山に分け入る頃既に三更に参りけ
らし、謀議重々近道を行路は難重車馬の難、さるか
たり如く深夜の理に暗き其上に故に松火の敷を成じ
、林に距離ひて馬の足並しとて驚く斯くては夜の中
に未暮に達せむと強東し何者いされ難取りて案
内さしては叶ふせと成政士卒に命を傳へて急に山
間を漚らしむ、
然るに斯る深山をれば容易く人家は見當らず士卒等
百方に馳歸りて銀一疋の穿眼を得たり、人やある
と叫びりあらず土足のみ、踏込めば、暗香一脈燈
影照し、銀坑に勝を獲たせて美人一人居懸りたり、
神か仙かは妖かコハ驚かして士卒一人ギョツと一
足途絶して暫時顔を合はせたるが何何にてはあれ
ず〜と呼ぶ聲に前期より心は着きながら故に勝眼
を獲ひたる時し美人は眼を合はせし、士卒どもは
のをも討はせせ此方へ寄させと左右より無駄に手を
取り引出て、本陣に馳歸り難く成政に備へける。
成政すは手調を叩へ馬上に松火差置し路傍に蹲
居せる美人を庇見て、山路の案内心得居るか
と氣早の察察、燈の尾に請教は無花の友、名も素
性も聞かばこそ直に意のある處を謂ふ、問はれて
論議あるを上げ〜はい存じ居り候〜と答へけるに
成政歎息して、可、然らば少くは近路より末
迄にまで案内せよ命に貸かば斬せむ〜と手にせる
松火を美人に與へて二萬騎の眞先に立たしめたり、
美人は唯々として命を奉じ松火を握照らして先導せ
るがも、遙走ることもあらず士卒二人が鎧の懸

て遊樂とせり、
利家俄に心着き、家臣奥村助右衛門水瀧に命し、故
小侍従の先途を見よ、もし未だ動らざるに先達ちて
北の庄に火の手懸らばアノ氣象者活きては歸らじと
しては勝家の遺托に對して我が一分立派し〜と其後
を遣はしめたり、助右衛門水瀧行馬に鞭を揚げて追
續さけるに果して未だ年ばかりさるに遙かに北の
庄の天に中りて黒煙々として起つて大空を籠
めて立現れり、あ、已に運し、小侍従は行方知れせ

〈初出6〉

先を婦人の胸に突付けてヌツと謂はは突伏せむ
感を示して〜と押し行く勝助二萬餘大三人は本陣
にあり他は後陣にあり前鋒の松火は美人の手にあり
斯くて段々進んでいく軍卒が不圖心着しは幾度も同
道を再びするかの感あることさかり道敷油断から走
と美人を責めて此由を語りけるに美人は助〜と打突
ひ〜方標遣は知らで〜と云ふ、此邊の山路は皆同一
標亦所ばかりさればこそ前刻には踏迷ひ給ひしや
と泣み無く説明かすにぞいかさ〜成はさもあらひ殊
に婦人あればと心を許しては三三里も導かれつゝ、
右せむか左せむか道内岐の道に至れる時忽ち〜と
聲を懸けて美人は松火を投消したり、南無三寶と突
出す鐘に空を突かせて身を沈め、巖の後に入るよと
見えし感消す如く失せたりける、

秘妾傳

第六回 主人

佐々内蔵助成政が、大軍を賀達山中に、奔びて、焔火に影を懸せし、其の影は、翌九日の朝、雲に隠れたる姿を以て、未暮城の門外に、頭は、這の、この、無し、是、幸、内、有、數、の、人、毛、受、勝、助、家、照、が、妹、小、侍、從、の、こ、に、再、び、出、現、せ、る、こ、り、

秘妾傳

第六回 主人

佐々内蔵助成政は、一婦人のために、籠絡されて、夜叉の計路を遂げ、し、憤り、怒、氣、心、頭、に、發、して、手、負、狼、牙、の、牙、を、鳴、ら、し、二、三、に、寄、來、る、を、勢、猛、烈、に、して、噛、む、を、

迷は居れば、此處に寄るまで、今一時間は、曾、無、あ、ら、び、早、く、城、の、御、用、意、あ、つ、て、尾、山、に、お、は、す、利、家、公、に、後、

が、可、だ、始、終、申、し、聞、け、る、中、の、此、度、の、大、變、も、あ、り、難、有、ら、ぬ、と、い、ふ、事、に、思、ひ、入、り、居、る、事、を、一、と、い、ひ、

あり、と、憤、然、と、して、躍、立、ち、一、要、ら、ぬ、命、を、持、つ、も、あ、ら、び、ツ、レ、損、け、や、と、呼、び、り、つ、十、字、の、旗、引、提、げ、て、一、

圓、う、給、へ、背、折、り、給、へ、女、房、ど、も、か、受、う、さ、い、か、被、さ、一、無、事、に、女、え、ら、ん、と、シ、た、こ、の、お、好、ら、事、あ、り、一、と、

〈初出7〉

〈初出8〉

秘妄伝

第六回 主人

龍登の川尻川は北風扇の大河あり清流も矢の如く水冷たうして底清し舟を漕ぐに難きを以て岸より岸に轟轟を懸渡して鏡りく人を渡す昔加越の一節路に懸渡の渡といひしものもこれなり

秘妄伝

第六回 主人

尾山より未練に至る途次四里を行きて清原に城あり當時の城將は前出秀繼これ利家の同母弟なり未練の急既こゝには聞えども秀繼は到底其意ふべからざるを知らぬきを取りて後をさそ走

然るに風の音信はさほ早く成の出軍の姿も道野に喧ひすく二三の國老の耳にも聞えたるを未だ確信を得ざれば君聽を驚かさず利家は知らずおはしぬ小侍従が未練の急を報せるに及びて其音未だ半ばさ

〈初出9〉

小侍従は高らかに人々おほす、君の御出陣候は馬引給へ馬引給へと操縦に立ちて呼ばりたり

かにと願ひ給へば驚霧より出でて御傍に馳せ寄り、一里御愛慮朝はすきといひつ、掛加をしつと取つて、さ未練へ御案内を英氣の瀾るる容顏は

〈初出10〉

よと其因と謂はひを期し日管に歸めける、利家公、斯ることは好まされず春氣多く御けは秀繼に對して心おしと思ひ給ひ、彼の飄忽を顧みて乳尼

視³氏の論考において周到な検討がなされている。紅葉の改稿で看過できないのは、越野・松村両氏が指摘されるように滝の白糸(草稿では水島玉、全集本では水島友)の人物像の相違である。全集本の白糸は、村越欣弥(草稿では植生莊之助)と再会する天神橋の場面を境にして、前半は怪しい鉄拐肌の女として描かれ、後半は殊勝で勤儉小心な哀しい女として描かれている。これに対して草稿では、前後半に変化はなく、一貫して白糸は『貧民俱樂部』のお丹に通じる反社会性の濃厚な超俗の倫理を持つ義侠の女として描かれていた。以上のような鏡花独自の白糸像の背景を、先行論文の成果をふまえて『義血俠血』の特に初稿における背景、構想の原点を探るところから考えてみたい。

1 『義血俠血』初稿の問題点

『義血俠血』の初稿は全十章からなり、一、二章の各冒頭を欠いている。加えて字体が乱雑でルビもなく、用字上の不備も少なくない。一見して下書き原稿であることが、明らかである。さらに重要なのは、「第五」の冒頭(初稿の「十二」オモテ)に、全頁削除を示す対角線が一面に引かれていることである。これは、御者であった莊之助を一時馬丁として雇う金沢裁判所検事、秋月秀臣と莊之助を思慕する秋月の娘品子に関わる構想の放棄を示す。主としてこの結果「第九」の乗合馬車における客同士の会話に、以下のような問題点が生じている。まず最初に話題になる「共進会」は、後述するようにすでに「第三」に登場していたもので、「第三」の翌年に相当する「第九」に「共進会」があるという設定は、作品内の時間の経過に矛盾する。又、白糸の犯す強盗殺人事件は「第九」では「此夏金沢の公園地で」と語られるが、事件を描く「第六」では白糸が「招魂祭をあて込みて兼六園内にて興行」するのは、「翌年の春」「初夏」と並記されている。さらに、同じ「第九」で御者時代の莊之助について「婦人の客を引抱

えて腕車に乗り抜けたといふ御者」と言及しているが、「第二」後半、人力車との競走を描く場面は「破損した橋」を渡ろうとした馬車が転覆し、莊之助だけが馬に乗って「一目サんに馳せ行」く設定になっていた。このように初稿は、単に字体等から推察される下書きというだけでなく、秋月関係の記述の削除とその影響による後半の書きかえに明らかのように、構想の変更と主題の明確化の過程を如実に示している。換言すれば、初稿は、構想の変更や前後の設定の矛盾を整理しないままに結末までを書き連ねたものとみられ、『義血俠血』の初稿の構想や様々な作品展開の可能性を喚起する草稿とすることができる。初稿の構想を促したのは、すでに言及した初稿「第三」の「明治二十何(七)年かの夏石川県金沢にて開かれたる関西府県聯合共進は諸国より人出の多かるに」という一節(再稿に相当部分はない)に引く「関西府県聯合共進会」(於勸業博物館、明27・7・10(8・28)の開催であったと考えられる。この共進会については、『お弁当三人前』の自筆原稿にも「明治二十六年七月、金沢兼六園内なる、博物館に於ける関西聯合共進会は、盛大なる好景況を以て開かれたり」(慶応義塾図書館蔵「泉鏡花自筆原稿目録」(岩波書店版『鏡花全集』別巻所収)という一節があり、越野氏は『義血俠血』とこの作品を「『共進会』を軸にした双子の作品と仮定」しうると述べている。明治二十七年の帰郷中に執筆された作品には、直接間接に鏡花周辺の出来事に取材し、その心情を仮託したものが多し。父の死に取材した『聲の一心』をはじめ、当時の金沢で発生した事件、新聞の雑報記事に素材を求めた『大和心』・『鐘声夜半録』・『予備兵』等がある。自己の周辺で起こる出来事にもとづき、これらを構想の原点として作品世界を築き上げているのである。当時の鏡花は、困窮の渦中にあつて、生きがたい現実をいかに生きるか、生きるべきかを模索して現実社会の出来事に注目していたことが、作品から看取される。そのような観点で、『義血俠血』初稿の構想の原点とみられる「共進会」についてその実態を含めて捉え直す必要がある。

2 「共進会」との関連

「関西府県聯合共進会」の沿革については、明治三十年七月二十一日付「北國新聞」（以下、本稿における新聞記事の引用は全て同紙）の「聯合共進会に対する意見」に詳しい。同記事によれば、明治十年の内国勸業博覧会を契機に「関西の府県相謀り聯合を以て共進会を開設するの議」から開催に至ったもので、第一回大阪（明15）、第二回広島（明17）、第三回京都（明21）、第四回奈良（明23）、そして第五回は明治二十七年に金沢で開かれたのであった。その「趣旨」は、「各地生産を一場に蒐集し其の消長を比較し優劣を判定し以て殖産興業の發達を講究すること」にあり、出品費用等は「国庫府県」の負担であったことは言うまでもない。『石川県史』は、「明治二十七年石川県は主催して勸業博覧館内に第五回関西府県聯合共進会を開きしに頗る盛況を呈し」と記している。会場の勸業博物館は、木谷藤十郎等の建議に賛同した石川県が「兼六園内にある旧鉾山教師フォン・デッケンの居館を下附」（同前）して明治九年四月に開館した我が国最初の常設博物館、金沢博物館の後身で、「興業殖産の源泉たらしめんことを期する」同一いわば時代の国是としての産業の殿堂であった。明治十年代に売り出された「金沢勝地賑双六」（同前に引用）は、文字通り文明開化期の金沢の名所二十六ヶ所を網羅した双六だが、その振出しに文明と無縁な「橋場町涼」（浅野川大橋を中央に描く）をおく一方で上りに「博物館」を捉えており、博物館への関心の高さを反映している。

「関西府県聯合共進会」への関心も高く、開催前年の明治二十六年八月五日付「北國新聞」創刊号に、すでに同共進会の記事がある。以下同紙は、逐次共進会の準備状況を伝え、明治二十七年六月以降は連日「聯合共進会に就きて」と題する記事を掲載している。予算総額四千九百六十五円余（明27・5・3付）で会期中は兼六園内と尾山神社に「五千燭光」の電灯を点し（6・20付）、八月二十三日の褒賞授与式には「一大園遊会を催」して「数百発の水花火

を打揚ぐる等の見込み」（5・30付）と報じた。又、六月五日付同紙「招魂祭期日愈定まる」には、共進会開催中の七月二十二日から三日間同じ兼六園内で招魂祭が挙行されることも報じられた（日清戦争前夜の状況から7・14付同紙は招魂祭の中止を伝えている）。人々の関心は、日毎に高まっていたはずである。こうして迎えた七月十日の開場式には、共進会事務長の県知事三間正弘の式辞等があり、昼は練兵場、夜は卯辰山で花火を打揚げて「大に景気を添えた」（7・11付）という（資料1）。開会後も「北國新聞」は、「聯合共進会雑俎」と教堂「共進会陳列品漫評」で日々の入場者数を含めて詳細に伝えており、共進会の実態を伺うことができる。

しかし、同紙の記事による限り、共進会は意外な不振とトラブルに見舞われている。それらを列挙すれば、まず「今回は自県にて開けるにも係はらず斯く出品物の未着多きは不都合千万なりとて一昨日三間知事は各郡市長へ未着の出品目録を示して督促方を訓令せし由」というように、地元石川県特に金沢からの出品が揃わず、知事が督促を訓令した（7・13付）。その背景には品物を持参してもたらい回しにされた挙句延引の譴責をうけたり（7・17付）、未経験者が審査員となるなどの不満と不平が出品者に広まったことがあり（7・19付）、会場の展示で「目を注ぐ程のもの稀」であった（7・15付）という。又、「薄茶一杯」にも「若干錢」を撒取（7・20付）した他、「場内休茶屋の水水は一杯一錢五厘通常の三杯代」（7・19付）であるなどの理由から不評で、当初の入場者は一日あたり千人に満たないありさまであった。七月十六日付雑報は、

共進会開けなば其日より人出常ならず左しにも広き公園も人もて埋むる程にならんとは誰しも想ひ居たる処なるに（中略）絶えて繁昌を見ざりし

と伝えている。このため、実務上の責任者である県第五課（勸業）長が「共進会不首尾」を理由に更迭される事態になっっている（7・19付）。同じく二十日付雑報にも「口さへ不人氣の共進会」とあり、以後も不振が続いたものと推

測される。⁽⁷⁾

一方、同月二十日付の寄書、杞憂生「共進会縦覧者に一言す(別して石川県民に告ぐ)」(資料5)は、

数日数週の長き間、名を共進会に借りて滞沢するにも拘らず、實際之れが参観をなすこと二二回に過ぎず、余は只淫猥の巷に溺酔して春夢を貪るものなり、此等の輩は実に共進会を犠牲となして放蕩逸楽に供するものというように、石川県の「実業」が「衰勢に傾かん」とするなかで、そうした自覚もなく「数日数週の長き間、名を共進会に借りて滞沢するにも拘はらず、實際之れが参観をなすこと二二回に過ぎず余は只淫猥の巷に溺酔して春夢を貪るもの」、「放蕩逸楽」に耽る者の少なくないことを嘆いている。

3 見世物の興行

共進会に背を向けた人々の行く先は、例えば同月十四日雑報「福嶋中佐遠征活人形」に、

当地尾山神社門前に於て今回興行する福嶋中佐単騎旅行大活人形は人馬ともに真に迫りて一見奇絶快絶を覚ゆると共に中佐が辛苦強忍して偉大の壮図を遂げたる形状を只目前に見るの感あらしむ

というように見世物小屋等であった(資料2)。尾山神社境内だけでなく、浅野川近傍金沢市下新町の鏡花の自宅付近でも「昨夜より三日間本市下新町新富座に於て吉田寛松一座の放楽人形浄瑠璃あり」(7・16付)、「本市下新町久保市乙劍神社社角に先頃より建築中のパノラマ館は(中略)今日より開館すべしと云ふ」(7・18付)というように、共進会をあてこんだ興行が行われていたことがわかる(資料3)。このうち「福嶋中佐の活人形」と「パノラマ」は、左記のように、初稿に描かれる浅野川の河原の見世物興行に取り入れられており、『義血俠血』初稿の構想は、こ

のような当時の金沢市中の状況に触発されたものであろう。不評とはいえ共進会のために多数の人々が金沢を訪れていたことは間違いない。

ところで、初稿「第三」の冒頭は、

明治二十何(七)年かの夏石川県金沢にて開かれたる関西府県聯合共進は諸国より人出の多かるに夕納涼の頃ほひなるを以て日暮より浅の川の河畔に遊ぶもの少なからず、此人出をあて込みて香具師の連中所々方々より入込来たり川原に小屋をならべて観世物の興行をなすもの多し、福嶋中佐の活人形あり蛇小僧の軽業あり、両頭の蛇四足の鶏など奇動物の展覧会、西洋軽業、軽便パノラマ、猿芝居など枚挙に遑あらずるが中に大当大評判をしめたるは年少き別嬪の水芸なりき

というように、浅野川の川原に七種類以上の様々な観世物小屋が軒を連ねていたことが紹介されている。再稿では、「夕納涼」の「人出」を「あて込」み、「猿芝居、馬芝居、娘軽業、活人形、侏儒、輓轡首、大蛇、剣の刃渡、電気手品、鳥獣会、盲目角力」に「別嬪の水芸」が加わり、二倍近くに増補された。こうした光景がいつからはじまったかは明らかではないが、明治二十年七月二十七日付「中越新聞」の「金沢通信(七月二十四日発) ○夜店」によれば、

今度浅の川に夜店を開き各見世物を町内の私有地を無代価にて貸与なるを以て才川の若干借料を出すよりとておのおお才川の見世物が浅の川へ移転するを以て才川は衰微し浅の川は隆盛に至るならん

と報じている。八月五日付同紙の続報は、「浅の川の夜店は昨日の如きは夜店開きより嘗てなき賑ひなり」といい、二十二日付同紙は、香林坊下で興行していた「大女手踊」も、同月十九日から「浅ノ川」で興行を始めたと伝えている。それまで、犀川べりで催されていた夕納涼の見世物を、浅野川側が誘致したものか。明治二十年代には、犀川、浅野川の両河畔で見世物小屋が掛かったのである。明治二十六年七月三十一日付「絵入 金沢新聞」の「○河原

の夜見世」には、「頃日の酷暑を当込たる夕納涼の催し」が犀川浅野川とも大いににぎわっており「翌の晩から河原へ小屋をば掛る筈」だと報じている。共進会開会を報じる「明治二十七年七月十二日付「北陸政論」の「○聯合共進会開場式」には、「夜に入りては臥龍山に於て数十発の煙火を打揚ぐる等中々の壮観にて市内夕涼の人も一層に多く麻屋両大橋通り中口辺は非常に賑ひて見えたり」と記している。二十七年夏においても、共進会開会前後の浅野川の河畔には、納涼の出入を見込んだ見世物小屋が軒をたなびていたものと思われる。

見世物の興行については、どうか。明治期の新聞雑報をみると、例えば、二十四年七月四日付「北陸実業新聞」の「○招魂祭の景況」では、「猿芝居、女大力、大狼、巨蛇、鳥あらし、視目鏡、二面二手二足の小児、人獸、手品等の興行、掛茶屋、露店にて公園内は寸隙の地」のないほどだったと報じている。また、二十五年六月十四日付「北陸新報」の「○昨今の金沢 見世物其他興行物の数々」によれば、

先づ香林坊太神宮境内には例の五分躰猫、見真大師一代記の生人形、軽業、二〇にわか加茶番、南町の水溜には軽業手品、堤町には玉子娘、武蔵ヶ辻には侏儒の手踊、西洋手品、雨龍娘、祭文語り、横安江町には一本足、未寺前には親鸞聖人一代記の覗き眼鏡、極楽橋には禽獸博覧会にして執れも呼込の中にも軽業、五分躰猫、二〇加茶番、侏儒の手踊、西洋手品等最も見物人多く日々之人シコタマなるべし

というように、市内各所、香林坊から武蔵が辻、本願寺別院にかけて多くの見世物が興行していることがわかる。三十一年十月二十七日付「北國新聞」、「○昨日の招魂祭」にも、出羽町練兵場を会場とする見世物が、「印度渡り生大蛇、往生要集機械人形、二頭六足の奇牛、新發明マトワ鏡、鉄割一座軽業、万国鳥獸会、催眠術、女力持角力、視機關等」というように列挙されている。

作中で描かれる水芸の興行を報じた雑報として、明治二十三年六月十五日付「富山日報」の「○興行の失敗」と、二十五年十月九日付同紙「○菊五郎の水芸」がある。前者は、新湊町放生津出町能六座で興行中の「水野小佐市の水芸」が「不景気の為か一日平均七八名位の看客」で「裸体で逃ぐる外はない」という記事で、後者は「射水郡小杉町の長生座にては今夜より吉田菊五郎一座の水芸を興行するよし」という記事である。金沢での興行ではないが、複数の水芸の団体が石川富山で興行していたことを裏付けるものとして注目される。また、白糸から仕送りの金を奪う南京出刃打についても、明治十九年三月十四日付「中越新聞」の「○包丁打の闇討」に「中教院境内に於て昨年より打続き興行」している「南京包丁打の芸人竹川小壽となん呼る少女」の美貌に書生連中が魅了され、「恋の闇路に踏み迷」っているという雑報があり、同様に、石川富山で興行していたものと思われる。

しかし、こうした人々による見世物小屋等の繁華のみが、『義血俠血』執筆の契機とは考えにくい。又、必ずしも草稿における白糸像と結びつくとはいえない。この点に関して、共進会開催前の六月二十日付の次の関係記事は、注目に値する（資料4）。

△建物ヲ禁ズ、開會中は興行其他小屋掛類とも公園内に於て凡て建築ヲ禁ずる由

つまり、「殖産興業の発達を講究」する共進会は、実業ならぬ見世物の興行を一切排除したところで成立したのである。上述のように共進会の不評は、内実の伴わないままに外面の体裁を繕うことに終始する権力者の欺瞞に起因するもので、『貧民倶楽部』における婦人慈善会の実態と共通するものを、鏡花が共進会に見出していたことは想像に難くない。

城下町金沢の東縁をかきつて日常的世界と対立する非日常的な「境界性のゆたかな場所」ともいえる浅野川の河原に、共進会会場から排除された見世物興行の集約的な空間を形成する『義血俠血』初稿においては、「他の興業は大抵夕納涼の出入を待ちてはじむれどもこの水芸のみは日中の暑さにめげず見物永当詰懸け居れり」というよう

に、唯一「日中」から見物の「詰懸け」るのが水芸の興行とされる。⁽¹⁰⁾ 水芸の興行は、金沢の中心にある兼六園での共進会の開催と時を同じくし、深夜に及んでいたものと思われる。⁽¹¹⁾ それは、勸業博物館に代表される当代の支配原理に対峙するものといえよう。そこに「一切の事人の支配を受けず、気ま、勝手に振舞ひて処世の状は恰も野生の馬の荒野をかけりて羈絆を知らぬ」(初稿「第六」) 太夫白糸が設定される時、白糸は初発の構想において、周縁の地である貧民窟鮫ヶ橋から鹿鳴館をのぞむ『貧民倶楽部』のお丹の形象に限りなく近いのである。⁽¹²⁾

注

- (1) 「義血俠血」研究——初稿・再稿・全集本の間——(『泉鏡花の文学』桜楓社刊、昭51・9 初出「詩林沂泗」昭37・8)
- (2) 「観念小説論」のための序章(2)——鏡花作『義血俠血』論——(『国語国文研究』昭50・11)。
- (3) 「義血俠血」の変容——紅葉改作をめぐる——(『日本近代文学』昭59・10) 及び『自筆稿本 義血俠血』別冊解説(刊記は本文参照)。
- (4) 「観念小説論」のための序章——鏡花における「虚構」の意味——(『国語国文研究』昭51・8)。
- (5) 故巻克二「天和心」の素材(『光華女子大学研究紀要』昭56・12)、越野格「鐘声夜半録小考」(『国語国文研究』昭54・12)、「予備兵」の素材など(『国語国文研究』昭58・12) 参照。
- (6) 『石川県史』第四編(石川県、昭6・3)。
- (7) 石川県立図書館蔵の「北國新聞」マイクロフィルムは、明治二十七年八月分を欠く。共進会終了の期日について、同年八月三十日付「北陸政論」によれば、同共進会の「閉場式」は、八月二十八日である。
- (8) 同じく兼六園で催された招魂祭の場合、奉納演武・競馬・相撲などの余興がある他、「公園隣接地、出羽町練兵場内」では、「諸興行」がくり広げられていた(『北國新聞』明28・11・12付)とあって、『義血俠血』の後半の記述に付合する。
- (9) 本書所収「貧民倶楽部」と慈善の時代」参照。

(10) 前田愛『都市空間のなかの文学』筑摩書房刊、昭57・12)。又、注(3)参照。

(11) 共進会は、当初「午前八時に開館午後四時に閉館」し、七月十五日からは「午後五時閉館」(『北國新聞』明27・7・15付)となった。

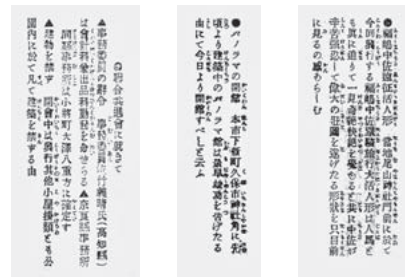
(12) なお、初稿・再稿の殖生庄之助は、白糸の仕送りを受けて「翌年」新任の判事」として金沢裁判所に赴く。初出の村越欣弥は、「三年の後」、「検事代理」として赴任するという異同がある。上京後一年で「判事」となるよりも、三年後に「検事代理」となる方が自然であり、変更は妥当であろう。注意されるのは、明治二十七年七月八日付「北國新聞」に「検事代理と為し得るもの」という次のような記事が掲載されている事である。

本年法科大学卒業生中の希望者並に来る十月執行する判検事第一回試験及第者より採用すべき司法官試験にして検事代理として年給三百円を給する者は二十五名許ばかりの予定にて其他は仮令幾名の及第者あるも無給の試験とし漸次欠乏を待ち本人の希望に依り検事代理を命ずべしといふ

変更は、紅葉の指導によるばかりでなく、検事代理採用について報じた右の記事を鏡花が読んで、訂正した可能性もあるのではなからうか。



【資料1】



【資料4】

【資料3】

【資料2】



【資料5】

『取舵』考

『取舵』は、明治二十八年一月雑誌「太陽」創刊号に掲載された作品で、翌年二月「太陽小説」第一編として刊行されている。初出時の署名は、尾崎紅葉であった。

当時の紅葉には合作や代作が多く、例えば明治二十七年一月元旦の『都の風』（小栗風葉著・紅葉補、「読売新聞」）、同年二月二十二日〜四月十四日『片鱗』（紅葉・風葉合作、同前）、二十八年五月一日から七月十七日連載の『笛吹川』（なながし、実は花袋・紅葉山人、同前）などがある。鏡花に限っても、同年四月刊行の『なながし』（春陽堂、「予備兵」「義血侠血」を収録）では本文冒頭に鏡花・紅葉の署名が連名で掲げられている。『取舵』も、いわゆる「翻案、合作時代」に博文館の依頼をうけた紅葉が、鏡花の作品に加筆して「太陽」創刊号にあてたものと考えられる。発表直後の「早稲田文学」(明28・1)の「文壇消息」には、「紅葉(中略)近來、『義血侠血』『取舵』など異色の文章多し」とある。また、森鷗外は翌年二月の「しがらみ草紙」で「船客対話の調子杯には流石紅葉の筆とおもはる、節あり」(「鶴翻搔」)と述べ、いずれも紅葉作として捉えていることがわかる。しかし、明治二十八年九月の「国民之友」で内田魯庵は、「紅葉山人の署名あれども行文及び結構の上より推想して鏡花子の作なる事疑なし」と看破した上で、

『取舵』の如きは紅葉子が署名の榮を与えしにも係らず、鏡花子の作中第一の拙劣たるべし。兎角評するは

どのものにあらず

〔小説界の新潮流（殊に泉鏡花子を評す）〕

というように、低い評価を下している。

たしかにこの作品は、岩波書店版『鏡花全集』（巻一所収。以下、全集と略記する。）でも十六ページのごく短い短篇であり、多様な鏡花文学のなかでは、むしろ目立たない作品といつてよい。しかし、見過ごせない点がある。後述するように、『取舵』は明治二十七年九月の上京に取材した作品で、執筆時期も上京後間もなくと考えられる。同年一月九日の父清次の死を契機とした帰郷は、生活の困難から自殺にかられるといった精神的な危機をもたらす一方で、『貧民倶楽部』から『義血俠血』『予備兵』に至る多くの作品執筆を促し、鏡花文学の重要な指標の一つとなった。『取舵』には、帰郷中に瀕した精神的な危機の克服という当時の鏡花の内面の投影を読み取ることが可能でもあり、注目される。

小稿は、こうした観点から『取舵』執筆に至る背景を探り、明治二十七年の上京時の鏡花について考察すると共に、この作品の意義について再検討するものである。

1 成立背景

『取舵』は（上）・（中）・（下）の三章からなり、慶応義塾図書館には、紅葉の添削の加わった清書稿以前の草稿が残されている。梗概は次の通りである。

（上）九月二日午前七時、越中伏木から直江津に向かう汽船観音丸に、善光寺詣での盲目の老人（78歳）が一人で乗り込む。

（中）万事に不如意な老人は、上京する二人連れの学生に助けられて甲板に憩う。その側で一人の学生が、前年夏に八田潟の渡し場で盲目の船頭の漕ぐ舟に乗った奇話を語る。

（下）泊を過ぎるころから空模様は次第に悪化し、直江津沖で舳はしけに乗り換えたところには風波ともに激しくなる。舟子の必死の操作も手に負えず、思わず「金比羅大権現」を念じた時、「取舵」と叫んでそれまで「厄介物」扱いされていた老人が立ち上がるや舵を取り、無事港に漕ぎ寄せる。この老人は、実は学生が前年に出会った盲目の船頭であり、風眼で失明する以前の若い時には「加賀の銭屋内閣が海軍の雄将」磁石の又五郎という傑物であった。

右のように「取舵」は、伏木直江津間の汽船航路を舞台とした作品であり、鏡花は実際に明治二十七年の上京の際、この航路を利用してゐる。それは、同年十月一日付目細八郎兵衛宛鏡花書簡の

出立のみぎりは沢山御馳走下され中林もしきりに喜びをり候はじめの舟路にすこしも酔はず親不知を越えて糸魚川にてあかだまの暴風警戒を見ながら何事もなかりしは、全くごあんじ下されて無事をおいのりのおかげにこそと感謝いたし候

（岩波書店版『鏡花全集』別巻、所収）

という一節によって明らかである。この作品は、同航路での体験や見聞に基づくものと考えられる。同年の上京以前の経緯については、紅葉の鏡花宛書簡（『鏡花全集』月報13、15）及び「年譜」（改造社版『現代日本文学全集 第14篇』所収）等によって、次のように整理される。

明治二十七年一月九日、父清次逝去により帰郷。以来困窮して三月下旬から四月にかけては、兼六園近傍の百間堀への入水自殺を思うまでに追いつめられる。五月には、『鐘声夜半録』草稿から窮迫を看取した紅葉の叱咤激励をうけ、文学を唯一の拠り所に創作に励む。帰郷中に執筆された作品は、前年末から執筆にかかっていた『貧民

倶楽部』をはじめ、『聾の一心』『鐘声夜半録』『秘妾伝』『乱菊』『天和心』『妖怪年代記』『義血俠血』などである。草稿は逐次紅葉のもとに送付され、助言と指導をうけている。詳細は、「明治二十七年の鏡花・忍月・悠々」以下の拙論を参照されたい。上京への断ちがたい思いは、しだいに募り、右の書簡に、「別して御礼申上ぐべきは此度上京の義にこれあり候小生が如き境遇にて再三度の出京はなかく出来得べからざることに候ひしに御夫婦のおなさけにて望を達し御礼の申上げやうもござなく」とあることから、おそらく祖母きての実家目細家への働きかけが功を奏して、九月上旬に目細家の援助によって上京したことがわかる。上京に際しては、同郷の大学生中林と同行し、直江津経由で上京したものと思われる。

これらの作品のなかで同年七月から八月にかけて執筆された『義血俠血』について、松村友規氏は『自筆稿本 義血俠血・解説』（岩波書店、昭61・11）で、

学問への志を抱きながらも父を喪い雇いも解かれて途方にくれる男のために東京遊学の学資を貢ぐ滝の白糸の出現は、いわば天神橋上に佇む鏡花自身の真夏の夜の夢であり、作品そのものが鏡花の願望と幻想による内的な演技だったといつてよい。

と説かれている。たしかに「義血俠血」には、学問ならぬ文学への志を果たすために上京したいという当時の鏡花の願望が、色濃く投影されているように思われる。とすれば、作中白糸との約束のもとに即座に上京する村越欣弥が通りがかりの人力車夫に「伏木まで行くか」と尋ね、つづいて「伏木は蓋し上途の道、越後直江津まで汽船便のある港なり」と記すのも、上京の機会を探りつつあった鏡花が具体的に伏木直江津経由の航路を考えていたことの反映ともみられる。

実際のの上京に直江津経由の航路を選んだ理由については、後年随筆「麻を刈る」〔時事新報〕大15・9・23～10・8〕

で次のように述べている。

私も下街道を、唯一度だけ、伏木から直江津まで汽船で渡った事がある。（中略）爾時は、旅費の都合で……聞いて、真実にはなざるまい、伏木の汽船が、両会社で厳しく競争して、乗客争奪の手段のあまり、無賃銀、たゞでさせて、甲会社は手拭を一筋、乙会社は絵端書三枚を景物に出すと言ふ（中略）やうな風説を聞いて、乗らざるべけんやと、旅費の苦しいのが二人づれで駆出した。

（岩波書店版『鏡花全集』巻廿七所収）

右にいう「両会社」〔後出〕の乗客争奪は、前年五、六月ごろから表面化していたものである。富山で発行された「北陸政論」は、明治二十六年六月二十四日付の雑報「汽船の競争」で、

伏木港と直江津間を往来する汽船の競争は今日も其熱度の冷却せざるのみか愈々其極点に達し富山県知事も切角仲裁の勞を執りたるよしなれと仲裁歩合の當を失ひしにや空しく手を引きし程の始末なるか賃金は不相替遠近に係らす五錢と云へは此末無賃錢で往來の出来得る場合のあるへく北越汽船会社にては更に汽船を買入れ競争を試みんとする勢なるも航運社にては負けす劣らす此に對する策を講し居れり

と伝えている。このような北越汽船会社と航運社による前年の競争にもとづいた「風説」が、実際に流布していたとみられる。しをぎを削った「両会社」と競争の原因については、明治二十七年四月十二日付「北國新聞」の「伏木直江津間の定期航海」に「従来伏木航運社の独占なりしが昨年北越汽船会社の航海を始めたるより非常の競争起りたる」とあることから確認することができる。同記事はさらに、新湊汽船会社が新たに参入することを伝え「又々大競争を見るに至るべし」と予測している。これより早く、三月九日から十八日までの同紙には、伏木航運社による同航路が三月一日から再開されたという広告も掲載されている。明治二十七年の帰郷中に執筆された作品の多くが、当時の新聞雑報に取材していることは、すでに実証されている。鏡花が「北國新聞」をはじめとする地元紙を

読んでいたことは、ほぼ確実である。これらの記事や広告によって、改めて鏡花は伏木からの航路について再認識したものと考えられる。加えて、同紙の記事で注目されるのは、『取舵』に登場するのと同じ「観音丸」が実在していることである。右に引いた四月十二日付「北國新聞」の「伏木直江津間の定期航海」では、「航海会社の射水川丸、萩の浦丸、直江津丸、伏木丸及北越汽船会社の観音丸、北越丸の六艘にて航海し居たりし」と報じた上で、「北越汽船会社の観音丸北越丸」は「昨今修繕中」とあり、五月十八日付同紙「伏木、直江津間の航海」では、「此程観音丸」が「廻航」し、「競争の勢」が生じたため有志者の尽力によって、「各船順番を定めて往復する」として、具体的に「五月中航海日」を表示している。同記事によれば「観音丸」は「午後五時出帆」で、『取舵』作中の「午前七時、伏木港を発する観音丸」という記述とは合致しない。しかし、六月二十一日付「北陸政論」の「萩の浦丸の北海道行」では「今度競争の悪弊を洗滌する為」船主が協議し、「伏木直江津間の定期船は四艘」に限定することになった。そのため同航路の汽船六艘（射水川丸・萩の浦丸・直江津丸・神通川丸・北越丸・観音丸）のなかで、午前六時出航の三艘のうち萩の浦丸が北海道航路に転じたと伝えている。又、七月六日付「北國新聞」の「定期航海中止」には、同じく午前出航の射水川丸も北海道行となる旨の記述がある。この時点で午前の出航は、直江津丸のみになる。しかし、後述するように九月十日の時点では、直江津丸は午後六時の出航に変わっている。船主の協議した七月の時点で、観音丸が午前の出航に改変された可能性は少なくない。

加越能の船舶事情を記す原田翁甫『三州船舶通覧』原田刊、大4・11の「北越汽船会社」には、「本社を魚津に置く、北辰丸（一、一八六噸）北越丸（一、一六噸）観音丸（一〇〇噸？）新川丸等を所有し、北海道及東京横浜間を航海す、此内の小船を提げて伏直間航路にて伏木航運社と競争す」とある。「観音丸」は百噸程度の汽船であつたらしい。⁴「観音丸」については、『湯女の魂』（新小説）明33・5でも直江津への航路について述べた一節に、

名代の荒海、此処を三十噸、乃至五十噸の越後丸、観音丸などと云ふのが、入れ違ひまする煙の色も荒海を乗越す為か一際濃く、且つ勇ましい。

とある。実在の「観音丸」という船が、鏡花に深く印象付けられていたといえよう。『湯女の魂』ではないが、荒海に行く「観音丸」へ「乗越」して上京したと想定しうるのではなからうか。

ところで、「観音丸」とおぼしき小汽船に乗って上京した期日については、今だに明らかではない。前引の十月一日付鏡花書簡には「着京後直ちに御礼申し上げべきところ（中略）御無沙汰いたし延引のなんあしからず」とあって、九月上、中旬上京の可能性が推測されるに止まる。同書簡には「読売に（予備兵）と題し（なにがし）としたる小説は先生の御加筆にて小生の作にござ候あひだ御一読下さるべく舞台は金沢にこれあり候」とあり、自作発表を待ったために、礼状が遅れたものと推測される。帰郷中の鏡花にあてた最終の紅葉書簡の日付は、八月十八日だが、鏡花の上京を示唆する記述はない。そこで、手がかりを当時の雑報にもとめると、明治二十七年九月十五日付「北陸政論」に「二百十日の暴風雨」として

去る七日以来不良なりし天候は去十日に至りて愈々不穏となりしより中央気象台は同日午后四時過全国海陸を警戒せしが同夜に至って（中略）一区より三区までの海陸に暴風雨の虞あることを急報せし

とある。これは、前引鏡花書簡にいう「糸魚川にてあかだまの暴風警戒を見ながら、何事もなかりしは、全くおあんじ下されて無事をおいのりのおかげにこそと感謝いたし候」という一節に合致するものである。又、同月十四日付同紙「直江津丸の行衛」には、伏木を「再昨日午後六時頃未だ暴風烈しからざる」時に出航した直江津丸は「其後暴風俄かに起り今に行衛は知れざるよしなれども多分佐渡へ避難したるものならんとの噂」と伝えている。九月中にこの他悪天候を予想させる記事は、同紙には見られない。したがって鏡花が伏木から直江津に向かったのは九

月十日頃としたいのだが、そのように断定できない問題がある。それは、九月九日付同紙の伝える「伏木の大火」である。同十一日付同紙「伏木大火の詳細」と併せて記すところを見ると、九日付が「一昨夜午後十一時三十分水郡伏木湊町藤田善助納屋より失火し遂に全焼三百八十八戸潰家五戸船三艘焼失昨日午前三時鎮火したり」というように、九月七日深夜から八日早朝かけて伏木湊町・石坂浜通りの三百八十八戸を焼く大火があり、十一日付では「羅災の町名は湊町、石坂浜通りにて重なる建物は十二国立銀行出張店、高岡銀行出張店、田村石炭店、伏木航運社、二上旅店、北越汽船会社、塩浜廻漕店、内国通運会社出張店」他で、「観音丸」を所有する北越汽船会社も競争相手の伏木航運社も罹災している。ところが、当時を回想した「麻を刈る」からは、微塵も大火の気配は読み取れない。鏡花文学には火事を描いた作品が多いことを考えると、無関心であったとは考えられない。一方天候が右引用のように、「七日以来不良」とある点に注目すれば、大火の直前の九月七日朝の出港という推測が成り立つ。九月十日の暴風雨では、金沢市内でも「午後六時半頃に至りて俄然南方より強風吹き起り漸次勢ひ猛烈となり家根をまくり瓦を飛ばし」（北陸新報）9・13付「一昨夜の暴風」という強風で倒木の被害があった他、手取川の仮橋が吹き落とされた（同前）という。鏡花書簡の「何事もなかりしは、全くごあんじ下されて無事をおいのりのおかげ」という一節は、この暴風雨を念頭においたものではなからうか。少なくとも「あかだまの暴風警戒」は、「直江津丸」の記事からしても単なる杞憂や思ひすこしでは済まない危険を予報していたのである。以上、特定の期日を確定しえないうが、九月上旬、作中の「九月二日」以降七日以前ということは、鏡花書簡及び当時の雑報から推測されよう。

このように、鏡花にとつて初めての航路による上京は、不安に満ちたものであったらしい。「麻を刈る」にも、伏木の宿で鯨の刺身を出されて「しけ」を予感し、悄然とする一節がある。余儀なく選んだ海路への不安である。鏡花の帰郷中の雑報には、初めての船旅への不安をさらに倍加する以下のような記事がある。明治二十七年一月二

十四日には、伏木港で酒田丸が遭難、二月十八日には同船の修理中に浸水事故で人夫十一名が惨死している（同年1月21日付「北陸政論」参照）。一月二十五日付「北陸政論」は、「今年は兎角汽船の厄年と謂ふべきか」と不吉な予測をしているほどである。一方地元の「北國新聞」には三月九日付に「加能丸衝突す」とあり敦賀港を出港直後、加能丸が帆船と衝突したと報じ、四月十二日付同紙にも「第二加能丸の破損」という雑報があり、「越前四ヶ浦沖」で「機関車の心棒」が折れたという記事がある。いずれも敦賀から金沢郊外の金石かないわに向かう汽船の事故で、大惨事には至っていない。しかし、三月九日付同紙には「衝突の際は乗組一同非常に狼狽したりと云ふ」とあり、四月十二日付同紙には「右遭難の際乗客の驚愕は一方ならず近傍に居合せたる漁船に助を乞ひて四ヶ浦に上陸したるもの十数名あり」とあって、両者に共通して事故発生直後の乗客の動揺する姿が伝えられている。こうした雑報の喚起する不安が、「麻を刈る」の「しけ」の予感や『取舵』の暴風の場面へと結びついていったものと考えられる。これらとは別により直接的に、右の「北國新聞」の雑報を脳裡に描いて執筆されたと推測されるのが、同じ「加能丸」を舞台とする『旅僧』である。

『旅僧』は、明治二十八年四、五月「少年世界」に白水楼主人の署名で発表されたが、執筆されたのは『取舵』と同時期と推定されている。初出時のタイトルは、「一人坊主」であった。この作品は、遭難の予兆とされる不吉な一人坊主の乗り込みに不安を募らせる乗客を安心させるために、海中の荒波に飛び込んで救助された旅僧が、逆に「活仏いっほふ」として信奉され一条の法話を求められて「自分を信仰すること」の大切さを説くという短篇である。

次章では、この『旅僧』を参考に『取舵』のテーマについて考察することとする。

2 『旅僧』と『取舵』

さきに述べたように、『取舵』には現行本文とは異同の多い下書き原稿が残されている。この草稿で最も注目されるのは、末尾に現行本文にはない次のような一節（二丁分）が存在することである。

蓋し曩に学生が談話となれりし八田潟に於ける瞽の渡は渠が其船頭なりしも、其平生の此親仁と一朝艚を握りて恥と身構ふる時の親仁とは全幅を挙げて全く別人の風采を呈するなれば三田村が人を知るの明無かりし如きはあながち近眼の罪のみにてはなかりしならむ。

右のように、語り手は、「八田潟に於ける瞽の渡」と観音丸の盲目の老人が同一人物であることを学生が察知できなかった理由として、「平生」と「一朝艚を握りて恥と身構ふる時」と「全く別人の風采を呈する」ためだと説く。そして、

然り艚を取りて賢明なるほど渠は然らざる時に暗愚なり、生理上人の脳力は一方に傑出すると、もに他に其欠点を生ずることを免れず

というように、「一方に傑出する」「人の脳力」は「他に其欠点を生ずる」のであって、

盲は単に眼の盲たるのみ、北海を見る智識の眼は人が暗中に其住馴れたる坐右の物を探るの明あり。

さるからに数十個の命を乗せたる一隻の短艇の新に得たる脳髓の、其老鍊にて機敏なる、北海の歴史に於て最も記憶すべき其日八月二日の暴風雨を制圧して、港に着くべき余裕ありき。

というように、この盲目の老人の場合、「北海を見る智識の眼」は「人が暗中に其住馴れたる坐右の物を探る」と同様である。したがって、「一隻の短艇の新に得たる脳髓」である盲目の船頭は、「其日八月二日の暴風雨を制圧して、港に着くべき余裕」があったと記している。

鈴木勇「鏡花自筆原稿解析2」（『鏡花全集月報27』所収）は、「取舵」の草稿末尾の一節から「この当時、父の死によって鏡花が失いつつあったのは、自分自身の舵を取る〈船頭〉であった」として、『取舵』のテーマを暴風雨の中の「一隻の短艇」にも等しい「当時置かれた状況」で必要とした「新に得たる脳髓」、すなわち「自分自身に対する〈信仰〉」と捉えている。さらに、「自分自身に対する〈信仰〉を主題とする点から、『取舵』と『旅僧』の二作は「ほぼ同一の設定で同一のテーマを描いたものである」と指摘されている。炯眼だが、明治二十七年上京の時点を再考する時、「自分自身の舵を取る〈船頭〉」を果して「失いつつあった」のかという点と『旅僧』と『取舵』のテーマの同一性、特にその内実については再検討する必要がある。以下、この二点を中心に考えてみたい。

『旅僧』は、「己を恃む能はざる」「薄弱なる人間」が「最も不安心を感じる」海上の船に舞台を設定した作品である。そこで、上述のように海中への捨身によって乗客の恐怖心を払拭した旅僧が、乗客に対して、「何でもあやふやだと安心がならぬ。人を恃むより、神仏を信するより、自分を信仰なさるが一番じや」（初出）というように、自分自身への信仰、すなわち自分を信じることの重要性を説いている。この一節は、『取舵』『旅僧』に先立って執筆された『義血俠血』再稿の

血ありと誇る者は、要らざる熱に浮かされつゝ、職権外に干渉し（中略）すべて一身を顧みず道路のことにさへ熱心なれば、仁といひ義といひ俠といふ、もしそれ天下事ある時自から信する心薄くして一に以て海陸の軍備に任ずる能はず家を棄て、徒党を結び漫に郷里を騒がす者は、これを義勇兵と称^たふるなり（傍線、引用者

における「自から信する心」に通じるものである。又、同様の文脈で『旅僧』の

初手からさほど生命が危険だと思ふたら船なんぞに乗らぬが可て。また生命を介はずに乗った衆なら、風が

吹かうが、船が覆らうが、そんなことに頓着は無い筈ぢや

という一節は、同じく『義血俠血』再稿で白糸から東京遊学の資金援助の申し出を受けた植生壯之助（初出以降の村越欣弥が「人から恩を受けると返さねばならぬ義務がある、其責任が重いから」とためらうのに対して、

恩返しが出来やうか、また出来まいかなんて危ぶむのはそりや貴下の様でも無い、氣の不確が者のいふこと、最も貴下がお志をさへお遂げなさればそれで可いのでござんすものを、遂げられやうか遂げられまいかと危ぶむ位な目的なら初手から立てぬのが可うござんす

と白糸が述べる一節に重なるものである。このように、『旅僧』のモチーフは、『義血俠血』再稿に発しているのである。壯之助のいう「義務」「責任」は、初期鏡花文学に頻出する重要語句であるが、『旅僧』『取舵』には用いられていない。『義血俠血』再稿で「義務といひ責任といふもの皆自他の約束に因りて起るなり」という、その特定の他者が両作品に存在しないためと考えられる。『取舵』については、特定の他者に代わって過酷な情況が設定されているといつてよい。では、『取舵』では「自から信ずる心」はどのように描かれているのか。その点を考えるには、結末を自筆原稿によって検討しなければならない。鈴木氏は、暴風雨の中の「一隻の短艇」を鏡花が「当時置かれた状況」と把握されたが、氏の言われるように、乗客を乗せた艇を沖合へ押し流す暴風と高波は、この年一月以来鏡花の前に立ちふさがり、八ヶ月ぶりに上京する鏡花の前途にそびえ立っている困難さの象徴と解釈することができる。荒海で船を操る「舳櫓の舟子」は、当時の鏡花の投影された姿ともみられる。草稿ではこの「舳櫓を取れる船頭」は、「船の全軀を支配する精神或は主脳ともいふべきもの」とされている。現行本文では削除されているが、草稿の船頭は、「最遅まじき壮俊にて斯道鍛練の者」と記されている。自己を投影するものとして、この設定は必然であつたはずである。その船頭に初めて「取舵」という声が掛けられるのは、

驚くべき見上ぐるばかりの大浪の天に沖りて殺到せる時渠は其猛威に蹴落されて我よくこれに処し得べきかと自ら其身を疑ひて、啊呀と思へる心の弛に腕の力を失ふ刹那、艦はぐるりと向を変へて少しく横に傾きつ。南無三宝と驚く腕に平生の手練を忘れて危急に処すべき手段に迷ひ、茫然として自失せる

時である。初出以降の現行本文でも「瞻るばかりの高浪」に「啊呀と驚き」、やがて「危急に処すべき手段を失う点で、基本的な展開における異同はない。しかし、高浪への「驚き」はあつても草稿にみられる「疑ひ」や「迷ひ」や「自失」は現行本文にはない。草稿は、こうした心理の変化を克明に描こうと苦心しているということができる。そして、右に引用した一節は、『義血俠血』再稿及び『旅僧』でいえば、自分自身への「信仰」「自から信ずる心」を失った「氣の不確」な状態を意味していることは明らかである。草稿はそうした状態を「船は其脳髓を奪はれて死せるが如く浪のまに／＼ならむとせり」と描いている。「取舵」というかけ声はその「とたむ」にかけられるのである。現行本文のように、「八人の舟子」が「効無き櫓柄に縋りて」「南無金比羅大権現！」と「同音に念じた後ではない。これに続いていったん我に返つた船頭は、再び舵を取りいわば人事を尽くす。しかし、ついに力尽きて昏倒しようとする。つまり、再び「船は其脳髓を奪はれて死せるが如く浪のまに／＼」なろうとする。その時「凜然たる声」をかけて船頭に代る「盲目の老耄」を、初出本文では、「金輪際より生へたる如くに突立ちたり。」と記している。ここにいう「金輪際」は、本来の仏教語としての意味、すなわち「無限に深いところ」という意味で用いられていることは言うまでもない。盲目の老船頭は、そのように揺らぐことのない「自から信ずる心」を持つた存在と考えてよい。上述の『義血俠血』再稿の「血ありと誇る者は」以下の引用が「自から信ずる心」という根柢の薄弱な同世代人への批判を語り、『旅僧』がそのような薄弱さを排して自分を「信仰」することの重要性を有難い法話の形で説くものだとすれば、『取舵』は作中に「自から信ずる心」や自分への確固とした「信仰」を体現

した存在そのものの姿を描き出した作品なのである。

では、そのように揺らぐことのない自分への「信仰」はいかに可能なのか。その意味で注目されるのは、草稿「中」で、老船頭を「さほど貧困でもなくせに、舟を漕がねば飯が食べられないといふ変物で、渡をやつてゐるんだつて、大方母親の舢内から艀を漕いで出た者だらふ。」というように、「母親の舢中から艀を漕いで出た者」と記している点である。⁵無限の深みという意味での「金輪際」と「母親の舢中」は、間断なく通じていると捉えうるからである。したがって、盲目の老船頭が「暴風」で「一寸先は暗闇で方角も何も分」からない時でも自若としているのは、「金輪際」という存在の深みに通じる「肚」からの揺るぎない自分への「信仰」を持つているからだということができよう。さきの鈴木氏の考察にかえつていえば、父の死によつて失いつつあった指針を、上京を前にした明治二十七年八月の『義血俠血』執筆中に「自から信する心」によつて確立しようとしていたといえるのではなからうか。そして、上京時の航路に取材した『取舵』では、自身への信頼のよつてきたる所、自己への「信仰」の根源を「金輪際」という存在の深みに見出しつゝと考えられるのではなからうか。同時期執筆の『旅僧』で船客に各自自身への「信仰」の重要性を説く僧が語るように、彼がそのような悟りを得たのは、風波に揺れる船中で平然としていた姉弟にその理由を聞いたことによる。父の急病を見舞うために帰省するという姉弟は、大揺れの船内で平然としていた理由を次のように語る。

父様には私達二人の他に、兎といふものはござらぬ、二人に万一のことがありますれば、家は絶へてしまひます。父様は善いお方で、それきり跡の断へる様な悪い事為置かれた方ではありませんぬから、私等は何様な危い恐い目に出逢ひましても安心でございます。

右のように姉弟の「安心」は、父への信頼や確信に基づいている。姉弟の父への「信仰」が「自から信する心」の根源であるということは、注目に価する。なぜなら、『取舵』にいう「金輪際」は、父母を含めた父母未生以前に通じる存在の深みをさしているはずだからである。その意味で『取舵』は、『旅僧』のテーマをさらに深化させた作品といえることができる。

以上のように、『取舵』に投影されているのは、一度失いつつあった自分自身の舵を取る（船頭）を（自から信する心）の確信によつて取りもどしつつある明治二十七年初秋の鏡花の内的な心象と捉えられるのである。付言すれば、『金輪際』から立ち上がったその（船頭）が確信をもって舵を取るの、言うまでもなく、文学の海に他ならない。次の章では、鏡花文学における『取舵』の位相について考えたい。

3 作品の位相

『取舵』の結末で「老船頭」の正体が、初出以降では「壮時に時て加賀の銭屋内閣が海軍の雄将として、北海の全権を掌握したりし磁石の又五郎なりけり」と明かされることについては、すでに述べた。学生の語りの中で「老船頭」が、八田潟すなわち金沢郊外の河北潟の渡しをやつていたことも、上述した通りである。『石川県宇ノ気町史』（昭45・11）によれば、河北潟には、内日角―須崎村間の「内日角航路」と大崎―北間村間の「北間航路」があり、前者は「藩政時代からの特権を明治六年に内日角・大崎村合同の陸運会社が引き継いだ」こともあり、明治七年に設立された後者との間に「紛争」が絶えなかったという。内日角側が「潟内通行一線路権（專業権）」を得て、北間航路が「有名無実化」した明治二十七年には、県知事に提訴、内日角側は津幡警察署に調停を依頼する事態になった。明治二十七年五月四日付「北國新聞」の「渡船場の設置願に就て」は、大崎―北間間の「渡船場設置方」は「出

願以来数月に渉るが、「何等の沙汰」もないので、両地区の「惣代」が「警察部に出頭」して対応を「懇請」したとある。こうした記事が、河北潟に関心を向ける契機になった可能性も考えられる。「うのけまちの民話 その二」(宇の気町刊、昭56・9)所収の「内日角荷方節考」には「海の豪商と、うたわれた錢屋五兵衛と、内日角の駄賃舟運送との交流は深く、その為常時三人がおつて色々の任務に当たっていた」とあり、船頭の口ずさんだ次のような「荷方節」を紹介している。

錢屋の要蔵様 はり付けなされ
いとしや 涙で櫓がこげん

河北潟を往来した船頭は錢屋五兵衛と関わりが深く、かつ濃やかな関係にあったことが右の詞章からも伺われる⁶。詳細をきわめる鑄木勢岐『錢屋五兵衛の研究』(錢五顯彰会発行、昭29・4)によれば錢屋の配下に青木龍兵衛という隻眼の船頭がいた他、五兵衛には又五郎という弟がいたことがわかる。しかし、『取舵』との直接的な関係は見出しえない。又五郎という名前自体、草稿段階ではみられない。同草稿末尾には「著者は親仁を知るものなり」という注記があるので、モデルが存在した可能性は否定できない。むしろ注意すべきなのは、「磁石」ではなからうか。南波松太郎「和磁石」(『海軍史研究』7号、昭41・10)は、錢屋全盛時の北前船で用いられた磁石の蓋が「明け難く、締め難く」なっている点を考察して、「昔の人々は、この磁気を一種の靈氣と考えていたので、使用しない時にはこの靈氣が逃げないように密閉しておくという思想のため」だと説明している。いかなる場合においても、常に一定の方角を示して進路を知らせる「磁石」は、「磁氣」という「靈氣」を発するものとして捉えられていたのである。『取舵』の「磁石の又五郎」が、このような超越的な靈性を發揮する存在であることは、言うまでもない。

鏡花文学には、『取舵』以外にも「磁石の又五郎」に相当する人物の登場する作品がある。それは、伝奇性豊かな作品『黒百合』(『読売新聞』明32・6・28〜8・28)である。作中「非職海軍大佐某氏の息、理学士の学位あつて、然も父とともに社会の暗雲に蔽はれた一座の兇星」とされる若山拓(初出、実は、結末に近づくにしたがつて視力を失う人物だが、やがて船出する冒険船「黒百合号」について、初出本文は、

船の行く処は誰が知っている、私だ、目が見えないでも勝手な処へ指揮きしつをして遣る、おい、星一ツない暗かりでも灯明台なんぞあてにするにハ及ばんから、

と述べる。若山拓が、「磁石」の役割を果たすことは右の一節に明らかである。又、『わか紫』(『新小説』明38・1)は、船を根城にして港町に上陸して目にもとまらぬ早業で略奪の限りを尽くす盗賊団を描く作品で、『黒百合』の延長上に位置付けられるが、そこにも超越的な靈性を持った盲人が登場している。

鏡花文学には盲人の登場する作品が、初期から晩年(例えば昭和九年一月の『芹琴菊』)に至るまで、少なくない。いずれにも鋭い感覚的能力が認められ、大別して二つに分けられる。一つは『黒猫』(『北國新聞』明28・6・22〜7・23)、『一之巻』(『文芸倶楽部』明29・5)以下の連作や『靈象』(同前、明40・1)、『桜心中』(『新小説』大4・1)などに顕著な美女への執拗な執着を示す作品であり、もう一つは『取舵』や『黒百合』、『風流線』(『正統』(『国民新聞』明36・10・24〜37・3・12)、『29』10・5)、『龍胆と撫子』(『女性』大11・8〜12・9)などの超越的な透視力といつてよい靈性を示す作品である。『取舵』は、超越的な靈性を持った盲人の活躍を描いた最初の作品であり、物語性豊かなこれらの作品の起点に相当する。

以上の他にも、『取舵』には鏡花文学を考えるうえで見逃せない問題がある。それは「観音丸」という船名である。「泉鏡花自筆原稿目録」(岩波書店版『全集』別巻所収)に記載されているように、草稿では当初「糸魚丸」であったものが、推敲段階で「観音丸」に改められている。「糸魚丸」の船名は、明治二十六、七年の新聞雑報等に見られ

ない。前引目細八郎兵衛宛鏡花書簡にいう「暴風警戒のあかだま」を目撃した糸魚川にもとづく命名で、危機の子兆を意味するだろう。とすれば、「観音丸」とは単に上京時に実際に乗船もしくは目にした船と想像されるだけでなく、人力では及びがたい危機を観音にも等しい超越的な存在が救うことを暗示した命名といえることができる。『取舵』における危機が上京する以前の帰郷中に涉ることは、第二章で触れたところだが、明治二十七年の帰郷を十年後に回想した作品『女客』（中央公論「明38・6、11」）には自殺の誘惑にかられ、自分の「影法師が死神」に見えた当時を思い出した主人公が、従姉のお民に向かつて、

切迫話つて、いざ、と首の座に押直る時には、たとひ場処が離れて居ても、屹と貴女の姿が来て、私を助けて呉れるツて事を、堅くね、心の底に、確に信仰して居たんだね。

という一節がある。これは、京三条の暇にかけられた景清の首が、日頃の信心のおかげで千手観音の御首に変わっていたという「出世景清」をふまえたもので、すでに処女作『冠彌左衛門』『日出新聞』明25・10・11・20）にも類似の表現がある。⁷『女客』の引用部分には、当時の鏡花の精神的な支えのありかが示されているといえよう。そして、一方、この一節にいう「堅く」「心の底に、確に信仰」することによって危難をまぬがれるという文脈は、『旅僧』と明らかに共通するものである。『旅僧』の草稿には、文覚上人の一節を引いて「或漂流巨海、毒龍諸危難、念彼観音力」と明記した一節がみられる点も注目される。⁸上述のように旅僧が乗客に向かつて力説するのは、何よりもまず堅固に自分自身を信じる心を持つことであった。それは、絶対的な自己への信仰と絶対的な救済が等しいことを意味する。絶対的な救済とは、つまりは、観音の顕現といつてよい。『取舵』においても、及ぶかぎりの人事を尽くした直後に疲弊した若者にかわって登場する盲目の船頭は、観音に相当する存在として捉えることができる。周知のように、鏡花は「おほけずきのはれ少々と処女作」（『新潮』明40・5）で「観世音に無量無辺の福德ましまして、

其功力測るべからずと信ずる」と語るように、観音に対する特別の信仰があり、いわゆる観音力は、鬼神力と共に鏡花文学を貫くものである。『取舵』の「観音丸」という船名も又、観音への信仰と深く関わっているといつてよい。さらに付け加えれば、明治二十七年七月六日付「北國新聞」には、独清子「悪七兵衛景清」が掲載されている。当時鏡花は、『義血俠血』初稿を執筆中か又は執筆直前であったと考えられる。『義血俠血』の原題『警判事』のタイトル通り、草稿の植生莊之助が白糸との私的交際を指摘されて、裁決に私情の介入しない証明に出刃包丁で両眼を突いて盲目となる趣向は、同紙「悪七兵衛景清」の

我と自ら両眼を、ゑぐり捨て暗々たるは、（中略）頼朝が面を再び見ざらん心の誓ひ、すがたも変る琵琶法師、此れぞ是れ平氏の遺臣、悪七兵衛景清が成れの果にぞありにける

という一節に触発されたものであろう。⁹と同時に、「悪七兵衛景清」に接して『冠彌左衛門』で取り上げていた景清の観音への深い信仰を再び想起¹⁰して、『取舵』の観音力を發揮する盲目の船頭の構想を得た可能性も考えられる。

以上のように『取舵』は、同時代の眼から見れば、紅葉によって練磨された会話の巧妙さを除いては、特に見るべき点もない拙ない作品かもしれない。しかし、鏡花文学の中に位置付ける時、次の点を指摘することができる。

一つは、困難な日々を過¹¹した帰郷、翌年に一応の開花をみせる種々の可能性を蓄積した帰郷を終えて上京する鏡花の、文学の海へと乗り出して行く揺らぐことのない金輪際からの確信を見出しうることも、もつとも、こうした確信が、未生以前にも通じる文学的モチーフの深まりをみせ真の開花を遂げるのは、明治二十九年五月にはじまる『一之巻』以下の連作や『照葉狂言』（『読売新聞』明29・11・14・12・23）以降になる。そしてもう一つは、超越的な霊力を持つ盲人が船を御するという点で、『黒百合』などに至る伝奇性豊かな作品の出発点となっていること。さらに

加えて、これも又鏡花文学に一貫する観音への信仰を背景にした作品であることである。ささやかな短篇ながら、『取舵』は、明治二十七年春から夏にかけて、上京の機会をうかがっていた鏡花が、新聞紙面等から伏直航路や湯面航路に関する雑報や広告等を通じて関心を寄せ、実際の乗船体験に取材して構想、執筆したもので、自己の可能性を信じると共にハンディを超人的な能力に転じる主人公を描いた作品の起点にあたるものであるという意味で、看過できない作品といえることができる。

注

- (1) 伏木直江津間の航路を描く地元紙掲載の講談に、松森角朝口演・夏をや主人筆記『浮世』(「北陸実業新聞」明24・1・14〜20、四〜六回)がある。『浮世』の主人公、「未来の紳商たる吉田太郎」は、今石動から舟に乗り、小矢部川を下って、伏木に至り、港で「各旅店より、宿引の者が多く出迎」えているのを目にする。翌日は朝食後に宿を出て、汽船伏木丸に乗る。「岩瀬、魚津、糸魚川に寄り、荷物、乗客の上下をなし、程なく直江津に着せり、太郎は人と共に、本船より舳舟に乗り移り、上陸しました」とあり、午後四時頃旅宿に入ったと記す。実際を反映しているものと思われる。鏡花自身の上京を描く「麻を刈る」と共通する。
- (2) 『義血俠血』には、二種類の草稿(A・B稿)が残されているが、両草稿共に伏木直江津間の航路について記述がある。この他、『蛇くひ』(「新著月刊」明31・2)にも伏直航路への言及がある。
- (3) 伏木直江津間の航路は冬の荒天を避け、毎年三月から再開された。三月九日付の伏木航運社の広告には、「例年ノ通り本月ヨリ毎日午前七時、午後五時伏木港出帆東岩瀬、水橋、滑川、魚津、糸魚川等へ寄港直江津へ達ス」とある。
- (4) 観音丸及び北越汽船会社については「魚津町史」(同町刊、明43・10)の「航海業ノ変遷」に、「明治十九年ニ西洋形帆船ヲ求メ、(中略)逐年観音丸、北越丸ノ各汽船ノ製造ヲ見テ以テ、専ラ近海航路ヲ拡張シタリシガ」とある。
- (5) 明治二十六年末の執筆と推測される「怪語」の一節に、『夜行巡査』の原型ともいべき職務に忠実な巡査を批評した主人公の言葉として「君は実に洋刀を提げて母の胎内を出た人だ」という、類似表現がある。なお、『取舵』(「旅僧」)には、石橋忍月が「北國新聞」に発表した比喩談の影響があることを、本書所収「明治二十七年の鏡花・忍月・悠々」で指摘した。

- (6) 河北潟の船頭が銭屋五兵衛を敬慕していたことは、稼堂居士「意表録」(「北陸新報」明24・5・8付)にも記述がある。その即吟を引く。
黒風白雨鼓濤至 一葉掀翻壯我意
六十舟夫尤快奇 大声說出錢五事
- (7) 初出「第二十八」に、「時機も熟したなり、彼等は首の座に坐りて白刃頭に望むの境遇、此処で念ずれば彼観音様さへ気紛れに飛出して扶け給ふ」とある。なお本書収録『「冠彌左衛門」考』参照。
- (8) 初出以降では「念彼観音力」の経句はなく、「波浪不能没」の一句のみが記されている。「泉鏡花自筆原稿目録」参照。
- (9) 『義血俠血』草稿に「景清」からの摂取があることは、すでに松村友視「自筆稿本義血俠血・解説」が指摘している。

第二章 豊饒な物語をめざして

『照葉狂言』懐旧と離郷

『照葉狂言』（読売新聞）明29・11・14（12・23）は、周知のように、前後編に二分されている。初出紙には見えないが、初版（春陽堂、明33・4）の「目次」には、「鞠歌」から「夜の辻」までの五章を「上之巻」、「仮小屋」から「峰之堂」までの四章を「下之巻」と明記している。大正期に刊行された「名家傑作集」の『照葉狂言』（同前、大5・4）も同様である。なお、初版について再録された『鏡花集』第四卷（同前、大2・1）並びに春陽堂版『鏡花全集』卷二（大15・11）以降の本文には、この表示はない。

内容的には、両親の亡い貢が、叔母の捕縛によって行きどころを失い、照葉狂言の一座に加わるまでが「上之巻」であり、八年後に興行に伴って帰郷した貢が、かつて慈しみをうけた広岡雪が入り婿にした夫に虐待されているのを救うために一座の恩人小親を犠牲にするのに耐えられず、故郷を去るまでを描く「仮小屋」から「峰の堂」までが「下之巻」である。

先行論文の多くが、「上之巻」と「下之巻」との落差、特に貢の人物像を取り上げると共に貢が雪と小親の双方を見捨てて故郷を去る結末を問題にしている。特に弦巻克二「『照葉狂言』覚書」（光華女子大学・光華女子短期大学「研究紀要」昭55・12）は、前半の「抒情の高潮」に比べて後半が「弛緩」しているとし、結末の「（解答不能）故の問題の

頼晦、その卑怯さは救うべくもない」と述べている。手塚昌行「泉鏡花『照葉狂言』考」(『日本近代文学』昭45・5)は前後半の貢の人物像を比較して「純真性」は失われて「狡猾な貢」と化しているとし、本多仁「泉鏡花『照葉狂言』論考下」(『情念』昭50・9)は、貢の変化を「ロマンチック」から「ナルシスト的人間」への変容として捉えている。これに対して、橋本佳「『照葉狂言』について」(『日本近代文学』昭40・5)は、貢は「前半と後半では八年の月日が経っているにかかわらず変らない」と述べ、笠原伸夫『泉鏡花―美とエロスの構造』(至文堂、昭51・5)も、「修業もひとかたならず積んだらうに、貢はやはり以前のような幼児性をいる濃くたたえ、前半と後半のあいだにさしたる変化が認められない」と述べている。

結末については、日夏耿之介「名人鏡花芸」(『鏡花・藤村・龍之介そのほか』光文社、昭21・11)が「終りの数節が小説臭をつけすぎて、前半の綿々嫺々たる情懷の流れと首尾相応じない結果となった」と批判したのを始めとして、その解釈も一定せず、議論の余地がある。

この他、芸能としての照葉狂言や伝承の背景や意味を追求した論考も少なくない。芸能としての照葉狂言については、殿田良作「泉鏡花の生いたちと『照葉狂言』」(『あらうみ』昭36・2)・「照葉狂言史料(仙助・寿三郎・祐三郎)」(『密田教授退官記念論文集』昭44・3)・三田英彬「泉鏡花集注釈『照葉狂言』」(『日本近代文学大系 泉鏡花集』角川書店、昭45・11)・蒲生欣一郎「レクイエムの照葉狂言考」(『鏡花文学新論』山手書房、昭51・9)が詳しいといえるものの、金沢における興行の時期の確定等は十分とはいえない。

小論は、以上をふまえて金沢における照葉狂言の興行や作中で重要な役割を果たす青楓と町の変貌、「上之巻」と「下之巻」との落差と貢が雪と小親の双方を見捨てて故郷を去る結末を中心に、作品の背景を探るものである。

1 金沢における照葉狂言の興行

金沢における照葉狂言の興行について殿田「泉鏡花の生いたちと『照葉狂言』」及び「照葉狂言史料(仙助・寿三郎・祐三郎)」は、「能楽に女役者を採用した」林寿三郎の一座が明治二年九月に「西新地の芝居座」で興行したのが最初だと指摘し、寿三郎は明治十六年七月二十二日、「金沢病院に於て歿す」るまでに「六回金沢の土を踏んで」おり、寿三郎没後は、弟子の泉祐三郎が後継者となったという。こうした記述は、「照葉狂言史料(仙助・寿三郎・祐三郎)」の「註記」によれば、「明治三十年六月十八日及び明治三十二年五月十七日・十九日北國新聞記事」に拠ったものである。また、「山本良吉氏の今様能狂言に対する俊英なる鑑賞記が明治四十四年九月一日北國新聞その他にある」ことも明記されている。これらの記事は、「北國新聞」掲載の次の三つの連載をさしている。

- ① 佐久間夢裡 「今様能狂言」(一)～(七) (明30・6・18～24)
- ② 緑之助 「技芸家訪問録」(其七)～(其九) 「今様 泉祐三郎」・「今様 泉小作」(明32・5・17～19)【資料1・2】
- ③ さだ生 「今様能狂言」(一)～(三) (明44・9・1、2、9)

①は、「上中下の社会を通じて待ちつつありし今様能狂言は、去る十五日の午後より福助座に「於て開演したり」として「四年ぶり」の金沢公演の好評を伝え、「今様に於ける唯一の名人」である祐三郎丈が「語りし処と予が思ふ処とを記して、聊か今様能と狂言とを読者に紹介」したものである。②は、明治三十二年五月十日付「北國新聞」から連載された「訪問記」の一つで、「一日泉祐三郎を福助座々附茶屋梅若の二階に訪」い、「丈が談話」を記したものと祐三郎の妻小作を「去る日停車場前葉壽屋の離亭に相逢ふて聞き得たる断片二三を録」したものである。③は、泉祐三郎の「湊川遊園地なる相生座」での公演の観劇記で、さだ生(山本良吉)が金沢で同じ一座を見た回想

を交えたものである。これらによって度々金沢で興行があったことはわかって、鏡花『照葉狂言』が発表された明治二十九年までの公演の年次は明らかにはされていない。①では、寿三郎の死後金沢に残った祐三郎が尾山神社で催された招魂祭の「余興」に出て成功を収め、「加藩能楽の名家波吉氏」の「能舞台」で「好評を得て愈々得意の地位に赴」いたとある。②には、言及がない。③には、「或る時たしか五月頃」に「浅野川岸の波吉の舞台」で見たこと、「一月末頃」に「天徳院でどなたかの御年忌があつた」時、「其後祐三郎夫婦の先師寿三郎の何年忌かを、寺町の或寺で七月頃勤めた」時に見たことが記されている。しかし、年次の記述がない。

芸能としての照葉狂言について最も詳しい蒲生欣一郎「レクイエムの照葉狂言考」も金沢の興行に関しては、①から③に負っていて、これ以上の指摘はみられない。

明治十年代から二十年代の石川・富山両県で刊行されていた新聞には、北陸での興行について次のような雑報が見られる。

明治十八年四月二日付「加能越新聞」は、「今様能狂言」と題して

来十五日尾山神社に於て泉祐三郎一座と西廓吉野屋の芸妓と合して今様能狂言を催す由にて只今稽古中なりと報じている。同年四月二十五日付同紙「今様能狂言」は、

今明の両日は尾山神社境内の能舞台にて泉祐三郎一座の今様能狂言を催す由

として、「本日（能）の分」（能、嵐山・雲雀山・正尊・土蜘蛛。狂言、昆布梯・二人大名・犬山伏）と「明日（能）の分」（能、大仏供養・吉野静・黒塚・烏帽子折。狂言、仏師・武悪・角水鯉等）の「番組」を記している。おそらく、四月二日付の雑報にある「十五日」は「二十五日」の誤りで、明治十八年四月二十五、二十六日に尾山神社で興行があつたと見られる。明治二十年三月二十四日付「中越新聞」には「今度中教院にて興行する今様能狂言（中略）優伶（やくしや）は男女混淆」とあり、富山での興

行を伝えている。同年四月九日付同紙「今様能狂言」は、

過日来中教院境内に於て興行せし今様能狂言泉祐三郎一座が当処お名残なりとて来九日より当処総曲輪初音座に於て興行するよし

とある。明治二十年四月には、富山市内の中教院及び総曲輪初音座において興行があつたことがわかる。同年五月十二日付同紙「金沢通信」○今様能狂言は、十四日からの「石川郡金石の春季祭礼」に「泉祐三郎一座が今様能狂言を催す」と報じ、同二十七日付同紙は「今様能狂言は近頃大流行にて泉祐三郎一座が興行する毎に大入りなり」とその盛況を伝えている。翌二十一年三月二十七日付同紙「高岡通信」は、「横川原町板橋座に於て当二十二日より四月一日まで今様能狂言泉祐三郎一座」の興行があつて、「大人気」であると記している。翌二十二年四月十八日付「北陸新報」の「泉祐三郎」は、「今様能狂言の泉祐三郎一座」が「一昨年暮れ」から「富山地方を興行」していたが、「昨日当地へ帰り来り」として「近々尾山神社」で「亡師」の「追善能狂言を催す」と予告した。同年四月二十日付の同紙広告は、「本月二十日大乘寺ニ於テ大鋸合製絲場遭難死亡者ノ冥福ヲ追吊スル為メ一朝羅漢講式ナル大法会執行致候（中略）但シ今様能狂言ヲ催ス」とあり、「今様能狂言」を「催ス」と伝えている。三月八日に汽罐の破裂事故が発生、男女九名が死亡した追悼会での興行があり、おそらくその後尾山神社で「亡師」林寿三郎の「追善能狂言」が催されたものと考えられる。なお、この年は明治十六年に亡くなった寿三郎の七回忌に当たる。

明治二十三年十月末に上京した鏡花は、以上の金沢における興行のいずれか、または右の雑報以外のいずれかの興行を観たものと思われる。

鏡花の上京後、『照葉狂言』発表以前のものとして、次のような雑報がある。明治二十六年六月二十六日付「絵

入金沢新聞」の「○招魂祭の景況」は、「博物館の泉祐三郎一座の今様能狂言」などで招魂祭が「前日に増していと賑」ったという。また、同じく二十七日付同紙「○今様能狂言番組」は、

来月一日二日の両日間本市裏古寺町泉祐三郎宅に於て催ふす今様能狂言番組は初日、翁、鶴亀、筋、松風、安宅、滝流し、石橋（以上能）末広、文荷、鍋八発（以上狂言）二日目 加茂、小袖曾我、道成寺、正尊、岩船（以上能）膏葉練、止動方角、仁王（以上狂言）なりといふ

と報じている。明治二十六年七月一、二日に祐三郎宅での興行があったものと思われる。次いで、八月八日付同紙は、「泉祐三郎一座」が「過日来越前福井に赴き今様能狂言の興行中」であることと、「明日帰沢する」旨を伝えている。同じく二十六年十月十五日付「北國新聞」の「○今様能狂言の興行」は、香林坊の福助座で「本日より泉祐三郎一座の今様能狂言を興行すべく」として、「小鍛冶、松風、夜討曾我、石橋」などの番組名を掲載している。十八日付同紙「○福助座今様能狂言の番組」も十八日から二十日の番組（花月、蘆刈、船弁慶、舍利、春日龍神、羽衣、安宅、羅生門、鶴亀、三井寺、望月、橋弁慶など）を掲載、同二十三日付同紙「今様と風吉一座」は、「本市香林坊福助座に於て催せし今様は昨日にて閉場し」とあり、十五日から二十二日までの興行であったことがわかる。「自筆年譜」に「八月、重き脚氣を病み、療養のため帰郷。十月京都に赴く」とあるように、鏡花は二十六年八月から十月まで帰郷している。これに関連して注目されるのは、十月二十二日付同紙「○紅葉山人の来沢」が以下のように報じていることである。

読売新聞社員尾崎徳太郎氏（紅葉山人）は明日来沢の筈にて宿所は味噌蔵町下中町田中氏方なる由但し山人の逗留は凡そ十日間なりと云ふ

周知のように、京都在住の巖谷小波を訪ねた紅葉は、この時金沢に帰郷している鏡花を訪ねようとして結局果たさず、鏡花を京都に呼んで、一緒に東京に同行したのであった。少なくとも、十月二十三日までは鏡花は金沢に滞在していたのであり、右の福助座の興行を観た可能性はあるだろう。「橋弁慶」や「石橋」など、『照葉狂言』に取り入れられている番組もあり、観劇した可能性も考えられる。

翌年二月二十五日付「北國新聞」は、「○祐三郎の今様能狂言」として、
今様能狂言に感能なる本市の泉祐三郎丈は此程東京へ上り一昨二十三日より三日間歌舞伎座に於て開演中なるが「旅の衣は篠懸の々々の露けき袖やしほるらん」と小作が十八番の安宅弁慶など定めし都人の喝采を博し居るなるべし

というように、泉祐三郎一座の東京公演を報じている。三月十三日付同紙「○泉祐三郎一座」は、「東京歌舞伎座の慈善興行」で「好評を博した」一座が「帰途京都に立ち寄り、「十五日頃」から「四条南座」で興行することを報じている。この年一月に父清次を亡くして帰郷していた鏡花は、東京公演を見るべくもない。しかし、小説の素材を雑報に求めていた鏡花が、これらの記事に目を通していた可能性は、高い。上述の佐久間夢裡「今様能狂言」は、明治三十年六月十五日からの福助座での公演が「四年ぶり」だと報じていた。だとすれば、前引の明治二十六年十月以降、今様能狂言すなわち照葉狂言の金沢での興行はなかったものと思われる。

以上のように、『照葉狂言』発表以前の金沢における興行は、地元紙の雑報によれば、

- ・ 明治18・4・25、26 尾山神社
- ・ 明治20・5・14 金石の春季祭礼、同月中（？）尾山神社
- ・ 明治22・4・20 大乘寺
- ・ 明治26・6・24、25 博物館（兼六園内）

- ・ 同 7・1、2 泉祐三郎宅（裏古寺町）
- ・ 同 10・15～22 福助座

の七回に止まる。しかし、さだ生こと山本良吉の回想にある、「五月頃」に「浅野川岸の波吉の舞台」で見たことや「一月末頃」に「天徳院でどなたかの御年忌があつた」時、「其後祐三郎夫婦の先師寿三郎の何年忌かを、寺町の或寺で七月頃勤めた」時については、いずれも、右興行が該当しない。当時の新聞には欠号が多い。というよりも、残っている新聞のほうが少ない。むしろ、少ない新聞にこれだけ照葉狂言に関する雑報が掲載されていることに注目すべきである。

右の検証からは、鏡花が「泉鏡花篇」小解」で「ふるさとの木樫の露。／小親の楽屋は今もなつかし」（『明治大正文学全集 泉鏡花篇』春陽堂、昭3・9）と述べ、作中で「わが家より半丁ばかり隔」った「小屋」で観たという記述に相当する興行は、確認できない。この「小屋」で照葉狂言の興行が行われ、それを鏡花が観たことは、大正九年十月十一月に発表された『楳梓に目鼻のつく話』（『現代』）に、

俳優でずせ、若い女俳優でずせ、——お前、あの、水溜の小屋の義経の芝居で、美しい静御前を見たらう、見たい。

という一節があることから推測される。殿田「泉鏡花の生いたちと『照葉狂言』」は、

この位置は中町通りの見附、今の高田病院のある処がそれである。旧藩時代の地図にはこの処は水溜である。（中略）維新後は埋立られ、（中略）種々の興行物がかかり祐三郎一座も一、二度ではなかつたようである。と指摘していた。また、「座談会 鏡花・秋声を憶う」（『越路』昭22・10）で伊崎協作は、

若いころの作品に何とかいうのがありましたな、左様「照葉狂言」か、あれはわしらの小さい時分照葉という

女役者がおりましたよ、今の高田病院の跡、あすこに芝居小屋があつた、わしらはその女優の無言劇が面白うて、いつも遊びに行つとつたが、鏡太郎さんもその一人やつた

と証言している。伊崎は、「新町の袋物商」で鏡花の「竹馬の友」である。「吉本病院の跡」は、殿田「泉鏡花の生いたちと『照葉狂言』」にいう「今の高田病院のある処」だと断定できない。ただ鏡花の生家近くの「小屋」で照葉狂言の興行が行われ、それを鏡花が観たことは、「竹馬の友」の証言によつてほぼ確かめることができるようである。しかし、それは何時だったかは、今のところ明らかになっていない。

2 無垢の少年としての貢

上述のように、貢の人物像については、手塚論文のように、前半の「純真性」は後半では失われて「狡猾な貢」と化しているという見方と橋本論文のように、貢は「前半と後半では八年の月日を経ているにかかわらず変らない」という見解に二分されている。本章では、以上をふまえて貢の人物像を検証したい。なお、本文の引用は、初出紙による。

『照葉狂言』の「鞠唄」冒頭で、貢は「わが母みまかり給ひし日」から「うつくしき姉上」、広岡雪が「朝な夕な」弾いていた「琴」の音が「ハタと止」んだことを不審に思つて、「其理由」を問う。貢は、彼の母の死に際して「御近所に居ながら鳴物もいかな訳だつて、お嬢様が御遠慮を遊ばす」ことだということを「彼家なる下婢」から聞き、「をさなごゝろにもわれ嬉し」と思う。「わが母みまかり給ひし日」から「朝な夕な」弾いていた「琴」の音が「ハタと止」んだのだとすれば、「其理由」を問うまでもなく、明らかであろう。また「狂言」で、「小親が与へし緋鹿子」

の座布団から「退け！」と国麿から言われて、「私ハね、こんなうつくしい蒲団に坐る乞食なの」と言つて要求を退けた時、「おい、貢、汝そんなこといつて可いのか、飯途があるぜ」と言われる。国麿が「飯途」に待ち伏せするという意味であることは言うまでもない。それでも貢は、強いて「飯途があるつて。飯途が何うしたの、国ぢやん」と問う。このように、「上之巻」の貢は、当然予想され、想像されるような出来事・事情に対する理解が行き届かない少年として設定されている。

この点は、「下之巻」でも変わらない。特に「井筒」で、養子が小親に「夢中だから（中略）何うかしておくれなら、もう一廉のものいひがつく、屹度叩き出してお雪さんを助ける」という継母の依頼の意味を、貢は全く理解できない。小親が「もう何うにかしてあげやうや、貢さん」というと、「あ、一人助かつた」という始末である。雪の救済のために小親が養子を「だましてくれる」その意味、小親が犠牲になるという真実に少しも気づかない。「しかし、貢さん、善いことだとハ思ふまいね」と言われても、「胸痛かりし、われハ答にためらひつ」というように、答えに窮して迷うばかりである。再び小親に「善いことだとハ思ふまいね、貢さん」と言われても、「其心俄にはかりかねたる胸ハまた轟きぬ」というように小親の心情を理解することがない。さらに小親が、

貢さん、広岡のお嬢さんの顔が見られるやうになりさへすりや、私や、私や、何うなつても可いのかへ、よ、よ、私や何うなつても可いのかよ。

とまで言つても、「火箸」が「横に寝て（中略）灰の中にとほくと深く沈」む様子に目を向け、火箸を起こそうとする。小親が、「はらくと涙を落した」時に、ようやく貢は「堪忍しておくれ。悪かつた、ほんとうにさもしいことだつた」と謝る。こうした貢のあり方を「狡猾な貢」と化したもの、あるいは「ナルシスト的人間」に変化したと捉えるのは、あやまりであろう。現実や真相が見えないのも、気づかないのも、「上之巻」から一貫してきた

貢の無垢のあらわれと捉えるべきである。「重井筒」では、「れうまち」のために「観世物の礎」になつた小六の悲惨な末路を観た貢が、同じ病に苦しむ小親を見て「思はず涙」をながす。そして「十年の末ハよも待たじ、いまはや渠ハ病あり」と思う。次いで貢は、「姉さん、私ハ何うなるんだらうね」という。この一節も、「ナルシスト的人間」の反映ではなく、現実や真相が見えない、気づかない貢の無垢のあらわれと捉えるべきである。やがて、貢は心の底から「恚る女に何とて然ることをさせらるべき。わが心ハほゞ定まりたり」という感慨を抱く。それは、直接的には、小親の

一旦ハ何、私だつて、さつきのやうにいつたけれど、お前さんの心配をすることだもの。其上、何うせ、こんなからだゝから、お前さんさへ愛想をお盡しでないことなら、もう何んなにでも私やならうハね。構ふものかね、何に構やあしない。

という犠牲を厭わない発言による。それまで小親の心情を理解することがなかつた貢は、ここに至つてようやく「峰の堂」での「わが心さだまりたり。いでさらバ、山を越えてわれ行かむ」という決意に向かつて行動を開始するのである。それは、「姉さん、私ハ何うなるんだらうね」という問いに自ら答えるはずのものである。

現実や真相が見えず、気づかない貢の無垢のあらわれは、分節化によつて世界を意味づけるのとは逆のあり方を示す。「鞠唄」で「隣家」の「三十ばかりの女房」から「阿銀小銀」の「継母の其ま、しき兒に酷き」話を聞いて、雪の母が継母であることを思つて「殺されやすると思ふまで烈しき悲鳴」を上げて泣く場面に明らかかなように、伝承や唄・虚構と現実が地続きになっているのである。牛若に憧れる貢が照葉狂言の一座に加わつたのも、そうした心性と関わるであろう。

これと関連して、「野衾」で「舞の師匠」に「頬をしたたかに吸」われた時、野衾に襲われた恐怖を「お染といふ女」

に訴えたり、「われを流眄にかけ」た木戸番に「銀貨入りたる緑色の巾着」を投げつけたり、「鳥居前」で「槍を抜く国磨の「手元に衝入」るなどの過剰な反応を示す。その典型が、雪との仲を橋渡しした「青楓」に対する格別な思い入れであろう。「仮小屋」で「昨年」の「洪水」の際、雪の継母は、「楓の樹」が「大黒柱に突きあたつて家が流失し、「こいつの憎いのハ忘れ」られないので「朽目赤く欠けく」て、黒ずみたる材木」と変わり果てた「青楓」を「腹の立つ時ハ見て」いると聞いて、「其を楓の知ることか」といいながらも、雪が伐るのを「止めた」のが原因で雪の家が流失し、経済上の事情から不本意な結婚を強いられたと知って、小親に雪の継母の策略を相談するのであり、「姉上が楓のために陥りたまひしと聞く其の境遇に報い」ようとするのである。

以上のように、この作品は、雪の窮状を救おうとして貢が雪の継母に籠絡されたことを契機とし、「井筒」から「重井筒」にかけて、小親との語らいを通じ、それまで貢に見えなかったものが見え、貢が気づかなかったことに気づくという展開を示す。それは、上述のように、「胸痛かりし、われハ答にためらひつ」として答えに窮して迷い、「其心俄にはかりかねたる胸ハまた轟きぬ」という次元から脱却して、「峰の堂」での明確な決断にいたるものである。最終的な決断は、どちらを捨て、どちらを選ぶというものではない。「小親と別るゝこの悲しさ」と「救ふことをなし得ざる姉上（中略）の境遇に報い参らす」という双方への思いを深く胸中に収めて新たな天地を目指すものと思われる。胸奥に秘めるのは、雪と小親に結びつく「上之巻」の世界、換言すれば洪水で様変わりする以前の「八年前のふるさと」全体に涉ることはいうまでもない。同時にそれは、「姉さん、私ハ何うなるんだらうね」という問いに対する自らの解答に相当するものでもある。

市川祥子「泉鏡花『照葉狂言』論」(群馬県立女子大学国文学研究)平8・3は、結末について「貢は二人の生きた世の中の衰滅を見届けて離れて行く」と捉えているが、小親、雪の双方への思い入れを末尾で改めて貢が語っている

点に目を向けるべきではなからうか。

3 懐旧と離郷

『照葉狂言』発表の五カ月前の明治二十九年六月、鏡花は金沢に帰り、祖母を東京へ伴っている。それより前、明治二十八年十二月二日には下新町の生家を売却している。したがって、明治二十九年の帰郷の時点では金沢に帰る家を持たなかったのである(田中勳儀「妙の宮」成立考―明治二十九年の鏡花「鏡花研究」7号、平元・3参照)。さらに祖母を東京に伴うことで、故郷への特別な感慨を抱いたものと思われる。このことと、この年に発表された多くの作品が、いわゆる「金沢理想」(荒川漁郎「最近の創作界」「太陽」明29・12)を描いた作品であることは大いに関係するはずである。特に『照葉狂言』は、いわば離郷者独特の懐旧の情がモチーフとなっていたものと推測される。それは、八年ぶりに帰郷した故郷の変貌を描く「下之巻」を必然としていふことにも伺われる。

ところで、『照葉狂言』においては、「青楓」が貢の過ごす「我が居たる町」を象徴する存在であるだけでなく、貢と雪を結び付け、雪の運命を変えていく重要な存在となっている。この楓については、明治二十六年七月十四日付(年月推定)の父清次宛書簡に、

尾張町の俗物ども閑雅なる新町に土足を入れて熱鬧の地にいたし候とや、よし、大隠は市にあり、群衆雑踏の砂埃も楓のあたりやは汚さむ害のなき事に候

という言及がある。「楓のあたり」とは、鏡花の生家付近と考えられる。これと併せて注目されるのが、鏡花の弟泉斜汀が明治三十五年四、五月の「新小説」に発表した雑録「憶起録」である。冒頭に「凡そ当時の火勢の凄じさは、

私が物覚をしてから此方火事少ない故郷の金沢は勿論、江戸の花の名所に於ても、遂に二度と見た事がないのである」として、斜汀の生家を含めて「新町今町尾張町」という「金沢市中に於ても、最も軒並の揃った町、美しき町、又繁華な町として、称せられてゐた三ヶ町」が焼けた大火の思い出を記している。その一節に「今よりは八年以前、暮春の出来事」とあるが、実際には「味噌蔵町焼け」といわれる明治二十五年十一月十日の火事に取材していることは明らかである。晩秋を「暮春」に代えた理由は不明である。「憶起録」には、「我が焼跡」を確認する場面を次のように描いている。

成程忘れもせぬ石灯籠がある。坊主になつた楓もある。殊に可懐しき此の楓の木は、夏頃夕立の時などは、往來の人の雨宿をしたもので、新町と云へば、楓のある町と、音にも響いた古木の楓で、庭の方には一本の枝もなくて、戸外にのみ蔓つたのが、茂り茂つて向側屋根にまで生へ延びてゐた、遠くから望むと卯辰山の半腹に生へたやうで、見るからに緑濃かな、町の偉観とするに足つたものであるが、それも漸う幹の形を存するばかり、家の焼け亡せたに惜しくもなけれど、此の楓のみには、未練残りて、慥うも変れば変わるものかと、私は漫に涙を催した。

このように、泉家には「戸外にのみ蔓つたのが、茂り茂つて向側屋根にまで生へ延びてゐた、遠くから望むと卯辰山の半腹に生へたやうで、見るからに緑濃かな、町の偉観とするに足る」「古木の楓」があり、作品にほぼそのままの形で取り入れられたものとみられる。『照葉狂言』では、火事を「洪水」に改めて「味噌蔵町焼け」を契機とする下新町界限の変貌を作画中に描いたものと考えられる。なお、新町界限の変貌については、前引の「座談会 鏡花・秋声を憶う」の伊崎協作の発言に「鏡太郎さんの家は、たしか久保市の前でしたから、いまの森八さんの自宅のあたりかと思います。というのはあそこが味噌蔵町の焼けに逢うたので、すっかり形を変えてしまいましたの

ぢゃ」とあることから裏付けられる。ここでは、火事による町の変貌を明治二十六、七年の地元紙によって確認したい。

明治二十六年四月九日付「北陸新報」は、「○勸工場の景況」として、

去る三日より開場せし本市新町の勸工場は階上を新富座と称して寄席に宛て階下即ち勸工場内には道具屋下駄屋小間物屋硝子屋鼈甲屋陶器屋菓子屋等あり各勉めて品物の価値を安くする故開場の日より客足甚だ繁く今日の有様にては益々降昌に赴く模様なり

と報じ、四月三日から「勸工場」が開かれて多くの客が訪れていると報じている。この「勸工場」は「下新町勸商場」と呼ばれたやうで、同年七月二十三日付同紙「広告」には「日増ニ繁栄ニ付」き、「建増」しをする予定を伝え出店を募っている。これより前、六月二十八日付「北陸中新聞」は「街路開通の認可」として、

市内尾張町より下新町乙劍神社前へ新街路を開通すべしとのことは予て記載せし所なるが今回本県庁よりの認可を得たるを以て右はいよいよ昨日より開通工事に着手せり

と報じた。この年の道路開通に続いて、翌年には道路拡張の記事も見られる。明治二十七年二月二日付「金沢新聞」の「安宅地の寄付」には、

本市下新町三拾八番地の一道井一郎平は下新町より橋場町に達する今路の狭隘にして人馬の通行不便のため此回同町拾番地ノ四ノ一宅地九合四尺(時価九円四拾錢)を其筋へ寄付したき旨客月三十一日を以て出願したり

とある。鏡花の生家周辺の変貌の甚だしきは、右に引用した雑報によって十二分に想像できる。前引明治二十六年七月十四日付の鏡花の書簡は、同年六月二十八日付「北陸中新聞」の伝える「尾張町より下新町乙劍神社前」にいたる「新街路」の開通だけでなく、四月三日から「勸工場」が開かれて新町の「閑雅」が損なわれたことをも含ん

でいるものと思われる。

『照葉狂言』の「仮小屋」にいう「ふるさとの目に見ゆるもの皆かはりぬ」とは、鏡花の実感でもあったように思われる。作品の後半では、町だけが変わったのではない。町も人の心も変わってしまい、回復の可能性は伺われない。「仮小屋」一章には、類焼後の下新町に立った鏡花の実感を反映しているものと思われる。

「仮小屋」を鏡花の実感の反映とすれば、末尾の貢の感慨と決意も作者と無縁とは考えられない。作品の末尾から、特に「上之巻」の五章を捉えなおせば、そこに見えてくるのは、雪も隣の女房も、鞠唄も、阿銀小銀も、野衾も、照葉狂言も、「一筋細長き(中略)小路」も、いずれも母亡き後のなぐさめとなり、心を癒したかけがえのないものであるということと、それら美しくかけがえのないものは、汚され、失われるという感慨であったものと考えられる。末尾は、文字通りの「ふるさと」を胸奥に刻んで異郷・東京で生き抜こうという鏡花の決意の反映として捉えることは出来ないだろうか。こうした決意に基づいて、鏡花は町と人の心のいずれもが変わったことを確認する『国貞多かく』(「太陽」明43・1)や故郷に失われた美の回復をめざす『風流線』(「国民新聞」明36・10-37・10)その他、金沢及び周辺を舞台とする多くの作品を執筆したものと思われる。

注

- (1) 尾崎紅葉の明治二十六年九月二十七日付鏡花宛書簡では、「来月五六日頃二其地へ向ふやも知れず候へは汽車にて下りる所それからの順路のあらまし御一報有之度」とあり、十月初旬の金沢訪問が伝えられた。十月五日付鏡花宛書簡では、「来ル十三日出発長浜祭を見物して十六日頃米原発足それからの都合は未定なり福井から発電するかも知れず」と、十月中旬に変更になったことが知らされ、十月十五日付書簡では、「十二日午前二時米原に着きしが翌朝ならでは敦賀線へ継かず」という連絡上の都合から、「直二」巖谷小波のいる京都に行ったことが伝えられた。さらに、二十日付の「巖谷内」から発信された書簡では、「直に帰京候やう

- (2) 「味噌蔵町焼け」については、明治二十五年十一月十五日付「萬朝報」掲載「○金沢の火事」が以下のように報じている。に相成候は、其節少しく申入度義有之」とい、「かならず行くとは請合はれぬ旨」を知らせた。結局紅葉の金沢訪問は実現せず、鏡花自身が京都に向けて旅立ち、師弟一緒に東京に帰ったのであった。引用は、『紅葉全集』第十二巻岩波書店、平7・9)による。

去十日午前四時三十分頃加州金沢市の繁華なる橋場町(掛作)の大工職久保徳平方より出火味噌蔵町、尾張町、今町、下新町に延焼し全焼七十一戸、半焼十戸、土蔵全焼三棟、電柱二本焼失にて鎮火せり火元久保徳平は家屋を抵当として他より金を借り、返済期限に至りても義務を果さず遂に家屋は貸主の所有となり此日引渡す事となり居れば夫を残念に思ひ自ら火を放ち焼死せんとしたもにて同人は屋根下に焼死し居たるよし

- (3) 前田愛「泉鏡花『照葉狂言』—金沢(「本」昭57・9)は、前引の鏡花書簡や生家類焼の事実を取り上げて、「実在の楓を焼きつくした火のイメージを水のイメージに切りかえ」ていると指摘している。

『勝手口』試論

『勝手口』は、明治二十九年十一月及び十二月の「太陽」に発表され、『鏡花叢書』（博文館、明44・3）に収録された短編小説で、概略は次の通りである。

陸軍中尉松平龍太郎は、隣家の美女お仙に恋心を抱き、結婚を申し込むが、拒絶される。お仙は、実は龍太郎の上官相良中将の「内室」(妾)で、そのことは、誰も知らない。お仙を慕う牛乳配達の娘お蝶や龍太郎の妹富子は、お仙への恋に煩悶する龍太郎に同情し、お仙に中尉との結婚を迫る。心を動かされたお仙は、相良に龍太郎との結婚の承諾を求めるが許されず、自殺する。満州の戦場で敵陣を果敢に攻めて勲功をあげた龍太郎は、相良中将から報酬として何を希望するか訊かれ、「自殺、閣下」と答える。

種村季弘「解説 女の世界」(ちくま文庫『泉鏡花集成3』)所収。平8・1)は、「時と場所を違えた『勝手口』の後追い心中」と簡潔にまとめているが、把握は的確である。『勝手口』は、前年六月発表の『外科室』(文芸倶楽部)の主題を継承し、現世を越える恋を示唆した作品と考えられる。全十六章のうち、十五章までは初秋の東京山の手で車井戸を共用する二軒の家、お仙・金之助姉弟の家と龍太郎・富子兄妹の家を舞台とし、最終章は日清戦争の戦場、雪の満州を舞台とする作品で、勝手口から戦場へと展開する構成になっている。なお、最終章は、自筆原稿(慶応義塾図書館



【資料1】「技芸家訪問録」(其七) 泉祐三郎7



【資料2】「技芸家訪問録」(其九) 泉小作

蔵、初出及び『鏡花叢書』では「明治二十八年二月三日」と明記されていたが、春陽堂版『鏡花全集』巻二（大15・11）以降、「明治二十八年一月一日」と改められた。¹⁾ 小稿では、初出本文を用いる。

『勝手口』は、『鏡花叢書』以降春陽堂版『鏡花全集』巻二まで、作品集に再録されることもなく、近年のちくま文庫『泉鏡花集成』を除いてほとんど省みられることになった作品といつてよい。²⁾ 発表直後に、無署名「◎鏡花の世評」（『太陽』明30・1）が、『一之巻』『龍潭譚』とともに『勝手口』を取り上げて、「風趣一転して深刻より好奇若しくは平凡に、直截より委曲乃至ダレ調子に赴きしは争ふべからず」と評し、「鏡花は今や過渡の時代にあるにあらざるや」と述べた他に見るべき批評はない。「太陽」の批評も、作品内容には立ち入らず、同時期発表の作品群の一つとして、言及するにとどまっている。

村松定孝「鏡花小説・戯曲解題」（『泉鏡花事典』所収。有精堂、昭57・3。以下、村松「解題」と略記する）は、「病身のたおや女」であるお仙が、「暮の背を踏まえる凄艶さ」や「中将のさし出す蛇を自若として受取る（中略 妖しさ）をみせるなど独特の「鏡花世界」が描かれている一方で、相良中将をお仙の弟金之助が「どのように認識しているのか」、中将が「真の伯父なのか如何か」も判然としないとして、「書込みの不足」や「構成上の無理」を指摘している。村松「解題」の指摘するように、この作品は、お仙の人物像や必要な説明を欠く叙述、勝手口から戦場に展開する構成などをいかに捉えるかが問題点として挙げられよう。

小稿の目的は、同時期発表の『X蠅螂鯨鉄道』（『江湖文学』明29・12、30・1、4）と合わせ、関秀小説家の作品、特に北田薄氷、樋口一葉の作品を視野に入れ、発表当時の文壇状況に注目して『勝手口』・『X蠅螂鯨鉄道』の成立背景と関秀小説からの撰取の実態を検証し、お仙の人物像と勝手口から戦場に転じる作品構成を考察して、従来看過されていた明治二十九年末の鏡花の一面を明らかにすることである。

1 明治二十九年末の鏡花、『勝手口』と『X蠅螂鯨鉄道』

前章で引いた「◎鏡花の世評」が指摘したように、明治二十九年の鏡花文学は「過渡の時代」、転換期にあった。五月に『一之巻』（『文芸倶楽部』）を発表し、一月の『琵琶伝』（『国民之友』・『海城発電』（『太陽』）、二月の『化銀杏』（『文芸倶楽部』）など社会的な問題を周密文体で描くいわゆる観念小説からの転換を図り、翌年一月の『誓之巻』に至る連作や『龍潭譚』（『文芸倶楽部』）¹⁾、『照葉狂言』（『読売新聞』11・14・12・23）など、優美繊細な文体で母を喪った少年を描く作品群を発表する。

藤澤秀幸「明治二十九年の泉鏡花と『めさまし草』——『一之巻』を中心に——」（『論集 泉鏡花 第二集』有精堂、平3・11）は、作風転換の背景を考察し、「われ詩を読まむと予期しつつも、図らず一条の法医学的記事を読ませられたるを悔ゆ」と『化銀杏』を評した森鷗外「鷗外搔」（『めさまし草』明29・2）の批判を受けて、「鷗外に認められるような作品として『一之巻』を書いた」と説く。また、東郷克美「鏡花の隠れ家」『成城国文学論集』（平2・3）は、二十九年の鏡花は「他人之妻」系の作品」と平行して「魔界系の作品」を書き始め、翌三十年にかけて発表した作品には「町」から「山中の隠れ家」「超自然の魔界」へとコースが看取できると指摘する。弦卷克二『ねむり看守』（『論集 泉鏡花 第二集』同前）は、明治三十年初頭の鏡花は「他者を欠いた浪漫——物語の系譜と他者を視野に納めた写真——小説の系列との混乱が生じており、その岐路に立たされていた」と捉えている。明治二十七年から二十九年にいたる作品を検証した松村友規「明治二十年代末の鏡花文学——作家主体確立をめぐる素描——」（『国語と国文学』平2・10）は、「死と非在の世界を対象化する方法を追い求めてきた」鏡花が、二十九年の『龍潭譚』を始めとする作品で「非在その

ものを実在化する方法」を採ることによって「山中異界のイメージ」が形成され、「作家主体」の確立がなされたと跡付けている。小論で考えたいのは、二十九年末に発表された『勝手口』・『X蠅螂鯁鉄道』の意味である。右の先行研究では、この二作品は取り上げられていない。

鏡花は、この年再録を含めて、二十二編の小説を中央文壇に発表している。このうち十七編（琵琶伝・取舵・化銀杏・蠅螂物語・秘妾伝・一之巻）と四之巻・五の君・糞谷・妙の宮・野社・毬栗・聲の一心・龍潭譚・照葉狂言）が、故郷金沢及び周辺（富山・新潟を含む）を舞台とし、大半を占めている。金沢を舞台とする『一之巻』以下の連作は、『五之巻』（明29・10）以降、『誓之巻』まで東京に転じている。⁴この連作を除外すれば、日清戦争の戦場、満州の雪の海城を舞台にした『海城発電』、東京と雪の満州の戦場とを舞台にした『勝手口』、東京を舞台にした『X蠅螂鯁鉄道』の三作は、例外とってよい。換言すれば、金沢とその周辺を舞台にした作品を書き続けてきた鏡花が、十一月に東京を主な舞台にした『勝手口』と『X蠅螂鯁鉄道』を連続して発表しているのである。

この年鏡花が、金沢を舞台とする作品を多数発表することには批判もあった。『勝手口』の発表前では、七月の田岡嶺雲「鏡花の進境」（青年文）が、『一之巻』以下の連作を積極的に評価すると同時に、連作の登場人物について「性情活描されて突々精采あるを覚ゆ」と述べた後、「唯材を金沢にとり、其土俗により、其の方語によりしが為め、往々不調を感ずるを憾むのみ」と、金沢を舞台とする点に遺憾を表明している。金沢を舞台とすることにこだわり続けていた鏡花には、好意的な嶺雲の批評とはいえず、同意しかねる一節であったろう。この年の末東京を主な舞台にした作品を発表したのは偶然ではなく、鏡花の特別な意識があったものと思われる。これと関連して注目されるのは、『X蠅螂鯁鉄道』が、閩秀作家畠山須賀子を主人公とする物語であるという点である。

二十九年の文学界は、周知のように「文芸倶楽部第十二編臨時増刊 閩秀小説」（明28・12）の評価からはじまる。

上田敏「○昨年の文学界」（『読売新聞』明30・1・1付）は、「二三閩秀の作品ハ忽知として騒壇の視聴を動かし、青年の作家をして殆ど顔色なからしめた」と述べ、「廿九年の上半期ハ樋口氏が飛躍の時代にして、多恨なる短生涯の事業ハ「わかれ道」「たけくらべ」「われから」の三篇と廿八年作の『にぎりえ』とに蹤を留めぬ」と評している。妥当な見解である。鏡花が後年「あの時は『閩秀小説』が売れて憤慨したね。その前のわれ／＼『青年小説』と云ふのにくらべて、遙に出が多いと云ふんですからね」（『新潮合評会』、『新潮』大14・4）と回想したように、「閩秀小説」の好評は決して他人事ではなかった。それどころか、一葉を頂点とする閩秀小説によって「顔色」を失った代表は、前年の『夜行巡査』（『文芸倶楽部』明28・4）・『外科室』（前出）で脚光を浴びた鏡花であったろう。⁶

鏡花が作風の転換を顕著にした二十九年五月には、一葉に加えて同じ紅葉門の薄氷の評価も、高まりをみせていた。五月の「文芸倶楽部」に、鏡花『一之巻』、一葉「われから」、薄氷「乳母」が掲載されると、八面楼主人「第二卷第六篇 文芸倶楽部」（『国民之友』明29・6）は、『われから』は「一葉女史の作としては、頗る見劣れる心地す」としながら「佳作」と評価して二頁を費やして紹介・批評しているのに対して、『一之巻』には「未完なれば、完結の後に譲る」と記しているだけである。薄氷「乳母」については、「作家の同情と筆力とは、又能く読者の涙を要求するに足る」と評価している。「三人冗語」（めさまし草）明29・5）も同様で、「兎角の評こそあれ、前に出たる黒眼鏡に比べて、筆行の稍まされるは、何人も認むる所なるべし。勉め玉へ、勉め玉へ」（『ひいき』の発言）と好意的に評価している。「青年文」記者「『文芸倶楽部』第六編」（『青年文』明29・6）は、『われから』を「最も見るべき」作品とし、『一之巻』は「このさき面白くなりさう」だとして「将碁の一回頗る誦するに足る」と評価し、さらに「近頃メキ／＼腕を上げたるは北田うすらひ女史よ。やがては一葉の墨を摩することなしとも言ひ得べからず」というように薄氷を高く評価し、『乳母』を「好小説」だと述べている。

以上のように、五月に至ると薄水も一葉に次ぐ閨秀作家として評価が高まっていた。集中的に故郷金沢を舞台にした作品に取り組み、いわば自己の文学の根を探索する作業に取り組んでいた鏡花だが、自作への評価や一葉・薄水の作品及びその評価の高まりといった動向に無関心であったとは考えにくい。同時代の文学動向への関心の有無は、二十九年末に閨秀小説家を主人公にした作品を発表したことに明確に表れているように思われる。閨秀小説家に取材したのは、「好敵手」一葉の病状の悪化も無関係ではないだろう。しかし、直接のきっかけは、博文館が「文芸倶楽部」増刊号として「第二閨秀小説」(明30・1)を企画したことであろう。博文館編集部にいた鏡花は、「第二閨秀小説」の企画を早く知る立場にあった。鏡花が、「江湖文学」からの注文に、閨秀小説家を主人公とする作品『X蠅螂蝮鉄道』で応えたのは、こうした文壇の動向を意識したからであろう。しかし、それは、「閨秀小説」に迎合したのではない。一葉と「一葉の罌を摩する」薄水という文壇の評価に対する格別の意識のもと、独自の作品を構築する下敷きとして意識的に閨秀小説を選んだものと思われる⁷⁾。

『X蠅螂蝮鉄道』は、閨秀作家秀蘭こと、北畠須賀子が、学校時代の同級生山科品子を訪問し、没落して「土方」の妻に甘んじる品子から悩みの多い生活の実際を聞き、幼い子供を遺棄しかねない危うさを感じて子供を引き取る経緯を描いた作品である。この作品の発表される六カ月前、薄水は、結婚した学校時代の同級生を訪ねて、生活の苦勞を聞かされるといふ内容の短編『初着』を、六月の「文芸倶楽部」に発表している。鏡花は同誌に『二の巻』を掲載していた。薄水の前作『乳母』の好評も知っていたであろう鏡花が『初着』を通読した可能性は否定できないだろう。『初着』には、同級生と会話しているうちに夫が帰宅するという場面もあり、鏡花作と共通している。しかし、作品の主眼は、大いに異なる。『X蠅螂蝮鉄道』は、小説「X」のモデルでもある同級生と「X」の作者須賀子との対話を重ねることによって、窮迫した女性の深層に隠蔽・抑圧されていた願望が浮上するところに主眼

があった。⁸⁾『初着』は、「親しき友」が結婚して半年後、再三訪問を促す手紙に伝えて、「妾」^わが、小石川の嫁ぎ先を訪ねるところから始まる。親友から家事の忙しさに加え、「夫の心」が「さながら鬼も同様」だと聞かされ、「嫁の身の愁きといふ事」に同情し、「役所」から帰った夫の印象が齟齬することに不審を抱きながら帰宅するが、翌日、「別の友」から夫婦仲のむつまじいことと妊娠の慶事を聞かされ、祝辞と「何時の間にやらさる人悪になられし」という恨み言を書き送ったという内容である。「親しき友」は、「定めて御作も沢山出来給はむ」とあるように文芸に親しみ、「女学生」の時代から机に向かうことを好んでいたという設定である。閨秀作家ではないにしても、文学と無縁ではない。対話によって、「身の不幸」が明らかにされるといふ展開も、鏡花作に投影しているだろう。しかし、対話によって顕在化したことは、翌日「別の友」によって否定されてしまう。「嬉しさの我胸一つに措き余るまゝ、少しは弄つて欲しき願なりしに、御身の正直に聞き給ひしに拍子抜して、まさかには嘘とも後より言葉兼ねて」のことだといふような、真意の読み違えに終わる。鏡花は、『初着』を基に、「妾」を閨秀小説家に改め、女性に氏名を与え、対話によって顕在化される女性の深層を主題とし、薄水作の「役所」勤めの夫を、「落日」になって貧民の好む鰻を食するようになり、鰻を憲兵(実は須賀子の弟、近衛兵)に見られて逃げ出す惨めな夫に改めるなど、タイトルどおりの意想外な展開をみせる固有の作品に転成している。薄水作品は、独自の作品を構築する下敷きとなり、自在な換骨奪胎によって、全く別の主題を有する作品となったのである。

鈴木啓子『湯島詣』とその時代―戦略としての模倣―(論集 泉鏡花 第三集 所収。和泉書院、平11・7)は、『外科室』から四年を経て『湯島詣』(春陽堂、明32・12)で再び「心中物」に取り組んだ時、鏡花は、「明治二十九年前後の心中小説ブームの全盛期へと時間の針を巻き戻し、当時話題となった作品を意識的に撰取・模倣しつつ、作品を構想していった」と捉え、それを「戦略としての模倣」と呼んでいる。次章で明らかになるように、『勝手口』も、薄水

の作品と深い関連があり、一葉の作品を明らかにそれとわかるように取り入れている。二作品に「戦略としての模倣」の早い表れを見ることができよう。

二十九年秋、『龍潭譚』と『照葉狂言』を構想して一応の達成に至った鏡花は、改めて文学界の動向に目を向け、『第二閨秀小説』刊行を意識し、年初以来の作品評を踏まえて『勝手口』と『X蟪蛄鉄道』を構想したものとと思われる。

2 『勝手口』と閨秀小説

『勝手口』の冒頭は、

背戸、庭、園生の垣つゞき、家まばらなる高台に朝霧の立籠めたる、地上には濃やかに、軒端、屋の棟、森の梢など、しら／＼とあけゆく空の、薄紫なる、紅なる、朝顔一斉に咲き揃ひて、二葉三葉うら見ゆる風少し渡るにぞ、低きあたりやがて晴れて高き処に濃くなりゆく、一面の霧の中に、黍殻の倒れ伏して、地の色太く濡れたる、垣と垣との径を伝ひて十六七になりたらむ色白き女一人、足早に來懸りたり。

というように、秋霧が消えていく早朝、朝顔の咲く垣根の間の小径から若い女性が現れる情景を優美に描いている。

『枕草子』等を連想させる王朝文学風の書き出しで、閨秀小説を模したものであろう。

朝霧の中から登場した若い女性、牛乳配達のお蝶は、お仙を「姉さん」のように慕っている。直接の言及はないが、お蝶は孤児の可能性がある。孤児らしき娘に慕われる美女が縫い物仕事で生計を立てていて、相良中将の妾であるという設定は、一葉『わかれ道』(『国民之友』明29・1)を想起させる¹⁰⁾。お蝶は、傘屋の職人で、孤児の吉三に相

当し、お仙は、「針仕事」による生活に行き詰まり妾奉公に出るお京のいわば後身といつてよい。『わかれ道』の少年を少女に、傘屋を牛乳屋に改め、美女を表向き裁縫仕事で弟を養う姉、実は有力な軍人の妾に改めている。また、お仙・金之助姉弟の家と隣家の松平龍太郎・富子兄妹の家が、同じ井戸を共有し、龍太郎とお仙が恋心を抱いているという設定は、「隔ては中垣の建仁寺にゆづりて汲かはす庭井の水の交はりの底きよく深く軒端に咲く梅一本に両家の春を見せて薫りも分ち合ふ中村園田と呼ぶ宿あり」と始まる一葉の処女作『闇桜』(『武蔵野』明25・3)を連想させる¹¹⁾。病死と自殺という異同はあるものの、恋人との結婚に大きな障害があり、それを思う余りに女性が煩悶し、病気になるって結果的に亡くなる点でも、二作は共通する。一葉の作品を、「意識的に撰取・模倣しつつ、作品を構想していった」(前引、鈴木論文)ものであろう。

『わかれ道』『闇桜』以上に密接なかわりを持つ閨秀小説が、薄氷『鬼千疋』(『文芸倶楽部』明28・5)である¹²⁾。『鬼千疋』は、没落士族の娘お秋(19歳)が、赤坂一ツ木町の松宮家に嫁ぐところから始まる。夫の海軍大尉寛治も姑も、お秋に優しく幸福な日々を過ごす、一ヵ月後肋膜炎で転地療養していた夫の妹富子が帰宅して暗転する。夫が軍務で清国沿海に行つて半年後、妊娠したことを告げると小姑の富子に「土産とやらんに相違なし」、つまり夫の子ではないと否定され、実家に帰ると両親からは小姑に追い出された「不心得」をなじられ、翌朝、嫁ぎ先の井戸に身投げするという内容である。『勝手口』の登場人物名や職業が一致している他、筋立てにおいても、類似している点がある。『勝手口』と『鬼千疋』の主な人物を対照させると、まず、『勝手口』の富子と秋、二人の人物名が、『鬼千疋』と共通する。富子はいずれも軍人の妹だが、『鬼千疋』では駿河台の女学校に通学、初対面の兄嫁に学園のあるところを自慢し、兄が軍務に就いた後お秋を虐待し死に追いやる小姑である。『勝手口』では、対照的に兄のお仙に対する恋愛が成就するよう尽力する妹として描かれている。『鬼千疋』のヒロインお秋は、「親孝行にて従

順しき」女性とされているが、『勝手口』の秋は、松平家の下婢で、歌舞伎役者の科白やしぐさをまねる「気軽者」と設定されており、全く異なった設定になっている。お仙に恋する陸軍中尉松平龍太郎は、命名や職業からして『鬼千疋』のお秋の夫、海軍大尉松宮寛治に基づいていることは明らかである。龍太郎は、一見堅物だが、「気軽者」の秋でさえ気づくほど恋に煩悶する人物とされている。『鬼千疋』の寛治は、「いつも愉快想なる顔」をし「何事にも頓着せぬ性質」で、富子や富子に感化された母がお秋を冷遇しても気づかない。煩悶とは無縁の人物といえよう。富子・秋同様、薄水作品とは異なる対照的な人物として設定されている。寛治の性格は、『勝手口』では、「極めて無頓着」で「無雑作」だとされる相良中将に反映されているといえよう。なお、寛治が「海軍の都合」で「清国の沿海へ航海する」展開は、『勝手口』の最終章が満州の戦場に転ずる構想に影響を及ぼしているものと考えられる。また、お秋が絶望して井戸に身投げする設定は、『勝手口』でもお蝶と富子が絶望して井戸に身投げしようとする場面に踏襲されている。

ところで、鏡花は、『鬼千疋』が発表されたのと同じ明治二十八年五月、世俗の結婚を否定して、恋愛至上を説いた評論「愛と婚姻」（『太陽』）を発表している。「愛と婚姻」で、鏡花は、「婦人が忌むべく、恐るべき人生観」は、婚姻「以後」にあるとして「在来の経験に困りて見る」限り、舅姑、夫、小姑は「寒心すべきもの」だといひ、「婚姻」によって「佳人」が「薄命」になるのだと指摘して、次のように述べている。

人の親の、其児に教ゆるに愛を以てせずして漫に恭謙、貞淑、溫柔をのみこれこと、するは何ぞや。（中略）婚姻を以て人生の大札なりとし、出で、は帰ることなかれと教う、婦人甘むじてこの命を請け行いて嫁す、其衷情憐むに堪へたり。¹⁵

結婚に際して、親が「恭謙、貞淑、溫柔」のみを娘に説いて「愛」の大切さを教えない理不尽を批判した右の一節は、『鬼千疋』のお秋の両親に当てはまる。お秋は、両親から「女大学今川」を読み聞かされ、「女の道ハ恠くまで重きものか」と思つて嫁ぐ。説き聞かされたのは、「一、婦人は別に主君なし。夫を主人と思ひ敬ひ慎で大事に事ふべし。輕しめ侮るべからず。惣じて婦人の道は人に従ふにあり」にはじまる「教訓」である。お秋は、富子から不当な扱いを受けても、「恠る折りをこそ忍ぶが女の道なれ」と考へて教訓を守る。しかし、その結果、実家の両親から「不心得」を責められ、「実家には帰られず、此家には居られず」居場所を失い、「死ぬより外にハ道なき今の身の悲しさ。我は如何ありても死なねばならぬ」と絶望して身重の体を井戸に投じる。お秋の「悲劇」は、「愛と婚姻」で説いた結婚後の「佳人」の不幸を具体化したものといつてよく、鏡花にとって『鬼千疋』は、特に印象に残った作品となっていたのではなからうか。『鬼千疋』を下敷きにした『勝手口』は、お仙と龍太郎が、「時と場所を違へて」「心中」する作品であり、「愛と婚姻」にいう「懊惱不快なるあまたの繋累」の「束縛」を超え、現世を越えていく「無我」な「愛」を追求した作品である。『鬼千疋』を下敷きにしながら、そのめざすところは、対極にある。

付言すれば、「愛と婚姻」の主張を具体化した作品『外科室』では、衆人環視のなかで、世俗的な束縛を超えた愛の確認が果たされるが、『勝手口』では龍太郎のお仙に対する恋は、妹や身辺の人々に周知のことで、周囲の人々が皆恋愛の成就を願うという相違点がある。また、『勝手口』では男女の出会いも、語らう場面も描かれていない。『青年文』記者「悪癖」（『青年文』明28・7）は、『外科室』を含めた近作に「故らに脚色の一隅を缺く」といふ「悪癖」が行われていると批判し、「一々捜穿する読者の労は軽からずと知るべし」と戒めたが、『勝手口』も、「青年文」記者が指摘した「故らに脚色の一隅を缺く」作品であり、方法的にも『外科室』を継承した作品といふことができる。

この他、『鬼千疋』と『勝手口』の相違点として、叙述のあり方があげられる。『鬼千疋』は、実家にも嫁ぎ先に

も居場所を失うお秋の心理の変化を中心に描き、小姑富子が転地療養から帰って同居する場面で降、富子の言動に翻弄され、孤立するお秋の葛藤を克明に描く。登場人物の会話よりも、語り手による説明が多い。特に自殺する前夜、来し方を省みて、「目下の小姑に恚る目に遭はざる、我」の不幸と夫の不在、身の置き所のなさを嘆き、「我は如何ありても死なねばならぬ」と「固く心に思い定め」るまでの心理の変化について語り手は、過剰と見えるまでに詳細に説明している。一方『勝手口』では語り手が必要と思われる説明をせず、会話を通じて必要な情報が読者に伝えられ、女性の対話が際立っている。女性の対話は、お仙とお蝶の対話(二、三章)、富子とお秋の対話(四、五章)、富子とお蝶の対話(七章)、お蝶とお仙の対話(八、十一、十二章)というように、四回に及び、対話者も一定でない。対話を通じて、双方が事の経過を知り、語り手の伝えない情報を読者は把握することになる。たとえば、四章でお仙が裁縫仕事で弟の学費や生活の面倒を見ていることなど、姉弟の生活の仔細は、富子とお秋の対話を通じて読者に伝えられる。また、五章で「何か考へごと」を「遊ばして」は、「ためいき」をついている龍太郎の異変に気づいた秋が、「お医者が入りませぬ病氣」にかかっているのではないかと富子に語る。この対話を通じて、龍太郎の恋の煩悶が読者に伝えられる。また、この作品では、対話が次の行動を生み出す契機となっている。七章のお蝶と富子の「ひそくばなし」は、二人がお仙に直談判に行くきっかけとなり、十二章では井戸に身投げしようとしてお仙に止められた後のお蝶との対話がきっかけで、お仙は相良中将に龍太郎からの求婚を告げ、暇乞いを願い出る。対話が重要な役割を果たすという点は、『X蠅螂鯨鉄道』に近い。『X蠅螂鯨鉄道』では、須賀子と品子との対話によって品子の深層の願望が顕在化し、須賀子が品子の子供を譲り受ける決意をする。『勝手口』における対話は、複数に及び、対話者も異なるといふ相違はあるものの、事の経緯が明らかになると共に対話を契機にして大きな決断が導かれるのであり、対話の機能は、類似している。

このように、『勝手口』は『鬼千疋』の人物や場面展開を基に、一葉『閨校』『わかれ道』を取り入れ、縦横に改変していずれとも異なると同時に『外科室』や『X蠅螂鯨鉄道』に通じる鏡花固有の作品世界が形成されているのである。

3 勝手口から戦場へ

『勝手口』は、朝顔の咲く山の手の初秋の朝から翌朝まで(一〜十五)と雪ふる満州の戦場(十六)に大別され、上述のように、最終章は「明治二十八年二月三日」のこととされている。はじめの十五章は、明治二十七年九月のある日の朝から翌朝までと考えてよい。村松「解題」の指摘を踏まえれば、『勝手口』の問題点として、

(1) お仙の人物像

(2) 勝手口から戦場に展開する構成

があげられる。以下、作品の構成を踏まえながら、この二点について検証したい。

(1) 〈隠す女、お仙の変貌〉

村松「解題」は、「病身のたおや女」であるお仙が「墓の背を踏まえる凄艶さ」や「中将のさし出す蛇を自若として受取る(中略)妖しさ」を見せる点を取り上げて、独特の「鏡花世界」が描かれていると指摘している。解明すべき問題は、「病身」であること、「墓の背を踏まえる」こと、「中将のさし出す蛇を自若として受け取る」ことなどによりみられるお仙の多面性、多様なあり方をどう捉えるかということであろう。

一章で「二十五六のうつくしき」女と紹介されるお仙は、お蝶が勝手口をあけた時「鉄火箸を杖に俯向いたる頭重げに、寝乱髪に顛卷^{はぢまき}」をして釜の下をたきつけている。お蝶が「もう、起きても宜しいの」と問いかけると「段々快い方でごんす」と「わけもなく」いうが、体調がよくないことは、「釜のふたに手をかけ」たとたん、「アツ、」と胸を押して「はぎじみをキリ、と」して苦痛に耐えることで明らかである。お蝶のいうように、「切ない」お仙の苦痛は「恐い顔」に現われている。お仙は、口にする言葉と実情が異なっており、真情を語らない女性として登場している。お蝶と富子が龍太郎との結婚を認めさせようとする八章では、お蝶が「姉様、お嬢さんのうちへいらつしやいな」と勧めると、お仙は「二ツ返事」で「あがりませうとも」と答える。お蝶が松平家へ嫁することを勧めたのに対して、故意に文字通りの行く意味、訪問する意味で答えている。お仙が裏の意味を理解していることは、富子とお蝶がお仙の手をとって隣家へ連れていこうとした時「富子の顔をきつと見」て、「いけません」と拒むことから明らかである。九章で、お蝶が富子を促して帰る際も、お仙はうつむいて無言のままである。

このように、お仙は本心を見せない女、隠す女と言つてよい。富子やお蝶の前ばかりではない。相良中将の前でも、同様である。十章始めで相良がお仙の家を訪れると、お仙は「飛立つやう」に出迎える。しかし、反応が早いでだけで、喜んでいる形跡はない。無言のまま相良が差し出した蛇を「手革鞆にても受取る」ように、「自若とし」て手を出す。蛇が腕に巻き付いて鎌首をもたげても「心にも留めざる状」で、「お土産でございますか」と問う。異様な光景だが、相良に対してお仙が心を見せないこと、感情を隠していることを示しているのではなからうか。蛇を庭に放した後、「手燭して勝手に出」たお仙は、石鹸で手を洗う。お仙は、蛇を厭う尋常な感覚を持つてることがわかる。相良の前でそれを見せることを潔しとしないのであろう。また、手を洗うより前、「久しぶりじや、飲まんか」と相良にすすめられたお仙は、体調の悪いことを一切口にせず「支度を致します」という。体調も、感情も、お仙は人に見せないのである。

隠さないお仙、ありのままのお仙は、お蝶と富子が帰った後、相良が来る前の九章後半に描かれている。物差しを鳩尾に押し当てて苦痛に耐えていたお仙は、「毛煩ツて居るものを」と独り言をいい、「力なげに首垂れ」たまま、「じつと沈みゆく物おもひ」にふける。お仙の病名は記されていないが、「煩ツて居る」という表現は、内面の苦悩、煩悶に起因していることを示唆しているだろう。うなだれて物思いにふけたお仙は、「あ、ま、よ」と開き直り、冷酒をあおり、縁側に出る。そして、石の上に出てきた大きな「墓」の背中に踵を乗せ、じつとひきがえるを見て、「気楽だねえ」と声をかける。「眼の中さえて」といい、「口元のしまれるゆるみ」とあるだけで、語り手の説明はない。お仙が、龍太郎への恋、相良との関係に煩悶して体調を悪化させていること、尋常さを失いかねない荒涼とした心理に追い込まれていることが、暗示されている。お仙の多面性は、他者がいるかどうか、隠すか隠さないかという点から生じているといつてよい。

お仙は、この後、隠す女、本心を見せない、語らない女からの変貌を遂げる。その契機は、十一章で再び勝手口にやってきたお蝶が、「わつと泣きて駆け出」し井戸に身投げしようとする事である。お蝶は富子に同情し、お仙に会えないと絶望して「死ぬ気」になったと語る。お仙との対話で平常心を取り戻したお蝶は、再び「お邸のお嬢さんにも姉様になつてあげておくん」と懇願する。それに対してお仙は「さうはいかない訳があつて、そればかりはお蝶さん何うしてもお前の喜ぶ顔が見られまいかと思ふ」といいながら、「まあ、お待ち。ほんとうに考へて、其内に返事をきかせやう」といい、「お嬢さんにもさう申上げてね」と伝言を託す。相良の前とは対照的に、お仙は真率で感情豊かにお蝶に語りかけている。ここでのお仙は、もはや隠し語らない女ではない。「ほんとうに考へて、其内に返事をきかせやう」という決意に従つて、お仙は相良に龍太郎の求婚を伝えるのである。

お仙が相良に龍太郎の求婚を伝える十三章で、寝ていた相良がお仙に手枕をさせようとするのに対して、お仙は端座して肩を震わせ「激したる音調」で「嫌でございます」と拒む。感情が顕在化して、お仙は、率直に自らの心情を語りだしたといつてよい。お仙は、相良の要求を拒否し、「お隙を頂きたうございます」と願う。さらにお仙は、帰ろうとする相良に「松平といふ中尉」がお仙を「妻にしたいと申します」と明言する。相良は、「断れ」というが、お仙は「肯きませんかッたら」を繰り返して問う。「私が——相良中將の内室じやといへ」といわれても、「それでも肯きません時は」と問い、相良から「せん、何と思ふ」と逆に問われると泣きながら再び「お隙をくださいまし」と願い、ここで対話は閉じている。お仙の最後の言葉は、相良の束縛を脱して龍太郎の求婚に応じる意思を明確に示しているだろう。相良の答えは、記すまでもない。相良の拒絶は、現世で龍太郎の意思に応える道が絶たれたことを意味し、その夜遅く富子が勝手口の外から呼びかけたときには、すでに自殺していたものと思われる。次に、勝手口から戦場に展開する構成の問題を検証したい。

(2) 〈勝手口から戦場へ〉

最終十六章は、「明治二十八年二月三日満州雪暗き戦に三軍呐喊」する日中と戦いに勝利した夜を描く。『勝手口』に描かれた戦場を「日清戦争実記」(博文館、明27・8・27創刊)の記載と照応させれば、次のようになる。

「中将相良師団長」率いる「三軍」は、桂太郎中将率いる第一軍第三師団に相当するだろう。相良と桂は響きが類似する。「日清戦争実記」第四十六編(博文館、明28・11・27)所収、「征清戦史」の「海城の来襲」によれば、第三師団は明治二十八年一月から二月かけて海城にあり、「敵兵屢々之を回復せん」とする逆襲に応戦していた。攻撃は、一月十五日から二月二十七日まで五回に涉ったが、二月三日の戦いは記載がない。「三軍の呐喊」は、前年十二月

十九日金沢の第七聯隊の参加した大島部隊の戦いを記した同書第十九編(同前、明28・2・27)、「缸瓦寨の大激戦」の一節、「各隊等しく前進して敵前二百メートルの処に至り、將校諸氏は雪中の行軍半日の劇戦に疲れ果てたる兵士を鼓舞し、(中略)全軍一たび呐喊しては更に進み、二たび呐喊しては又進み、三度呐喊して午後五時五分缸瓦寨東端の防禦物に突込み、天皇陛下万歳の声高し」を踏まえた可能性がある(資料1)。作中、松平中尉は「一騎」の伝令から「(見事)と申せじや」という師団長の賞賛を伝えられる。伝令は、「我帝国の陸軍に少尉の職を奉じ給へる宮殿下」とされている。「缸瓦寨の大激戦」の右引用の続きには、「閑院宮殿下には畏くも此劇戦中桂師団長と同行して、師団司令部所在地にあらせられ」というように、「宮殿下」が同行していると記されている。同書第十五編(同前、明28・1・17)、「第三師団進軍記」によれば、「殿下現に騎兵の少佐として、師団参謀の一員に在らせられ」というように、閑院宮殿下は騎兵でもあった(資料2)。第三師団には、三好大佐率いる金沢の第七聯隊が属していた。二十九年一月発表の『海城発電』も、「日清戦争実記」(第二十二編)に基づいた作品であることが指摘されている(吉田昌志「海城発電」成立考「青山語文」平5・3)。「勝手口」の最終章も同書の記述、特に郷土部隊、七聯隊の戦況への関心から構想されたものと思われる。

最後に検討すべき問題は、なぜ勝手口から戦場へと転じているのかということである。

上述のように、お仙は、富子とお蝶の懇願、特にお蝶の命がけの行動に心を動かされ、隠す女からの変貌を遂げて相良に関係の解消を求め、拒否されて命を絶つたものと考えられる。お仙の自殺は、龍太郎に対する一つの意思表示を意味する。龍太郎がそれに応えるには、『外科室』の高峰医学士と同じように自らの意思で先に現世を越えた女性のもとに赴くしかない。もともと、自殺するなら、雪の満州の戦場に行くまでもない。即日命を絶って、お仙の許に赴けば足りる。しかし、龍太郎は、戦場で勲功を挙げ、「報ひ」を求められて初めて「自殺、閣下」とい

うように、上官に自殺の許可を求める。なぜ、龍太郎は、そのような行動をとったのだろうか。龍太郎が直ちに自殺しなかったのは、命を絶たない事情があったものと考えられる。龍太郎の自殺は、お仙との恋愛の成就を意味する。換言すれば、相良が自殺を許可することは、お仙と龍太郎が結ばれることを容認することでもある。ここで考慮しなければならぬのは、鏡花が軍人の結婚についての知識を得ていたのではないかと思われることである。それは軍人が結婚する際、上官の許可が必要とされたということである。「陸軍武官結婚条例」(国立公文書館所蔵資料、明14・4・12付「陸軍省同陸軍武官結婚条例被定之事」)には、以下のような条文がある。

第二条 凡軍人ノ結婚セント欲スル者将官並ニ同等官ニ在テハ勅許ヲ仰キ准士官以上ニ在テハ陸軍大臣ノ許可ヲ受クヘシ

右のように、准士官以上の軍人は、結婚前に陸軍大臣の許可を申請して初めて結婚が認められた¹⁶⁾。龍太郎が、相良に勲功の報酬としての自殺を求めたのは、命に代えてお仙が申し出た願いを相良に認めさせるためだったと思われる。龍太郎は、戦場で勲功を上げてお仙がかなえられなかったことを、成し遂げる必然性があった。それが、勝手口から戦場に舞台を転じる理由であったのである。龍太郎は、戦場で部下に「進め!」「伏せよ!」を繰り返して指示して、終始陣頭で剣を抜く。一度も伏せることのない中尉は、死を厭う様子が全くない。「韋駄天の如く颯とかけて」いく中尉は、尋常ではない。「引つけては兵を臥せ、矢頭を見てはまた進め、唯一人身をぬきんでつ、矢表に機を計り三度、四度、五度、六度。されば敵弾に射穿められず」というのも無理はない。お仙の願いをかなえるために、それこそ捨て身の指揮振りを発揮したといつてよいだろう。

ところで、自筆原稿では、相良が「報ひずばなるまい。何か?」と問い、龍太郎が「自殺、閣下」と願ひ出る前に、次のカッコ内のような削除がある。

誰がためにかすべき、(恋人は死せり) 国家に責任を任へる身の、渠と、もに其時死することを得ざりし中尉は愁然として手と中將の面を見つ、「自殺、閣下。」とのみいふ。

右引用の「渠」に相当する者は、前章末尾で自殺したお仙であろう。自筆原稿の削除部分を復活させれば、「恋人」お仙と一緒に現世を超える機会を得られなかった龍太郎の思いを明らかに表現したものとなる。中將の顔を直視する龍太郎のまなざしは、相良の「広き額纒むすかかにひそみて暗雲一帯星光の爛たる眼をかすめし」と呼応するものであることもわかる。作品は、国家の勝利に通じる一日の戦いに祝杯を挙げる相良中將と「愁然として」お仙の許に赴く願いを叶えた龍太郎との対照を描いて閉じている。

以上のように、『勝手口』は、『X蠅螂蝮鉄道』とともに、明治二十九年末の鏡花が「文芸倶楽部」臨時増刊「第二閨秀小説」刊行を前に、同時代の文学動向を踏まえ、閨秀小説を意識的に取り入れて固有の文学世界を示そうとした作品と見られる。龍太郎とお仙の出会いや語り合う場面などの「脚色の一隅を缺く」方法によって、現世を越えて成就する恋愛を描く『勝手口』は、方法と主題において、『外科室』を継承し、『春昼』『春昼後刻』(新小説、明39・11、12)に連なる。樋口一葉『閨桜』・『わかれ道』をそれとわかるように撰取し、「愛と婚姻」にいう悲劇を具体化した作品ともいえる北田薄水『鬼千疋』を下敷きに、縦横に換骨奪胎して転成し、同時代に向けた「戦略」としての模倣の早い表れを示す。作品の完成度という観点では不十分で、同時代の評価を得ることはできなかった。しかし、女性の対話・会話が隠蔽されていた欲望を顕在化させ、命に代えた行動に導く点で、同時期発表の『X蠅螂蝮鉄道』に近い。このように『勝手口』は、『X蠅螂蝮鉄道』と併せて、明治二十九年末の鏡花の同時代文学への意識を反映させた作品として十分注目に値するのではなからうか。

注

- (1) 慶応義塾図書館蔵の『勝手口』自筆原稿では、表題が「小鼓」↓「お嬢さん」↓「勝手口」と改められている。「慶応義塾図書館蔵 泉鏡花自筆原稿目録」(『鏡花全集』別巻所収。岩波書店、昭51・3) 参照。
- (2) 菅原孝雄『泉鏡花と花 その隠された秘密』(沖積舎、平19・11)に、朝顔を描写した作品として、「勝手口」が取り上げられている。
- (3) 東郷氏の説く「他人之妻」系の作品・「魔界系の作品」、および弦巻氏の説く「浪漫―物語の系列」と「写真―小説の系列」に加えて、いわゆる「金沢もの」と東京および周辺を舞台にした作品を、この時期の鏡花文学を検討するもう一つの機軸として捉えられるように思われる。
- (4) 本稿では、同時代の文学と鏡花との関連を検証する関係から、「二之巻」以下『誓之巻』までの連作を、(「金沢もの」の一編として捉え、考察から除外する。
- (5) 『勝手口』発表後のものとして、「田舎理想は真平御免なり」と述べる無署名「六佳選と初陣揃」(『文学界』明29・11)、「金沢理想は、東京小説に上すべからず」と述べた荒川漁郎「最近の創作界」(『太陽』明29・12)がある。同じ筆者によるものか。
- (6) 二十九年一月の「国民之友」掲載の鏡花『琵琶伝』と一葉『わかれ道』、四月の「文芸倶楽部」掲載の鏡花『秘妾伝』(筆名、島芋之助)と一葉『たけくらべ』(再録)のいずれにおいても、鏡花より一葉の作品の評価が上回っている。
- (7) 田中俊男「泉鏡花『X蠅螂鯨鉄道』論―隠蔽／顕在化の力学」(『国語と国文学』平13・7)は、「X蠅螂鯨鉄道」と「女性の作家が脚光」を浴びた「当時の文壇の状況」との「接点」を検証している。なお、前引「新潮合評会」で鏡花は、「閨秀小説」が完結して憤慨したね。その前のわれ／＼青年小説と云うのにくらべて、遙に出が多いと云ふんですからね」と述べ、「青年小説」に「龍潭譚」を発表したと回想している。「青年小説」は、「閨秀小説」の二カ月に刊行された増刊号で、鏡花は同誌に「化銀杏」を寄稿している。「龍潭譚」は、「小説六佳選」(明29・11)への寄稿である。「第二閨秀小説」は、「小説六佳選」の二カ月後の刊行で、記憶に誤りがある。これらは、逆に「第二閨秀小説」の刊行を鏡花が強く意識していたことを示すものであろう。鏡花の記憶の誤りについては、田中勲儀「樋口一葉と同時代作家―北田薄水と泉鏡花」(『論集樋口一葉』所収。おうふう、平18・11)に指摘がある。
- (8) 『初着』は、『薄水遺稿』(春陽堂、明34・10)では、『産着』と改題されている。轟栄子「北田薄水研究」(双文社出版、昭59・3)は、「わずらわしい対人関係もなく、明るく朗らかな短編」と評している。引用は『薄水遺稿』による。
- (9) 田中俊男「泉鏡花『X蠅螂鯨鉄道』論―隠蔽／顕在化の力学」(前出)は、「女性同士の対話」を取り上げて、鏡花は「女性が抑

圧の記号として存在し、その対話が隠蔽／顕在化の力学を発動させること」に「自覚的であった」と述べている。

- (10) 『わかれ道』は、鏡花『三枚銃』『式部小路』に影響を与えた作品でもある(須田千里「一葉から鏡花へ―『わかれ道』と『三枚銃』『式部小路』」、『光華女子大学』研究紀要。所収。平2・12)。鏡花と一葉については、田中勲儀「樋口一葉と同時代作家―北田薄水と泉鏡花」(前出)の他、吉田昌志「鏡花の中の樋口一葉―『薄紅梅』を中心として」(『論集樋口一葉』所収。おうふう、平8・11)参照。
- (11) 引用は、『新日本古典文学大系明治編 樋口一葉』(岩波書店、平13・10)による。なお、『勝手口』と同時期発表の『照葉狂言』では、貰のいる芝居小屋と雪の家が隣接し、井戸を共用するという設定で、「井筒」「重井筒」という小題がある。「伊勢物語」の影響も考えられよう。
- (12) 引用は、初出による。
- (13) 引用は、初出による。
- (14) 「悪癖」が見られると青年文記者が指摘した作品は、『外科室』のほか、江見水陰の「諸作」、『文学界』派の小説、『山岸露葉』『うつけ貝』である。
- (15) 自筆原稿では、伝令役を勤めた宮殿下に姓名を問われた龍太郎が、「…歩兵…大隊第三中隊中尉松平龍太郎」と答えている。
- (16) 徳田秋聲の次兄正田順太郎の養子彰二郎の場合、相手の女性の住所、父の職業・氏名・本人の名と生年月日を記した上で、以下のような申請をしている(雑賀和子氏蔵。正田彰二郎編「正田家家譜並由緒」参照)。

右之者ト婚姻致度候間御許可被下度此段願上候也
大正二年一月十日 歩兵第十聯隊

陸軍歩兵中尉 正田彰二郎 印

陸軍大臣男爵木越安綱殿

『七本桜』は、「新著月刊」第九卷（臨時増刊、明30・11・25）に『な、もと桜』として発表された作品で、明治三十九年六月二十八日、日高有倫堂から同題で刊行され、明治四十三年八月六日、春陽堂刊行の『鏡花集』第三卷に『七本桜』として収録された。その後春陽堂版『鏡花全集』巻二（大15・11・15）、岩波書店版『鏡花全集』巻三（昭16・12・25）に収められている。初出、初刊本では、表題を『な、もと桜』、内題を『七本桜』とする。本稿では、石川近代文学館蔵の自筆原稿の表記にあわせて、『七本桜』で統一する。

「新著月刊」第八卷（明30・11・3）に掲載された予告には、「本篇」が「鏡花先生が未曾有の大作にして、又先生が従来之作とは、全く趣を異にし」ていると述べ、「ざつくばらんの江戸児気質の女髪結」と「樸直熱誠の俠車夫」を点出して「之れにからむ」のが「深窓に人となれる、恋に悩める上臈」であること、さらに「俗塵を超越して真理の光を追う数学者が、過ちて色界の魔道に墮落すると云ふ饒趣多情の脚色とを以てした」作品だと紹介している。このように、本作は、予告にいう「女髪結」お欽、「車夫」信之助、「深窓に人となれる」清川清子と「数学者」岸田資吉の四人の主な登場人物の「多情の脚色」を描く。が、「先生が従来之作とは、全く趣を異にし」というのは、モチーフからいえば語弊があるだろう。『七本桜』は、『他人之妻』（明26執筆か）以来の恋の妄執を描いた一連の作品

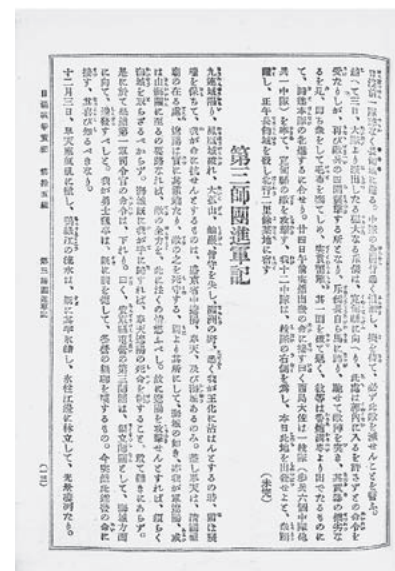
『七本桜』本文考



【資料1】『日清戦争実記』第十九編（明28・2）



【資料2】『日清戦争実記』第十五編（明28・1）



の一つで、『黒猫』（北國新聞「明28・6・22」7・23）・『妖僧記』（九州日日新聞「明35・1・1」）と共通点した記述、設定があるからである。作品の成立は、『妖僧記』が先行する。『妖僧記』には、村松定孝「作品解題」（岩波書店版『鏡花全集』別巻所収、昭51・3・26）が「初稿」とする草稿『蝦蟆法師』二種（石川近代文学館蔵・A稿、慶応義塾図書館蔵・B稿）がある。B稿は、A稿を推敲したもので、B稿の「第五」「第六」「第六」は二章ある。本来は「第七」は、『妖僧記』の最終章「第四」と連続した内容であり、両作は、「第一」が重複して多少の異同があるものの、併せて一作品として読むことができる。執筆も同時で、明治二十七年二、三月とみられる。

小稿は、『蝦蟆法師』・『妖僧記』、『黒猫』から『七本桜』に継承されたモチーフの展開を検証したうえで、石川近代文学館所蔵の自筆原稿と初出との校異及び初出・初刊本・再録・春陽堂版全集・岩波書店版全集各本文の校異を一覧し、岩波書店蔵の「編修資料」と併せて本文の異同を跡付けたものである。参考として、石川近代文学館蔵『七本桜』草稿を掲載する。

1 『七本桜』に継承されたモチーフ

諸家の指摘にあるように、疎まれ、嫌われてもなお執着する『七本桜』の恋の妄執のモチーフは、『蝦蟆法師』・『妖僧記』、『黒猫』を転成したものである。『七本桜』と先行する二作の人物の対応を示せば、次のようになる。

『七本桜』	『黒猫』	『蝦蟆法師』・『妖僧記』
岸田資吉	富の市	蝦蟆法師
車夫、信之助	画師、二上秋山	ナシ

髪結い、お欽	同、お島	ナシ
令嬢、清川清子	同、お小夜	同、清川お通
清子の母親	母様	母死亡
父死亡	父死亡	父死亡
女中、お初	同、お三	老嫗
ナシ	弟秀之助	ナシ
資吉の友人、探了	ナシ	ナシ
ナシ	芸妓お俊	ナシ

右の表の最初にあげた『七本桜』の四人の主要人物の設定は、お欽と清子二人が心を寄せる男の職業を除けば『黒猫』と一致する。四人の男女の恋の相関関係も共通している。清川清子が、『蝦蟆法師』の清川お通に拠ることはいうまでもない。『七本桜』と『蝦蟆法師』・『妖僧記』、『黒猫』との各章の対応は、次のように整理される。

① お欽が積極的に信之助の世話をして恋を打ち明けた際、信之助の「意中の人」は、清子だとして拒まれる『七本桜』の「二十八」〜「三十二」は、『黒猫』の「十三」「十五」〜「十七」と共通する。

② 亡くなった親の許可を求められた資吉が、炎天下墓前に端座し続ける『七本桜』の「三十四」「三十八」の設定は、『妖僧記』の「第四」、『蝦蟆法師』の「第五」と共通する。

③ 嫉妬心からお欽が清子に執着する資吉の願望を叶えようと画策する『七本桜』の「三十八」「四十二」「四十三」「四十四」は、『黒猫』の「十八」〜「二十三」を基にしている。

④ お欽が、清子の秘めた恋人が信之助だと知る『七本桜』の「四十五」は、『黒猫』の「二十四」を基にしている。

⑤ お欽が清子に執着する資吉に翻意を迫る『七本桜』の最終章「四十六」は、『黒猫』の「二十五」「二十六」に共通する。

『黒猫』は、恋の妄執をモチーフとした『蝦蟆法師』・『妖僧記』を基盤にした作品であり、『蝦蟆法師』・『妖僧記』を起源として『黒猫』が成立し、『黒猫』を基盤に『七本桜』が成立したといつてよい。以上、『蝦蟆法師』から『七本桜』に至る転成を、たどることができる。

『黒猫』と『七本桜』の最大の相違点は、いうまでもなく後者に黒猫が登場させなかったこと、美女に執着する男を盲人から肺結核の患者に変更したこと、怪異譚としての要素を除いたこと、章でいえば、『黒猫』の「一」「二」章及び「二十七」章以下を削除したことである。吉田昌志「泉鏡花『黒猫』ノート——恋愛のかたち——」（『青山語文』第26号、平8・3・10）の指摘されるように、「盲人の念が黒猫に宿るとい趣向」は、「鍋島の猫騒動」ものに「由来」するだろう。『黒猫』の主要人物を再登場させながら、「鍋島の猫騒動」ものに「由来」する怪異譚を削除したのである。『黒猫』「二十」章にみえる「縁切神の祠」の伝承も同じ理由で採用されなかったものと思われる。『七本桜』が、『黒猫』の「二十六」の途中、お鳥が富の市に清子への恋を諦めるよう懇願し、「私を女房にしておくれ」と説得する場面に相当する『七本桜』「四十六」の「不自由させないから、おもひ切つてあけておくれ」と「顔に顔を持たせた」ところで終わるところに、作品の異同、趣意がよく表れている。

こうした異同は、『蝦蟆法師』・『妖僧記』の場合とよく似ている。『蝦蟆法師』の最終章で、清川お通は母の墓前で蝦蟆浦法師にわが身を投げ出す。法師は、お通を抱こうとして「白き胸」から「嚇耀」と光を放つ「鏡」を目にして驚き、お通の傍から「飛退」る（『新編 泉鏡花集』別巻一「所収本文」による。岩波書店、平17・12・14。そこに、「鏡の呪力」という神秘性〔弦巻克二「鏡花の転換——『黒猫』」ななもと桜を中心に〕〔研究紀要〕第25集、光華女子大学、昭62・12・1）を指摘

することは可能であろう。「半時」ほどそこに留まった蝦蟆法師は、「鏡に映る例の鼻」を見、「溜息」をついた後「豁然として悟を開」き、「あ、我が面貞醜極まる、那個の絶美を穢すに忍びず」という。その後「低徊して走り去る」渠が鼻」は、「頗る神聖なる趣」を感じさせ、しばらくして蝦蟆法師の住む「黒壁」から「涼風」が吹き、「微妙の音楽」が聞こえたのである。このように、『蝦蟆法師』は、諦観によって美女への恋の妄執から解脱し、悟りに至る物語なのである。

鏡花は、『妖僧記』を発表するにあたって、『蝦蟆法師』の「鏡の呪力」と法師の開悟を描いた「第五」以下を削除し、お通が、野田山墓地にある亡母の墓に詣で、蝦蟆法師が墓前に「結迦趺坐」しているのを「一目見て蒼くなるところで閉じた。物語として完結していた『蝦蟆法師』の後半を削除して、『妖僧記』として発表したのである。それは、『七本桜』と同じく、叶わぬ恋の妄執に囚われる人物を際立たせるところに眼目があったからだといえよう。

『黒猫』の怪異譚を削除して成立した『七本桜』で焦点化されるのは、結核に冒された元数学教師資吉の教え子清子への恋、次いで「伝法肌」の髪結いお欽の車夫信之助への恋である。しかし、信之助・清子の二人が互いに寄せる秘めた恋も、決して微弱なものではない。信之助は、清子への恋を「因業というもんだ」という。「因業」とは、拒まれて治まるレベルを越えた恋愛感情のことであろう。また、清子が、轟く雷鳴に戦慄し、雷鳴を資吉の「思い」だとお欽に説かれて平常心を失い、「車夫の処」へ「嫁に行く」のだと告げる場面からは、切迫した恋愛感情がうかがわれる。原題の「おとづれ」（初出との異同一覧表参照）にふさわしく、四人の様々なおとづれを描いているのである。

このように『七本桜』は、四人それぞれの抑制したい恋愛感情を描いた作品といつてよい。「恋愛の諸相を象」り「人心の暗黒面」を追求」（吉田「泉鏡花『黒猫』ノート」）した『黒猫』を継承し、モチーフをより鮮明にした作品といえよう。作中に轟く雷鳴の凄まじさ、清子を脅かす崖上の七本桜の夢の不気味さも、恋の迷いや執着の象徴には

かならない。

鏡花は、故郷金沢の魔的空間・葬送空間としての黒壁・野田山墓地周辺を舞台に明治二十七年に『蝦蟆法師』、二十八年に『黒猫』を執筆し、『蝦蟆法師』からいえば三年、『黒猫』からすれば二年後に東京小石川の第六天町から大塚に至る切支丹坂・茗荷谷周辺の起伏に富んだ空間に前作の男女に近い人物を登場させ、恋の迷いや執着、男女四人それぞれの抑制しがたい恋愛感情に前作以上の焦点を当てたのであった。明治三十三年十一月、三十四年一月には、舞台を「内藤新宿の町端」に移して、美女お米に妄執の恋情を抱く「鼻の大きい老人」仁右衛門の登場する『政談十二社』（小天地）を発表、翌年一月には、『蝦蟆法師』の前半を『妖僧記』（九州日日新聞）として発表している。

以下、『七本桜』の自筆原稿の検討に入る。

2 『七本桜』自筆原稿と初出の異同

石川近代文学館蔵『七本桜』の原稿は、「七本桜 前 鏡花」（以下「前」と略す）と「七本桜 後 鏡花」（以下「後」と略す）の二冊に製本されたものと、藍染の紙製表紙に「鏡花先生原稿」とある原稿一枚の二種類がある。

二冊本は、半紙二つ折りの袋綴で、茶系の細い格子縞の布表紙左端に「七本桜」（他筆）と記されている。和紙墨書で一行十八字内外で二十行からなり、「前」は四十八枚、「後」は三十七枚の計八十五枚、各丁ウラ左端上余白に「1」から「85」のノンブルがある（他筆）。いずれも、総振りがない。第一「前」から「第二十一」の末尾までに相当する。

表紙に「鏡花先生原稿」とある一枚は、一行十八字内外で十行、冒頭に「〇二十二」とあり、左上に「86」のノンブルがある。「第二十二」の冒頭で、岩波版『鏡花全集』巻三、三六五頁一行目〜三六六頁三行目で、二冊本の続きに相当する。右端に四箇所にわたり綴じ糸の跡がある。仮に別綴本と呼ぶが、一枚を除いて散逸したものとと思われる。

石川近代文学館蔵の『七本桜』の原稿は、計八十六枚で、作品全体の半分弱の分量に相当する。

二冊本は、原稿冒頭に朱筆で「臨時増刊」を角書として二行に割り「新著月刊」と続ける。次行に朱筆で「七本桜」と表題を記し、作者名「泉鏡花著」を原稿下端に記載している。この体裁は、初出誌と同じであり、本原稿が初出誌の原稿であることが確認できる。原題は、「おとづれ」で、朱の二本棒でこれを抹消している。なお、自筆原稿右端下段には、「松本」「富田」「龍田」「今川」「小森」「鈴松」「好男子」などと二〜六枚ごとに校正担当者が記されている。別綴の「〇二十二」一枚にも、右下端に「今川」とある。改行を示す記号が二冊本、別綴本の両方にも記されており、いずれも初出の原稿であったことがわかる。

はじめに、原稿と初出誌との校異一覧を掲載する。「▽」の下の数字は、初出誌の頁と行を表示す。原稿を初出で如何に訂正したかを示す。また、（ ）内は判読可能な訂正、抹消で、原稿段階での異同を示す。なお、漢字の字体は、『新編 泉鏡花集』の「凡例」を踏襲し、特殊な場合を除いて新字体に改めた。振りがなは、必要と思われる場合のみに限った。斜線は改行を、解読できない場合は、□で示す。

◎自筆原稿と初出の異同

頁・行 初出誌 ↑ 自筆原稿 (*は初校正における訂正)

※「前」(二冊本)

- ▽1・2 七木桜 ↑ (おとづれ)
 ▽1・2 泉鏡花 ↑ 泉鏡花著 *
 ▽1・5 篠突く ↑ (雨は篠突く)
 ▽2・2 広く ↑ 広く(なつたり)
 ▽2・2 狭く ↑ 狭く(なつたり)
 ▽2・3 此灯 ↑ 此(行燈)
 ▽2・9 居た…… ↑ 居た——
 ▽2・11 ちよいと! ↑ チヨイと! *
 ▽3・7 ザラ〜 ↑ (ざら〜)
 ▽3・7 出る。
 ↑ 出(たのは凄いいほい、婦人。る。
 ▽3・7 坂上 ↑ 中坂上 *
 ▽3・13 ちよいと、築土前まで
 ↑ (お前さん、神楽坂)ちよいと、築土前まで
 ▽4・13 暗夜寂寞 ↑ 暗夜(無人)寂寞
- ▽5・7 え、↑ ねえ、*
 ▽6・1 意外に ↑ (婦人)意外に
 ▽6・1 呆れて ↑ 呆れ(た風で)て
 ▽6・4 いふかと思ふと ↑ いふか疾いか、*
 ▽6・4 覗かうとする。↑ 覗こうとするので、*
 ▽6・8 済ました ↑ (落着)済ました
 ▽6・8 背へ ↑ 背へ(落して)
 ▽6・9 すかして ↑ すかして(見たが、)
 ▽6・11 と莞爾した。↑ と(いつて)莞爾した。
 ▽6・12 男だと ↑ (道理で)男だと
 ▽6・12 仕様の無い ↑ 仕様(がないね。)のない
 ▽6・13 身を聞く。↑ 身を(退いた。)聞く。
 ▽6・13 遮つて、↑ また遮つて、*
 ▽7・1 迎も ↑ とでも *
 ▽7・3 ないか。↑ ないか、ね。
- ▽7・7 薄情だ。↑ 薄(無)情だ。
 ▽7・7 此様な ↑ こんな *
 ▽8・6 氣勢か ↑ 氣勢が
 ▽8・10 通りすがり ↑ 通りなくれ *
 ▽8・13 踏つけたんで、
 ↑ 踏つけ(て酷い目に逢つ)たんで、
 ▽8・13 切れてるし、↑ 切れてるし、——
 ▽8・13 かへたんですが、↑ かへたんですが——
 ▽9・8 行きません。
 ↑ 行(かねえです。)「きません。」
 ▽9・13 だつて ↑ だつて(お前さん)
 ▽10・2 あゝ、るまいし、
 ↑ あゝ、るまいし(お前さん)
 ▽10・5 で、↑ で(すが)、
 ▽10・7 黙つて、↑ 黙つた、
 ▽10・7 考えてる。↑ 考えてる(やうだ)。
 ▽10・10 あの、「
 ↑ あの、「(と此時。呼び懸けた。／＼へ
 (こゝ)」「
- ▽10・11 明がさして ↑ (澁と)明がさして
 ▽10・11 高島田の ↑ 高島田の(白い顔が)
 ▽10・12 外を ↑ 外(此方)を
 ▽11・2 差あげる。↑ 差あげ(たる)。
 ▽11・4 困つた ↑ 困(却の)つた
 ▽11・6 足を ↑ (お前)足を
 ▽11・10 前刻 ↑ (此時だ)前刻
 ▽11・13 嬢さん ↑ お嬢さん
 ▽12・1 気色ばんで、
 ↑ (俄にそわ〜して)気色ばんで
 ▽12・2 お金さんかい。↑ お金(かい)さんかい。
 ▽12・3 お嬢さん。
 ↑ お嬢さん。「(といふ出会になつた、)
 若い衆さん。」
 ↑ 若い衆さん。／＼(いろんなことをいつ
 て迷惑なすつたらう、)
 ▽12・10 様子。↑ やうだ。*
 ▽13・3 御苦労ですが。
 ↑ 御苦労ですが。／＼(こゝ)」「

- ▽20・3 むつつり家で
↑ むつつり家で(あつたけれど)
- ▽20・4 譬へて見れば
↑ 譬へ(は笑ふ時だ)て見れば
- ▽20・7 二和す ↑ 二を和す
- ▽20・12 分るとポン ↑ ポンと分ると *
- ▽21・10 祖父さん ↑ (父) 祖父さん
- ▽21・12 ツイ一昨年 ↑ ツイ(去年)一昨年
- ▽22・3 時鳥 ↑ (ほと、ぎす) 時鳥
- ▽22・4 こともある。
↑ こともある。(こともある。また生徒と教師とが集まつた懇信会に一杯のんで「是非お歌いなさい」と強ゐられてそこで立つて「それでは滑稽演説といふのをいたしましやうです」とさういつたことがある。)
- ▽22・6 数理 ↑ 数理(解法)
- ▽23・4 それから ↑ (まだ) それから
- ▽23・4 重つて、沈むだ、↑ 重くなつて、沈んだ、
熊蔵 ↑ (伝) 熊蔵

- ▽23・12 おろした ↑ おろして *
- ▽24・9 いまに! ↑ いまに(天下を驚かす)
- ▽25・1 紙製石盤 ↑ (あの) 紙製石盤
- ▽25・3 木余薬師の ↑ 木余薬師の(銀杏の下で)
- ▽25・3 逆銀杏 ↑ 逆銀杏(の下で)
- ▽25・7 耳朶みみもとの白い児が
↑ 耳元の白い児が(ちよろくと) *
- ▽25・8 歩いて、↑ あるいて、
- ▽26・1 染みるたのか、↑ 染みた。
- ▽26・2 髪が伸びて、瘦すくけた ↑ 髪が痩せこけた *
- ▽26・5 忘れ賺すやうに
↑ 忘れたやうに(ぼたくと)
- ▽26・8 其きり与つて ↑ 其つきりやつて *
- ▽27・3 最初の最後で、
↑ (何時) 最初の最後で、
- ▽27・5 女房の ↑ 女房の(天窓を)
- ▽27・5 筭かうがいの目立つた ↑ 重指おもさしの目立つた *
- ▽27・7 解法の ↑ (方程式) 解法の
- ▽27・9 それから ↑ そして *

- ▽13・11 私、↑ 私や、*
- ▽13・12 乗せて ↑ 乗せて(くれても)
- ▽13・13 如おんな彼な ↑ あんな *
- ▽14・8 過ぎたら ↑ 過ぎたら(お前さん)
- ▽14・9 お飯ななさいよ。
↑ お飯ななさい(まし)よ。
- ▽15・2 貫くやうに ↑ 貫くやうに(通つた調)
- ▽15・4 立どまる ↑ 立どま(つた)る
- ▽15・6 傘を ↑ 傘を(ポン)
- ▽15・7 待つてますよ。↑ 待つてるからね。*
- ▽16・4 小倉 ↑ (おなじ) 小倉
- ▽16・7 満類屋 ↑ (小石川水道町)(丸)満類屋
- ▽16・9 鼻筋の
↑ (小紋の中形の浴衣を着て) 鼻筋の
- ▽16・10 小さく ↑ (少ないが) 小さく
- ▽16・13 晩くはない ↑ 晩くない
- ▽17・1 斯かう ↑ かう
- ▽17・3 すはつた ↑ 坐つた

- ▽17・4 行儀正しく ↑ 行儀(よく)正しく
- ▽17・7 膝かといふものが
↑ 膝かといふものが(長い上に)
- ▽17・8 弓のやうに ↑ 弓の(曲つた)やうに
- ▽17・9 来るので ↑ 来るんで
- ▽18・3 襟えりに ↑ 襟えりへ *
- ▽18・5 かけく ↑ かけくしいく *
- ▽18・8 暗くい ↑ 暗くつてい
- ▽18・12 年紀ねんきで。↑ 年紀ねんきだ。
- ▽19・1 新井村。↑ 新井村で、
- ▽19・3 探たん了りょうといふ、坊ぼくさん
↑ 探たん(涼)了りょうという、坊ぼくさん(の長男)
- ▽19・4 探たん了りょう ↑ 探たん(良)了りょう
- ▽19・5 行く ↑ (入る) 行く
- ▽19・6 大久保で、↑ 大久保で、(英数塾)
- ▽19・11 切つたのだから、
↑ 切つたの(である)だから、
- ▽20・1 英語 ↑ 英文 *

※以下「後」(二冊本)

- ▽49・10 第十三 ↑ ○第十三
- ▽50・1 金山から ↑ (半歳逢は□□□) 金山から
- ▽50・7 中の母衣際に ↑ 中に母衣際へ *
- ▽50・9 母衣を ↑ (前懸) 母衣を
- ▽50・12 母親は ↑ これは *
- ▽51・2 乱れかゝつた ↑ (少し) 乱れかゝつた
- ▽51・12 其癖色も蒼ざめて ↑ 色も蒼ざめて *
- ▽52・2 入つた。 ↑ 入つた(が)。
- ▽52・13 腕のあたりも ↑ 肱のあたりも(見えた)
- ▽54・4 二人で ↑ 二人で(肩へ)
- ▽55・13 出て行く。 ↑ 出て行つたが、
- ▽56・12 つく息 ↑ つくいき
- ▽56・13 しないで居たが、 ↑ しないでゐたが、
- ▽57・1 縁側 ↑ (廊下) 縁側
- ▽57・5 薄色の ↑ 薄紫の *
- ▽57・5 緋の長襦袢 ↑ 緋(縮緬)の長襦袢
- ▽58・2 清川の内 ↑ 清川の家

- ▽58・6 唯一ツ ↑ 唯(二ツ三ツ)一ツ
- ▽58・7 拭つたやう。こゝに同
↑ 拭つたがやうだが同一
- ▽59・10 築土前 ↑ (神楽坂) 築土前
- ▽58・12 淀むで ↑ (長く) 淀むで
- ▽60・7 見透さうともしない
↑ 見透さうともしない
- ▽61・7 見せなかつたら、 ↑ 見せなかつたらさ、
- ▽62・9 人間に ↑ 業平に
- ▽62・8 第十六 ↑ 第十(四)六
- ▽64・12 | 一 | だ年紀が若いのだ。
↑ まだ年紀が若いんだ。
- ▽65・8 | 一 | と、 ↑ しと
- ▽65・12 しまつてるだらうねえ、
↑ (手堅いだらう) しまつてるだらう、ねえ、
- ▽66・8、67・1、68・8 お欵、 ↑ お金さん
- ▽67・8 すかして立つ。 ↑ すかして立つた、
- ▽68・5 お出だか、 ↑ お出だし、

- ▽27・12 春を過ぎた、 ↑ 春を過ぎて、
- ▽28・1 通じて ↑ 通(じて伝通院上)じて
- ▽28・2 齒入屋 ↑ 齒入屋(をする口取屋)
- ▽28・2 睨み合つて ↑ 睨み合つて(店ばたで)
- ▽28・6 有名^ない ↑ (大塚の) 有名^ない
- ▽29・3 先生 ↑ 先生(であつた。)
- ▽30・5 発言で ↑ (論題) 発言で
- ▽30・8 たゞ清川の ↑ (だのに) たゞ清川の
- ▽30・13 近衛の騎兵が ↑ (兵士が) 近衛の騎兵が
- ▽31・4 眺め見渡す ↑ (夕暮れを) 眺め見渡す
- ▽31・13 請じた。 ↑ 請じた。(其が最初だ。)*
- ▽32・7 ございます。
↑ ございます。(お氣をつけなさいませよ。)
- ▽32・9 呼吸をついたが、
↑ 呼吸をついたが、(淋しい笑をして)
- ▽33・10 仏じみた ↑ 仏(説)じみた
- ▽33・11 それも ↑ それも(何かいふ時に)
- ▽35・10 客だもの。 ↑ 客ですもの。*
- ▽35・11 たとひ ↑ たとひ(おさつもの)
- ▽36・1 安心した
↑ (人目がない、男はないものを) 安心した
- ▽39・11 なるのである。 ↑ なる。*
- ▽40・1 忠義者で、 ↑ 忠義者で(あつた)、
- ▽40・1 座敷へ ↑ (暗くなつたから) 座敷へ
- ▽40・9 人を ↑ 人を(つけ)
- ▽42・1 今日も ↑ 今日も(薄暗い)
- ▽44・8 鳴らないやうであります、何でありますか、そして何ですか、
↑ 鳴らないやうであります、*
- ▽45・10 とまた ↑ と(いつて)また
- ▽46・2 一呼吸 ↑ で一呼吸 *
- ▽47・8 入れる。 ↑ 入れた。*
- ▽48・2 思もする。 ↑ 思もする(ので)。
- ▽48・5 やうに思つたので
↑ やうに(見え) 思つたので
- ▽49・5 風情で
↑ 風情で(真面目に訴へるやうではあるが)

- ▽69・7、9 信 ↑(源)信
 ↑ 車をつけて、(母衣をあげて前懸を取つて)
- ▽69・11 い、んだよ。(そして沢山痛みます)
 ↑ い、んだよ。
- ▽69・13 様子である。↑ 様子だ。
 ↑ 置かれませんか。
- ▽70・1 覚東ない。↑ 覚東なかつた。
 ↑ 置かれませんか。
- ▽70・2 痛むんです、何うしたのか
 ↑ 痛いです、何うしたのか
- ▽70・5 落なんで。↑ 落なんです。
 ↑ 置かれませんか。
- ▽70・6 あげる。↑ あげた。
 ↑ 置かれませんか。
- ▽71・1 冷淡である。↑ 冷淡であつた。
 ↑ 置かれませんか。
- ▽71・2 ツイ／＼か ↑ ツイしか
 ↑ 置かれませんか。
- ▽71・2 もの珍らしく
 ↑ (覚えちやあ居) もの珍らしく
- ▽71・8 第十六 ↑ 第十(四)八
 ↑ 置かれませんか。
- ▽72・1 「い、え、↑ 車夫は遮つて／＼「い、え、
 ↑ 置かれませんか。
- ▽72・4 聞く。↑ 聞き出した。
 ↑ 置かれませんか。
- ▽73・1 面倒臭いなあ、↑ 面倒臭いなあ、
 ↑ 置かれませんか。
- ▽74・2 と笑ひ／＼ ↑ と(笑つて居る)笑ひ／＼
 ↑ 置かれませんか。
- ▽75・3 車をつけて、
 ↑ 置かれませんか。
- ▽75・7 第十九 ↑ 第十(七)九
 ↑ 置かれませんか。
- ▽76・1 置かれませんか。↑ 置かれませんかわ。
 ↑ 置かれませんか。
- ▽77・3 左様するのだと思つた ↑ だと思つた
 ↑ 置かれませんか。
- ▽77・10 年増だ、↑ 中年増だ、
 ↑ 置かれませんか。
- ▽79・2 ごさんすから ↑ ごさんから
 ↑ 置かれませんか。
- ▽79・4 ありません。」
 ↑ 置かれませんか。
- ▽79・5 いった。
 ↑ 置かれませんか。
- ↑ いった。(森とした水道町の中に夜更けてお欽の声がする。)
- ▽79・6 第二十 ↑ ○第二十
 ↑ 置かれませんか。
- ▽79・7 去つたとのこととで、↑ (飯)去つたあとで、
 ↑ 置かれませんか。
- ▽80・4 近來は ↑ 近來は(世の中が)
 ↑ 置かれませんか。
- ▽80・6 利いた風な。↑ (生意氣な)利いた風な。
 ↑ 置かれませんか。
- ▽81・8 お堰 ↑ お櫃
 ↑ 置かれませんか。
- ▽85・4 先生は ↑ 先生は(うしろ向のま、)
 ↑ 置かれませんか。
- ▽86・5 差出したのを ↑ 差出したのを(取つて)
 ↑ 置かれませんか。

- ▽86・13 「あなた、」 ↑ 「(お清さん)あなた」
 ↑ 置かれませんか。
- ▽87・1 清子は ↑ 清子は(何だか)
 ↑ 置かれませんか。

※別綴本

- ▽88・6 第二十二 ↑ ○二十二
 ↑ 置かれませんか。
- ▽88・9 切支丹 ↑ 切支丹(坂)
 ↑ 置かれませんか。
- ▽88・10 思出した ↑ (黙つて□□ふ)思出した
 ↑ 置かれませんか。
- ▽88・10 顔色で ↑ 顔色で(巡査を見ると)
 ↑ 置かれませんか。

初出の「編修資料」は、初稿校正刷で「第十四」の途中、五十七頁二行目(岩波版『鏡花全集』343頁13行)まであり、墨書による自筆の訂正がある。右校異の「*」を付したものが、これに相当する。

自筆原稿と初出を「編修資料」と併せて比較すると、次のようなことがいえる。初出の「第十六」は、原稿で「四」とあつたものを「六」に訂正し、「第十七」の「七」は、原稿で「五」とあつたものを訂正している。また、本来「第十八」とあるべきものが、初出では「第十六」になっている。これは、原稿段階で「第十六」の「六」を横棒で抹消して「八」と訂正したものを、「六」と解した誤植である。初出の「第十九」の「九」は、原稿で「七」とあつたものを訂正している。いずれも、錯誤と見られる。内容からみて構成の改変とは考えられない。この他、会話・地の文ともに、文末の訂正が少なくないこと、訂正箇所ほとんど振りがないこと、平仮名を漢字に訂正する例が多いこと、誤植が多いことが指摘できる。訂正の大半は、初校正で行われている。

語尾の訂正は、本作冒頭が「小石川に恐しい雷が鳴つた晩だ」と始まることから明らかのように、口語文体の表現の可能性を追求する作品の試みを反映しているものと考えられる。語句の訂正では、お欽にやおら抱きつく男を、

原稿で「業平」と記していたものを、初出では「人間」に改めている(61頁9行目)。人名では、車夫が「源」から「信」へ、資吉の友人が「探涼」、「探良」から「探了」へ、資吉の叔父が「伝蔵」から「熊蔵」へと改変されている。同時代評、半壺斗「▲鏡花著、七本桜(新著月刊臨時増刊)」「日本人」明30・12)は、「鏡花は四日にして此の作を為した」と述べている。この指摘に従えば、初出で平がなを漢字に訂正する例が多いのは、本作が「一気呵成」に執筆されたことと関連しているよう。訂正箇所には振りがないことも、同じ理由と考えられる。墨の濃淡から、一文一句をしたためるごとに即座に振りがないことが確かめられる。

また、誤植については、上述の「第十八」を「第十六」とした例があげられる。この他、原稿で「忘れやうに」とあるものが初出で「忘れ賺やうに」(26頁5行目)となっている。初稿校正刷では、原稿の通りであり、再校以降で誤植が生じたことがわかる。他に、原稿の「まだ」が「ーまーだ」(64頁12行目)となり、原稿の「しと、」が「しとく」と(65頁8行目)、原稿の「ツイしか」が「ツイくか」(71頁2行目)となっている例がある。著者による十分な校正を経ていないためであろう。上述のように、自筆原稿右端下段には、二、六枚ごとに「松本」「富田」「龍田」「今川」「小森」「鈴松」「好男子」などの名前が記されている。これらの校正担当者によって短期間に校正され、印刷されたものと思われる。

次に、初出から岩波版全集に至る本文校異を一覧する。

3 初出—岩波版全集にいたる本文の異同

初出「新著月刊」、初刊『ななもと桜』、再録『鏡花集』、春陽堂版全集、岩波版全集における本文の主な異同を

以下に、一覧する。異同箇所は、岩波版全集巻三の頁、行によって示し、下段から上段に向けて初出・初刊・再録・春陽堂版全集・岩波版全集本文の順に異同を示した。また、同様の異同が継続してある場合は、「(以下同じ)」とした。字数が容量を越える場合は、「同上」「同下」として初出、初刊、再録、春陽堂版、岩波版のいずれと同じかを示した。再録本以外は、総振りがなだが、必要な箇所を除いて、振りがないは省略した。

◎『七本桜』本文の主な異同(初出・初刊・再録・春陽堂版全集・岩波版全集)					
▽304・1	一(以下同じ)	一	一	第一	第一
▽304・7	體(以下同じ)	體	躰	躰	躰
▽304・10	提灯に	提灯に	提灯に	提灯に	ぶら提灯
▽305・3	車夫さん	車夫さん	若衆さん	若衆さん	若衆さん
▽306・3	さう(以下同じ)	さう	然	然	さう
▽306・10	居たい	居たい	居たい	居たい	居ない
▽307・9	幌(以下同じ)	幌	母衣	母衣	母衣
▽308・13	帰つて(以下同じ)	帰つて	帰つて	帰つて	皈つて
▽310・4	水杯	水杯	水盃	水盃	水盃
▽314・13	肺結核	肺結核	肺結核	肺血核	肺血各
▽315・3	円髻	円髻	丸髻	丸髻	丸髻
		↑	↑	↑	↑
	岩波全集	春陽堂全集	鏡花集	ななもと桜	新著月刊

▽381・13	インフルエンザ	インフルエンザ	いんふるえんざ	いんふるえんざ	いんふるえんざ
▽381・6	あと手で	あと手で	うしろ手で	うしろ手で	うしろ手で
▽380・6	小野小町	小野小町	楊貴妃と小町	楊貴妃と小町	楊貴妃と小町
▽378・15	時に	時に	序に	序に	序に
▽378・6	立とした	立とした	緇珍の	緇珍の	緇珍の
▽378・5	頃、	頃、	頃だ、	頃だ、	頃だ、
▽376・11	睨んでやりや	睨んでやりや	睨んでくれりや	睨んでくれりや	睨んでくれりや
▽376・4	反返つた	反返つた	勲章をさげてた	勲章をさげてた	勲章をさげてた
▽376・4	鞍に乗つて、	鞍に乗つて、	馬に乗つて	馬に乗つて	馬に乗つて
▽373・10	起つて	起つて	窓を立てる	窓を立てる	窓を立てる
▽372・6	勿釣瓶	撥釣瓶	勿釣瓶	勿釣瓶	勿釣瓶
▽371・10	ところへ、	ところへ、	トタンに	トタンに	トタンに
▽370・11	一礼	一礼	敬礼	敬礼	敬礼
▽370・8	若様	若様	貴公子	貴公子	貴公子
▽369・13	しつとり	しつとり	しよツたり	しよツたり	しよツとり
▽369・13	棒縞	棒縞	棒嶋	棒嶋	棒嶋
▽368・4	もの	もの	枕	枕	枕
▽368・3	中差	中差	中指	重指	重指

▽368・2	白い脰	白い脰	何だか膝でも	白い足	白い足
▽367・7	容色もの	容色もの	うつくしい	うつくしい	うつくしい
▽364・14	慄へたのである。	慄へたのである。	戦へて居る。	戦へて居る。	戦へて居る。
▽361・10	如何に	如何に	いかに	いかに	いかに
▽360・2	可いほどな、	可いほどな、	宜しい、	宜しい、	宜しい、
▽360・1	賭	賭	堵	堵	堵
▽358・12	失礼だあね。	失礼だあね。	失敬だあな。	失敬だあな。	失敬だあな。
▽358・8	また年増だ、	また年増だ、	年増だ、	年増だ、	年増だ、
▽350・11	提灯	提灯	ぶら提灯	ぶら提灯	ぶら提灯
▽349・7	しと、	しと、	―と、	―と、	―と、
▽348・14	まだ	まだ	まだ	まだ	―まだ
▽347・13	素裸体で寝るさうだ	同上	風通しがいいさうだから	同下	素裸体で寝るさうだ
▽347・13	彼処の女郎は	彼処の女郎は	彼処は	彼処の女郎は	彼処の女郎は
▽346・6	一寸。	一寸。	おい	おい	おい
▽343・9	縮に	縮に	縮の帷子に	縮の帷子に	縮の帷子に
▽342・13	酷い目に合せて	酷い目に合せて	赤い衣を着せて	赤い衣を着せて	赤い衣を着せて
▽341・8	心得顔。	心得顔。	後馳なもんだ。	後馳なもんだ。	後馳なもんだ。
▽339・5	腋の下へ	ナシ	腋の下へ	腋の下へ	腋の下へ

▽ 429 ・ 10	▽ 428 ・ 12	▽ 423 ・ 4	▽ 415 ・ 14	▽ 415 ・ 13	▽ 415 ・ 12	▽ 414 ・ 7	▽ 414 ・ 7	▽ 413 ・ 2	▽ 419 ・ 11	▽ 415 ・ 11	▽ 411 ・ 3	▽ 419 ・ 11	▽ 415 ・ 11	▽ 411 ・ 3	▽ 409 ・ 2	▽ 408 ・ 10	▽ 408 ・ 6
鎌	燧 <small>ほ</small> と	干 <small>ひ</small> 乾 <small>ほ</small>	くれ <small>ひ</small> つて	可 <small>い</small> ですか。	横柄	処 <small>い</small> 、幸 <small>に</small>	考 <small>に</small>	尤 <small>も</small> 、	（ ▽ 433 ・ 7	▽ 415 ・ 14	▽ 411 ・ 5	（ ▽ 433 ・ 6	▽ 415 ・ 13	▽ 411 ・ 5	綱	嫌 <small>です</small> わねえ。	なまぐさ坊主
鎌	燧 <small>ほ</small> と	干 <small>ひ</small> 乾 <small>ほ</small>	くれ <small>ひ</small> つて	可 <small>い</small> ですか。	横柄	処 <small>い</small> 、幸 <small>に</small>	考 <small>に</small>	尤 <small>も</small> 、	「 ▽ 416 ・ 2	▽ 411 ・ 10	▽ 412 ・ 1	「 ▽ 416 ・ 3	▽ 411 ・ 10	▽ 411 ・ 12	綱	嫌 <small>です</small> わねえ。	なまぐさ坊主
矢尻	発 <small>は</small> と	干 <small>ひ</small> 殺 <small>ほ</small>	くれ <small>ひ</small> つて	可 <small>い</small> ですか。	応柄	処 <small>で</small> 、可 <small>幸</small> に	思案 <small>に</small>	尤 <small>と</small> も、	（ ▽ 416 ・ 9	▽ 412 ・ 10	▽ 413 ・ 7	（ ▽ 416 ・ 14	▽ 412 ・ 4	▽ 412 ・ 15	縄	厭 <small>です</small> ねえ。	坊主
矢尻	発 <small>は</small> と	干 <small>ひ</small> 殺 <small>ほ</small>	くれ <small>ひ</small> つて	可 <small>い</small> ですか。	応柄	処 <small>で</small> 、可 <small>幸</small> に	思案 <small>に</small>	尤 <small>と</small> も、	（ ▽ 417 ・ 10	▽ 414 ・ 6	▽ 414 ・ 6	（ ▽ 417 ・ 10	▽ 414 ・ 2	▽ 414 ・ 10	縄	嫌 <small>です</small> ねえ。	坊主
矢尻	発 <small>は</small> と	干 <small>ひ</small> 殺 <small>ほ</small>	くれ <small>ひ</small> つて	可 <small>い</small> ですか。	応柄	処 <small>で</small> 、可 <small>幸</small> に	思案 <small>に</small>	最 <small>と</small> も、	「 ▽ 419 ・ 7	▽ 415 ・ 7	▽ 415 ・ 7	「 ▽ 419 ・ 7	▽ 415 ・ 7	▽ 415 ・ 7	縄	嫌 <small>です</small> ねえ。	坊主

▽ 408 ・ 6	▽ 406 ・ 13	▽ 406 ・ 2	▽ 402 ・ 9	▽ 402 ・ 8	▽ 399 ・ 1	▽ 397 ・ 5	▽ 395 ・ 3	▽ 394 ・ 7	▽ 394 ・ 5	▽ 390 ・ 1	▽ 388 ・ 15	▽ 387 ・ 2	▽ 386 ・ 2	▽ 383 ・ 7	▽ 382 ・ 9	▽ 382 ・ 7	▽ 382 ・ 5
ありませんか。	蝦蟇 <small>だ</small> と言 <small>ふ</small> じやア	構 <small>ひ</small> ません、	同上	喙	あ <small>ん</small> た	単衣	一 <small>遍</small>	夫 <small>婦</small> 別 <small>離</small>	逡 <small>巡</small>	い <small>け</small> ません。	お嬢 <small>さん</small>	石炭	怒 <small>つ</small> たね。	餌 <small>ま</small>	信 <small>さん</small> 、	一 <small>番</small> 地	第四十何回め
同上	同上	同上	同上	喙	あ <small>ん</small> た	単衣	一 <small>遍</small>	夫 <small>婦</small> 別 <small>離</small>	逡 <small>巡</small>	い <small>け</small> ません。	お嬢 <small>さん</small>	石炭	怒 <small>つ</small> たね。	餌 <small>ま</small>	信 <small>さん</small> 、	一 <small>番</small> 地	第四十何回め
家様 <small>で</small> ござ <small>い</small> ます、 (初出・初刊・再録同じ)	蝦蟇 <small>と</small> 、いまちやあ、り <small>ま</small> せんが、む <small>か</small> しいつたアノお公	介 <small>意</small> ません、	同	口	顔 <small>の</small>	貴 <small>下</small>	浴衣	一 <small>返</small>	別 <small>離</small>	躊 <small>躇</small>	い <small>り</small> ません。	嬢 <small>さん</small>	石油	怒 <small>る</small> ね。	養 <small>え</small>	信 <small>之</small> 助 <small>は</small>	第四十三回め
		介 <small>意</small> ません、	同	口	顔 <small>の</small>	貴 <small>下</small>	浴衣	一 <small>返</small>	別 <small>離</small>	躊 <small>躇</small>	い <small>り</small> ません	嬢 <small>さん</small>	石油	怒 <small>る</small> ね。	養 <small>え</small>	信 <small>之</small> 助 <small>は</small>	第四十三回め
		介 <small>意</small> ません、	同	口	顔 <small>の</small>	貴 <small>下</small>	浴衣	一 <small>返</small>	別 <small>離</small>	躊 <small>躇</small>	い <small>り</small> ません。	嬢 <small>さん</small>	石炭	怒 <small>る</small> ね。	養 <small>え</small>	信 <small>之</small> 助 <small>は</small>	第四十三回め

▽429・15	留みます	留みます	やみます	やみます	やみます
▽431・14	逡巡する。	逡巡する。	逡巡する。	逡巡する。	逡巡する。
▽432・1	東から南へ	東から南へ	南から北へ	南から北へ	東から南へ
▽434・11	打もだえる。	打もだえる。	もだへる様子、	もだへる様子、	もだへる様子、「
▽435・11	下メ	下メ	下締	下締	下締
▽435・13	許へ。	許へ。	処へ。	処へ。	処へ。
▽435・14	はら〜と	はら〜と	はら〜と	はら〜と	はら〜と
▽436・5	美しい女	美しい女	美女	可女	可女
▽437・5	元は	元は	旧は	旧は	旧は
▽437・5	匆られた	弾られた	匆られた	匆られた	匆られた
▽437・9	清川のだつて	清川のだつて	清川のでてえ	清川のでてえ	清川のでてえ
▽438・8	正直一国	正直一国	正直一刻	正直一刻	正直一刻
▽439・14	ぐんづり	ぐんづり	ぐんづら	ぐんづら	ぐんづり
▽440・1	可哀相(以下同じ)	可哀相	可哀想	可哀想	可哀想
▽441・1	仕出来したも、	仕出来したも、	仕出来したら、	仕出来したら、	仕出来したら、
▽441・6	思に殺さしちやあ	思に殺さしちやあ	思死をさしちやあ	同上	思死をさしちやあ
▽441・9	ぢやあないけれど、	ぢやあないけれど、	ぢやないけれど、	同上	ぢやないけれど、
▽441・12	綾	綾	操	操	操

はじめに『七本桜』の「編修資料」を確認したい。『新編 泉鏡花集』別巻二(岩波書店 平18・1・20)所収「編修資料目録」に記載があるように、本作の「編修資料」は、初出校正刷、初出切抜、初刊切抜、再録本『鏡花集』初出校正刷、春陽堂版全集再校校正刷の五種類がある。「編修資料」と併せて、初出以下五種類の本文を比較すると、次のようなことがいえる。

初刊本は、初出の「忘れ賺れた」や「一ま〜だ」などの誤植を訂正した他に、「息」「何時」など平がなから漢字に改めた語句が多い。これは、原稿と初出との異同についてもいえたことで、初刊でも、同様の訂正がなされたものと思われる。最も大きな異同は、「八」から「十五」章及び「三十七」から「四十六」章に涉って、過去の出来事を説明する際に、会話の初めと終わりをカギ括弧から、マル括弧に改めたことであろう。これによって、会話と説明が、過去の出来事か現在の出来事かが明確になっている。語句の訂正では、数学の「原理」に言及した「同数異号の和は零なり」(「五」)の前、初出で「ひどく立入つたお話ですが」とあったのを削除していること、「雷の音」の聞こえる方向を、初出で「東から南へ」(「四十四」)としたものを「南から北へ」と改めていることがあげられる。なお、初刊本は、「第十三」に相当する「六三」頁と「六四」頁が入れ違っている(国会図書館、石川近代文学館蔵本で確認)。

再録本は、初刊本を原稿として「編修資料」初刊本により確かめられる。同初刊本では、振りがなとして残す語句の右に赤い傍線を付している。初刊本との間の異同は多くない。過去の会話であることを明示するマル括弧も踏襲されている。一番大きな異同は、章の表記を「第二」から「一」と改めたことである。表現の異同では、お欝が不意に抱きついてきた「野郎」に「板橋にしけ込む」ことを勧める場面(「十六」)で、初刊本の「彼処の女郎は素裸体で寝るさうだ」を「彼処は風通しがい、さうだから」と改めている例がある。「編修資料」再録本校正刷によ

れば、初校正での訂正である。

春陽堂版全集本文は、初刊本までの本文との間に非常に多くの異同がある。「息」「何時」などを平がなに改め、過去の会話であることを示すマル括弧をカギ括弧に改めている。また、「同数異号の和は零なり」の前に「ひどく立入ったお話ですが」を復活させ、「雷の音」の聞こえる方向を初出同様「東から南へ」と改めている。再録本の前出「彼処の女郎は素裸で寝るさうだ」も、初出、初刊本にもどしている。このように、春陽堂版全集本文は、初出を原稿にしていることがわかる。このことは、「編修資料」の初出切抜からも確かめられる。同切抜には、春陽堂版全集の該当頁が「五二九」のように、上下の余白に記されている。

「幌」を「母衣」とし、「丸髻」を「円髻」、「結髪」を「許婚」にするなどの表記の異同もさることながら、お欽が車夫に声をかける「若衆さん」を「車夫さん」、「下女」を「女中」に改めるなど表現の異同が多い。「編修資料」春陽堂版全集再校正刷は、五二九―五四四頁及び五六一―六〇八頁までである。異同の大半が再校正の際、訂正されたことがわかる。なお、五六一頁余白に「要三校」「先生に見せる事」と墨書がある。再校から鏡花が校正した可能性があるだろう。信之助の貧しい住まいを説明した一節(二七)で、「絵入新聞」の挿絵をいう「第四十三回」を「第四十何回」、実家の住所をいう「十番地」を「一番地」と臆化させた改変もある。車夫が清子を「手籠にした」と疑う下女お初の発言にある「あんな奴あ赤い衣を着せて」(二四)を「酷い目に合せて」に改め、お欽が男の俗物姓を批判する「馬に乗って勲章を下げてたからつて」(二五)を「鞍に乗って、反返つたからつて」と改めた例のように、話者の意図を鮮明にする改変も目につく。「といふので」を「といふ」、「戦へて居る」を「慄へたのである。」とした文末表現の異同も多い。なかでも、「ならないけれど」を「ならないがね」、「かまつちやあいりません。」を「かまつちやあいけません。」に、「厭ですわねえ。」を「嫌ですわねえ」、「もだえる様子。」を「打もだえる。」

とした例のように、話し言葉としての自然な表現に留意した改変が目だつ。清子の母親が、資吉の体をいたわる「お寒さをなさいませうね。」を「お寒気がありませうね。」(四)としたのも、同様の事情であろう。

削除した表現もある。再録本まで、「執念深い」(三六)例として、「蝦蟇」(「蝦蟇法師」が念頭にあるだろう)に加えて「いまぢやありませんが、むかしいつたアノお公家様でございます」とあったものを削除している。同様の例として、「近衛の騎兵」の「近衛」を削除したこと(八)、お欽の隣人お駒が「北廓」にいたときの恋の駆け引きを教える場面で、「楊貴妃と小町」を例に出していたのを「小野小町」(二六)として「楊貴妃」を削除したこと、「とこの噂なのが」を「というのが」(七)というように、簡潔な表現を意図した削除もある。この他、抱きついてきた「野郎」にお欽がいう「お前達あ情婦ができる」と々々交番へ届けるのかい、馬鹿にしないね(一六)のあとの「し」とは、原稿で「し」と記されていたものが、初出で「〜と」と誤植となり、初刊本・再録本が「―と」となり、誤植が正されないままであったものが、春陽堂版全集でようやく訂正されたのであった。これらはいずれも、再校の校正刷で訂正されている。

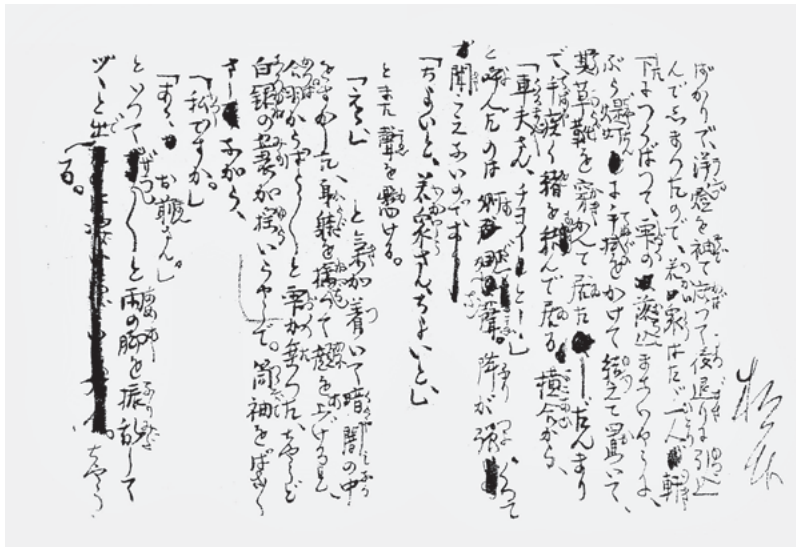
春陽堂版全集本文には、構成や内容、テーマに渉る異同はない。初出を原稿にして字句、句読点、表記、表現、特に話し言葉などに多くの改変、削除を行っている。そこには、本文を洗練し、自然で滑らかなものにしよという姿勢がうかがわれる。

岩波版全集本文は、春陽堂版全集を原稿にしており、本文は、ほぼ同じだが、「三十七」章〜「四十」章にかけて、会話を示す記号が、初刊本、再録本と同じくマル括弧になっている。過去の出来事を地の文の語り手が語る「八」章〜「十一」章と「三十七」章以下は異なる。「三十七」章以下は、「女中」のお初が探了にお欽から聞いたことを語る一節で、お初が紹介するお欽、資吉の会話、自分を含めた清川家の人々の会話に付されたものである。現在の

石川近代文学館蔵『七本桜』草稿



【資料1】

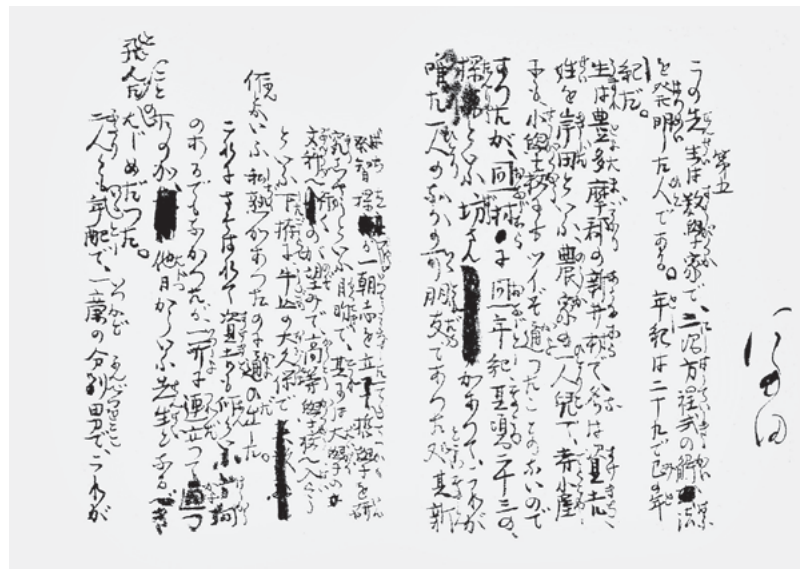


【資料2】

会話と区別するものであり、作品を深く読み込んだ編者の判断であることをうかがわせる。この他、車から下りてきた清子を心配するお初を描いた一節に「腋の下へ肩をおつけて」とあるが、春陽堂版全集では「肩をおつけて」で、「腋の下へ」を欠く(十三)。初出から再録までは、いずれも「腋の下へ」がある。岩波書店版全集本文は、春陽堂版全集本文を原稿として、諸本を参照したものであることが分かる。

以上のように『七本桜』の本文は、①原稿、②初出、③初刊・再録本、④全集本文の四系統に分かれる。①原稿は、一気に書かれたものと思われ、ひらがな表記の語句が多い。また、右端下段に校正担当者の姓が記されており、貴重である。後半の所在が不明なのが惜しまれる。②初出は、原稿の様態をもっとも反映し本文として多少の問題はあるが、現行本文の原型になった意義がある。③は、過去と現在の時制に対する意識、表記の改変に特徴がみられた。④は、初出をもとに練り上げられたもので、現行本文として相応しい。が、再録本までの「近衛の騎兵」と全集本の「騎兵」、同じく「赤い衣を着せて」と「酷い目に合せて」のいずれがよいかという表現の異同について優劣の判断は難しい。「編修資料」①・④の校正刷は、本文成立のプロセスを示す貴重な資料である。

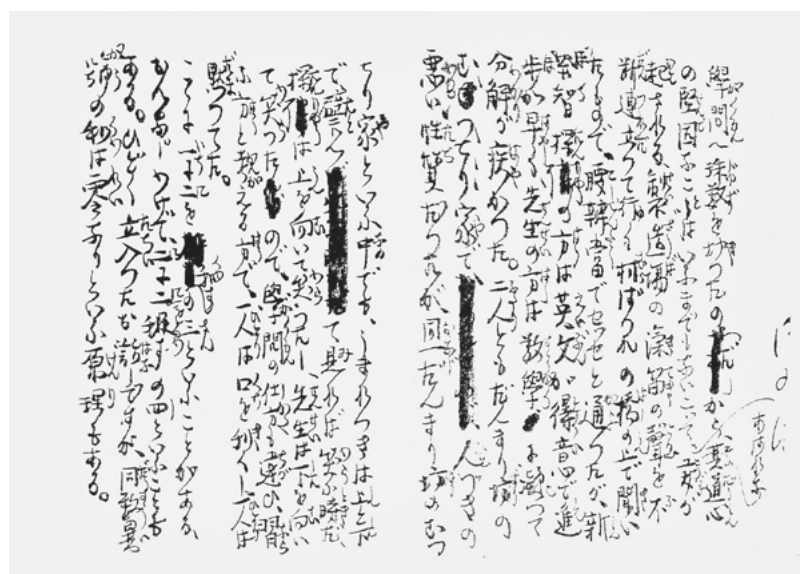
『七本桜』は、四人の男女の叶わぬ恋の妄執を際立たせた作品である。その原稿から全集本文に至る異同を検証することで、文章一筋に生きた作家泉鏡花の息づかい、文章完成への執念が見えてくる。今後、岩波版全集の編集意識についても検討していく必要があるだろう。



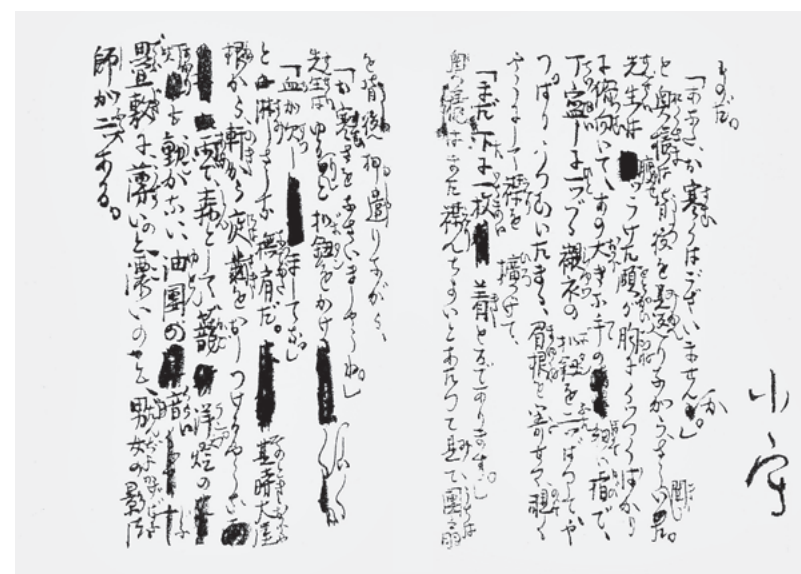
【資料17】



【資料15】



【資料18】



【資料16】

口
 通して行くあの、騒湯の軒下、
 ぬかり、細い、豆、あり、ナイ、ど、始、
 と、運、つ、半、行、く、ま、と、
 の、で、生、自、分、を、
 基、で、か、う、
 ふ、ひ、け、
 り、か、
 う、ま、あ、か、ら、ま、あ、る、か、の、
 掌、ら、あ、つ、く、
 う、ま、あ、か、ら、ま、あ、る、か、の、

【資料21】

口
 通して行くあの、騒湯の軒下、
 ぬかり、細い、豆、あり、ナイ、ど、始、
 と、運、つ、半、行、く、ま、と、
 の、で、生、自、分、を、
 基、で、か、う、
 ふ、ひ、け、
 り、か、
 う、ま、あ、か、ら、ま、あ、る、か、の、
 掌、ら、あ、つ、く、
 う、ま、あ、か、ら、ま、あ、る、か、の、

【資料19】

口
 通して行くあの、騒湯の軒下、
 ぬかり、細い、豆、あり、ナイ、ど、始、
 と、運、つ、半、行、く、ま、と、
 の、で、生、自、分、を、
 基、で、か、う、
 ふ、ひ、け、
 り、か、
 う、ま、あ、か、ら、ま、あ、る、か、の、
 掌、ら、あ、つ、く、
 う、ま、あ、か、ら、ま、あ、る、か、の、

【資料22】

口
 通して行くあの、騒湯の軒下、
 ぬかり、細い、豆、あり、ナイ、ど、始、
 と、運、つ、半、行、く、ま、と、
 の、で、生、自、分、を、
 基、で、か、う、
 ふ、ひ、け、
 り、か、
 う、ま、あ、か、ら、ま、あ、る、か、の、
 掌、ら、あ、つ、く、
 う、ま、あ、か、ら、ま、あ、る、か、の、

【資料20】

此の七本桜七
先生を祀りて居たが、ワタクシとて
おし元。先生は、おぼろけして、おぼろけして、
ら、腕三つ、ついた、石盤と、おし、おし、
く、おし、おし、おし、おし、おし、
送つた、おし、おし、おし、おし、
て、おし、おし、おし、おし、
この、おし、おし、おし、おし、
け、おし、おし、おし、おし、

【資料25】

七本桜の、おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、

【資料23】

七本桜の、おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、

【資料26】

七本桜の、おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、
おし、おし、おし、おし、

【資料24】

【資料41】
第廿一
 今更なるや、申すに、ア、河野神所、
 類も、手跡、けり、居り、す、
 さ、か、い、ま、す、
 の、か、
 い、
 か、
 く、
 で、
 今更なるや、申すに、ア、河野神所、
 類も、手跡、けり、居り、す、
 さ、か、い、ま、す、
 の、か、
 い、
 か、
 く、
 で、

【資料41】

【資料39】
 今更なるや、申すに、ア、河野神所、
 類も、手跡、けり、居り、す、
 さ、か、い、ま、す、
 の、か、
 い、
 か、
 く、
 で、

【資料39】

【資料42】
 今更なるや、申すに、ア、河野神所、
 類も、手跡、けり、居り、す、
 さ、か、い、ま、す、
 の、か、
 い、
 か、
 く、
 で、

【資料42】

【資料40】
 今更なるや、申すに、ア、河野神所、
 類も、手跡、けり、居り、す、
 さ、か、い、ま、す、
 の、か、
 い、
 か、
 く、
 で、

【資料40】

「……」と云ふは、
 思ふて、
 何
 ちから、
 解
 ちつた、

【資料73】

「……」と云ふは、
 思ふて、
 何
 ちから、
 解
 ちつた、

【資料71】

「……」と云ふは、
 思ふて、
 何
 ちから、
 解
 ちつた、

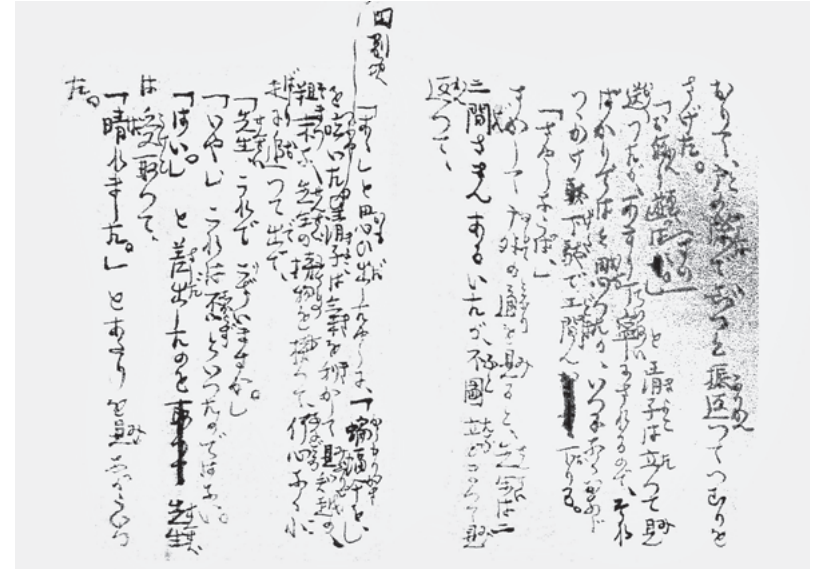
【資料74】

「……」と云ふは、
 思ふて、
 何
 ちから、
 解
 ちつた、

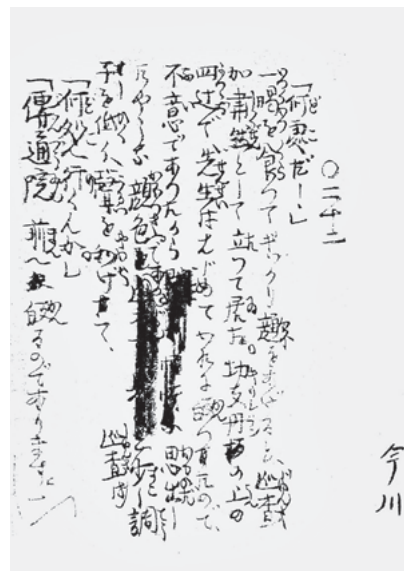
【資料72】



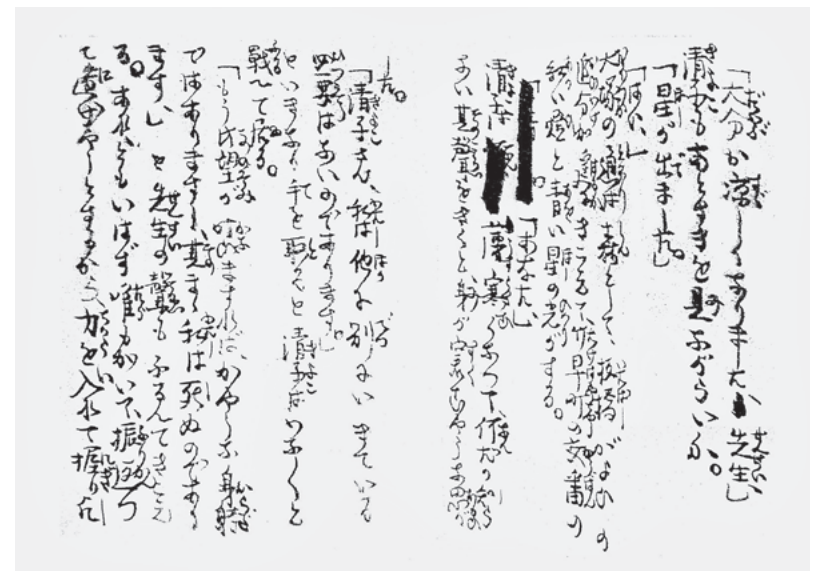
【資料85】



【資料83】



【資料86】



【資料84】

〈越中もの〉の素材

泉鏡花は、作品の舞台の選択に特に意を用いた。神西清「鏡花風土記拾遺」(岩波版「鏡花全集」月報 昭17・7)以来、舞台を同じくする複数の作品を「番町もの」「逗子もの」「金沢もの」「越前もの」などと称している。越野格「越中もの」の空間性その①(「国語国文学」福井大学、平8・6)は、「富山を舞台にした作品群を〈越中もの〉と規定」している。小考は、これに倣って、「越中もの」を再検討するものである。

「越中もの」は、明治二十七年から大正十四年にかけて発表された『義血侠血』・『取舵』・『秘妾伝』・『蝙蝠物語』・『蓑谷』・『龍潭譚』・『蛇くひ』・『黒百合』・『湯女の魂』・『星女郎』・『鎧』の十一作ある。これらの、発表年月・主な舞台は、次のようにまとめられる。

作品名	発表紙誌	発表年月日	主な舞台
『義血侠血』	『読売新聞』	明27・11・1～30	高岡・福岡・石動、金沢
『取舵』	『太陽』	明28・1	伏木・魚津、八田潟、直江津
『秘妾伝』	『近江新報』	明28・3・28～4・10	府中(武生)、金沢、富山、末森城
『蝙蝠物語』	『新文壇』	明29・3～6	白谷の温泉・笹川

『蓑谷』	『少年世界』	明29・7	蓑谷
『龍潭譚』	『文芸倶楽部』	明29・11	城端
『蛇くひ』	『新著月刊』	明31・2	富山
『黒百合』	『読売新聞』	明32・6・28～8・28	富山・湯の谷・石瀧、東京
『湯女の魂』	『新小説』	明33・5	富山・泊・小川温泉、東京
『星女郎』	『文芸倶楽部』	明41・11	金沢・津幡、俱利伽羅峠、石動・富山
『鎧』	『写真報知』	大14・3	金沢、富山、鎧・余部

これらの作品は、富山・高岡の二大主要都市、越中・越後境近郊、越中・加賀の境、日本海に面した伏木や泊を取り上げるなど、富山県の特徴のある地域を舞台としている。こうした場所を舞台に選んだのは、まず春陽堂版『鏡花全集』巻一(昭2・4)所収「年譜」に

明治二十一年富山に赴き友人の許にあり、国文英語補習の講座を開き、又出稽古を試む。半歳ならずして帰郷。(引用者注、「二十一年」は「二十二年」とみられる)

とあるように、十六歳のころ、数カ月間(明治大正文学全集 泉鏡花集)所収「年譜」では「三月」以内)富山の友人の許に滞在したこと、明治二十七年一月父が亡くなった後金沢に帰郷していた鏡花が、「伏木の汽船が、両会社で激しく競争して、乗客争奪の手段のあまり、無賃金」で乗せるといふ「風説を聞いて、乗らざるべけんや」(「麻を刈る」)「時事新報」大15・9～10)と、同年九月上京の際、伏木・直江津間の汽船を利用したという実体験が挙げられる。この他、鏡花が生まれた明治六年には、父清次が高岡の銅器製造元の「白崎屋」で一時期働いていたことが、母すゞの清次宛書簡の翻刻によって明らかにされている(西川貴子「慶応義塾図書館蔵『泉鏡花生母すゞの書簡』解題・翻刻」「三田国文」平

12・9)。また、鏡花の妹他賀は、明治三十七年五月頃工芸作家祖川弥三次郎と結婚して高岡にあった(新保千代子「新資料紹介―妹たか女をめぐる書簡考と自筆年譜訂正―」『鏡花研究』第3号、昭52・3)。鏡花と越中は浅からぬ縁があったといつてよい。

「越中もの」は、四つの系統に分類できる。①『義血俠血』『取舵』など明治二十七年九月の上京前後に取材した作品、②『蛇くひ』『黒百合』『鎧』など、明治二十二年の富山滞在に取材した作品、③『蝙蝠物語』『湯女の魂』といった小川温泉に取材した作品、④『蓑谷』『龍潭譚』など、『蝙蝠物語』・『湯女の魂』とも共通する他界の女性との際会を描いた作品である。『星女郎』は、モチーフからして『鎧』に近く、第三の系統に分類できる。

以下、この分類に即して、「越中もの」の問題点を、『黒百合』など第二の系統と『湯女の魂』など第三の系統を中心に考えたい。

明治二十七年九月の上京前後に取材した作品のうち『義血俠血』は、越中高岡より俱利伽羅下の建場なる石動まで、四里八町が間を定時発の乗合馬車あり。

賃金の廉きが故に、旅客は大抵人力車を捨てて之に便りぬ。車夫は其不景気を馬車会社に怨みて、人と馬との軋轢漸く太甚きも、才に顔役の調和に因りて、営業上相干さざるを装へども、折りに触れては紛乱を生ずること屢なりき。

というように、高岡・石動間の乗合馬車と人力車との軋轢を記し、「七月八日の朝、一番発の馬車」の小僧が「乗合を揃へむ」として「通過の婀娜者」に「無茶に廉くツて、腕車よりお疾うござい」と声をかけ、「腕車より遅かつたら代は戴きません」と約束するところから始まる。『義血俠血』は、東京で学ぶ資金を村越欣弥に仕送りする約束をした滝の白糸が、何をおいても義務を果たそうとして芸人仲間仕送りを強奪されたことを契機に殺人を犯

すという悲劇を描いた作品である。欣弥の自殺は自分のために全てをなげうった白糸の盲目的な愛情に応えたものであった。前途有望な青年が、女性の盲目的な愛情に応じて現世を越えていくという鏡花文学の特徴がよくあらわれた作品として知られている。冒頭は、この作品の中核をなす約束と義務の問題がすでに現れている点で注目される。作品成立の背景として注目されるのは、高岡・石動間の乗合馬車と人力車の軋轢である。高岡・石動間の乗合馬車の運行については、明治二十一年六月三十日付「中越新聞」の雑報「砺波通信(六月廿七日)○馬車」に

両三日前より射水郡高岡町より今石動町迄の馬車運行を始めたなり今石動町より高岡町迄四里弱の処壹人に付五六銭の運賃にて人力車より廉下なるを以て乗客頗る多し

とあることから、運行開始は明治二十一年六月二十四日前後だとわかる。また、同年七月九日付「中越新聞」の雑報「砺波通信(七月五日)○閉口」に「曾て通信し置きたる如く高岡町より今石動町迄馬車の通行を開きしより旅客は大半之に乗るより人力車挽は大に閉口なし居る由」とあることから、乗合馬車と人力車の軋轢も実際のことだったと推測される。先に述べたように、鏡花が富山に滞在したのは、明治二十二年六月から「半歳」足らずであった。ということは、明治二十一年六月下旬から運行を開始した高岡・石動間の乗合馬車の存在を知っていたことになる。金沢・富山間を往復する際、乗合馬車を利用した可能性を考えてよい。

伏木・直江津間の汽船を舞台にした『取舵』は、明治二十七年五月十八日付「北國新聞」の雑報「伏木、直江津間の航海」に「此程観音丸」が「廻航」し、「競争の勢」が生じたため有志者の尽力によって「各船順番を定めて往復する」とあり、主人公の乗り込む「観音丸」が実在していたことがわかる(第一章「取舵」考参照)。

以上二作は、いずれも実際の出来事、自身の体験に基づいた作品で、明治二十七年九月の上京前後に取材した作品は、終始現実世界で展開する。

他の二系統は、前代文芸や地域に根ざした伝承を基盤としている。以下、『鎧』と『星女郎』、『蝙蝠物語』と『湯女の魂』、『蛇くひ』と『黒百合』に分けて、検証を試みたい。

1 『鎧』と『星女郎』

『鎧』は、富山の「神通川に近い邸町」にあった友人の家に滞在した「私」の回想から始まる。「私より二つ三つ年上だつた友だち」は、「五六人の女の思ひが（中略）一斉に取つて、蠱むの如く悩ませる。と自ら称して、時々七転八倒して人事不省」になる病気に罹つていた。この友人が、神通川のはどりの「屋敷田圃」で「立山の神々が大河川を通つて」「北海へ遊行する、往來の途中」だとされる「屏風霞」の説明をし、「清らかに純な、山媛やまひめの気を吸つたら、僕の体内に蟲むしのやうにはびこる、あまたの女の生霊は、屹つと摺伏しようと思ふ」といつて、「山媛……来れ！」と叫び、手痛い目にあうという作品である。「屏風霞」の典故は明らかではない。しかし、鏡花の愛読書堀表水『三州奇談』巻五「神通の巨川」は、「此川の水怪一二を以て語るべからず」として、「舟橋の上に淵あり、淵の主は川蝶と云ひ。一たび此蝶面を翻せば、水中の白光天日に輝き。舟橋の上の人眼眩き。水へ落て悪魚の為に喰はれる」といふように、神通川の舟橋を「水怪」の棲む魔所としている。作品の背景に、「此川の水怪一二を以て語るべからず」（引用は『続帝国文庫』による）という神通川の伝承があつたものと思われる。なお、この伝承は、後年の鏡花『山海評判記』（時事新報）昭4・7・2（11・26）の「蝶」に引用、紹介されている。

先に述べたように、モチーフからして『鎧』に近いのが、『星女郎』である。『星女郎』は、俱利伽羅峠を主要な舞台としている。同じく『三州奇談』巻五「俱利伽羅」は、

都文て死する者必ず此坂を越えざるはなしと聞けり。故に金城にも何某の玄蕃なる人。此所にて鬼に逢ひしと云ふ物語人口にあり

と記している。俱利伽羅峠は、神通川同様他界の怪しい物の棲む空間として知られていたようだ。

『星女郎』には、「一度擦違つたものでも直ぐ我を恋うると極め」、胸のなかで「男どもが掴み合ひをはじめ」て「七転八倒」する奇病に罹る多情な貴婦人が登場する。この病気は、男女の違いはあるにしても、『鎧』の「私」の「友人」の病気に酷似している。金沢で勉学の日々を送るうちに発病し、「二月」前後入院するが回復の兆しもなく退院すること、富山に引き上げる点、帰郷する時、同性の友人が同行するのも共通している。まず、『鎧』のモデルになった友人がいて、そこから『星女郎』を構想し、後年体験に近しいところで『鎧』を構想した可能性を考えてよいのではなからうか。注目されるのは、『星女郎』の視点人物の「私」（境三造）が旧道となつて往來のない俱利伽羅峠に到着した場面で、

殆ど盲蛇まっぐさで蠢まっぐ如ごに突いて出ると、颯と開けた一場の広場。前面にぬつくりと立つた峰の方へなぞへに高い。が、その峰は俱利伽羅の山続きではない、越中の立山が日も月も呑んで真暗に聳えたのである。

というように立山に言及している事である。この後、峠の茶屋跡で「私」が一夜を過ごすうちに「本箱」から悲鳴や叫び声上がるのを聞く場面で、

あ、硫黄の臭もせず、蒼い火も吹出さず、大釜に湯玉の散るのも聞こえはしないが、こんな山には兎もすると地獄谷といふのがあつて、紅蓮大紅蓮の阿鼻叫喚が風の繞めぐるが如くに響くと聞く……扱かは……少ちい女が前

刻——
(此処は地獄ですもの。)

と言つたのも、此の悪名所を意味するか

というように、いわゆる立山の地獄谷伝承を連想させる場面がある。「少い女」は、昼寝をしているうちに夢のなかで貴婦人に取りついた男の生霊を刀で切り殺して奇病を全快させたのと引換えに、不思議な病を発症し、峠の茶屋跡に隠れ住んでいる。その病は、男を切り殺さずにはいられない奇病で、「男を目に留めて、これを絵姿にして、斬る、突く、胸を刺す」。すると、後日「其のものは生命」を失うという。「目当の男のない」時には、「竹篋たけべらで土を削つて、基督きりすとの像」を「等身に刻みつけ」るなど、峠の茶屋跡で、「少い女」は、「歴史に血を流した人を描く」日々を送っている。このように見てくると、「此処は地獄ですもの」という女は、内なる地獄、妄執に囚われている。おそらくここには、いわゆる立山地獄のイメージが作用している。立山地獄は、立山曼陀羅の絵解きなどを通じて富山滞在中の鏡花にも知らされていた可能性が高い。この作品の独創は、伝承にある立山地獄そのものを描くのではなく、あくまで内なる情念、幻想、執着として描いている点である。『星女郎』の「私」は、金沢や俱利伽羅峠で何度か二人の女を見て、再会を願っていた。「少い女」はそんな「縁」のある「私」の生命を助けるために「烏瓜の蔓」を「我手で巻」き、下山を促す。その前に、貴婦人は「私」に「打ちもし、蹴もし、縛りもして、悪い癖を治して上げて下さい」と頼んでいる。が、「少い女」は、同意しない。おそらく「私」の好意が彼女の内なる地獄からの脱却に何の効力もないことを再会して知ったのであろう。好ましいと思う男を取り殺さないではいられない愛執の地獄、自ら陥った地獄と地獄に陥った自身を知るのが、この場面の意味といえよう。作品の主眼は、相次いで二人の女性の陥った愛執の地獄、その深さを自身を知るところにあるといえるのではなからうか。

2 『蝙蝠物語』と『湯女の魂』

女の内なる地獄、愛執の地獄を、立山連峰を挟んだもう一つの境の近郊を舞台に描いた作品が、第三の系統としてあげた『蝙蝠物語』『湯女の魂』である。『蝙蝠物語』のヒロイン「ゆきの(雪野)」は、白谷の温泉宿の養女で、育ててもらった恩もあって、「一室の内に居すくまりて、置物の如くあるよりほか何のなし得る所作も無」い一人息子の妻となっているが、養父母公認の恋人時之助がいる。時之助と「予」が白谷を訪ねたところ、「ゆきの」は神隠しにあつて行方不明になっていた。その夜時之助は、大蝙蝠に連れ去られる。あとを追いかけた「予」は、森の中の一軒家で、「黒髪白衣の婦人」に導かれ、「婦人」が「はだか身のゆきの」に「あだし男を思ひ断」つよう、「手にしたる骨」で「二打三打ちつつ」迫るのを目撃する。「世にたわけたる骨なしの、なぐさみものと身をなして、心ばかりは時之助を恋」う「ゆきの」は、「浮世の義理に死なれぬ」境遇にあつて、むしろ「死するを得ば、魂のみ心のまゝとなりて、恋しき人に添」うことができると思ひ、肉体の苦痛を進んで受け入れようとする。「ゆきの」もまた、内なる地獄、愛執の地獄にあるのであり、自らが、そのような陥穽にあることを知ったといつてよい。注目されるのは、「嫉妬もて憤死なしたる婦人」の「骨」でゆきのを責めたあと、

「身に覚ある嫉妬の骨よ、人に思を知らせずや。」と声強く言ひかけて、ハタと地上に擲てり。

同時に霜柱の如きものばらばらと舞上り、手ともいはず、肩ともいはず、頸に、頭に、背に、胸に、ゆきの、膚に透間もなく一面にむれさゝりつ。

あと悲鳴してぶるくと手足を縮めてもだふれば、猪の怒毛逆立つ如く、数千の針はみな動けり。

というように、「ゆきの」の体に「数千の針」が打ち込まれることである。これは、ゆきのを責める前に「婦人」

が子に示した「難破船の古釘」、「矢りたる八寸釘の数百本の赤錆になりたる」もの、「やがて其等の品々の如何なる用をなすかを見せむ」といつていたものを指すだろう。従来この場面については、鏡花の愛読書アプレウス『金驢譚』によるものと考えられてきた(須田千里「鏡花における『魔』的美女の成立と展開―高野聖を中心に―」、「国語国文」平成2・11参照)。「金驢譚」には、たしかに魔女斑比兒の「魔法に必要な道具」として「難破したる船の釘」(郵便報知新聞明22・1・22付)が出てくるが、それが女性の体に「むれさゝ」る場面はない。この場面は、『金驢譚』に加えて立山曼陀羅を踏まえて転成したものと考えられよう。福江充『立山信仰と立山曼陀羅』(岩田書院、平10・4)によれば、『立山曼陀羅』宝泉坊本の地獄の場面は、「内容的には八大地獄に該当・関連する凶像及び凶柄」となっているという。そのうち「獄卒が亡者に大釘を打ち込む〔等活地獄〕」が、右の場面に近い。等活地獄は、源信『往生要集』(九八五年成立)に記すように、八大地獄の一つで「おのおの鉄爪を以て互に掴み裂」いたり、獄卒に「鉄杖・鉄棒」で全身を「打ち砕」かれたり、「利き刀を以て分分に肉を割」かれたりするものである。立山曼陀羅のいくつかに「獄卒が亡者に大釘を打ち込む〔等活地獄〕」が描かれている。そうした曼陀羅のイメージを踏まえた可能性があるのではなからうか。

『湯女の魂』では、「ゆきの」に相当する「お雪」が「恐しく背の高い、お神さん」に導かれて山中の「孤家」に行つたことを語る一節に、「丑の時参が、猿丸の杉に打込んだ」釘などを示し、「ばら〜と」お雪の「体に投附け」ると「手も足も顫へる事も出来なく」なる。この作品には、体に「数千の針」が打ち込まれる場面はない。ただし、『湯女の魂』のお雪は、「生霊が取着いたとか、狐が見込んだとか云う」奇妙な病氣、「異類異形のもの」が、病人の寝間にむら〜として居るように「魔され」て、一睡も出来ない状態にある。お雪は、「不思議な女」から「男を思ひ切るか、それを思ひ切りさへすれば復る」と言われ、折檻されるが「思ひ切れ」ない。東京にいる大学生の恋人へ

越中もの第三の系統は、自己の内なる地獄の発見を描く作品群といえよう。

3 『蛇くひ』と『黒百合』

次に、明治二十二年の富山滞在に取材した作品を検討したい。延広真治「鏡花と江戸芸文」(『国文学』昭60・6)は、賤ヶ岳の戦いと末森合戦を中心に前田利家と毛受家家照の妹小侍従の活躍を描く『秘妾伝』は、『絵本太閤記』五篇等より得られた利家伝に、架空の小侍従を点じた「とみる。実際には、『絵本太閤記』の影響は、『秘妾伝』にはさほど明確ではない(第三章、「秘妾伝の成立」参照)。しかし、『鎧』、『蛇くひ』、『黒百合』の三作品は、『絵本太閤記』に記す「ぶらり火の説」が取り入れられている。「ぶらり火の説」は、佐々成政の愛妾早百合が同輩の嫉妬から讒言にあり、「神通川の川添」で「持ちたる髪を逆手に取り宙に引上げ、提斬に切つて落し」て以来、「今も猶(中略)風雨の夜は女の首を斬つて釣り上げたる貌の鬼火頭れ出るを、土人号けてぶらり火と云ふ」伝承、『絵本太閤記』第五篇卷八「ぶらり火の説」に記す伝承である。『鎧』には、「佐々成政の二の丸の跡」だという「屋敷田圃」という小高い「岡から神通の水際」は、「ぶらり火」が燃え、「青い女の面影の、往来する処」だというように、この伝承が具体的に紹介されている。

『蛇くひ』には、右の伝承そのものは出てこない。しかし、富山生まれの作家小寺菊子「屋敷田圃」(『新小説』大14・5)は、『蛇くひ』の読後感を記して、『蛇くひ』に出てくる「御屋敷田圃」の「大きな古い榎」は、「さより姫」が「逆吊りにされ、下げ斬りにあった」場所、「ぶらり火」の伝承のある所だと指摘している。『蛇くひ』は、神通川べりの「郷屋敷田畝を徘徊」し、富山市内の有力な商家に押しかけて「米銭」を公然と要求する「蛇くひ」の特異な集団「応」を描いた作品である。この集団が「応」と呼ばれるのは、「成政が別業の田跡」の「傍に一本、榎」の「大樹」があつて、「夜陰人静まりて一陣の風枝を払へば、愁然たる声ありておうおうと唸く」ようだから、「仮に応」というのだという。つまり、この呼称は、成政・早百合姫の伝承にかかわっている。とすれば、『絵本太閤記』で、神通川をはさんで利家・秀吉軍と対峙した合戦を描く第五篇卷之七「秀吉公発向神通川合戦」に、「神通川の水上呉服村の傍より、一面怪げに恐しき鬼の手に刀を持ち身に鎧を著し、幾百万といふ限もなく、天に蔓り地に充ちて、おうくと鬨を作り、成政を目がけ湫き来る」とある一節に描かれた異形の集団を撰取した可能性が考えられよう。

この他、鏡花が富山に滞在した明治二十二年六月二十四日と七月二十四、五日に豪雨によって神通川が氾濫したことが知られている(前掲、越野論文参照)。これに関連して見逃せないのは、この氾濫によって、米価が高騰し、富山市内の貧民が富裕な商家、米屋に押しかけていることである。同年九月二十二日付「富山日報」は、

近來頓に米価騰貴し白米壹升の価八錢二厘より五厘迄に昇り随つて諸物価も追々上進するの勢を現はしたれば当市東仲間町の貧民は生計が立ち兼ねるとか飢死にするとか騒ぎ立ち一昨夜百余名の貧民は勢を揃ひて柳町の馬瀬、北長、永太なんどいへる商家へ押掛け救助米を出せ金を出せと強請り行歩くと報じた。また、同日付「北陸公論」によれば、「百余名の貧民」が「勢を揃ひて柳町の馬瀬、北長、永太なんど

いへる商家へ押掛け」たのは、「一昨夜」であつて、「一昨夜も亦同様」に「貧民等凡そ二百余名は各々部署を別ち荒布的の鎧に身を固め讒謗罵詈の銃砲と筋金入りの腕骨を提げて悠々と押出さん」したとある。連夜にわたる「大騒ぎ」は、鏡花の脳裏に焼きついて後年の創作に生かされたのではなからうか。また、作品の末尾で、子供たちが口ずさみ始めたという「屋敷田圃に光る物ア何ぢや、虫か、螢か、螢の虫か、虫でないのじや、目の玉じや」は、すでに前引の小寺「屋敷田圃」が富山の民謡「さんさい節」であることを指摘している。「さんさい節」の歌詞のうち、最も『蛇くひ』に近いのは、『富山県明治期口承文芸資料集成』(同朋舎出版、昭55・9)収録の「東タンボニヒカルモンナンンジャ 虫カ螢カコガネノムシカ 虫デナイモノ眼ノ球ジャ サイサンサイヨイヤナイ」であろう。『蛇くひ』の歌詞は、この歌い出しを「屋敷田畝」に替えたものではなからうか。小柴直矩「富山祇園会 附「さんさい踊の由来」(天3・7)によれば、さんさい節は、市内円隆寺の祇園会(7・14)に「年頃の少女」が円陣を作つて「歌詞の前後に『サイサンサイヨイヤナノヨヨナイ』と唄ひ囃し『リボン』の波晴れの浴衣涼しく振合せ足拍子揃へて踊る」もので、「サイサンサイヨイヤナノヨヨナイ」は、「最佐々(早々)漸サノ漸々ナ早百合ナー」の「転訛したもの」だといひ、成政を厭い、早百合への同情を表したものだといふ。これまた、成政・早百合の伝承に係るものであつた。神通川が氾濫した前後、この盆踊り唄を鏡花も耳にしていたものと思われる。『蛇くひ』の背景には、このような実際の出来事、鏡花の耳目にふれたものと富山の伝承が結びついているものとみられる。『蛇くひ』においては、地方都市富山の富裕層が、「目の玉」と呼ばれるリーダーに率いられた貧民集団の脅威にさらされる日の近いことを知るまでが描かれている。見えなかつたものが顕在化する脅威を描いた作品といえよう。

『黒百合』は、早百合姫の伝承を紹介している他、さんさい節の一節も用いられている。黒百合の花は、『絵本太閤記』に「黒百合滅佐々」とあるように、成政が切腹する原因となった花として知られており、題材からして、『絵

本太閤記』を連想させる。鏡花は、北の政所と淀君の争いの基となり、成政切腹に結びついて、「早百合といへる女の怨念にて今度黒百合の事より滅亡しけるやとそぞろに怪しむ者も多かりけり」という「語るもおどろおどろしい花(黒百合)広告」を、固有のイメージに転換させた。換言すれば、植物に関心を抱くフランス帰りの富山県知事令嬢勇美子の求める花、令嬢の求めに応じて「あはれに美しき」富山の花売りお雪の探す花、重瞳の盗賊でもある華族の少年瀧太郎が、「立派な、日本晴れの盗賊」になる手始めとして入手を図る「山の霊、水の精、また天道様が大事に遊ばす」花としての独自の黒百合の物語を紡いだのであった。

作中の圧巻は、瀧太郎とお雪が石瀧の山中他界で黒百合を採取する場面である。二人は、そこで、「肩翼凡そ一間余りもあらうと思ふ鷺」に襲われる。また、二人の身边には「花の色と等しい小さな、数知れぬ蝶々」が舞い、「間断なく牛が歩く」のを見る。こうした他界の情景は、お雪が恋人の目の治療費を得るために必死の思いで幻の花を採集に来たことを反映して「死装束」でいること、また瀧太郎が盗品を隠した洞窟内を流れる川の轟音について、「神通川の音と立山の地獄谷の音が一所になつて聞える」といい、白魚のお兼が瀧太郎を諭す場面で「地獄谷とやら、恠(こん)恐(こ)い音のする其の立山の底に秘くしてあるものもあらう」というように、「地獄谷」という言葉が繰り返されていることと無関係とは思われない。ここからは、当然のこととして立山の地獄谷の伝承が連想される。そのような観点で山中他界のイメージを捉えなおすと、二人を襲う鷺は、立山開基伝承の鷹や山東京伝『善知鳥安方忠義伝』で立山地獄に落ちた安方を襲う「化鳥」に基づくものと思われる。二人の身边を飛ぶ蝶の群れは、『和漢三才図会』の立山地獄に記述がある。同じく二人の前を「間断なく」歩く牛の群れも立山地獄の畜生ヶ原を想定しているものと考えられる(高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』参照。名著出版、昭52・9)。石瀧は近隣に「不動様の岩窟の清水」があり、失明した若山が眼病を直すために通う設定になっている。石瀧の不動は、中新川郡大岩村(現 上市

町)の真言密宗本山日石寺の大岩山不動尊であろう。森田柿園『越中志微』(富山新聞社、昭27・3)の「○大岩山不動尊」によれば、「眼目をやむ者立願し、信仰の志あらば忽に平癒する事其数を知らず」とあり、加賀藩主前田利常は「予が領内に大岩不動あれば、眼科の医師を召置に及ばず」とまでいったという。渡辺市太郎編『越中宝鑑』(名古屋光彰館、明31・10)によれば、日石寺の境内は、「周圍尽ク全巖ノ連峯」で、「巨巖多」く、「三百丈ノ二瀑」が「千雷ノ響を発シテ」いるという。山中他界のイメージの一つとして、日石寺を想定しているものと思われる。このように『黒百合』は、『絵本太閤記』やさんさい節、そして特に立山伝承に多くを負っている作品とみることができる。山中他界の情景や出来事は、お雪の恋人の盲目の理学士若山が見た夢でもあるという設定である。若山は夢の中で、鷺の襲来からお雪を守る瀧太郎の「優しき姿と斗大の胆」に圧倒され、遙かに及ばないことを認める。「重瞳」の持ち主である瀧太郎の卓越した能力を見出すのである。

一方、若山は、視力の喪失と引き換えに見えるはずのない山中他界を見る能力を得る。現世に帰った直後洪水の中でお雪は自ら犠牲となって、瀧太郎と若山を結びつけ、二人を指導者とした冒険船黒百合号の出帆を予告して作品は終わる。この作品においても、それまで不可視だったものを見出す展開が描かれているといえよう。

以上のように、(越中もの)は、さまざまな体験や伝承を踏まえながら、当初見えなかった内面や能力を見出すという共通点があり、独自の作品世界を構築する鏡花文学の特質をよくあらわした作品群といえることができる。

『黒百合』の生成

『黒百合』は、明治三十二年六月二十八日から八月二十八日まで、六十回にわたって、「読売新聞」に連載され、明治三十五年三月、春陽堂から刊行された。三島由紀夫が「浪漫主義の傑作」(『日本の文学』4 尾崎紅葉・泉鏡花「解説」中央公論社、昭44・1)として高く評価した作品である。富山の花売りの美女お雪、子爵で特異な眼力をそなえた少年千破矢瀧太郎の二人が、禁忌を犯して立山、石瀧いわたまの山中他界に参入し、黒百合を入手、帰還する前後を描いた作品で、筋立ては、勇美子の依頼でお雪が黒百合の採集に向かうプロット、白魚のお兼の勧めで瀧太郎が黒百合の採集に向かうプロット、若山・お兼らが太洋への進出を図るプロットの三つからなる。内容は、以下の通りである。¹⁾

① お雪は、県知事の娘勇美子の依頼を受け、謝礼の「百円」を恋人若山実(春陽堂版『鏡花全集』以降は、拓)の眼病の治療費に充てるために、石瀧の山中他界におもむく。²⁾

② 瀧太郎は、旧知の女賊白魚のお兼の勧めで「日本晴れの盗賊」になる手始めに、同じく石瀧の山中他界に参入、若山は、夢の中で、黒百合を手にした雪と瀧太郎が、蝶の大群や不思議な牛の群れに遭遇、再三大鷲が襲来するのを見る。

③ 下界では二人が禁忌を犯したために、大雨による洪水が発生、帰還した二人は若山とともに洪水に押し流

され、お雪が犠牲となる。

③ 勇美子は、洪水の引き水を漂う黒百合を拾い、願いを叶える。

④ 数年後、「帝国に籍を置かぬ一艘の冒険船が、瀧太郎をのせて、実お兼等が乗組んで、太洋の波に浮ぶ時ハ、必ず此の黒百合を以て船に号なごくるであらう(初出)というように、瀧太郎や若山らが山海の至宝を求めて、太洋に向けて冒険の旅に出ること、彼らの乗る船が黒百合と命名されることを予告して終る。

執筆時期は、明治三十二年五月の「新小説」、「▲個人の情報」に、「泉鏡花氏 湖のほとり続稿を綴る外、一大長編に筆を着けたりとか」とある「一大長編」が『黒百合』をさすと思われることから、五月には始まっていたものと考えてよい。加賀版の『水滸伝』をめざす『湖のほとり』(『新小説』明32・4)に続いて発表された『黒百合』は、窃盗の悦楽に耽る瀧太郎が、冒険者になる契機を記す悪漢小説としての一面や伝奇的な要素がある。³⁾

先行研究として、『絵本太閤記』の小百合姫惨殺にかかわる黒百合の伝承との関連を検証する野口久美「『黒百合』論―鏡花的聖域の創造―」(『上智近代文学研究』昭58・8)、「冒険船の存在が暗示される形でテクストが閉じられた」理由を、同時代の「冒険」をめぐる言説、「物語」を形成していく同時代の〈視線〉のあり方との関連から考察する西川貴子「『冒険』を語り出す場―泉鏡花『黒百合』試論」(『日本近代文学』平14・5)、山中他界の場面を中心に若山の盲目を考察する沼田真里「盲目と鏡花文学」(『日本文学誌要』平17・7)がある。『黒百合』を『蛇くひ』(『新著月刊』明31・2)の続編と見て、モチーフの展開を追う上田正行「鏡花『黒百合』考―立山と洪水」(『山から見た日本海文化』平19・8)は、本作を「愛の物語」、「地獄巡り」の「洗礼を受けて新しく3人が転生」する「死と再生の物語」と見る。作品の成立背景について、越野格「(越中もの)の空間性(その1)―『蛇くひ』から『黒百合』へ」(『福井大学』国語国文学』平8・3)は、「立山の信仰性と異界性、佐々成政を始めとする富山の歴史、稗史、口碑伝説、そして俗謡等」

の存在を指摘し、「直接的には、安政五年の大洪水、明治二十二年の水害がその創造の契機になった」と推定する。拙稿「泉鏡花の〈越中もの〉について——『義血俠血』『黒百合』『湯女の魂』を中心に——」（『日本文学研究年誌』平15・3。前稿「越中もの」の素材）は、越野論文を継承して、山中他界の場面に、立山開基伝承や山東京伝「善知鳥安方忠義伝」、『和漢三才図会』などが記す立山地獄からの撰取があることを指摘した。また、『新編 泉鏡花集』第九巻「解題」〔平16・6、岩波書店〕において、富山県知事が、鏡花が富山に滞在した当該在職した第二代藤島正健であること、石瀧の山中他界のイメージについて、同県内にある大岩の日石寺が想定できる可能性を指摘した。

『黒百合』には、解明すべきことが少なくない。知事の娘勇美子のモデルの有無や、冒険船出帆を描いた先行作品との関連、山中他界の瀧太郎と雪を若山が見た夢の中で描く意味と冒険船の出帆に終る巻末も課題に数えられよう。この問題については、西川論文が、理学士若山の観察を中心とする視線が、夢の中で揺らぎはじめ、雪を守る瀧太郎への畏敬が生じて、「失神した雪を抱えて駆ける瀧太郎に寄り添う形」になるという変化を指摘、夢が「物語として再話されることもないまま残されていく」点に注目して、博物学的な知識や「国家の論理」の枠組みの中では「物語」化されない黒百合採集という出来事の先に「冒険」という意味を与えることで、「同時代の〈飼い馴らされた冒険〉」から「解放しよう」としたと指摘している。また、冒険船の出帆については、上田論文が、矢野龍溪『浮城物語』（明23・4、報知社）を「踏まえている」としか考えられない」と指摘しているが、これらについても改めて検討する余地がある。

小稿の目的は、先行研究の指摘を踏まえて、県知事の娘勇美子のモデルや冒険船出帆を描いた先行作との関連を中心に『黒百合』の生成を検証し、山中他界における雪と瀧太郎を若山が夢の中でみる意味と黒百合号出帆を予告する巻末との関連を考察することである。

なお、本文の引用は、初出による。

1 県知事の娘勇美子のモデルについて

『黒百合』作中、知事の娘勇美子は、次のように紹介されている。

去年父母に従うて此地に来たが、富山より、寧ろ東京に、東京より寧ろ外国に、多くの年月を経た。父は前に
 仏蘭西の公使館づきであつたから、勇美子は母とともに巴里に住んで、九ツの時から八年有余、教育も先方で
 受けた。

右のように、勇美子は、父が「仏蘭西の公使館づき」であった関係で、九歳から八年あまり「巴里」に住んだとされている。『黒百合』のテキスト内の時間は、「俱利伽羅鉄道」の工事への言及があることから明治三十年前後と考えられる。この頃、富山県知事の職責を担ったのは、第五代安藤謙介（明29・4～30・4）、第六代知事石田貫之助（明30・4・7～31・2・5）、第七代阿倍浩三（明31・2・5～8・3）、第八代金尾稜巖（明31・8・3～33・1・19）の四名である⁴。しかし、いずれの経歴を見ても、「仏蘭西の公使館づき」であったことはない。初代知事の国重正文以下では、前章で指摘した通り、第二代知事藤島正健がこれに近い。

藤島は、弘化二（一八四五）年生まれで熊本出身、明治五年官界に入り、十七年四月初代領事としてフランスの里昂に赴任した⁵。帰国後、大蔵書記官、銀行局長を経て明治二十一年十月二十九日から二十三年七月二十五日まで富山県知事を務め、千葉県知事に転じた。注目されるのは、鏡花が富山に住んだ明治二十二年当時の知事が藤島であったことだ。鏡花は、当時の知事が「フランスへ赴任」したことを知っていたのだろうか。

藤島には、実際一人の娘があった。名前は、雪子という。雪子は、明治二十九年二月、歌人佐々木信綱と結婚した。三重県鈴鹿市にある佐々木信綱記念館刊行の「佐々木信綱資料館図録」(平13・3)及び「佐々木信綱とふるさと鈴鹿」(平2・3)などによって、雪子の生い立ち、結婚前後をたどれば、次のようなことがいえる。

図録掲載の「雪子入籍届」(神田区長宛。信綱筆。明29・2・13付)によれば、雪子は、「熊本県託麻郡本山村六百三拾八番地／士族藤島正健長女」で、明治七年一月二十九日生まれ、戸籍名は「ユキ」である。明治六年十一月四日生まれ、鏡花とはほぼ同年、二か月余り遅い生まれである。また、同図録掲載、「雪子の謝辞草稿」の「解説」に、「雪子の父、藤島正健はフランスのリヨン領事であったので、任地で小学校教育を受け、帰国後、東京の明治女学校で学んだ」とあり、「卒業生総代」として読んだ「謝辞」(明治24・25年頃)の写真が掲載されている。また、「佐々木信綱略年譜」(佐々木信綱とふるさと鈴鹿 平2・3)の明治二十五年の項に「この年と前後して、橘糸重・大塚楠緒子・藤島雪子らが入門する」とあり、二十九年の項には、「長男と一人娘との清純な恋愛を貫徹する。媒酌は徳富一敬、二人の良き理解者であった徳富蘇峰の父」とある。

雪子は、明治女学校卒業前後、大塚楠緒子らと同時期に信綱の歌塾の門人となり、明治二十九年二月、和歌の師と恋愛結婚したものである。翌年二月には男子を出産、「逸人」と命名された男子は、「母方の藤島家を継」いだという。このことから、雪子は藤島の「一人娘」であったことが推測できる。

このように、『黒百合』の勇美子のモデルは実在した。花売り雪子の名前は、知事の娘の実名を転用したことがわかる。「ゆみこ」と「ゆきこ」は子音一語の異同があるだけであり、勇美子にもモデルの名前が反映しているだろう。注目されるのは、春陽堂版『明治大正文学全集 第十二巻 泉鏡花』(昭3・9)所収「著者年譜」原稿に、富山滞在時について、次のような一節があることである。

知事の官宅其他に出稽古を試む、佐々木信綱夫人は当時の教え子の一人なり

(泉名月氏旧蔵 泉鏡花遺品展 図録参照、泉鏡花記念館、平25・10)

右のように、鏡花は、知事令嬢の家庭教師で旧知の間柄であった。

信綱との結婚前後、雪子は、閨秀作家として詩・小説・随筆などの作品を発表している。管見では、明治二十六年六月に『家づとに』を「家庭雑誌」に発表したのを皮切りに、十、十一月『浜なでしこ』上・下、二十七年七月『幼き兵士』を発表している。いずれも、新体詩である。『家づとに』は、木の下影で唄う幼子の傍らで労働する貧しい母の情愛を描き、『浜なでしこ』は、失踪した兄が「手折りし花」と聞く浜なでしこを手に、毎日葉山海岸にやってくる「少年」を唄う。また、『幼き兵士』は、出征した父を想う兄弟の敵愾心を描くもので、日清開戦の世相を反映している。

翌二十八年二月に『父母の恵』(上・下)、五月には『病中日記』、六月～八月『楽しき旅』、九月に『椎の木』、十二月には『寿賀の君』などの随筆や紀行文を「家庭雑誌」に発表した。『父母の恵』は、父からもらった「皮の手箱」に入れた「紀念」から「過こし方」を振り返った回想、『病中日記』は、タイトル通り数日間病床にあった事情を、自作の和歌を交えて綴った随筆、『楽しき旅』は、京都出張中の父を訪ねて、博覧会や京都の名所を訪ねた紀行文で、父正健や雪子自身の詠んだ和歌十一首を含む。『寿賀の君』は、母方の大伯母横井小楠の未亡人に長年仕えている老婦人の人となりを紹介した随筆、さらに『椎の木』は、洪水で取り残され、救助直前に行方不明になった少年を描いた小説というような随筆や小説を発表するようになる。

雪子が、「家庭雑誌」にこれらの作品を発表したのは、雑誌の発売元、民友社を率いる徳富蘇峰との関係によるだろう。雪子の父正健の急死を追悼する野田男爵談話「藤島正健氏を憶ふ」(心の花 明37・11)に次のような一節が

ある。

氏の母は矢島氏の出なり、姉妹の一人は横井小楠先生に嫁して、時雄氏、海老名夫人を生み、一人は徳富一敬翁に嫁して、猪一郎氏、芦花氏を生み、一人は明治に於ける女子教育を唱道吹鼓し、現に女子学院の校長たる矢島楯子女史たり、一人は熊本女学校を創立せし竹崎夫人たり、

右のように、正健と徳富蘇峰は、母親同士が姉妹で、従兄弟にあたる。正健のほうが十八歳年長である。付言すれば、雪子の父正健の母茂登子は、矢島直明・鶴子夫妻の娘で、徳富蘇峰の母久子の姉(次姉)である。蘇峰の母は、四女で、前引『寿賀の君』に登場する大叔母は、横井小楠と結婚した妹(五女)の津世子をさす。佐々木雪子「西片町より」〔『竹柏漫筆』昭3・6〕の引用する蘇峰「陳言一則」〔『文芸春秋』年不明・8〕には、正健について、「藤島は吾母の姉の子にして、齡は予の兄弟と云はんよりも、殆ど父子の相違があつた」。「予とは互に相許し、親類中の親友と云はんよりも、親友中の親類であつた」とあり、「予には何事も打明け、何事も相談した」とある。明治九年、十三歳の蘇峰が初めて上京した時滞在したのが藤島家であり、蘇峰が正健と親しいのも頷ける。雪子の文才についても、「相談した」ものと思われる。

雪子は、二十八年十一月に、博文館の雑誌「少年世界」の「少女」欄に『千なりほ、づき』を発表、十二月には、三宅花圃・若松賤子・樋口一葉を始めとする女性作家の力作を集めた「文芸倶楽部」〈臨時増刊閨秀小説〉に『手箱の内』を発表した。翌年七月の「文芸倶楽部」臨時増刊海嘯義捐小説には、短編『權の雫』を佐々木雪子の名で発表している。七月には、「少年世界」に同じ筆名で『みい坊の手紙』を掲載している。

民友社から博文館に活動の幅がひろがったが、三十年二月出産後は閨秀作家としての活動は息を潜めたようだ。明治三十七年四月からは「心の花」に随筆「灯火のもと」を毎号執筆している。⁶⁾

雪子の作品の中で、明らかに『黒百合』との関連が認められるのは、『父母の恵』と『手箱の内』である。『父母の恵』は、末尾に「明治二十八年二月七日」とある。摺筆の日付であろう。『手箱の内』は、『父母の恵』と内容的には全く同じで、タイトルを改めた他、表現や用字の訂正がある。『父母の恵』を鏡花が読んだかどうかは不明だが、『手箱の内』を掲載した「文芸倶楽部」発行時、鏡花は発行元博文館の編集部にいたし、〈閨秀小説〉について「新潮座談会」〔新潮〕大14・4で鏡花自身が、「あの時は閨秀小説が売れて憤慨したね」といい、「閨秀小説に、それに出たんですね一葉の『十三夜』は……」と語っており、通説した可能性が考えられる。

『手箱の内』は、木枯らしの吹く夜、父からもらった革製の手箱に収納した愛蔵の品々(玉づき、葦の花束、写真、扇、梅の花貝、萩の小枝等)を「われ」が紹介しながら、フランスのリオン、富山、千葉、逗子の順に、雪子の過ごした思い出深い場所とそれぞれの土地で交流のあった人々の思い出を語り、思い出の品々を紹介した随筆風の短編である。最初に「みどり色のリュボンもて結びたる玉づきカルト」を紹介し、「十才」の「十一月の末」父の赴任した「仏国リオン府」に向かつて母と航海し、「リオン」の小学校に通学したり、植物園や動物園を訪れた思い出、「十二」歳の時、帰国に際して先生や級友が開いてくれた「送別会」のことなどを語る。「玉づき」は、「殊に親しかりし友が、我が国にかへりてよりおこせし文ども」で、「富山に在りし頃ま」までは「文のゆき、」があったという。雪子は、十歳(明17)から十二歳(明19)までリオンで生活し、現地の小学校に通学していたようだ。帰国後、富山に住んだ頃、つまり、明治二十一年(15歳)から二十三年(17歳)のころまでは、文通が続いていたものと考えられる。

『黒百合』との直接的な関係が考えられるのは、これに次ぐ富山の思い出を語った一節である。やや長いが、全文を紹介する。

しをればはたる莖の花束は、富山なる花売り娘のおくりものなり。富山に移り住みて、学校に通ひし頃、かしこにては貧しき家の子のみを集めて教ふる学校、殊更に設けられてありき。そこに通ふ子の内に、朝とく学校に行く前に、花めせ花めせと、ちまたを売りありく幼なきをみな子あり。年八十三四なりしならむ。日々同じ頃同じ道にて逢ひしかば、いづこの子とは知らねど、風ふく日も雨ふる日も小さき籠を肩にして行く彼を見るごとに、いたくいとほしと思ひあたり。名にしおふ越路の北風身を切るごとく吹すさび、雪いと高く降つめるあした、かれに出あひしに、あ、今朝は少しも売れぬ事よと、悲しげに独ごち行くが、あまりのいとほしさに、かれを呼びとめて、今日夕つ方に我家にこよ、母君にこひてあがなひてむ、必らず来よといひて別れき。学校はて、家に帰り、此由母君に告げまつりしに、そは哀なる子よとのたまひぬ。いかにしけむと待あたる程、茶の花水仙などをたづさへて、いと耻かしげに、くりやの方に来たりぬ。そを皆もとめて、父はありや、母はと問ふに、家には年たけたる父一人あり。老の病に打臥しをれば、薄き煙のしろにもと常に花をうりありき、暑き比は水を売りてなど語る。母君も聞まして、いたくあはれがり給ひ、それよりは日毎に何くれの花を、いささかよき値もてあがないやりぬ。学びの道に志ふかきをあはれびて、わが使ひたる教科書、草紙、筆墨インピツなど与ふるに、いたく喜ぶを見て、我も嬉しかりき。父君、千葉に転任し給ひしかば、家をあげて東京に帰らんとしける前の夜、かの女は訪来て、溢る、涙を袖におさへつ、別を惜みたりき。其折に、この花束は、わが心をこめ侍りて、色よき花の限りをあつめしなればとて、おこせしなり。それより後、年の始めには必ずふみをおこせぬ。年毎に筆の跡もうつくしうなりまされり。あはれ、過ぎさりし時の事は忘れはつる人少なからぬに、わづかばかりの情けを忘れぬ心のいとほしやと、母君も折々のたまひつ。今はいかにして暮らしてあるらむ。われは心まめにすなほなりし彼をみな子の、幸運あらむ事を遙に祈るなり。

(資料一)

右のように「われ」は、富山滞在中、貧しい十三四歳の花売りの娘に同情して、花を買い求めただけでなく、教科書や文房具を与えて慈しみ、上京前に娘が心づくしの莖の花束を贈ってくれ、別れを惜しんだこと、上京後も年賀状のやり取りがあったことを語っている。

『黒百合』の花売りの娘お雪は、第二代富山県知事の娘で閨秀小説家の一人である藤島雪子が自らの交友の思い出を回想した『手箱の内』に登場する「花売娘」に基づくものとみてよい。『黒百合』では、旅先で「不残金子を奪はれ」た上に、眼病を患って私塾も閉じ進退窮まった若山のために、雪は花売りをして助ける。雪の設定は、『手箱の内』で父が「老の病に打臥し」た家計を助けるために花を売る「十三四」の「幼きをみな子」、「心まめにすなおなりし彼のをみな子」に拠るだろう。『手箱の内』の病床に臥す花売りの父を、『黒百合』では、眼病を病む恋人に改めたものであろう。

また、『黒百合』作中で、勇美子は、植物に深い関心を持っているという設定で、黒百合を採集して、同好の「友達に、由緒を書いて贈りたい」と考えている。藤島雪子が植物を愛好していたかどうかは、さだかではない。知事の官宅に「出稽古」に赴いた鏡花は、邸内についても、雪についても、知っていたと考えるのが自然である。何らかの反映はあるだろう。『手箱の内』には、「リオン」滞在時「たけ高き常盤木」や「かをりよき草花ども」を植えた公園を訪ねたり、「植物園をものして暖室の内に入り、時ならぬ花のかをりみてるを愛」でたという一節がある。こうした記述を踏まえて、邸前に「故と鄙めいた」「花壘」を「詠」え、自室を「芳しい草と花」で満たして、植物の標本を棚に並べる知事の娘勇美子を構想した可能性はあるだろう。冒頭、勇美子を訪ねた瀧太郎が、邸の食客島野に在宅かどうかを尋ねて「学校は休みか知ら」と問うように勇美子が学生である点も、「富山に移り住みて、

学校に通ひし頃」とある『手箱の内』に等しい。

黒百合採集には、勇美子だけでなく、「仏蘭西の友達に贈るのならばつて、奥様も張込んで、勇美さんの小遣にうむと足して、ものの百円ぐらひは出さうといふ」というように、母親も娘の企図に理解を示している。この点についても、『手箱の内』で、富山の花売り雪の積もった町で、花が売れないのに同情した「われ」が、「此由母君に告げまつりしに、そは哀なる子よ」というように、母も哀れに思い、娘の境遇を知った母親が、「いたくあはれがり給ひ、それよりは日毎に何くれの花を、いささかよき値もてあがないやりぬ」とある。『手箱の内』の娘に共感する母親を作中に取り入れたことが考えられよう。さらに、『手箱の内』で帰国後も、文通を続けているという一節も「仏蘭西の友達に贈る」という設定に反映しているであろう。藤島雪子が、富山の花売りから送られた莖を、鏡花は石瀧の山中他界に咲く黒百合に改めたのであった。

このように、『手箱の内』の富山時代の回想だけでなく、フランス滞在時の出来事や帰国後の友人との交流をも含めて、『黒百合』に取り入れていると考えられる。鏡花は、旧知の知事令嬢が発表した『手箱の内』を読んで、富山滞在時を改めて想起し、実際に見聞したのであろう洪水の記憶と併せて、知事の娘と花売りの関わる物語を構想していったのではなからうか。⁽⁷⁾

2 冒険船のモチーフ、三島霜川「黄金窟」の影響

結末から明らかなように、この作品には、矢野龍溪『報知異聞 浮城物語』から森田思軒『冒険奇談 十五少年』(『少年世界』明29・3～10)・江見水陰『海の秘密』(春陽堂、明30・12)、押川春浪『海島冒険奇譚 海底軍艦』(文武堂、明

33・11)に連なる「海洋小説」に通ずる一面がある。⁽⁸⁾ 冒険船の出帆は、「第三十九」で、白魚のお兼が瀧太郎に「大海の中だの、人の行かない島などには宝にしろ、景色にしろ、甚麼な結構なものがあらうも知れぬ、而して見つかれば大びらに盗んで可いのさ」と語って「連判状の筆頭」につくよう要請する以前から計画されているに違いない。若山とその父の非職海軍大佐や白魚のお兼・慶造などに瀧太郎を新たに加えた一団が結集して冒険の旅に出るプロットは、作品の中盤以降で浮上している。彼らが探索する「宝物」は、「山の霊、水の精、またお天道様が大事に遊ばすもの」、「秘してあるもの」で、瀧太郎が山中他界で黒百合を採集する行為も、数年後と予告される冒険の先蹤を意味する。

前掲の西川論文は、日清戦争後の明治三十年代は、「冒険」「探検」をめぐる様々な言説が交わされるとともに、『冒険』を描いた西洋小説が多数訳述され、それを模倣しつつ「冒険小説」が著述されていた時期」であると指摘する。この作品にも、『浮城物語』以降の同時代の「海洋小説」・「冒険小説」の影響を考えていいだろう。

『黒百合』に影響を与えた可能性のある作品として、同じ三十二年一月一日から三月十七日まで四十三回にわたって、新聞「人民」に連載された三島霜川『黄金窟』(中絶)を考えたい(資料2)。

『黄金窟』の作者、霜川と鏡花について、霜川の親友秋声は、「思ひ出るま、」(『文芸春秋』昭9・10～11・1)で、次のように記している。

氏(引用者、注、霜川)は又四高へ入るつもりで、郷里の越中から金沢へきてみた時代があつて、金沢で鏡花氏や亡涼葉など、相知り、文学熱に感染した(中略)鏡花氏は霜川氏のことを、其父から享継いだ剛頑と気格のたかいのとで馬鹿にしてゐた。

秋声によれば、鏡花は、同じ紅葉門下の田中涼葉とともに、金沢で霜川と知りあった。その時期については、『明

『治文学全集』第七十二卷（筑摩書房、昭44・5）所収「三島霜川」の「年譜」（伊狩章作成）に記載がある。同年譜では、鏡花が霜川と知り合ったのは、明治二十六年のこととしている。この年鏡花は、八月から十月末まで帰郷しており、同時期に田中涼葉も帰郷していることは、十月二十二日付「北國新聞」の「○紅葉山人の来沢」に「読売新聞社員尾崎徳太郎氏（紅葉山人）は明日来沢の筈にて宿所は味噌蔵町下中町田中氏方なるよし」からわかる。霜川は、二十七年九月に上京、二十八年、涼葉を介して徳田秋声と親交を結んだ。秋声・涼葉らの紹介で、明治二十九年に霜川は尾崎紅葉の門下となる。前年九月、桐生悠々が法科大学入学のため上京、霜川は、鏡花の弟斜汀と共に、悠々から英語を学び、三十年には悠々の下宿に入った。翌年八月には、悠々の紹介で処女作『埋れ井戸』を「新小説」に発表、次いで紅葉の紹介で『ひとつ岩』を「世界之日本」（明32・4、5）に連載、「世界之日本」の主幹竹越三又との関係で新聞「日刊人民」に入社して、三十二年一月一日から『黄金窟』を連載したのだった。

このように、鏡花は、明治二十六年八月以降に霜川と金沢で知りあい、霜川が紅葉門下となった上に、悠々を介した弟斜汀と霜川との関係も生じ、往来は少なからずあったものと思われる。紅葉の自宅裏の借家に開設された十千万堂塾（詩星堂。明29・12、32・2）などを通じた情報のやり取りも考えられる。『黄金窟』連載中の明治三十二年一月五日付「人民」の「文壇消息」には、「新小説」掲載予定作品として、「鏡花の湖の畔」^{あせ}があげられている。『水滸伝』を念頭に置いて、故郷を舞台に『湖のほとり』を構想執筆していた鏡花が、霜川の初めての新聞連載『黄金窟』を知り、関心を抱いた可能性はあるのではなからうか。

『黄金窟』は、「（二二五）・（二二六）」で前後に分かれる。前半は、「国領に真白に雪を被^か蔽^ぶつて鋸の歯の形した立山」を望む有磯海の漁村二髪村、後半は、「半島の最つばずれ、削り下ろされたやうな絶壁の上」にある「能登守」の居城「霞の城」を舞台にしており、富山湾岸から能登半島先端にかけての一带が想定できる。

作品の構成は、次の通りである。

〈前半〉

- ① 二髪村の頭領、三保右衛門は、腹心金八に出漁を命じた後、三之助の縄を解いて炉辺で事情を聞く。難破して火見村の指導者灘五郎に助けられた三之助（佐渡生まれ）は、灘五郎から頼まれて三保右衛門の弟太郎の妻藻塩の誘拐を依頼、三之助は、誘拐に失敗して捕えられたのであった。
- ② 三之助は、金八を金で籠絡したことを告白、自若として首を斬れと求める。三保右衛門は、その姿に心を動かされ、仲間に加わるよう求める。
- ③ 三保右衛門と太郎は実の兄弟ではなく、藻塩は、三保右衛門が「身に換へて擁護ふ」姫である。三保右衛門には「心の奥に秘め」た「大望」があつて、村人もその成就を目標とし、「千畳が窟」で大仕事をしている。
- ④ 火見の輩と喧嘩になったという知らせを受けて、三保右衛門は、三之助に母の世話を頼んで、漁場に急ぐ。
- ⑤ その日の夕方、藻塩と小舟で巖窟に戻ってきた太郎は、三之助が笛を吹いていると知り、殺害を図るが、海に転落、行方不明となる。
- ⑥ 藻塩が三之助を刺殺しようとした時、二髪村から火の手がある。火は、見る間に村中を焼き尽くした。三之助が、三保右衛門の母を救出してもどると、藻塩は黒装束の大男たちに連れ去られていた。
- ⑦ 翌日、村から半里離れた無人島の「千畳が窟」に家を焼失した村人が集まる。
- ⑧ 三保右衛門の母を同行した三之助は前日の出来事を語り、太郎の菩提を弔い、藻塩を探す旅に出る。
- ⑨ 三保右衛門の指揮のもと、村人は窟の内で建造していた「巨大の親船」毘沙門丸を漕ぎ出して日本海に乗り出す。

〈後半〉

- ① 海に転落した太郎は、失神して浜に漂着し、「大事な客分」だという金八の声を聞き、なぜ金八がそこにいるのか不審に思う。
- ② 間もなく捕手が寄せ、霞の城に連行される。金八は、太郎が能登の前御領主「神保和泉守」の「遺児」だと証言、太郎は、獄屋に幽閉される。
- ③ 二日後、太郎は、「大洋の涯」に毘沙門丸の「盛装した雄姿」を見て驚く。それは、「渠が半生の心血を灌いで組立てた船舶」であった。
- ④ それから二十年。三月のある夜、太郎の獄屋に下の獄屋の老僧が密かに穴を掘って訪ねてくる。
- ⑤ 老僧は、赤堂山の半腹にある興泉寺の住職玄空と名のり、前領主和泉守から黄金「一億三千万両」の「在所」を教えられたが、「能登守」に「黄金の在所」を教えなかったために幽閉されたという。
- ⑥ 「和泉が残党」だと太郎がいうと、死期を悟った老僧は脱出の方法と「宝の在所」を教える。翌日、老僧が亡くなり、獄卒が「棺の中へ抛り込むで、海の潮に与らしたらば、魚奴の好い餌」になるだろうと相談しているのを耳にする。(未完)

この後は、太郎が、「棺の中」に入って霞の城を脱出して毘沙門丸に合流し、佐渡島の黄金窟で秘宝を手に入れ、藻塩と再会し、「能登守」とその配下の者を討つという筋立てで、お家騒動と敵討ちと恋の成就を描く作品と考えられる。¹⁰⁾

作中の二髪・火見・赤堂山は、二上・氷見(富山県)、石動山(石川県)であろう。冒頭に「立山」への言及があることから明らかのように、『黄金窟』は、『黒百合』同様、富山県を舞台とした作品で、大型船に同志が乗り込んで

船出する点も一致する。毘沙門丸は、「唐、天竺は魯おろかなこと、娑婆の涯までも、憂慮なしに航わたれべえ」(二十二)といわれ、「八千石は積れる」という「巨大の親船」である。太郎合流後の毘沙門丸は、玄空の教えた黄金を求めて佐渡島に向かうことが考えられる。作品の舞台と大型船の出帆が共通する。この他、『黄金窟』を、『黒百合』と比較すれば、次のようなことがいえる。

〈冒険の目的〉

『黒百合』では、「第三十九」から「第四十一」でお兼がいうように、「大海の中だの、人の行かない島など」にあるだろう「珍らしい不思議なもの」、「山の霊、水の精、また天道様が大事に遊ばすもの」で、「金でも権柄づくでも叶わない」もの、「大びら」に盗んでも、「人は誰も咎めない」ものの入手を企図している。これに対して『黄金窟』の「一億三千万両」の黄金は、前領主の隠した埋蔵金で、能登守と戦うための軍資金を意味する。一見、「珍らしい不思議なもの」を求める『黒百合』とは一線を画するようにみえる。しかし、『黄金窟』(二十一)で三保右衛門は、「人間と生まれて高いも低いもあつた事か、何んの領主の殿様ばかりが果報目出度く生れて来たと羨む事もねえ、一天四海放し飼、斯の広い世界に、楽しんで暮らす棲屋が無えと定まつた事もねえ」といい、「うぬが腕でうぬが稼いで、足腰伸ばして力だけの楽して暮すに、何んの年貢も御用金も要る事かえ」と述べている。このことから明らかのように、毘沙門丸は、「領主の殿様」などの支配、束縛を受けない独立した存在として位置づけられている。それは、『黒百合』末尾の初出・初刊の「帝国に籍を置かぬ」冒険船黒百合号の設定に通じるだろう。

〈大型船の建造〉

『黄金窟』(三十三)で、毘沙門丸の「雄姿」を見た太郎は、建造の理由を次のように述べている。

自分が新故郷とも楽土とも思設けて、其の中には穏やかな一家……、春の醇酒に酔ひたらん如き心地で、藻塩

と共に暖で而して幸多起臥すべき一家を作るべく期つて、殆ど其成や否やを以て、(中略) 渾身の熱情と而して希望は、挙げて其の中に叩き込み、虎の如き勇氣、熊の如き忍耐、而して猿の如き敏捷を以つて竣工せしめた右のように、毘沙門丸は、藻塩と太郎を中心に形成される幸福に満ちた理想の家、独立した「新故郷」の形成を約束するものといえよう。「俺ん共が本望遂げやうには、」(二十四) という「本望」は、おそらく、圧政者能登守に代わり「楽土」を創出することで、あらゆる支配の束縛を離れて航行する点は同じだが、「大海の中だの、人の行かない島など」にあるだろう「珍らしい不思議なもの」を求め行爲そのものに意義を見出す『黒百合』とは異なるようだ。

〈洞窟〉

霜川作のタイトル、『黄金窟』は、文字通り、黄金の隠し場所を意味する。「(四十二)」によれば、「佐渡ヶ島」の相川とかいふ港」から「一里ばかり隔たった」山の麓の洞穴にあるという。具体的には、以下のように記されている。

其の洞穴の、奥の奥の行窮つた箇所第一の関門……壁のやうに見えるとかいふたが、そこを崩すと、辛わづか而に匍匐になつて行かる、ほどの穴が掘つてあるといふこと。其処を半町ばかりも奥へ進むと、再行窮つて、今度ハ砂もて塞いであるげな、……砂を除けると、裡はひろくとした洞穴とか聞いた

右のように、「黄金一億三千万両」(三十八)を隠した洞窟は、大小大の穴からなる三層の特殊な構造になっている。この洞穴に相当するのが、『黒百合』で瀧太郎が盗品を隠している「洞穴」である。「湯の谷なる山裾」で、「其の昔は温泉が湧出たといふ、洞穴」の「入口は花室」で、「洞の中」は広い。お雪の売る「早咲きの秋草」が置かれている。「突当りから左へ曲がる真暗な処を通つて身を細うして行くと忽ち広」くなる。瀧太郎の盗品は、筵や藁紙や布を広げて「数へても尽され」ないくらい並べられているという。「身を細うして」は、狭い通路を意味する

だろう。『黄金窟』同様、三層構造になっているといえよう。『黒百合』では、神通川と立山の地獄谷の音が「一所になつて聞える」大瀑布が洞窟の奥にあるという点が際立っている。白魚のお兼は、「地獄谷とやら、恁麼恐い音のする、其の立山の底に秘してあるものもあらう」といい、黒百合に言及する。お兼の属する特異な集団にとつて、この洞窟も、彼らの求める「宝」の隠し場所に相当するのである。

〈航海の指導者〉

この他注目されるのは、冒険航海の中心に二人の人物がいるという点である。『黄金窟』の毘沙門丸では三保右衛門と太郎、『黒百合』の黒百合号では瀧太郎と若山である。毘沙門丸は、太郎が「半生の心血を灑いで組立てた船舶」で、太郎が巖から海に転落したことを聞いた三保右衛門は、一度は「太郎が死んで了うては、斯の船にも斯の身にも些とも用はない、斯の船焼いて、俺も腹掻割いて」とまで思う「(二十四)」。二髪村の村人は、太郎についても「太郎の頭領」(二十三)と呼んでおり、太郎の合流後は、三保右衛門と太郎が村人の乗船する毘沙門丸を率いるものと考えられる。

黒百合号では、元海軍大佐であった若山の父や慶造、白魚のお兼、凶状持ちなどの同志・仲間多数が黒百合号に乗り込むことが予想されるが、冒険の中心になるのは、若山と瀧太郎であろう。瀧太郎は、「連判状の筆頭」につくことを期待されている。若山は、「船の行く処は誰が知つてる、私だ、目が見えないでも勝手な処へ指揮をして遣る」というように、天下の至宝のありかに「行く」ための「指揮」を執る役割を果たすであろう。また、瀧太郎は、「重瞳」で、常人にはない眼力がある。黒百合号を動かすのは、若山の父、「錨を抜くの」のは慶造だというが、「大海の中だの、人の行かない島など」にある「珍らしい不思議なもの」を手に入れる中心になるのは、若山と瀧太郎であろう。二人の人物を中心とする冒険を示唆する『黒百合』に『黄金窟』の三保右衛門と太郎の設定が踏まえら

れている可能性がある。

上述のように、『黄金窟』が連載された明治三十二年一月から三月、鏡花は、明治の『水滸伝』を構想し、執筆していたものと考えられる。そんな時、馴染みのある富山から始まり、日本海を舞台にした『黄金窟』の構想は、大いに興味を掻き立てられるものではなかったか。前引の上田論文が三十一年二月発表の鏡花『蛇くひ』について、『水滸伝』を踏まえた作品だと指摘していることも、念頭に置いてよい。鏡花は、『黄金窟』の海に対する山の物語としての『黒百合』を構想し、立山、石瀧山中の山中他界の黒百合採集を手始めに、「珍らしい不思議なもの」、「山の霊、水の精、また天道様が大事に遊ばすもの」で、「金でも権柄づくでも叶わない」もの、「大びら」に盗んでも、「人は誰も咎めない」ものを求めて船出する以前の物語に転成したのではなからうか。

以上を踏まえれば、『黒百合』生成の道筋は、次のように捉えられよう。『湖のほとり』を構想ないし執筆していた明治三十二年初頭、鏡花は、三島霜川『黄金窟』の作品の内容・展開を知って、『黄金窟』を転成する物語を構想した。『黄金窟』の日本海に対する立山の物語、同じく佐渡の「黄金」に対する山の花(黒百合)の物語、洞窟の中の黄金ではなく、天地自然の秘匿する至宝を探索する冒険譚である。

転成に際して、自身の富山滞在に重なる旧知の知事令嬢藤島雪子『手箱の内』の貧しいながらも可憐で殊勝な花売りをモデルに、雪子が富山の花売りから饒別にもらった葦の花を、『絵本太閤記』などが描く早百合の成政への怨念を表す黒百合に代え、立山信仰にかかわる伝承や先行文芸の記述を石瀧の山中他界に取り入れて、独自の作品世界に結実させたのではなからうか。

3 山中他界の夢

最後に、若山が山中他界の夢を見る意味を冒険船出帆との関連を検証する。

はじめに、夢を見る以前の若山についての記述を整理する必要があるだろう。

「第五十」の若山と慶造との会話から、非職海軍大佐の某氏の子である理学士若山は、「父と、もに社会の暗雲に蔽はれ」た。そのために、父は入獄し、「三月が満期」で、無事出獄し、現在は「組合の方」で引き取り、「旗上げ」の日を待っているという。若山は、富山に来て三年目だという点から考えて、父も同年の懲役を科されたものと考えられる。「此方でも新聞がございますなら、疾くに御存じでございましょう」というように、出獄が報道されたなら、「社会の暗雲に蔽われた」際も、事件として報道されたに違いない。若山は、「私が考で、家を売り、邸を売り」というように、家邸を売って債主に何がしかの返済をしたという。大きな事業を企図して、失敗し、債務を負ったものと想像できる。

「第十六」によれば、「一昨年の秋、此の富山に来」た若山は、「旅店に一泊」した際、盗賊に全額を奪われた。地方裁判所検事の世話になり、私塾を開設、「教子も多く、皆敬ひ、懐いて居た」が、「日も経たず目を煩つて久しく癒えない」というように、私塾開設からほどなく、視力の低下する病気を発症して、閉鎖を余儀なくされたのであった。その後、代稽古をしていたお雪の兄丸松の世話になり、昨年十月に力松が金沢の兵営に入ってからお雪と二人で暮らしているという設定である。作品の現在は、螢の飛ぶ夏で、お雪とは、兄妹と称して二人で住んでいる。「二五六」の青年である若山は、一年以上前から目を病んでいたものと考えられる。

若山は、「第七」で、「俯向いた、紅絹の切で、目を軽く押へながら、物思ひをする風で、何か足許も覚束ない」

様子で登場する。子供の仕掛けた「糸」に足を取られて「横様に」倒れる若山は、「力なげに身を起して立つ」ところからもわかるように、視力に加えて気力も著しく減退しているといつてよい。眼病に効験のある石瀧の不動尊の岩窟の清水に参詣しながら、お雪の花売りの稼ぎに依存する若山は、「ものを見ないやう」に「密と目を塞い」で生きている。黒百合について語る「第十七」「第十八」に徴しても、博学と洞察力に優れていることがうかがわれる。しかし、現在は「何も彼も思切つて、故と新聞などは耳に入れないやうに勤めて居る」というように、世間から自らを幽閉しているといつていい。

「第二十一」の「田舎に憊うして、女の手を養はれてあるべき自分ではない」という思いも、「見えやあしない。」「僕は目が潰れたんだ。」という落胆による。しかし、同じ「第二十一」では、「見えない目前へ螢なんか突出して、綺麗だ、動く、見ろ、とは何だ、残酷だな、無慈悲じゃないか」と「声を鋭く判然と言ひ放つ」ことからわかるように、気力をまったく阻喪しているのではない。若山は、「右を見ても、左を見ても、葉屋の金持か、精々が書記官の居る所で、然も荒物屋の婆さんや近所の日傭取にばかり口を利用して暮すもんだから、何時の間にか奮発気がなくなつて、引込み思案になる所へ、目の煩を持たんで、我ながら意気地はない」と語っているが、それ以前の私塾の繁盛ぶりから考えて、現在の意気消沈ぶりは、専ら眼病による。お雪が、「生命に掛けましても、お目の治るやうにして上げますよ」といったのに対して、「気張つておくれ、手を合はして拜むといつても構はんな。」といい、「僕は望みがある、惜い体だ」と続ける。意気消沈はしても、希望は失われていないのである。

「第五十」「第五十一」でも、慶造に「何につけても、お前達に、最う逢ひたくは無かつたよ」といい、「憂苦に窶れ、愁然」として端坐する若山は、「ありし其人とも思はれ」ない。しかし、慶造が、「そんな引込思案をなさいますのは、目の為」ではなく、「其のご病氣のために、生命も用らないといふ女のある所為」ではないかといひ、「貴方ほどの

方が何ういふもんです。いや、それとも按摩さんにやあ相当か」といったのに対し、慶造を一喝して、

用意ができたら、何時でも来い。同志の者の迎なら、冥土からだつて辞さないんだ。失礼なことをいふ、盲人が何うした。ものを見るのが私の役か、いざといつて船出をする時、(中略)船の行く処は誰が知つてる、私だ、目が見えないでも勝手な処へ指揮をして遣る、おい、星一ツない暗がりでも燈明台なんぞあてにするには及ばんから。

と説く。この一節は、「引込思案」をする理由が「女のある所為」ではないかという疑いを否定したものと見えるであろう。ここでは、若山の希望がはっきりとした決意を伴つて語られている。西川論文は、「お雪への恋情が「望」の実現と相反するものとして捉えられ、身動きがとれなくなつてもいる」と指摘するが、「第五十一」の言説からは、「望」の実現のためには、「何時でも」、「冥土からだつて辞さない」決意があることがわかる。しかし、視力が衰えている現在、本当に「目が見えないでも勝手な処へ指揮をして遣る」ことができるのか。山中他界の夢は、その可否を描いたものとみられるのではなからうか。

「第五十三」から始まる山中他界の夢は、瀧太郎と雪だけでなく、若山にとつても、試練の連続であつたといえるだろう。それは、「半ば自分の体の如きお雪」を喪い、奪われる危機の自覚である。

始まりは、大鷲の襲来で瀧太郎が負った手首の傷口を、お雪が「吸つた」こと、瀧太郎が「するがままに任せて」いるのを見たことである。二人の姿を見て、「我にもあらず、理学士が肉は動いた」とある。「我にもあらず」とは、自身の想像以上の身体反応に若山が驚いたことを意味する。以下、夢の場面では、若山がそれまで気づかなかつた自己を再発見し、瀧太郎の力量を認識して、雪の真意を確認する経緯をたどる。

次いで、雪が「私を打遣つてお逃げなすつて下さいまし」といったのに対し、瀧太郎が「見殺しにされるもんか(中

略) 汝は可哀さうだな」と「暗涙を湛へ」て、「一緒に死なうぜ」と言葉をかけてる場面を見た若山は、瀧太郎のような「情の籠った、然も無邪気な、罪のないこと」をお雪にいえなかった自分を省みる。

さらに、瀧太郎が、「覚悟」を新たにしたお雪に「助かつたら何よ、おいらが邸へ来ねえ、一緒に楽をしやうぜ、面白く暮さうな」と事もなげに語りかける場面では、瀧太郎の「其の時の意気、其姿、其風情」に、若山は「十の我に、百を加へても、尚遙か」に「及ばないことを認め」て敗北感を味わい、お雪が、「自分を見捨てるであらう」と考える。瀧太郎の「其の時の意気、其姿、其風情」とは、「絶望した窮厄の中に縷々として一脈の靈光を認めたく、嬉しげに且つ快げにいつて莞爾」とする力量、「刻下無意識になつた恋人」、「繊弱小心の人の知死期の苦痛の幾分を慰めむ」とする余裕に対するものである。若山は、「美少年」をこの時初めて「未見の知己、千破矢瀧太郎」と認識し、自分と瀧太郎の目、お雪の「供給に生き」る自分とお雪を救うために戦う瀧太郎の違い、身分の違いを捉え直す。人心を惹きつけてやまない瀧太郎の力を、若山は深く認識したといっている。前引三島由紀夫「解説」は、この場面を取り上げて、「我欲や利害に生きる」ことと「無私のロマン的情熱」に生きることを「対比」させたが、瀧太郎への敗北感は、瀧太郎の「無私のロマン的情熱」の勝利とも言い換えられよう。

若山は、お雪が、「我を棄て渠に愛を移すのは、世に最も公平なことだ」と考えて「満身の血が冷たくなつた」というように、肝を冷やす。しかし、お雪の出した答えは、若山の予想通りにはならなかった。お雪は、「少年が優しく懸けた、肩の手を静かに払」う。そして、「内に実さんといふ方がございます」というように、「憚らず」いう。お雪は、瀧太郎の求愛を退けて、若山への変らぬ真情を告白したのであった。

この後、「取止めのない夢」の中で、若山は、瀧太郎をお雪の救済者としての「美貌の神将」と見たり、「清く麗しき娘を迷はすため」に現われた「妄執の蛇」と見たりするが、それは、若山の心の揺れであつて、三度大鷲に襲われたお雪のもとに駆けつけた瀧太郎が大鷲の翼を踏んで「其の頸を打つた」時には、「勇威凛々」とした「風采」を目の当たりにして、「我が妻を以て、這の神将に捧げむ」とまで思う。しかし、そんな若山の瀧太郎への心酔とは無関係に、お雪には、瀧太郎の「御恩」への感謝があつても、若山への情愛に変わりはない。

若山は、瀧太郎の力量に遥かに及ばないと自覚しているが、瀧太郎にも限界がある。大鷲を退治できないし、お雪の心も支配できない。また、「第五十五」で瀧太郎は、「何処へ出て可いか方角が分らねえ」というように、他界から下界に出る道を求めてさまよっているのである。瀧太郎は、お雪を小脇に抱き上げて、「一座の巖石」の頂にたどりつくが、眼下の森を見下ろし、「雲の棧橋のなきに失望する」のだが、この時、もう一つの危機が迫っているのに気づいていない。「巖の裾」の喬木の梢に「面緒く、耳蒼く、馬ばかりなる大きさのもの」がいて、「猿の年の、猿の月の、猿の日に」と眩きながら、「巖を切る」。この猿は、「第三十三」で、瀧太郎がお兼に石瀧の「奥」を説明して、「其処が大変な処でね、「天窓が石の様な猿の神様が住んでるの、恐い大な鷲が居るの」と説明する「猿の神様」であろう。瀧太郎は、「巖の裾」にいる猿の存在に気づくことができない。一方、若山は、「血を絞つて急を告げようとする声」は出ないが、それを見ることはできる。瀧太郎にとって、不可視の出来事を、若山は見るこ

とができるのである。

このように、若山は、山中他界という不可視の場所を、雪と暮らしてきた湯の谷の家にいながら目の当たりに見る。それを可能にしたのは、日常生活で失意をもたらした眼病、盲目であろう。視力が弱体化するによって、通常は見ることのできないものを見られるようになったものと考えられる。それは、「船の行く処は誰が知つてる、私だ、目が見えないでも勝手な処へ指揮をして遣る、おい、星一ツない暗がりでも燈明台なんぞあてにするには及ばんから。」という自身の発言を裏付けるものでもある。

以上のように、山中他界の夢は、瀧太郎の「斗大の胆」と人を惹きつけてやまない「無私のロマン的情熱」を若山に認識させ、お雪の一途な情愛を教えたばかりではなく、若山自身の自己の再発見、特に冒険船の「指揮」を執る盲目ゆえの特異な能力の自覚をもたらしたのであった。

現世に帰還後、洪水によって、お雪は命を落とす。水が押し寄せてきたとき、お雪は、若山が助けを求めるのに応じて、眼の不自由な「内の人を、私の夫を」助けるよう瀧太郎に頼む。「二人じやあ不可ねえや」と瀧太郎がいい、「汝の良人なら、おいらにやあ敵だぜ」と洩る瀧太郎に、「私は死んでしまいます」と翻意を促す。この時点で、お雪は、死んでもいいと覚悟していたのである。「二人ともつかまんな。構ふことはねえ、可けなけりや皆で死なうぜ」と瀧太郎はいい、若山を「背にし、お雪を項に縋らせ」て水に入る。その後、三人ともに水中に沈んで浮上すると、

お雪は洪水の上に乗上がって、縋着いて、瀧太郎に頼摺したが、実さん堪忍してといふ声を残して、魚の跳るが如く、身を翻して水に沈んだ。

というように、お雪は、「瀧太郎に頼摺し」てから、「実さん堪忍してといふ声」を残して、自らの意志で命を絶つ。動作と言葉で、それぞれに働きかけてから「身を翻して」沈んだお雪は、若山の生還だけを願ったのではなく、恋人若山と恩人瀧太郎の二人を生還させたかっただものと思われる。若山と瀧太郎の乗る冒険船に、「黒百合を以て船に号くる」というように黒百合号と命名する必然は、ここにある。

黒百合号は、命がけで山中他界に参入し、恋人への思いをこめた花の採集に向かい、禁忌を犯して洪水が発生した時、自ら犠牲になって若山と瀧太郎を生還させ冒険の旅に送り出したお雪を記念し、常にお雪とともにあること

を望む若山と瀧太郎の願いを現すといえよう。

注

- (1) 黒百合の咲く「石瀧の奥」は、「身を投げやうとするものでも恐がつて入」らないところ、「評判の魔所」(第十八)で、「昔から人が足踏をしない処で、魔処だ、入つちやあならない」(第三十九)、「少しでも瀧から先へ足踏をする者がございますと、暴風雨になる」場所(同上)とされている。
- (2) お雪の恋人若山は、初出・初版では「実」、春陽堂版全集以降、「拓」と改められた。また、黒百合採集の謝礼については、「仏蘭西の友達に贈るのならばつて、奥様も張込んで、勇美さんの小遣にうむと足して、もの、百円ぐらゐは出さう」(第十五)と本文にある。
- (3) 拙稿「湖のほとり」から『風流線』へ(『論集泉鏡花』第二集、有精堂、平3・11)。本書「湖のほとり」から『風流線』へ(参照)。
- (4) 安藤は安政元年生まれで、土佐出身、ロシア語を学んで外務省に出仕、ペテルブルク大学日本語教授を経て帰国後司法省に転じ、地方裁判所に検事として勤務した後、富山県知事になった。石田は嘉永二年生まれで兵庫出身、自由党员として衆議院議員となり、松方内閣当時知事に選出され、阿倍は嘉永五年生まれで若手出身、岡山県に出仕して官吏となった。また、金尾は安政元年生まれ、広島出身で、本願寺に入り、英国留学後還俗して衆議院議員となり、知事に転じた。歴代知事編纂会『新編 日本の歴代知事』(歴代知事編纂会、平3・11)参照。
- (5) 『新編 日本の歴代知事』は、「バリ領事」とあるが、佐々木幸綱「リヨンで祖母を想う」(『欧羅巴日記』、「朝日新聞」平24・6・4)他により訂正する。
- (6) 大正二年一月から「西片町より」と改題、これらの随筆は、信綱と共著で刊行した『竹柏漫筆』(実業之日本社、昭3・6)、『筆のまにまに』(人文書院、昭10・9)に収録されている。
- (7) 鏡花と雪子の関連は、『手箱の内』の撰取にとどまらない。雪子の夫佐々木信綱は、尾崎紅葉とは、硯友社発足のころからの知り合いで、紅葉宅を信綱が訪問することもあった。『紅葉書簡抄』(博文館、明39・1)には、明治三十四年五月十一日付、同年八月三十日付、三十六年四月十日付信綱宛の紅葉書簡三通の他、三十六年五月三十一日付の雪子(佐々木令室)宛の紅葉書簡も収録されている。また、鏡花は、『黒百合』の一年後に発表した『三枚続』(大阪毎日新聞)明33・8・9(9・27)で、佐々木信綱



【資料1】藤島雪子『手箱の内』



【資料2】三島霜川『黄金窟』

- と雪子夫人をモデルに、ヒロインの夏子を蹂躪する「歌の師匠」加茂川瓦、才子夫妻として登場させている。「高位高官の貴夫人令嬢方」を弟子として根岸に住む高慢な歌熟の主宰者と音楽家の夫人という設定である。才子は「細川氏、父は以前南方に知事たりしもの、当時然る会社の副頭取を勤めて」いるとあり、「知事の令嬢で歌所の奥方」ともあることから、信綱・雪子夫妻を念頭に置いていることは明らかである。発表時期に一年の開きがあり、舞台も主題も相当に異なる作品である『黒百合』と『三枚続』には、意外な共通点があるののである。なお、夏子は、先学の指摘があるように、樋口一葉をモデルにしている。信綱は、中島歌子の歌熟で信綱と交友があった。竹伯会発足時の信綱の名望や夫人への関心が、作品の根底にあるものと想像される。
- (8) 高橋修「ジャンルと様式―日清戦争前後―」(『日本近代文学』平6・5) 参照。
 - (9) 霜川「奈何にして文壇の人となりし乎」(『新潮』明41・10)、佐々木浩「三島霜川の文壇への第一歩」(『富山大学教育学部紀要』昭56・3) 参照。
 - (10) 佐々木浩「徳田秋聲と三島霜川―代作をめぐる―」(『富山大学教育学部紀要』平4・3) は、「黄金窟」を「旧主の遺児と遺臣らが、隠された財宝を探るために大船を建造しお家の再興を願う、といった筋立てが推測されるが、要は冒険活劇小説というべき通俗的なものに過ぎない」と述べている。なお、「黄金窟」には、「毘沙門丸は浮城の揺ぎ出す如く、徐に枕木の上を滑つて、窟の外へへと曳き出された」(二十五)、「浮城の如き船」(三十三) というように、「浮城」という語句が二カ所用いられており、矢野龍溪『浮城物語』を踏まえた表現が見られる。

『風流線』の一考察

『風流線』（『国民新聞』明36・10・24～明37・3・12）は、その続編『続風流線』（同、明37・5・29～10・5）と併せて泉鏡花の最大の長篇小説である（以下、続篇も含めて『風流線』と呼ぶ）。鏡花の郷里である金沢及びその周辺、殊に手取川流域を舞台として、波瀾に充ちた展開を示すこの作品の主筋は、北陸線の鉄道工事監督技師水上規矩夫と友人の哲学者村岡不二太の率いる「風流組」なる、叛骨精神を持った工夫の特異な集団が、貧民救済を名目として私腹を肥やす偽善者、巨山五太夫とその取り巻きに反抗を挑む点にある。小稿は、このような作中の「悪」を体現するといつて良い巨山五太夫のモデル及び『風流線』の執筆契機について考察を加えるものである。

1 巨山五太夫のモデル

年配四十有余、商とも見ええず、工とも見ええず、農とも見えない、面に大人の風あつて、身装は山家を其ま、の、雑とは村夫子。

（以下『風流線』の引用は、初刊本による）

『風流線』冒頭に登場する巨山五太夫の外貌である。巨山は、「城下に、貧窮人の、お救小屋を立て、お在なざる」
「篤志の大慈善家」として周囲からもてはやされているのだが、これ以前に、同じ金沢及び周辺を舞台とした作品『湖のほとり』（『新小説』明32・4）の中で、鏡花は「浦島の殿様」という人物を次のように描いている。

国内随一の大長者で、且つ徳望家で、又未曾有の慈善者で、あらゆる乞食を救済して、之を養ふ者数を知らず、城北の野に矮屋八十六棟を有して、養育院と称へてある。

両者共、困窮者を施設に収容し、救養している点において共通し、浦島は巨山の先蹤とみて良い。明治期の金沢において、このような慈善活動を行った人物として指摘できるのは、小野太三郎である。『金沢墓誌』（和田文次郎編、加越能史談会、大8・6）「宝円寺」の項には、

太三郎人となり温良恭謙慈愛の心厚し廢藩の際盲者二十余人を己の家に収養し後家屋六棟を購ひ窮民二百余人を収養し之と衣食を共にし独立経営し遂に藍綬褒章を賜はる財団法人小野慈善院新に成るに及び推されて其院長となる明治四十五年四月歿す享年六十七¹

とある。又、『金沢市史 現代編』下巻（同市刊、昭44・5）所収の略歴を引けば、以下の如くである。

天保二・一・一五 金沢市中堀川町三一番地に生れる。

嘉永五 藩の小者に採用され扶持米七合をうける。

元治元 自宅を困窮者のために解放する。

維新時 古着商を営む。

明治六 木ノ新保に家を求め困窮者を収容する。

明治一二 彦三二番丁七に再び家を購入し困窮者を収容する。

明治一八・二 藍綬褒章をうける。

明治三九・一〇 財団法人小野慈善院の理事となる。
 明治四五・四・五 七三歳で死去。

以上の墓誌及び略歴によって、小野太三郎が『湖のほとり』の浦島、『風流線』の巨山五太夫のモデルであることが推測されるのである。

管見によれば、明治期の小野太三郎に関する主要な文献には、

- (1) 『小野君慈善録』 (和田文次郎輯、共潤会発兌、明23・8)
- (2) 「貧地主小野太三郎氏」 (莊司生「北國新聞」明28・9・10～15、17^②)
- (3) 「北陸の慈善家」 (天涯茫茫生「毎日新聞」明30・6・25、26。「日本の下層社会」所収。教文館、明32・4所収)
- (4) 『現今北国人物志』初編 (北光社編輯、和田文次郎發行、明36・7)

がある。(1)は、「慈善ヲ奨励シ、德行ヲ表彰スルヲ以テ目的ト為ス」共潤会が、記者の和田文次郎に委嘱して太三郎の履歴と貧民救養の実態を詳述したもの(資料1)。(2)は、前々年に刊行されて評判をよんだ都市下層民のルポルターージュ、桜田大我『貧天地饑寒窟探検記』や松原岩五郎『最暗黒の東京』等に促されたと推測される太三郎訪問の連載記事(資料2)。(3)のみが地元金沢以外の文献で、天涯茫茫生こと横山源之助が、「加州の三人物」の一人として「金沢人にして知事の名を知らざる者あるも小野氏の名を知らざるものなし」と聞いて興味を抱き、その居所を訪ねた記事。上下二章からなり、前半では(1)によって太三郎の閲歴を記し、後半では慈善事業の概要を記している(資料3)。(4)は、百八十余名の石川県内外各界の知名人士の略歴を収めた刊本の一節。発行者の和田文次郎は(1)の執筆者でもあり、実質的には(1)のダイジェストに明治三十六年現在の状況を若干加筆したものである。以上の文献によって、小野太三郎の慈善事業について検討すれば、その実態は次のように整理される。

小野太三郎の収容施設は、「小野救養場」(4)では「小野慈善院」と呼ばれ、彦三一番丁(二棟)、木ノ新保、堀川開ノ町、石屋小路各一棟の六カ所七棟存した。(2)によれば、炊事場、陶器製造場、木綿機織・糸操、裁縫の四つの「工場」があり、裏手には、頻死の「流行病患者」を収容する小屋があった。収容人員、(1)二百四十余名、(2)百八十名、(3)六百四十余名、(4)二百五十余名となっている。(3)が際立って多いが、前引『金沢市史』によれば、明治三十三年が二百二十七名であることから、直接収容する者の他に「其の家に在りて、日々幾分の補給、又は全部の贈給を君に仰ぎて、以て生活しつゝあるもの」(1)による)を含めた人数と考えられる。収容者の出身地は県内外各地に涉り、その七八割は老幼者で、身寄りのない者・瘋癲病者・出獄人、さらには一夜の宿を求める巡礼六部もあった。又、収容者で労働可能な者は、人足・車夫・按摩・機織・養蚕・大工・陶器作りの他、煙草・飴菓子・八百物・玩具を行商したり、笠紐縫や肥料売買に従事し、十五〜五十銭の日当を与えられた。救養場には「一ト小屋」ごとに取締人が置かれ、入所希望者から事情を聞いて可否を決める他、諸物品の保管、救養者の監督、特に就業者が帰る度に所持品を調査し疑問点を糺して太三郎に報告すること、各自への報酬を毎日調べて人別帳に記載し、金銭と共に太三郎に届けることや看護等にあたった。報酬の割に一人一律二厘を加えた金額を貯金して衣料費と自立資金とし、他は食料費とした。食料は、当初は「常人の食」であったが、米価の騰貴した明治二十三年以後は、金沢衛戍連隊の「残肴餞飯」の払い下げをうけた「濃粥」で、後年(4)に至ると監獄署の残飯と南京米が加えられている。なお、(2)は、救養場は東京の万年町や大阪の松島町のような市街地ではなく、「金沢市街の北端に偏し」林檎・梅・桑等の樹木が植えられ、小屋の間には畑があって衛生上の好位置にあるという。しかし、実際には、救養費は「氏の所有なる千歩ばかりの田畝」からの収入と「健全なる被養者が労働して得たる額」の幾分かのみで、「時々同感者より得る特志によりて僅に一日を支ゆるのみ」という経済的基盤の弱さから、「常に有り合せの檻樓」をま

とった收容者の生活環境は、すでに(1)の明治二十三年の段階から「陋隘にして檐壞れて月敗床を照らし庭荒れて蛇破壁に栖み」という状態であった。⁽³⁾(2)の莊司生が、

揃はぬ下駄に肩ぬけたる単衣着て貧乏徳利の大なるを提げて醬油買に飛出でたる、瓢箪形りに成つて車井の水酌める、数百の沢庵を相手に桶中に合戦する女共、大竈の前に粗朶くぶる男の顔炭団よりも黒く、塵運ぶ男顎下に仮りの鬚を垂る、

というように描く救養者の生活は、桜田大我や松原岩五郎の記す都市下層民のそれとさほど隔ったものではない。

小野救養場に関する右の整理、小野太三郎の人となり、その他四文献の記す所と、『風流線』との照応を辿り、撰取の実態を検証すれば以下のようなになる。

まず、本章のはじめに引用した巨山五太夫の「大人の風ある」「山家を其まゝ」の「村夫子」という外貌についてである。(3)では横山源之助の前に現れた藍綬褒章受賞者太三郎の風采を、

跣足にて汚れたる短き股引に、同じく汚れたる襯衣一枚の一野夫

と記している。(1)にも「識らざるもの往々誤て僮夫野人となす」とあり、同じ(1)の「君の人となり(中略)隠然長者の風あり」を付加すれば、五太夫の外貌と重なるものであることは言うまでもない。(2)では「敝衣垢裳」と述べるが、そこまでの姿は五太夫にはなく、その点では外見上の美化がなされている。又、さらに具体的には「身体の小さな、小肥の赭ら顔で、五分刈、白髪まじり(中略)帯の下の太ッ腹、素足に穿いた藁草履で、地から生えたやうにづいと極めた」巨山五太夫の姿は、(1)の巻頭に掲げられた小野太三郎の肖像(第三回内国勸業博覧会出品)や「広額大耳、頬鬚にして唇豊、眼は皆障を疾みたるを以て爛々たるを見ず」(1)による)から直接伺い知ることにはできない。

巨山が、「平生自分自らも、小屋の貧民と同様なものを食つて、起居を一ツにせらるゝ」点は、前に引いた『金

沢墓誌』の「窮民二百余人を収養し之と衣食を共にし」に合致する。巨山が営む「お救小屋」は、作中の記述をまとめると次のように描かれている。

お救小屋に收容された困窮人は、「皆それぞれ勤」をしなければならぬ。その職種は、左官・大工・草刈・日庸の他、九谷焼の絵付があり、「小屋から出ます商人」という一節に伺えるように行商があり、さらに女は、巨山夫人美樹子の実家の経営する製糸場へ通う。又、各自の仕事先まで監視に来る「お小屋づきの役人」が置かれ、賃金は「係りの役人」へ差し出し、「悉皆巨山が取上げる」ことになっている。食事は、「兵隊屋敷の残飯を買込んで」作った「どろどろの粥」で、不始末が露顕すると削減されるので、「宛然活きながら地獄の境界、今時の懲役同様」である。

幾分かの色と誇張はみられるものの、その裡にかいまみられる就業者の職種・收容者を監視監督する者の存在・賃金の処理・食事等については、多分に小野救養場をふまえているのである。又、「小屋もの」と見れば汚らしさうに、戸外で逢うても遠くから避けるやうにします」という收容者に対するいわれなき偏見も、(2)で莊司生が、

曩日余の小野氏を訪問せんとするや、袋町に下車し行人を止めて氏が住所の方向を問ふ、告ぐる人皆先づ余を冷視し嘲笑の裡に教示すること比々然らざるはなし

と指摘する「市人の貧天地に対する感情」を剔抉したものとみてよい。この他、警部長十時猛連が「巨山と共謀になつて貧窮人でも乞食でも、片端からお救小屋へ掬ひ込む」というのは、(2)の「警察署も(中略)時々始末の付かぬ難病者を我が貧天地の厄介に頼まるゝ」という小野太三郎の発言や收容者に出獄人も少なくない点等から伺われる、小野救養場と警察との関係に基づいているものとみられる。さらに、「国中の道徳の龜鑑になつて居る巨山が、実際恐しい人非人」であることを暴露する「救小屋非人控」についても、(1)にいう「君ハ『貧民救助簿』と題したる簿冊一二を蔵す」、あるいは(2)の記者の見た「元治頃養育せし貧人の姓名簿」や拝見を所望せんとして遠慮した

「日々の出入簿一覽」のいずれかの存在が知られていたと推測される。

又、巨山に対してしばしば「活如来」という尊称が用いられているが、この呼称は、例えば明治十三年十月十五日付「朝野新聞」の東西両本願寺大教正が金沢へ下向する旨を伝えた雑報に

加越能三州の真宗信者は生如来を拜まんと待ち居る

(傍点、引用者)

とあるように、本願寺法主に対して用いられている。(1)及び(3)によれば、明治二十二年六月に太三郎は東本願寺法王大谷光勝より親染和讃々文付六字名号一幅を、又その妻には黒柿菊総念珠を贈られ、同年九月金沢市内の専光寺での窮民追弔会にこれを展示し、金沢の貴顕紳士五百余名の参会をみたという。このように、太三郎と法王との結びつきは、当時強く印象付けられていたのであり、「活如来」の呼び名は、こうした経緯から付会されたものと考えられる。付言すれば、『夜叉ヶ池』において「本願寺派の坊主」である山沢学円のように、越前から加賀にかけての一带は「真宗門徒の淵源地」であり、巨山の別荘芙蓉館のある手取川流域は、作中鉄道工場の集団が十時から警官隊と対峙する地点でもあるが、かつて加賀一國を支配した門徒衆の数々の合戦の舞台であったことにも留意すべきであろう。⁽⁴⁾

その他、続編において特に鮮明に巨山の好色漢としての裏面が描かれるわけであるが、(1)によれば、太三郎は島谷仙なる現夫人の前に「妻を迎ふること実に七人」であった。「皆其操に合はず、醜汚を言となして去」ったとしても、小説としての脚色を加える時にこうした側面を取り入れた可能性が考えられる。なお、巨山は「たとひ情が仇となつて、身が八裂になりませうとも、慈善事業は止められません」と述べている。それが作中では偽善者の虚言だとしても、ここには例えば明治初期の石川県知事内田政風の日記の明治十一年の項にいう、救援米の寄付を求めて二日間飲まず食わずで県庁前に座り込んだというような、慈善に生涯を費やした太三郎の面目が写されている

とみられる。⁽⁵⁾

以上のように、小野太三郎に関して、人となり及び窮民収容施設を中心とした記述において、『風流線』の巨山五太夫と多くの点で照応がみられるのである。従来モデルとしては、錢屋五兵衛のみがあげられてきた。『湖のほとり』においては、五兵衛の名がみられ、「八田瀉」が五兵衛に由縁ある河北瀉を想起させる点からその面影を否定できないとしても、如上のように、特に『風流線』においては内実からみる限り、小野太三郎を主要なモデルの一人として考えるべきである。又、続稿「湖のほとり」から『風流線』へで検証するように、五兵衛が範として仰いだ粟ヶ崎の豪商木屋藤右衛門家も、モデルと考えられる。

しかし、『風流線』には太三郎について伝えられる所と無縁あるいは異なる点も、当然のことながら少なくない。襤褸をまとった小野救養場の収容者が、これみよがしに「博愛」の文字を草色の筒袖の襟に染められているという記述は、太三郎関係の文献に見出すことはできない。これは、「風流組」の工夫の紺地に「風」又は「流」と青く抜いた半被に対比的に配した創作であろう。巨山に対立する鉄道工夫にしても、(3)に救養場の就業者について「当人足は鉄道工事に赴ける者多く」と記しているように、逆に小野太三郎の許から工事の人足を出しているのである。又、巨山が傾斜地蔵の屋根や山宮村人口の橋を寄進したという点に関連する記事も、見られない。太三郎自身は、家屋六棟を購入した明治十二年頃にはすでに「家産殆ど尽く」状態で「聞えた大分限者」というのは誇張である。太三郎夫人とその実家についても、巨山夫人美樹子と重なる点は皆無である。これらの点については、他のモデルを想定しうる可能性がある。

次章においては、『湖のほとり』を含めて、小野太三郎をモデルとした作品の執筆契機について検証する。

2 執筆契機

鏡花が、小野太郎をモデルとして作品を執筆した契機は、明治二十八年の帰郷時の地元紙連載記事及び横山源之助「北陸の慈善家」に接して、小野太郎に注目する機会をもったことであつたと推測される。『日本の下層社会』が刊行されたのが、『湖のほとり』の発表と同じ明治三十二年四月であるから、鏡花は、源之助の記事を「毎日新聞」の初出で読んだことになる。「北陸の慈善家」は、明治三十年に阪神方面の労働事情調査に向かう途次金沢に滞在した際の産物で、同年六月二十三日付の「金沢警見記」に続く連載記事の一つである。当時横山源之助は、松原岩五郎に続く下層社会のルポーター・ジュ作家としての地位を確立し、天涯茫茫の生記事は「毎日の呼物」であつた。鏡花が下層社会に深い関心を抱いていたことは、『怪語』『夜行巡査』の一節の他、松原の『最暗黒の東京』を『貧民倶楽部』に取り入れていることにも明らかである。鏡花と同じく晩年の樋口一葉との交流を持つ一方で、観念小説の鋭い批判者でもあつた源之助が、故郷金沢を採り上げたのであるから、鏡花が「金沢警見記」以下の連載記事に目を向けた可能性を考えてもよいのではなからうか。

「北陸の慈善家」において源之助は、太郎を「極めて謙譲、深く自己を吹聴するを避くる」人物であつて、「紙より薄き当今の人情社会に於て（中略）寔に異数」であると規定し、「都会の人よ、記憶せよ、北陸の一大慈善家なる小野太郎氏は斯くの如き人なり」と結んでいる。こうした観点からみれば、太郎はまさに『風流線』で巨山夫人美樹子が夫に望む「国中の道德の亀鑑」以外の何者でもない。しかし、「北陸の慈善家」における言説と、『湖のほとり』で後作の水上規矩夫に相当する畠山猛が加賀言葉を中傷しつつ「此国の奴等、（中略）僕は土着だけれども、大嫌だ。癪に障る」と言つたあと、

浦島が何だ、畜生、那の偽善者が何だ、然云ふ盲目だから駄目だつていうんだ。

乞食を養つときゃあ、慈善者だと思つている。（中略 第一君、奴に三舎を避けて、馬上に敬礼しなければ、市民が一致して知事を追出し兼ねない人望だ。

という浦島及び「市民」への怒りとの落差は甚大である。本性を見きわめない意味で用いられている「盲目」とは、あるいは、横山源之助にも向けられていたかもしれない。明治二十八年六月から十月まで金沢に帰郷して、前引(2)「貧天地主小野太郎氏」という七回に及ぶ地元紙の連載記事に接して来たであろう鏡花は、源之助の記事に接する約一年前の明治二十九年六月に郷里から祖母と弟を迎え、金沢を完全に引きはらつて東京小石川区大塚に居を構えていた。そうした鏡花にとって、小野太郎は、源之助とは全く異なつた姿に映じていたものと思われる。

上述のように、太郎は、鏡花の生まれた明治六年に木ノ新保で窮民收容事業を始め、同十二年に彦三二番丁に六棟の家屋を購入して本格的な救養を行ったのであるが、彦三二番丁は、鏡花の生まれ育つた下新町のごく近隣（下新町に続く上新町向かいが彦三二番丁である）に位置しており、幼少期から鏡花は「四壁蕭然」として「人の堪えざるどころのもの」という「小野救養場」の実態を知っていたとみてよく、巨山五太夫のお救小屋にそれが反映されていることは、前章に確認した通りである。

ここで、鏡花が上京した明治二十三年までの小野太郎個人について、藍綬褒章受賞後の記事を『小野君慈善録』から拾うと、明治二十一年十月曹洞宗僧侶が大乗寺で「小野救養場」の窮民死者慈善追弔会を開き、太郎は百余名の收容者を率いて赴いた。同二十二年二月共潤会は、帝国憲法発布拜賀式及び第一回窮民賑恤会、小野太郎名誉表彰会を金沢市公会堂に於いて挙行了。四月には曹洞宗大本山賜紫法雲普蓋禪師より本山紋付の金欄打舗と扇子が、又六月には東本願寺法王より六字名号一幅が太郎に贈られた。九月に太郎が専光寺で主催した窮民死者

追弔会には、五百有余名の貴顕縉紳が参集したことはすでに述べた。同二十三年二月紀元節に共潤会は、建国二千五百五十年祝賀式と第二回窮民賑恤会を金沢市公会堂で開き、太三郎を招いて米五斗と拾塵車二輛を贈った。四月には、吉田好二撮影の太三郎の肖像写真が略歴を添えて上野で開会した第三回内国勸業博覧会に出品された。六月には、船越衛石川県知事が救養場を訪問し、家屋修繕費十五円を贈った。七月に設立された共立慈善会は、救養資金として会員の喜捨物を太三郎に贈ることに決定した等々——というように枚挙にいとまがない程に、太三郎の名誉と人望を賞賛する記事が存する。特に、金沢での帝国憲法拜賀式が太三郎の名誉表彰会を兼ねていたことや内国勸業博覧会で太三郎の紹介がなされたこと等は、その名声を内外に喧伝し、高からしめたに相違ない。これらの記載から、当時の鏡花の眼に映じていたのは、貧民救済と引きかえに倍加する太三郎の名誉と、主として「外聞」と「世間体」からそれを支える故郷の貴顕縉紳の姿であったと推察されるのである。

このように「小野救養場」が脚光を浴びた背景には、明治十七年六月以降、ほぼ毎年鹿鳴館で「婦人慈善会」が開催され、貴顕紳士淑女の間で慈善に対する関心が高まったことその他に、明治二十三年の天候不順による凶作で米価が急騰し、全国的に窮民が増加するといった当時の世相があったと考えられる。『金沢日本基督教会五十年史』(中沢正七編、同教会発行、昭5・9)によれば、明治二十三年には金沢でも餓死寸前の細民四千人を生じたため、六月から九月まで同教会は浅野河畔において施米したという。窮民問題は、当時無視しえない重大な問題であり、それが深刻化すればするほど、太三郎は注目され、名声を博すこととなったのである。太三郎への顕彰が旺んであった同年十月末に尾崎紅葉の門下生になろうとして上京した鏡花にとって、小野太三郎は窮民を破屋に収容して自らは名誉と人望を獲得した人物として、脳裡に刻みつけられていたろうことは想像に難くない。

上述のように、鏡花は新進作家として認められた明治二十八年六月から十月まで金沢に滞在しているが、滞在中の九月に莊氏生「貧天地主小野太三郎氏」が「北國新聞」に掲載されたのであり、鏡花はこれを読んで小野太三郎についての記憶を新たにすると推測される。二年後の明治三十年六月、東京において鏡花は、天涯茫茫の生の記事を通じて小野太三郎を再び想起し、天涯茫茫生との認識の隔たりも執筆契機の一つになって『湖のほとり』さらには最大長編の『風流線』執筆に至ったものと考えられる。

なお「北陸の慈善家」に先立って発表された天涯茫茫生「金沢瞥見記」は、百万石の金沢には「別に称すべき工業なく」十万石の富山に劣り、労働者の困窮も甚しいと指摘し、鉄道工夫にも言及した、後次のように結んでいる。百万石喜ぶべし悪むべからずや、今や数年ならずして鉄道は敷設せられん、金沢人士能く之に対する覚悟ありや、記して百万石の読者に質す。

鉄道開通間近にもかかわらず(北陸線が金沢に通じたのは、十ヵ月後の明治三十一年四月一日ことである⁹⁾、没落士族を抱えかつての百万石の栄光に固執して、産業振興に消極的な金沢人士の因循な閉鎖性を搏つ挑発的な意味合いを帯びたこの結びは、談話「自然と民謡に」(『日本及日本人』大4・10)で、「加賀の人間は(中略)頑固で分らず漢¹⁰⁾で(中略)百万石だぞと云つた偉らがりや」面白くないという「加賀っば」嫌いの鏡花の共感する所であったろう。それは、先に引いた畠山の言説や『風流線』で水上規矩夫が故郷に対して反感を抱く理由としてあげる「因循姑息」以下の言説とも関わりを持つものである。

このようにみると、「金沢瞥見記」における鉄道敷設への挑発的な意義付けや鏡花の故郷の人々への見方等の共通点の存在は、「敷設せられん」とする鉄道に対する金沢人士の「覚悟」を問う作品ともいえる『風流線』の構想、換言すれば、工事中の鉄道を「恐るべき大蛇」に化身せしめて、「一度鉄道が渠等(引用者注、金沢人士の眼界に顕る、時)、化身した大蛇が「山野を圧して、巨頭其の頭に臨むべく」感じさせて、故郷への「不平を洩し、怨

恨を霽し、仇に報いむ」とする鏡花の作品の構想にも影響していると考えうる。

以上のように、偽善者及びその一派と、それに対立するに故郷に怨恨を抱く指導者を仰ぐ鉄道工夫の集団を配置するこの作品の基本的な構図の源泉の一つは、「北國新聞」の連載「貧天地主小野太三郎氏」と「金沢瞥見記」から「北陸の慈善家」へと続く横山源之助の連載記事から汲んだものとみられるのである。

右に述べてきたように、『湖のほとり』の浦島、『風流線』の巨山五太夫の有力なモデルである小野太三郎及びその窮民収容施設は、鏡花の生まれ育った近隣にあつて、幼少期から目にしてきたものであった。その実態は、後年新進作家鏡花に下層民に取材する視野を与えると共に鹿鳴館の「婦人慈善会」をはじめとして全国的に盛行した、明治二十年代を中心とする慈善運動に欺瞞の目を向けさせ、『貧民俱樂部』その他の初期文学の重要な作品に結実する一因となつたと思われる。

注

- (1) 正しくは、享年七十三である。
- (2) 松村友視氏の御教示による。
- (3) こうした状態はその後も改善されず、石川県が施設の風紀と衛生の向上をはかつて、明治三十八年一月に公布した「教育所取締規則」に抵触し閉鎖を余儀なくされたが、県知事、金沢市長からの協議により日露戦争記念行事として、救養場を卯辰山に移し、財団法人小野慈善院として再出発した（『金沢市史』現代篇下巻）という。
- (4) 平野外善平『秘史手取川』（北国出版社、昭45・11）参照。
- (5) 『風雪の碑——慈善の父 小野太三郎』（北國新聞）昭41・6・25付）参照。
- (6) 内田魯庵『新聞の発祥地』（『内田魯庵隨筆集』下巻（昭16・11）参照。

- (7) 山田博光「明治における貧民ルポルターージュの系譜」（『日本文学』昭38・1）及び東郷克美「泉鏡花・差別と禁忌の空間」（同、昭59・1）、本書第一章参照。
- (8) 立花雄一『明治下層記録文学』（創樹社、昭56・4）参照。
- (9) 金沢市『市史年表』金沢の百年（明治編）（金沢市、昭40・5）参照。
- (10) 横山源之助は同記事において「小野救養場にては士族は十人に七人強の割合」と述べ、「今日士族が如何なる運命にありや」はこの実状から想像できると言う。



【資料1】
小野太三郎肖像
（『小野君慈善録』所収）

『湖のほとり』から『風流線』へ

明治三十二年一月、本籍地を金沢から東京に移した鏡花は、同年四月鉄道開通直後の金沢及び周辺を舞台にして、富豪の慈善家を中心とする金沢人士を痛烈に批判した『湖のほとり』を「新小説」に発表した¹⁾。この作品は、金沢郊外の「八田潟」に突如新しい島が出現したところからはじまる。島の所有者は、富豪の慈善家浦島だが、作中に姿を現すことはない。新島を浦島に天の下した墓であると説く畠山猛、「加越能の女王^{クイン}」と呼ばれる浦島の新夫人桂姫、赤毛布をまとった神出鬼没の旅の女、狂言廻し^{クワイ}といってよい新聞記者牛若三郎、「事件^{ことごと}の中の主人公」と呼ばれる鉄道技師風の男などを登場させておきながら、作中の言葉を用いれば「事件に必要な人」を登場させたところで、作品は終わっている。初出誌の「時報」欄は、

本誌所載の小説湖の畔^{ほとり}は、泉鏡花氏が苦心の作と称す、氏は不日此続編を公にせむとして、頻りに執筆せらるるといふ、
 というように、続編の執筆を伝えている²⁾。

赤毛布の女や技師風の男が、富豪の浦島の話題に不快を表明する記述もあり、結末では浦島を批判する畠山が彼らに合流することも伺われることから、牛若の待望する「事件」は、彼らによる富豪の慈善家への反抗と推測され



【資料2】「貧地主小野太郎氏」



【資料3】天涯茫茫生「北陸の慈善家」(上)(下)

る。しかし、結果的に続編の発表はなく、四年後に新たな構想のもとに執筆されたのが『風流線』（『国民新聞』明36・10・24～37・3・12）、『続風流線』（同上、明37・5・29～10・5。以下、続編も含めて『風流線』と呼ぶ）である。新たな構想の基本は、鉄道開通前に遡って手取川周辺と金沢を主な舞台として、鉄路の接近を金沢人士に報復する大蛇に見立て、富豪の慈善家巨山五太夫及び取り巻きに反抗する鉄道工夫の集団を設定して、対立の構図を明確化したことである。小稿では、鉄道開通を控えた当時の金沢の状況を検証し、『湖のほとり』から『風流線』に至る富豪の慈善家及び金沢人士への批判の背景を考察して、両作品の創作意図について再考したい。なお、本文の引用は、『湖のほとり』は、初出、『風流線』は初刊本（春陽堂、明37・12、38・8）による。

1 金沢批判の内実

はじめに、『湖のほとり』と『風流線』における批判の内実を検討しよう。

『湖のほとり』における批判は、放蕩のため高等学校を退学処分となり勘当された青年、畠山猛によってなされている。畠山は、「乞食を養い」、「国利民福をこれやつて見せ」る浦島を「偽善者」と決めつけると同時に、浦島を「慈善者だと思っている」人々を「然云ふ盲目だから駄目だ」と批判している。ここにいう人々とは、「殿様」の「松若様」に「いまだに土下座」をする旧時代の道徳に生きる金沢人士とってよい。加えて、畠山は「松若様」や加賀のお国言葉への嘲弄さえ口にしていく。ここまでの激しい批判は、『風流線』にも見られない。

『風流線』における批判は、工学士水上規矩夫の発言として旧友の判事唐沢新助によって紹介される。水上の金沢批判がもとで二人は絶交したのだが、唐沢も今は水上に共感すると言明する。それは、『湖のほとり』における

その内容、対象をさらに具体的にしたもので、

故郷の人の、因循姑息なもの其の一つです。嫉妬心の深いのも其の一つで、階級の甚いのも其の一つ。傲慢なもの、甚しく利己主義なもの、土族根性の強いのも、お国自慢なもの、腹のすつきりしないのも、下手な謡を謡ふのも（中略）皆其の一つで、（中略）巨山氏の慈善事業の如きも、また必ず其の一つに数へらるゝものでありませう、

と述べている。こうした批判の対象の最たるものとして、巨山があげられているのである。又、巨山方の憲兵少尉で巨山夫人の甥にあたる豎川昇の発言にも、「我が県といふものほど、国柄と、家柄とを尊んで（中略）人に等級を設ける国は他にあるまい」とある。

以上のように、『湖のほとり』と『風流線』に共通して問題にされているのは、富豪の慈善家を頂点とする同郷人の閉鎖性・封建的性格ということができる。

ところで、明治三十年前後の金沢人士の閉鎖性・封建的傾向への批判的言説は、鏡花作品のみに限らない。北陸鉄道敦賀・富山間が本格的に着工されたのは、明治二十六年四月十八日だが、工事の進行と呼応した形で鉄道が金沢に近づきつつあった明治二十年代半ば以降の地元紙には、金沢の現状を批判する多くの論説や投書が掲載されている。³ その早い例として、金沢出身の法科大学生横山隆起の「金沢の経済」（『絵入金沢新聞』明26・6・23、27付）がある。横山は、「金融屢蔽塞し実業嘗て振起せず日に疲憊する（中略）金沢経済の情状」を「加州藩、王政維新、鉄道布設の三段」に分けて考察するなかで、

維新前と維新後と天下経済の方向全く異り金沢の境遇已に一変せり士人生活の目的方法全く改新せされは旧来の金沢は竟に生存せず然に改新を企てしもの多くは前に失敗し因循姑息の者は多くは幸に後に残り

というように、逆説的に有力な金沢人士の旧弊さを指摘している。周知のように、明治維新を契機に経済的基盤を失った士族の困窮は、加賀百万石の旧藩士においては特に著しかった。棗園主人の小説『心から』（北陸実業新聞「明治・24・24付」）に、

明治の御代を、十六七年の頃となりて、金融会社に一大恐慌の惨状を顕はし、殊に金沢の金貸会社は（中略）孰れも其厄に罹りて、前後に閉店したれば、それが為に損分を受けたるもの甚だ多く、取わけ士族の如きは、生命の親と頼みたる公債証書を失なひ、加之ならず預金迄取られて（中略）非業の死を遂るもあり、或は路頭に立ちて謡をうたひ、助力を乞ふもあり、

とあり、金沢では明治十六七年頃から士族の没落が一層加速されたことがわかる。士族の疲弊没落が他の階級に波及するのは必至で、明治十九年二月八日付「中越新聞」は、富山県で同月五日から実施された「乞食狩り」で、「本日まで数百の獲物あるうち十の九までは石川県よりなげきたるものなり」と記している。又、明治二十四年一月十四日付「北陸実業新聞」は、「金沢市内に於ける家屋の数は年々減少して街頭空地の頻々たる」と述べ、前年中の「家屋新築及取毀の数」によってその実態明記している。それによれば、明治二十三年中の「新築一〇六」に対して「取毀二六〇」というありさまであった。この年は、鏡花が初めて上京した年でもある。横山の説くように、金沢の不振は甚大なものであり、以後多くの批判の前提には、いかにこうした不振を挽回するかという問題意識が存在するといつてよい。一般に、不振の挽回に際して二つの方向での改革が主張されている。一つは、交通の不便さによる停滞を指摘してその解消を期すべきことだが、この点はすでに鉄道敷設工事が進行中ゆえ、いきおひも一つの問題点、すなわち「人心」への批判がなされることになる。明治二十六年八月五日創刊の「北國新聞」によって、こうした批判を摘出すれば、以下の通りである。

明治二十六年九月二十一日付「悚然、赧然、悲憤、慷慨」は、前日第四高等学校で行われた歴史家重野安禪の演説を紹介するなかで、「維新々政の後尚封建の余氣を有」し「自ら尊大に失して他を顧みざるの余弊ある」ことを指摘している。同年十一月七日付「金沢市長、市民に警告す」は、長谷川準也市長が「郷土の凋落」を憂えて「逸楽に耽り姑息に流れ社会の趨勢那辺に在るやを知らず」「頑迷固陋なる思想を有する人物亦本市内の一隅に割居して進歩の支障を為す」と述べている。同年十二月十日付「金沢実業家に警告す」は、「因循姑息、苟且偷安にして進取の企図なかりし」と述べ、日清戦争後の明治二十八年八月三十一日付「人心と消長」は、「退守的にして進取的にあらざる」と述べる。又、九月八日付「金沢の工芸美術」でも藤岡生こと藤岡作太郎は、「元来金沢の人は退守的の道徳に富めり」と述べている。明治三十年二月二十七日付「加州人の加州論」は、雑誌「日本人」の三宅雪嶺「加州の人」を転載したもので、「前田氏の治」が「人心を屈せしめしや少からず」として「所謂加州根性」を批判している。同年五月二十三日付「北人氣習の革新」で敢言生は、加賀藩の「養ひ来れる所のもの」を考察して、

始めは保守退嬰の氣習を馴養せり、是の時悠長寛厚の風存せり、中は排他斥外の氣習を醸成せり、是の時猶ほ自主自大の風存せり、終りは則ち奈何、遂に妬嫉猜忌の氣習に変化したり、

と述べる。翌三十一年一月二十八日付の「東京にある一石川県人」福田常松の「加能人の責任」は、「漫に他を輕侮する加能人の特性」を指摘している。

しかし、こうした論調は、金沢に鉄道が開通した明治三十一年四月一日を境に明らかに変化している。鉄道開通前には、例えば明治二十八年九月二十七日付「北陸鉄道の延長と金沢士民刻下の急務」が、「退守の旧套に安んじ進取活発の氣力に乏しき所以」を交通機関の不備に帰し、鉄道の開通を前にして「今や即ち坐居安逸」は許されな

いにもかかわらず、「金沢人士が北陸鉄道の進成に對しあまりに冷眼なりしに驚けり」と嘆じて、県外資本による

席捲への危機感を表明しているが、開通後の明治三十一年十一月二十八日付「市民の前途」は、「維新後の衰態窮状何ぞ説くに忍びん」としながら「然れども盛衰は循環なり」として「市民の前途豈に多望にあらざとせんや」と述べている。又、富山まで開通した翌年三月二十日付「北陸鉄道の全通」は、「北陸開通に依りて、俄かに異常の進歩を為すべきは、理想上当に然るべき事なり」と述べている他、同年四月十七日付の依々子「楊柳依々」は、

陰險、邪推、嫉妬、卑屈は金沢人の特性なりと云ふものあり、依々子弁護して曰く、此の特性は以て金城百二十万石を無事に支へたるもの、智と云ふべき也

として、それまで批判の対象であった「金沢人の特性」を逆に擁護している。

以上概観した論説や投書は、明治三十一年四月の鉄道開通以前に限ってみれば、いずれも金沢人士の閉鎖性や封建的傾向を指摘し批判するもので、さきに引用した『風流線』の一節と合致する点が意外に多い。それらの中には、横山隆起・藤岡作太郎・三宅雪嶺・福田常松らのように、金沢ないしは石川県で生まれ育ち上京を経た体験から、目覚めざる金沢人士に向かつて発せられたものが少なくないのである。批判は、あくまでも目覚めざる人々を叱咤し目覚めさせること、敢言生のいう「北人氣習の革新」を促すことにあり、北陸鉄道の延長に際して「金沢士民刻下の急務」や「加能人の責任」を認識させることであつたことは、いうまでもない。これに対して『風流線』の水上工学士の意図は、故郷に対する「不平を洩らし、怨恨を霽らし、仇に報はむ」として鉄道を建設し、巨山一派を撃破し、偽善を見抜けない人々を戦慄せしめることであつた。親友の唐沢から故郷に「何の怨恨、何の不平がある」と問われた水上は、

自分が故郷の地を愛すること、なほ父母に斉しい、唯憎むのは彼処に住む、一切の人類である。

として、故郷の草木・山嶽・川の流れに代表される自然を「美人」にたとえる一方、そこに住む人々には「美人」に当然備わるべき美しい心がない。故郷はいわば「バチルス」、病毒に犯された状態であつて、鉄道の敷設はメスをふるうに等しく、病毒を切除するためであると述べる。前引の「故郷の人の因循姑息」以下の指摘は、備わるべき美しい心の対極にあつて否定されるべきものである。換言すれば、水上の批判は、美人に等しい故郷の自然の絶対性に立つて巨山をはじめとする同郷人の閉鎖性と封建的傾向に対してなされたものとみることができる。それは、故郷の自然の絶対的な唯美性から作中の同郷人の俗物性を指弾し、否定することでもある。水上の批判は、このような視座からなされているのである。と同時に水上は、旧友村岡不二太に再会して、

僕の秘密といふのは、知つて居やう、堅川の娘の事だ、美樹子の事だ、巨山夫人の事だ。(中略)意中の人の事だ、欺むかれた事だ、不叶恋の事だ。僕が迷つた事だ、迷の覚めない事だ、断念られない事だ、

と述べるように、巨山夫人美樹子への断念しがたい恋慕を抱いている。美樹子の美貌は、狩谷秀岳の画業に支障をきたすほど優れたものとされており、秀岳の妻によれば「国中の、月か花かのやうにいはいはれて居た」という。美樹子は、つまり加賀の国の自然の美にたとえられる存在といつてよい。水上は、「故里は美人に似たり」「正に恋人と同断である」と述べるが、水上にとって「美人」とは、このような故郷の自然であると同時に巨山夫人美樹子をもさしていると考えられる。両者は、二重映しとなり表裏一体の不可分のものとして、鉄道を携えて帰郷する水上を捉えていたはずである。

一方『湖のほとり』では、どうか。水上同様、同郷人を批判する畠山猛は、富豪の慈善家浦島を「暗殺する議論」をなすにあたって、「国内唯一の売れっ娘」である芸者かしくと浮名を流そうとする。その理由は、浦島と桂姫が結婚したために「恋の遺恨で以て、僻をいふと思はれちやあ恥辱だから」という。つまり、擬装工作のためであった。しかし、畠山は桂姫を、

此国に限つちやあ、昼夜ともに月と仰ぐべきものがあつた、一人の美人だね。僕が之に惚れていたといはれ
たつて敢て恥ぢない。

といい、「皆然う思ふ月の如き美人」と呼ぶ。そして、浦島に嫁いだことを知って「月がもう此世に見られない」といって「闇夜ばツかり」の「寂寞を感じる」のみか、「気が違う」までに動揺したという。芸者かしくに入れあげて破滅するまでの擬装を必要とする。それほどに、畠山は桂姫に惹かれていた。それは、「月の如き美人」である桂姫が、自身の美しさによって「橋の上、山の端、谷間の清水」「猛獣の眼」「草の露」「花片はなびら」などの美しさを照らし出す、絶対的な存在として彼を惹きつけて止まなかったためである。作中の畠山に漂う深い喪失感、このような特別な意味を持った「美人」を失ったところから生じたものであろう。

以上のようにみえてくると、『湖のほとり』で月の照らし出す「此国」の自然の美は、『風流線』における「故里」の美に等しいことがわかる。というよりも、『湖のほとり』で成立した自然の美とその美を称揚する人物の心を惹きつけてやまない女性とを、等価値の不可分のものとして絶対視する見方が『風流線』で継承され、その継承は、「国の月か花か」という美人への恋慕をより明確化する形でなされたのである。『湖のほとり』の作品世界は、この絶対的なものを失ったところから動きはじめており、作品はいかにそれを回復するかという方向で展開したはずである。『風流線』もその点は同じで、まさに絶対的なものをいかに回復するかという方向で描かれ、後述するようにその実現を描くのである。

ところで、『湖のほとり』における故郷の自然を美人として絶対視する発想の由来を解く鍵は、自筆原稿に記された「三湖台」という原題にあると考えられる。『加賀宝鑑』上巻(名古屋光彰館、明31・3)によれば、三湖台は、石川県能美郡の名勝御幸塚の別称である。同書「御幸塚」の項には、

今江瀆上の岡陵なり瓢形を為す今江瀆は右に、木場瀆は左にあり水色玲瓏として瑠璃を布くが如し、芝山瀆は樹間隱約の中に見ゆるが故俗に三湖台と名く

とある。三湖台が小松郊外の三つの湖を臨む景勝地であったことは、この一節に明らかだが、鏡花の脳裡にあったのは、三湖台の「絶勝」を描いた『三州奇談』の「三湖の秋月」と思われる。⁶『三州奇談』は、鏡花作品に多くの発想を与えた重要な文献として知られている。⁷『三湖の秋月』は、「北浦小松の境にも三湖台と云ふ地あり、所謂今江瀆、芝山瀆、木場瀆なり」として三湖の美を紹介する中で、

今江瀆は其形琴に類し、三面平遠の景にして、後ろの山高からず、須磨の景を移し、眺めおだやかにして、美人の面に似たり(中略)今江の上の山は三湖を一望に盡して、三所の水月に対する、爰にてや、「峰の月汀まされる光り哉、連歌師能順」、其頃は此所連歌度々ありし程に、世俗連歌山といふ、

と記している。琴の形の今江瀆を「美人の面」にたとえる他、清浄な「月」の「光」に照らし出された「汀」の美しさを描くこの一節から『湖のほとり』の「月の如き美人」の発想が醸成された可能性を考えてよいように思われる。というのも、作品と実際の「三湖台」には直接的な結びつきは皆無である。又、月の美と二重映しの美人、桂姫の命名も「三湖の秋月」からの連想と推測される。草稿のタイトルは、『三州奇談』という発想の原拠を逆に示唆しているのではなからうか。鏡花が故郷に取材した作品を執筆するにあたって、故郷の自然は作者の追想の中でいよいよ美化されたであろうことは、容易に想像がつく。その際、愛読書『三州奇談』に描かれた「三湖の秋月」の美しい表現が想起されたものと考えられる。

一方、故郷の人々に対する見方については、上京後の郷里にあてた書簡から伺うことができる。例えば、明治二十六年七月十四日付(年月推定)泉清次宛では、金沢の商業地を代表する尾張町の人々を、自分の生まれた「閑雅な

る新町」と比較して「俗物」と記している。⁽⁸⁾翌二十七年十月一日付目録八郎兵衛宛では、

実に金沢はおもしろくなく（中略）いづれ故郷はどこにしろよき土地はなきものに候（中略）たゞ人は東京の人がよく候金沢にもおうちやうな方ばかりなればい、けれど、なか／＼さうはまゐらず候。

として、「人」に対する好悪と金沢への愛憎を語っている。こうした不満を核に、やがて『湖のほとり』から『風流線』に至る物語世界が構築されることになるが、右の書簡からはまだ故郷の美の絶対性の発見はなされていないことが、明らかである。明治三十年代に入って『三州奇談』の「三湖の秋月」から発想されたと推測される故郷の自然の美と美しい女性とを絶対的な存在として同一視する見方の成立などを契機とし、富豪の慈善家への反抗を示唆する『湖のほとり』が書かれ、やがて『風流線』に結晶するのである。

『湖のほとり』の続稿が発表されなかった理由は、明らかではない。ただこの作品は、全体的に書き込みが不十分で、畠山の桂姫に対する感情も今一つ明確ではない。『風流線』では、後半になって唐沢を通して明らかにされる水上の故郷批判に相当することを、『湖のほとり』では実際の反抗以前に畠山に語らせておきながら、その内容には飛躍と混乱があつて、脈絡も明瞭ではない。なかには、『風流線』にもみられないお国言葉や旧藩主に対する批判や風刺が語られてもいた。脈絡を無視し、飛躍し、混乱する体裁をとっているがゆえに、かえって断片的ではあるが直接的な批判が物語世界とは次元を異にして、読者に伝えられるとみられることもできる。国の言葉については、大正九年七月に発表された「寸情風土記」（『新家庭』増刊号）で詳細に言及しているが、そこには抑えがたい懐旧の情こそあれ、批判など微塵も感じられない。

以上のように、『湖のほとり』の批判の激しさは尋常ではない。次章では、この点に関して執筆当時の情況や背景の検証を試みることにする。

2 『湖のほとり』の背景

『湖のほとり』の浦島は、「国内随一の長者で、且つ徳望家で、又未曾有の慈善者」とされているが、浦島は本名ではなく渾名で、そのいわれについては、次のように記されている。

仔細あつて此の八田潟の半を自家園中の一名勝となし得る特権を有して居るからで、向ふに一帶の白壁の望まる、湖畔の城廓は即ち其の別業。⁽⁹⁾

当時、金沢郊外の河北潟周辺に住む右のような「国内随一の長者」としてあげられるのは、粟ヶ崎の木谷藤右衛門家であろう。木谷家は代々藤右衛門を名のる長者で、北前船の船主として財をなし角島一治『わがまち粟ヶ崎』（自家版、平元・4）に引く「天保初年全国長者番附」では、西の横綱に位する。明治十年代には海運業から離れしだいに衰退したとはいえ、抜群の財力を誇り同書の「木谷家一般寄附」及び「本願寺その他寺院寄附」によれば、尾山神社建設敷地をはじめ各方面にわたつての寄付に依拠していたことがわかる。その邸は、河北潟から日本海に注ぐ大野川の中の島にあり、明治十九年から十年がかりで庭園及び屋敷の新築工事を行い、「十二代藤右衛門（藤十郎）が世評木谷大臣とおう歌されるに至つた」（同書）という。明治二十六年七月二十九日付「絵入金沢新聞」は、金沢の歌人残木翁牧野一平の「木谷氏の庭見に行かれしときの紀行」を掲載している。その一節には、

右に白山をのぞみ左に太刀山をみる河北潟の水は足もとにめぐりて唯此庭は湖にかぶるかとうたがはる

とある。又、『湖のほとり』より後になるが明治三十三年十二月の「風俗画報」に掲載された五峰庵「木谷氏の庭園」は、「家屋庭園の美麗宏壯近村に其評喧し」として同家の外観を、「三方は湖水に瀕し、煉瓦を以て周囲塀を築

き、一見城の如く」であったと述べている。『風流線』の芙蓉館ではないが、浮き城のようにも見える壮大な邸であったことがわかる。このように『湖のほとり』の浦島の「大長者」としての一面は、一応は木谷家を想定しているものと考えられる。「一応は」というのは、この他にも二つのモデルをふまえているとみられるからである。一つは、「矮屋八十六棟を有して、養育院と称へ」窮民を救養する慈善家としての側面であって、これについては横山源之助『日本の下層社会』に「北陸の慈善家」として紹介されている小野太三郎をふまえている⁹。さらに加えて、本論では、もう一人のモデルを指摘しておきたい。

『湖のほとり』は、「紀元千八百九十五年」すなわち明治二十八年十月二十七日未明、八田潟に突如新しい島が湧き出し、富豪の新夫人が命名式を行うという設定だが、管見するところ、当時作品に関係する出来事を確認することはできない。島の湧出は、河北潟の埋め立てをさしているともとれるが、『石川県河北郡誌』（同郡役所、大9・11）には「河北潟の湖底にして近代に隆起せし所のもの四あり」という記述がある。その最後を「明治十年正月元旦のこと」と記しているが、「中越新聞」掲載の「金沢通信」によれば、明治十九年二月二十日（地異）2・28付、二十一年二月二十一日（推定）「新島湧出」2・27付）及び同年四月二十九日（土地変動）5・7付）にも新島が隆起していることがわかる。このうち、明治二十一年四月二十九日の場合は、

去る廿九日荒屋村の領内湖中俄に突起して水面より高さ七寸許なる一帯の陸地を為せり幸にして人畜に害はなかりしも今後如何なる変事のあらんかも沿岸各村落は恐怖し居る由、

とあって、『湖のほとり』の「突然島が一個湧上つた」という記述に合致するとみられる。そして、この出来事と同じ明治二十一年四月に木谷家の関係者で新夫人を迎えたのが、十、十二代当主（同一人物）の庶子にあたる藤谷外茂吉であり、新夫人とは鏡花の初恋の女性といわれる湯浅茂¹⁰である。茂は、『怪語』や『一之巻』以下の連作です

にその結婚をふくめて取り上げられていた。以後も、鏡花文学の根幹の一つをなす（他人の妻の系譜）とも称すべき作品創造の源泉となった、永遠の女性でもある。『湖のほとり』も、茂の結婚に取材した作品と捉えられよう。『怪語』や『一之巻』以下の先行作品では、茂の結婚とそこから生じる主人公の煩悶が描かれていたが、夫への言及はなかった、この作品ではじめて茂の夫をモデルに取り上げて、批判的に描いたことができる。

以上のように、『湖のほとり』における浦島は、大慈善家小野太三郎、大富豪木谷藤右衛門家とその子息藤谷外茂吉にもとづいて創り出された虚構の人物といえるのである。

こうした人物への批判の背景については、慈善については、明治二十六年末から翌年春に執筆された『貧民倶楽部』で婦人慈善会を催す貴婦人たちに、

お前様が人中で面を曝して、こんな会をしなされるのは、あゝ、彼の夫人は情深い感心な御方だと人に謂はれたいからであらう。

と述べて慈善のあり方を否定するだけでなく、「無暗に施行々々といひなさるが、ありやお前、人を乞食扱にするのだ。目下の者を憐むんぢや無くつて軽蔑するのだ」というように、慈善そのものを否定する考えが示されている¹¹。『湖のほとり』から『風流線』にかけても、慈善の否定については一貫している。

次に藤谷外茂吉は、鏡花にとつては、恋敵ともいべき存在で、否定的に描かれるのは仕方ないところかもしれない。しかし、実際どのような人物であったのかという手がかりを明治三十二年初頭までの当時の雑報などに探れば、以下のようなことがいえる。

明治二十二年七月二日付「北陸新報」の「浮かれ女を参らせたる其心は」は、有栖川宮が「藤谷外茂吉方へ臨ませられしとき当の主人より芸妓ちふ賤しき女郎許多を侍らせ申したるよし」と伝えるように、藤谷は有栖川宮が立

ち寄るほどの名家である。又、明治二十四年十月の「金沢開始三百年祭」の時には、

十日 侯爵同令夫人御来着アリシニ付祝祭発起人総代トシテ稲垣義方亀田伊右衛門神田正中上森捨次郎中屋彦十郎藤谷外茂吉森下森八七氏国界マテ出発シ同所ニ於テ歓迎シタリ

（上森捨次郎編『金沢開始三百年祭記事』上森刊、明29・1）

というように、前田利嗣侯爵夫妻を迎えに出向くなど、藤谷は当時の金沢の最も有力な商人の一人で、明治二十六年十二月八日付「北國新聞」の「藤谷氏のラム子製造」によれば、尾張町にも「持家」があったことがわかる。郊外の柳橋村に煉瓦製造所弘益館を経営（北陸実業新聞）明22・4・21付）したり、日本生命保険会社の「商議員」（絵入金沢新聞）明26・9・18付）となったりしている。又、二十九年四月十七日付同紙の「不調和の説」によれば、父木谷藤右衛門などと共に「白山の右脚を経て名古屋に達せしめん」とする金城鉄道の発起人となって活躍する他、玉石会（同紙「玉石会」明26・9・24）や絵画会（同紙「金沢青年絵画競技会」明29・6・9付）を催して収蔵するところの逸品を展示したり、明治三十一年四月一日の金沢駅での鉄道開通式では、「開通の祝歌を吹奏」する金城音楽隊の「寄附」をしたりしている（同紙「鉄道開通式準備要聞」明31・3・31）。その一方で、三十年二月十六日付同紙「胡桃町の貸家とお役人」によれば、

古沢石川県知事は三間前知事の旧宅（龍商藤谷外茂吉氏持家）へ移転する由なるが、元來同家と借主との関係にはチョット妙なものあり

として軍幹部や前知事との癒着ぶりが報じられている。又、同年三月十二日から十八日までの同紙に連日掲載された「土木官吏内職事件」は、県土木課長が藤谷などを説いて七尾湾の築港許可の申請を勧め、他に優先して許可されたという疑惑だが、そこでも藤谷は「汚吏龍商」の代表者として批判されている。特に三月十八日付同紙では、

七尾湾の件に加えて金城鉄道が私鉄であるにもかかわらず、県から測量費を支出する決議をした件と「師団敷地秘密探知率先買占めの件」について、その張本人として批判されている。鏡花が、どれほどこうした点について知っていたかは、明らかではない。しかし、龍商としての汚名からして藤谷は、『風流線』の水上の言葉を用いれば、「恋人と同断」である美しい「故郷の生命を奪はんとする」存在としても捉えられよう。

次に、明治三十二年四月という時点、執筆もその直前と考えられるこの時点で、なぜ鏡花は、お国言葉や旧藩主に及ぶような否定的発言を登場人物にさせたのか。この点について考えられるのは、同年四月二十七日から五月三日まで当主前田利嗣公をはじめとする前田家の一族を金沢に迎えて盛大に開催された、「前田利家公没後三百年祭（利家卿三百年祭）」における金沢人士の対応への反発である。上述した明治二十四年の「金沢開始三百年祭」では神輿渡御と軍装による行列（備押）が催された。同年十月十五日付「北陸新報」によれば、「前軍と後軍」を除いた「中軍のみ」の「七八百人」の行列が尾張町を通過した際には、

各戸盛砂及び手桶を出だし、金屏風立て、毛氈敷き廻し、亭主を始め孰れも麻上下の折目正しく、両側の店先に平伏し、旧藩の頃殿様の御行列を迎ふるの礼を以て、恭々しくこれを出で迎へたり、

というように、正装して路上に平伏した。『湖のほとり』で畠山がいう「今だに土下座」をする光景に相当するだろう。こうした点について、上京中の鏡花が、手紙のやりとりや度重なる帰郷の際に伝え聞いた可能性は、充分考えられることである。明治三十二年の「利家卿三百年祭」については、同年元旦の「読売新聞」の「よみうり抄」に「前田家にては今年宗祖利家卿の三百年祭に相当する」という記述がある他、三月十五日付同紙「前田家祖先三百年祭」が、「旧藩地石川県金沢市にては利家公を祀れる尾山神社に於て来る四月下旬を以て非常に盛なる祭典を執行する由」を伝えると共に、「在京旧藩臣の有志者」が、四月中旬に開かれる本郷の前田家での祭典に「青銅製燈籠一對

を邸内神殿に寄進することに決し」「昨今専ら有志の醜金募集中なり」と報じている。又、同年三月二十六日付同紙「よみうり抄」には、金沢での「三百年祭」について、

当日は旧藩士の催しにて時代祭を為すよしにて目下甲冑其他当時の服装諸道具取揃中なり

とある。明治三十二年初頭には、「利家卿三百年祭」に向けて在京石川人士の活発な準備状況も伝えられていることから、「読売新聞」掲載以前から、右のような内容を同郷人から仄聞していた可能性が考えられる。「時代祭」は、大名行列と推測されるが、そこから明治二十四年の「三百年祭」を想起し、「今だに土下座」するに類した封建的な気習の復活に沸き返るであろうような状況を、思い描いたことも考えられる。¹³⁾

なお、『湖のほとり』では、上述のように「殿様」を「松若様」と記している。日置謙編『加能郷土辞彙』（北国出版社、昭31・8）によれば、当主前田利嗣公の通称は「多慶若」であった。「松若」は、「多慶若」に基づいた命名であろう。春陽堂版『鏡花全集』巻三（天14・9）以降、「松若様」は「藩主のお友達」と加筆されている。執筆当時、こうした配慮をする余地のないほどの封建的気習に対する反発や批判があったのではなからうか。

ところで、『湖のほとり』に設定された千八百九十年十月には、鉄道は敦賀まで通じていたにすぎない。しかし、作中の牛若三郎は「北陸鉄道の敦賀線で、午前十一時二十五分金沢の停車場」に到着したことになる。金沢まで開通したのは、再三述べたように、明治三十一年四月一日である。『湖のほとり』発表直前の三十二年三月二十日には、富山まで開通し、北陸鉄道敦賀・富山間が全通したところであった。この他、浦島の「年紀」を「三十七」としているが、モデルの一人藤谷外茂吉は文久三年、千八百六十三年生まれで鏡花よりちょうど十歳年長であって、明治三十二年には浦島と同じく数えて三十七歳である。こうした設定の意味するところは、作品執筆の現在の尊重として捉えることができる。

以上のように『湖のほとり』には、明治三十二年当時の金沢が強く意識されていると考えられる。

3 『湖のほとり』から『風流線』へ

おわりに、『湖のほとり』から『風流線』へと至る構想の変更と創作意図について考えたい。

構想の改変について、まず指摘できるのは反抗の対象である富豪の慈善家の設定のうち、特に慈善とその偽善性を暴くことに主眼をおいたことである。¹⁴⁾これによってモデルの中では、小野太郎の比重が高くなる一方、新島出現と新夫人の命名式という設定が消去されている。次に、作品内に投影された現在性——明治三十二年執筆当時の情況、すなわち鉄道開通後の金沢の情況を除去していることである。旧藩主やお国言葉にまで及ぶ批判も消え、『湖のほとり』の赤毛布の女が、『風流線』では旧藩主の令嬢お龍として設定されることになる。『湖のほとり』の赤毛布の女は、同じ明治三十二年六月から八月に発表された『黒百合』の女賊白魚のお兼に通じるころがあった。と同時に、鉄道工夫と敷設工事を積極的に意味付けたことがあげられる。

明治二十九年六月十七日付「北国新聞」の「工夫の取締を厳にせよ」は、「今や県下所至に鉄道工事の進捗を見んとす」として、「無知横暴なる」鉄道工夫の取締まりを当局に要望するなかで、

隣県福井に鉄道工事の着手せらるゝや、無数の工夫は踵を接して此の所に来り、或は良民を苦しめ、或は婦女を姦し、或は無銭の遊興を行ひ、人民の生命財産に危害を加へたるもの少々ならず、（中略）頃日又た説あり、曰く大聖寺丸岡間の公道国路殆んど婦女子の独行を断たんとすと、蓋し工夫の乱行を危惧する為めなるなからんや

と報じている。これは、『風流線』で三宮村の村長九郎次が、鉄道工夫を「鶴鷺を提げた草鞋穿の鬼」と呼び、村人に注意を呼びかける一節に合致する。明治二十九年六月初めから月末まで、祖母を東京に迎えるために帰省していた鏡花は、この記事に接していたであろう¹⁶。又、帰郷と上京の際に鉄道工夫の姿も手取川の架橋工事も、目撃していたはずである。しかし、三十二年四月発表の『湖のほとり』では、金沢開通後の設定となっている。鉄道の工事を富豪の偽善家一派への脅威とすることは、当初の構想の埒外にあったことになる。「生命や入らぬが持ちたいものは、金子の生る樹」と畠山猛が口ずさむ「金子」と「いろ女」は、いわば反抗の糧であった。この両者を持たない畠山がいずれかを与えられようとし、二者択一を迫られるところで『湖のほとり』は、終わっている。一方『風流線』では、反抗の武器を鉄道工夫・鉄道敷設に見出したということが出来る。すでに『湖のほとり』でも、鉄道技師風の男が登場していることを考えれば、無法な工夫や敷設自体に反抗の意味を持たせる構想の発見は、時間の問題であったであろう。なお、鉄道技師は、明治三十年十二月発表の『山中哲字』にも登場していた。

そして、最も注目すべき構想の改変は、『湖のほとり』が、「月の如き美人」すなわち国の自然の美を意味する絶対的なものを、主人公が失ったところからはじまり、それをいかに回復するかという段階で止まっていたのを改めた点である。『風流線』では、同じく絶対的なものを失った主人公を描きながら、作品の前半から一挙にそれを回復し、奪還する方向で積極的に展開させている。又、その際『湖のほとり』では不明瞭であった故郷の美と不可分の価値を持つ人妻への断ち難い恋慕を、はつきりと書き込んでいることも看過できない。

失われた絶対的なもの。それはいうまでもなく、「美」である。『風流線』は、「故里」から失われた「美」を反抗によって奪還し、回復する物語と読みとることができる。この観点からすれば、放蕩の上退学処分になった畠山は、なすすべなく酩酊して毒舌を吐きただけだったが、その後身である水上工學士は、「美」を創造する「工」でも

ある。したがって、鉄道の敷設は「恐るべき大蛇」となって同郷人を戦慄させるだけでなく、病毒を除くメスの如き役割を果たしあげくに、失われた「美」を故郷に取りもどすことを意味する。そのことを端的に示すのは、『風流線』の最終章で、鉄道開通の日一番列車から白山の雪に包まれた美樹子の亡骸が引き出されることである。鏡花は、その一節を、

雪の中に、雪よりも潔く、玉よりも美しき唇の、なほ紅なる、美樹子の死骸^{なきがら}

と描いている。右の一節は、永遠なる「美」の帰還を意味しているよう。又、同章でお龍は、焦土の芙蓉館跡に「禽獣の女王」となったとして、その島を「妙なる島」と呼び、

揚柳枝低く垂る、処、紅雀飛び、岩高く苔の滑なる処白鷺憩ひ、暁の霧に駒嘶き、夕暮の草に羊の群る、をうかぶべし。

と記している。これも又、新たに創造された「美の王国」をさしていると考えられる。そのようにみた時、無法の工夫集団を「外道」の「本尊」となってお龍と共に主導する村岡不二太も又、工夫集団を率いて失われた「美」の回復を推進する存在といえる。彼らの破壊、報復は、最終的には「美」の創造へとつながるのである。又、結末で「近ごろ諸国を絵行脚する」狂気の画家狩谷秀岳が伝える「人々の憊る消息」は、狩谷が「暗中に筆を運らす奇技」によって「渠が脳裡に印せられた、夫人美樹子の反映」を描くことからわかるように、美樹子に象徴される失われた「美」の再生の物語に他ならない。

以上のように、『湖のほとり』から『風流線』へと至る創作意図は、失われた故郷の「美」の回復を描くところにあつたとみられる。両作に共通する富豪の慈善家をはじめとする同郷人への批判の激しさは、批判のための批判というよりも、結局、失われた「美」を渴仰するその激しさとみることができよう。

注

- (1) すでに明治二十八年十二月には自宅を売却、二十九年六月には、鏡花は郷里から祖母と弟を東京に迎えていた。吉田昌志「泉鏡花・祖母の死と『女客』(『学苑』昭64・1) 参照。
- (2) 「新小説」翌月号(明32・5)の「時報」にも「鏡花氏湖のほとり続稿を綴る外、一大長編に筆を着けたりとか」とあり、続稿の執筆が伝えられている。なお、「一大長編」は、「黒百合」と考えられる。作品のタイトル「湖」は、「時報」に従い、「うみ」と読むべきか。なお、前稿「黒百合」の生成」で指摘したように、明治三十二年一月五日付「人民」の「文壇消息」に本作への言及がある。
- (3) 「北陸鉄道建設誌」(「北國新聞」明32・3・20付) 参照。
- (4) 『風流線』で、郷里を批判する水上規矩夫・唐沢新助・唐沢新助・堅川昇も又、金沢に生まれ、長じて東京遊学を経験した青年とされている。
- (5) 「泉鏡花自筆原稿目録」(岩波版『鏡花全集』別巻所収) 参照。
- (6) 現在は埋め立てによって、昔日の面影はない。
- (7) 小林輝治「神屏風」の成立過程——鏡花と『三州奇談』(一)——(「金沢大学語学・文学研究」10 昭55・2)、本書序論参照。
- (8) 同書簡の一節に「尾張町の俗物ども閑雅なる新町に土足を入れて熱鬧の地にいたし候とや」とあるが、これは明治二十六年六月二十八日付「北陸中新聞」にいう「市内尾張町より下新町乙劍神社前へ新街路を開通」したことをさすものである。工事着手は、同月二十七日という。
- (9) 本書所収「風流線」の一考察」参照。
- (10) 新保千代子「しげ女余談」(「泉鏡花研究」7 平元・3) によれば、「しげ女は明治二十一年四月二日後妻として入籍している」という。小林輝治編『泉鏡花』(「石川近代文学全集」第一巻 石川近代文学館、昭62・7) 所収「年譜」は、同年「四月十一日」とする。
- (11) 本書所収「貧民倶楽部」と慈善の時代」参照。
- (12) 同紙上には、「三百年祭」の具体的な期日の記載はない。なお、同日より尾崎紅葉『続々金色夜叉』が同紙に掲載されている。
- (13) 明治三十二年四月二十八日付「北國新聞」には、「三百年祭」に訪れた「候爵の存慮」として「旧藩士等が余りに厳格に殿様あしらひをなすを却つて迷惑に思はれ」という一節がある。
- (14) 注(10) 参照。
- (15) 注(11) 参照。
- (16) 明治二十九年の帰省については、田中勳儀「『妙の宮』成立考——明治二十九年の鏡花」(「鏡花研究」7) 参照。
 なお、同年六月十一日付「北國新聞」の「泉鏡花子」には、「新進作家中の秀才泉鏡花は脚気病療養の為め目下当地に帰省し居れり」とある。又、六月三十日付同紙、文狂郎「五月晴」には「泉鏡花を送る」として「ふり捨てな梅のとりの柿の花」なる句が掲載されている。帰郷は、六月十一日以前 上京は六月下旬と考えられよう。

第三章 自然主義への抗い

自然主義と鏡花

明治四十一年三月、泉鏡花は、「新潮」の記者中村武羅夫に「自然主義文学の奴等が（主として田山花袋のこと）このおれに飯を食はせない。ひどい奴等だ」と憤慨して語った。¹十七年後の大正十四年三月、同じ中村の司会による「新潮合評会」（『新潮』大14・4）では、「自然主義は真つ平だよ……弱ったね」と苦渋の時代を振り返っている。集団的な文学運動としての自然主義の全盛期は、明治三十九年三月、島崎藤村『破戒』の刊行から、「白樺」・「三田文学」が創刊された四十三年までであろう。鏡花にとっては、体調不良による逗子滞在期（明38・7～42・2）及び上京後の一年程とほぼ重なる。この時期「正面の敵」として批判の矢面に立たされた鏡花は、『春昼』（『新小説』明39・11、12）以下『草迷宮』（春陽堂、明41・1）『歌行燈』（『新小説』明43・1）に至る代表作を発表、登張竹風との共訳、ハウプトマン『沈鐘』（春陽堂、明42・9）を刊行している。「危機の時代」にありながら「見事な成熟期を迎えようとしていた」（笠原伸夫『評伝 泉鏡花』、白地社、平7・1）のであった。²

明治四十年前後の鏡花文学の受容に関する研究としては、越野格「泉鏡花文学批評史考（1）——鏡花文学における読者の問題——」（『北大文学部紀要』昭56・3）及び鈴木啓子「鏡花受容とロマンチック」（『国語と国文学』平18・11）が、重要である。越野論文は、明治三十七、八年前後から、「評界」が「小説」の質、〈小説家としての態度〉を問い

始めたとき、鏡花文学の読者は「自然主義を始めとする新文学に走った者」、「旧来の（鏡花式）を依然として珍重している一団」、「鏡花を否定しつつ、又何らかの意味を見出そうとする第三の人々」の「三態」に分かれたと指摘すると共に、「第三の人々」は、「夢幻派」夏目漱石の出現を媒介とし、鏡花文学を「神秘主義、象徴主義、あるいは印象主義的」に捉えたと説く。鈴木論文は、「自然主義」と対置される「ロマンチック」の問題を取り上げて、斎藤信策「泉鏡花とロマンチック」（『太陽』明40・9～10）に代表される鏡花受容の「要点」を、「『万有の不可解』の苦悩を打破すべく、『精神交通』によって『天地の秘密』を垣間見んとする、ロマンチックな渴仰にあったのではないかと鋭く指摘している。

この時期、鏡花は「ロマンチックと自然主義」（『新潮』明41・4）などの談話で自然主義への反論を試みる一方、「おぼけずきの謂れ少々と処女作」（『新潮』明40・5）、「一寸怪」（『怪談会』柏倉書楼、明42・10）などで、超自然力や他界の存在に言及している。鏡花は、自然主義のどのような主張にどのように反論したのか、二種の談話・随筆相互の関係をどのように捉えるか。『春昼』以下の作品成立についても検討する必要があるだろう。『春昼』の方法とテーマは、『沼土人』（『新小説』明41・6）、さらには泉家の書生前田雄三と鏡花との合作『第一コート』（『新小説』明42・4）にも影を落として³いる。

小稿では、先行論文の指摘を踏まえ、自然主義全盛期を中心とする鏡花の受容と評価の実態、自然主義への反論や主張を検証し、『春昼』・『草迷宮』などの作品成立の背景を探りたい。

1 自然主義全盛期の鏡花文学の受容

明治三十九年一月の『海異記』（『新小説』）から四十三年九月の『色暦』（同前）までの同時代評をそれ以前と比較して注目されるのは、まず社会や人生に対する「観察」の欠如を批判する評価が目立つようになることである。「人生の観察に於ては、只だ空々乎たるを如何せん」（檄檀山人「伐可小観」、『新潮』明38・12）は早い例だが、「社会の真相を洞察して、直ちにこれを活写したものはない」（警見生「新刊警見記」六〇）、「文庫」明40・1、「その人生観は旧式で、吾々の同感を惹くに足らない」（『七章』評、「東京」云新聞」明42・1・14）などの例がある。こうした批判は、「多くの作家が現実生活に対する興味を覘つて描かうとしてゐる」（『銀漢字』小説月評、「早稲田文学」明40・2）時代において前代からの孤塁を守る、鏡花の姿勢を非難したものと見えよう。また、鏡花を過去の作家として、公然と文学の第一線から退けようとする批評が登場している点も見逃ごせない。『海異記』を評した羚羊子「新年の小説」（『芸苑』明39・2）は、この作は只この人も今は文壇から葬らるべきものであると云ふことを証明するに過ぎない。気の毒ではあるが時勢の推移だから仕方がない。

と述べて、「時勢の推移」によって、鏡花文学は文壇から退かざるを得ないと指摘した。『春昼』を取り上げた市野虎溪「文芸時評 片々録」（『早稲田字報』明39・12）も、「小説家としての鏡花は既に過去に属した」と述べている。四十年に入ると、「趣味」（明40・1）の「昨年の小説界」が、「元の硯友社の人々で古株の人々の凋落は昨年」に於て吾人の注意を惹いた一つであるが、多分本年になつて復活する事は覚東ない事であらう」と述べ、その理由を「之は時代思潮が激変しつつ、あるのだから致し方がない」と記す。「元硯友社の人々」には、当然鏡花も含まれるだろう。「旧き作家の時代は去りて、新しき作家が、新しき作物を提供し、文壇に新しき時代を劃すべきの時はずれり」（出羽

の守「老衰文壇」(時事新報)明41・4・8)も、同様の趣旨とみられる。「自然主義文学の奴等」が「このおれに飯を食はせない。ひどい奴等だ」と述べたのは、公然と文壇からの退陣を主張する言説への鏡花の憤りだったのではなからうか。

同時代評で特に注目したのは、シンボリズム(表象主義、象徴主義)との関連で鏡花文学の是非を論じた批評である。シンボリズムは、『悪獣篇』(文芸倶楽部)明38・12)の「三人の老婆」を主人公鳥山廉平の「煩惱執着心の表象」とみる「小説界」(早稲田文学)明39・4)を始め、『海異記』、『春昼』、『雌蝶』(新小説)明41・1)、『草迷宮』、『沼夫人』の評価に適用されている。

小川未明「片々録」(早稲田文学)明39・2)は、『海異記』の「怪物」について、「二十世紀に出るやうな、ロマンチックの或る意味においてのシムボリックの性質を具備してゐない」と述べて、「ロマンチック」と「シンボリズム」の二語を用いて批評する。『草迷宮』を取り上げた御風生「風葉鏡花二氏の近業」(早稲田文学)明41・5)でも同様で、「作者は何故に現在の生活を根底としたロマンチックドリームなり、シンボルなりを、みせないのだらう」と述べている。『沼夫人』を取り上げた篆隸子「六月の新作」(東京朝日新聞)明41・6・13)は、「ロマンチックな、神秘的な描き方、筆には申分がない」としながら、「近代的な深い意味を持たしたら鏡花君は蓋し日本のメイテルリンクだ」という。篆隸子の指摘も、「ロマンチック」・「シンボリズム」の側面からの評価であろう。このように、三作ともシンボリズムの作品として不十分だという評価だが、『春昼』については、豹子頭「没羽箭」(読売新聞)明39・11・11)が、「人の美の力、情の精をシムボリカルに描いたものと称へやうか」と高く評価している。

鏡花が『春昼』を発表した明治三十九年は、象徴主義、シンボリズムについての関心が高まった年であった。一月には、島村抱月「囚われた文芸」(早稲田文学)が、「シンボリック」は「智識に囚はれた」自然主義に「取つて代らんとする諸思潮」の「概称」だとしてハウプトマン『沈鐘』に言及、「見えざるもの、聞えざるものを拉し来つて、見ゆるもの聞ゆるものに寓するを目的とす」と説いた。三月には、花袋「小説に於ける象徴諸派」(同前、明39・3)が、「自然派より象徴的傾向に趣きたるの例は一にして足らず」と述べて、ここでもハウプトマンを例にあげている。竹風・鏡花共訳の『沈鐘』の翻訳の「近刊広告」が「新小説」に掲載されたのが、同年四月であり、鏡花が『沈鐘』の共訳に着手し始めたのは明治三十九年四月以前だと指摘されている(吉田昌志「沈鐘成立考」参照、「青山学院大学文学部紀要」昭58・1)。鏡花自身も、『沈鐘』の共訳を批判した長谷川天溪「沈鐘の翻訳」(太陽)明40・6)への反論「あひく傘」(新小説)明40・7)で、「ハウプトマン氏が美の象徴として描き成せるラウテンデライン」と述べて、「象徴」への理解を示している。共訳作業の時期と重なる同年秋に『春昼』が執筆されたことを考慮に入れれば、『春昼』に「シンボリズム」を読むことは、誤りとはいえないだろう。

相馬庸郎「日本自然主義の『象徴派』的性格」(文学)昭40・9)によれば、「可視的・現象的なものに即しながら、その背後にある神秘的・形而上学的意義を暗示しようとする志向」が、「シンボル」の「もつとも一般的な理解だった」という。御風生「風葉鏡花二氏の近業」も、「現在の生活を根底とした(中略)シンボル」と記していた。そうした意味で、自然主義陣営の説く象徴主義に近づいた作品が、残る一作『雌蝶』とみられる。この作品については、小栗風葉「一月の小説壇」(新潮)明41・1)が前半の「世俗的事」に対して「終りの方」の「蜘蛛や、蝶を出して、シンボリックに現はさんとした所」が「不調和」だと指摘、龍己生「新刊月評」(明星)明治41・2)も、「末段蜘蛛を出したのは従来のお化けと違って確に或る有意義の象徴に用ゐた物らしい」と述べている。『雌蝶』末段で「蝶の首に、しつかりと喰ひつ居ていた」という「蜘蛛」は、語り手の「私」には強引で露骨と見えた医学生生の綾子に対する求愛を象徴してしよう。風葉が「世俗的事」だと評した前半は、麻布に家作を持って母子で暮らす「糸巻」

の一人娘綾子と家作の住人である「私」との関わり、及び綾子と医学生との出会いという「現在の生活」を描いている。「血と肉に餓えた」蜘蛛は医学生の欲望を象徴しているとも読め、文壇の思潮を受容した作品といえよう。

なお、御風生「風葉鏡花二氏の近業」は、『高野聖』（佐久良書房、明41・2）についても、『高野聖』が得たものは、決してあの高野聖が経験したあの恐ろしい旅路そのものではなくして、全体に象徴された肉欲に対する恐ろしい感と云ふやうなものであった」と述べ、シンボリズムの観点から高く評価している¹⁾。

2 自然主義全盛期の談話と随筆

鏡花は、「ロマンチックと自然主義」〔新潮〕明41・4から「平面主義に就きて」〔新潮〕明43・3に至る談話で、自然主義の言説を取り上げて批判し、独自の方法論や文学観を語っている。ここでは、「ロマンチックと自然主義」「予の態度」〔新声〕明41・7を中心に自然主義の言説との関連、自然主義への反論と他界観にかかわる談話・随筆との関連を検証したい。

「ロマンチックと自然主義」では、「無技巧」を「標榜」し、「技巧を攻撃」して、「真を描き、真を写せば足ると言ふ自然主義の人々」、「露骨描写と云ふことを説き、人間暗黒面の描写」を「主張」する自然主義者を批判して、「完全な芸術を作り上げる」ために、技巧が不可欠だと主張する。この談話は、本稿冒頭の引用で中村武羅夫が注記したように、花袋の言説を想起させる。「露骨なる描写」〔太陽〕明37・2で技巧を排した露骨なる描写を主張した花袋は、四十一年一月「予の創作」〔ハガキ文学〕で、「自然主義の作者は、美と醜と共に是れを描写するのである」といい、三月の「自然主義の前途」〔新潮〕では、「人生の真に触れよう」として自然主義が勃興したのであり、「生

活をありの儘に描く」、「見られた姿をありのまま写し得たなら、其れで好い」のだと述べている。こうした言説が、鏡花の記憶に残ったものと考えられる。「真を描き、真を写せば足る」というのは、長谷川天溪「近時小説壇の傾向」〔太陽〕明41・3の「自然派なるものは、自分の見たるまゝの真を写すのである。その真が果たして（中略）美であるか醜であるか、そんなことは頓着せぬ」をさすものでもあろう。

三ヵ月後の「予の態度」〔新声〕明41・7では、「芸術存在の意義」、「自然主義の価値」の議論に言及、「無飾とか、無技巧とか云う或一派の論者」への反対を表明し、「無技巧の上に純客観のこの描写より外に、主観の侵入を許さぬ」という主張、「大主観を以て小主観を見る」、「想像は絶対に許さぬと言つて置きながら、偽らぬ感情を書けと言つて他人の感情まで」書けという主張を批判して、技巧の必要を説き、「醜」や「現実」を通して「更に力ある何者かに触れたい」と述べている。また、「性欲の塊の様な人間許り」書く「偏狭な自然主義」を否定、さらに「お化けは私の感情の具体化だ」と述べて、『草迷宮』成立の基盤を明かす。

冒頭の「自然主義の価値」は、四十一年五月に島村抱月が「早稲田文学」に発表した評論のタイトルであり、「無飾」は、天溪が、「幻滅時代の芸術」〔太陽〕明39・10で「幻滅時代の世人が欲むる物は、真実を描きたる無飾芸術なり」と述べて以来、天溪の「自然主義理論の基礎」になった語だが⁵⁾、鏡花の盟友後藤宙外「歳末偶言」〔新小説〕明40・12に、「自然主義が一部の人々に依つて唱道され、最初は極端に無飾無修辞といふこと、有るがまゝの自然、偽らざる情を写せといふことの呼び声が高かりし為」云々という一節がみられる。「無飾」、「偽らぬ情」という語句のみえる宙外の評論による可能性があるだろう。「主観」の排除や「純客観の描写」については、抱月「文芸上の自然主義」〔早稲田文学〕明41・1に「自然主義の主要元素」として「描写方法の純客観的ならんとすること」とあり、「自然主義の価値」には「客観化せざる主観は斥けられるべきものである」とある。いずれも話題の評論で、特に後者

は、紅葉『多情多恨』・『金色夜叉』を取り上げており、目を通した可能性はあるだろう。「大主観」と「小主観」については、花袋「文章講壇」(「文章世界」明40・8)に、「人間の憐れな頭脳で一理屈ひねくるのを排するは、小主観を卑しんで斥ける声である」とあり、同じく「文章講壇」(「文章世界」明40・11)に、「実に芸術家が其の存在を要求し得る所以は、自然そのものに一度びは没入しながら、しかも同時に自然以外に立つて、其の大主観を以て第二の自然を創造し茲に自然の真を描き出すところにある」という一節にみえる。近い時点では、自然主義を批判した出羽の守「春情文学(再び)」(「時事新報」明41・1・22)に、「技巧に囚われな、(中略)小主観に拘泥するな」という自然主義の言説の紹介がある。「春情文学」は、自然主義文学が「専ら性欲を描き劣情」を描くと指摘し、「自然主義の文学ならでは、世の中に文学というものはない」という「自然主義万能の世の中」を批判したものである。このように、「自然主義の文学ならでは、世の中に文学というものはない」という「自然主義万能の世の中」を批判したものである。「自然主義に非ざれば、文芸に非ざる如く言」う点を批判している点で、「予の態度」と共通するものがある。鏡花は、同じ「予の態度」で、「性欲の塊の様な人間計りが、真の近代人ではあるまい」と述べて、そうした人間以外に「種々なる解決を以てテキパキ生存している人」などもいると記す。この一節は、宙外「随感録」(「新小説」明40・10)の「肉欲の爲め一代の運命を支配せられてゐる趣の人も少なくはない。併しながら、それは決して全体でも、又大多数でもない」を連想させる。このように、「予の態度」には、「春情文学」や「随感録」への共感が反映しているといえよう。

「予の態度」末段の「お化は私の感情の具体化だ」は、一見自然主義とは無関係に見えるが、そうではない。鏡花は、翌年三月十三日付「東京毎日新聞」に掲載された「談話」で、「知識で書くとか科学的に書く」よりも、「感情」で書くことを優位に置いているし、「文芸は感情の産物也」(「新潮」明42・6)で、「感情を退けて知識に進まうとする」のは、「文芸を離れて科学に入らうとするものだ」と批判して、「感情は絶対だ」と主張している。この主張は、翌月の「描写の真価」(「秀才文壇」)でも繰り返されている。これほど、感情を重視するのは、たとえば花袋「自然主義の前途」(前出)が、「自然主義的観察即ち芸術家の生活」のあり方として示した「自己を絶えず批判しつつ、(中略)感溺もせず、自己の理智性に依つて観察しつつ行く」あり方などに対する鏡花の姿勢を示したものと見られる。初出「新潮」の「創作における智識と感情」欄同時掲載の他の作家のタイトルは、小杉天外「無論智識を先にす」、徳田秋声「智識を尊重すべし」、小栗風葉「感情に伴う自意識を要す」で、「智識」を排除して「感情」を絶対視する鏡花の主張が際立っている。こうした「感情」絶対化の背景には、「ロマンチク」にありては、「我」といふ者の本体は意志の反対なる感情である」といい、『無憂樹』(日高有倫堂、明39・6)を取り上げて、「鏡花はたしかにまだ世に知られて居ない、しかも尤も人の感を動かす新しい感情を描いた」と賞賛した斎藤信策「泉鏡花とロマンチク」の影響があるだろう。

「泉鏡花とロマンチク」の発表は、『草迷宮』執筆開始前後と推測される。成長するにつれて智識の世界に背を向けて、亡き母の歌っていた手毬唄を聴くために諸国をめぐる『草迷宮』の葉越明は、他界との交渉、「泉鏡花とロマンチク」にいう「万有」の一郭としての他界との「交渉融通を求める」人物といえよう。鏡花は、「泉鏡花とロマンチク」への共感から、自然主義の「智識」に対する「感情絶対」の立脚点に立ち、『草迷宮』を執筆したのはなかるうか。以上に述べてきた「ロマンチックと自然主義」及び、「予の態度」と先行する自然主義関連の言説との結びつきは次のように整理される。

「ロマンチックと自然主義」〔新潮〕明41・4

↑ 田山花袋

「露骨なる描写」〔太陽〕明37・2

「予の創作」〔ハガキ文学〕明41・1

「自然主義の前途」〔新潮〕明41・3

↑ 長谷川天溪

「近時小説壇の傾向」〔太陽〕明41・3

「予の態度」〔新声〕明41・7

↑ 長谷川天溪

「幻滅時代の芸術」〔太陽〕明39・10

↑ 斎藤信策

「泉鏡花とロマンチック」〔太陽〕明40・9～10

↑ 後藤宙外

「随感録」〔新小説〕明40・10

「歳末偶言」〔新小説〕明40・12

↑ 島村抱月

「文芸上の自然主義」〔早稲田文学〕明41・1

「自然主義の価値」〔同右、明治41・5〕

↑ 出羽の守

「春情文学(再び)」〔時事新報〕明41・1・22

↑ 田山花袋

「文章講壇」〔文章世界〕明40・8

「文章講壇」〔文章世界〕明40・11

最後に、自然主義への反論と他界観にかかわる談話・随筆との関連を考えたい。鏡花は、前引の「予の態度」で、「現実を通して更に最上一層大きな力に到りたい」といい、「芸術は予が最良の仕事也」では、読む間は、「作物其物の中に人を遊離させたい」、そして「読んだ後でも、何か深い印象を残したい」と述べている。シンボリズムにも通じるこうした主張・願望は、未知の文学空間に読者を誘う点で、前引の斎藤「泉鏡花とロマンチック」の「まだ世に知られていない(中略)新しい感情を描いた」という『無憂樹』評価の一節と通底し、「世の中の人」の知らない「微妙な中間の世界」、未知の世界を「作の上に伝えたい」という談話「たそがれの味」〔早稲田文学〕明41・3とも、通じるだろう。「一種微妙な中間の世界」は、現世に脅威と救済をもたらす「おぼけずきのいはれ少々と処女作」〔新潮〕明40・5の「超自然力」の存在する世界であり、それは、「一寸怪」でいう「現世以外」に存在する「別世界」でもある。「旧文学と怪談」〔時事新報〕明42・12・27では、江戸時代の「作物」に「真に鬼気人に迫る」作品は「雨月物語」他少数で、「怪異文学の発展すべき余地は、まだく廣大である」と述べている。「旧文学と怪談」は、怪異文学の可能性を主張した談話で、「一寸怪」を補完するものといえよう。鏡花は、『遠野物語』(聚精堂、明43・6)

を取り上げて、「妖怪変化」や「山男」が生命を得て、都会近くまで「のさ／＼出来らんとする」気配を感じさせると評する「遠野の奇聞」〔新小説〕明43・9〕では、自身の知る伝承を後半で紹介し、柳田と鏡花の競演の様を呈する。それは、「予の態度」で、お化けを「お江戸の真中」に出したいという願望の実現ともいえる。「たそがれの味」にいう未知の世界を「世の中の人」に知らせたいという意図は、ここにもうかがえよう。

以上のように、自然主義への反論は、直接自然主義に言及していない談話・随筆に連なり、他界の存在を「作の上に伝えたい」という鏡花の主張と結びついて、自然主義全盛時代に固有の文学を貫いた鏡花の文学観・世界観を際立たせるものとなっている。改めてシンボリズムの問題、自然主義全盛期の言説への反論や他界観を踏まえた上で、この時期の個々の作品個々を論じて行く必要があるといえよう。

注

- (1) 中村武羅夫『明治大正の文学者』(留女書店、昭24・6)参照。カッコ内の補足は、中村による。鏡花の発言内容から「花袋」の名前が、連想されたものであろう。中村によれば、泉鏡花は「自然主義を憎むこと、蛇蝎のごとくであつた」という。
- (2) 合評会に同席した花袋は、「新小説」の泉君、後藤君(引用者注、後藤宙外)なんかも僕らの正面の敵だった」と述べている。
- (3) 『沼夫人』は、水底で待つ男女を入れ替えた『春昼後刻』の変奏曲である。実際の愛情告白もなく、先に入水自殺をした異性の許に向かう男女、現世を越える愛を描く点で共通している。「第一コート」は、結婚を強いられた女性が寄宿舎で生活する学生の中で愛を告白し、互いに愛を確認するが、自殺をほめめかす。目覚めた学生が足羽川(福井市)で紅緒の草履を発見し、一時後追い心中を思うという内容。夢の中で契る点や男女の一方が先に入水自殺する点で、『春昼』・『沼夫人』に通じる。福井県出身である雄三の作品を鏡花が添削して連名で発表したものと思われる。拙稿「前田といふ書生」について(『泉鏡花研究会会報』平11・7)参照。また、後掲「第一コート」及び「資料」参照。
- (4) 越野論文は、鏡花に象徴主義を認めることは、「鏡花文学を自然主義文学全盛下において認め得るか否かに関わって」いたと指摘、

同時代の文壇に「鏡花を否定しつつ、空想主義、神秘主義乃至は象徴主義を否定しきれない評界(文界)」の「ジレンマ」を看取している。

- (5) 『近代評論集I』(『日本近代文学大系』57、角川書店、昭47・9)所収、「幻滅時代の芸術」、畑実氏注釈参照。
- (6) この他、「ロマンチックと自然主義」・「予の態度」で鏡花は、モーパッサン『鐘の音』(馬場孤蝶訳)であろう。初出は、「新声」明36・3)を取り上げ、ツルゲーネフ、イブセン、ゾラにも言及している。なお、鏡花は尾崎紅葉没後間もない明治三十六年十二月十一日付宙外宛書簡では、「新小説」の新年号に「友人訳のモーパッサンといふがらない処を添削経営して」発表しようとしたと記している。モーパッサンを始めとする外国文学への関心、同時代の文学への関心の深さをうかがわせる。

【参考】

第一コート

鏡花

雄三

消灯のラツパが鳴つてから、心持余程の時を経た。音、声、咳、身動、五百に近き人の数は灯のない三棟の屋を籠めたが、あたりの更けるにつれ、汐の引く如く果ては寢息も聞えぬ。

時に、俊之助は自分一人寝ないのが、何故か恐しく憚られて、寢返の音も、我ながら胸に響く、これが為めに、寄宿舎の寂寞が全く破れるほどに気が怯ける。凝と堪えてみると、頭が痛む、胸が乱れる。思ふ

さま足をばた／＼、やつて、大声でも出したら、すつきりして寝られるだらうが、それは出来ない。いよ／＼眼が冴えると妙なもので、室内は真暗だに、傍に寝てゐる友、棚の背囊、書籍、下に懸けてある剣、帯革、雑囊まで、歴々と形が見える。

ト衰弱した神経に、これは月が出て、窓を照らすのだと思はれる、これに幾分か慰められて、寢台の上へ伸びがたつて、窓帷を颯と曳く、月光秋水の如し。

唐突の月に吃驚して、

「龍田君！」

ぐつすりとも言はず隣の寝台では熟く寝てゐる。

其の筈だ今時分、とまた仰向けに倒れて眼を塞ぐ。時に長い廊下の一端に靴音が起つた。

舎監が巡回するのである。これに夢が覚めたやうになつて少し人心地が着いて来る。通過して、靴音は北棟の方へ曲つて行く。次第々々に遠ざかつて、幽かになつて、やがて消えるとまた寂然とする。ますく眼が冴える。

で、冷たい風が吹かれたらさぞ清々するだらうと、窃と拔出して外へ出た。

寝静まつた長い廊下を通るのを、抜き足、差し足、言ふまでもない、学校では夜中に寄宿舎を出ることを禁じてある。

謹慎な男が犯したのはよくよくのことである。腕を組んで、俯向いて、夜露に冷たくなつた芝生を踏んで、運動場を斜に切つて抜けやうとすると、

余りの気支はしさに、

「貴女は」と声を懸けたが、我ながら咎めるやうであつた。

「はい。」とばかりで怯々する。

「今時分、怎うなすつたんです。」

「つひ、あの此処を通りまして……、何卒御免なすつて……。」

しほらしく詫びる。むかふでも咎められると思つたらう。

「い、え、何、お通りなさるのは関ひません、差支えありませんが、お一人ですわね。」と熟と瞻る。

「口今何時頃でございます。」

と言つて、女は頷垂れたその額を擡げた。トタンに電光のやうに俊之助の胸裡に閃めいたのは、寢覚めにも忘れなかつた宛然その儂。

ふるへ声で、

「十二時過ぎでせう。何方へ被行る、今時。」

「え……毛谷町の方へ行きたいんですけれど、四辻

其処に長方形に地を劃つて、掃清めたやうに土色鮮かに見えるのは、テニスの第一コートである。

俊之助はそれから堤の方へ。

土手下の尾花の根に、一条用水の小川があつて運動場を繞つて流れる。

俊之助はふらふら、とこの川添を辿つて、暫く失心の牀であつたが心付くと、月は何時しか霧にかくれ、あたりは朦朧とかきくれて、唯ならぬもの、気色となつた。

鳥が二声ばかり乾の方を啼いて通る。

俊之助の視線が其の声を追ふと、思ひもつかぬ処に人の姿があつた。

くつきり色が白く、妙齡の婦人らしい。

今時分人の来る処ではないのと思つたが、固より誰何するやうな男ではない。

女の方で五六歩ばかり退つたやうだつたが、また其処で立止つた。衣も、帯も、夜の色に判然せぬが、思做しか悄然してゐる様子。

の薬舗の前で大変に犬が吠えてましたもんですから、怖くつて、此方へ迂回りましたんです、此処まで来て、私慄然としましたわ。」

「怎うかなすつたんですか。」

「はい。其処の藪の処は、人魂が出るつて言ひますから。先刻から、此辺を往つたり来たりしてゐるんです。怎うしやうかと思つて、私泣きたくなりましたわ。」と訴ふる如くに言ふ。

「困りましたね。」しばらく、指を組んで、俯向いて引張りながら、

「貴方、まことに済みませんが其処まで送つて来て下さらなくて……。」

「困つたな、何しろ怎ういふ籠の鳥同然の身体なんですものね。怎うやつて夜中に寄宿舎を出てゐるだけでも、悪くすると、戒飾だ、謹慎だつて騒ぎになります。柵外へなんぞ出やうもんなら……。弱つたな。」

女は便無げな風情である。

「何、貴女、人魂なんぞ出るもんぢやありませんよ。僕が此処に居るから、一人で行つしやい、何も怖いことはありません、直ぐ其処に川市つて材木屋が見えますから……。」

「でも、私、」
「訳やありません。踏切を越すと、直ぐ豊橋です。水の音が聞えてませう。」

耳を澄すと、幽かに流の音が聞える。が、それは足下を行く水ではなく、却つて彼方の足羽川が近く此処に通うのである。

「聞えるでせう。一町ないくらゐ、一思ひですよ。」
「私、ひよつとかしたら……。」

「大丈夫、那麼ことがあるもんですか。」と勇ましげに言ふ。

「二寸、其処まで、可うござんすから送つて下さいな。ねえ、秋谷さん。」

秋谷さん！。俊之助は驚いた。この人の口から自分の姓を呼ばれやうとは。

懐に寝たこともありません。真の阿父や阿母は、顔さへ知らないのよ。養父だつて、養母だつて、怎麼にか可愛がりますけれど、皆他人ばかりだと思ふと心細くなります。」と両袖に顔をあて、泣いてゐたが、

「真の母はねえ………。夕方なんぞ内の裏へ来ちやあ、塀の外に泣いてゐたのを見た人があるつて言ひますわ。生きてゐたつて何一つ楽しみがあるんぢやなし、一日も早く阿母のお膝元へ行かうと思つたんですけれど、貴方にお目に懸つてから、私は未練が残りました。何だか将来に楽しい国があるやうに思はれて、いそぐして、それを頼に生きてゐたんですけれど、もうく厭、すつかり厭になつてしまつたわ。それに、お婿を迎れて言ふんですもの。」と泣いじやくりをし、

「凱旋軍人だつて、騎兵の少尉さんだつて、親類だつて、内の血統が絶えるからつて、私は那麼なこ

「え!？」

「ねえ秋谷さん。お願ですわ、私ももう行くにも行かれず、引返すとまた犬に吠付かれさうだし、怎うすることも出来ないですから。」

「怎うして僕の名を知つてゐらつしやる?。」

「怎うしたつてこともありませんけれど、唯知つてゐますの。」と莞爾した。

「だつて、」

「お姓名ばかりぢやありません、貴方の事、皆知つてゐますわ。」

「貴女は、毛谷町の……。」

「はい。糸屋の……でございませわ。」

「そして……。」

「阿母さんが違うんですもの、阿母さんが違うんですもの……。」と言ひかけて、ほろりとした様子で、
「兄さんもないの、妹もありません、身内の者つちや従姉妹一人ないんですもの。生れると襤褸のま、で内へ貰はれて来たのですつて。一夜、親の

とは知りません。怎麼我が儘でも、つひぞ聴いて下さらなかつたことはなかつたのに、今度ばかりは幾許お願ひ申しても許して下さらないんですもの。私はこの世にゐる効はありませんわ。今夜窃と内を遁出して来ましたんですけれど、もう貴方のお顔を見ることが出来ないのかと思ふと、私は心が残ります。もう一度お目に懸らなくつては、死んでも死切れないやうに思つたのに、怎うして叶ひさうもないことが叶つて逢ふことが出来たのは、私の一念が届いたんですわ、秋谷さん。」と、女は声を呑んだ。

話が身に沁むと胸が迫つて、俊之助もともに眸を湿ませたが、つと寄つて、犇とその頸を抱かうとすると、髪の色も、衣の綾も、その儘見るゝに色が薄れて、姿は幻の手にも止らぬ。

我にもあらず、

「お玉さん。」

と十歩ばかり前途の方へ、影がふらふらと辿つて

行く。

「お玉さん!。」

心付くと、何時の間にか寝台をづり出して、窓に絶つて、戸外を見てゐた。

今は現の境も覚ええず、絲屋のが、夢に暇乞に來たのだと思つたから、硝子戸をガタビシ、身を躍らしてドンと下りた。

夜露に足が冷りとした。空には靄も霧もない、水底のやうに澄渡つて、二十日に近い月夜である。

堤の上に登つた時、終列車であらう、一聯の車輛、轟々と鳴つて過ぎたので、或はお玉が汽車に軋れて、物凄いやうな美しい面に、千筋の黒髪を乱しながら、血だらけになつて、線路の上に横はつてゐるのであらうとも思つたが……。

何事もなく、傍の叢で名も知らぬ虫が哀れに鳴いてゐた。

豊橋の上まで行くと、俊之助はト胸を突いた。ト言ふのは、一足紅緒の草履の慌しげに脱棄て、あ

つたことである。

流は此処が淵であるのに。

沈んだらうと思ふあたりは、夜の為か凄いやうな紺碧の色に淀んでゐる。凝と見てゐるとぐらぐらと目が廻る。其の儘亡き跡を追はう、と俊之助は欄干に足を懸けた。

が、念を来世に馳せた瞬間、我にもあらず一足退つた。

噫!、渠は遂に疑惑多き人の子たるを免れなかつた。
〔新小説〕明42・4



【資料】
前田雄三と推測される肖像
(前田国郎氏蔵)

『無憂樹』の語りとイメージ

『無憂樹』は、明治三十九年六月に日高有倫堂から刊行された泉鏡花の中編小説である。大正六年四月には成光館から再刊され、翌年一月作品集『紅梅集』（春陽堂）に収録された。『紅梅集』収録時に「無念」「花桐」の二つの章題を削除して「花一輪」に吸収した他、初版の本文との間に多少の改変が施されている。自筆原稿の原題は「水百合」であった。

この時期注目されるのは、『無憂樹』を刊行した日高有倫堂との関わりである。一月に『誓之巻』（初出は、『文芸倶楽部』明29・1・30・1）、六月に『無憂樹』・『ななもと桜』（初出は『新著月刊』明30・11）を相次いで日高有倫堂から刊行、六月に出版された『明治大家文集』にも「斧の舞」（初出は『明星』明34・1）を寄せている。『無憂樹』以外は、すでに発表済みの作品である。おそらく、雑誌発表のままだった旧作の刊行とあわせて、新作書き下ろしの約束が日高有倫堂との間に交わされていたものと考えられる。岩波書店版『鏡花全集』別巻（昭51・3）には、この頃（明治三十九年一月から六月の間）のものと推定される日高有倫堂宛の「書簡下書」が収録されている。鏡花はそこで、「日本」読売「都」など新聞九紙と「明星」「中央公論」など雑誌十一誌をあげ、「これだけは屹と御都合くだされ度（中略）貴店の御名儀にて御送下され度候」と自作の寄贈を日高有倫堂に依頼している。「書簡下書き」で見過させないのは、

これらのなかに「早稲田文学」や「新潮」など、鏡花を尾崎紅葉没後の旧文学の主要作家として批判していた自然主義系の新聞・雑誌が含まれていることである。しかも、「日々」(東京日々新聞)には「嶋村抱月」、「太陽」には長谷川天溪というように文芸批評欄等の主宰者の名前(十五名)が雑誌・新聞の右上に明記されている。新刊とはいえ、旧作にこれだけの周到さは考えにくい。この依頼は、『無憂樹』についてのものと考えられる。

このように本作は、自然主義のうねりをひしひしと感じつつ、体の不調に耐えながら、熱意をこめて執筆され、当代の批評家に自己の文学の正当な評価を問う渾身の作とみられる。例えば、明治三十八年四月「中央公論」掲載の高山絳雲「鏡花君に与ふ」には、「君の小説は、近来頻りに批評家から批難されつゝある、罵倒されつゝある」と記す状況があった。同年十二月「文庫」でも「鏡花ますく邪道、遂に救ふべからず」と記すありさまであった。実際には、鏡花の希望とはうらはらに、文壇の注目を集めるには至らなかったようだが、しかし、作品の評価は決して低くはない。

正宗白鳥(署名、劍菱)「文芸時評」(読売新聞「明39・7・8付」)は、「着想も結構も、当今の他の作家とは異なり、時代の風潮に超然として夢幻を語るどころ面白し」と評価した。また、斎藤信策「泉鏡花とロマンチック」(「太陽」明40・9)は、「世俗」を越えた、「摩耶夫人に対する信仰」がそれぞれの母の「心に閃いた時に(中略)通うた」お米と兼長の愛、冒頭と「最後の月夜」の景色、「因縁の説を尤も巧妙に描いてゐる」点を評価している。数年後の生田長江「鏡花氏の小説」(明44・6)も、「神秘家としての鏡花氏は、因縁の観念を持出して、『無憂樹』のお米と兼次とを前世からの同胞にした。」というように、斎藤信策の見方を継承している。戦前の成瀬正勝「鏡花論」(「文学」昭13・1)も、ほぼ同様の評価を下している。³⁾ 昭和六十年前後の研究では、野口武彦「鑑賞日本現代文学③ 泉鏡花」(角川書店、昭57・2)が、「金権的俗物たちに迫害される名匠とその一家の物語」と評し、「摩耶夫人的存在」を「母性原

理の顕現」として捉えて、結末近くの「月裡法廷」で「黄金の千鳥」を「飛ばした」ものを追求し「鏡花の心象コンテキスト」において「摩耶夫人像と亡母千鳥の霊」が「まったく同位」となった「母性デウス・エクス・マキナー的介入」が結末に「托されている」と指摘している。また、平井修成『研究・泉鏡花』(白帝社、昭61・5)は、「家の職業」に取材した名工物としての問題点を指摘した。

以上のように、『無憂樹』の従来の評価・研究は、主にお米・兼次の「因縁」、摩耶夫人信仰と作品のプロットとの関わり、夢幻的な結末の「月裡法廷」の意義を中心に検討されてきたといつてよい。このほか、『無憂樹』は、名工もの・裁判ものとしての側面、前年刊行の『伊勢之巻』に続く伊勢ものでもあるというように多様な要素を含んでおり、問題が多い。作品構成の観点で注目されるのは、特異な語りとイメージの連鎖だが、この点についての考察はない。

小稿の目的は、この点を中心に作品の成立背景をたどり、方法と構造を考察して「月裡法廷」における千鳥の香合と次郎助の救済の意味を検証し、『無憂樹』の広告(初版巻末所収)にいう「美しき恋を秘めたる一大宮殿」の世界を探ることにある。なお、以下の引用は初版本による。

1 成立背景

この作品は、伊勢古市の白銀師田原兼長が亡き妻千鳥への愛をこめて作った一代の名作、金無垢の千鳥の香合が、兼長の子兼次・次郎助の働きや従姉妹の芸者お扇(本名お襟)・持ち主津田屋高作の妹お米の献身、さらには巡礼六部・予審判事東条六郎らの助力によって、時計の鎖にされるのを免れるというもので、香合を隠して捕らえられた

次郎助をお扇が身に代えて救おうと犠牲となったことが実を結んで次郎助が無実となる上に、お扇の遺言がなかだちとなって、お米と兼次が結ばれるという結末になっている。

タイトルの『無憂樹』は、無憂寺の縁起を記した一節に

神泉の汀、其の樹蔭に、世尊降誕したまひたる、波羅叉―即ち無憂樹は、其樹安住、上下正等、枝と葉と布き垂れて、翠紫相暉き、孔雀の項の粧あり
(第二十七)

とあることから明らかのように、釈尊誕生の際摩耶夫人が右手にした「波羅叉」をさす。初版本の扉には、釈尊誕生を述べた「其樹安住。上下正等」から「摩耶夫人。即拳右手。猶如空中出妙色虹」までの経文が引用されている。出典は、「樹下誕生品」(『仏本行集経卷七』)である。しかし、釈尊誕生は、『無憂樹』と直接関わりがない。作品の結末とタイトルとを照応させれば、中村元編『仏教語大辞典』上巻(東京書籍、昭50・2)にいうのと同じ「瑞兆を現わす」(阿輪迦樹)の項参照)意味で用いられている。「瑞兆」、それは、執筆当時の作者自身の願いでもあった。

周知のように、鏡花は、明治三十八年二月二十日に祖母を亡くして以来体調に恵まれず、「病氣保養」のため同年七月下旬から「相州逗子九五七番地」に移り住んでいた。翌三十九年は、発表する作品も減少し、一月の『海異記』(『新小説』)・『月夜遊女』(『太陽』)・『式部小路』(『大阪毎日新聞』1・1〜27)の後、『無憂樹』を刊行した六月までに、小品「術三則」(『新小説』)と尺牘「鳴濤館より」(『手紙雑誌』)を発表したにすぎない。以後十一月、十二月に『春昼』(『新小説』)、『春昼後刻』(同)を発表するまでの創作は、『お弁当三人前』(『文芸倶楽部』明39・7)のみで、『花菖蒲』・『不思議』(『名家短編傑作集』益世堂、同・9)・『さら解』(『太陽』同・11)は、旧作の再掲である。⁵⁾『お弁当三人前』も、自筆原稿の検証から明治二十七年夏の執筆であることが指摘されている。また、同年十二月には、長編の戯曲『愛火』(春陽堂)を刊行したが、この作品も明治三十五年執筆の未定稿『新泉奇談』の構想に基づくことは明らかで、⁶⁾純然たる新作

とは言いがたい。つまり、この年鏡花が純然たる創作として発表したのは、一月発表の三作品を除けば、『無憂樹』と『春昼』『春昼後刻』だけなのである。⁸⁾なお、『無憂樹』刊行時を再考すれば、この時期登張竹風とハウプトマン『沈鐘』の翻訳にあたっていたことが、同年四月から七月の『新小説』の近刊広告からわかるが、結局翻訳の発表は翌年五月にずれ込んだ。また、同じ四月には、「中央公論」『春季大附録号』の予告に執筆予定者として名前が挙げられながら、作品は掲載されなかった。いずれも、体の不調が影響しているだろう。『無憂樹』は、そうした状況において発表された半年ぶりの力作といえることができる。

作品の舞台として伊勢が選ばれたのは、まず明治三十五年二月に「新小説」特派員として柳川春葉と共に訪れた地であったこと、この地が「神路山、神の森、千歳の杉の緑濃く、五十鈴川の(中略)清く流れて灌ぐ空の、伊勢の海」(『無憂樹』第二十七)というように、特別な聖地であること、特に太陽神天照大神の弟である月の神(ツキヨミノ命)を祀る月読宮もあって世俗の秩序や価値観に対峙し、これを越える「月の影」の降臨を描く構想に適していたためだと考えられる。たとえば、『宇治山田市史 下巻』(同市編、昭4・3)に収録された神楽歌「月読宮」の「月と日と何れか増る鏡山、月こそ増れ夜を照らせば」という一節は、『無憂樹』の圧巻「月裡法廷」の構想と通うものがある。なお、「月裡法廷」では、月夜に千鳥が鳴き、やがて判事東条の手に止まって千鳥の香合となる場面が描かれている。斎藤信策「泉鏡花とロマンチック」(前引)は、この千鳥を「種彦の時鳥的」だと述べている。たしかに『逢州執着譚』(文化9)で陰險な正室に殺された時鳥が、姉の呼びかけに従ってまず鳥として姿を現し、「不如帰々々と啼めぐり。巴之丞が膝のほたりにおつると見えしが。白木の位牌となりける」という一節(第七。引用は、帝国文庫『種彦傑作集』による。博文館、明27・2)に基づいている可能性がある。鏡花は、「赤インキ物語」(『太陽』明30・9、31・2、及び「旧文学と怪談」(『時事新報』明42・12・27付)で『逢州執着譚』とその前編『浅間嶽面影草紙』に言及しており、明らかに愛読

していたからである。

明治三十五年五月に刊行された『伊勢之巻』（春陽堂）につぐ伊勢ものの第二作『無憂樹』も、會遊の地の実見に基づくものと考えられる。但し、次郎助が香合を隠す無憂寺は、五十鈴川の上流にあるというが、『宇治山田市史』などによっても確認できない。摩耶夫人の祀られた寺についての記述もない。無憂寺は、おそらく鏡花が、「十歳ばかりの頃」に「父とともに詣で」たという石川県松任現、白山市の行善寺を想定しているものと思われる。『無憂樹』で、近くの川べりに「合歓の樹が沢山ある」第三十六のこと、「月、物蔭に氣勢する」(第二十七) 様子が摩耶夫人を祀った御堂にあること、「本堂の階段」に「六部」がいて方丈の「心添へ」で茶を飲んでいること(同)などが、行善寺の摩耶夫人に詣でた思い出を描く「一景話題 夫人堂」(新小説 明44・6)と一致する。「人丈ばかりにおはします、世にも妙に美しき、迦瀨羅城の後の宮、摩耶夫人の立像」という表現も、行善寺の摩耶夫人にふさわしい。また、これも後年のことになるが、春陽堂版『鏡花全集』巻六(大14・7)の口絵に本作の原稿と共に掲載された摩耶夫人像の木版は、現在行善寺の本堂にある版木と文言・意匠ともに合致する。おそらく、明治・大正期に同寺で配付されたお札を『無憂樹』を収録した『全集』巻六の口絵としたものであろう(資料1)。この作品は、『夫人利生記』(女性 大13・7) 末尾にいう「摩耶夫人の御像を与さうとした」最初のもので、伊勢を舞台としながらも、少年時の鏡花の記憶を再構成する側面があるといつてよい。

『無憂樹』は、

砧打つや、孫六屋敷、志津屋敷、美濃路にか、りて、と前書した、それは昔の刀鍛冶、これは伊勢なる打金匠。と書き出されている。いうまでもなく、『五元集』に収録された其角の俳句「砧きかん孫六屋敷しづ屋敷」の上五を「打金匠」に適合させるため改変して引用したものである。⁹⁾ 其角の俳句は、名工の屋敷跡が田畑と化しているの

を知って「世の転変」(上野洋三校注「あら野」、『新日本古典文学大系・芭蕉七部集』岩波書店、平2・3)を憂えるもので、「一頃きこえた細工の上手」白銀師兼長の「今の時世のかはりやう」を描く本作の始まりと合致する。と同時に、白銀師兼長には、鏡花の父清次が投影されているだろう。田原家の家族構成は、父兼長と二人の息子、そして祖母の四人だが、これは母没後の泉家に等しい。『聲の一心』(春夏秋冬 冬の巻『餅むしろ』明治28・1)は、明治二十七年一月九日に亡くなった父清次をモデルにした作品だが、名人肌の彫金師一心は、兼長と同じく謡曲「小鍛冶」を口ずさんでいる。父をモデルにして名人の作った名品が、俗物に勝利する物語がこの時期に書かれた理由は、この年が、父清次の十三回忌にあたるからだと思われる。¹⁰⁾ 『無憂樹』は、十三回忌を迎えた父への手向けが直接的な執筆動機であったと考えられる。

父の十三回忌にあたって、『無憂樹』を執筆した鏡花は、一方でこの作品によって当時の体の不調と文学的な危機を乗り越える契機を得ようとしていたのではなからうか。例えば、本書「自然主義と鏡花」で紹介したように、本作執筆直前と思われる明治三十九年二月には、羚羊子「新年の小説」が「時勢の推移」によって、鏡花文学は文壇から退かざるを得ないと指摘していた。本作には、窮境に追い込まれた作者の「瑞兆」を見いだそうとする願いが込められているように思われる。事実『無憂樹』には、「瑞兆」を導くための果敢な試みが、作品内の語り手のあり方と香合・次郎助の救済に奔走する女性それぞれの連関において、なされている。以下、この点について考えたい。

2 語りの連鎖

『無憂樹』は、全五十四節に分かれ、二十の小見出し(初版本)からなる。

全五十四節は、作品内の時間・場面の設定によって次の九つに分けられる（*は会話する人物）。

- ① 十一月二十五日夕刻・兼長宅
「花鳥たがね」(第二)～「玉の台」(第六) *お扇と次郎助、お扇・次郎助と祖母
- ② 同日夜・同右
「田原平兵衛」(第七)～「鬼門」(第十二) *兼長と兼次・祖母
- ③ 同日夜・扇屋
「扇屋、ひな唄」(第十二～第十五) *高作と庄九郎、
- ④ 同日夜・扇屋
「辻うら」(第十六)～「無念」(第二十六) *兼次とお扇
- ⑤ 十二月九日昼過ぎ・無憂寺
「花桐」(第二十七)～「投松明」(第四十) *次郎助と巡礼六部
- ⑥ 同日夜・警察署
「刑事部屋」(第四十二) *刑事と次郎助
- ⑦ 数日後の午前・扇屋、数日後の午前・扇屋
「まぼろし」(第四十二～第四十五) *扇屋女主人と津田屋の女中お杉
- ⑧ 後日夕刻・東条邸
「東条判官」(第四十六～第四十七) *お米と判事東条・妻松子
- ⑨ 同日夜・千鳥とお扇の墓

「しるしの松」(第四十八)～「白き炎、月裡法廷」(第五十四)

*兼長とお米、兼次とお米、*東条と次郎助・高作

右において注目されるのは、大部分が基本的に会話によって構成されていることである。会話の多くは、一方からの情報の伝達であって、会話というよりは、むしろ作品内の登場人物による語りである。その問題点は、次の二点である。まずある場面での場の出来事全てが語られることはなく、後の会話のなかで前章の出来事の続きや言動のその後が語られることである。しかも、このような作中人物の語りや別の場所での別人によって引き継がれるということが多い。

たとえば④「無念」(第二十五～二十六)で兼次がお扇に語るのには、父兼長が呼び出しに応じて行った津田屋で高作と庄九郎から受けた屈辱であり、高作・庄九郎から聞かされた千鳥の香合の処分である。だが、これは②「田原平兵衛」(第七～八)で兼長自身が兼次と祖母に語ったことの続きである。「田原平兵衛」で語られたのは、高作と庄九郎に会うまで、兼長を彼らが呼び出した事情については触れられていない。つまり、②「田原平兵衛」における兼長の語りの内容は、④「無念」での兼次の語りのなかで、ようやく明かされるのである。また、⑤の「花園、宮殿」(第三十一～三十二)・「ひとり寝」(第三十三～三十五)で次郎助が六部に語るのには、④の「無念」(第二十五～二十六)で兼次とお扇が高作に香合の処分取りやめを談判した後の出来事である。「無念」(第二十六)ではお扇に促された兼次が、折から扇屋に来ていた高作に談判しに行こうとするところまで、談判する場面そのものは描かれていない。兼次が扇屋にお扇を訪ねた顛末は、④「無念」と⑤「花園、宮殿」・「ひとり寝」という二つの場面の会話によって明らかにされるのである。また、⑦「まぼろし」(第四十二)で扇屋の女主人が津田屋の女中お杉に語るのには、お扇が⑥「刑事部屋」で自白を迫られる次郎助を偶然目撃したこととその前後の経緯で、「刑事部屋」(第四十二)に続く出来事で

ある。「刑事部屋」では、眠りかけた次郎助が刑事に蹴られるところを眼にしたお扇が「目を廻した」と記すにすぎない。⑧「東条判官」(第四十六～四十七)でもお米が判事東条にお扇の遺言の実行を語るが、⑦「まぼろし」では遺書の存在に言及するのみで、その内容についての説明はない。

以上のように、この作品では、作中人物の語りを前面に据え、ある場面でそれが完結しないうちに場所と人物を変えて新たな作中人物の語りによって前の場面の成り行きを描く。①の続きは、その場に同席した人物によって②で語られ、①で語られたことの続きは、その場に同席した別の人物によって④で語られる。また、④でこれ聞いた人物が、③である人物によって語られたことを④で語る。さらに、④の続きをその場にいた人物から聞いて別の人物に語る。⑥の続きは、その場に居合わせた人物から聞いた別の人物が⑦で語る。このように、作品内で語りが連鎖・循環しているのが、特異な点である。

前の場面で得た情報を別の人物に語る人物は、右のように本作では当然のことながら、前の場面では聞き手の立場にある。ここから、第二に注目すべき点がでてくる。それは、聞き手が新たな場面の語りや行動の当事者(主体)となることである。②の「田原平兵衛」(第七～九)で兼長が津田屋での屈辱を語る場面の聞き手は、兼次と祖母である。兼次は、そこで兼長が津田屋でうけた屈辱と香合の処分を聞き、④「無念」(第二十五～二十六)でお扇に兼長から聞いたことを語る。また、③「扇屋、ひな唄」(第十二～十五)で香合から「純金三百匁」をとりだすという高作と庄九郎の対話を聞いたお扇は、庄九郎が香合を時計の鎖に溶かす際金を詐取する計略を見抜き、④「花一輪」(第二十三～二十四)で兼次に伝える。

このように、作品の前半では作中人物の語りが、新たな語りを生み出している。また③「矢羽の簪、むし眼鏡」以下の聞き手は、新たな語りを生み出すだけではなく、さらにより能動的な働きをみせるようになる。すなわち、「矢羽の簪、むし眼鏡」(第二十二～二十三)・「花一輪」(第二十三～二十四)・「無念」(第二十五)で兼次の語りを聞いたお扇は、「無念」(第二十六)で折から高作と庄九郎が扇屋の座敷で飲んでいることを兼次に教える。そして、香合の処分取りやめを直談判するように勧め、それが不首尾に終わると別の場所で飲みなおそうとする高作を追い、自らの働きかけによって香合を守ろうとするのである。また、⑤「花園、宮殿」(第三十一～三十二)・「ひとり寝」(第三十三～三十五)・「投松明」(第三十六～三十八)では六部が、次郎助から兼次とお扇の直談判の不首尾とその後の兼長一家の憔悴や香合の一時取戻しなどの経緯を聞く。そして、「投松明」(第三十九～四十)以下で次郎助に自首と香合の隠し場所の黙秘を促すだけではなく、自らも香合と次郎助の救済をはかる。また、⑦「まぼろし」(第四十二～四十五)でお扇が「身に代えて」次郎助を救おうと自殺するのも、次郎助が「懲役に行く」ことを聞いた結果の行動とみることもできるだろう。

『無憂樹』における聞き手は、右のように、新たな語り手となるだけではなく、作品世界を左右する決定的な行動をする。そのような言動を聞き手に促すのは、前の場面の聞き手、つまり語りと引き継いだ人物である。たとえば、上述のように、④「矢羽の簪、むし眼鏡」から「無念」で兼次は、兼長が津田屋でうけた屈辱と香合の処分をお扇に語る。屈辱と香合処分の衝撃を直接体験した兼次ではなく、その子供である兼次が語ることによってどのような効果が生じるだろうか。津田屋における千鳥の香合の出来ばえについての受け答えを語るなかで兼次は、「父上は泣いていつたが。」(「無念」第二十五)と言い、香合の処分を止めたいという願いを口にする場面では、

さしあたって千鳥の命が助きたい。(中略)庄九郎の手にかけるのは残念だ。つて、胸を掻きむしつていふのぢやないか。

というように、兼長が津田屋で味わった屈辱と衝撃を語るしぐさや身振り、表情、話し方などを、ありのままにその場にいなかったお扇に伝える。つまり、前の場面で聞き手であった兼次が次の場面で語る時、新たな語り手兼次

は、前の場面における兼長の語りに、感情の表れとしての身体の動きや表情を添加して新たな聞き手に伝えるのである。また、右引用に続いて兼次が、

襟さんも、彼奴の事は内々で聞いて居やう、ねえ、母様に何だったとき。

というように、前の場面での聞き手が新たな語り手となる際に、前の場面における語り物の背景を補足して新たな聞き手の理解を深めている点も見逃せない。さらに、右引用に続く、「そんなこんなで、真個に父上の心が察しられるんだからね、(兎も角、信心をさつしやい。)」と祖母さんがなだめてさ。」にみられるように、その場に同席した別の人物の反応や新たな語り手としての自分の感想や印象を付け加えることで、新たな聞き手に情緒的な増幅を伴ってその内容を伝えている。こうしたあり方は、地の文の語り手にはできない。ここでは、肉親同士で語り引き継がれることで、情緒的な増幅は、一層強いものとなっている。香合は、父にとっては亡き妻の、子にとっては亡き母の形代としてかけがえのないものであり、その消滅はいずれもにとって座視できないものとされているからである。

一方、これに対して新たな聞き手においても、語りに伴う情緒的な増幅への共振がある。④のお扇、兼次から「相談といつてね、(中略)外に相談の仕手はなし。(中略)時代違ひの父上の事なんだから、」(「矢羽の簪むし眼鏡」第二十二)と聞かぬやいなや、「はあ、はあ、」といきざせはしく、身に代へても、と思ふ人の、一方ならず苦勞の様子。驚破といへば死にもせう、と逸る身うちをふるはしながら、一心に打仰ぎ、身体を捧げて聞く「同前」というように、新たな語りへの共振を示す。次郎助の語りを聞く巡礼も同様であって、かつて兼長と結婚する前の千鳥に恋い焦がれ、千鳥が「人の妻」になったと聞いて、巡礼六部になった聞き手は、次郎助が、「俵といふ白銀師の次男だ」と名乗ったとたん、「右手」を「ふるふる」震わせる(「惑星」第三十)。このように、⑤の聞き手六部にとって、千鳥の遺児、

次郎助の窮状は全くの他人事ではないのである。

以上のように、この作品では作中人物の語りをその場で完結させずに、聞き手が新たな語り手となる。新たな語り手は、単なる情報の伝達だけではなく、前の場面における聞き手として目にした身体的な動作とそこから生じる印象・感想、その場にいた他の人々の言動などを交えることによって、情緒的な増幅を伴った新たな語りを生み出し、情緒的な増幅に共鳴する新たな聞き手が、作品世界で重要な働きをする。つまり、『無憂樹』では、作中人物の語りがその場の聞き手によって別の場面での新たな語りとなり、新たな語りの聞き手が、その言動によって作品世界を構築していくという語りの連鎖、聞き手が語り手となる連鎖が重要な役割を果たしているのである。なお、地の文の語り手は、たとえば、「鬼門」(第十)で、兼長が津田屋で被る屈辱を語り始める前に、先代の主人が兼長を鼻屑にしたことと高作の代になって疎遠になった事情を説明し、次のような感慨を付け加えている。

其の津田屋から一寸来い！ 良い相談でないことははじめから知れて居たに、不念なりし平兵衛。

このように、地の文の語り手は、兼長一家とその縁者に近い立場に立っている。一方、高作に香合を鑄つぶすよう勧めた張本人で、兼長のかつての内弟子庄九郎については「扇屋、ひな唄」で、「此奴弁舌爽に、うまれつきの追従輕薄」(第十四)というように批判的に紹介していた。地の文の語り手も、兼長一家に加担しつつ語り進め、ときには、あからさまに感情移入している。聞き手が語り手に転じ、その時点で新たな聞き手に情緒的な増幅を伴ってその内容を伝える本作では、こうした地の文の語り手のあり方は、情緒的な増幅をより一層はかる意図があつて採用されたものと考えられる。

管見によれば、処女作『冠彌左衛門』から『無憂樹』までの作品で、作中に語り手と聞き手が設定されているものは、八十二作ある。このうち、『無憂樹』と同じ語り手と聞き手のあり方が、試みられる例として、『照葉狂言』(「説

売新聞」明29・11・14（12・23）・『七本桜』（「新著月刊」明30・11）・『黒百合』（「読売新聞」明32・6・28（8・28）などがある。

『照葉狂言』の「仮小屋」は、貢が広岡の継母から「養子が、婿が、大変な男で、あんたを逢はしたりなんかしようもんなら……其れこそ。」と聞くところで終わる。その続きは、聞き手であった貢が次の「井筒」で、「あ、養子が大変だと、酷いんだとさ。」と小親に話す。その際「あの、恐い継母が、姉さん、涙を流して、密と話した位だもの。」というように、前の場面の語り手の身体的精神的な側面も含めて説明している点も、『無憂樹』と同じである。しかし、こうした連鎖は「仮小屋」から「井筒」にかけての「カ所」だけである。『七本桜』では、資吉の妄執ともいうべき恋心を髪結いのお欽から聞かされた清子が卒倒し、意識を取り戻したあとお欽に語ったことを聞き手であったお欽が資吉に語る。ただし、清子が「覚悟をした風でしみぐいっつた」という語りの内容そのものは、明らかにされていない。また、『黒百合』では、島野が花売りのお雪に声をかける場面で、島野の用事をここでは語らず、湯の谷の嬸がお雪から島野の用事を聞き、夜中に女を連れだす島野の魂胆を見抜いてお雪に外出の取りやめを勧め、さらに納戸に居合わせた瀧太郎にこのことを語るといふ場面がある。しかし、これら展開は地の文の語り手によって説明されている。このように見ると、『無憂樹』における語り手の連鎖は、これらの作品以上に徹底しており、意識的かつ野心的な試みといえることができる。

作品内の語り手その場で完結させないで、聞き手が別の時空で新たな語り手となって語るといふあり方は、この作品では聞き手の能動性の呼び水となっており、聞き手の能動性によって作品展開をはかる構成は、プロットと深く関わっている。語り手の連鎖は、「千鳥の命」を「助けたい」、さらには次郎助を懲役から助けたいという兼長一家の願いをいかに達成するかという方向に展開する。作中人物の語り手を契機に聞き手を新たな語り手とし、作品世界を左右する行動を促す構造も、全てこの点に向かって収斂しているのである。

3 イメージの連鎖と「月裡法廷」

『無憂樹』には、もう一つ特異なものがある。それは、お扇・お米と兼長の亡き妻千鳥との連関性である。この三者を結び付けているのは、まず、摩耶夫人への信仰である。「ひとり寝」(第三十五)で次郎助が祖母から聞いたことを巡りに語る一節に、「母上が信心で(中略)津田屋の先の女房も矢張摩耶夫人様が信心」というように、千鳥とお米の母は、摩耶夫人を信仰していたのであり、お米も摩耶夫人を信仰していたことは、「投松明」(第三十六)における住職の「お米様といふ嬢さんが、時々。また誕生日には、毎歳欠かさず拝みにござる」という言説から、明らかである。またお扇も、「刑事部屋」で次郎助を「介抱」する時、「ひとへに摩耶夫人のお名を唱へ」たと遺書の中で記している(第五十三)。お扇もまた、摩耶夫人を信仰していたのである。

無憂寺の摩耶夫人について地の文の語り手は、「花桐」(第二十七)で「いみじき後の宮」が「母君の供養のために、摩耶夫人を祭らせた」のだと述べている。このように、無憂寺の摩耶夫人は亡母追慕のために祀られたのであった。「投松明」(第三十六)では、次郎助が「明いやうなお後の姿」を拝し、「何だか生きて居て母様を見るやうだつけ」という⁽⁴⁾。摩耶夫人は、いわゆる母恋とも関連することがわかる。以上に加えて、同じく「投松明」(第三十九)で次郎助が香合を預けた時、摩耶夫人は「莞爾したの。あの、右の手がふつと動いた」とあり、「ひとり寝」(第三十五)で次郎助は「お寺の庭の、菖蒲の池へ倒に落つこちて、危く死なうとした、浅黄のつけ紐が岸の鄭蜀にからまつて助かつた事もある、他ならぬ几帳様」と「お祖母さん」から聞いたという。「浅黄」はここでは、次郎助の命を救うものの存在を象徴するだろう。「几帳様」は、摩耶夫人をさす。「浅黄のつけ紐」が岸の鄭蜀にからまつたのは、摩耶夫

人による救済とみてよい。¹⁵ 以上のように、摩耶夫人は兼長一家の立場に立つ三人の女性と関わり、母恋と救済のイメージを担っているのである。

もう一つ見逃せないのは、月のイメージである。『無憂樹』は、宵空に「三日月」(第二)のかかるころお扇が兼長の家を訪れるところから始まる。兼長の家にお扇が入る場面を、地の文の語り手は、「女の姿は宵月と、内と外に入れかかった」(第四)と述べる。作品冒頭でさりげなくお扇と「月」の結びつきが示唆されているのである。お米については、「しるしの松」(第四十九)で「月の下なる其の姿、月の都に召さるべき、月恥かしき身」とある。お米と月との深い結びつきは、このように明示されている。さらに、これに続く場面で兼長がお米を「兼次の嫁」として亡き妻に紹介する際、兼長は「主は天上か、」と言つて月を仰ぎ、それに応えるように亡き妻の名を持つ「川千鳥」が「ちりちりと二声三声」鳴く。¹⁶ 兼長の亡き妻千鳥も、月と一体のものとして捉えられているのである。このように月は、さりげなくお扇とともに点描され、お米の将来迎え入れられるところとして示唆され、次いで兼長の亡妻千鳥と一体のものとなる。さらに「しるしの松」(第五十)では、千鳥の墓に葬られたお扇にお米がなすべなき絶望を嘆くが、その時地の文の語り手は、

墳を抱いて(中略)身悶すれば、墓も斉しく打揺らいで、松影颯と啼き落す、月の空の千鳥を聞け、静な月夜も動くのである

という。お米の嘆きにお扇・千鳥も、そして月夜でさえも連動するものとして、描かれている。それまでの個別的呢なそれぞれの月とのつながりが、ここでは三者に及んでいるのである。以上の展開を月のイメージの連鎖ということができよう。このように、お米・お扇・千鳥のいずれにも「月の人」のイメージが付与され、連鎖的な広がりを見せながら「月裡法廷」に至るのである。

ところで、「花桐」(第二十七)で地の文の語り手は、摩耶夫人像と御堂を「階の前なる常夜灯、長に明星の光を放ち(中略)月、物陰に氣勢する。(中略)樹下におはする風情。左手を胸に合掌して、衝と右の手を上げさせ給へる、花の霞の天衣ひらけて、戸帳を射通す虹の色、月の前に鬚髯く状に、御袖の端、幽にこぼれて見え給ふ」として、月に言及している。右のように、摩耶夫人も「月の人」だと示唆している。「月の人」のイメージは、お扇・千鳥・お米という、香合と次郎助を救済する三人の女性に共通し、さらに摩耶夫人にも同様のイメージが与えられている。三人の共通するところは、摩耶夫人同様の「姿の美しさ」と「心の清らかさ」といつてよい。

以上のように、兼長一家の窮状を救おうとする女性は、摩耶夫人への信仰と「月の人」のイメージがあり、摩耶夫人をも含めて「清き曇りなき靈魂」(第五十三)を体現し、次郎助の救済をもたらす。兼長から知らされた香合の危機が、語りの連鎖によって、兼次、お扇、お米、判事東条へと伝えられ、一方で次郎助、巡礼へと伝えられてそれぞれに聞き手の行動を促す。そして、語りの連鎖によって生まれた聞き手の能動性が行き詰まり、月をめぐるイメージの連鎖の極まるところに、突如降臨するのが「月裡法廷」である。

「月裡法廷」(第五十二・五十四)は、千鳥の香合が東条の読んだお扇の影から出現して次郎助が盗んだ嫌疑が晴れ、高作が回心して香合が溶かされずに済む経緯を描いている。こうして、作品は名品の俗物への勝利を描いて終わる。この勝利を招来したものは、なにか。摩耶夫人の「右の手」に香合を「預けた」次郎助が、「扇屋の姉さんだつて、津田屋のお嬢さんだつて、命がけで心配してくれるんだ」(第三十九)というような、名品を惜しむ人々の至純の情だけでは「月裡法廷」の開廷と千鳥の出現および次郎助の放免の説明としては不十分である。

「月裡法廷」は、次郎助の送致が決定し、次郎助を助ける方策を失って絶望する兼長・兼次・お米の眼前で繰り広げられる。そもそも兼長は、「しるしの松」(第四十八・五十二)で「あ、月か、世は暗ぢや。私が暗ぢや、暗へ行く

のぢや」(第四十八)といい、お米は「私もう死ぬより他に、屈きやうはないんですから、御一所になるんです」(第五十)とお扇に呼びかける。また、兼次も「僕はだらしがありません、未来で礼がほしいんだ」(第五十二)というように、三者ともに死を選ぶようにして、千鳥とお扇の墓前にやって来たのであった。兼長・お米による判事東条への懇願も不首尾に終わり、人事ではどうしようもないところで、「月裡法廷」は、開廷されるのである。作品の表層をみるかぎり、「月裡法廷」を判事東条が開く事情は語られていない。「月裡法廷」の開廷は、お米が東条にお扇の遺書を示して次郎助の赦免を懇願したその日の「初夜」過ぎ(第五十三)であり、お米から預かったお扇の遺書を東条が読み終えたあと香合と次郎助の救済は果たされる。しかし、それはお米からお扇の遺言の実現を懇願された聞き手東条の積極的な行動としては捉えられない。なによりも東条は、お扇の遺書に目を通した後、前日兼長が次郎助の赦免を求めて勝手口から立ち去らなかつたことを「東条判官」(第四十七)で述べて、「如何にも不便じやが、法は枉げられん。いたしやうがないではないか」とお米に諭していた。法の無情を認識しつつ遵守するという東条が、「白き炎、月裡法廷」(第五十四)で高作に対して

人情を弁まへい。雛の首を捻切るものがあらば、残酷ぢやと思はんか。

千鳥が活きて居る如き作ぢや。細工人平兵衛の恋女房の名ぢや、と申す。分つたか。

というのは、明らかに矛盾する。東条の心境の変化を示唆する記述も、見いだせない。注意すべきことは、同席した検事尾形維明に東条が、「今夜催す夢見の会と言ふのはこれぢや」(第五十四)と述べていることである。ここから伺われるように、「月裡法廷」は「夢見の会」、すなわち地上の論理や倫理の限界を越えたものと考えられる。そのように捉えるとき、注目すべき一節がある。それは、「白き炎、月裡法廷」(第五十三)で開廷直前の法廷を地の文の語り手が、

怒る時、美きも醜きも、世にあるほどの形骸は皆眠り死して、清き曇りなき靈魂は、凝つて一輪の月となつて、其の気唳々として天に満ち、醜く邪なる魂魄は、散つて、尾なき頭なき蛇と化して、暗く朦朧として地に潜むのである。(中略)一場の光景は、月に人影あるにあらず、月の影である、月それ自身の影なのであつた。と述べていることである。「清き曇りなき靈魂」が「一輪の月となつた」月の影は、当然のことながら地上の掟を越えた月世界の論理の支配する空間と考えられる。そして、この法廷を形成し、支配する「清き曇りなき靈魂」とは、上述の「月の人」のイメージをになうお扇・千鳥・お米、摩耶夫人に体现されているものである。したがって、作品の結末を野口武彦氏の指摘されたように、「母性デウス・エクス・マキーナ的介入」とすることに異論はない。問題は、「月裡法廷」が開かれた経緯をどう示唆しているかである。開廷の経緯は、本文には明記されていない。地の文の語り手は、その経緯を作品の表層には描かず、月のイメージの連鎖によって「一場の光景」を「月それ自身の影」と化する深層の脈絡を示唆していると考えられる。しかし、この作品の弱点は、現世の秩序を守る東条が、「月裡法廷」を主催することである。鏡花は『紅梅集』収録に際して、「月裡法廷」の終つたあと「六部の修行者」が登場する場面で、「香合は、予め此の六部の手から、東条に手渡して置いたに相違ない」(第五十四)と加筆している。また、結末の香合の扱いに関して初版本で「願ひ叶はゞ……かしこきあたりへ。」とあつたものを、春陽堂版『鏡花全集』巻六収録時に「或は影を追ひ、あとを慕つて……六部の修行者の思ふ旨にまかすのであらうといふ」と改変した。こうした改変は、「月裡法廷」が東条と巡礼の合議の上で開廷されたことを示唆する。

「月裡法廷」の理解には寄与するが、その一方において夢幻的な趣きを、少しく損なうものとなつたのである。

なお、「月裡法廷」は、兼次が伊勢山田を「月宮殿」にする(第三十二)という夢想とも関わる。その夢想の意味するところは、俗物の支配する地上の浄化である。作品の結末で、俗物高作は、「人情を弁へ」て香合の処分を取り

止めるとともに、お米の伴侶となる兼次の「学成り志遂げ」るよう「保助をする」とあるが、「月裡法廷」はそのような改心をも促す。その意味で「月裡法廷」は、兼次の理想の実現でもあった。

『無憂樹』は、父の十三回忌に際して名工の名品の危機を救済する物語として構想されたものと思われる。体の不調と新文学としての自然主義の潮流をひしひしと感じながら執筆され、語りとイメージの連鎖によって「摩耶夫人の同胞」——母なるものによる救済の実現をめざした作品といえることができる。そこには、作者鏡花の「瑞兆」への願いが込められているだろう。香合の危機は、鏡花文学の危機であり、名工・名品の勝利は、自己の文学の勝利を招来したいという祈りの反映として捉えることが出来る。聞き手による行動の限界を救うのは、深層の文脈としての「月の影」であり、結末の「月裡法廷」は、現世の法秩序を凌ぐ「清き曇りなき靈魂」の支配する「月の影」の現世への降臨といえる。その意味で斎藤信策のいう「月夜の詩人」にふさわしい作品ではある。

本作における作品内の聞き手の積極的なあり方は、『春昼』および『春昼後刻』の聞き手に徹する語り手と対照をなす。また、同じこの年のうちに完成された『式部小路』の後半では「仏の像の前で、其言行を録した経を読むのと同じです。此処でお夏さんの話をするのは。まあ、お聞きなさい」というように作品内の語りを「功德」になるものとしている。このように明言した作品は、それまでにはないのではなからうか。語りに対する意識の深化がうかがわれる。また、イメージの脈絡によって作品のサブプロットを形成したり、「夢幻」を追究したりする試みは、『春昼』および『春昼後刻』にも生かされている。二年後の『草迷宮』における円のイメージの連鎖と「夢幻」は、その見事な達成ということができよう。『無憂樹』は、今日注目されることの少ない作品である。しかし、本作発表の三カ月前の三月、島崎藤村『破戒』が出版されて迎えた本格的な描写の時代への、語りとイメージによる果敢

な挑戦として、看過できない点がある。⁽⁸⁾

注

- (1) 村松定孝「鏡花小説校異(十二)」「鏡花全集」月報11 岩波書店、昭49・9所収)に、初版本と全集本文との校異が掲載されている。
- (2) 石川近代文学館蔵の『無憂樹』自筆原稿による。なお、井口哲郎「無憂樹」校異(『鏡花研究』平12・3) 参照。「水百合」は、作中で摩耶夫人について「御姿の美しさ、水百合の花に似て」とあることから明らかなように、摩耶夫人を示唆したものと考えることが出来る。
- (3) 成瀬正勝「鏡花論」は、
逸することの出来ぬ鏡花世界の浪漫的特色は、因縁に関する観念の存在することである。
として「無憂樹」の「二人の男女の恋愛は、それぞれの母親の摩耶夫人信仰の因縁が彼等の魂のうちに輪廻したものと描かれるのである」と述べている。
- (4) 経文の典拠については、須田千里「龍女と摩耶夫人」(『国語・国文』平9・6)に指摘がある。
- (5) 『花菖蒲』の初出は、『花かすみ』文錦堂、明35・9)であり、『不思議』は、『怪談女の輪』(『太陽』明33・2)の改題、『さら解』は、『風流後妻打』(九州日々新聞 明34・1・1付)の改題である。
- (6) 越野格「観念小説論」のための序章「鏡花における『虚構』の意味」(『国語国文研究』昭51・8) 参照。
- (7) 『新泉奇談』の執筆時期については、村松定孝「新発見『幽芳書簡』に基づく『新泉奇談』真筆考」(『鏡花全集』月報8) 岩波書店、昭49・8所収) 参照。
- (8) 翌四十年は、一月に『霊象』(『文芸倶楽部』)・『縁結び』(『新小説』)を掲載し、『婦系図』(『やまと新聞』)の連載を開始(1・1・4・28)し、『式部小路』(『隆文館』)から刊行するなど、前年の寡作を一挙に挽回するものとなっている。
- (9) この句は、芭蕉七部集の『阿羅野』では、「関の素牛にあひて」という前書きで「さぞ砧孫六やしき志津屋敷」となっている。また、鏡花編『名所句集 俳山水』(聚精堂、明44・9)にも「五元集」の典拠を示した上で収録されている。



【資料1】

得る処があると思ふ」と述べていた田山花袋は、『破戒』刊行に言及した「時評」(『文章世界』明29・4)で、「此作が、わが文壇に始めて自然主義の描法を完全に行はうとしたのは、確かな事実であらふと思ふ」と述べている。

- (10) 小林輝冶『加賀象眼の職人たち——鏡花の諸作を一つの視点として——』(『金沢学』④) ホワットイズ・金沢』(前田印刷出版部、平3・2)は、鏡花の『ピストルの使い方』(『文芸倶楽部』昭2・9)の執筆動機について昭和二年が父の三十三回忌にあたることを指摘されている。なお、石川近代文学館蔵の父清次の遺品に「第二回内国勸業博覧会褒状」(明14・6)があり、この時清次が「銅製香爐」を出品していた旨の記載がある。同じく雀の下絵もある。
- この雀や香爐の思い出から、本作を構想したのか。又、明治三十九年十月三十日付の弟豊春宛書簡に前年秋のこととして「霜の如き麥麦畑を横きりて浜辺なる夜船の上に千鳥をき、しは此頃なりし」と記している。鏡花は返子来てほどなく耳にした「夜船の上」の千鳥に深い感銘をうけていたことがわかる。本作構想の契機の一つと思われる。
- (11) 作中、全く会話を含まないのは、第一と第二十七だけである。
- (12) 『誓之巻』などの連作や『風流線』など前後編からなるものも、一作として数えている。
- (13) 構想を同じくする『黒猫』では、富の市に付きまとわれるお小夜が、髪結いと富の市の前で意中の人の存在を打ち明ける。
- (14) 無憂寺には波羅叉のかわりに花桐があるという設定だが、花桐は『修紫田舎源氏』の主人公光氏の亡母の名前を踏まえたものか。「母の面影に、似た」女性に引きつけられる光氏にも母恋の強い感情がある。
- (15) 香合を家から持ち出す次郎助は、「浅黄の風呂敷を西行背負ひ」している(第二十八)。また、「浅黄」は、お扇がいつも身につけている「長襦袢」の色でもある。浅黄にも救済のイメージが与えられている。ちなみに行善寺の摩耶夫人像の羽織の付け紐も、浅黄である。
- (16) お扇の帰りの遅いのに焦れて煩悶する「ひとり寝」(第三十四)で、兼次が、まず文字通りの鳥である千鳥の啼き声を聞き、次いで「戸外が、冴えた月夜のやうな気がして、何だか、ちら／＼千鳥の影」をみるというように、千鳥と月との結びつきは、作品の前半からすでに示されている。なお、千鳥と月の組み合わせは、和歌をはじめとする古典文学に頻出することはいうまでもない。鏡花文学における千鳥について、朝田祥次郎『注解考説泉鏡花 日本橋』(明治書院、昭49・9)は「愛の使者」であると指摘している。
- (17) 『式部小路』には、「白く千鳥を飛ばした緋の絹縮みの背負上げ」、「詩人が月宮殿かと想ふやうに」、「お夏の夢は、月に月宮殿をあぐがれ出て」というように、『無憂樹』と共通する語句が登場する。
- (18) 「露骨なる描写」(『太陽』明37・2)で、「自分は今の文壇は泰西革新派の奉ずる『露骨なる描写』といふことに就いては大いに

『春昼』『春昼後刻』における夢

泉鏡花の作品には、初期作品『乱菊』（近江新報）明28・2・10～3・27）以降、「夢」が重要な意味を持っていたり、「夢」を効果的に用いたりしたものが多く、『乱菊』では、主人公大音の君が、夢の中で継母から恋心を告白されるが、大音の君は、目覚めても夢で知った継母の恋情を疑わない。この時期から既に鏡花は、夢が、現実と同等の価値を持つと認識していたように思われる。翌々年（明29）八月に発表された『三之巻』（文芸倶楽部）では、主人公上杉新次が弟の振る舞いから「人は時としては夢の中に、実際ある働きを為し得るものぞと確か」め、意中の女性秀の嫁ぎ先紫谷家が「子が家より幾程もあらざるを、いかなることをかしいださむ」と「みづから危」ぶみ、上京したと述べている。ここでは夢が覚醒時に抑制されている欲望を解放し、衝動的な行動を促すという意味で、覚醒時以上の行動的性格を持つ可能性が示唆されている。『乱菊』の場合よりも、積極的な意味を夢に見いだしているといつてよい。

注目されるのは、『黒百合』（読売新聞）明32・6・28～8・28）で、黒百合を探りに山中に入った雪と千破矢瀧太郎が大鷲に襲われるのを、雪の恋人若山が夢で見る展開である。目覚めた後傍らに雪が来たのを見て、若山は「ありしが如き艱難の中から蘇生つて来た者だといふことが略確かめらる」と同時に、吃驚したとある。夢が実際の出来事だったことを知って驚いたというのである。これ以降、現在起こりつつある出来事を、その当事者となんらかの関わりを持つ人物が夢のなかでありありと目撃するという構想とその変奏とみられる作品が目につく。いわば（現在進行形の夢）の系譜をたどることができるのである。明治三十四年四月の『註文帳』（新小説）では、剃刀研ぎと鏡研ぎの老人が、近隣の紅梅屋敷で怨念に導かれた男女が凄絶な無理心中を遂げる同じ夢を見て、紅梅屋敷に駆けつけ、夢で見たとおりの情景を目撃する。同四十一年一月の『草迷宮』（春陽堂）では、魔界の女性が、旅僧小次郎法師に傍らで眠る青年葉越明が現在見ている夢の絵解きをする展開となっている。この作品は、『黒百合』や『註文帳』とは逆に、現在見つつある夢を傍らで解きあかす試みといつてよい。

ここに採り上げる『春昼』（新小説）明39・11）とその後編『春昼後刻』（新小説）明39・12）では、男女が同じ光景を、一方は幻影として見、他方は夢で見る。『黒百合』にはじまる（現在進行形の夢）の系譜にあたる作品である。

『自筆年譜』（現代日本文学全集 第十四篇 泉鏡花集）改造社、昭3・9）の明治三十九年の項は、この作品を発表した當時を回想して、次のように記している。

明治三十九年二月、祖母を喪ふ。年八十七。

七月、ますます健康を害ひ、静養のため、逗子、田越に借家。一夏の仮すまひ、やがて四年越の長きに亘れり。殆ど、粥とじやが薯を食するのみ。十一月、「春昼」新小説に出づ。うた、ねに恋しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき。雨は屋を漏り、梟軒に鳴き、風は櫻の枝を折りて、棟の柿茸を貫き、破衾の天井を刺さむとす。蘆の穂は霜寒き秋に散り、さ、蟹は、むれつ、畳を走りぬ。「春昼後刻」を草せり。蝶か、夢か、殆ど恍惚の間にあり。李長吉は、其の頃嗜みよみたるもの。

当時の精神的肉体的な状況が、右の一節からうかがわれる。ここには、記憶の誤りがあって、祖母の亡くなった

のは、明治三十八年二月二十日で、同じ年の七月に健康をそこない、逗子に家を借りている（吉田昌志「泉鏡花・祖母に死と「女客」参照、「学苑」昭64・1）。『春昼』に言及した「十一月、『春昼』新小説に出づ」以降が三十九年ということになる。「粥とじやが薯を食するのみ」という一節からは、体調の悪化が想像される。同年十月三十日付の書簡にも、『春昼』について「からだのぐあひにて仕事を与くれ一度では完結せずつきへ続く」（泉豊春苑）とある。『春昼』を執筆した時の状況を回想した右の「自筆年譜」引用で見逃せないのは、「うた、ねに恋しき人を見てしより」の和歌が、『春昼』と分かちがたく結びついていることと、後編『春昼後刻』を執筆した当時は「蝶か、夢か、殆ど恍惚の間にあり」という心境にあったことである。「蝶か、夢か、殆ど恍惚の間にあり」は、明らかに『莊子』の「知らず周の夢に胡蝶と為れるか、胡蝶の夢に周となれるか」という有名な「胡蝶の夢」を踏まえたものである。現実と夢が対立するものではなく、地続きの心境にあったということであろう。これも後述するように、作品と深く結びついている。また、「其の頃嗜」んだという「李長吉」は、中国唐代の詩人李賀で、その詩も作中に引用されている。引用された詩「宮娃歌」は、容色が衰えたために皇帝の寵愛を失って幽閉された女性がわが家に帰る夢をみるというものである（草森紳一「宮娃の歌 李賀と『春昼』」参照。「別冊現代詩手帖」昭47・1）。

このように、『春昼』は、和漢の古典文学のいずれも夢を重要なモチーフとした作品を取り入れて執筆された作品とすることができる。

この作品は、鏡花の代表作の一つで、島田謹二「『春昼』・『春昼後刻』について」『岩波書店版「鏡花全集」月報10、昭49・8』は、「春の昼下がりの気分を文字化」し、「千年以上のあいだに、日本人の魂に定着した暮春の哀歎」を「幽艶な表現のなかに語りつくし」た「空前の作品」として、高く評価している。以下、先学の指摘を参考にしながら、夢を重要なモチーフとした和漢の古典文学をいかに受容しているかを検討したい。なお、『春昼』『春昼後刻』の本

文の引用は、初出による。

1 『春昼』における「夢」

『春昼』は、言葉を交わすことなく男女が互いに深く思い、現世を越えて愛を成就する物語である。一瞬の出会いのうちに恋におち、それぞれに愛を育んだ男女が九年後に外科の手術室で独身の医師と七、八歳の娘を持つ伯爵夫人として再会し、密かに愛を確認したあと、他界での愛の成就を図る『外科室』（文芸倶楽部）明28・6）と類似した点がある。『春昼』は、『外科室』の十一年後に執筆された作品である。この作品で鏡花は、青年と既婚女性が秘かに愛を確認して他界で愛を成就させる作品を再び執筆した。しかも、愛の確認を夢と幻想の中で行うという信じたがたい展開とした。時は現在で、増築された逗子駅の駅舎落成式の日、主要な舞台は、逗子の岩殿寺、「久能谷の観音堂」とその周辺である。

上述のように、この作品では、夢に関する出典が重要な意味を持っている。最も重要なのは、「自筆年譜」にもあった小野小町の

うた、寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき

〔古今和歌集〕卷十二所収

である。作品に登場する最初の出典だが、この和歌については、客人と玉脇みをの恋物語の展開のなかで捉えなおす必要がある。

客人は、山中の祭礼でみをと結ばれる幻影を見る前に、四回みをと会っている。最初は、海岸で浴衣姿のみを見てその気高さと美しさに魅せられ、二回目は二三日後に橋の上で先妻の子三人を連れてくるのを見る。この時は、

子供が落としたハンカチがきっかけになって、目をあわせている。三回目は、その四五日後の夕方、外見のよくない五人の男に取り巻かれるようにして、海岸の方へ出ていくのを見た時である。これをきっかけに、客人は、海辺にある玉脇の邸の周辺を徘徊するようになる。そして、「玉脇の家造を、(中略)御新造のため」「牢獄」と考えた客人は、「懷中から本を出し」て李賀「宮娃歌」に言及して、

え、何でも此処は、蛞けちが鉤蘭の下に月に啼く、魏の文帝に寵せられた甄夫人けいが、後におとろへて幽閉されたと言ふので、鎖阿甄あけんをんとあつて、それから、

夢入家門上沙渚、天河落処長洲路、
願君光明如太陽、

妾を放て、然うすれば、魚に騎し、波を撒まいて去らむ、と云ふのを微吟して、思はず、襟にはらはらと涙が落ちる。目を睜まつて、其の水中の木材よ、いで、浮べ、鱗うろこふつて木戸に迎へよ、と睨にらむばかりに瞻めたのでござるさうな、

というように、みをを「宮娃歌」の宮娃と重ね合わせている。ここには、自らを幽閉されたみをに感情移入して、その夢を共有する客人の姿が描かれている。「水中の木材よ、いで、浮べ、鱗うろこふつて木戸に迎へよ」は、客人がみをとの一体化を仮想したところから生じる願望とみてよい。孤独な夢を描いた李賀の詩が、『春昼』の中では、仮想の段階とはいえ、夢の共有に転じているのではなからうか。

次に注目されるのは、四回目にみをと会った後、散策士が入浴中に住職にその日みをと会ったいきさつを語ったところで、

(やあ、和尚さん、梅の青葉から、湯気の中へ糸を引くのが、月影に光つて見える、蜘蛛が下りた、)と大気

憐ぢや。

(萬歳々々、今夜はお忍か。)

という、「蜘蛛が下りた」である。出典は、『古今和歌集』所収の「衣通姫の、独り居て、帝を恋ひ奉りて」という詞書のある歌、

わが背子が来べきよひ也さ、がにの蜘蛛の振舞ひかねてしるしも

であることが指摘されている(小野めぐみ「泉鏡花『春昼』『春昼後刻』論―歌物語の蘇生 その1―」『学芸近代文学』昭49・7)参照)。この歌は、『古今和歌集』の「かな序」にも引用されている。もともと『日本書紀』の「允恭紀」にみえる歌謡である。「蜘蛛の振舞ひ」(『日本書紀』では、「蜘蛛の行ひ」とは、「蜘蛛が来て人の衣に着くと、親客が来訪する」)岩波書店版『日本古典文学大系67 日本書紀』「注」という中国の「俗信」を踏まえたものである。歌意は、「わたくしのいとしい夫がきつといらつしやる夕暮れだわ。蜘蛛の動作は前もつてはつきりあらわしていますもの」(同前)で、恋人の来訪を直観する歌である。これを、『春昼』にあてはめれば、当然のことながら、客人は、この時みをがやってくることを直観したと考えられる。殊ことにその日は、気分転換に駅前まへの床屋に行つて顔を剃つた後、郵便局の軒下で電話がかかってくるのを待っていたみを出会い、みをが「向直つて此方を見」ているのに気づいた客人が、みを見て「思はず一寸会釈」したところ、みをも「伏目に俯向」いたというように、心の通う萌芽がみえた、そんな貴重な再会があつたのであつた。その感激を和尚に語つた直後に、「蜘蛛が下りた」のである。みをが来訪するという直観は、客人にとつて願いがかなう喜びと期待に満ちたものだったはずである。

みをは、郵便局の軒下で客人の会釈に「伏目に俯向」いて応えた直後に掛かってくる電話で、東京にいるらしいごく親しい女性の来訪を乞い、「夢にでもお目にか、りませうねえ、否待たれない、待たれない」といい、最後に

「……みいちゃん、然やうなら、夢で逢ひますよ」といって、「きり／＼と電話を切」る。とすれば、みをはこの日の夜、逢いたい人物に夢で逢おうとしていたことになる。

一方、住職との対話で明らかのように、客人はみをが「みいちゃん」と「夢で逢ひ」たいと願っていることは知っている。それとは別に、みをが来訪するということを「蜘蛛が下りた」ことで確信している。前日会釈した二人が翌日言葉を交わすのは、極めて自然だが、そうはならない。翌日みをが「御堂」を訪れて「柱に、うた、寐の歌」を書きつけて帰ったあと、

客人は、あと二三日、石の唐櫃に籠つたやうに、我と我を、手足も縛るばかり、謹んで引籠つてござつたし、私も又油断なく見張つて居たでございませうが、貴下、聊か目を離しました僅の際に、何処か姿が見えなくなつて、木樵が来て、点灯頃、

（私、今、来がけに、彼処さ、蛇の矢倉で見かけたよ、）
と知らせました。

客人は又其晩のやうな芝居が見たくなつたのでございませう。

死骸は海で見つかりました。

というように、「二三日」の間、「我と我を、手足も縛るばかり」に「謹んで引籠つ」たあとで「何処か姿が見えなくなつ」て、現世を越えていった。つまり、喜びも束の間、数日後に命を絶つてしまうことになる。客人が「石の唐櫃に籠もつたやう」になつたのは、山中で見た祭りで自分とみをが登場する幻影を見、翌日みをが「御堂」を訪れた後からである。四回目にみをと会つた後、入浴中に住職と話した時「やあ、和尚さん、（中略）蜘蛛が下りた」と「大気焔」であつた客人は、「もう一度、そこいらを」といって、みをのいる「海の方へは行かない」で、「石段」

を上って行く。「海の方」へいかなかつたのは、みをの来訪が確信できたためと考えられる。みをの来訪が確信できれば、これまでのように海岸の邸の周辺をさまよう必要はない。こうして山中の祭りに導かれた客人は、眼前で「自分が、稍身軀を捻ぢ向けて、惚々と御新姐の後姿を見入つ」た後、「指の尖で、薄色の寝衣の上」に「△」「□」「○」を書き、夫人が「莞爾として、うしろざまにたよ／＼と男の足に背をもたせて、膝を枕に」し、「其の重みで男も倒れ」という、「窪んだ浅い横穴」を舞台にみをと自分によって演じられた無言劇を観て、寺に帰つてから住職に「睨かけて一切の懺悔話」をする。そして、「御新姐と背中合はせにびつたり座つた」のが「自分」だと気づいた時のことを語って、「真個なら、其処で死ななければならぬでした」と言う。ということとは、その時にはそんなことは考えなかつたということになる。なぜ、死ななければならぬのかといえば、「苟も主ある婦人に（中略）不了見を出すべき仁でない」と住職に評価される客人が、舞台で「不了見を出す」ところを見たからだとい見考えられる。しかし、その後の客人の行動は、「不了見を出す」か否かという倫理的な捉え方では解し難い。ここで「真個なら、其処で死ななければならぬでした」というのは、別世界に自らを失うような実在感があることの驚き、そのような自分に罪悪感を感じているためではないかと考えられる。住職に「睨かけて一切の懺悔話」をしたのも、別世界に現世の自分以上の実在感を感じたからではなからうか。通常、懺悔のあとには出家、ないし宗教への帰依、回心が描かれる。しかし、住職の話によれば、客人は翌日称名を唱えるでもなく、「一日寝て」いたのであつた。おそらく客人は、圧倒的な迫力をもつた前夜の幻影を反芻していたものと考えられる。

上述のように、客人は、みをが「うた、寐に」の歌を「御堂」の「柱」に書きつけた後、「石の唐櫃に籠もつたやうに、我と我を、手足も縛るばかり、謹んで引籠」る。注意しなければならないのは、それが、幻影を見た翌日ではないということである。幻影を見た翌日は、住職が「慌て、客人に知らさぬやう（中略）障子を閉切つた」の

に対し、その「あと二三日」自ら閉じこもっているものであり、この違いは大きいと言わざるをえない。客人は、「うた、ねに」の歌を見る機会があつて、このように閉じこもったのではなからうか。

客人が現世を越えていった事情を、住職が「客人は又其晩のやうな芝居が見たくなつたのでございませう」と推測していることからわかるように、客人は芝居で観た幻影に憑かれていたものと考えられる。また、住職の話聞いた散策子は、「庵室の客人なんぞ、今聞いたやうだと、夢てふものを頼み切りにしたのかな」と述べている。散策子は、住職から客人が「丁ど貴下のやうな方」だと言われているし、みをからも客人に「肖た姿」だといわれているように、客人の分身とも見られる。そのような散策子が、客人の心情を右のようにとらえていることは、傾聴に値する。散策子の捉え方に従えば、客人は己の罪深さよりも「夢てふもの」に自分の命をゆだねたといつてよい。幻影を観て「庵室」に帰った直後、客人は、幻影を罪深いものと捉えた。しかし、「うた、寐に」の歌によって、みをも同じ夢を共有したことを知り、夢の是非を現実の側から倫理的にはかるのではなく、『莊子』の「胡蝶の夢」のように、夢と現実の対立のない地平に立ち、自在にみをと契りを交わすことができる世界だと気づいて「夢てふもの」に自分の命をゆだねたものと考えられる。

ところで、「うた、寐に」の歌は、『日本古典文学大系』本の注記によれば「夢（中略）で逢い、契る」という「古人の認識」によるものである。みをは、それまで信じられなかった夢を頼りにしはじめたのではなく、幽閉状態に等しい境遇のなかでこれ以前から夢を頼りに生きてきた女性だと考えられる。そうした彼女にとって、前夜の夢はこれまでとは次元の異なったものだからこそ、「御堂」に歌を奉納し、その実現を祈願したものと考えられる。前夜の夢で、初めてみをは、客人の恋心を知ったものであろう。「御堂」に歌を納める以上、それは「御堂」の下の「庵室」にいる客人へのメッセージでもあつたはずである。注目されるのは、この歌を住職が、

是は、みだらな心ではなうて、行き方こそ違ひますが、かすかに照らせ山の端の月と申したやうに、観世音にあこがるゝ心を、古歌に擬らへたものであつたかも分りませぬ。——夢てふものを頼み初めてき——夢になりともお姿をと言ふ。

真個に、あゝいふ世に稀な美人ほど、早く結縁いたして仏果を得た験も沢山ございますから。

というように、和泉式部の

暗きより暗き道にぞ入りぬべき遙に照らせ山の端の月

（拾遺和歌集 卷二十）

と同列のものとして捉えていることである。⁴この歌は、「愛に執着し、愛に苦しんで生き続けた和泉式部の生涯を示している」（安西迪夫『新編 和歌の解釈と鑑賞事典』笠間書院、平11・9）もので、和泉式部の生き方と関わっている。以上のような出典から示唆されているのは、玉脇みをは、小野小町のように「夢てふもの」を頼りにして生き、和泉式部のように愛に執着し、愛に苦しんで生きる女性だということであろう。

みをは、後述するように『春昼後刻』で和泉式部の歌を「楽書の余白」に記している。このことから明らかのように、和泉式部に重ね合わされている。特に語り手が、歌の作者について

此の歌は、平安朝に、艶名一世を圧した、田かりける童に襖をかりて、あをかりしより思いそめてきとあこがれた情に感じて、奥へと言ひて呼び入れけるとなむ……名媛の作と思ふ。

というように、『古今著聞集』の「和泉式部田刈る童に襖を借り、童式部に艶歌を贈る事」に基いて式部が自分に憧れた童の愛を受け入れた逸話をわざわざ紹介するのであり、自分に憧れた客人の愛を夢と幻影の舞台で受け入れるみをと二重写しになっているとみることができよう。⁵

2 『春昼後刻』 における夢

次に、みをと散策子の出会いについて考えたい。

親しい人、逢いたい人と夢で会いたいと願っていたみをは、おそらく思いがけず客人の夢を見て、客人の恋心を知り、契りを交わす夢を共有したものと考えられる。しかし、客人は現し身でみをと契ることはなく、「夢てふものを頼み切り」にして他界へ赴いてしまう。みをはが、「御堂」の近辺の「角」の「二階家」に引越してきたのは、「去年の秋」「其の客人が亡く」なつて「二月ばかり過ぎてから」であった。それから半年余りたったと考えられる春のある日に、みをは邸内に蛇が侵入したことを教えてくれた札を言いに、寺を出た散策子の前に現れる。「恋しい懐かしい方」に「どうしても逢へないで、夜も寝られないほどに思ひ詰めて、心も乱れ、ば気も狂ひさうになつて」「せめて肖たお方でもと思」つていたところ、「フト然うらしい、肖た姿」を見たという。散策子の登場は、みをとつて、客人への思いを新たに作る特別な出会いであつたとみられる。みをはは、散策子を見たとき、「急に心持が悪くなつて、それから寝た」といい、「厭な心持になつて」「切なくつてあとで臥つた」という。その理由を問う散策子に、みをは、「直ぐにうとく夢を見ますやうな、此の春の日中（中略）の心持」を「夢をお話するやうで（中略）何うでせう、この此のしんとして寂いことは。矢張、夢に賑かな処を見るやうではござんすまいか」といい、さらに次のように続ける。

雲のない空が頼りのないやうで、（中略）前世の事のやうで、目の前の事のやうで、心の内が言ひたくつて、言はれなくつて、焦つたくつて、口惜くつて、いらくして、じりくして、其のくせほつとして、うつとり地の底へ引込まれると申しますより、空へ抱き上げられる塩梅の、何とも言へない心持がして、それで寐ました

んです

右の一連の説明には、「夢」が度々繰り返される点で、注目される。引用にいう春の日中の「何とも言へない心持」になつたという心情は、先に言及した夢か蝶かという『莊子』の「胡蝶の夢」に酷似している⁶。しかし、「真個なら、其処で死ななければならんのでした」というように、客人が非現実の自分に現世以上の実在感を感じて罪悪感にかられたのに対して、みをはこのような事態に嫌悪感を催し、「急に心持が悪くな」つたのであり、「厭な心持になつたのである。やがて、客人と同様に夢と現実の対立のない自在さを獲得する時、初めてみをは、夢に自らの命を委ねることができはらずである。客人に「肖た」散策子は、みをはが客人と共有した夢と現実の境界を消去するプロセスの最初の媒介の役割を果たしているといつてよい。

みをは、「貴下、真個に未来と云うものはありますものでございませうか知ら」といい、「もしあるものと極りますなら、地獄でも極楽でも構ひません。逢ひたい人が其処に居るんなら。さつさと其処へ行けば宜しいんですけれども」といつて、さらに、

屹と然うと極りませんから、もしか、死んで其つ切りになつては情ないんですもの。其くらゐなら、生きて居て思ひ脳なんで、煩らつて、段々消えて行きます方が、幾干か増たと思ひます。

というように、夢に生命を委ねることを躊躇する。しかし、その後現れた角兵衛獅子の少年に、「ことづけたいものがあるんだよ」といつて「君とまたみるめおひせば四方の海の水の底をもかつき見てまし」という和歌を「楽書の余白」に書いて渡し、「唯持つて行つてくれ、ば可いの。何処へつて当はないの」と自分の行く末をゆだねる。角兵衛獅子は、夢と現実の境界を消去する第二の媒介の役割を果たしているとみることができ。この歌の出典は、『和泉式部集続集』であることもすでに指摘されている⁷。「君とまたみるめ生ひせば 四方の海の底の限りはか

づき見てまし」が正しく、「底の限りは」を「水の底をも」に改変している。元歌の歌意は、「もしも宮さまともう一度みるめ―逢う機会―といふ海松があの大海に生えてゐるものならば、わたしは、世界中の大洋残らず底の底まで潜っても探して見ますのに」(『和泉式部集全釈集編』)である。亡き恋人への思いを歌った和歌を、「水の底をも」に改変し、海で亡くなった客人への思いに転じていることはいうまでもない。散策子が、

水の底を捜したら、渠がために、こがれ死をしたと言ふ、久能谷の庵室の客も、其処に健在であらうも知れぬ。否、健在ならば、と云ふ心で、君と又みるめおひせば四方の海の、水の底へも潜らうと、(ことづけ)をしたのであらう

と考えるように、水底の他界に「ことづけ」が通うなら、魂の行方は定まるのである。

角兵衛獅子は、海で命を落とし、「ことづけ」の行末を見届けたみをは、すすんで海に身を投じる。角兵衛獅子に導かれて、ようやくみをはは、現実とへだてのない「夢てふもの」に自らをゆだね、他界へ赴いたわけである。

以上のように、鏡花は、『春昼』で、小町、李賀、莊子が描いた「夢」を巧みに作品に取り入れ、男女が直接言葉を交わすことなく、「不可思議の感応で、夢の契」によって愛を成就させるまでを描いたのであった。みをは、小町の「うた、寐に」の歌を観音堂の柱に記して、その成就を願い、一年足らずして願いは果たされる。二人の男女の魂は、水の底の他界で寄り添うことが予想されるが、その一方で、注目されるのは、作中、「久能谷の観音堂」にみをはが奉納した「うた、寐に」の歌を、和泉式部の「かすかに照らせ山の端の月」と同様、「観世音にあこがる、心」を詠んだものと捉え、「御堂」のゆかしさを、

夢は此の処に宿るであらう。巡礼どもが靈魂は時々此処に来て遊ばう……(中略)恋するものは、優柔な御手に縋りもしやう。御胸にも抱かれやう。(中略)明月の如き真珠を枕に、勿躰なや、御添臥を夢見るかも知れぬ。

よしそれとても大慈大悲、観世音は咎め給はぬ。

というように記していることである。こうした記述に目を向ければ、二人の「靈魂」や「夢」は、「御堂」に「宿」り、「遊」ぶものとも考えられる。そのように見るとき、『春昼』は、観音の「大慈大悲」の夢を語った作品といった様相を呈する。夢は、多くの鏡花作品における他界同様、救済の場という意味を担っているのである。

明治三十九年十一月、十二月に発表された『春昼』『春昼後刻』は、田山花袋や島崎藤村に代表される自然主義の勃興期に、夢の契りを現代に持ち込み、あえて「今時」、女性に「こがれ死」した男を描き、夢と現実の対立を無化して他界に赴く男女を描く。人間を遺伝、環境、本能や欲望といった尺度で分析し、あるがままの現実のなかに真実を捉えようとする自然主義文学の志向と比較する時、地上の論理や倫理の限界を越える「夢見の会」としての「月裡法延」による救済を描く前作『無愛樹』同様、きわめて濃厚に鏡花文学の立場、独自性を打ち出した作品とみることができよう。

注

(1) 須田千里「春昼」の構想(『論集 泉鏡花 第二集』所収、有精堂、平3・11)は、『春昼』のライトモチーフに「胡蝶の夢」があったとして、本作を「夢」「他界」が「現実」を侵犯し、空無化し、そして遂に、新たな現実としてそれに取って変わってしまうテクスト」と見る。本稿は、『春昼』を夢と現実の対立を無化して他界に赴く男女を描くと見るもので、立論の多くを須田論文に拠っている。

(2) 草森「宮娃の歌 李賀と『春昼』(前出)は、「宮娃の歌」の一節を紹介した上で、「李賀の詩でいえば、女の宮娃の気持にこの客人もなつてしまっているのである」と指摘している。

(3) 小野「泉鏡花『春昼』『春昼後刻』論(前出)は、「蜘蛛が巣を張る『おこなひ』が侍人の訪れの予兆と信じられたことを紹介した上で、「客人はこれを逆手にとり、みをはが自分を待つ合図だと受け取った、とみたい」と記している。

- (4) 須田千里「春昼」の構想(前出)に出典の指摘がある。また、上田正行「物語の古層Ⅱ〈入水する女〉―『草枕』と『春昼』」(『国語教育論叢』第六号、島根大学教育学部国文学会、平9・3)は、「暗きより暗き道にぞ」の歌の詞書に注目して、この歌が「元々法華経 化城喻品第七」を踏まえていると述べ、この一節の「背景に見え隠れするのは観世音信仰」だと指摘している。
- (5) 須田「春昼」の構想Ⅱに出典の指摘がある。須田氏の指摘するように、「みを像には特に和泉式部との類似性が濃い」といえよう。
- (6) 須田「春昼」の構想Ⅲは、「執拗に繰り返される『夢』という語、みを訴える非現実感、魂を抜き取られてそのまま蝶々にでもなりそうだ、という間隔、全て「胡蝶の夢」に基づく言い方である」と指摘している。
- (7) 上田「物語の古層Ⅱ〈入水する女〉」は、「海の底の限り」が作中「海の水のそこをも」となっているのは「意識的な改変」だと見て、帥宮挽歌群を検討し、水底や海底に「この世とは違った別世界」があることを示唆すると捉えている。
- (8) 上田「物語の古層Ⅱ〈入水する女〉」は、みを「不確定な未来を確信するものとして(中略)観世音の力」を必要としたのではないかと指摘し、「角兵衛獅子の水浴びシーン」に、観音が鮮やかに顕現していると説いている。

第四章 招魂へ向かう文学

『桜心中』の素材とモチーフ

『桜心中』は、大正四年一月「新小説」に掲載された作品で、春陽堂版『鏡花全集』巻九(大15・3)まで、作品集に収録されることがなかった。慶応義塾図書館蔵の自筆原稿(以下、「自筆原稿」と略記する)最終丁末尾及び「新小説」の初出本文巻末には、「――上巻―完。」とあり、下巻を予定していたことがわかる。¹⁾ 前年十二月「新小説」掲載の「新年号予告」では、「題未定 泉鏡花」とある。この年十二月十六日に伯父松本金太郎が亡くなっていることも影響して、十分な執筆時間が確保できなかった可能性も考えられる。²⁾ とはいえ、「兼六園で最も有名な『旭桜』と、寺町松月寺の有名な『大桜』とをモデルとした、哀しくも美しい桜の精の物語」(小林輝治「桜心中」、小林輝治他編『文学への旅 金沢名作の舞台』金沢市、平12・3)というように、一まとまりの作品として捉えることは可能である。

『桜心中』は、主人公宮田七穂が、「糧の得られないために、死場所に迷誤ついで居た」十年前、「百間堀へ身を投げて亡くなった」女性を救えなかった深い悔恨を語る一節から明らかなように、『鐘声夜半録』(『四つの緒』所収。春陽堂明28・7)と最終作品『縷紅新草』(中央公論昭14・7)をつなぐ問題作である(本文の引用は、初出誌による。以下同じ)。また、「桜の精の物語」という特異な試みに関しては、早い時期に吉田精一「鏡花の表現」(『季刊明治文学』昭9・3)が、「伐られる筈の江月寺の富士見桜(引用者注、「君桜」が正しい)になりかはつて、君桜(同じく注、「富士見桜」が正しい)とい

ふ同じ名木に、いとせめて名残りを惜しみに来る美女のこゝろを描いた作品とし、「謡曲の草木成仏の思想すらも、窺うことを難しとしない」と述べ、謡曲との連関を指摘していた。また、三瓶達司「鏡花作品におけるいわゆる謡曲的表現について」(『言語と文芸 昭48・11』)は、能楽の「東北」の梅の精と和泉式部の霊、「半部」の夕顔の花の精と夕顔の君の霊が「渾然と融け合って、そこにいささかの混迷もない」のに比べて、「雪をあまりにも現実世界と関係をもたせすぎたがゆえに、昏迷に陥」ったと指摘している。川村二郎『白山の水、鏡花をめぐる』(講談社、平12・12)は、この作品の「桜の精」が、常磐津「積恋雪関扉」の「小町桜」に拠ることを指摘し、浄瑠璃『一谷嫩軍記』の熊谷桜との関係にふれた。³⁾川村氏の指摘にはないが、兼六園の旭桜の近隣千歳橋のたもとには、「水戸藩から贈られた」という「樹齢約三百年以上といわれる熊谷桜」が実在する(石川県兼六園管理事務所・「兼六園」編集委員会企画編集『特別名勝 兼六園』北国出版社、昭62・3)。浄瑠璃『一谷嫩軍記』撰取の契機とも考えられる。また川村氏は、本作を論じて、「醜すらも美に同化させてしまうほどの、強烈な様式への渴仰」を描いた作品と捉えつつ、「色々なモチーフが錯相し」た作品で、「主題」は「すこぶる茫漠として」いると指摘した。たしかに、『桜心中』には、「色々なモチーフが錯相し」ており、輻湊する複数のモチーフを検証して、「主題」を問いなおす必要がある。

小論の目的は、これら先行研究の指摘を踏まえた上で、作品の舞台、特に時間的な設定を中心に背景や輻湊する複数のモチーフを検証して、「茫漠として」いる「主題」を明らかにすることである。

1 舞台と背景

『桜心中』全十九章は、前半(一)～(七)が兼六園内の「面影亭」を舞台とし、後半(八)～(十八)は「螺蝶山の下の暗い処」及び「その前の細流」(十九)を舞台としている。

「面影亭」は、「昔は藩主が庭前の馬場であつたと聞く、公園の此の入口に、六七軒一列」に並んでいて、「揃つて柳団子と云ふ草色と白と鳩の卵ほどもを木皿で商ふ」茶店の一軒である。「以前は鳴らした事のある女形の地俳優が隠居仕事に営むで居る浅間茶店」で、「馬場の茶屋」とも呼ばれている。これは、森田平次『金沢古蹟志』巻九「○蓮池新道」に

此の新道は、即ち馬場跡なり。(中略)七年五月兼六園の地を公園となし、園内に茶店等建築の事を許されたり。故に其の際馬場の地に、茶店を建築せんとの願人多く、追々土居を取毀ち、家屋を建築して茶店を設け、る。とある茶店の一つに相当するだろう。⁴⁾

また、「揃つて柳団子と云ふ草色と白と鳩の卵ほどもを木皿で商ふ」という点についても、同じ「○蓮池新道」に、「茶店の中にも、高橋初三郎と云ふ者、初めて公園の入り口なる角に茶店を建築し、河北郡柳橋の名産なる団子の出店を開きけるに、(中略)一町内の茶店共も亦此の団子を製し、公園内の名産とは成りたり」という記述に一致する。

鏡花の弟、泉斜汀「金沢名物」(『新小説』明45・6)では、「よく父親に手を曳かれて、散歩に行つた帰りがけ」に「兼六園の茶屋」に立ち寄って食べた「柳橋の団子」が「今でも可懐しく思はれる」として故郷の「名物」の筆頭に取り上げている。斜汀は、「木皿に盛つて出る」団子で、「大いさは鳩の玉子ほどもあつて、形もそれに相当」し、「形が面白いのと、草と白との取合せの色彩が麗しい」とも記す。この記述は、本作の「柳団子と云ふ草色と白と鳩

の卵ほどなを木皿で商ふ」という記述に酷似している。鏡花にとつても、「可懐しく思はれる」のは同様であつたろう。斜汀「金沢名物」で注目されるのは、これに続いて、

大きなものでは又引返して行つて兼六園の大桜が名物。犀川の橋を渡つて野田寺町の大桜が名物。浅野川の橋から見ゆる半僧坊の五本松が名物。

というように、この作品後半の中心的なイメージを構成する桜のモデルである旭桜と松月寺の大桜を並べてとりあげ、さらに作中に「卯辰の山の端に向ひ合つて、大な松の樹の、幹が五株に分かれたの」と紹介される卯辰山の五本松に言及している点である。鏡花が故郷金沢の兼六園を中心にした作品を構想する際、その示唆を与えたものとして三年前同じ掲載誌に発表された斜汀「金沢名物」が脳裏にあつた可能性を考えてもよいのではなからうか。意図したかどうかは定かではないが、この作品で鏡花は、斜汀と同じく「金沢名物」を取り上げたことになる。

「面影亭」の経営者について、作中で「以前は鳴らした事のある女形の地俳優が隠居仕事に営むで居る」とあるが、「女形の地俳優」で「明治初年の女形、実川何某」という設定から連想されるのは、実川勇治郎であろう。『金沢市史 現代篇 下』（金沢市、昭44・5）の「歌舞伎と近代劇」によれば、勇治郎は「明治中期大阪より金沢に来住し、女形に乏しい金沢劇壇に大切な役割を果たした人物」とされている。「金沢来住時期」は、「十六七ごろ」で、「明治三十五年版の『金沢新繁昌記』」に「名がみえる」ので、「そのころまでの在世在沢は確認される」とのことである。同書掲載の「上演年表」では、明治四年十一月の「川上南芝居」に初めて「勇治郎」の名があり、十九年四月の「卯辰末吉座」での公演以後しばしば地元劇場に出演している。最後に「勇治郎」の名が挙げられているのは、明治三十三年四月の「稲荷座」である。三十年代半ばには、引退した可能性が高い。鏡花が、立女形としての勇治郎を知っていたことは確実であろう。もともと、その後の勇治郎が、「馬場の茶屋」を営んでいたかどうかは不明であ

る。『兼六園全史』（兼六園観光協会、昭51・12）によれば、「明治三七、八年頃、園内」には、「茶店と写真屋を合わせて、四八軒もの多きを数えた」が、「明治四〇年第一回目の整理によつて、三五軒」、「明治四五年第二回目の整理により現在の十四軒」になつたという。同書によれば、当初から現在まで同じ経営者になる茶店はむしろ少ない。また、同書には勇治郎の経営した茶店が存在したという記述はない。茶店の経営者が女形になっているのは、盲人下川忠雄の人物像と指向するものを示唆するため、常磐津や浄瑠璃・歌舞伎の色調との暗合を意識したためと考えられる。次に、前半からうかがわれる時間設定を検討したい。時期的には、「五月へ日脚が届く」ころだから、四月下旬と考えてよい。「庭の曲水、八ッ橋の岸」にある「富士見桜」が「真盛り」で、「丁ど今頃に成ると薩張人出がなくなつて、此の通り寂寞」とするという時期である。「富士見桜」のモデル、旭桜について、小川孜成『兼六公園誌』（養志堂、明27・7）は、「雁行橋の畔」にある「葉桜」で、「六尺の幹七本に分れ、層々五丈余、枝々交りて垂天の雲の如し。〔中略〕花片稍大にして香雲爛漫たり」とある。また、「他の花に殿して開く」とあつて、四月下旬に咲き、作中の記述を裏付けることができる。問題は、松村雪が鶯を駕籠から逃がしたあと、茶店を出て、「蓮池添ひに馬場へ出た」あとに、

こと、人車の道を、並木の如く松で割る、坂下に百間堀と云ふのを隔て、花の雲が波を寄する。旧の城の天守が見える。（中略）堀を隔て、城を彼方に、恁くて、静々と並木を行く婦人の姿は、恰も人なき故道を、世を離れて一つ通る、艶麗な女性の星のやうであつた。

というように、「百間堀」という「堀」があることが明記されていることである。というのも、明治四十四年六月一日に「百間堀新道路」が開通し、堀はすでに埋め立てられていたからである。工事は、前年九月から始まつていた（兼六園全史年表）。したがって、ここから想定される時間的な設定は、明治四十二、三年までと考えられる。

次に「八」以降について検討したい。まず、宮田七穂が松村雪に声をかけるのは、「螺蝶山の下の暗い処」である。七穂は、雪が池に浮いた「三好屋の遊船」に乗って「何処かへ行つて」しまふのではないかと危惧したという。旭桜から霞ヶ池を隔てて、螺蝶山は、見晴らしがきく。螺蝶山に至る行程は、実際に即したものと違ってよい。ここで注目されるのが、池に浮いた「三好屋の遊船」である。

この「遊船」は、『兼六園全史』に「明治後期」から霞ヶ池の岸边にある内橋亭の経営にあたった一丸錠五郎が「明治四二年」に「霞ヶ池に唐船を模した新しい丹塗の遊覧船を浮かべた」というのが、これに相当するだろう。同人は、「花見の頃同亭附近」に「優美」な「ぼんぼり」も立てたという。作中に、「三好屋で、人よせに立て、置く」という雪洞が、これに相当するだろう。ところで、一丸がこの「遊覧船を浮かべた」のは、明治四十二年三月二十一日のことで、その模様は、翌日付「北國新聞」の「●蓬萊丸進水式」が詳しく報じている。明治四十四年四月八日付同紙の「満城の春色」は、桜の名所を紹介し、「霞ヶ池の蓬萊丸は装ひを新たにして僮夫の棹すに任せ」と報じている。また、同年五月六日付同紙「兼六園六景」にも「蓬萊丸」の写真が掲載されており、明治四十二年三月から四十四年五月まで存在したことは確実である。鏡花は、『伯爵の釵』(『婦女界』大9・1)でもこの船を取り上げており、印象深く捉えていたことがわかる。なお、この年次は、百間堀の埋め立ての有無から想定される作品内の時間的な設定とした、明治四十二、三年までと一致する。

作品内の時間的な設定に関して、後半の「螺蝶山の下の暗い処」での会話で注目されるのは、まず「土地のうまれ」ながら、東京で「翻訳をして」いる七穂が、帰郷した理由を次のように述べていることである。

まだ十代の頃に両親とも亡くなつて其の墓が残つて居ます。

墓地は町に近い山の上にあるんです。市の方で手を入れて、今度其の辺、墓地一带を土地の遊園地に拓きます

ので、墓を移さなければ成りません。——其の遺骨を引取りに参つて、誰の印、彼の保証と、それ／＼面倒があつて、まだ事が済みませんので、逗留をして居ります。

右の一節は、(金沢もの)の集大成で自伝的な要素の濃い『由縁の女』(『婦人画報』大8・1～10・2)の主人公麻川礼吉が帰郷する理由と同じである。周知のように、鏡花の両親の墓は、卯辰山にあった。『由縁の女』では、冒頭で針屋のお光から礼吉に来た手紙の内容を紹介し、「市の有志家」の「発議」で「山を開いて、市の公園にすると成り、「二山の墓を余さず取り払ふ事に成つた」という事情を説明し、さらに次のように述べている。⁵⁾

予て土地の新聞に、市役所の名義で、右の趣を広告して——何々につき上申して、移転料を申受くべし。何月幾日までに其の申出なきものは、市に於て適宜の共同墓地に合葬すると言ふお触れだ。(中略) 心当りのものは、区役所へ申出づべしの行倒れや投身の広告と同じ所へ、七行ぐらゐな広告を新聞に出して——お光さんが、こゝへ切抜きを送つてくれた——日本中へ知れると思ふらしい。

右のように記す経緯や墓地改葬の手続きは、ほぼ実際に即している。卯辰山の山頂にある「卯辰山公園記」(設置昭3・10)によれば、「三十九年村沢常信氏等」が「市長渡瀬氏」に請願したところ取り上げられ、「公園の施設を加えん」ということになり、「市会」に「議り之が調査」をし、「四十三年以降」に「市長山森氏」が「諸般の設備を装へ、大正三年始めて公園に供用し」という。明治四十三年九月七日付「北國新聞」の雑報「●卯辰山公園」は、金沢市から囑託をうけ「公園測量」を終えた「東京市技師長岡安平翁」の談話をのせている。これによれば、「善妙院」周辺を中心に「天神坂から善妙院へ行く迄の高見に梅や桃、又は楓」を植えて「美しい花の林を拵」え、「善妙院の後ろの空地」に「音楽堂」、その後方の「丘陵」に「動物園」、「善妙院横」の「谷を四方から埋め潰し」て「運動場と迷園」を作るという。「設計通りにすれば約七万坪もある大公園になる」という計画である。翌日付同紙は、

長岡が山森市長に「函面を添へて詳細に説明」したと伝え、十月四日付同紙「●卯辰山公園地の視察」は、「二昨日」に「市参事会員」と李家知事が「卯辰山公園設置に關し」て「实地視察」をしたと報じた。こうして公園計画が具体化し、墓地の改葬が懸案となる。翌四十四年二月三日付「●遊園地設置の計画」は、

卯辰山公園は既に長岡技師をして測量せしめたる結果現在の墓地を他に転ぜざるべからず其位置を依然卯辰山地域に定むるか將た野田山墓地に合併するかに就きて昨今調査を試み居れる

と報じ、三月八日付同紙「●卯辰山墓地の移転」は、「調査の結果現在墓地千二十基を存」することが判明し、野田山移転は断念して、「卯辰山の接続地なる一円」に移すこととなったと伝えている。こうして、四月二十二日付同紙には、次のような「公告」が掲載された。

市本（引用者注、「本市」末広町字卯辰山市有墓地ノ大半ハ本市ノ遊園地下為スニ付其区域内ニ在ル墓標石ハ勿論埋遺骨ノ移転ヲ要スルニ依リ未タ墓籍ノ届出ナキモノハ墓地取締規則ニ基キ此際届出ラル可ク本年十月三十一日迄ニ此届出ナキ者ハ遺族者ナキモノト見做シ本市ニ於テ同墓地内ニ区域ヲ定メ移転改葬可致此旨公告ス

明治四十四年四月

金沢市役所

この「公告」が、『由縁の女』にいう「土地の新聞に、市役所の名義」で出した「広告」に相当するものと思われる。「何月幾日までに其の申出なきものは、市に於て適宜の共同墓地に合葬すると言ふ」内容である。同じ紙面に「行倒れや投身の広告」はない。しかし、医院や化粧品品の広告と同じ紙面にあり、本文八行で「七行ぐらゐ」とある『由縁の女』の記述に合致している。驚くべきことに、管見によれば、この「広告」の掲載は、「北國新聞」によると、この日一回だけである。東京在住の地元出身者を対象に、加越能時報社が東京で刊行していた「加越能時報」にも掲載されていない。お光が、礼吉に送付した「新聞の切り抜き」も、これをさしているものと思われる。「七行ぐ

らるゐな広告を新聞に出して——お光さんが、こゝへ切抜きを送つてくれた——日本中へ知れると思ふらしい」という感想も領ける。ところで、実際の墓地移転は、容易に終わらず、四十五年一月二十日付同紙「●遊園築設の計画」は、「墓地の移転に手数を要し未だ全部の終了を見ざる」と伝え、同年三月の「加越能時報」は、「●卯辰山と百間堀」で「融雪と同時に墓標取除に着手」すると述べている。

金沢市は、翌四月十一日「金沢市公告」を発表した。翌日付「北國新聞」には、

卯辰山遊園ノ為メ同所ニ存在墳墓籍届出方及明治四十四年十月三十一日迄ニ届出ナキ者ハ無縁ト見做本市ニ於テ移転改葬公告ヲ為シタルニ未タ左記氏名彫刻ノ石碑ニ対シ何等申出無之差支不尠候間来ル六月三十日ヲ期シ便宜本市ニ於テ移転改葬取扱候条為念公告ス

とあって、これに続いて、「浅田与六」から「安田」まで、百八の氏名ないし姓が記されている。この中に、泉姓はない。以後同紙には、原則として二日おきに同じ「公告」が掲載されている。

この「公告」から五ヵ月後の大正元年九月二十四日付同紙「●卯辰山墓地取払」は、「金沢市役所」で「各墓地所有者に対し夫々移転料を交付し移転」させたが、「尚所有者不明にて示達し能はざるもの八十余名」あった。「氏名の判明せし分」について「其趣新聞紙に広告」したところ、「所在判明せしもの六十余戸」、「二十余名」は「止むなく無縁のものとし見做し適當の場所を選定し移転」させると報じた。なお、この記事は、同年十月の「加越能時報」にそのまま転載されている。こうした経緯をへて、卯辰山は、公園として本格的に整備される。大正三年四月二十三日付「北國新聞」の「●東山遊園地」は、卯辰山の「各所に散在せる無数の墓石に尠なからざる費用を払ひて全部移転せしめれば昔の殺風景に引き換へ今は頗る心地よくなり見渡す一帯には松樹の隠見するのみ」となったと記し、「市当局者」は、「豊国神社の背後より善妙院付近及び俗称二割より一本松付近まで」を「東山遊園地」と称

することとしたと伝えている。『桜心中』が発表される前年の桜咲くころには、全面的に改葬は終わっていたことがわかる。したがって、『桜心中』で宮田が、「遺骨を引取りに参つて、誰の印、彼の保証と、それ〱面倒があつて、まだ事が済みませんので、逗留をして居ります」という年次は、明治四十四年四月以降と考えられる。ここで先に百間堀の埋め立てと「蓬萊丸」への言及から想定した明治四十二、三年までと微妙な違いが生じる。

次に問題となるのは、「江月寺の桜」の伐採についてである。作中「江月寺の桜」は、「寺町」にあつて「堀越に広い町中一杯に、下が、犀川の其の清い流の崖に届いて」いる「枝垂れの桜」で、「雪が積つたやう」だと紹介されている。また、この桜は、「昔、義経主従が、山伏に成つて、安宅を越して、此の北国の海道筋を大野の浜へ通る途中、此の樹の下にお憩ひだつた」という伝承から「君桜」という別称があるとされている。「犀川の其の清い流の崖に届いて」というのは誇張で、前引斜汀「金沢名物」が「寺町の大桜は、寺の土塀を乗越えて、往来へ這出しているが、その土塀は崩れて了つて、桜の幹が塀代りになつて居る」というのが、明治四十年代の実景だつたらう。また、「枝垂れの桜」というのも虚構で、実際は、「ヤマザクラの1品種」で「当初小松城内に植えられていたが、小松城で余生を送る3代藩主利常」が、「慶安元」年（一六四八）松月寺2世至岸和尚に与えた」（里見信生執筆。『石川県大百科事典』北國新聞社、平5・8）ものだという。義経の生きた時代とは大きく異なる。しかし、たとえば、明治二十四年七月十日付「北陸実業新聞」の「●金沢案内 大桜」によれば、

往時源廷慰当地を経て奥州へ落ち延ぶる際途中に於て愛子死す弁慶をして之れを同所に葬らせ其上に植へしめたるものなりと古老の口碑に伝はれり
 というように、松月寺の大桜は義経伝承に関わっていた。鏡花は、こうした伝承に基づいて「江月寺の桜」を「君桜」としたものと見られる。

さて、作中では「江月寺の桜」が伐採される事情を、「寺の町端れに兵営が出来ました。其処が騎兵の連隊」になつて、「馬上で樹の下を潜るのに、馬の鬣が乱れ」るから、「旗を倒」し、「槍を伏せ」ねばならないからだと言明している。「寺の町端れに兵営が出来」て、「其処が騎兵の連隊」になつたというのは、明治三十一年金沢に第九師団が設置された際、「野戦砲兵、工兵、輜重兵連隊」と共に新設された騎兵第九連隊をさすだらう。兵営は、「野村、十一屋、長坂、野田にまたがる敷地に建設された」（奥谷陽一執筆。『石川県大百科事典』）ものである。「野村、十一屋、長坂、野田にまたがる敷地」は、寺町の「町端れ」であつて、作品に合致する。同三十年五月二十七日付「北國新聞」の「●昨今の野田寺町（つゞき）▲松月寺の桜」は、「最初は伐るとか断つとか評判ありし松月寺の桜は」と、当時桜の伐採が計画されていたことを伝え、次のように報じている。

其後其筋の意見にては新設兵営の出入門に接近すること、なれども騎砲兵出入の際には馬蹄を並足にし且つ平時は騎兵も槍を持たざれば伐るにも及ぶまじとのことなるが愈々老樹を伐ること、なれば火難の祟あるに依り五里四方の地御買上ありたしと野町辺の有志等は申合ひ居れりとか

右のように松月寺の大桜は、「騎砲兵」、特に騎兵の「出入」の障害になるとして実際に伐採論議があつたことがわかる。さらに、翌三十一年一月二十一日付同紙「●松月寺の大桜」は、「師団設置となりて砲兵、騎兵隊の通行に障りあり伐採の厄運に遭遇せんとしたる野田寺町松月寺の大桜は今回加藤西警察署長等の尽力にて伐採せざる。こととなりたり」と報じている。当時鏡花が帰郷した事実は確認できないが、何らかの形で、情報を得たものと推測される。なお、この作品の時間的な設定と考えられる明治四十二、三年から明治末年の「北國新聞」を見るかぎり、松月寺の大桜伐採論議を報じた記事はみられなかった。

以上のようにみてみると、『桜心中』は、時間的には明治四十年代の卯辰山の墓地改葬前後と明治三十、三十一

年の騎兵設前後とを接合させ、兼六園の旭桜と寺町の大桜をモデルとして構想された作品ということが出来る。

2 輻湊するモチーフ

先に述べたように、『桜心中』には、複数のモチーフが存在し、輻湊している。ここでは、輻湊するモチーフを検証して、モチーフの結びつきと背景を検証したい。

まず、取り上げるのは、身代わりのように入水する女のモチーフである。主人公宮田七穂は、「糧の得られないために、死場所に迷誤つて居た」十年前、「百間堀へ身を投げて亡くなつた」女性を救えなかつた悔恨を雪に語る。『鐘声夜半録』から『桜心中』を経て最終作品『縷紅新草』に継承されるモチーフである。内容的にみると、『桜心中』で七穂が語る事情は、『縷紅新草』に近い。『鐘声夜半録』では、「予」が深夜の兼六園を訪れたのは、「但寝難き夜の幾分を此処に焼却せむと為る」ためで、「糧の得られないために、死場所に迷誤つて居た」ことは、一切語られていない。また、『鐘声夜半録』には、死にゆく女への凝視はあつても、「百間堀へ身を投げて亡くなつた」女性を救えなかつた悔恨は描かれていない。『桜心中』は、『縷紅新草』に直接継承されていく作品といったほうが正しい。『桜心中』以前で、見逃せないのが、「雑句帖」(『芸芸俱樂部』明30・8)の「魂祭」である。「魂祭」は、

「沢山ある墓のなかで唯俗名お雪さんとはかりでは何うも分りませぬな。」「さうですか、困りましたね、何でも年紀の頃は十八九で、色のクツキリ白い美しい女ですが。」「はい、何うも寺へ入らつしやつて、人相をおつしやいました処で、手前ども一向心得ませんから。」と納所がいふのが道理なり。参詣の男、若いのが極りの悪さうに、「え、実は、先々月身を投げた女なんです。」「やれ、それなら分りました。」と、盆の事なり。

というように、お盆に「先々月身を投げた女」の墓参に赴いた若い「男」が、その「女」の「墓」の場所を「納所」に尋ねる会話を記したものである。この断片的な会話が金沢を舞台としたものだとするれば、金沢のお盆は、いわゆる新暦で行われることから「先々月」とは五月となる。身を投げた「お雪」という、「年紀の頃は十八九の色白い美しい女」といえば、高桑法子「誘惑する水」(『国文学』平2・6)の指摘した明治二十七年四月十六日付「北國新聞」の「●百間堀の身投げ」で「後にて見るしからんことを恐れてか衣物の裾を紐にて足に括りつけ」ていたという「十八九許りの女」が連想される。また、十八日付同紙の続報「●身を投げた別嬪の素性」で「別嬪は横安江町八十四番地同居吉村松太郎妹ゆき(十九)」とある記述と共通する点が多い。おそらく「魂祭」は、明治二十七年七月十三日から十五日のいずれか一日の鏡花自身の姿を写したものとされる。「魂祭」の一文は、『桜心中』の「新盆には其の秋、心細い道を探して、其の人を葬つたと云ふ寺を尋ねました」といい、「切籠」を供える「灯心に灯を貰ふ時」に「此の春、身投げをしました美しい人のお墓所は、どちらです」という一節に生かされている。「其の人」と「肖如な」松村雪が、「魂祭」の「お雪」、ひいては「身を投げた別嬪」の「ゆき」と同名なのは、偶然ではない。また、『桜心中』の「婦」が、「半柏の工場の刺繍の女工」で「当日」出来上がった「彩糸で藤の花の刺繍」に「下絵には描いてなかつた、水を、観世水を、太白で縫」ったのを、「工場の主人」が「生意気」だとして「投げ出した」ので、「泣いて詫びをして」帰宅後「観音様へお参詣をすると云つて」家を出て、「明方、百間堀で亡く」なつたという経緯は、「●身を投げた別嬪の素性」に、「女子高等授産場の職工頭」であるゆきが、「主人から客の注文に掛かる刺繍物」を「命ぜられ」て「差出」したところ、「其色合が気に入らぬ」といって「縫ひ直」しを命じられたが、二度までも「主人の気に入るものとならなかつたのに「煩悶」して、「鍛冶八幡の祭礼に詣でん」と家を出て「遂に其の夜身を投げた」という事情を踏まえている。『桜心中』は、この事件を作者の分身との関わりの中で具体

的に作品に反映させた初めての作品であった。

父の死、吉村ゆきの死から二十年後の大正三年末、初めて身代わりのようにして入水した女への悔恨を作品化するにあたって、鏡花は、女が入水した原因を、「予て口説きく嫌はれて居た、工場の主人の盲人の奴が、生意気だ、暇潰しだ」と「絹の半拍」を「投げ出した」ためと設定した。入水の原因は、単に「刺繍」の出来への叱責だけではなく、むしろ「工場の主人の盲人」の執拗な「口説き」への嫌悪だったとも考えられる。これは、『黒猫』（北國新聞「明28・6・22」7・23）や『誓之巻』（『文芸倶楽部』明29・5・30・1）の「富の市」以来のいわば美女への妄執に生きる盲人のモチーフの導入である。この作品で鏡花は、身代わりのように入水する女のモチーフと美女への妄執に生きる盲人のモチーフとを交差させたのである。美女への妄執に生きる盲人のモチーフは、いわゆる金沢及び北陸を舞台とした作品に限っていえば、『怪語』（『太陽』明30・7）、『山中哲学』（同、明30・12）、『靈象』（『文芸倶楽部』明40・1）を経て本作に至る。この系譜は、身代わりのようにして入水した女のモチーフよりも、一年あまり遅れて作品化されたようにみえるが、周知のように、『怪語』は『他人之妻』の一部で、執筆は明治二十六年末とされている。『黒壁』（『詞海』明27・10、12）や『妖僧記』（九州日々新聞「明35・1」）など、盲人ではないが、美女への妄執に生きる男を描く類似的な作品を執筆したのは、明治二十七年二、三月頃であった（松村友視「鏡花初期作品の執筆時期について」『百鬼物語』の執筆時期をめぐって）『三田園文』昭60・10参照。つまり、このモチーフは、明治二十七年の帰郷時、入水する女のモチーフの成立とほぼ同時期、帰郷中の鏡花の重要なモチーフの一つとなっていたのである。このように、二つのモチーフは、ほぼ同時期にそれぞれの系譜で作品化されたのであった。それが、この作品で交差したのは、卯辰山の改葬により、当時の経済的精神的窮状と創作動機をあらためて振り返ったためだと考えられる。

下川忠雄は、「土地の金貸の件で、やがて四十に近」い「盲目那」とされ、「女工」を入水に追いやった「工場の主人の首」と同一人物の可能性がある。富裕な盲人という設定は、『誓之巻』の「資産ある家の長子にして、親もなほあるが、十六の時激烈なる、天然痘にかかりたるため、目の盲ゐた」という「富の市」（二十八九歳、『靈象』の「金持ちの按摩」である瀧山沢夫（三十三）と共通する。いずれも、「茶の山高の帽子」（富の市、ないし「黒の山高帽子」（瀧山沢夫、「黒の中山高帽」（下川忠雄）を被っている。モデルを想定してもいいだろう。下川忠雄は、富の市や瀧山沢夫の後身とみてよい。

見過ごせないのは、忠雄の嗅覚の鋭さを、
盲目那忠雄の鼻は、墓所、乱塔場を求獵つて、土葬の年紀を——分けて少い女の年紀を。／「此の分は仰向けだ。（中略）其の姿までも嗅分けると云ふのである。

と述べていることである。下川忠雄が、「女工」を入水に追いやった「工場の主人」と同一人物ならば、「女工」亡き後も、忠雄はその「墓所、乱塔場」をさまよひ、「女工」への恋の妄執に生きていることになる。忠雄の妄執は、白象に乗った美波と志乃吉の「長に続くべき奇怪なる新婚旅行のあとを追うて、睦言を聞いて憤死する」まで「歩行いて」行くという『靈象』の沢夫に劣らない。忠雄が、沢夫と異なるのは、「江月寺の桜」の伐採を主張していた小笠原が、七穂と雪の言動に感動して伐採取りやめを宣言したのを忠雄が批判し、

江月寺の桜は代らいでも段ないけえ。返事はないのき、出来んのき。ほしたら新聞で、も、公会堂の議員さんからでも、更めて、表向きに聞かせしましよかに、何うやき、閣下。

というように、「公会堂の議員」など、「土地」の有力者との結びつきを示唆していることである。これに対して七穂は、「此の国には穴居時代の、こんな、蜘蛛が沢山居ます」という。川村二郎『白山の水』が指摘するように、ここには、「金沢人への嫌悪」が示されている。このモチーフは、金沢の自然と自然に比肩される美女への憧憬と

表裏する形で、『湖のほとり』（新小説 明32・4）から『風流線』正統（国民新聞 明36・10・24～37・3・12、及び明37・5・29～10・5）に継承されている。⁸⁾『桜心中』自筆原稿では、現行本文に「太夫、実に佳い、鶯やね。」とある冒頭の忠雄のセリフの語尾は、原稿では始め「鶯だね。」であった。この書換えは、「四」（自筆原稿では「第四」）の「負惜みは言はんね」（「負惜みは言はない」）まで続く。つまり鏡花は、四章まで書いたところで、忠雄のセリフの語尾をいわゆる共通語から金沢言葉に変更したのである。忠雄について語り手は、小笠原を糾弾する時に「不断は繕つて東京がる」のが、「本能の膏汗の如きねばく」とした土音を発つ」というのだが、ほぼ一貫して金沢言葉を使っている。ことさらにここで、それを「ねばく」と形容し、「餿えた糊の臭気がある」というのは、川村氏も指摘するように、すさまじいばかりである。こうした「金沢人への批判」の片鱗は、清次の死後の一応の整理を終えて上京した明治二十七年十月一日付けの目細八郎兵衛宛書簡に「実に金沢はおもしろくなく候」といい、「金沢はいけない処だ」といい、さらに「人は東京の人がよろしく候金沢にもおうちのやうな方ばかりなればい、けれど、なかくさうはまゐらず候」に明らかであろう。「金沢人への嫌悪」もまた、明治二十七年の帰郷時にその淵源をもつものといえる。

以上のように見てくると、『桜心中』の身代わりのように入水する女のモチーフ、美女への恋の妄執に生きる男のモチーフ、「金沢人への嫌悪」といったモチーフは、いずれも明治二十七年の帰郷時に起因するのである。さらにいえば、騎兵中尉小笠原の人物像は、同じ二十七年の帰郷時に取材した『予備兵』（読売新聞 明27・10・1～24）において、兼六園で「蜻蛉組」に蹂躪される風間清澄を助け、「事にあつて妄に動」く「一隊の壮士」を批判する曹長竹中於菟助に近い。これらのモチーフは、卯辰山の改葬に際して、父が亡くなった後の帰郷時が改めて回想されたことを示唆する。卯辰山の改葬を作品化する構想を立てるにあたって、往時のモチーフが結びついたものと思われる。これにいわゆる母亡き少年の年上の美女への憧憬のモチーフを加えれば、鏡花の金沢ものの題材がほぼ出そ

ろう。卯辰山の改葬を契機とした作品、『由縁の女』がこれに相当することは、いうまでもない。また、騎兵による桜の伐採に関わるモチーフは、『龍胆と撫子 続編』（女性 大12・2～9）に取り入れられている。

『桜心中』は、卯辰山の改葬を契機に、明治二十七年帰郷時のモチーフを中心にそれまでの金沢ものの大成をめぐしたが、十分に書き上げる余裕がなく、その展開は後続の作品に託されたものとみられる。

3 テーマ

この作品は、上述のように兼六園の茶店を訪れた忠雄と主人の「太夫」の会話に始まり、忠雄が雪の切り落としした小指を拾い上げて絵葉書屋の亭主にみせるところで終わっている。妄執に生きる男、忠雄の存在が際立つ作品である。

冒頭忠雄は、「驕つ」た「服装」をし、太夫がお茶を振る舞うときも「中山高帽」を被ったままで、「取澄ました横柄さ」が目立つ。忠雄は、太夫が「三年」かかって手に入れた鶯を買うために、面影亭を訪ねたのだが、話題はともすれば「女子」に傾く。官能への指向が顕著な人物である。そして、「鳴く声さへよければ可い、色なんぞ」といい、「俺は匂の方や」、「實際花でからが、咲かずとも可い（中略）それが口に入ればや」という。それまで「仁体造つて取澄ました」のが、この時「急に餓えた獣の如き賤卑い面色」となって「蛇の肉」を焼く「い、匂ひ」に引きつけられ、「蝮の餌」を口に運ぶ。最終章「十九」では、「蛇の蠱したる如く、背殴りして突立」つたとあるように、人外存在にたとえられる。結びで雪が「一枝の、花のかはり」に切つて流した「小指」を忠雄が拾い、「絵葉書屋」の「亭主」に「花やないかい」と問いかけるのは、「小指」を「花」の蕾と見立て、「口に入ればや」とす

るもので、官能を指向する獣としての性格を露出したものと捉えられよう。忠雄は、「土着」の俗なるもの、醜なるものを体現する人物といえる。

川村氏のように、「癩にひとしい盲人」忠雄を中心に「一括り」して「この醜すらも美と不可分であり、美の一部分である」と見ることは、非常に魅力的である。しかし、作品の構造に目を向けると、前半「四」で語り手は、忠雄が「前のめりの反身に成つて店へ入つた時」に離亭にいた雪が、「桜がちら／＼と散込むやう」に「内から閉めた事を言つて置きたい」とことわっている。廻る形ではあるが、冒頭の場面から既に、雪は「横柄」な忠雄への嫌悪を示唆していたのである。雪が「声の好きゆゑ姿が見たい」と持つて来させた「籠の戸をスーと引」いて開けたのは、蝮を与えた鶯に「雌は固より（中略）雄の鳥さへ窘むで落ちる」と太夫から聞いた忠雄が、「四五年飼つて、俺の琴を弾く相手」をさせた後、「黒焼」にして「煎じて飲」むと言つたからである。「土着」の俗なるもの、醜なるものと自然と美との対立の構図は、すでに前半に明らかであろう。

後半では、「江月寺の桜」の伐採を主張していた小笠原の翻意を、忠雄が批判する点が問題だが、小笠原の翻意は、「留める事も、活かすことも、助けることも出来」ない「桜の貴女」に、七穂が「一所に死にます」と殉じた潔さとそれに応えて雪が「瞬く間の心のまゝに、思つたことをし」て小指を切つた勇断とに感動したからであった。そもそも小笠原が「桜」の伐採を主張したのは、「空気がだらけ」た「土地の人心」に衝撃を与えるためであつたと考えられる。小笠原は、淀んだ「土地の人心」に批判的な人物と捉えられるだろう。翻意は、雪と七穂の「心中」に、「桜」の伐採と同等以上の意味を見いだした結果とみてよい。したがって、忠雄が、「社会」や「軍人」、さらには「新聞」や「公会堂の議員」という「土地の人心」を「掌握」するものを振りかざし、小笠原の翻意を批判した時、雪に「桜を、更めて伐らせて下さい」と「面縛して而して願う」のは、卑小な俗心、権力の介入を阻止して彼らの潔さ、

殉情を守るためだろう。その意味で、桜の伐採は、「土着」の俗なるもの、醜なるものからの蹂躪を拒んで命を絶つて、自然の美と潔癖な精神を堅持するのに等しい。雪が「喜んで私の命を差し上げます」と答えるのは、当然である。このように、前後半を通じて、俗なるもの、醜なるものと自然と美、ないしは至純の情趣との対立の構図が明らかである。結局、醜なるもの、俗なるものから、自然と美、ないしは至純の情趣が守られ、醜なるものが本性を明らかにして作品は終わる。本作のテーマは、そこにあるのではなからうか。

以上のように、『桜心中』は、卯辰山の公園化にともなう両親の墓の改葬によって、改めて明治二十七年の帰郷時の兼六園周辺を彷徨した苦難と危機を想起し、故郷への特異な感情を反芻した作品である。忠雄の人物像は、同じ大正四年十月の談話「自然と民謡に」（『日本及日本人』）で「傲慢で、自惚れが強くて、人を人とも思はない」という「加賀人」と重なる。と同時に鏡花は、「加賀の自然、金沢の天地は流石に今も尚ほ幼ない時分の追憶を動かして来る」とも述べた。『桜心中』は、「自然と民謡に」の趣旨を作品化したものといえよう。

『桜心中』の自筆原稿には、「遺稿」として知られる未完の原稿が合冊されている。「遺稿」は、『桜心中』の紙質と違って「かなり新しい」（『自筆原稿目録』岩波書店版『鏡花全集』別巻所収）。最晩年、『縷紅新草』執筆以前に鏡花は、改めて『桜心中』の原稿を側において、その続編ないし、改作の構想を練っていたのかもしれない。

注

- (1) 自筆原稿でこの他注目されるのは、固有名詞の異なるし変化である。雪の名前は、「梅川祭」、「歌川祭」、「松平雪」、「松村雪」と改められている。「松村家」を「松川家」とも、記している。「君桜」は「君の桜」と記している。また、ルビに朱と黒との二種の墨が用いられている。ルビに明らかな誤りが多いことが指摘できる。
- (2) 柳沢英樹『宝生九郎伝』(わんや書店、昭19・1)によれば、松本金太郎は、「古希の祝いをしてからは兎角健康が勝れず引籠もりがち」だったという。金太郎の「古希」は、大正元年または二年と考えられる。
- (3) この点については、須田千里「鏡花文学における前近代素材」(上)(下)『国語国文』平2・4、5)にすでに指摘がある。また、須田氏は、この作品が「松月寺の桜」に「まつわる伝承を踏まえている」と指摘している。もともと、後述の義経伝承との関わりについての指摘はない。
- (4) 引用は、『金沢古蹟志』第四編(金沢文化協会、昭8・9)による。
- (5) 引用は、初出誌「婦人画報」による。
- (6) 弦巻克二『鐘声夜半録』小考(光華女子大学・光華女子短期大学研究紀要)昭54・12)参照。
- (7) 作中には、「貴女と同じうしろ姿の一人の婦人を、同じ処で、同じ場所で」見たのは、「丁度十年前」だと述べているが、明治二十七年四月から、「丁度十年」後の明治三十七年四月末から五月初めにかけて鏡花は、弟斜汀と帰郷した。斜汀(名古屋より)『新小説』大4・4)には、「日露戦争の頃に唯一度、金沢へ墓参の途次」とあって、帰郷の目的が「墓参」だったことがわかる。「丁度十年」後という設定には、この時の感慨も、盛り込まれているものと考えられる。
- (8) 本書第三章「湖のほとり」から「風流線」へ」参照。
- (9) なお、大夫と忠雄の会話を聞くという設定は、後半「螺嶺山の下の暗い処」での雪、七穂、小笠原の会話を忠雄が聞いているという設定と呼応する。

『夫人利生記』の周辺

『夫人利生記』は、大正十三年七月、雑誌「女性」に掲載された泉鏡花のいわゆる「墓参小説」の一つで、故郷金沢の卯辰山麓に実在する寺院群に取材している。鏡花は、大正十二年十一月に金沢に帰郷した。この帰郷時に摩耶夫人像を眺めたこと、本作がこうした鏡花自身の体験に基づいて成立したと考えられる(『夫人利生記』の成立」参照)。

ところで、『夫人利生記』が取材した卯辰山麓の寺院には、様々な縁起、利生が伝承されている。本作は、そのような神聖な空間に構想された架空の「利生記」とみることができ、その中核に位置する「蓮行寺」は、「摩耶夫人の御寺」で、「美しい婦」が「御利益がございますわ」というように、「巖に端く、清らか」で霊験あらたかな寺とされている。また、「欄間」には、万亭応賀『釈迦八相倭文庫』(弘化2・慶応3)の挿絵のうち「摩耶夫人の御ありさま」を「肉置の押絵」にしたものがあるという。「蓮行寺」は、小林輝治「解説」(『石川近代文学全集1 泉鏡花』石川近代文学館、昭62・7)の指摘されるように、真成寺をさす。真成寺も霊験あらたかな寺としてよく知られている。しかし、真成寺に祀られているのは、摩耶夫人ではなく鬼子母神である。また、同寺外陣の壁面には「額装の押絵」が掲げられているが、作中に記されたものは、全く異なった構図になっている。こうした点について検証する必要がある。また、管見によれば真成寺の「額装の押絵」の出典は明らかにされていない。

小稿の目的は、『夫人利生記』を卯辰山麓寺院群の利生物語とみる観点から、作中に言及のある神仏と利生・利益を検証し、併せて真成寺の押し絵の典拠を考証して、虚実の意味を探ることである。なお、引用は、初出誌による。

1 卯辰山麓の寺院群と利生

『夫人利生記』の主人公樹島は、「十八九年不沙汰」した「母の実家の檀那寺」に「墓詣」りする。「俗に赤門寺」といい、「門も朱塗」で、左右に安置した「金剛神」も「丹」であること、「仁王門の柱に、大草鞋」があることから、「赤門寺」が卯辰山麓寺院群の一つ、全性寺であることは、諸家の指摘にある通りである。柴田美啓『亀の尾の記』（引用は、石川県図書館協会刊本、昭7・2）は、この仁王門について、「仁王奇瑞多しとて参詣の人多し」と記し、森田柿園『金沢古蹟志』（引用は、金沢文化協会刊本、昭8・12）には、「此の二王は、脚気其の外脚部の病気を祈念するに、甚だ靈験奇瑞有りとて世人信仰しけり」とある。「其来歴は詳かならず」ということだが、樹島が最初に訪れる場所からして既に「甚だ靈験奇瑞有る空間だということに注意すべきである。

いうまでもなく、全性寺は、鏡花の母方の実家中田家の菩提寺である。樹島は、住職に「母の父母、兄などが、此方にお世話に成りて居ります」というが、殿田良作「泉鏡花の実際と作品」（『国語国文』昭38・7）によれば、全性寺の過去帳には、鏡花の母の両親、中田豊喜夫婦と兄孫惣の法名が記載されており、実際に合致する。樹島に作者周辺の事実が投影されているのである。

ところで、語り手は、「仁王門の柱」の「大草鞋」に「緒に結んだ状」に花を供えている情景を目にした樹島的心情を、「—あやめ草あしに結ばむ—『奥の細道』の趣」があるとして、「何となく旅情を催させて、故郷なれば可懐しさも身に沁みる」と説明する。「あやめ草あしに結ばむ」は、『奥の細道』で芭蕉が「あやめふく日」、すなわち五月四日に仙台を訪れた折りに知り合った「画工加右衛門」から「紺の染緒つけたる草鞋」を餞別にもらったことを詠んだ句、

あやめ草足に結ん草鞋の緒

にもとづく（引用は、小学館版『日本古典文学全集』本による）。「松島・塩がまの所々」を描いた「画」と「紺の染緒つけたる草鞋」を餞とした加右衛門を、芭蕉が「風流のしれもの」だと感じ入る一節である。樹島は、この後「仁王尊の大草鞋を船にして、寺々の巷を漕ぐやうに、秋日和の巡礼街道」をたどるわけで、加右衛門ではないが、もう一人「風流のしれもの」とみることができると、「釣鐘の清水」で「洗濯をしに来」た「しなやかな婦」の「太脛が白く滑かにすらりと長く流に立つた」姿に心を動かし、「若い母さんに手を曳かれてお参り」した「蓮行寺」のありかを「旅のもの」を装って訪ねるところから、「御新姐の似顔ならば本懐です」と摩耶夫人像を注文するまでを含めて、樹島は、「風流のしれもの」と捉えられる。「摩耶夫人のお寺」のありかを尋ねたとき、「婦」から、「お静におまわりをなさいまし……御利益がございますわ」と教えられたにもかかわらず、「よその女を恋」して、「写真」を持ち出すなどの所業を重ねた挙げ句に、思いがけない恩寵・加護を知らされるといふ作品の展開に、「風流のしれもの」としての樹島の設定は不可欠である。この樹島が、「秋日和の巡礼街道」をたどるに際して語り手は、

赤門寺に限らない。或は岳に、阪、谷に、径を縫ふ右左、町家が二三軒づ、門前にあるばかりで、殆ど寺つきだと言つても可い。

として、近隣の「寺々」に祀られた神仏十カ所を挙げている。それは、

- 1 赤門寺、清正公
- 2 北辰妙見の宮
- 3 摩利支天の御堂

- 4 弁財天の祠ほこら
 - 5 明星の岳おかの毘沙門天
 - 6 虫菌封じに箸を供える辻の坂の地藏菩薩
 - 7 時雨の如意輪観世音
 - 8 笠守の神
 - 9 森の奥の虚空蔵堂
 - 10 清水の上の高い丘に鐘楼のある梅鉢寺
- であるが、これに

11 蓮行寺の摩耶夫人

を加えて神仏の所在と利生・利益を検証したい。

注目されるのは、1 について、「俗に赤門寺と云ふ」とあり、10 について「寺号は別にあらう、皆梅鉢寺と覚えて居る」とあるように、寺の名前を記した場合も「蓮行寺」を除いていずれも生活に溶け込んだいわゆる民間信仰の対象としての呼び名、俗称であつて、正式な寺号ではないということである。唯一寺号でよばれる「蓮行寺」を、特に読者に印象付けようというねらいもあるとみてよい。「1 赤門寺の清正公」は、『稿本 金沢市史 寺社編』（金沢市役所、大12・6）の「全性寺」の項に、「本寺に、軍談師渡辺一徳斎の勧請せる加藤清正の像あり、清正公といふ」という記述があり、実在が確認できる。同書には、さらに「靈験いちじるしとて、諸人多く参詣す」とある。「金沢古蹟志」には、渡辺一徳斎が「常に」清正の「武功を感じ、甚だ尊敬する余り、清正の肖像を造立し」て、「全性寺の境内に安置せんと、祠堂を造立」してから「信仰の徒追々盛大に成」つたとしている。次に、「2 北辰妙見の宮」については、『金沢古蹟志』に「卯辰妙見と称し、長久寺の境内に造立せり」とあるものとみてよい。『亀の尾の記』には、

近年迄誰も知らざりしに、三十年來の事にて大に流行し、今は参詣引きも切らずなり、灯笼堂中に満ち、実に金沢随一の賑ひとなりぬ。又、利生も新たなる事なり

とあり、多くの信仰を集めたことがわかる。その縁起については、森田盛昌『咄随筆』（享保12）収録の「長久寺命乞の祈禱奇特あり」（上巻）に記載がある。これによれば、藩士中村新丞の一人娘が幼少の時、左腕に「腫物」ができて、「大病九死一生」という事態になった。長久寺の住職に「命乞の祈禱」を頼んだところ、「命に代る者なければ成不申との事」で、これを聞いた家来清水六右衛門が「娘幸同年なれば、成程御命の代りに私娘を指上可申」と言上した。新丞の娘は、「本復」したが、六右衛門の娘は、馬坂辺りで遊んでいた時「いづくともなく礫ついでつ来て、娘の左の腕にあた」つたのがもとで、亡くなった。新丞は、六右衛門の娘の「骸」を長久寺に送って「念比に吊ひ」「妙見堂を建立」したという。「六月十五日」に「今絶せず祭祀」があるとも記している。六右衛門の妻は、夫に「扱もくあの方トハなしが娘をころしおつた、かわいの娘や」と言いつづけ、毎日妙見堂に詣でて「火の用心も無心元程」に「線香」をおびただしく立てて亡き娘を弔い、やがて狂死したという（引用は、鈴木雅子『咄随筆』本文とその研究 風間書房、平7・3）。妙見堂のある長久寺（日蓮宗）は、全性寺と道をはさんだ斜向かいにある妙泰寺の後ろ、南西に五十メートルのところ

に位置する。

「3 摩利支天の御堂」は、慶長十一年に富田越後守が造立したもので、宝泉寺（高野山真言宗）の境内にある。『金沢古蹟志』が、「昔より天狗の住所にて、折々怪異あり」と記す五本松の後ろにあるお堂である。摩利支天は「兵法」と深く関わる。同じく『金沢古蹟志』は、「夜中などは、此の堂前へ参拜人甚だ恐怖して、多分往くものなし」といい、綿津屋政右衛門『金沢俳優伝記』を引用して、「政右衛門以下七名」が剣術の「免状」を請け、「夜中七つ時」に「摩利支天」へ参詣したところ、「御堂おしつぶれ、その音夥しく、我々も飛出し、跡をも見ずして馳せかへり、翌朝かしこへ往きて見候処、何事も」なかった。「これこそ摩利支天の御こゝろみにあらんとぞんじ候」という記載があると紹介している。剣術の「免状」を請けたものが、参詣するのが、摩利支天であり、ここにも「兵法」との関

わりを読み取ることができ。『金沢古蹟志』は、さらに「此の外五本松にての怪異靈験等の伝話種々あり」とも述べている。鏡花がこれらの伝承を基に『五本松』（太陽）明31・12を執筆したことは、いうまでもない。宝泉寺は、俗に摩利支天山とよばれる高台にあり、全性寺から南東に五百メートルほど離れ、卯辰山麓寺院群のほぼ南端にある。「4 弁財天の祠」は、誓願寺浄土宗の「開運弁財天」をさすだろう。『稿本 金沢市史 寺社編』には、「本寺に開運弁財天あり、靈験顕かにして、祈願すれば靈異ありといひ伝ふ」とある。同寺蔵の「弁財天縁起」には、「関東北国処々安座ヲ改ムト雖靈験ハ昔ニ変ラス利生弥新ニシテ其加護ヲ蒙ル者揚テ算ヘ難シ」として、

延宝年中不破氏ノ一子不意ノ怪我ニ依テ命甚危キ事之有リキ父母ノ嗟一方ナラズ子ハ弁財天ヘ百日ノ祈誓ヲ籠メ遂ニ天寿全キコトヲ得シハ偏ニ弁財天ノ御冥助也父母歎喜ノ余リニ新調ノ御厨子ヲ寄付シテ天恩ヲ報シ奉ル

と「近代」の「利生」を紹介している。誓願寺は、『夫人利生記』で樹島が仏師の妻を見かけた「釣鐘の清水」の向かい、全性寺から南東に百五十メートル離れ、同寺から真成寺に通じる道沿い左側にある。

「5 明星の丘の毘沙門天」は、『金沢古蹟志』に「其の社殿は卯辰山一本松の下にあり。世人毘沙門と呼べり。元毘沙門の像を本地仏となし、社殿に安置せし故也といへり」とある宇多須神社奥社で、「往昔より宇多須山の鎮守」として信仰されている。全性寺の北東二百メートルほどの丘にある。

「6 虫歯封じに箸を供える辻の坂の地蔵菩薩」は、心蓮社（浄土宗 門前）にある通称「歯痛の地蔵」であろう。「金沢市地蔵尊民俗調査報告書 金沢市の地蔵尊」（金沢市文化財紀要135）平9・3によれば、「国道」を「卯辰山側に折れて50m坂道を登った左側の地蔵堂」にある。「明治初期、心蓮社前」の「下寺」に住んでいた「庵女さん」が「この地蔵にあやかつて、延命・歯痛止めの御符をつくり、市内の人々に頒布していた」という。全性寺の北百メートル程のところである。ただし、「虫歯封じに箸を供える」風習については、不明である。この風習に言及しているのは、『金沢古蹟志』の「理松院殿墳墓」であつて、「今世人歯痛を難儀するもの、此の墳墓へ祈誓すれば靈験ありとて、祈誓の人已が食箸を墓前に備え、祈願する人常に不絶といへり」と記している。なお、理松院は、「宇喜多秀家」の「女」の墓である。墓は、上述の妙泰寺にある。全性寺の向かい南側にある寺である。

「7 如意輪観世音」は、上述の誓願寺に祀られている（後出「誓願寺の如意輪観世音像」参照。「8 笠守の神」として知られていたのは、神谷内にある野蛟神社（上谷明神）である。森田柿園『加賀志徴』（引用は、石川県図書館協会刊本、昭12・9）は、「三州事蹟記」を引いて「今土俗此神は瘡の痛を治し給ふとて、瘡病の人居宅の土また砂などを持行き、此社の砂と取替来り、さて其砂を湯に入れ浴すれば、必痛治すとぞ」と記している。同じ神谷内の尼寺通妙庵には、鏡花の信仰した摩耶夫人像があつた。上谷明神の利益を鏡花が知つていても、不思議はない。もつとも、神谷内は金腐川をはさんだ卯辰山の向かいの山麓にあり、寺院群と少し離れている。全性寺の北東三キロメートルに位置する。後述する「11 蓮行寺」のモデル真成寺の北隣にある三宝寺（日蓮宗）には、「瘡守稲荷」がまつられている（驚き卯辰山寺院群15、「月刊北國アタス」平15・3）。三宝寺の「瘡守稲荷」が妥当であろう。

「9 森の奥の虚空蔵堂」は、九万坊寺（金峯山修験本宗）をさしているものとみられる。「奈良金峯山を祖とし建立された」（金沢市経済部観光課企画発行「卯辰山麓寺院群周辺マップ」）九万坊寺は、「うっそうとした山林の急斜面の山腹にあつて、九万坊大権現霊像を祀り、参拝者が多い。「日中も梟が鳴くと言ふ森の奥」にあるという作中の位置関係に付合する。全性寺の南東三百五十メートルほどのところにある。

「10 清水の上の高い丘に鐘楼のある梅鉢寺」は、「釣鐘の清水」が水の谷川の「コウド（洗い場）」（金沢の用水・こはし調査報告書（前編）「金沢市教育委員会、平12・3参照）をさすと考えられることから、その崖上に鐘楼のある寺、西養寺

（天台宗）がこれに相当する。西養寺は、加賀における天台宗延暦寺派の中心で、歓喜天を祀り、信仰を集めている。西養寺を「梅鉢寺」と呼ぶ風習はない。ただ、『金沢古蹟志』によれば、二代藩主前田利長との関わりが深く、前田家の家紋「梅鉢」を宛てた可能性はある。「攀ぢるに急だし、汗には且つなる」というように、急勾配で比較的長い階段の上にある点も実際に合っている。全性寺の南二百メートルほどのところにある。

「日摩耶夫人の御寺」である「蓮行寺」は、「釣鐘の清水」から確認でき、背後に「森の奥の虚空蔵堂」を控えた位置関係から、記述の上でも真成寺であることは疑いない。真成寺は、全性寺の南東二百メートルほどのところにある。真成寺は、『金沢古蹟志』に「真成寺の鬼子母神とて、世人信仰せり」とあるように、鬼子母神の寺として知られている。鬼子母神を摩耶夫人とした理由については、次章で考察する。

以上のように、十一の神仏全てが卯辰山寺院群に確認できるもので、全性寺の近隣の寺院に鎮座する神仏をさしている。いずれも霊験あらたかで、篤い信仰を集めているものばかりである。

なぜ寺号で呼んでいないかといえば、樹島が「若い母さん」に「手を曳かれてお参り」した「処」を「人間離れをして麗し」い「婦」に、「旅のものです（中略）蓮行寺と申しますのは？」と尋ねている点に示唆があるだろう。この寺については、赤門寺の住職も「摩耶夫人の御寺」と言っている。それは、地域の生活に根ざした信仰と結びついた呼称を意味する。「旅のもの」が、「蓮行寺と申しますのは？」と尋ねるのは、その地域との結びつきを持たないものであることをあらわす意識的な問いであった。逆に「婦」が、「摩耶夫人様のお寺でございますね」と答えるのは自然である。この地域が、現世利益の神々の鎮座する神聖な空間であること、しかも「或は岳に、阪、谷に、径を縫ふ右左（中略）殆ど寺つゞき」というように起伏に富んだ地形に寺院が密集し、多くの伝承を残す神聖な空間であることが示唆されている。以下、この作品は、「風流のしれもの」である樹島がこの地域を移動するこ

とによって、改めてこの空間の深層を知り、自分の心の奥底にある希求を知る展開をたどることになるのである。

次章では、真成寺の「押し絵の奉納額」の出典の考証を手がかりに、「蓮行寺」に祀られたのがなぜ実際の鬼子母神ではなく、摩耶夫人なのかを検討したい。

2 真成寺の押し絵と『倭文庫』

真成寺鬼子母神堂の「押し絵の奉納額」については、今村充夫「鬼子母神信仰——子授け・安産・子供の健康祈願（金沢）」（『江戸時代人づくり風土記（石川県）農山漁村文化協会、平3・6』）に、「本堂の高い壁には大小さまざまな奉納額が掲げてあり、これを絵馬といっています。鬼子母神に関係のある、石榴の絵などが多いようです。絵の具で描いたもの、あるいは刺しゅう絵を貼ったものがあります」という、「刺しゅう絵を貼ったもの」がこれに相当する。「押し絵の奉納額」は、十一点。いずれにも奉納者の氏名が記されている。十点は黒塗りの額、残りの一点は、白木で四辺に波形の彫り込みがあり、「明治三十年十一月吉日／金沢市中町／宮地民自作謹供／敬白」とある。また、中には、「当山十七世 篠原智旭」と記載されているものもある。真成寺現住職第十九世深村智山氏によれば、篠原智旭は、昭和六年五月十一日に七十四歳で亡くなっている。生年は、安政二、三年か。真成寺の十七世住職になったのは、明治三十、一年頃とのことである。とすれば、明治三十年から鏡花が真成寺に参詣したとみられる大正十二年までに奉納されたと考えてよい。奉納者の名前は、他に宇野満栄子、石谷リユ子、山崎とよい・永島春子（連名）、杉本みつ子、笠嶋小梅子、山下かをり・廣瀬静子（連名）、金田えつ子、米嶋重子、礪波光子である。現住職によれば、裁縫の師匠とその門下生が奉納したものという。上記奉納者のうち、笠嶋小梅子（笠高小梅）は、明治三十年代から

市内彦三で和裁塾を開いていた安井占(二八六六―一九四二)の弟子である(安井史郎「真成寺所蔵押し絵の大絵馬『花車』について」『石川の博士 論文集』第三集、平14・3)。笠島小梅は、明治三十八年九歳で安井占に入門し、大正三年に結婚している(安井氏の御教示による)。十点の押し絵額は、明治末から大正初めにかけて奉納されたものとみられる。なお、鬼子母神堂でひとときわ目を引く「花車」の大絵馬(タテ一間、ヨコ二間、明治35年4月奉納)の下部には、制作に携わった安井社中四十九名が列挙されているが、十点の押し絵額との重複はない。付言すれば、安井占は郷土史研究家氏家栄太郎の妹である。

作中の「蓮行寺」には、「釈迦八相倭文庫の挿絵」から七場面を描いた押し絵があるという設定で、これらについては、「釈迦八相倭文庫の挿絵」に該当するか、類似するものがある(続稿「夫人利生記」の成立)参照。

真成寺の押し絵の額で、『夫人利生記』の押し絵と一致するものは一つもない。『夫人利生記』の押し絵の構図は、すべて虚構である。真成寺が「摩耶夫人」ではなく、鬼子母神を祀った寺だからだ。これらの出典は、うち二点を除いていずれも『釈迦八相倭文庫』の挿絵・口絵である。便宜的に堂の入り口に近い方から番号を付ければ、額は①から④までが一辺(南面)、⑤から⑦までが一辺(東面)、⑧から⑪までが一辺(北面)のコの字形をなしている。それらの写真を本論巻末に列挙した。また、その出典(国会図書館蔵本による)にあたる口絵・挿絵をローマ数字を付して同じく巻末に列挙した。以下、これらの出典を検証した結果を記す。

まず、①(宇野満栄子奉納)は、畳に扇子を立て、右を向いて座る袴姿の侍を左に描き、画面中央に花立てを持った奥女中らしき女性が立ち、さらにその右に侍と同じ方向を向いて奥方らしき女性が座っている押し絵である。この出典は、『釈迦八相倭文庫』第十編四ウラ、五オモテの挿絵(巻末のI。以下、ウラをウ、オモテをオと略記する)であろう。この挿絵は、優陀夷の女房と命婦が、悉達太子発心の志が再度生じた様子を見て、対応を相談しているところに、

太子を諫めようと優陀夷が通りかかり、夫優陀夷を呼びとめた女房が「此の儘に捨置きては」といい、優陀夷もそれに同意して「耶輸陀羅女は、既に御胤を宿せしゆえ」に「御誕生あらば絆」となって「其思召も止みなんか」と語り合う様子を描いたものである(引用は、『続帝国文庫』第四十二編、博文館、明35・7。以下同じ)。

②(石谷リウ子奉納)は、冠木門の外側で、白馬に乗った若い殿様らしき人物を中央に描き、左に馬の轡を捉える従者、右に若殿らしき人物の片袖を右手に持ったまま後ろに倒れた姫らしき人物を描いた押し絵である。出典は、『釈迦八相倭文庫』第十編十三ウ、十四オの挿絵(巻末のII-1)、及び第十編口絵(巻末のII-2)で、両者を合体させたものである。出家を決意して城を出る悉達太子にあくまでも連れて行ってほしいと懇願する妻耶輸陀羅女は、門の内側で太子の右の袂にすがる。太子は、胎児を失わないように、帝、輪曇弥に孝行するようにと言い残し、追いつがる耶輸陀羅女を振り払って門を出る。その時、片袖が裂けて、耶輸陀羅女の右手に残る様子を描いたのが、十三ウ、十四オの挿絵である。この時太子は、まだ馬に乗っていない。従者を従えて白馬に乗った太子と門柱を背に嘆き悲しむ耶輸陀羅女を描いたのが、第十編口絵である。この口絵には、「悉達太子十九歳にして懐妊の姫を振捨車しんぐるまを連て檀特山の峰霊へ面向給ふ」という詞書きがある。十三ウ、十四オの挿絵の耶輸陀羅女が片袖を手にした様を口絵の耶輸陀羅女に代え、劇的な構図に変えている。

③(山崎とよい・永島春子奉納)は、しゃれこうべを手にした仙人と向き合う僧の一群を描いた押し絵だが、これに相当する挿絵・口絵は『倭文庫』には見いだせない。おそらく、この場面は、『今昔物語集』巻第四所収の「天竺婆羅門、貫死人頭売語第三十」によるものと思われる。この説話は、婆羅門が「王城二入りテ声ヲ高クシテ叫んで、「死人ノ古キ頭ヲ貫キ集」めたものを売ろうとして売れず、悲しんでいるところに「智有ル人」が来てそれを買った(『注好選』では「婆羅門は鬻骸を売る第三十」。引用は、『新日本古典大系本』による)というものである。法華経の功德

を説くものである。

④（杉本みつ子奉納）は、海辺に天秤棒らしきものを持った男が立ち、左に女が座り、右におかっぱ頭の子供が立って男の袖に縋っている、その傍らに二つの桶がある。画面右の岩の上には老人が立っていて、その様子をうかがっているという押し絵である。出典は、『倭文庫』第十三編八ウ、九オ（巻末のⅢ）と思われる。太子出家後幽閉された耶輸陀羅女が、観世音に太子との再会の願いを祈念し、まどろみ、夢を見る。夢に現れた白衣観音が無実の罪を晴らすことを約束し、太子が修行する様をみせようといざなう。名を瞿曇沙弥と改めた太子に阿羅々仙人は若菜を摘み、水を汲む修行を申しつける。この挿絵は、太子を山賤と思ひ、太子の庵のありかを尋ねる耶輸陀羅女母子と、正体をさとられまいと内心懊悩する太子を描いている。押し絵右の老人（阿羅々仙人）の姿は、この挿絵にはない。第十三編六ウ、七オの挿絵に描かれた仙人の姿に基づいていると思われるが、仙人を併せて描く押し絵と同じ構図の挿絵は見当たらない。

⑤（笠嶋小梅子奉納）は、烏帽子、直垂姿の二人の仏師が鑿と小槌を手にして仏像を刻んでいる。うち一人は半紙を口にして前に倒れ込んでいる。もう一人も半紙を口にして座っている。その後ろに合掌する高貴な人物がいて、仏像が金色を放っている押し絵である。この出典は、『倭文庫』第四十七編の口絵である（巻末のⅣ）。詞書きには、「優闍大王の勅命によつて毘首天羯摩天赤梅檀をもつて世尊の影像を一刀三礼して刻給ふ此靈像三國に伝はりて今日本嵯峨の釈尊是なり」とある。優闍大王が名工毘首羯摩に命じて仏像を造らせている場面である。本文ではこの後、世尊が仏像に對面する。木仏の尊像は、寸分の違いもなく世尊と一致する。世尊が促すと仏像は「動座」し、「御法」を説いて人々を感動させる。仏像制作と仏像の有り難さを描く展開は、『夫人利生記』を想起させる点で注目される。

⑥（山下かをり・広瀬静子奉納）は、閻魔大王の前に座る僧侶を描く。この押し絵の出典にあたる挿絵はない。ただ、『今昔物語集』巻第十三所収の「比叡山西塔僧道栄語第七」、「出羽国竜華寺妙達和尚語第十三」、「僧源尊、行冥途誦法花活語第三十五」のような、死んだ僧が、閻魔大王の前に行き、法華経の功德によつて一夜にして生き返る説話を場面化したものと考えられる。

⑦から⑩は、第三十三編の鬼子母神説話に拠っている。⑦（金田えつ子奉納）は、角の生えた女が脇息に肘をついた周りを五人の幼児が踊っている押し絵である。出典は、『倭文庫』第三十三編八ウ、九オの挿絵である（巻末のⅤ）。猫王山の仙窟に住む歡喜大王が、娘鬼子母神の子供五百人を宮仕えさせ、「或ひは唄はせ、舞はせなどして」いるのを「見て余念なく打戯むれ、殊なう楽みの限り」とする様子を描いている。

⑧（米嶋重子奉納）は、髪を振り乱して座る女が中央にいて左右に二人の人物が立っている押し絵である。出典は、『倭文庫』第三十三編十五ウ、十六オである（巻末のⅥ）。如来が隠した末子びんがらを探しあぐねて帰宅した鬼子母神が、本来の鬼神の姿を現して馳せ来たり、二人の旅人（如来と迦葉）に子供を隠した理由を問う。挿絵は、如来が千人のうちの一人欠けても嘆く。親が子を喪つたらどんな気持ちになるかと親子の恩愛の尽きないことを説く場面である。

⑨（篠原智旭奉納）は、笈を開けようとす鬼女を中央に描き、右に青々と月代を剃った黒衣の男が座り、直ぐ後ろに高僧が立って鬼女をさとす様子を描いた押し絵である。出典は、『倭文庫』第三十三編十六ウ、十七オ（巻末のⅦ）で、鬼子母神が「いとし児」を取り返そうと笈に近づくと、迦葉が如来の命で笈を渡し、鬼子母神が開けようとすも、びくともしない様子を描く。

⑩（砺波光子奉納）は、泣く鬼女とその後ろで石榴を差し出す黒衣の男を画面左に、幼子を抱え上げた僧と泣き崩れる女性を右に描いた押し絵である。出典は、『倭文庫』第三十三編十七ウ、十八オである（巻末のⅧ）。如来が笈

からびんがらをさし出してさとし、鬼子母神が改心する場面。子を抱く鬼子母神を見て如来は庭の石榴を取らせ、「人子を取り食ひし骨骸から生えた木の実」で「人間の味」がする。「食物として与ふべし」という。これに続いて鬼子母神は、発心する。『倭文庫』では、びんがらが鬼子母神にすがりついているが、真成寺の押し絵では如来がびんがらを抱えあげている。教え諭す様子を強調した場面構成になっているといえよう。

以上が鬼子母神説話に取材した押し絵である。鏡花『吉祥果』（少女・明42・9）には、右のうち⑧から⑩の押し絵に相当する場面が取り上げられている。

⑪（宮地民奉納）は、唯一白木の額で、中央に燭台があり、左に雲に乗って白象に駕した貴女が長い巻物を読んでいる。右には座布団の上に座った殿様らしき人物が脇息にもたれて、それを聞いている。そのすぐ右後ろには枕を手にした奥方らしき女が立って同じくそちらに顔を向けて聞いている様子を描いた押し絵である。この出典は、『倭文庫』第九編口絵（巻末のⅩ―Ⅰ）、同じく第九編八ウ、九オ（巻末のⅩ―Ⅱ）で両者を併せたものである。第九編で、悉達太子は耶輸陀羅女のもとに通い、やがて耶輸陀羅女は妊娠する。帝から祝いの言葉を賜った日の夜、耶輸陀羅女のもとで悉達太子は夢を見る。夢に現れたのは、太子九歳のとき「淫肆」の曲輪で言葉を交わした遊女の婆須密多女であった。一通りの挨拶が終わると遊女は、あの時太子は「正真の仏菩薩を拜ませ呉よ」と言った。「正真の仏菩薩を拜」んで、母摩耶夫人の「御菩提」を弔う志を叶えようとしたが、太子が心変わりして疎遠になった。それ以来あきらめられない恨みを述べに来たという。太子は、それに答えて、鬱頭院に納められた「奉加賽銭」を盗んで「汚らはしき傾城町」へ行った。そのみならず「鬱頭院の本院なる、左の方に安置せし、蔵王如来は閻浮檀金」だというので、その「尊体」を「土か金かと疑が」って刃にかけた。そのために亡き母は苦しんでいるのではないかと疑う。遊女は、この世界は仏の戒めるものだから、浄土へ赴くよう説く。若君は、衆生済度のために生

まれたことを自覚すべきだ。亡き母を「恋慕偈仰した」功德によって、摩耶夫人は帝釈天の後となって喜見城に住んでいるといい、かつての所業がことごとく「大善根」となっているという。太子が夢の中で目を閉じ観念すると遊女は、白象に乗った「正真の普賢菩薩」になり、それと同時に音楽が聞こえ、花が降る。やがて伏し拝む太子の前を白象に乗った「正身の普賢菩薩」が去ってゆく。

口絵には、「悉達太子霊夢に普賢菩薩に見え給ふ」という詞書きがある。「霊夢」で、遊女実は普賢菩薩と語り合う場面である。八ウ、九オの挿絵は、遊女が「普賢菩薩」だと知って合掌する場面、「罪咎と思ひしも、是れ皆母君摩耶夫人の爲めに此の上も無き、大善根」だと説明し、「浄土へ赴く」よう勧める場面である。なお、⑪の押し絵奉納について、明治四十一年一月二十一日付「北國新聞」の連載「○神秘奇譚（四）鬼子母神（真成寺）」は、次のように記している。

中町の古物商宮地より上げたのは悉陀太子で、医師も手を放せし子供の病気が平癒した奇瑞を、感謝するべく、娘たみ子一人の手に成ったものださうな

右のように、真成寺の押し絵は、法華経の功德を描いた二面を除いて、『釈迦八相倭文庫』の口絵・挿絵に基づいていることが確かめられる。「泉鏡花蔵書目録」（鏡花全集）月報29、岩波書店、昭51・3）によれば、鏡花は、『釈迦八相倭文庫』の初編から三十八編及び四十一編から五十八編までを所蔵していたことがわかる。真成寺の押し絵は、第九、十、十三、三十三、四十七編の口絵・挿絵に拠る。当然これらを知っていることと推定される。釈迦の出家前後と鬼子母神説話を中心に、仏像造立の逸話と上述の法華経の功德を加えたものということが出来る。釈迦の出家前後の四点（①・④）は、出家を急ぐ太子と太子の子を宿し、出産直後に幽閉されて一人で育てる耶輸陀羅女の情愛が、また鬼子母神説話を取り上げた四点（⑦・⑩）は、鬼子母神の改心と母の慈愛が中心となっている

ということができる。

真成寺の鬼子母神の逸話や釈迦出家前後を中心とする押し絵の額が、『夫人利生記』で「摩耶夫人の御ありさま」を描いたものになった契機は、押し絵のなかで唯一摩耶夫人との関わりのある①にあるだろう。『倭文庫』を愛読し、『清心庵』(「太陽」明30・7)以来作中に夫人を取り入れてきた鏡花が、大正十二年十一月の帰郷時に改めて真成寺の押し絵と向き合った時、第九編で悉達太子が「正身の仏菩薩を拜」んで、母摩耶夫人の「御菩提」を申う志を叶えようとし、悪行を重ね、意外にもそれらの所業がごとごとく「大善根」となったという展開を想起したものと考えられる。また、この押し絵は、『夫人利生記』の「蓮行寺」にあるという押し絵の一つ、「牙の六つある大白象の背に騎して、兜率天よりして雲を下つて、白衣の夫人の寝姿の夢まぐらに立たせたまふ一枚」と「大白象の背に騎して」いる点、「夢枕に立たせたまふ」点で共通している。この出典は、初編下十二ウ、十三オ(巻末のX)である。押し絵の原拠『倭文庫』から、鏡花が太子の亡き母摩耶夫人への恩愛の深さ、亡き摩耶夫人との再会を渴望する思いの深さを改めて想起したとしても、それは、不自然ではない。鬼子母神真成寺を摩耶夫人の寺蓮行寺として設定する契機の一つが、ここにあるのではなからうか。この問題については、続稿で改めて検討する。

以上のように、『夫人利生記』の背景には、舞台となった卯辰山麓寺院群に伝承する多くの利益・利生譚や民間信仰があることを見逃してはならない。それは、鏡花が幼少期から心に刻み込んでいたものでもあった。特に、真成寺については、殊に馴染み深いだけでなく『龍潭譚』(「文芸倶楽部」明29・11)、『鶯花径』(「太陽」明31・9)以来作中にもしばしば取り上げてきた寺院であった。ここを舞台に、新しい物語を構想するにあたって、改めて鏡花を捉えたのが、明治末から大正三年にかけて奉納されたと考えられる壁面を埋めた押し絵だったに違いない。鏡花は、大正十二年の帰郷時、真成寺に参詣し、押し絵の出典が長年愛読してきた『倭文庫』であることに目を向け、押し絵

とその出典を解説するなかで、特に『倭文庫』第九編の口絵と挿絵に基づいた押し絵、そして「優闌大王の勅命によつて毘首天羯摩天赤梅檀をもて世尊の影像を一刀三礼して刻給ふ」第四十七編の口絵に基づく⑤の押し絵に注目して、仏師に夫人像の造立を依頼する摩耶夫人の新たな「利生記」を構想したものとみられる。

真成寺の押し絵



⑩



⑦



④



①



⑪



⑧



⑤



②



誓願寺・如意輪観音像



⑨



⑥



③

『倭文庫』の口絵・挿絵



IX-1 第九編口絵



VI 第三十三編十五ウ、十六オの挿絵



III 第十三編八ウ、九オ



I 第十編四ウ、五オの挿絵



IX-2 第九編八ウ、九オの挿絵



VII 第三十三編十六ウ、十七オの挿絵



IV 第四十七編の口絵



II-1 第十編十三ウ、十四オの挿絵



X 初編十二ウ、十三オ



VIII 第三十三編十七ウ、十八オの挿絵



V 第三十三編八ウ、九オの挿絵



II-2 第十編の口絵

『夫人利生記』の成立

『夫人利生記』は、大正十三年七月、雑誌「女性」に掲載された短編小説で、同年十二月に刊行された作品集『番町夜講』（改造社）に収録された。初出と『番町夜講』収録本文との間に、大きな異同はみられない。ルビ、送り仮名、用字の異同にとどまる。

この作品は、末尾に

筆者は、無憂樹、峰茶屋心中、なほ夫人堂など、両三度、摩耶夫人の御像みずがたを写さうとした。いままた繰返しながら、その面影の影らしい影をさへ描き得ない拙さを、恥ぢなければならぬ。……

とあるように、『無憂樹』（日高有倫堂、明39・6）、「夫人堂」（「景話題」所収。「新小説」明44・6）、「峰茶屋心中」（同前、大6・4）といったいわゆる「摩耶夫人もの」の一つである。

先行研究として、作中の「心象コンテラスト」を解明した野口武彦「本文および作品鑑賞 夫人利生記」（鑑賞日本現代文学③ 泉鏡花 角川書店、昭57・2）、主人公の特異さを指摘した脇明子「運命の女との訣別」（『鏡花全集』月報22 昭50・8）、「図像」の重要性に着目して「絵解き」の方法を使った小説だと指摘する吉村博任「『絵解き』からの視座——絵解き鏡花」（『鏡花研究』平元・3）、「喩」の機能からのアプローチを試みる真有澄香「『夫人利生記』考——

その表現の問題」（『泉鏡花 呪詞の形象』所収。鼎書房、平13・2）などが備わるが、作品の成立背景についての検証は十分とはいえない。

周知のように、「蓮行寺」のモデルである真成寺には「額装の押絵」が実在する¹。しかし、管見によれば『釈迦八相倭文庫』との関連を実証した例はない。また、作者が常に机辺においていた摩耶夫人像の入手経緯も、この作品執筆に関係しているものと考えられるが、この方面からの検討もほとんどなされていない。

小稿の目的は、右に述べたような『夫人利生記』の成立背景を検証するとともに、主人公樹島の指向と欲望の帰趨を検討することである。なお、『夫人利生記』の引用は、初出誌による。また、『釈迦八相倭文庫』の引用は『続帝国文庫 釈迦八相倭文庫』上・下（博文館、明35・4）による。挿絵・口絵は、国会図書館所蔵本による。

1 摩耶夫人像の入手

鏡花の書齋に漆塗りの厨子に収められた摩耶夫人像があったことは、よく知られている。泉名月「羽つき・手がら・鼓の緒」（『別冊現代詩手帖』昭47・1）にいう「鏡花が仏具師に頼んで作って、机上に安置したマヤ夫人」であり、「幼いお釈迦様をふところにしっかりとおだきになって右手にぼたんの花をかざしている」「二十センチ」の「お像」である。大正十五年六月に刊行された春陽堂版『鏡花全集』巻十四の巻頭に掲載された写真「麹町下六番町」には、文机の脇の棚の上に厨子に納められた夫人像が写っている。しかし、愛蔵の兎の玩具を左手に持って机の脇の火鉢に右手を乗せた写真「大正九年、四十七歳」（岩波書店版『鏡花全集』月報20）掲載。昭50・6）には、同じ背景が写っているにもかかわらず厨子はみえない。

関東大震災に取材した随筆「露宿」(女性 大12・11)には、震災当日、「露宿」に備えて一旦帰宅した際、「観世音の塑像を一体」と「なき父が彫ってくれた、私の真鍮の迷子札」を「幸ひに(中略)袂にし」たとあるが、摩耶夫人像のことは出てこない。吉田昌志『露宿』をめぐって―鏡花の随筆―(「解釈と鑑賞」平元・11)の指摘するように、「真鍮の迷子札」は「亡き父の彫ってくれた形見」であり、「観世音の塑像」は「母のかわり」にちがいない。「危厄に見舞われた鏡花を守護するもの」として、当然持ち出すべき摩耶夫人像はまだなかったと考えるのが自然である。おそらく摩耶夫人像を逃えたのは、関東大震災後のことであろう。

一門下生(寺木定芳)「思ひ出話 番町の先生」(鏡花全集月報 第14号、岩波書店旧版『鏡花全集』第三卷付録。昭16・12)は、金沢の卯辰山麓に鏡花ゆかりの社寺があると述べたあと、摩耶夫人像について、「是は嘗て先生が此の土地へ御いになつた時、このあたりに、さ、やかな業を持った仏師宮保某といふ人に命じて刻ましたものだ」と述べている。さらに「それには先生らしい面白い挿話がある」として、

此の時先生は偶然此の家の横の小さい流れで布を晒す一妻女の容色が、あまりにも神々しく、清々しいのに驚かされたがそれが、此の仏師の妻女である事がわかつて、其の臆つけた姿其の儘を摩耶夫人に彫刻をと御注文になつて出来上がったものださうである。

と記している。この「挿話」は、『夫人利生記』と内容上密接な関連を持つ。具体的には、釣鐘の清水で「婦の(中略)写真」を見る「一時間前ばかり前」、赤門寺から蓮行寺に向かう途中の清水でその「婦」に会う場面及び仏師の妻が清水で会った「婦」と知り、夫人像を妻の「似顔」にして欲しいと依頼する場面と関係する。

このように、『夫人利生記』は、金沢に帰郷した鏡花の実体験に基づいたものと考えられる。それはいつのことで

あろうか。『夫人利生記』を発表した翌月(大13・8)、同じ雑誌「女性」誌上に鏡花も参加した座談会「旅行笑話」が掲載された。そのなかで鈴木三重吉から「泉さんはよく奥さんと御一緒に旅をなさいますね」と尋ねられた鏡花が、

昨年十一月に金沢へ行つた時に、初めて寝台車に乗つて見ましたがね、(中略)それ迄は陰気臭くていかんものだと思ひましたが、乗つて見るといゝものですね。

といい、「両方共下がとれましたよ」と付け加えている。この発言から、関東大震災から間もない大正十二年十一月に、鏡花は妻を伴つて金沢に帰郷したことがわかる。

『夫人利生記』と同月に連載が始まった紀行「玉造日記」(大阪朝日新聞 大13・7・20～9・6)には、「秋の末」に「家内」同伴で金沢を訪れたことに言及し、「北陸線で午ごろ着い」て、「停車場を二つ、三里ばかり越して、前の松任まで乗越」して「成村の行善寺に、嬋娟たる女体の御仏」、つまり摩耶夫人像を拝したという記述がある。おそろくこれも、前年秋の帰郷とみてよい。『夫人利生記』の発表された大正十三年は、『傘』(二月)、『胡桃』(二月)、『火のいたづら』(四月)というように、金沢を舞台とした作品が多く発表されている。この作品も、前年十一月の帰郷に取材した一連の作品の一つと見られる。

一門下生、寺木定芳が「思ひ出話 番町の先生」で紹介する夫人像の注文も、この時になされたものとみていいだろう。その契機は、関東大震災に遭遇したこと、より直接的には改めて行善寺の夫人像を拝した感動にあつたように思われる。この帰郷の際作成を依頼した仏師は、「このあたりに、さ、やかな業を持った仏師宮保某といふ人」だという。ここにいる「仏師宮保某といふ人」は、田中喜男『金沢木工芸職人』(北国出版社、昭51・8)に明治期の工人宮島左輔(生没年不明)の弟子として名前のみえる「宮保左慶(小川町住)」のことである。宮保家は、現在も同所に住む。以下は、宮保左慶の三女淳子氏の証言に基づく。

左慶は、本名を辰三といい、明治二十五年金沢市下小川町三十六番地に生まれ、昭和十五年二月十四日に四十九歳で亡くなった。仏師は、左慶一代限りであった。旧下小川町は、「蓮行寺」のモデル真成寺のある旧上小川町に隣接した町で、現在は同じ金沢市東山二丁目に属する。宮保家は淳子氏の祖父の代から現在地に住み、雑貨店兼金貸業を営んだ。作中に仏師の家のありかを「一山に寺々を構へたその一谷を町口へ出はづれの窮路、陋巷と言った細小路」にあるというが、「窮路、陋巷と言った細小路」を除けば実際と付合する。来教寺の向かいであり、やや高台にある西養寺の階段下に位置する。

辰三は、馬場小学校卒業後宮島左輔に弟子入りし、仏師左慶となったものである。作中の仏師は、「年紀はまだ若さうなが額のぬけ上つ」た「円顔で、眉の濃い、目の柔らかな男」とされているが、左慶もそのようであったとのことである。鏡花が夫人像を注文したと思われる大正十二年には、三十一歳。後掲写真①の左慶を彷彿とさせる。また、「やや咽つて口重く」というのも、実際を反映しているとのことである。

辰三の妻外女は、明治三十一年四月二十日に金沢市白山町（現、石引町）の赤木家に生まれ、昭和四十八年十月二十日に七十五歳で亡くなっている。作中、仏師の妻は、「美麗な婦」、「しなやかな婦」で、「初利天の貴女（中略）さながら」の「人間離れをして美しい」女性とされている。「初利天の貴女」とは、摩耶夫人のことである。外女も美貌を謳われ、馬場小学校校下をさす「七聯区一の美人」に選ばれたこともあるという（小林輝治『水辺彷徨』扉写真参照。梧桐書院、平25・3）。明朗快活で、仏像の塗り仕事を手伝い、近隣の寺との交渉を一手に引き受けていた他、向かいの金比羅（乗教寺）に詣でる東廓の芸妓などを相手に仏花や線香を商っていたという。作中仏師の妻は、「師匠の娘」だというのが、外女の実家赤木家は士族であって、この設定は虚構である。しかし、樹島が訪れた仏師の家に「歳弱の三歳」の「嬢ちゃん」がいたという設定は、実際に基づく。宮保辰三・外女夫妻は、長女房子（天5・1生）、長男

省三（天8生）、次女孝子（天11・3生）、三女淳子（昭2・11生）の一男三女をもうけている。「歳弱の三歳」の「嬢ちゃん」とは、次女孝子をさすものとみられる。なお、大正十二年当時、外女は、二十五歳であり、作中の「年紀二十五六」に一致する。

宮保家は、間口三間半、奥行き七間で、左慶の仕事場は、幅二間奥行き三間くらいで、ガラス戸になっており、通りからよく見えたといい、仏像を並べた陳列棚があったという。「一小間硝子を張つて、小形の仏翁（番町夜講）では「仏翁」、塔のうつつし、その祖師の像などを並べ」ている仏師の仕事場の描写に近い。職人も二三人いたというが、作中には登場しない。

夫人像は、鏡花が直接宮保家を訪れて注文したものだといひ、鏡花からの葉書が残っていたが今は行方不明だといひ。外女が、「水溜」で洗い物をしているのを見た後、鏡花が夫人像の注文に訪れ、仏師の妻が洗い物をしていた女性だったという偶然も事実だといひ。このように、淳子氏の証言は『夫人利生記』の仏師夫妻と共通するところが多い。

なお、淳子氏によれば、左慶は、卯辰山麓の寺院や神社の依頼で、仏像や仏具、檀家の位牌その他の制作・修理を引き受けていたといひ、赤門寺のモデル全性寺や蓮行寺のモデル真成寺とは、交流も盛んであったといひ。作中仏師は、「赤門寺のお上人は、よくお店へお立寄り下さいませ」といひ、「相好説法」の重要性を説く「赤門寺のお上人」が「しごとのあひだ（中略）四五度もしばく見え」て、その勧めによって仏師は、樹島の依頼した仏師の妻の「似顔」ではなく、樹島の「お母様の佛」を夫人像に刻んだといひ。「赤門寺のお上人」は、樹島の煩惱を母と夫人の恩愛に転換させる重要な役割を果たす人物である。

全性寺の賀来愛子氏（天9生）によれば、仏師と近隣の寺は盛んに往来していたが、特に宮保家とは家族ぐるみの

つきあいだったという。鏡花が夫人像を誂える際、全性寺の住職に相談し、仏師左慶を紹介された可能性はあるだろう。というのも、全性寺にも摩耶夫人像が祀られているからである（泉鏡花記念館図録「鏡花」、平21・3、参照）。

なお、作中「住職も智識の聞こえあつて、寺は名高い」とされる赤門寺の住職も、大正十二年当時の全性寺の住職をモデルにしたものと考えられる。全性寺の現住職吉田弘信氏によれば、当時の住職は、賀来元締（日誓聖人。明元〓昭5・1・20 写真②参照）である。もと加賀藩医の家に生まれた元締は、小僧として全性寺に入り、前住職阪井日道（第23世。明31・3・2逝去。享年58歳）の死去に伴い、明治三十一年七月から第二十四世住職となった。大正十二年当時五十六歳である。作中赤門寺の住職は、樹島が「御近所に参詣をしたい処」があると云っただけで「まだお娘御のやうに見えた、若い母さんに手を曳かれてお参りなされた、――あの、摩耶夫人の御寺へ」行くと看破する。鏡花の母が亡くなったのは明治十五年十二月である。面識があるとすれば、小僧として全性寺に入って間もないころか。前住職阪井日道と当時の住職元締を併せた可能性もある。阪井日道は、明治九年から住職となった。翌年七月十七日に亡くなった鏡花の母の兄孫惣の墓は全性寺にある。鏡花とその母を知っていたよい。日道は、明治二十八年から能登羽咋にある日蓮宗の本山妙成寺の第五十二世となった。渡辺霞亭『横山隆興翁』（沢田助太郎刊、大9・7）によれば、「前住阪井日道師」は「学徳兼備」の「高僧」とされている。横山隆興は、尾小屋鉦山他を経営した金沢の実業家で男爵。全性寺の護妙明神を信仰し、同寺と関わりが深かった。「後住の賀来元締師」は、横山男爵の勧めで「大本山法華経寺に入りて五ヶ年」の「大行」を行った「徳」のある僧である。いずれの住職も、作中の「智識の聞こえ」ある住職にふさわしい。

大正十二年十一月、関東大震災の大惨事を目の当たりにした鏡花は、松任行善寺の摩耶夫人像に参拝した後金沢に帰郷して心の平安や故郷との紐帯を確認し、併せて摩耶夫人像を誂えたものと思われる。

次章では、真成寺の押し絵の額と『釈迦八相倭文庫』の関わりについて検証することとする。

2 押し絵と『釈迦八相倭文庫』

卯辰山麓にある真成寺の鬼子母神堂には、『夫人利生記』の記述にあるように「押し絵の有名な額」がある。堂を入って右にコの字型に十一点が飾られていて、いずれにも奉納者の氏名が記されている。うち十点は黒漆塗りの額に収められ、残りの一点は、白木で四辺に波形の彫り込みがある。作中には、「城の奥々の婦人たちが丹精を凝らした細工」だとあるが、時代はもっと新しい。というのも、内陣に一番近い所に掲げられている白木の額には、写真③のように「明治三十年十一月吉日／金沢市中町／宮地民自作謹供／敬白」と奉納の期日が記されているからである。また、白木の額から右に二つ目の額には、「当山十七世 篠原智旭」と奉納者の名が記載されている。真成寺現住職によれば、篠原智旭は、昭和六年五月十一日に七十四歳で亡くなっている（生年は、安政二、三年か）。真成寺の十七世住職になったのは、明治三十、三十一年頃とのことである。黒漆塗りの額十点は、外見からして、いずれも同時に奉納されたものと思われる。篠原智旭以外の奉納者は、女性である。裁縫の師匠とその門下生が奉納したものと伝わる。前稿で検証したように、奉納したのは、安井占社中の女性と当時の住職で、明治末から大正三年の間と考えられる。作者を「城中の奥」の「御台、正室」や「側室、愛妾」としたのは、『釈迦八相倭文庫』の嬌曇弥・摩耶姉妹の対立に重ね合わせるためとみられる。作中の蓮行寺には、「釈迦八相倭文庫の挿絵」から七場面を描いた押し絵があるという設定である。それらを同作の相当する挿絵・口絵の有無、そのありかとともに列挙すれば、以下のようになる。

(1) 浄飯王が狩りの途次善覚の二人の娘をはじめて見る処―該当本文なし。但し、初編六ウラ、七オモテの挿絵は、馬上の浄飯王がかしづく女性たちを見る場面で、(1)に近い(図1参照。以下、ウラをウ、オモテをオと略記する)。(2) 優陀夷が結納の使者に立つ処―該当本文、挿絵なし。初篇十一オの「善覚王参内」の挿絵を優陀夷と捉えたものか(図2参照)。

(3) 嬌曇弥が嫉妬の処―第二編口絵の「嬌曇弥の嫉妬の一念青蛇形と頭れ青龍城の摩耶夫人を怨む」という詞書きのある口絵がこれに相当する(図3参照)。

(4) 夫人が幻に未生のうない子を、病中の御胸に抱きしめる姿―第二編十一ウ、十二オに夫人が未生の子を抱く挿絵がある(図4参照)。

(5) 夫人が姿見のもとに、黒塗りの時絵の盥をとって手水を引く場面―初編十ウに参内の準備をする嬌曇弥・摩耶姉妹が「紅粉化粧に気を付け」る様子を描いた挿絵がある(図5参照)。

(6) 大白象の背に騎して、兜率天より雲を下って、夫人の夢枕に立つ一枚―初編十二ウ、十三オで仏が「白象」に乗って夢に現れ、摩耶の「前生」を教える場面を描いた挿絵がある(図6参照)。

(7) 藍毘尼園の無憂樹の花にかざした右の袖のまま釈尊誕生―第二編の結末(十九ウ、二十オ)に「提婆羅樹の下へ寄って、やをら左りの手を延ばし、一と枝」折ろうとする挿絵がある(図7参照)。

このように全てについて、「釈迦八相倭文庫の挿絵」に該当するか、類似するものがある。

真成寺の押し絵の額で、右の挿絵・口絵に基づいて「摩耶夫人の御ありさまを、絵のま、羽二重と、友禪と、綾、錦、また珊瑚をさへ鏤めて肉置の挿絵にした」ものは、一つもない。すべて、虚構である。それは、いうまでもなく、真成寺が「摩耶夫人」ではなく、鬼子母神を祀った寺だからだ。注目されるのは、前稿で検討したように、実際に

真成寺にある「肉置の挿絵」にしたものうち二点を除いていずれも『釈迦八相大和文庫』の挿絵・口絵であることである。堂の入り口右から番号を付して内容と出典を示せば以下の通りである。

① 優陀夷夫婦が太子発心の志に気づいて思案する場面、第十編四ウ、五オ。② 冠木門を出て出家する太子と太子に追いつがる耶輸陀羅女、第十編口絵。③ しゃれこうべを手にした男と向き合う僧、不明。④ 耶輸陀羅女とその子が夢で観音に導かれ、出家した太子と再会する場面、第十三編八ウ、九オ。⑤ 優闍王が毘首羯摩に仏像を作らせる場面、四十七編一ウ、二オ口絵。⑥ 閻魔大王の前に座る僧侶を描く、不明。⑦ 歓喜大王(鬼子母神の母)が孫の踊りを見て楽しむ場面、第三十三編八ウ、九オ。⑧ びんがらを探しあぐねて帰宅した鬼子母神に、如来と迦葉が親子の恩愛の尽きないことを説く場面、三十三編十五ウ、十六オ。⑨ 如来と迦葉の前で、鬼子母神が子を取り返そうと笈を動かそうとするがびくともしない場面、第三十三編十六ウ、十七オ。⑩ 如来が笈からびんがらを出してさとし、鬼子母神が改心する場面、三十三編十六ウ、十七オ(図8-①)。^⑪ 耶輸陀羅女の許に通う太子がかつて「淫肆」で会った遊女の夢を見て、遊女が実は普賢菩薩だと知る場面、第九編口絵、八ウ、九オ(図8-②)を併せたもの。計十一場面である。

このうち、第三十三編に基づく四面(⑦・⑩)が、鬼子母神の説話である^③。真成寺の押し絵の額十一のうち、鬼子母神を描いたのは、実は約三割にすぎない。その他の七点のうち、釈迦の出家前後を描いたものが四点(①・②・④・⑪)ある。これらは、出家を急ぐ太子と太子の子を宿し、出産直後に幽閉されて一人で子供を育てる耶輸陀羅女的情愛を強く印象づけるものである。他の二点(③・⑥)は、法華経の功德を描いたものと思われる。押し絵は、鬼子母神の改心と母の慈悲および耶輸陀羅女の夫及び子に対する情愛が中心となっており、これに法華経の功德を加えているといえよう。

真成寺の鬼子母神の逸話や釈迦出家前後を中心とする押し絵の額が、なぜ作中で「摩耶夫人の御ありさま」を「絵のま、羽二重と、友禪と、綾、錦、また珊瑚をさへ鏤めて肉置の挿絵にした」ものになったのだろうか。換言すれば、真成寺の押し絵の額十一面のうちに、「摩耶夫人」と結びつくものはないのだろうか。可能性として、内陣に一番近い所に掲げられ「明治三十年十一月吉日／金沢市中町／宮地民自作謹供／敬白」と銘のある白木の額の押し絵（写真②）に、「摩耶夫人」との関わりを指摘できる。前稿で述べたように、第九編に取り上げられた押し絵（図8-1、図8-2）で、夢のなかで太子が、「九歳の御時に、（中略）通ひなれたる、淫肆の曲輪にて言葉を替はせし、傾城の婆須密多女」と再会する場面である。「婆須密多女」は、「無情なき君」を諦めかねて「御恨を、述べ」にきたという。それを契機に太子は、かつて犯した三つの悪業を「嘆息つくく」語る。それは、

鬱頭覽の院へ諸方より、納めたる奉加賽銭を盗み取り、汚らはしき傾城町へ忍び出で、是はまだしも、鬱頭覽の本院なる、左の方に安置せし、蔵王如来は閻浮檀金と聞くからに、此の尊体を勿体なくも、土か金かと疑がひて、刃に掛けし身の浅ましき

とあるように、(1)奉加賽銭を盗んだこと、(2)傾城町へ忍び出たこと、(3)蔵王如来の尊体を傷つけたことの三点である。太子が傾城町へ忍び出たのは、一人の僧から「淫肆と云へる契情町」を「正真の御仏を、拜まんと思ふ者」の通う場所だと教えられたため（第四編）だが、そもそも太子が「正真の御仏を、拜」もうと熱望したのは、「世を去りし、摩耶夫人の事を忘れず、心に忍ばぬ折りもなく、何卒御恩を報」じ、「只御仏の道のみ、深く尋」ねようと強く願うため、つまり亡き母摩耶夫人への恩愛ゆえであった。太子は、「夜叉鬼神にも劣りたる、逆事のとり吊らひ、嗚ぞや嗚ぞ冥土の母君は、磨故に猶苦しみを、受け給はん」と思い、自殺を計るが未遂に終わる。それは、太子の痛恨事であった。今改めて、「死ぬにも死なれぬ身の罪障」、「悔んで甲斐なき不孝の振舞」と後悔するのだが、

「婆須密多女」は、それを否定し、「其の罪咎と思ひしも、是れ皆母君摩耶夫人の爲めに此の上も無き、大善根」と説明する。そして、早々に「浄土へ赴く」よう勧め、「さら波立つ」と唄い、「白象に乗」った「正身の普賢菩薩」に変身する。写真③の押し絵の額は、「罪咎と思ひしも、是れ皆母君摩耶夫人の爲めに此の上も無き、大善根」と説明し、「浄土へ赴く」よう勧める場面である。

この押し絵は、『夫人利生記』で樹島が目にする「牙の六つある大白象の背に騎して、兜率天よりして雲を下つて、白衣の夫人の寝姿の夢枕に立たせたまふ一枚」（図6）と「大白象の背に騎して」いる点、「夢枕に立たせたまふ」点で近似している。押し絵の原拠『倭文庫』から、鏡花が太子の亡き母摩耶夫人への恩愛の深さ、亡き摩耶夫人との再会を渴望する思いの深さを改めて想起したとしても、それは、不自然ではない。鬼子母を祀った真成寺を摩耶夫人の寺蓮行寺として設定する契機の一つがここにあるのではなからうか。それと共に注目されるのは、「死ぬにも死なれぬ身の罪障」、「悔んで甲斐なき不孝の振舞」、「罪咎と思ひし」ものが、「皆母君摩耶夫人」のための「大善根」だったという逆説的な展開である。それは、以下に検討する樹島のありようと類縁性を持つてるように思われる。

3 欲望と救済

樹島が作中訪れた場所は、(1)赤門寺—(2)梅鉢寺—(3)釣鐘の清水—(4)蓮行寺—(5)釣鐘の清水—(6)蓮行寺—(7)仏師の家の順で、最後に東京の自宅になっている。冒頭は、清水のほとりで見えた写真から「嬰兒」が消えているのを見て「血が冷えるやうに悚然と」する(5)の一部であって、特に「美麗な婦」の存在を讀者に印象付けようとしているが、ここでは、作品の時間軸に沿って樹島の人物像、指向を検討したい。

まず(1)赤門寺における樹島は、先祖に対して「十八九年不沙汰」をしたことを詫び、住職に「一同」への「御回向」を頼む殊勝な人物として登場する。(3)釣鐘堂の下の清水で「金剛神の草鞋に乗った心地に恍惚」する場面までは、「梅鉢寺」でも「仏神の垂跡に面して身がしまる」のであり、神仏への敬虔な気持ちを抱く人物といえよう。と同時に、「仏神」の「垂跡」を感得する人物でもあることに留意すべきである。樹島が「摩耶夫人の御寺」に参詣し、「巡礼街道」をたどるのは、「まだお娘御のやうに見えた、若い母さんに手を曳かれてお参り」した思い出の地をたどりなおすためであった。少なくとも、それは「八才か、九才」の一年前に母を喪っていた樹島にとって、幼少期、母とともに過ごした日々を回想する幸福感と結びついた行為であり、清水で「金剛神の草鞋に乗った心地に恍惚」するのも当然であろう。こうした樹島のありようは、釣鐘の清水に「洗濯をしに来」た「しなやかな婦人」を目にしたのをきっかけに大きく偏向する。

「しなやかな婦」をみたとき、「褌を高く端折つて」「流に立つ」までを、樹島は執拗なまなざしで追う。しかし、此の時、久米の仙人を思出して、苦笑しないものは、われらの中に多くはあるまい。

仁王の草鞋に船を落ちて、樹島は腰の土を払って立つた。面はいつの間にか伸びて居る。

というように、語り手は、樹島を「久米の仙人」に見立ててたちまちのうちに殊勝な仮面の裏側にある素顔をあらわにする。この一節は、樹島が一見俗世間的な煩惱の男としていわば馬脚をあらわしたようにみえる。しかし、樹島は、「婦」を「人間離れをして麗しい」と捉えている。つまり、「久米の仙人」とは逆に、流れに立つ地上の女性を天界にすむ存在とみたのである。「旅のものです」と嘘をついてまで熟知している「蓮行寺」のありかを問い、直接声をかけるのは、その確認のためであろう。そして、「摩耶夫人の寺でございませぬ」という返事を聞いた時、その声から「婦」が予想通り「初利天の貴女」、摩耶夫人に「さながら」であるのを実感する。おそらく「つひ目の前」

に「しなやかな婦」として現れた時から、徐々に樹島の指向、すなわち心底に眠っていた摩耶夫人への憧れが呼び覚まされていったものと思われる。ここで樹島は、「婦」を夫人の「垂跡」とみたともいえよう。この時、「流れに立つ婦」を摩耶夫人に「さながら」であることを確かめるためについた嘘は、仏師の家で「婦」に再会したとき、「婦」が夫に「ええ、梅鉢寺の清水の処で、——あの、摩擦耶夫人様のお寺をおき、なさいました」と説明するのを聞いて「冷い汗を流した。知らずに聞いた路なのではなかったのである」というような罪の意識、罪悪感と結びついていく。それにもかかわらず、樹島は「夫人」の「お顔」を「なりたけ、お綺麗になすつて下さい」といい、「東京へ遁かへる覚悟」で「御新姐の似顔ならば本懐です」という。このように、罪の意識、罪悪感を持ちながら、欲望に殉じるのが、樹島の煩惱のありようなのである。

それより前、蓮行寺で「女の児らしい嬰兒を抱い」た「美女の写真」を黙って持ちかえろうとした時、「猛然として」「空恐ろしい」記憶がよみがえる。それは、「八才か九才の頃」に雛人形の化身と思われる「優しい婦」に「化払子」を与えられ、持ち帰ったところ、「盗心」を疑った父の意向で祖母と「真偽」を確かめに行った結果、「優しい婦」は「幻影」でしかなかったという思い出であった。

記憶をよみ返らせた樹島は、まず「雛人形は生きて居る」と語り始める。「毎日のやう」に「心を籠めて、じつと凝視める」と「莞爾と笑ふ」というが、実際樹島が学校帰りに毎日「半時ばかりづ、熟と凝視した」ら「最後に、その唇の幽冥の境より、霞一重に暖かいやうに莞爾した」という。それは、今「半紙に包まう」とした「美女の写真」でも同様で、「毎日のやう」に「心を籠めて、じつと凝視める」と、「莞爾と笑ふ」可能性があるということである。が、しかしそこには、明らかに深い罪悪感が伴う。罪悪感とともにその記憶がよみがえったのだが、樹島は、「観音びらきの扉」から「さし覗い」た「気高い婦人」の「裳に両手をつい」て、「小児は影法師も授かりませぬ。

……たゞあやかりたう存じます」と、またしても嘘をつく。「舌はここで爛れても、よその女を恋うるとは言へなかつた」という一節に、罪の自覚と欲望の強さがあらわれている。ここで注目されるのは、「気高い婦人」を「通夜の籠堂に居合せた女性」、寺に嫁いだ「よき人」ないしは「幻の道具屋の、綺麗な婦」ないしは「振袖の額の押絵の一体」、つまり摩耶夫人のいずれか判然としない点である。ここには、現世と他界、現実(絵の外)と非現実(絵の中)、現在と過去の境界が意識されていない。これは、後述する隠されていた欲望をかなえる条件だと思われる。

この直後、清水のほとりで持ち去った写真から「嬰兒」の姿が消えているのを見て驚愕するのだが、それは欲望の視覚化と欲望に殉じる罪悪感のあらわれではなからうか。

そもそもこの欲望とは何か。自覚のあるなしはともかく、樹島は以前から摩耶夫人の面影を求めてきた。今それが、「摩耶夫人の寺」の近隣で摩耶夫人のイメージを負う「婦」を偶然みかけたことで呼び覚まされたものとみられる。長年潜ませていた欲望の扉が開かれたのである。それは、母に抱かれた写真から嬰兒が消えること、仏師の家で子供が「のの様のおつぱい」を飲んだことを聞いて戦慄することから考えても、子供の代わりに樹島自身が「嬰兒」の母に抱かれることであろう。夫人廟で『釈迦八相倭文庫』の挿絵に基づく「摩耶夫人の(中略)肉置の押絵」のなかで、特に樹島が魅了されるのが「夫人が、一度、幻に未生のうなる子を、病中のいためる御胸に抱きしめ給ふ姿」(図4)であるところにも、それは示唆されている。前引の野口論文では、写真から「嬰兒」が消える理由を「小児性の喪失」と捉えているが、逆に小児性をよみ返らせ、夫人との特別な結びつき、すなわち「《母あるいは姉》——子」という関係を構築する契機を手に入れるのが、樹島の欲望の内実と考えられる。写真も、その契機になるといふことである。写真に戦慄を覚えながらも、夫人像を注文するのは、その欲望のあらわれであろう。信仰の対象ではな

く、欲望の対象として『倭文庫』の「絵」姿の夫人像を求めたのではなからうか。偶然にも、仏師の「御新姐」が「清水にきぬ洗へる美女」と知ってその「似顔ならば本懐です」というが、それは文字通り樹島の心境だったといつてよい。

このように樹島は、欲望に殉じて、罪の意識、悪事(嘘)を抑制する内面からの働きかけ(幼時の記憶の無意志的なよみがえり)にもかかわらず、嘘をついて罪を重ねる人物である。罪悪感を感じながら嘘を重ねるのも、摩耶夫人に「さながら」の「貴女」の子供の代わりに自身が抱かれないという願望のためであった。そこには、「世を去りし、摩耶夫人の事を忘れず、心に忍ばぬ折りもなく、何卒御恩を報」じ、「只御仏の道のみ、深く尋」ねようと強く願うために、奉加賽銭を盗み、傾城町へ忍び出、蔵王如来の尊体を傷つけるなどの悪事を重ねた積尊の行為と通底するものがある。しかし、問題は、樹島の欲望がどのように収斂するかという点である。この作品では、結末で「御新姐の似顔ならば本懐」だといって注文した夫人像の「面」が、「仏師の若き妻」のそれではなく、「夢にも忘るまじき、なき母の面影」だと気づいた瞬間に、長年の樹島の欲望・願望が回心——恩愛に劇的に転じる展開になっている。包みを解いて夫人像を「両手にうけて捧げ参らす」とき、樹島は「罰当たり」と「思つた」という限りでは、ここでも「御新姐の似顔ならば本懐」だといった「よその女を恋うる」罪の意識を感じている。やはり欲望に殉じているのである。しかし、「夫人像の片手が、手首から裂けて、中指、薬指が細々と、白く、藎のやうに落ちて」いるのを見て、初めて樹島は、回心する。二日前の「竹の心張棒を構うとして(中略)太い竹が篠のやうにびしやつと撓つて、右の手の指を二本打みしやいだ」傷が「腕が砕けたかと思」うほどであるのかかわらず、「医者を煩はずほどでもなかつた」理由が、そこに示されていた。身代わりによる救済、摩耶夫人と母の一体化による加護、済度である。

ところで、身代わりによる救済は、靈験記・利益集・利生記などの仏教説話に数多く取り上げられている。特に観音と地藏信仰の靈験記に多い。『今昔物語集』巻十六に収録された「観世音菩薩（観音）の靈験譚」のうち「生命の危険からの脱出。九死に一生を得た話」の一つ「丹波国司、造観音像語第五」は、仏像の造立と仏師が登場し、仏像が身代わりになる点で注目される。

この説話の概略は次の通りである。丹波国司が、年来の宿願によって京の仏師に観音像を注文した。幼時から観音品三十三巻を日々読誦する仏師は、三ヵ月後「極メテ美麗」に造って丹波まで運んできた。意外に早い仕上がりで、「祿」の用意がなく秘蔵の黒馬を与える。しかし、馬が惜しくなった国司は、部下に命じて仏師を弓で射殺して馬をとりもどす。京から何の問い合わせもないので、部下に確かめさせると、仏師は京で黒馬ともども無事に暮らしている。部下の知らせに驚いた国司が厩をのぞくと、馬はたちまち消え失せる。恐れた国司は、観音に詣でた。すると仏師を射たときと同じ胸部に矢がささって、血が流れていた。部下とともに国司は、回心し、出家したという。

この説話は、『法華験記』『宝物集』『金沢文庫本観音利益集』他に収録されている。比較的よく知られた説話と思われる。結語に「仏師ノ慈悲アルヲ以テ、観音代ニ箭ヲ負ヒ給フ」とある。出来上がったばかりの仏像が身代わりになり、罪を犯したものが回心する点で『夫人利生記』と共通するが、むろん相違のほうが目につく。なかでも、救済され、利益をうける「仏師」は深い観音信仰を抱き、観音品三十三巻を日々読誦する人物であった。樹島の場合には、逆に嘘をつき、「よその女を恋する」という罪を犯し、その罪を自覚し、写真から子供が消える欲望の視覚化もあるいは警鐘であったかもしれないのだが、それでもなおかつ子に代わり抱かれないという願望に殉じる人物であった。結末からすれば、その罪を不問にし、生命の危機に際して身代わりになることでもわかるように、無償の愛と許しとともに、樹島の指向する欲望が充足されるのである。しかも、その「面」が「よその女」ではなく、「なき母」であることが重要である。夫人像の面が「なき母の面影」に転じたことによって、樹島の指向は、煩惱・欲望ではなく、恩愛に変化し、罪も罪悪感もはや生じようがない。ここに、改めて「なき母」と夫人の一体化した母子像が完成したといえよう。鏡花が実際に詠えた夫人像が、釈迦の誕生するさまではなく、「幼いお釈迦様をふところにしっかりおだきになって」いるものであることも注目される。

以上のように、『夫人利生記』は、関東大震災による未曾有の惨状を目の当たりにした鏡花が、数ヵ月後に帰郷し、改めて摩耶夫人像に参詣し、その加護を祈念して夫人像を詠えた自らの体験に基づいた作品であった。特に、幼時に母と同道した鬼子母神を訪れ、押し絵の額が『釈迦八相倭文庫』の挿絵によることに思い至って、摩耶夫人の利益を描いた作品を構想したものと考えられる。いわゆる利生記の多くが、深い信仰心に応じた救済をもたらすのに対し、鏡花は罪深さに無償の愛による救済で応え、回心に至る独自の作品に結実させている。また、「なき母」と夫人の一体化した母子像を完成させ、子に代わって「人間離れをして麗しい」女性に抱かれる欲望、指向を、罪・罪悪感の生じようがない恩愛に転化している。この作品は、俗物によって蹂躪されようとする名工の魂と至純の情が、当事者と家族および周辺の人々の必死の行動と祈りに呼応して摩耶夫人と亡母に救済される経緯を描く『無愛樹』、夫人堂に参詣する途次、かつて一瞬のうちに恋し、自らの介入によって傷を負った女性と再会して心中する『峰茶屋心中』をうけて、「摩耶夫人の御像を写さう」とした鏡花が、独自の「利生記」を構想し、夫人と母の一体化した母子像を完成することによって、この系譜に一応の決着をつけようとしたものと思われる。

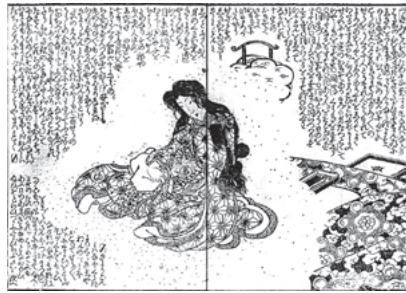


図4 『倭文庫』第二編十一ウ、十二オ



図1 『倭文庫』初編六ウ、七オ



図5 『倭文庫』初編十ウ



図2 『倭文庫』初編十一オ



図6 『倭文庫』初編十二ウ、十三オ



図3 『倭文庫』第二編の口絵

注

- (1) 小林輝治「解説」(『石川近代文学全集1 泉鏡花』石川近代文学館所収、昭62・7)参照。
- (2) この洗い場は、「金沢市文化財紀要157 金沢の用水・こぼし調査報告書(前編)」(金沢市教育委員会、平12・3)によれば、西養寺の鐘楼堂の下にあった水の谷川の「コウド」洗い場と考えられる。「川幅一・二メートル、水深十〜十五センチメートル」で「コウド」に「木桶」が置かれ、「近隣の人々は、オーバーフローした水を使って洗濯していた」という。なお「釣鐘の清水」という呼称はない。
- (3) なお、⑧⑩は、鏡花「吉祥果」に相当する場面がある(吉田昌志「泉鏡花と草双紙―『釈迦八相倭文庫』を中心として―」参照。「文学」昭62・3)。
- (4) 真成寺には、実際に子育て祈願の子供や母子を写した写真がある。これは、「子供の身代」に「お預け」して「守護」してもらったものだという。「お預けの写真の裏面には生年月日・氏名を記し、無事満期すると御礼として石榴を描いた提灯を奉納した」という。(石川県立歴史博物館編「祈り・忌み・祝い―加賀・能登の人生儀礼―」平5・10)参照。
- (5) 池上洵「観世音菩薩の靈験譚」(『新日本古典文学大系 今昔物語集三 岩波書店、平5・5)。なお、観音・地藏信仰の靈験記については、山根賢吉「靈験譚の蒐集―観音と地藏―」(『日本の説話』第3巻 中世1、東京美術、昭48・11)、渡浩「靈験記の世界―地藏説話集を中心に―」(『説話の講座 第3巻説話の場―唱導・注釈―』勉誠社、平5・2)参照。

〈目細てると子どもたち〉の物語

泉鏡花のいわゆる〈金沢もの〉は、『天和心』（幼年雑誌 明27・8～12）から最終発表作品『縷紅新草』（中央公論 昭14・7）に至る八十余作に及ぶ。明治時代に約五十作、大正時代に二十余作、昭和時代に十作ほど発表され、時代が下るにしたがって、他界が現世に迫り出し、無垢を抱え込んだ男の矛盾や女性への罪障感が深まる傾向がある。作品の舞台は、加賀・能登へと広がりを見せると同時に帰郷小説が多くなる。明治二十八年十月に弟豊春、次いで二十九年六月に祖母きてを東京に伴って以来、明治三十七年五月から昭和六年十一月まで、現在判明しているところで六回に及ぶ帰郷がこの背景にあり、帰郷を契機に改めて故郷を捉えなおし、素材を見いだしたことが考えられる。〈金沢もの〉には、まだ十分に解明されていない問題がある。その一つは、目細てると子どもたちについての検証である。目細てるとは、初恋の女性湯浅茂・北陸英和学校の教師ミス・ポートルとともに、〈金沢もの〉に頻出する重要な存在で、実生活においても関わりが深い。鏡花の帰郷に同行しててると会った小村雪岱は、「美しいかたでしかも気性の激しい方」（『山海評判記』のこと、岩波書店版『鏡花全集月報』第三号、昭15・6）といい、鏡花の身近にあった門下生（寺木定芳）も、「同年の従妹にあたる麗人」で「快活でやんちゃで、先生の作物に出る江戸ッ子其の儘のおきやんだつたらしい」と述べている（『思い出話 番町の先生』同、第21号、昭17・6）。看過できないのは、てるとをモデル



写真①
仙師宮保左慶(右)
(宮保淳子氏蔵)

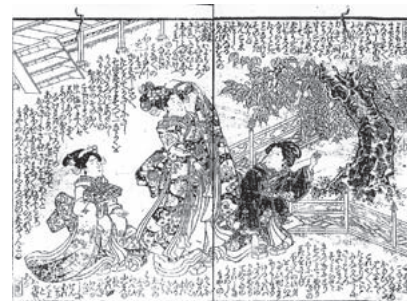


図7『倭文庫』第二編十九ウ、二十オ



写真② 全性寺第二十四住職、賀来元締
(全性寺蔵)



図8-①『倭文庫』第九編の口絵



写真③ 真成寺蔵、押し絵額

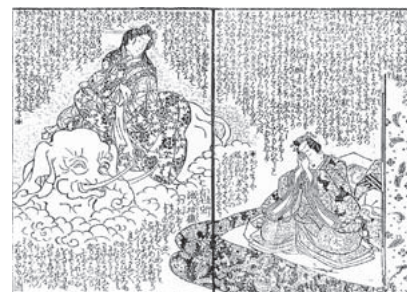


図8-②『倭文庫』第九編上八ウ、九オ

とした作品『さ、蟹』（国民之友）明30・5・『女客』（中央公論）明38・6、11・『町双六』（新小説）大6・1・『卯辰新地』（文芸倶楽部）同・7・『由縁の女』（婦人画報）大8・1、10・2・『傘』（随筆）大13・1・『卯塔場の天女』（改造）昭2・4・最終作『縷紅新草』のいずれにも、てるの子どもたちが登場していることである。てるの子どもたちについては、わずかに新保千代子「新資料紹介―妹たか女をめぐる書簡考と自筆年譜訂正―」（鏡花研究）昭52・3）があるに過ぎない。新保「新資料紹介」は、目細家蔵の鏡花及び弟豊春からの書簡十二通を紹介し、その年次を推定すると同時に鏡花の妹たかの動向に焦点をあてた考証である。この考証によって、五男五女の子どもの名前と生年が明らかにされたが、目細家の家族構成については四女玉衛・五女他喜子への取材によるもので、必ずしも十分とはいえない。

この度、幸いにも他喜子の長男に嫁いだ室野和子氏から目細家の家族写真とてるの「除籍謄本」の写し、並びに「目細家・室野家、家系図覚書」（仮題。作者不明。以下「系図覚書」と呼ぶ）、及び「先祖由緒并一類附帳（室野左内筆。明3）の写しを借覧する機会を得た。併せて、てるの五男にあたる神原円幸氏から兄弟の消息について伺うことができた。この機会に、新保「新資料紹介」の補足を試み、てるの子どもたちと作品との関わりを検証することが、小考の目的である。

1 目細てる

「除籍謄本」（以下、謄本と呼ぶ）冒頭には、「石川県金沢区横安江町九番地 前戸主妻目細てる」とある。従来「照」と「てる」の両方が用いられてきたが、「てる」の表記が正しいことがわかる（参考(1)参照）。「謄本」には、戸主、養祖母、妻、子の事項が列挙されている。新保「新資料紹介」によれば、てるの父は、てるが「かぞえ三才の時」他界し、「若後家になったてるの母、たかをいとおしんだ目細家では、彼女を実家へ帰し、他へ再婚させた」のであり、以後「てるの祖母ゆう」が「一粒種の孫娘を、その後老いの手塩にかけて」育てたという。「系図覚書」では、てるの父八郎兵衛が他界したのは明治十二年八月で、てるは「五才」だったという。てるの母の名前は記入がなく、「てる三才の時離縁」とある。いずれにしても、てるの「謄本」に父母の記載がなく、養祖母の記載が戸主に続いているのは、この間の事情によるだろう。

てるについては、「妻」の下段に「亡養父八郎兵衛長女／てる／明治七年一月十五日生」、上段に「昭和拾年参月貳拾日午前八時拾分金沢市森町壹番丁八／番地壹二於テ死亡戸主目細八郎兵衛届出（以下略）」との記載がある。生没年月日は、諸年譜に記載のとおりである。神原円幸氏によれば、てるは胸の病で亡くなったという。亡くなったのは、森町（現、金沢市扇町）の円幸氏の住まいであった。針屋を営む忙しい商家を離れて、静かな武家屋敷で療養していたとのことである。

養祖母については、下段に「亡養祖父八郎兵衛妻／勇／文化十四年六月十日生」、上段に「天保八年五月十五日石川県金沢区横安江町針屋五兵衛長女入籍ス戸長代理印 明治廿四年十二月廿六日死亡」とあり、「ゆう」の表記は「勇」であることがわかる。鏡花の祖母きては、「文政二年三月朔日生れで、金沢区横安江町九番地、針屋五兵衛の次女」（殿田良作「泉鏡花の実際と作品」、『国語国文』昭38・7）である。勇は、きての二歳年上になる。「系図覚書」では、「てるの祖母、明治24年12月没／享年75才／しっかりものの女丈夫で／この人がてるを育てた」という。

次に戸主について、下段に「目細政吉（引用者注、政吉を立て棒で抹消）／八郎兵衛／安政五年十月廿九日生」、上段に次のようにある。

明治二十年八月十八日石川県金沢区中橋町室野義忠弟亡義／信四男戸主てる入夫トシテ入籍同日相続ス戸長代理印 明治廿四年三月十九日願済改名印／昭和拾年参月貳拾日妻てる死亡ニ因リ婚姻解消印／昭和拾年拾貳月貳拾七日午前壹時四拾五分本籍ニ於テ死亡（以下略）

「系図覚書」では、政吉は「義忠の弟／兄弟のうち四番目／長兄は岡田姓」とあり、室野家の系図では、てるの五女他喜子が嫁いだ猛は「膳本」に見える義忠の子である。室野和子氏は、室野家は金沢市油車に住み、家は間口四間の二階家で、その後家のあとは道路になったと猛から聞いたという。油車（現、長土堀三丁目）は、下本多町・茨木町に続く用水沿いの細長い町である。新保「新資料紹介」で、政吉の生家が「国老本多家の家中の士族で本多町に家」があったというのは、隣接する油車をさしているものとみられる。なお「先祖由緒并一類附帳」（参考②参照）によれば、義忠の父義信は深美兵庫（六千石）の「家来」で広岡町に家があったという。義信には左次馬、守、和三郎、紋次郎、左太郎の五人の男子があった。和三郎（後の義忠）が早世した左次馬の代わりに嫡子となり、守は岡田家に養子に入った。四男紋次郎が後の政吉と思われる。また、新保「新資料紹介」では、「結婚したのはてるが十五才、政吉が三十に手が届いた頃」で、政吉は「六十過ぎた還暦で、やつと十七代目八郎兵衛を継いだ」という。安政五年生まれの政吉は、てるよりも十六歳年上で、結婚した時てるは十四歳、政吉は三十歳であり、戸籍面からも従来の説明が裏づけられる。ただし、政吉は「膳本」によれば結婚して四年目の明治二十四年に「八郎兵衛」に改名している。鏡花は、明治二十五年十二月十五日付の書簡では「目細八郎平」、二十七年十月一日付では「目細八郎兵衛」と記している。改名を以て、「十七代目八郎兵衛を継いだ」とみてよいのではなからうか。なお、てるの夫十七代目八郎兵衛は、てるの死から九ヵ月後に亡くなっていることがわかる。この事実を、『縷紅新草』の検討に際し留意すべきことではなからうか。鏡花の分身辻町系七は、本来ならばお京夫婦の墓参をしなければならぬのである。

2 てるの子どもたち

てるの子どもたちについての「膳本」の記載（○印）を、てるをモデルとする作品（※印）や鏡花の帰郷等関連事項と併せて一覧表にすれば、次の通りである。

明治

- 20年8月18日 室野政吉・てる、結婚・入籍。
- 同年11月1日 長女たまき鑽、生まれる。
- 23年3月1日 次女しげる茂、生まれる。
- 10月28日 鏡花、初めて上京。
- 24年3月19日 目細政吉、八郎兵衛と改名。
- 12月6日 長女鑽、死亡。
- 同年26日 てるの祖母勇、死亡。
- 25年11月 大火で鏡花の生家類焼。一家は、目細家に身を寄せる。
- 12月 鏡花、上京。

- 26年1月13日 三女静江、生まれる。
- 8～10月 鏡花、脚気療養のため、帰郷。
- 27年1月 父清次死亡のため、鏡花帰郷。

- 4月14日か
鏡花、家計の困難から自殺の誘惑に駆られ、深夜百間堀端に佇む。
- 20日
三女静江、死亡。
- 9月
鏡花、目細家の援助で上京。
- 28年3月3日
四女玉衛、生まれる。
- 29年5～6月
鏡花、脚気治療と祖母を見舞うため帰郷、上京時弟を伴う。
- 30年5月
『と、蟹』発表。
- 31年1月4日
長男勇吉、生まれる。
- 6月か
豊春、輪島で芸妓をしていた妹たかを迎えに行く。
- 34年5月30日
五女他喜子、生まれる。
- 35年春か
てる、長男勇吉を伴い、上京。南榎町の鏡花の家で過ごす。
- 36年4月か
鏡花の妹たか、帰郷し、目細家の世話になる。
- 9月23日
次男清二、生まれる。
- 37年2、3月
鏡花、妹たか上京を拒絶。
- 5月か
妹たか、祖川弥三次郎と結婚。
- 5月2～4日
鏡花・豊春、帰郷。
- 38年2月20日
鏡花の祖母、きて死亡。
- 6月
『女客』(前半)発表。

- 7月下旬
鏡花、逗子に転居。
 - 11月
『女客』(全文)発表。
 - 39年3月27日
三男富三、生まれる。
 - 40年6月14日
次女茂、石川県鳳至郡岩倉村字南時国ソ部二十九番乙地の時田謙三郎の従弟、時田登と結婚、除籍。
 - 41年3月
てる、五女他喜子を逗子に伴う。他喜子、鏡花の家から逗子小学校に通学する。
 - 8月18日
妹たか、高岡で死亡。
 - 42年1月19日
四男、茂忠生まれる。
 - 2月
鏡花、逗子から東京にもどり、麴町土手三番町に住む。
 - 4月
他喜子、金沢の生家にもどる。
 - 44年7月13日
四女玉衛、金沢市愛宕二番丁二十七番地の松永松永と結婚、除籍。
 - 9月24日
五男円幸、生まれる。
- 大正
- 5年か
鏡花、帰郷。
 - 6年1月
『町双六』、七月『卯辰新地』発表。
 - ※ 8年1月～10年2月
『由縁の女』連載。
 - 10月2日
次男清二、除籍。
 - 9年1月30日
五女他喜子、金沢市横安江町九番地の室野猛と結婚。

- 12年11月 鏡花、夫人と帰郷。
 ※13年1月 『傘』発表。
 ○15年6月2日 長男勇吉、金沢市大工町六十九番地の上杉与一の四女茂と結婚。
 11月 鏡花、帰郷。二十六年ぶりに妹や多と再会する。

昭和

- ※2年4月 『卵塔場の天女』発表。
 ○ 9月12日 五男円幸、金沢市森町一番丁八番地ノ一の神原元太郎と養子縁組、除籍。
 4年5月 鏡花、すゞ夫人、てると共に能登和倉温泉に遊ぶ。
 ※6年7月 『猪市場』(後、古笈)発表。
 11月 鏡花、夫人と知人の娘を伴い、帰郷。
 ○7年12月23日 三男富三、北海道小樽市稲穂町西三丁目二番地の石田太郎次女春江と婿養子縁組、結婚、除籍。
 ○9年3月6日 四男茂忠、金沢市横安江町九番地に於て分家、除籍。
 ○10年3月20日 てると、五男円幸氏の家で死亡。
 ○ 12月27日 てるとの夫八郎兵衛、死亡。
 ※14年7月 『縷紅新草』発表。

右のように、てるとは、五男五女の子に恵まれた。便宜上、姉妹と兄弟に分けて神原氏から伺ったことを記す。長

女たまき鑽は五歳で、三女静江は二歳で亡くなっている。神原氏によれば、次女しげ茂は日本郵船の船員だった時田登と結婚して伏木に住み、四十代後半で亡くなったという。四女玉衛は、北陸女学校卒業後、東廓で芸妓屋鶴屋を営む松永しやうえい松永と結婚した。新保「新資料紹介」によれば、明治三十九年頃から鏡花夫婦は玉衛を養女にと希望し、非常に可愛がった。『縷紅新草』を「はじめ故郷を舞台の小説中に、てると共に玉衛をモデルの艶でやかな娘を登場させ、好んでこの母娘のイメージを一つに重ねている」と述べている。神原氏の記憶でも、鏡花は美人で気立てのよい玉衛が好ましく、帰郷する度玉衛が世話をしたという。五女他喜子は、就学の頃の一年間逗子滞在中の鏡花の家で過ごした後、生家にもどり、伯父おじ父の兄の子で職業軍人の室野猛と結婚した。なお、戸籍の上では泉家の養女になった記事はない。

長男の勇吉は家業を継ぎ、上杉しげ茂と結婚した。茂の父は大工の棟梁で、目細家の菩提寺蓮昌寺本堂再建時(大14)に携わり、勇吉を知ったのが縁だという。次男清二は、一心に毛針製作に携わり分家した。足に障害があったという。三男の富三は、大正十三年三月金沢商業学校卒業後、北海道小樽の石田家に婿入りしたが不縁になり、その後昭和十一年代に亡くなったという。四男茂忠は、富山県の氷見で縫い針を製作していたが、昭和二十年五月二十二日、沖繩で戦死した。五男円幸氏は、遠縁の神原家の養子となり、加賀竿製作の名人として知られていたが、平成二十一年四月十四日逝去された。鏡花の帰郷時には母とともに市内各所に同行し、近衛連隊に所属していた当時は、番町の鏡花宅を度々訪問して懇意にしていたという。神原氏と鏡花との交流は、「鏡花の思い出」(『鏡花研究』平元・3)に詳しい。新保「新資料紹介」と「瞻本」の記述を比較すると、一つの問題点が浮上する。それは、豊春が「ねえさん」、つまりてると宛てに記した「書簡三」(封筒欠)の年次推定が「明治三十四年四月二十五日」とされている点である。この書簡は、「ゆうちゃん」とてるとが上京して、泉家で過ごして「つつがなく」帰った後に出したものである。一



目細家 前列右から、玉衛(四女)、てる、茂(次女)、他喜子(五女)、円幸(五男)
後列右から、茂忠(四男)、富三(三男)、八郎兵衛、勇吉(長男)、清二(次男)

覧表からも明らかのように、同年五月三十日に五女他喜子が生まれており、出産間近のてるが、遠出をするとは考えにくい。同年と推定した理由は、「しげちゃんはずいぶんよくじんじやうをそつげうしてこのごろはまいにち高等科へ通ひるられ候や」だが、一年後の三十五年と見ることのできるのではないか。

次に一葉の写真を紹介する。室野和子氏から提供された目細家の家族写真である。神原氏によれば、八郎兵衛・てる夫妻と子どもたちの家族十名が写っているという。三男富三が金沢商業学校の制帽を被っていることから、大正九年四月から十三年三月頃のものだと推測される。大正十三年には、数えて八郎兵衛は六十七歳、てるは五十一歳、玉衛三十歳、勇吉二十七歳、茂三十五歳、他喜子二十四歳、清二十二歳、富三十九歳、茂忠十六歳、円幸氏は十三歳となる。円幸氏によれば、小学校卒業のころではないかという。円幸氏の小学校卒業年度は、大正十三年三月と考えられる。富三が金沢商業学校を卒業したのも同じ大正十三年三月である。三男と五男

の卒業を記念したものと思われる。

3 描かれた子どもたち

てるの子どもたちは、鏡花の作品の中ではどのように描かれているだろうか。

てるの子どもが登場する最初の作品は、明治三十年五月発表の『さ、蟹』である。『さ、蟹』は、鏡花の父没後の生家と目細家を主な舞台とした作品で、彫刻師広常の没後道具一式を売却するに至った再従兄兼の家の困窮を救うために、名代の糸屋の細君お京が、家族を呼んで皆の前で自由にならない「亭主の金」二十円を金筆筒から「盗む」義侠心、失敗作の蟹でさえ深夜に家中を動きまわり、簪からは彫刻した花の橘の香りが漂うという名工の至芸を描いた作品である。作中、

養子をしてから、もう、さうだ、八年にはならう。此間小さいのが一人病院で亡くなつたが、彼で七歳になる児があるんだ

という一節がある。亡くなった子は、お此、七歳の子はお光(お幸とも)である。この作品は、明治二十七年一月の父清次没後の泉家の困難に取材したものである。一覧表にあるように、この年四月二十日にてるの三女静江が亡くなっている。お此は、静江をさすだろう。この頃鏡花は、家計の困難に直面し、自殺を決意する程に苦しんでいたのであった。また、お光(お幸)は、次女茂をさすだろうが、当時まだ五歳である。執筆時点での年齢、または、三年前亡くなった鑑の年齢を重ねたものであろう。この作品で子どもが登場させた理由は、初出「国民之友」の巻末で、お京がわが子に「幸や、父様の子だ。母様はお腹を貸したばかりだからね、勝手にしなヨ」と言う一節に明ら

かである。ここには、再従兄の兼が「金が出来ないツて、水も呑まないで駆けまはつて、(中略) 狂気のやうになつて、お濠へ飛込むだ夢」を見たお京が、わが身を犠牲にしても兼を助けようという義侠心を強調するためであるが、さすがに初刊本『田毎かゞみ』(春陽堂、明36・1)では、削除された。

『さ、蟹』から八年後の明治三十八年六、十一月発表の『女客』(中央公論)は、祖母きての死後間もない時期に発表された作品である(吉田昌志「泉鏡花・祖母の死と『女客』」学苑 昭64・1)。この作品では、蒔絵師の女房お民が十七歳の時に産んだ「五ツになる男の児」の譲を連れて上京し、謹の家に逗留しているという設定である。新保「新資料紹介」にみえる目細家所蔵の書簡三(年次不明。25日付け。てる宛豊春筆)にあるように、てるは長男勇吉を伴って上京し、牛込南榎町の泉家に滞在した。上述のように、明治三十五年の春とすれば、勇吉(明31生)は、五歳であり作品の設定に一致する。なお、勇吉を産んだ時、てるは二十五歳であった。十七歳の時に産んだのは、次女茂である。注目されるのは、家が焼けた後の家計の困難から謹が自殺を思い立った当時を語り合い、互いを命の親と思っていたことを初めて知った二人が手を取り合う瞬間、譲が怖い夢を見て泣きだすことである。これをきっかけに階下に入りたお民は、「品のいゝ、母親の優しい形で座に返」る。譲は、男女の仲に陥ろうとする二人を、瀬戸際で現実的に引き戻す重要な役割を果たしている。

『女客』に次ぐ大正六年一月発表の『町双六』や大正八年一月から十年二月まで雑誌に連載された(金沢もの)の集大成『由縁の女』、さらに昭和二年四月発表の『卵塔場の天女』でも、てるをモデルとしたヒロインの子どもたちは、これに近い役割を果たす。『町双六』は、七草の午後、久しぶりに帰省した由紀之助と従妹で町屋の女房お鶴が、二歳になる「人形のやうな男の児」を乳母車に乗せ、由紀之助の両親の墓参をするところから始まる。新地の遊廓から魔所五本松を通って、卯辰山に向かう中で、お鶴は、由紀之助と別れるのが嫌さに土蔵に「火を伏せ

て、燃えるやうにして来た」ことを告白する。二人は、「町も、家も焼いた、おわびに」心中しようと天田沼に向かう。その時、「乳母車の嬰兒が、火のつくやうに、あツと泣き、由紀之助の亡母の幽霊が出現、「嬰兒を抱」いて子守歌を歌う声とともに、二人は「抱合つたま、引戻され」る。「嬰兒」は、亡母と共に心中する男女を現実世界に引き戻したといつてよい。神原「鏡花の思い出」によれば、神原氏が「六才の時」に「母親とすす夫人と鏡花」と共に「泉家の墓所」のあった「向山(卯辰山)へ行つたのが最初に出会った記憶」だという。神原氏によれば、その時すでに墓は移転され、一時神原家の庭に保管されていたという。墓の跡地を訪れたのであろう。神原氏は明治四十四年生まれで、六歳だったのは大正五年である。同年晩秋に帰郷したのか。神原氏は、帰厚坂を經由する道路が開通前だったので、観音坂を登ったという。開通は大正五年十一月十一日であり、それ以前のことと思われる。『町双六』は久しぶりの墓参に取材し、同行した六歳の少年に『女客』同様の役割を与えるために、「嬰兒」に改めたのではなからうか。

『由縁の女』では、麻川礼吉が両親の墓を移転するために帰省し、針屋を営む従姉お光の家に滞在する。そこには、「胡座かいて、硝子盤で鉢を磨く」少年佐吉がいる。佐吉は、「今年十ばかり」で「二番目の児(総領娘は死んだ)」で関節炎を煩って両足がきかないが、「一念不乱に仕事」をして「早一人前の腕」を持つとされている。佐吉のモデルは、てるの次男清二(明36生)であろう。また、麻川の家が焼けた時、お光は「十七の初産」で「女の児」が生まれたというが、鏡花の家が焼けた明治二十五年十一月に生まれたてるの子どもはいない。なお、同様の記述が『縷紅新草』にもある。かつて、父が亡くなった後の礼吉の困窮に同情し、「駆落」しようと思つたお光は、礼吉の滞在中、ともすれば過去の思いを呼び覚まされそうになる。しかし、呼ぶと「逸早くその心を読ん」で、「膝頭を摺らし〜、腰で楫を取つて、ずる〜と漕いで出る」佐吉が、お光を現実に引き戻す。用事を進んで引き受け

る佐吉を見て、お光が「差俯向いた」のを見て、礼吉は、取りたい手を「膝で握つて、衝と控へ」る。ヒロインの子どもは、ここでも、手を取り合おうとする男女を現実に取り戻す役割を果たしているとみることができよう。

『卵塔場の天女』では、「折から旅行中の、或陸軍中佐の夫人」雪代が、同様の役割を果たす。「優婉な婦」で「品のい、おとなしづくりの束髪」として描かれる雪代のモデルは、かつて泉家で生活した他喜子であろう。他喜子の夫猛は職業軍人であり、実際と合致する。老舗紅屋の女房お悦は、故郷の能舞台に立った従弟八郎を壮士の暴力から救うため、八郎を平手打ちして菩提寺へと伴い、「焼場人足、死人焼に成つて、肝を鍛へ」て芸道に精進するという八郎を励ます。一方雪代は、八郎の帰郷に同行した槇村に、母の言いつけでこの間の事情を語る。雪代は、母から八郎との仲を阻んできた「紅屋の福助の人形」を「うしろ向きにするか、針で目を潰」すよう頼まれたが、「決してそれはしませんでした」という。母の言いつけに背いて、「福助の人形」に手を触れないでおくことは、二人が男女の仲にならないことを意味するだろう。雪代もまた男女の仲に陥ろうとするのを止める役割を担っているということが出来る。なお、この作品では、お悦の息子の結婚が話題になり、嫁のお恒への言及がある。これは、大正十五年六月の長男勇吉の結婚をさす。お恒のモデルは勇吉の妻茂であろう。妹やゑとの二十六年ぶりの再会と併せて、同年十一月の帰郷の際の見聞・体験を生かしていることがわかる。この他、結びで雪代と共に槇村を見送る中学生のモデルは、石川県立工業学校在学中の円幸氏であろう。

同じ昭和期の『古狝』（初出『狝市場』）、最終発表作品『縷紅新草』では、これとは別の指摘ができよう。『古狝』では、「小春日」に一日、「容色よしの従姉」の娘お町が、久しぶりに帰省した主人公の「外套氏」を案内して、「庭樹の多い士族町」から新開の連根市場にやって来る。外套氏が、降り出した村雨の白い雨脚を、天井に吊した車麩から伸びる糸に見立てると、お町は、傍らに生えた椎の古木には糸車を廻す「椎の木婆叉」という妖怪がいることを教

える。また、外套氏が帰郷の途中立ち寄った鹿落の温泉の廁で見た白い手の女の幽霊の話をする、それがお藻代の幽霊だと教えて、事情を語る。お藻代は、うぐい亭浅野川、常盤橋右岸の「こり屋」の「女中」でお町の実家の待合「明保野」で客と一夜の契を結んだ時、客の過失で顔に熱湯を浴び、たまたま訪れた温泉の廁で見られたくない醜貌をさらす破目になったのを恥じて、鉄道自殺したのであった。作品の結末では、お藻代に代わって、椎の木婆叉が登場し、お藻代に火傷を負わせた男（実は外套氏の幼馴染み）に妖術を使って、湯薬を作るために沸騰した釜に顔をひたさせ、火傷を負わせる。お藻代同様の痛み、苦しみを「明保野」に來た客に味あわせるまでを描く。

この作品では、お町は、物語を導き出す役割を果たしているといえよう。なお、お町について、作中に「一度縁着いた出戻りの二十七八。で親譲りの別嬪」とされ、「家業は、土地の東の廓で（中略）お茶屋、所謂おん待合」だとされている。また、お藻代の悲劇を語るところで、「東の新地―廓の待合、明保野と云ふ、即ちお町の家」とも記す。こうした記述から明らかのように、お町は、東廓で芸妓屋鶴屋を営む松永家に嫁いだ四女玉衛をさす。お藻代の大火傷に類した話も、東廓の逸話の可能性が考えられる。作品の舞台になった連根市場は、金沢市内の武蔵ヶ辻裏にあった石屋小路の青物市場、住吉市場をさす。「小春日」という時候を重視すれば、『卵塔場の天女』と同じく、大正十五年十一月の帰郷に基づく作品であろう。

『縷紅新草』では、辻町糸七と亡き母お京の墓参りに行ったお米が、糸七に、三十年前糸七の身代わりのように、千羽ヶ淵で亡くなった女工初路の墓が、同じ寺にあるのを思い出させる。初路は、『古狝』のお町同様、物語を導く役割をになっているといえよう。また、後半でお米は、糸巻塚建立のために直に荒縄を巻き付けたのを見て、裸身に縄を掛けたも同然と思ひ、衝撃的に初路の墓石に羽織をかける。糸七は、その様子をみてお京の義侠心、他を思いやる果敢な性格を見る。お米のとっさの行動を見て一昨年亡くなったお京のありし日の姿を重ね合わせ、それ

を契機に、改めてお京を追慕する。子どもを通じた亡き女性との再会を描いた作品ともいえる。なお、神原氏からみて、お米は姉妹で最も鏡花のお気に入り器量良し、玉衛以外に考えられないとのことである。お米が「女学校の出」とされている点も、北陸女学校出身の玉衛の経歴を反映しているだろう。

以上の他に、『卯辰新地』と『傘』がある。大正六年七月発表の『卯辰新地』は、「廓の女紅場に催しつゝある、菖蒲踊」の前後を描いた作品で、主人公柳生銑三は従姉の家に滞在しているという設定である。銑三は、菖蒲踊の後、「従姉が小さい時の長女の婿」瀧山の若旦那の招待を受けて「紅梅の寮」で過ごしたことになる。ここにいう「長女」も、玉衛をさしているものと思われる。瀧山の若旦那は、玉衛の夫松永松永を想定している。上述のように、松永家は東新地で芸妓屋「鶴屋」を営んでいた（昭和に入ると市内新町で紙屋を営んだという）。作品の中心となるのは銑三と銑三に恋の告白を促し、片恋に共感する芸妓お蘭であって、瀧山夫婦は、周辺の人物にすぎない。しかし、モデルとなった松永との交流なしには成立しえない作品であろう。『町双六』同様、大正五年の帰郷に取材した作品であろう。

大正十三年一月発表の『傘』には、従姉のお光の長男で良家の娘との結婚を控えた雄ちゃんと工業学校の三年生で「兄弟中の豪傑」である十三、十坊が登場する。命名から、てるの長男勇吉と三男富三をさしていることがわかる。勇吉の結婚は、上述のように大正十五年六月二日で、『傘』の発表は、これに二年先立つ大正十三年一月である。大正十二年十一月の帰郷に取材した作品と見てよい。富三は、上述のように、工業学校ではなく金沢商業学校にかよっていた。雄ちゃんと十三は、作品後半の中心となる。十三は、激しい雷雨の夜、交番で保護された狂女の傘を借りて帰宅する。その傘に、結婚の約束をしていた芸妓と同じ「お玉」と記されているのを見た雄ちゃんは、良家の子女との結婚を取り止める。二人は、傘の記名によって本来の自分を取り戻す不思議を描く作品のテーマを担う、

重要な存在になっているといえよう。

以上のように、てるに取材した作品のほとんどに、てるの子どもたちがモデルとして一緒に登場している。モデルとなった子どもたちと作品をあげれば、以下の通りとなる。

- 次女茂・三女静江——『さ、蟹』
- 四女玉衛——『卯辰新地』、『古貉』、『縷紅新草』
- 五女他喜子——『卯塔場の天女』
- 長男勇吉——『女客』、『傘』
- 次男清二——『由縁の女』
- 三男富三——『傘』
- 五男円幸——『町双六』、『卯塔場の女』

右のように、鏡花は、てるの子どもたちの多くを取り上げ、『さ、蟹』では母の義侠心を強調し、『女客』『町双六』『由縁の女』では、男女の仲に陥ろうとする母を現実にも引きもどし、『古貉』『縷紅新草』では、物語の導き手となるなど、作品の成立に不可欠な重要な役割を果たす。

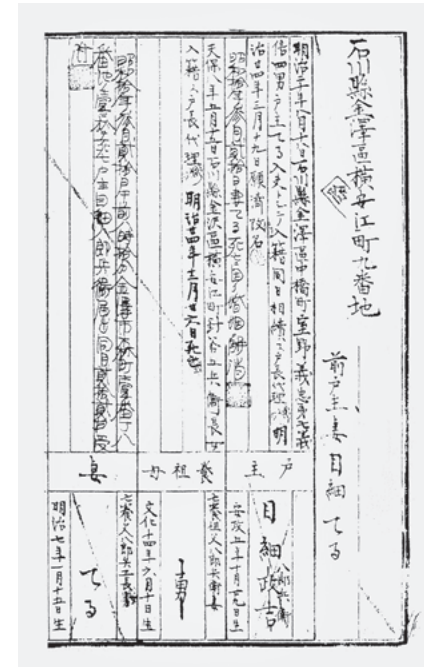
てるをモデルとし、てるの子どもたちの登場する（金沢もの）は、鏡花の実家が類焼した明治二十五年十一月及び二十七年一月に父の亡くなった後の困窮に取材したもの（さ、蟹、『女客』、『由縁の女』、『縷紅新草』）、大正昭和期の帰郷に取材したもの（町双六、『卯辰新地』、『傘』、『卯塔場の天女』、『古貉』）に分けられる。これらの作品で、鏡花は、年ごとに成長するてるの子どもたちを積極的にモデルとして登場させ、生家類焼と父没後の危機を確かめると共に、困窮な時を耐え、互いを思いやりながらも一線を越えない男女の微妙で深い絆を、描き出したのであった。

『縷紅新草』招魂の機構

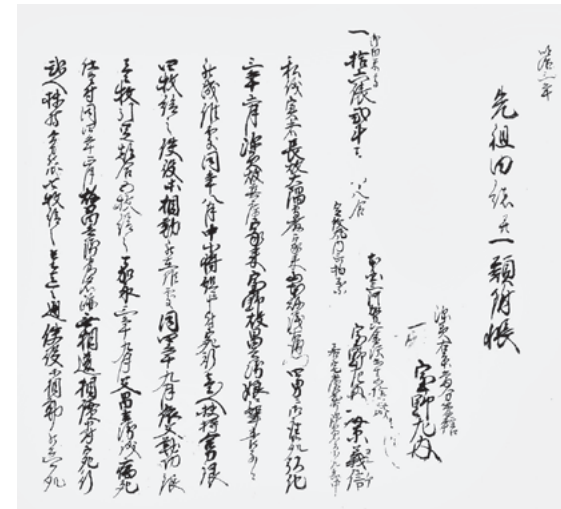
『縷紅新草』は、昭和十四年七月、「中央公論」に掲載された泉鏡花の生前最後の発表作で、故郷金沢を舞台にした帰郷小説、墓参小説としても知られている。発表から二ヵ月後の九月七日に作者が亡くなり、十月刊行の作品集『薄紅梅』（中央公論社）に収録された。

『卵塔場の天女』（改造）昭2・4から『縷紅新草』まで、昭和期に発表した小説・戯曲十九編のうち、帰郷小説は両作を含め七編に及ぶ（『ピストルの使ひ方』『文芸倶楽部』昭2・9、『飛剣幻なり』『改造』昭3・8、『古猿』『文芸春秋』オール読物号）昭6・7、『菊あはせ』『文芸春秋』昭7・1、『お忍び』『中央公論』昭11・1）。金沢周辺に取材した『河伯令嬢』（『婦人倶楽部』昭2・4、5）、『山海評判記』（『時事新報』昭4・7・2、11・26）を加えれば、五十代後半からの昭和の鏡花文学の半数近くは、〈金沢もの〉で占められていることになる。鏡花は、大正十五年十一月、昭和四年五月、昭和六年十一月に金沢に帰郷しており、これらの帰郷が作品成立の契機となったことは間違いない。

大正末から昭和はじめにかけての金沢は、近代都市として大きな変貌を遂げつつあった。大正八年二月に路面電車の営業運転が始まり、石川県庁（天13・6）を始めとする鉄筋コンクリート造りのモダンな建物が建ち始める。昭和二年四月二十一日の彦三大火（焼失七三三戸）の後竣工した彦三大通りは、「幅員十二間、歩車道を区ちて舗装し両側に



参考(1) 目細てる除籍簿(部分)



参考(2) 室野家先祖由緒付一類附帳(部分)

街路樹を植ゑ、夜間照明の高燭電燈を配装する等市中随一の現代道路」となった（金沢市写真帖「金沢市、昭8・10」。大正十二年十二月には犀川に近い片町に最初のデパート宮市百貨店が開店、昭和五年十一月には三越が武蔵ヶ辻に進出し、同じ月から始まった主要道路の舗装は、六年十二月までに終わった。香林坊を中心にカフェや映画館も多く、大正十四年七月に開園した北陸の宝塚「粟ヶ崎遊園」も含めて、モボ・モガが遊歩したという。昭和七年四月から六月にかけて、金沢市主催の「産業と観光の大博覧会」が開催され、五十五日間に五十六万人余りの入場者があった。博覧会開催の背景には、繊維や繊維機械を主力とする金沢の産業が昭和初年の不況の影響を受けて低迷していたことから、観光産業により、新たな経済需要を開拓する目論見もあったようだ。大博覧会開催が決まったのは、昭和六年四月で、鏡花が最後に帰郷した同年十一月前後には、都市としての整備がさらに加速していたのであった。¹

以上のように、大正末から昭和の初めにかけての三回の帰郷は、金沢における都市の近代化とモダンな文化の開花した時期に相当する。しかし、鏡花は、故郷の都市の近代化やモダンな文化を積極的に作品に取り入れることはなかった。『傘』（随筆「大13・1」）では、武蔵ヶ辻から「燈の桃色の電車」に乗る主人公を描くが、同所裏手の住吉市場を舞台にした八年後の『古狝』では、表通りを走っているに違いない路面電車には一言もふれない。浅野川右岸の卯辰山麓寺院群をめぐる『夫人利生記』（女性「大13・7」）や犀川左岸、寺町奥の桂岩寺を主要な舞台とする『飛剣幻なり』など、都市化やモダン文化の及ばない地域を舞台に、都市の伝承の深層に向かう作品を発表している。しかし、それは意識的に避けたのであって、無関心であったことを意味しない。

ここに取り上げる『縷紅新草』は、昭和六年十一月の最後の帰郷を背景にした作品で、直接金沢の都市化やモダンな文化への言及はない。しかし、帰郷時に話題になっていたに違いない「産業と観光の大博覧会」開催に向けた金沢の変貌を念頭に置いた作品だと考えられる。

作品は、全五章で、

- ① 辻町糸七が従妹お京の墓参りに行く途中、同行したお京の娘お米の示唆により、三十年前、身代わりのように入水した女工初路のことを回想する（発端。一、二）。
- ② 糸七は、「はんけち」に刺繍したつがいの赤蜻蛉の意匠を初路が発案、それを男女の密会だと唄い囃され自殺したことをお米から聞く（続き。三、四）。
- ③ 観光目的の塚に初路の墓石を移動中、つがいの赤蜻蛉が出現、置き去りにされた墓石にお米が羽織を掛け、荒縄を糸七が切る（転換。五）。
- ④ つがいの赤蜻蛉を描いた提灯を初路に手向け山門を下り、振り返ると提灯の影に二人の女が見えた（結末。五）。というように起承転結ないし、夢幻能に類した構成になっている。²

本作の執筆経緯について、寺木定芳『人、泉鏡花』（武蔵書房、昭18・9）は、「御逝去の年、病をおして執筆され、七月に発表された、前期の御作『縷紅新草』の如きは、一日一枚といふ日が続いた」と記す。慶應義塾図書館蔵の自筆原稿は「和紙六十三枚」であり、脱稿まで、少なくとも二ヵ月余りを要したものとみられる。執筆は、四月には始まっていたであろう。岩波書店蔵の「編修資料」には、初出及び刊本の校正刷が含まれており、本文成立の過程が確認できる。³

作品の素材として、明治二十七年四、五月頃、家計の困難から金沢城の百間堀で身投げしようとした自身の体験（「おぼけずきのはれ少々と処女作」、「新潮」明40・5）、身代わりのように同じ時に入水自殺を遂げた金沢市横安江町の女子高等授産場職工頭、吉村ゆき（「百間堀の身投げ」、「北國新聞」明27・4・16付、「身を投げた別嬪の素性」同紙27・4・18付）、鏡花を精神的に支えた又従妹目細てるの存在が指摘できる。⁴ また、先行する作品として、『鐘声夜半録』（「四の緒」春陽堂、

明28・7)、『さ、蟹』(『国民之友』明30・5)、『女客』(『中央公論』明38・6、12)、『桜心中』(『新小説』大4・1)、『由縁の女』(『婦人画報』大8・1・10・2)があり、関連した随筆に、『雑句帖 魂祭』(『文芸倶楽部』明30・8)、『番茶話 赤蜻蛉』(『時事新報』大11・5・23・31)がある。

従来の研究は、『鐘声夜半録』と『縷紅新草』の記述体から回想・語りへの転換を検討する弦巻克二「虚構の意味―鏡花『縷紅新草』の世界―」(『国語国文』昭49・12)を始めとして、右の素材や先行作品との関連を取り上げたものが多い。身代わりのように自殺した女工への贖罪意識を『鐘声夜半録』、『女客』、『桜心中』、『縷紅新草』を取り上げて検証する小林輝治『『縷紅新草』覚え書き―贖罪意識の観点から―』(『鏡花研究』平成14・3)、『さ、蟹』に始まる目細てるへの倫理的罪責と『鐘声夜半録』に始まる吉村ゆきへの形而上的罪責への贖罪を描いた作品と説く吉村博任「贖罪の軌跡―『縷紅新草』成立まで―」(『論集 泉鏡花』第四集、和泉書院、平18・1)、『鐘声夜半録』の「死のオプセッション」が、『縷紅新草』で「透明な哀しみと化」し、「痣のエロス」と結びついて「独特の幻想」が導かれたと指摘する笠原伸夫「逝きて還らず」(『泉鏡花 美とエロスの構造』至文堂、昭51・5)、『笠原論文に基づいて、『由縁の女』、『雪柳』(『中央公論』昭12・12)のヒロインの痣をエロスや不義の罪障意識との関連から考察し、本作に「浄化」と「美なるものへの昇華」を見出す橘正典「墓と赤蜻蛉」(『鏡花変化帖』国書刊行会、平14・5)がある。

『縷紅新草』には、刺繍ハンカチをめぐる物語が取り上げられていることに加えて、「観光」という語句が頻出する。明治以降の金沢の主要な産業となっていた繊維産業、昭和初期の金沢がめざした観光が作品の基盤を形成しており、帰郷中に接した「産業と観光の大博覧会」の産業と観光が晩年の作品に反映していることになる。産業としての観光は、都市の伝承を名所として顕在化させ、俗化する側面を持つ。後述するように、都市の深層に向かう鏡花は、観光から招魂への転成によって俗化を退けたようだ。

種田和加子「事件としての意匠―『縷紅新草』論」(『論集昭和期の泉鏡花』桜楓社、平成14・5)は、本作を輸出用ハンカチーフの産業と刺繍の図案という工芸の観点から考察、新聞記事に遡り、特殊な図案が引き起こす事件を再現した本作は、テキストが事件を「再解釈」し「みだら」という、「ネガティブな評価」を根底から検討した作品だと捉える。また、吉田昌志『『縷紅新草』―青春の回顧』(『泉鏡花』美と永遠の探求者、日本放送出版協会、平10・4)は、糸七とお米の「追懐」が、「幽冥を異にする二人」の魂をここに呼びもどした」と説く。魂を招来する「追懐」は、言葉によるものだけではあるまい。前者は、刺繍の意匠の意味、後者は女性二人の魂を他界から招来する作品の構造を指摘した先行研究として注目される。

この他、「はんけち」の刺繍や女工と唄、仙晶寺のモデル蓮昌寺境内の塚の由来、さらには昭和六年十一月の生前最後の帰郷との関連など、作品の背景についての調査も十分ではない。

小論の目的は、先行研究の指摘を踏まえ、初校、再校をもとに本文成立の過程と作品成立の背景を検証し、刺繍の意匠と他界の「二人」の「魂をここに呼びもどす招魂の機構を検討して、観光という名の俗化に抗い、招魂に向かう鏡花文学の帰趨を考察するものである(本文の引用は初出による)。

1 初校から再校へ

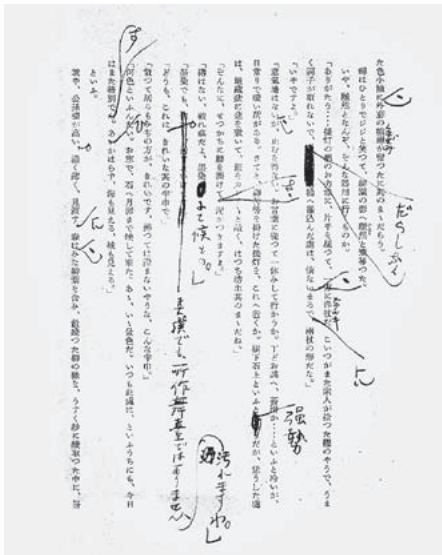
岩波書店蔵の「編修資料」には、『縷紅新草』の初出「中央公論」の初校(冒頭に「要再校」と記す)、再校(冒頭に「特急」と記す)、刊本の校正の三種類の校正刷りが存する。訂正は、全五章に涉り、誤植の他にも注意すべき訂正がある。以下、初校、再校を中心に、主な訂正箇所を取り上げたい。

① まず指摘したいのは、下段に掲載した校正刷りの通り、冒頭の「俗謡」、原稿の「比翼の蜻蛉」を初校で「二つ蜻蛉」に訂正していることである。四章冒頭にも、同様の訂正がある。末尾の「女の影が……二人見えた」と照応させた訂正であろう。

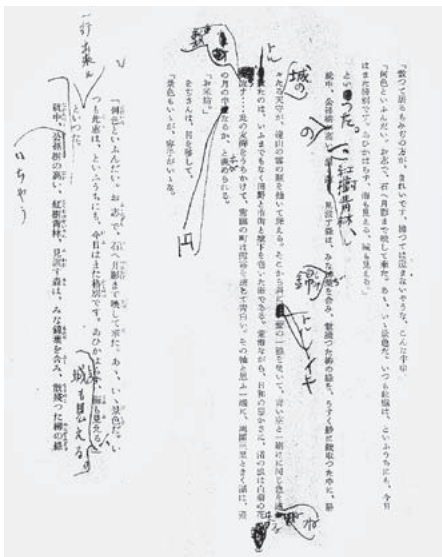
② 一章で寺の石段に糸七が腰掛ける場面、糸七が「墨染めだ。」とお米にいう一節を、初校は「墨染めに候もの。」と訂正、お米の「墨染めでも何でも汚すといけません。」を「墨染めでも、喜撰でも、所作舞台ではありません。汚れますわ。」と訂正している。石段の踊り場を芝居に見立てた糸七の発言を捉えて、「所作舞台」ではないと否定している。自身や目の前にあるものを見立てや比喻で表す糸七と事物を直接的に捉えるお米の相違を明示する訂正である(後述参照)。

③ 同章、故郷の「大城下」を糸七が俯瞰する一節、初校の「公孫樹が高い。濃く薄く、見渡す森は」を、再校は「公孫樹の高い、紅樹青林、見渡す森は」

と訂正している。現行本文の「公孫樹は黄也、紅樹、青林、見渡す森は」は、刊本の再校以降の訂正である。実景を色彩豊かな加賀友禅に見立てた一節で、公孫樹の高さ(公孫樹の高い)から「公孫樹は黄也」への変更に、「濃く薄く」の濃淡から「紅樹、青林」への変更に同じく、色彩を強調するものとなっている。語り手が、糸七に近い美的感覚を有していることを示す。

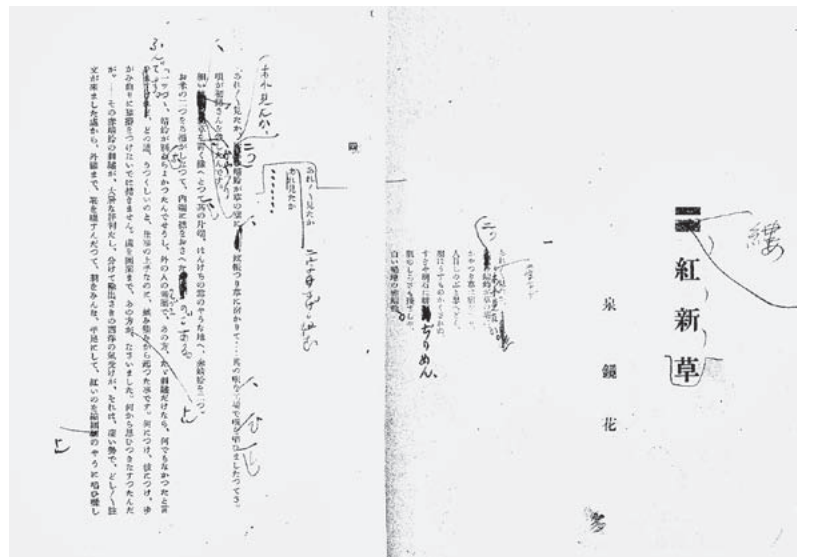


②

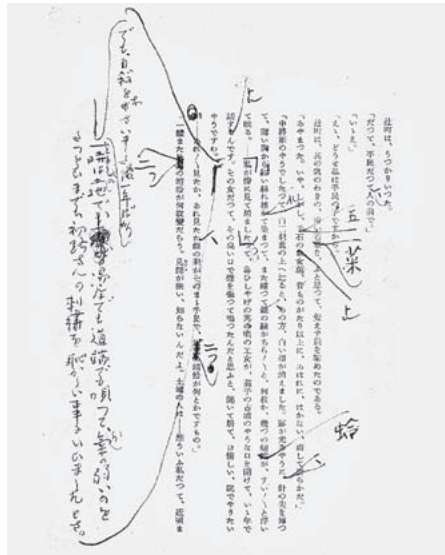


③

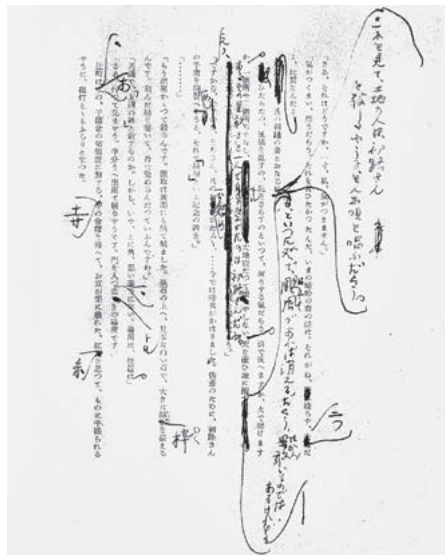
④ 三章、上京前、初路の墓参りのため寺を訪れた糸七に、お京が「初路さんのお墓は——」と声をかける一節、初校の「弱々とした名だけは、いつしか聞いて居た」を、再校は、「弱々とした、身を投げた女の名だけは、いつしか聞いて居た」というように、「身を投げた女の」を付加している。同じく、お京が「草葉の露に濡



①



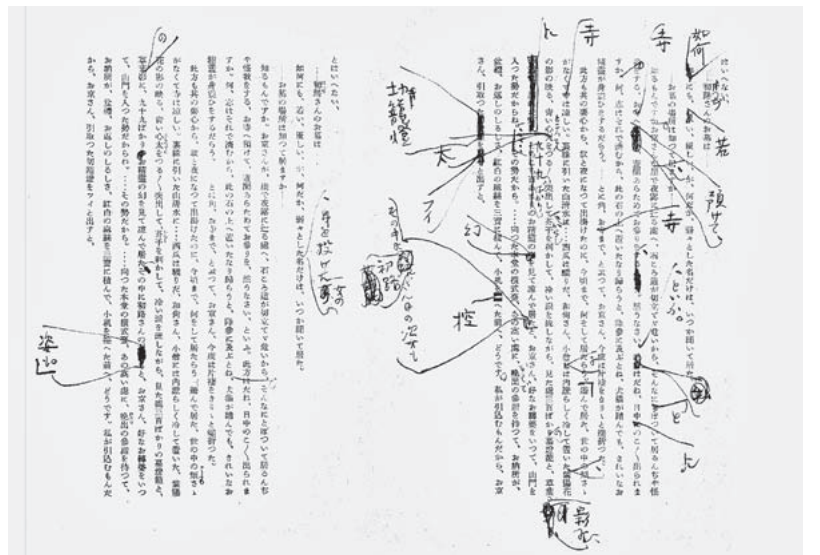
⑤



⑥

しない、天を蔽ひ地に漲つて居たんだもの。」の後に、「この土地の人は、それを見て、初路さんを殺したやうに、どんな唄を唱ふだらう。」とあった原稿の一節を、四行前の「比翼なんだよ。／＼初路さんの、其の刺繍の姿とおなじに」の後に移動させ、土地の人が見る対象を、蜻蛉の大量から「比翼の蜻蛉」に変更している。「比翼の蜻蛉」を焦点化し、卑猥な場面を仮構した人々への批判を強めるための訂正であろう。また、初校は、前文の「漲つて居たんだもの。」を改変して、「漲る、といった処で、颯風があればきえるだらう、果敢ないものではあるけれども——あ、その果敢なさを一人で身に受けたのは、初路さんだね。」というように、蜻蛉と初路の果敢なさを二重写しにした一節を加えている。批判と同情、表裏一体になった訂正である。

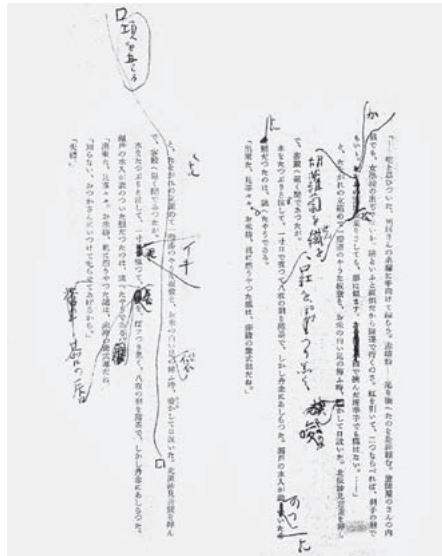
- れた灯、そちこち百あまり、お精霊様の影を見て涼んで居た」とあった原稿を、初校は「草葉の影に九十九ばかり、お精霊様の幻を見て涼んで居た。その中に初路さんの姿も。」というように、「その中に初路（女鷹）」を「初路」と訂正さんの姿も」を付け加えている。いずれも、他界に赴いた初路と初路を見守るお京の存在、結びつきを読者に意識させる訂正である。
- ⑤ 四章では、初路の印象を語った老女も「俗謡」を歌ったと思うと「口惜しい、睨でやりたいやうですわ。」というお米のせりふに、初校は「——でも、自殺をなさいました後一年ばかり一時は湯屋でも道端でも唄って、お気の弱いのをたつとむまでも、初路さんの刺繍を恥かしい事にいひましたとさ。」を加筆、死後一年余り経過してなお、初路を中傷する唄と噂が広がっていたことを書き加えている。
- ⑥ 同章の終わり、糸七が比翼の蜻蛉の群を目撃したことを語る場面で、初校は、「大地震だつて壊せや



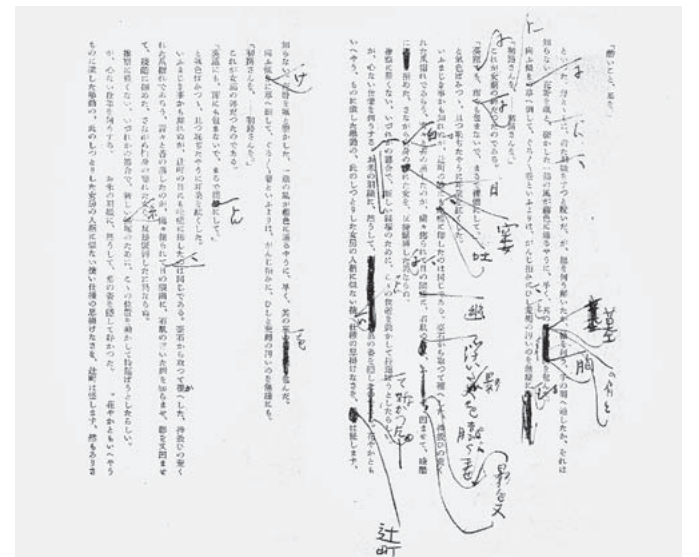
④

⑦ 五章では、工夫が荒縄を掛けたまま置き去りにした初路の墓石にお米が羽織を掛ける場面、羽織が「其の女の肩と胸を包んだ。」とあった原稿を、初校は「其の墓の肩と胸を包んだ。」と改め、さらに再校は「其の墓を包んだ。」と訂正している。原稿や初校では、初路の墓石を肉体と等価なものと表現していたのであった。この点については、後述する。

⑧ 同章後半、糸七の発案で提灯に「尾を銜えた」二匹の赤蜻蛉を描く場面、原稿の「一寸口で吸って八枚の羽を薄墨で、しかし丹念にあしらった」を、初校は「一寸口で吸って、口紅を、ぼつとり黒く、八枚の羽を薄墨で、しかし丹念にあしらった」に訂正、再校はさらに、「一寸口で吸って、蒼の唇を、ぼつとり黒く、八枚の羽を薄墨で、しかし丹念にあしらった」と訂正、唇の紅を水に湿らせた筆につけ、提灯に描いて赤蜻蛉の赤い尾とし、薄墨で八枚の羽を描くお米を映し出す。「口」(原稿)、「口紅」(初校)、「蒼の唇」(再校)と艶かしさを深めている。

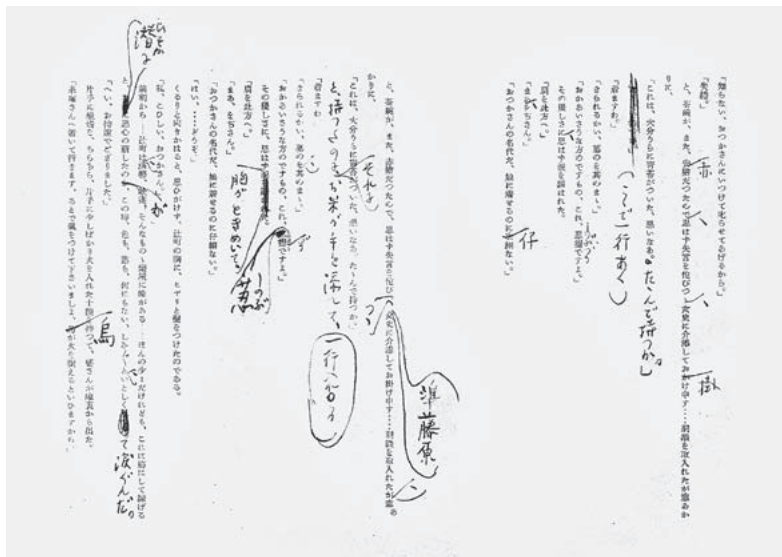


⑧



⑦

⑨ また、墓石を包んだために青苔のついた羽織をお米が着る場面、初校は、糸七の「悪いなあ。たまたんで持つか。」の後に、「(こゝ)で一行あく」と指示、再校は、「と、持つたのに、それにお米が手を添へて、」を加え、さらに「一行入れる」と注記している。その後、「忍摺ですよ。」とあって羽織を着たお米について、初校の「その優しさに、思は



⑨

「涙を誘はれた」を、再校は「その優しさに、思はず胸がときめいて、」と訂正、お米の母恋いに取材した作品で一儲けをもくろんだ「悪心」を糸七が翻す場面では、初校の「色も、欲も、何にもない、しみく」といとしく思った。」を、再校で「色も、欲も、何にもない、しみく」と、いとしくて涙ぐんだ。」と改めている。糸七が落涙した理由を、墓石の青苔で汚れた羽織を厭わずに着るお米の優しさから、お京に対するお米の母恋いに変えている。

⑩ 末尾、豆腐屋にぶつかりそうになって足を留めたお米が山門を見つめる場面、原稿で、前文に続いていた「あれ、蜻蛉が。」「お米が膝をついて、手を合はせた。」を、初校は二行に改行、お米が、蜻蛉の影に母と初路の姿を見出し合掌する瞬間を絶妙な間で表現している。最終行、原稿の「提灯が、門へ出て、少しづつ、高くなり、赤蜻蛉が松風を動いて、女の影が……二人見えた。」を、初校は「提灯が、山門へ出て、少しづつ、高くなり、山風一通り、赤蜻蛉が静と松風を動いて、女の影が……二人見えた。」と改め、さらに再校は「山風」を「裏山の風」に訂正している。山門に提灯が出現し、上昇してゆく不可思議な場面において、風が山から吹き降ろし、少し遅れて二つの影に糸七が気づく一瞬を表現するための改変である。



以上、「比翼の蜻蛉」の「二つ蜻蛉」への改変は、作品のモチーフに関わり、自身を出家に見立てたり、実景を色彩豊かな友禅模様に見立てたりする訂正は、糸七と糸七に寄り添う語り手の指向を特徴づけるとともに、現実をありのままに捉えるお米との相違も明示する。原稿や初校で初路の墓石を身体と同化した言説は、再校で消去されたが、原稿執筆時の作者の意識を探る意味で看過できない。他界に赴いた初路と初路を見守るお京の印象を深め、蜻蛉と初路の果敢なさを重ねた訂正は、死後も初路を中傷する唄と噂が広がりを見せた書き加えと表裏一体となっており、前者は初路への同情を深め、後者は「比翼の蜻蛉」から卑猥な虚構の唄を口にする「土地の人」への批判をなす。赤蜻蛉の尾を唇の紅を用いて提灯に描くお米の艶かしさ、墓石の青苔がついた羽織を厭わず着るお米の優しさとお京に対するお米の母恋いなど、お米に関する訂正も作品を解明する重要な糸口になる。初路とお京が他界から姿を現す一文の赤蜻蛉を揺らす風の動きの微妙さなど、作品の完成度を高める最晩年の作家の執念を看取できよう。

2 産業と観光

初路のモデルの死因について、明治二十七年四月十八日付「北國新聞」、「身を投げた別嬪の素性」は、次のように伝えている。

此程本市百間堀に身を投げた別嬪は横安江町八十四番地同居吉村松太郎の妹ゆき(十九)な□□□□□□□□□□(八字不明)同女は□□□□□□□□□□(六字不明)女子高等授産場の職工頭にして仕事は上手に出来、氣質も悪しからざるものなりしが過ぐる日主人より客の注文に掛かる刺繡物を命ぜられゆきは随分骨を折りて縫ひ上げ主人に差

出せし処主人は其色合が気に入らぬとて是れを縫ひ直さしめたり固より他の職工なれば兎や角と云ふべきなれど何事も扣へ勝ちのゆきは主人が気に入らぬと云ふに詮方なく再び縫ひ直して見せると今度も亦た主人の気に入らざりしかば益々煩悶に絶え兼ね思ひ詰めたる結果去る十四日の夜何気なき体に鍛冶八幡の祭礼に詣でんとて自宅を出で遂に其夜身を投げたるなりとなん

右のように、女子高等授産場の職工頭吉村ゆきは、主人から再三にわたって刺繡の縫い直しを命じられ、それを苦に入水自殺を遂げたのであった。

『石川県絹業史』（石川県織物検査所、昭12・12）の「第一節 金沢刺繡」によれば、「手巾」の刺繡が商品として本格的に制作されたのは、「明治十六年頃」で、「主に手巾の縁を色変わりの絹糸を以て縫ひ、中央に簡單なる花模様等を施した」という。明治十七年には、鏡花と同じ北陸英和学校出身でもある実業家水登勇太郎が羽二重に刺繡を施し「手巾」として盛んに海外へ輸出、二十四年には、納富介次郎・鈴木華村らによる「高等女子授産場」が開設されたとある。「高等女子授産場」は、明治二十七年四月十四日に自殺した吉村ゆきが職工頭を務めていた「女子高等授産場」のことであろう。明治二十四年七月二十五日付「北陸実業新聞」の「●刺繡会社の新設」は、「今回本市内数名の有志者相謀り刺繡会社なるものを下本多町六番丁に創設すべし（中略）此の事は夙に彼の納富介二郎が其計画に苦心せしものなるよし」と報じた。また、「●高等女子授産場へ寄附」（8・31付）には、「本市本多町高等女子授産場」では、同授産場への森下森八、真館貞造ら有力者の寄附の記載がある。同授産場の設立は明治二十四年夏ごろと思われる。この年は、金沢刺繡の拡張期であったらしく、「北陸実業新聞」には、「●大鋸谷製糸場」（4・13付）、「●大鋸谷職工場」（5・23付）など製糸場や職工場の記事が散見する。九月には、本多政以ら十五名が発起人になって、「私立女子手芸共進会」が、兼六園内の勸業博物館で開催されるという記事（4・22付）もある。また、同じく二十四

年五月十一日付同紙によれば、

●松川職工場 本市上新町の同工場は遂々隆盛に赴くよしなるが去る四月中織上げたる撚双子縞の反物は七百反にして日々使用する所の工女七十名にて内機織六十名かきくり総繰十名なり

というように、鏡花の家があった下新町に続く上新町にも職工場があったことがわかる。同町と鏡花の生家があった下新町は、同じ一筋の路でつながっている。「金沢住宅明細図」（日本地図編集社、昭31・11）には、上新町に西端北側に「松川株式会社」の記載がある。同社の前身が、松川職工場と思われる。

『縷紅新草』では、赤蜻蛉の刺繡を女工仲間に「あれく見たか」にはじまる卑猥な唄にされた初路が身を投げる。女工の唄については、明治二十四年五月二十六日付「北陸実業新聞」に関連する記事がある。「頃日当地の諸工場を巡視せし人」の語ったこととして、同紙は、次のような記事を掲載している。

●諸工場の唱歌の事 近來当地に於てもハンカチーフ縫、ハンカチーフ地縫、双子織等の工場大に増加せしは当地の為に賀すべきことなるがこゝに各工場主に注意を促し度こと沢なれども指当り最も其実施の一日も早からんことを望む者は夫の工場に於て工女が唄ふ唱歌の一義なり今日市内の各工場に臨み其工女が声高く唄ふ歌は其文句猥褻聞くだも厭ふべきものならざるはなし

右のように、金沢「市内の各工場」の工女が唄う歌が「文句猥褻聞くだも厭ふべきものならざるはなし」という現状があったというのだ。『縷紅新草』で工女が卑猥な唄を歌うという設定は、鏡花の実際の見聞によるものである。明治三十一年十月三十一日付「北國新聞」の「工女と猥歌」にも同趣旨の記載がある。なお、この設定は『桜心中』までの先行作にはない。

次に作中の「観光」と昭和六年十一月の帰郷について検証したい。糸七は、お米から初路の墓が、「糸塚として

新たに顕彰されることを聞く。初路を顕彰する「糸塚」建立を推進したのは、「帽子、靴、洋服、袴、髻の生えた、ご連中」で、「檀家の有志、県の観光協会の表向きの仕事」である。その契機は、「初代元祖、友禅の墓」に「近年他国の人たちが方々から尋ねて来て世評が高い」からであった。供養のため、初路の「手技を称め賛へやう」というのも、「観光協会」の仕事である。帽子、靴、洋服、袴、髻の生えた、ご連中や「壇家の有志、観光会」は、記念碑を「友禅の碑」と対にして観光の目玉にしようと思図しているのである。⁶

見方を変えれば、観光目的の「糸塚」の建立によって、再び初路は、「身肌を見せ」る危機に直面することになる。これと関連して見過ごせないのは、糸七が自身のことを、「連れにはぐれた観光団」と呼ぶなど、「観光」という語句を印象付けようという意図を感じさせること、そして、鏡花が、最後に金沢に帰郷した昭和六年十一月の金沢では、「観光」に注目が集っていたことである。

昭和六年十一月十日付「北國新聞」には、金沢柿木島の藤屋旅館滞在中の鏡花を前日記者が訪問した記事「蒸し立ての饅頭に／鏡花老、車内の恐縮 蟹の味に郷土をなつかしむ／久振りに帰った泉さん夫妻」が掲載されている。鏡花は、

金沢の街も変つたネ、家内と一緒に近江町市場でいばら蟹を見つけて買ひ付近で饅頭の蒸し立てを見て懐かしくなりそれも買つて電車に飛び乗つたところ方向違ひの浅野川行だったので困つた、(中略)粟ヶ崎の浜や夢香山にも登つてみたが懐かしみ多いものがあつた、(中略)今度金沢へ来る気になつたもの一つに母が私のまだ腹の中にあるころ松任町付近の成にある摩耶天に安産を祈つたことがあるのでそのお札に詣りたかつたので、私の誕生日である四日に恰度参詣してきました

と闊達に語っている。鏡花は、十一月四日の誕生日に松任行善寺に参詣した他、粟ヶ崎(遊園地があり、劇場ではレビューが行われていた)や夢香山、生家跡も訪ね、十日午後七時十分発の急行で上京予定だと語っている。滞在は、十一月初旬の十日ほどだったものと思われる。記者から故郷の印象を問われた鏡花は、「金沢の街も変つたネ」と答えている。昭和四年五月の帰郷から二年半しか経過していないが、鏡花の言うように、このころ、金沢は大きく変わりつつあつた。『市史年表 金沢の百年 大正・昭和編』(金沢市、昭42・6)によれば、上述のように、昭和五年十一月に三越金沢支店が開店、鏡花が帰郷した六年九月には、香林坊にカフェ美人座と赤玉が相次いで開店し、昭和モダンの文化が金沢に本格的に流入した。十月十六日には上水道が通水を開始し、駅前から安江町、南町、片町、広坂通り、尾張町に至るまで、幹線大通りの舗装化がすすんでいた。完成祝賀会工事が開催されたのは、十二月十二日だという。十月二十三日付「北國新聞」は、「交通地獄の武蔵ヶ辻 舗装工事で大混雑」と題して、工事で路面電車の線路の下部が露出した交差点の写真を掲載している。鏡花が帰郷したのは、市内の舗装工事の最中だったに違いない。十月二十九日付同紙では、駅前広場の舗装工事が十一月十五日までに竣工すると伝えている。いずれも博覧会開催に向けたインフラの整備であろう。

昭和六年九月二十七日付「東京日々新聞」第十面は、吉川一太郎金沢市長「産業と観光の大博覧会に就いて」を掲載し、博覧会の広告につとめている。「桜花咲く明春四月十二日より六月五日まで開催の産業と観光の大博覧会にはわが金沢市の主催にかゝる」として、前人気が高いこと、会場は「日本三公園の一たる兼六園に近き出羽町練兵場と不断開放せざる旧城址本丸」であること、全国の特産品を網羅し、「世に知られざる日本海沿岸地方の観光資料の出品から、時代の寵児たる各種見本市の開設を取り入れ」た「異色ある博覧会」だと述べている。「兼六園の桜花、金沢市祭、協賛会の翼賛事業をはじめ居ながらにして日本海沿岸地方を旅する思ひそのまゝの観光館」というようにまず観光館を紹介して「観光」を力説、観光による振興をはかろうという狙いがうかがわれる。鏡花の金

沢滞在中の記事でも、「金沢博の建築は／速に着工を要す／市当局の決意を望む」（11・6付）、「金沢博のお客を／飛行電車で運ぶ」（11・7付）というように、博覧会関係の記事がみられる。後者冒頭を引く。

金沢市主催の産業と観光の大博覧会は近年になき大規模の博覧会であるので広告塔、特別館の如きは全国の会社商店等が競争的に申し込みあり大会場内にあつて高層と美装に市民をアツトいはせやうとしてゐる

右のように、「産業と観光の大博覧会」にむけた準備と市内の整備が本格的に始まった時期に鏡花は帰郷したのであり、十日余りの滞在の間、博覧会・産業と並んで「観光」という言葉が新聞紙面等をにぎわせていたのであった。

七百八十ページにも及ぶ大冊『金沢市主催 産業と観光の大博覧会誌』（金沢市、昭9・7）によれば、博覧会の開催に向けて、兼六園をはさんだ出羽町練兵場と金沢城内の特設会場の地鎮祭が挙行されたのは、鏡花夫妻が上京して間もない十一月二十九日である。同書所収の吉川一太郎「趣意書」は、博覧会開催の目的を、「各地の物産を網羅し内外産業の現状を一眸の下に展示」するとともに、「日本海沿岸地方の観光資料を縮図製表等に依り鳥瞰的に紹介して産業の進展を図」ることだと述べている。「宣伝部」の項では、博覧会が「観光」という異色を帯びたものである点」を「力説強調」することとし、同年九月二十七日付「東京日々新聞」を皮切りに、「大阪毎日」「新愛知」「新潟新聞」「富山日報」「信濃毎日」など全国各紙で博覧会の開催を告知、六年十月からは、名古屋松坂屋で開催された名所名物展覧会に会場の「チオラマ」を出品（昭6・10・21）²、鉄道各駅にポスターを掲示、宣伝標語募集（昭6・11募集、12・10発表）、博覧会宣伝用絵葉書作成（昭6・11）、「金沢市鳥瞰図」（吉田初三郎作、同右、宣伝マッチ、博覧会案内頒布等々による大々的な広報活動を繰り広げた。昭和七年一月に上海事変が勃発、開催が危ぶまれたが、国防館の規模を拡大して国防色を強め、四月十二日から六月二十日まで、五十五日間にわたって開催された。日本海沿岸を中心に、二府三十三県十七市、台湾、樺太、満州を含む出品人員六千人、出品点数三十万点の充実した博覧会は、五十万人以上の入場者があり、成功を収めたとい²う。

観光館は、金沢城内にあつて、入り口には金沢市及び兼六園を「朗快な大パノラマで展示し、一目、金沢の全貌を紹介」し、「日本海沿岸十二県の名所旧跡を悉く網羅」して「坐ながら天下の風光を満喫」できるよう「腐心」した。京都市街や天の橋立のパノラマ、東尋坊や安宅の関、俳女千代、俱利伽羅、末森の古戦場の模型を展示「したという。同書掲載の図版から、鳥瞰図や写真による名勝の紹介に加えて、特産品や土産ものを展示していることがわかる。観光館設置の趣旨について、「全国出品関係主任者会議」（於金沢市公会堂、昭6・8・28、29）で、金沢市産業課長岡田九之吉は、「遊覧」に限定せず、「産業上種々研究すべきもの或は調査すべきものを取り入れて見せ、延いては生産者消費の関係を大ならしめたいと云ふ事を此館に依つて」一般に紹介したいと述べている。「消費」と「生産」の観点から「観光」を捉え、あくまでも、産業や経済の振興を目的とした観光情報の提供をめざすものであったようだ。金沢商工会議所は、昭和六年四月、「産業と観光の大博覧会協賛会」を結成し、寄附金募集、演芸館の運営や街頭装飾、ポスター掲示や発送を担当した。官民一体の協力体制が構築されていたといつてよい。鏡花がこの博覧会を訪問した形跡はない。しかし、産業と観光を結びつけた大博覧会の担い手が、「帽子、靴、洋服、袴、髻の生えた、ご連中」であることは、紙面などを通じて認識していたものと思われる。

上述のように、『縷紅新草』の「糸塚」の建立の契機は、「初代元祖、友禪の墓」に「近年他国の人たちが方々から尋ねて来て世評が高い」からであった。前引、吉田初三郎「金沢市鳥瞰図」裏面掲載の「金沢市概要」には、「金城靈沢」から「那留波瀧」まで十九カ所の名所・旧跡が挙げられており、「宮崎友禪斎墓」も数えられている。

友禪斎の墓は、大正九年一月十八日、金沢在住の画家巖如春らの調査により、卯辰山麓寺院群の一つ龍国寺にあることが判明し（『北國新聞』同19付、「友禪墓石の確認」、一月二十七日「友禪斎 奉慶法会」、三月一日には友禪斎史蹟

保存会発会式が開催された。十二年六月十七日には友禪堂落成式も開催されたことなどが報じられている(『実録石川県史』能登印刷出版部、平3・11)。大正八年九月刊『金沢電車案内』(金沢電気軌道株式会社)には、同じ寺院群の小瀬甫庵の墓(普明院)や中村歌右衛門の墓(真成寺)は紹介されているが、友禪斎の墓についての項目はない。作中にいうように、友禪斎の墓は「近年」の新しい観光名所だったのである。大正十一、十二、十五、昭和四年と帰郷を繰り返す中で、鏡花は、友禪斎の墓への関心の高まりを知っていたものであろう。

以上のように、鏡花は生家近隣にもあった職工場などで聞いた女工の猥褻な内容を含む仕事歌を聞いた体験を想起して、『縷紅新草』の初路が身投げする原因を構想したものと考えられる。また、大正後期の帰郷や報道を通じて「近年」の新しい観光名所としての龍国寺の友禪斎墓の存在を知り、昭和六年十一月帰郷の際、翌年開催の「産業と観光の大博覧会」の記事や金沢市内の変貌の記憶を基に、観光化という俗化によって再び辱めをうけようとする女工初路を描く構想を得たものと考えられる。

3 赤蜻蛉の意匠

大正十一年五月発表の随筆「番茶話 赤蜻蛉」によれば、鏡花は、「一昨年の秋九月」(大正九年九月)の彼岸前の長雨がやんで晴れ上がった朝、二階の欄干から、無数の赤蜻蛉が麹町大通から市谷方面に向かうのを目撃した。人の頭くらいの高さから「大屋根の庇」くらいの高さまでを飛ぶ大群の移動を目の当たりにしたという。注目されるのは、「其の日の赤蜻蛉は、残らず、一つも残らず、皆一つづつ、一つがひ、松葉につないで、天人の乗る八挺の銀の櫂の筏のやうにして飛行した」という一節である。翌年の「九月二十日前後」にも、同様の赤蜻蛉を目撃した

という。「大すきだ」という赤蜻蛉の、「一つがひ」になって飛ぶ大群を目撃した体験が、最終作品に生かされたこととは間違いない。

ところで、作品のタイトルは、ルコウヒルガオ科の一年草「縷紅草」に拠るが、作中には登場しない。開花前の形状、色彩が赤蜻蛉の尾に類似することによる命名であり、タイトル自体が、見立て・比喩(隠喩)である。以下、この問題を赤蜻蛉の「俗謡」を起点に、工女をはじめとする土地の人々、お米、糸七の三者に分けて、検討したい。『縷紅新草』は、初路を殺した唄から始まる。「あれ〜見たか、あれ見たか」の繰り返しの間に、九行の詩句があり、句点によって前七行と後二行に分かれる。前半では、

二つ蜻蛉が草の葉に、
かやつり草に宿をかり、
人目しのぶと思へども、
羽はうすものかくされぬ、
すきや明石に緋ぢりめん、
肌のしろさも浅ましや、
白い絹地の赤蜻蛉。

というように、「二つ蜻蛉」が「かやつり草」に止っている情景を、人目を忍ぶ男女の密会に見立て、薄羽を透視する。透視する主体は、後半の「世間稲妻」の「目」であろう。とすれば、白い絹地に刺繍した赤蜻蛉を擬人化し、すきや明石に緋縮緬姿の色白の女性に見立てるのも、密会する女性の白い肌を「浅まし」と指弾するのも、「世間稲妻」の「目」である。

初路の考案した赤蜻蛉の意匠は、決してそのようなものではない。第四章のお米の説明によれば、初路の刺繍は、「細い、かやつり草を、青く縁へとつて、其の片端、はんけちの雪のやうな地へ、赤蜻蛉を二つ」描いたもの、「一つの尾に一つが続いて（中略）飛んでる」姿を刺繍したものである。つがいで「飛んでる」のであって、草裏に留まっているわけではない。かやつり草の「かやつり」（蚊帳吊り）から赤蜻蛉を擬人化し、男女の密会を仮構する二重の虚構の唄といつてよい。

後半は、

雪にもみぢとあざむけど、

世間稲妻、目が光る。

というように、白い絹地を「雪」に見立て、赤蜻蛉を擬人化した「緋ぢりめん」の女性を「もみぢ」に見立てて、「雪」が「もみぢ」に降り積もったように見せても、「世間稲妻」の「目」を欺くことはできないと批判する。初路の指が「白羽二重」に同化するほど白く、「中将姫」のような女性だった（四章）という一節からも明らかのように、「浅ましや」と指弾されるのは、初路の身体に他ならない。

このように、つがいの赤蜻蛉を擬人化し、前後に連なって飛行する姿を草葉の陰に留まる密会に仮構し、非難の矛先を刺繍の作者の身体に収斂させている。「雪に咲いた、白玉椿のお人柄」である初路が、遺書に「あゝ、恥かしいと思つたばかりに」と記すのも無理はない。工女や「土地の人々」の持つ「世間稲妻」の「目」は、刺繍の意匠から飛躍して、刺繍の作者の身体を辱め、死に追いやつたのであつた。

次に、お米について、検討したい。

お米は、蓮晶寺の石段で一休みする糸七が直に腰かけ、「たかゞ墨染にて候だよ。」と言うと、「墨染でも、喜撰

でも、所作舞台ではありません」と注意する。このように、お米は、どちらかといえは、ありのままを直視する指を持つ。そうしたあり方を端的に示すのは、初路の「凶案」を紹介した一節であろう。女工達が唄い囃した「凶案」の蜻蛉は「飛んでる」のであって、「衣服を着て」もないし、「寝て」いないことをお米は指摘し、密会だと囃す唄の虚構を、批判する。このように、お米は、確かなまなざしで、事物を捉え、糸七に教える。しかし、「凶案まで、あの方がなさいました。何から思ひつきなすつたんだか」というように、眼前の事物をありのままに捉えるだけのお米には、初路が手がけた「凶案」の起源は解明できない。解明できないからこそ、死後も「二つ蜻蛉が何とか」と唄い囃して初路を辱める虚構の唄とその唄を唄った「土地」の人々への憤りを募らせるのである。

これに対して、糸七は、お米の胸の薄青いあざを「眉毛を一つ刺つた痕」や「雪間の若菜」に喩えたり、傘の上に乗った蝶を、「雪の牡丹へ、ちら／＼と箔が散浮く」さまに見立てたりしている。自身を「はつち坊主」や「墨染」「酒買ひ狸」「観光団」になぞらえる。自身や眼前にあるものを見立て喩える、数限りもない赤蜻蛉の飛行を、「微紅みづかい光る雨に、花吹雪を浮かせた」さまや「淡紅たんこう一面の紗を張つて、銀の霞に包んだ」さまに見立てる。また、赤蜻蛉の大群の上に聳える洋館や高い林、森を、「夕日の紅を巻いた白浪の上の巖の島」に喩えている。美的で、意匠性に富んだ見立て意識や比喩感覚の持ち主といえよう。⁹⁾

こうした糸七のあり方を踏まえて、東京で赤蜻蛉の大群を目撃した体験を検討したい。

糸七は、上述のように、華麗な比喩を交えて、歌舞伎座から明石町、明石町から赤坂までの通りに充滿する赤蜻蛉の大群を目撃した体験を、お米に語っている。「その日ほど夥しいのは始めてだった」という驚きに加えて、赤蜻蛉が、「残らず二つ」「比翼」で、初路の考案した「刺繍の姿とおなじ」だったという。「一つの尾に一つが続いて（中略）飛んでる」姿を目撃したのであろう。そこからいえるのは、初路は、想像を「凶案」化したのでもなく、「二

つ蜻蛉」に遭遇した感動を図案化したことに糸七が気づいたということだ。三十年前の金沢と当年の東京との違い、大群と「二つ」との異同はあったにせよ、初路が、その意匠を創案する起源を、糸七は時と場所を違えて目撃したのであり、意匠を発案した起源を共有したのではなからうか。「刺繍の姿とおなじ」実景としての赤蜻蛉を前に、「みだらだの、風儀を乱すの、恥をさらすの」という「世間稲妻」の解釈も虚構も成立しえない。「儂さを一人で身に受けたのは初路さんだね」という糸七の発言は、初路がささやかではかない命にまなざしを注いで比翼の赤蜻蛉を意匠化したことと、「土地の人」で、初路の真意を理解したのは一人もいなかったことを意味する。三十年の時を隔てて、初めて糸七が初路の真意を理解したといえよう。こうして糸七は、誰も気づくことが出来なかった初路の意匠の起源に想到し、人々の誤解を正し、初路の無念を晴らしたのであった。

糸七がこのように、意匠からその起源に遡行できたのは、右に述べた見立て意識や比喩感覚を糸七が持っていたからだと考えられる。糸七の見立てや比喩は、自身や眼前の情景を基点とした美的で意匠性に富んだものであった。それは、眼前を飛ぶ比翼の赤蜻蛉を基点として、かやつり草で縁取りをした白い絹地に二つの蜻蛉をあしらった意匠を考案した初路の感覚に近い。実景から見立てや比喩に転じる糸七の感性は、意匠からその起源に遡行することも可能にしたのではなからうか。¹⁰⁾

4 招魂の機構

最後に、二人の女性(初路とお京)が、「赤蜻蛉が静と動いて、女の影が……二人見えた」というように、巻末で姿を見せるまでの招魂の機構を、初路とお京、それぞれについて検証する。

はじめに、初路における招魂の機構をたどりたい。

初路の招魂は、まずお米が糸七に「花の盛の真夜中に。——あの、お城の門のまはり、暗い堀の上を行つたり、来たり……」と言ったことを契機に、糸七が「さし俯向いた頸のほんのり白い後姿で、(中略)満開の桜の咲蔽ふ其の長坂を下りる」初路の姿を目に浮かべるところから始まるといっていだらう。故人を回想することから、招魂が始まる。

故人の回想に次ぐ招魂は、身投げした原因が赤蜻蛉の意匠にあることをお米から聞いた糸七が、東京で赤蜻蛉の大群を目撃したことを語ることである。糸七の語りは、身投げする原因となった初路の意匠の起源に遡行し、意匠を男女の密会に仮構した唄、身体を辱めた唄を歌われた初路の恥辱、無念を晴らし、初路の魂を呼び寄せる。「幽霊蜻蛉」の出現は、三十年間、誰も思いつかなかった赤蜻蛉の起源を糸七が解き明かし、初路の魂を呼び覚ましたことによるものではなからうか。

しかし、それもつかの間、初路は再び恥辱をこうむる。供養を目的として観光協会が建立する糸塚に移動するため、初路の墓が荒縄で直に縛められたのは、糸七が赤蜻蛉の大群に遭遇した体験をお米に語ったのとほぼ同時である。 「幽霊蜻蛉」は、永い眠りから覚めた初路の分身とも捉えられる。「幽霊蜻蛉」「おばけの蜻蛉」は、墓石を荒縄で縛った工夫の前だけでなく、羽織を墓石にかぶせたお米、荒縄を切ろうとする糸七の前にも姿を表わす。怨念の象徴というだけでは、説明できない。

赤蜻蛉の出現に驚嘆した工夫が置き去りにした墓石、それは、供養を名目としていても、初路にすれば、「帽子、靴、洋服、袴、髻の生えた、ご連中」の勝手な都合で観光客の目に曝される惨めさに直結するものに他ならない。お米がとつさに羽織を掛け、糸七が荒縄を鋏で切ることで、初路は辛うじて恥辱を免れる。注目されるのは、お米

が初路の墓石を見て、「莫塵にも、席にも包まないで、まるで裸にして」と「気色ばみつゝ、且つ恥ぢたやうに耳朶を紅く」することである。糸七も、墓石に「残酷に搦めた、さながら白身の糞れた女を反接緊縛した」さまを見る。このように、お米と糸七は、墓石を初路の身体と等価なものとみている。上述のように、「その女の肩と胸を包んだ」とあった原稿の「女」を「墓に」に改める校正の過程で、墓石を女と表現する直接性こそ消されたものの、墓石の身体性は却って濃厚なものとなっている。端的にそれを表わすのは、糸七が荒縄を切る一節で、

繩目は見る目に忍びないから、衣きぬを掛けた此のま、(中略)もろ手を、づかと袖裏へ。驚破すは、ほんのりと暖い。
芬ぶんと薫つた、石の肌がが軟かさ。

というように、暖かく軟らかい墓石を、ぬくもりを持った女性の身体として描いていることである。笠原伸夫「逝きて還らず」(『泉鏡花 美とエロスの構造』)の指摘するように「墓石のエロス」さえ感じられる。

続いて、糸七が銚子を構えると、お米が「おぼけの蜻蛉、をぢさん」と蜻蛉の出現を知らせる。呼び覚まされた初路の分身であろう。そこで糸七は「一礼」し、墓石に向かつて「お嬢さん、私の仕業が悪かったら、手を、怪我おさせなさい。」と語りかけてから、荒縄を切る。糸七の行為は、もはや生者に対する呼びかけと同等である。この後、糸七の発案で、お米が「尾を銜へた」赤蜻蛉を提灯に口紅と薄墨で描いて手向け、招魂の秘儀は終わる。

糸七とお米の語らいを通じて、糸七が故人を思い出し、お米が人柄や境遇、死に至る事情を偲ぶ「追懐」にとどまらず、糸七が故人と向き合い、深い共感、交感を通して魂を呼び覚まし、お米とともに故人の汚名を雪いだ上で、身体性を回復させた故人に直接呼びかける。故人のしるしを手向けることも含めて、初路の魂はお米と糸七によって現世へと導かれているのであり、そこに赤蜻蛉と墓石を介した招魂の機構をたどることができる。

では、お京の場合はどうか。

お米と仙晶寺の石段に腰をおろした糸七は、「お京さん——お米坊、お前のお母さんの名だ(中略)何々院——信女でなく、ごめんを被らう」というように、院号ではなく、俗名、つまり生前の名前で語ると宣言している。故人を現世に呼びもどす第一歩といえるだろう。

糸七が、掘端をさまよった翌朝、お京に起こされたことを回想する場面では、「——兄さん……兄さん——／＼と聞こえたのは……お京さん。」という糸七に、お米が「返事をしましやうか」という。お米が自ら母に自分を重ねる点で、注目される。お京に次いで初路の墓参りをしようとする場面では、「……づゝと離れて居るとい、んだがな。近いと、どうも、此の年でも極りが悪い。屹と冷やかすぜ、石塔の下から、クツク、カラクと先づ笑ふ」というように、泉下のお京を生ある人間同等に捉えている。これと同様のことが、糸七とお米がお京の墓参りをする一節にみえる。語り手は、「卵塔の一面」のお京の墓について「お米のお母さんが、ぱつと目を開きさうに眠つて居る。」という。ここでは、語り手が、お京を生ある者に擬して表現している。このように、お米、糸七に加えて語り手も含めて、故人をあたかも生ある人間同等に描いているのである。それは、故人の魂を呼び覚ますものといえよう。

荒縄で縛られたまま放置された初路の墓石に、お米が羽織をかける場面では、糸七が、

ものに激した拳動の、此のしつとりした女房の人柄に似ない捷い仕種の思掛けなさを、辻町は怪しまず、然も
ありさうな事と思つたのは、お京の娘だからであつた。こんな場に出逢つては、屹とおなじはからひをするに
疑ひない。

というように、お米にお京を重ね、故人の娘を介して故人を確認する。故人がその娘の中に生きていることを感得したといつてもいい。次いで、初路に手向ける赤蜻蛉を提灯に描いた後、糸七がお米に青苔のついた羽織を着せる場面では、「おつかさんの名代だ、娘に着せるのに仔細ない」というと、「はい、……どうぞ。」と答えたお米が、「く

るりと向きかはると、思ひがけず、辻町の胸にヒヤリと髪をつけ」て、「私、こひしい、おつかさん。」という。ここでは、お米が糸七を介して母に呼びかけている。お米は、はじめ仙晶寺の石段で糸七と会話する間は、「母に手を曳かれた時分から馴染みです」、「母の許にお参りして」、「母が、いつも然ういつて居ましたわ」というように、お京を「母」と呼んでいたが、前引初路の墓参りをする際、お京が「きつと冷やかすぜ、石塔の下から、クツク、カラ〜と先ず笑ふ」と糸七がいったのに対して、「こはい、をぢさん、お母さんだとい、けれど」というのを契機に、「母」から「おつかさん」に変わる。

以上のように、お京についても、糸七とお米との語らいを通じて、糸七は故人を思い出し、お米もその人柄や言動を偲ぶが、それだけにとどまらない。糸七は故人を生ある人間と同様に話題にし、お米を介して故人と向き合う。お米は、「名代」としての糸七を介して母恋いを口にする。故人との深い交感を通して魂を呼び覚まし、直接呼びかける。お京の魂も、初路と同じく、お米と糸七によって現世へと導かれているということが出来る。

本作における招魂は、故人に身体性、生命を与えて、魂を呼び覚まし、直接呼びかけることで成し遂げられている。作品の最後で、お京と初路が姿を現わすのは、招魂の成就のあらわれに他ならない。

ところで、お京と初路は、なぜ山門に出てきた「提灯の影」に姿を見せるのだろうか。なぜ、お米と糸七が山門下から見上げる構図を取ったのか。このことに関しては、作品のはじめ、山門に通じる階段が、「巖の砦の火の見の階子」に喩えられている点からの考察が可能である。仙晶寺は、盂蘭盆に墓地の丘の頂に聳える「榎の大木」に「高燈籠」を掲げることから、「燈籠寺」の異名を持つというが、モデルの蓮昌寺には、そのような習俗はないという。考えられることは、巻末の高い石段の上の山門に現われた提灯が、「高燈籠」の見立てになっているのではないかということである。折口信夫「盆踊りと祭屋台と」(『朝日新聞』大4・8・29付。『古代研究』所収。大岡山書店、昭

4・4)の指摘にあるように、「高燈籠」は、切り燈籠同様、「精霊誘致の手段」に他ならない。お米と糸七の招魂によって、石段の上の赤蜻蛉を描いた提灯を依り代として、お京と初路が姿を現わしたといえるのではなからうか。

上述のように、『縷紅新草』は、糸七が従妹お京の墓参りのために、お米と仙晶寺を訪れるところから始まる。お京のモデル、目細てるは、昭和十年三月二十日に胸の病のために他界した¹¹⁾。てるの葬儀に参列する機会を得られなかった鏡花が、昭和十四年春、てるの五回忌を機に、作品を通じたてるの墓参を意図したことは想像に難くない。てるに関する回想は、『女客』と同じく、明治二十七年四、五月の危機を前面化し、『桜心中』同様、身代わりのように百間堀に身投げした女工吉村ゆきを連想させたのであろう。女工の死をめぐる回想は、松川織工場その他から聞こえたであろう「聞くだも厭ふべき」女工たちの唱歌を想起させ、身肌を晒したと唄われた恥辱から自殺する初路を構想したものと思われる。また、昭和六年十一月の帰郷で、「觀光」を冠した博覧会開催の前にインフラ整備の進む故郷の変化に感慨を新たにし、新たな觀光名所として脚光を浴びる宮崎友禪斎の墓に注目して糸塚建立の発想を得たものと思われる。糸七が初路の無念を雪ぐつがいの赤蜻蛉は、大正十年前後に鏡花が赤蜻蛉の大群を目撃した体験を生かしたものとみてよい。

以上、『鐘声夜半録』をはじめとする作品や「魂祭り」「番茶話 赤蜻蛉」などの随筆に加えて、初路同様入水自殺した継子への言及は、すでに指摘があるように、『火のいたづら』とも関わる¹²⁾。これらの先行作品を再構成する一方、金沢東山の真成寺や逗子の岩殿寺への言及もあり、作者ゆかりの故人の魂を現世に迎える一代の集成といった側面も持つ。

昭和期の鏡花は、『絵本の春』(『文芸春秋』大15・1)、『お忍び』(『中央公論』昭11・1)など、荒廃した武家屋敷に棲む

他界の美女や『隣りの糸』（女性）大15・4）、『多神教』（文芸春秋）昭2・3）、『山海評判記』（時事新報）昭4・7・2・11・26）、『貝の穴に河童の居る事』（古東多万）昭6・9）、『燈明之巻』（文芸春秋）昭8・1）、『神鷲之巻』（改造）同の姫神による救済、『飛剣幻なり』（改造）昭3・8）の火の怪異、『古狽』（文芸春秋）昭6・7）の女性の白い手の幽霊、『雪柳』の爰跡に獣の毛の生える怪異など、多くの作品で他界からの顕現を描いた。その特徴は、『開扉一妖帖』（経済往来）昭8・7）が銀座の環海ビルのエレベーターを舞台にしている例や『古狽』の一節に、「現代―或意味に於て（中略）魔は―鬼神は―あると見える」とあるように、関東大震災後の「現代」における魔や幽霊、靈魂の存在を強く主張していることであった。『縷紅新草』は、他界の現世に対する脅威もなくはないが、むしろ末尾の他界からの故人の再来に戦慄する物語と捉えられよう。

鏡花は、この作品で故人と向き合い、深い共感、交感を通して魂を呼び覚まして身体性の回復を図り、生ある人間同等に捉え、故人に呼びかけて、現世へと導く招魂の成就を意図し、その成就を描いた。お京・初路との再会を描く末尾には、他界と現世の隔はすでに無い。現世を超える世界を希求してきた鏡花の境涯、到達点を示したものであるとして、いかにもふさわしい作品といえよう。

注

- (1) 「金沢市史 通史編3」所収、本康宏史「モダン金沢」と大衆文化（金沢市、平18・3）、「市史年表 金沢の百年 大正・昭和編」（金沢市、昭42・6）参照。本康宏史「産業・観光・博覧会―昭和七年金沢博覧会をめぐる」（水谷内徹也編『金沢学』⑤）パースペクティブ・金沢」前田印刷出版部、平5・2）は、昭和五年七月の「北國新聞」から「どん底不況の繊維業／石川県下の輸出織物業者の状態は、全滅の悲運に達するものとしてその前途が憂慮されている」という記事を紹介し、「経済的社会的な閉塞状態」を打開する「カンフル剤」として、折からの博覧会ブームを背景に、時の金沢市長吉川太一郎が企画したのが「産業と観光の大博覧会」だったと指摘している。

(2) 弦巻克二「虚構の意味―鏡花『縷紅新草』の世界―」（『国語国文』昭49・12）参照。

(3) 自筆原稿については、『泉鏡花自筆原稿目録』参照（『鏡花全集』別巻所収、岩波書店、昭51・3）。刊本の校正刷には、六月から七月にかけて、出校と「戻り」の月日が欄外に記されている。最後の校正は、七月一日に出校して同六日に戻っている。本文の頁が初刊本と一致することから、初出と平行して『薄紅梅』刊行の準備が進んでいたものとみられる。拙稿「解題」（『新編 泉鏡花集』第二巻、岩波書店、平16・2）参照。

(4) 女子高等授産場の職工頭吉村ゆきが百間堀に身投げしたのは、同月十四日夜のこととみられる。高桑法子「誘惑する水」（『国文学』平2・6）参照。

(5) 「金沢住宅明細地図」によれば、上新町一〇七に「松川株式会社」の記載がある。現在の金沢市尾張町二丁目七一にあたり、現在駐車場になっている。

(6) 初路を供養する「糸塚」の基になったのは、仙晶寺のモデル、金沢市東山の蓮昌寺境内、「秋の坊碑」であろう。『金沢の文学碑』（こぶしの会、昭63・11）によれば、「秋の坊碑」は、「台石ともに一・六メートルぐらゐの高さ」で、「横に一メートルほどの自然石」がその上に乗っていて、「秋の坊」と刻まれている。現在は、「右奥の本堂前の一隅」にあるが、「以前は、山門をくぐるとすぐ目の前にぼつんと据えてあった」という。敷田芳行住職によれば、大正時代に北声会の句会が同寺で開催された時に建てられたという。蓮昌寺の長い石段の途中にある「在境内秋の坊碑」という標柱も同時期の設置という。しかし、建てられた時期を示す記載はなく、建立後相当の年月が経過していることは間違いない。仙晶寺の記述は、石段や山門、境内の墓地の位置等、蓮昌寺と共通すること、山門近隣の碑は、他にないことから「秋の坊碑」に取材したものと考えられる。拙稿「卯辰山麓」（『おくのほそ道 芭蕉が歩いた北陸』北國新聞社、平22・3）参照。秋の坊は、松尾芭蕉の門人。加賀蕉門の有力俳人で、蓮昌寺境内に庵室を構えた。享保三年正月四日同所にて逝去。

(7) 「金沢市主催 産業と観光の大博覧会協賛会誌」（産業と観光の大博覧会協賛会、昭8・2）及び、本康宏史「産業・観光・博覧会―昭和七年金沢博覧会をめぐる」参照。

(8) 「東京日々新聞」には、「産業と観光の大博覧会」開催を報じた記事はない。広告として、昭和七年四月十六日、二十日の同紙に「山代温泉あらや」の広告があり、「○花の公園と博覧会！」「○見物の節は是非！」とある。なお、昭和七年四月二十八日付「北國新聞」は、「帝都の空に金沢博の大気球（銀座通りにて写す）」と付記した写真を掲載している。アドバルーンには、「金沢市大博覧会開催中」という広告がある。

(9) 前引の「番茶話 赤蜻蛉」では、赤蜻蛉の成群の飛ぶ様子を「青い紗に、真紅、赤、薄樺の緋を透かしたやう」、「下行く群は、真綿の松葉」、「上を行く群は、白銀の針をきら／＼と翻す」、「珊瑚が散つて、不知火を澄切つた水に鏤めたやう」、「天人の乗る八挺の銀の櫂の筏のやう」、「紅 舷銀翼の小さな船」、「満山の紅の、且つ大紅玉の夕日に映じて、かげひなたに濃く薄く、降りかかつた」さまに喩えている。随筆の「青い紗」は、本作の「薄紅一面の紗」に、同じく「不知火」は「明石町は昼の不知火」に、反映する。

(10) 糸七よりそう語り手も同様に、眼前の光景を見立て、喩えている。高台の寺に通じる石段を、「山賊の構へた巖の岩の火見の階子」に見立て、石段の途中にいるお米に糸七が提灯の柄を差し出した様子を、「中空の手摺にかけた色小袖に、外套の熊蟬が留つた」様子に喩えている。小春日和の「大城下」の紅葉を、優美で雄大な「友禪」に見立てるなど、糸七同様の美的で意匠性に富んだ感覚の持ち主といえよう。

(11) 本書「〈目細てると子どもたち〉の物語」参照。

(12) 初路同様、身投げして亡くなった「しもた屋」の「継娘」は、『火のいたづら』の「身投げ」した「娘」を連想させる。穴倉玉日「火事の記憶―火のいたづら」を読む―(『鏡花研究』第12号、平22・3)参照。また、身投げこそしないものの、設定の上では、『紅葉狂言』の広岡雪との共通点がある。

紅葉門下における〈転成〉

泉鏡花は、典拠・素材を換骨奪胎して多くの固有の物語を創り上げた。本論考においては、典拠・素材を転じ、原拠を離れて独自の作品世界を創出する物語を、「〈転成〉する物語」と名づけて、拙い検証をおこなった。序論で取り上げた『茸の舞姫』『妙の宮』『蓑谷』『龍潭譚』のように、作品の典拠・素材には、いわゆる先行文芸だけではなく、土地の伝承、祭りなどの民俗や同時代の出来事、さらには、自身の発表作の場合もある。次元はことなるが、草稿や校正段階における加筆訂正もある。これをも含めて大別すれば、

- 1 先行文芸・伝承・実録・雑報等からの〈転成〉
- 2 自身の発表作からの〈転成〉
- 3 草稿からの〈転成〉

というように、三つの「〈転成〉する物語」がある。本論考では、作家活動を四つに分けて、三つの「〈転成〉する物語」の検証を試みた。

第一章では、出発期の鏡花作品を取り上げた。明治二十五年十、十一月発表の処女作『冠彌左衛門』、二十六年から二十七年にかけて執筆された『貧民俱樂部』、二十七年春から夏にかけて執筆された『乱菊』、『秘妾伝』、『義血俠血』、二十七年上京時の経験に取材した『取舵』、さらには、同年十一月発表の『比喩談』も含めて、いずれも、「1 先行文芸・伝承・実録・雑報等からの〈転成〉」の典型的な作品であることが確かめられた。『貧民俱樂部』『乱菊』については、石川近代文学館蔵の草稿により、「3 草稿からの〈転成〉」の過程を検証した。

第二章では、二十年代末から三十年代の発表作を取り上げた。生家を売却して祖母・弟を東京に伴った明治二十九年発表の『照葉狂言』、『勝手口』、三十年の『七本桜』、三十二年発表の『湖のほとり』、『黒百合』、翌年の『湯女の魂』、三十六七年の『風流線』などである。ここでも、前章同様「1 先行文芸・伝承・実録・雑報等からの〈転成〉」の物語が多い。『七本桜』では、石川近代文学館蔵の草稿により、「3 草稿からの〈転成〉」の過程を検証した。また、『七本桜』は、『蝦蟇法師』から『黒猫』、さらに『七本桜』に至る「2 自身の発表作からの〈転成〉」の物語でもあった。三年後の『政談十二社』(小天地)明33・11、34・1)も『な、もと桜』から〈転成〉する物語であることを改めて補足しておきたい。『風流線』が、発表作『湖のほとり』からのあざやかな〈転成〉の物語であることは、いうまでもない。

第三章では、明治三十年代末から四十年代初めの自然主義への反論がどのような言説を踏まえたものかを検証し、併せて、三十九年発表作の『無憂樹』『春昼』『春昼後刻』の背景と構成を取り上げ、自然主義の対極にあたる作品の位相を考察した。

第四章では、大正・昭和期の作品を取り上げ、併せて、目細るとその子どもたちの足跡と作品との結びつきを検討した。震災後の帰郷に基づく『夫人利生記』は、自身の摩耶夫人像注文の経緯と鬼子母神真成寺の押し絵の奉納額が『釈迦八相和文庫』の挿絵であることを知った帰郷中の体験に基づいた作品で、「1 先行文芸・伝承・

実録・雑報等からの〈転成〉する物語だが、末尾に「筆者は、無憂樹、峰茶屋心中、なほ夫人堂など、兩三度、摩耶夫人の御像を写さうとした。いまた繰返しながら、その面影の影をさへ描き得ない拙さを、恥ぢなければならぬ。……」とある観点から捉えれば、「2 自身の発表作からの〈転成〉する物語といえよう。『縷紅新草』は、明治二十七年四月、経済的な問題から百間堀への身投げを思ったという体験を核とした同年執筆の『鐘声夜半録』、三十八年執筆の『女客』から大正四年発表の『核心中』等々の発表作を踏まえる。「2 自身の発表作からの〈転成〉する物語の典型である。『縷紅新草』では、校正刷りの推敲過程の検証も試みた。

以上のように、明治二十五年の処女作から昭和十四年の最終作品に至るまで、鏡花文学を〈転成〉する物語とみることが、本論考に取り上げた作品に徴して明らかであろう。

次に問題になるのは、序論で指摘したように、鏡花の「〈転成〉する物語」の方法が師尾崎紅葉の指導の賜物だとすれば、鏡花以外の紅葉門下、いわゆる牛門（藻社、詩星堂）の作家で、同様の例があるかということである。

すでに、本書第三章収録の「『黒百合』の生成」において指摘したように、「黒百合」は、矢野龍溪『浮城物語』だけでなく、同じ紅葉門下の三島霜川『黄金窟』から〈転成〉した物語と考えられる（資料1）。明治二十六年に鏡花と霜川は金沢で知り合った。三年後紅葉門下になった霜川は鏡花の弟斜汀とともに、桐生悠々から英語を習うなどの関係もあり、交流があった。水滸伝を念頭に置いて、故郷を舞台に『湖のほとり』を構想執筆していた鏡花にとって、富山から始まり、日本海を舞台にした『黄金窟』の構想は、大いに興味を掻き立てられるものであり、『黄金窟』の海に対する山の物語としての『黒百合』を構想し、立山、石瀧山中の山中他界の黒百合採集を手始めに、「珍しい不思議なもの」、「山の霊、水の精、また天道様が大事に遊ばすもの」で、「金でも権柄づくでも叶わない」もの、「大びら」に盗んでも、「人は誰も咎めない」ものを求めて船出する前段階の物語に転成したのではないかと指摘した。

摘した。

同じ霜川『黄金窟』をめぐる、興味深い問題がある。佐々木浩「続徳田秋声と三島霜川―代作をめぐる―」（『富山大学教育学部紀要』平5・3）によれば、霜川は、『黄金窟』発表の翌年『女海賊』を「山陽新報」（明33・9・4）12・2、71回中絶に「尾崎紅葉関・三嶋霜川作」として発表している。『女海賊』は、主人公二髪村のおろくが、霞の城の領主安芸守によって処刑された父灘右衛門の衣鉢を継ぎ、「朱鞘の黒頭巾組」と渾名される海賊の頭領になって大名の船から金品を略奪し、千畳が窟でひそかに五千石の大船を建造、二髪村の漁師たちに乗船を促すという内容の作品で、千畳が窟・大船の建造・二髪村の漁師たちの乗船を促すなど、霜川自身の前作『黄金窟』と共通する部分がある。本論考でいえば、「2 自身の発表作からの〈転成〉の物語といえよう。

佐々木論文は、さらに、霜川が明治四十年三月に発表した『あら磯』（『新声』）に登場する「死神岩」の次のような一節を紹介している。

土地の古老は、往昔は人喰鬼が棲つて居たと謂つてゐるのだから。爰、二髪と隣村の境、象が鼻の形をした象が鼻岬の最ツ端で、聞えた魔所である。屏風を立てたやうな、岩と岩とは、尖つて、角ばつて、恰で巨大な怪物の頭が転がつて居るやうだ。（中略）勿論尋常の人には用事の有らう筈が無い箇所だ。（中略）土地の者は、恐らく其れは、洞穴の中で往生して了つた人喰い鬼が、何にか現世に執着を残して、岩の精霊となつて、祟をするのであらうと信じて、間違つて其処へ行かうものなら、血を吸乾されて了うと謂つて居る

霜川『あら磯』の右の引用文の波線部「二髪と隣村の境、象が鼻の形をした象が鼻岬の最ツ端で、聞えた魔所である。屏風を立てたやうな、岩と岩とは、尖つて、角ばつて、恰で巨大な怪物の頭が転がつて居るやうだ。（中略）勿論尋常の人には用事の有らう筈が無い箇所だ。」までは、すでに、霜川自身による『女海賊』に全く同じ一節が

あるのだが、同じく引用文の傍線部「土地の古老は、往時は人喰鬼が棲つて居たと謂つて」と「土地の者は」以下の一節が、「死神岩に居た人を喰ふ鬼が、何時の世にか往生して了つて、その鬼が未だ此世に執着を残して岩の精霊……、死神となつて何時までも人に崇るのだ」というように、徳田秋声『黄金窟』〔北國新聞〕明39・10・2～40・1・19)にもあると指摘されている(資料2)。

秋声『黄金窟』は、能登の大地主仁十郎親方の船が遭難し、その娘お崎が父の遺言を守って、海賊船玄潮丸に乗り込んで、宝を求めて小笠原諸島にある黄金窟に向かう内容で、試練にあう度、お崎は、謎の老僧(実はお崎の父、仁十郎に危機を救われる。秋声作は、能登の輪島が舞台で、霜川作の二髪村は出てこない。ヒロインの女性が海賊船に乗るという設定は、霜川『女海賊』の構想に類似する。秋声は、「北國新聞」連載にあたり、友人霜川作のタイトルを借り、『女海賊』の一節を自作に導入して、石川県を舞台にする自分なりの『黄金窟』を執筆したものとみられる。

霜川作をいかに変えるか。〈転成〉の物語に関する細野燕台の証言「里見八犬伝なら……どこまで読んだか、これまで読んだ、それではその話をせい、なんの何左衛門が……と話す、それではお前はとおもつてゐるか、お前が小説を書いたらあれをどうするとそういうことをきく」という紅葉の指導を想起させる点は、ないだろうか。

佐々木氏は、この問題について、次のように述べている。

「死神岩」の描写は明らかに〈霜川「女海賊」↓秋声「黄金窟」↓霜川「あら磯」〉とたどれることになり、この箇所限定すれば、霜川の表現を秋声が作品に借用し、それを再度、霜川は自分の作品に取り返した(中略)ものとなるのである。

このように、霜川と秋声は、最も親しい作家同士として、作品の一部を貸し借りしているわけだが、こうしたや

りとりを、秋声は、霜川以外ともしている。

秋声が初めて「北國新聞」に『わかき人』(明38・7・10～8・14)を連載した翌年、同じ尾崎紅葉門下の山里水葉が「九州日報」に、同じタイトルの作品『若き人』(明39・12・6～40・4・3)を連載している。注目されるのは、「尾崎紅葉・山里水葉作」と銘打ち、紅葉の閲読した作品であることを強調したものになっていることである。そればかりではない。「九州日報」の連載二回目には、次のような「まえがき」がある。

「若き人」は紅葉門下に青年作家の名を得たる水葉の作、篇の稿を脱したるは、紅葉の氣息既に奄々の際に在りしも、紅葉は尚病褥に身を支えて、一々之に校閲を加へたりと。今郵寄せし原稿を繕けば、朱筆の句、批点の痕、昔ゆかしき心地あり。是に由りても紅葉子が褥を易ゆるまで後進の為に心力を費したることの如何に懇篤なりしかを追想するに余りあり。篇首に掲ぐる所の断簡こそ実に子が最後の手蹟なれ。

引用の最後にあるように、巻頭には、「閲了」と記した「紅葉」の押印と本文への訂正を加えた本文冒頭原稿「断簡」が掲載されている(資料3)。水葉『若き人』は、明治三十六年十月三十日の紅葉逝去以前に脱稿していたことを証明する。発表は前後するが、秋声作は、水葉作よりも後の執筆とみるのが妥当であろう。

秋声『わかき人』は、彫刻家卯之木淵郎が、医学博士椿井龍太の娘麗子と結ばれるまで、「理想の家庭」を築き、「芸術家らしい生活」を約束するまで、を描いた作品である。秋声作の冒頭は、

漆臭い針箱の傍に、重げな高島田の頭を凭れて、縮緬の肘褥を縫ひながら、幾度か針の運を鈍らせつ、得も謂はれず胸の内を攪乱して居る娘麗子。

となつている(資料4)。同じ一節が水葉作『若き人』の「(二拾四)」にもある(資料5)。

漆臭い針箱の傍に、重げな高島田の頭を凭れて、縮緬の肘褥を縫ひながら、幾度か針の運を鈍らせつ、得

も謂はれず胸の内を攪乱して居る娘麗子。

右のように、句読点に至るまで同じである。「(二拾四)」に加え、「(二拾五)」も秋声『わかき人』の始めの二回(一)の「一、二」と同文である。重複部分は、「ジョンフラツキスマン」とその妻「アンデンマン」を淵郎と麗子に重ねる椿井家の家族の会話の場面である。「ジョンフラツキスマン」は、中村正直訳で明治初めにベストセラーになった『西国立志編』(明3・10)に紹介されている彫工である。夫婦で、「相互に扶け励んで、遂に成功」した。秋声作と比較すれば、境遇の不幸、逆境と戦って、有力者の助力を得て道を切り開く点が共通している。秋声作末尾の「勉強を為直し」で「目的を成就します！」と勇気をみなぎらせる淵郎の決意は、冒頭の「ジョンフラツキスマン」の話と呼応する。作品の構想に、『西国立志編』が影響を与えているものとみていい。

秋声作の淵郎は、「意志が弱いため」に母の死の「悲痛」に打ち勝つことが出来ず「放蕩した」。麗子と家庭を作るとしても「意志が弱い」から、「平和を乱すやうな思い」をさせると悲観的な見方を語る。麗子と駆け落ちした時も、「意気地無く」木賃宿に泊まろうといえず、利根川の鉄橋を渡っている途中、汽車が来て、二人は川に転落し、離れ離れになる。こうした意志の弱さ、意気地なさから「煩悶や失望」に陥り、「青年の失敗者」になるのが、前半の淵郎である。しかし、役者になった後半の淵郎は、妹と再会し、「他人の間に育つた妹」の「憂い辛い悲しい道を重荷を背負つて唯無心に歩いた長い年月」を思い、「己男子として意気地無くも悲み破りたる境涯を恥」じるところから変化する。駆け落ちして信頼を裏切った麗子の父からの「迫めて今後は人らしく、自分の事はかりを思はずに衆迎を大いに考へて然して最う一遍塑像を(中略)是非遣つて貰ひたい」という温情溢れる働きかけによって、淵郎は本来の健全性を回復する。さらに、龍太と入れ違いに麗子が現われた時、鉄橋から転落して傷を負い、面がわりをした麗子を見て、「無残と覚醒が交湧」くを感じ、「屹と、屹と、貴女を満足させます」と回心し、「勉強を為直し」で「目的を成就します！」と勇気をみなぎらせて新たな決意を語る。

人生問題で「煩悶」する明治三十年代後半の青年の時代病や自由結婚の問題など、世相や時代性も積極的に取り込んだ作品である。これより前、秋声は、ツルゲーネフ『うき草』(「ルージン」二葉亭四迷訳。「太陽」明30・4・10)の影響を受けて、『惰けもの』(「新小説」明32・12)など、意志の弱い青年の逼塞していく様を度々描いた。前半の淵郎がこれに相当する。明治三十五年八月の『春光』(「文芸界」)では、自立した女性作家が意志薄弱な青年に新しい生き方を説く。完成度は充分でないにしても、秋声の『わかき人』は、明治三十年代の秋声文学の一面を鮮明に示した作品で、後半において、意志の薄弱さを乗り越える若者像を描いている点で注目される。

秋声作『わかき人』と水葉作『若き人』について、十文字隆行「近代の狭間」(『徳田秋聲全集』第二十九巻「解説」)は、「地方新聞での不可解な動き」であるとして、合作・代作の問題との関連を指摘している。しかし、作品全体を捉えなおしてみると、異同が少なくない。水葉作『若き人』の淵郎は、彫刻家ではなく画家である。姓は、宮井という。駆け落ちして、鉄橋を渡るうちに汽車が来る場面は、水葉作では夢の中の出来事になっている。役者になった淵郎が行方不明の妹に再会後、椿井龍太に諭されて娘麗子と会い、転落時の負傷の傷跡を残す麗子と将来を誓い合うのが、秋声の結末である。これに対して、水葉作では、麗子は淵郎の友人と婚約する。役者として旅巡業に出る淵郎兄妹を馱で見かけた椿井龍太が、淵郎の不運に同情するところで終わっている。秋声作では、卯之木という珍しい姓ゆえに、淵郎は妹と再会を果す設定になっているが、宮井という姓は特別の意味をもたない。また、水葉作では、秋声ほどには、『西国立志編』を生かしていない。水葉作が先行し、秋声作に影響していることは明らかだが、二作は別個の作品であり、秋声作のほうが緊密な構成になっている。

水葉作に接した秋声は、鏡花に対する紅葉の指導からいえば、「お前が小説を書いたらあれをどうする」という



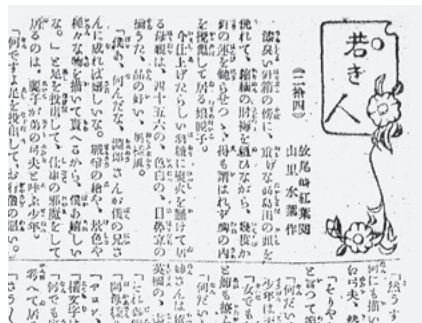
【資料2】



【資料1】



【資料3】



【資料5】



【資料4】

観点から、水葉作の「二拾四・二拾五」の本文とタイトル、人物名を借り、これを冒頭にすえて、改めて『西国立志編』の彫工を念頭に、先行作品を秋声なりに〈転成〉したのではなからうか。このようにみえてくると、先に紹介した尾崎紅葉の創作指導は、鏡花だけでなく、秋声や霜川、水葉などにも及んでいたことが想像できる。

秋声と霜川との代作をめぐる問題を追及した佐々木浩氏は、

「千景が窟」とか「大船建造」、あるいは「海賊」や「死神岩」といった部分的な素材ないしは表現の類似性を重視すれば、それらが霜川の「黄金窟」に端を発し、霜川「女海賊」を経て秋声「黄金窟」へと継承されていることは明らかである。

と指摘し、「両者の交友の尋常ならざる関係が自ずと推察される」というように、友情の賜物とみている。しかし、そのような作品のやりとりを可能にしたのは、紅葉の指導ではなからうか。

また、こうした視点を導入することによって、従来これらの作家をめぐる問題にされてきた代作や合作、作品の貸し借りや剽窃の問題も、〈転成〉する物語の問題として捉えなおすことが出来るように思われる。

ひるがえって、鏡花における〈転成〉はどうか。本論第二章の『七本桜 本文考』で取り上げた『蝦蟇法師』から『妖僧記』への〈転成〉などの例を除けば、鏡花文学の〈転成〉は、タイトルや文章表現を共有する秋声や霜川の〈転成〉とは、明らかに異なる。「どこまで読んだか、これまで読んだ、それではその話をせい、何の何左衛門が……と話す」と、それではお前はどうおもっているか、お前が小説を書いたらあれをどうする」という問いに対する解答としての〈転成〉する物語の転成。そのあり方に、本論考で検証した鏡花固有の想像力の羽ばたきを見る事ができるのではなからうか。

泉鏡花が生れて百四十年にあたる昨年、思いがけず、金沢市下新町の生家跡に建つ泉鏡花記念館の館長を拝命した。さまざまな展示や企画を通して、鏡花との出会いや理解の深まりの仲立ちになるのが、使命であろう。文庫などによる新たな本文の提供も続き、戯曲上演の機会も多い。下新町と鏡花文学を育てた町、神楽坂を結ぶプロジェクトも始まった。鏡花文学が才能溢れるクリエイターの創造の源泉にもなっている。鏡花文学を顕彰し、内外に鏡花の人と文学の魅力をご理解いただけるよう努めたいと思う。

大学に入学して、『高野聖』を読んで、茫然とした。妖しく美しい幻想の世界に魅了されたのだ。折から、岩波書店から『鏡花全集』が刊行されていた。「別冊現代詩手帖 泉鏡花」や中央公論社版『日本の文学 尾崎紅葉・泉鏡花』の三島由紀夫の卓抜な鏡花論に大きな影響を受けた。卒論は、檜谷昭彦先生のゼミで『高野聖』を取り上げたが、膨大な作品を、読破しただけだった。

大学院では、作品成立の時代に帰るのは研究の基本だと、処女作から取り組んだ。修士論文提出後、都立高校の教諭になって、教えるよりも、教わるほうが多い日々をすごしていた時、大学院で教えをうけた浅井清先生のすすめがあり、昭和五十八年四月、初めての論文『冠彌左衛門』考―泉鏡花の出發を「国語と国文学」に発表した。前年夏、論文合評会を開いていただいた。サブタイトルは、宮内俊介さんのアドバイスに拠る。中村三代司さんからも、多くの示唆をいただいた。鏡花の故郷、金沢に来ることができたのも、先生のお陰である。四半世紀が経過し、

浅井先生も、宮内さんも、さらには中村さんも黄泉路に先立たれた。

鏡花研究は、昭和四十七年から五十一年の岩波版『鏡花全集』刊行を境に劇的な広がりを見せた。一九七〇年代の鏡花ブームの中に、私もいたことになる。泉鏡花研究会が発足したのは、昭和五十九年五月十日のことであつた。拙い論文を発表して一年目の私も、勇んで参加した。以来、勤務校の他、東京の泉鏡花研究会と石川近代文学館の鏡花研究会を足場としているが、研究は遅々として進まない。しかし、一昨年春、最終発表作『縷紅新草』論を執筆し、三十年間の研究成果をまとめることにした。

作品成立の背景と生成のメカニズムへの関心の偏り、初期作品への偏り、いわゆる〈金沢もの〉への偏りがあるが、やむをえない。この三十年間は、鏡花の〈転成〉する物語の探究であつたと振り返り、「泉鏡花 転成する物語」をタイトルとした。

慶応義塾図書館、石川近代文学館、石川県立図書館、岩波書店、松村友視氏、小林輝治氏、田中勳儀氏、吉田昌志氏、赤峯裕子氏、目細八郎兵衛氏御夫妻、室野和子氏、岡本卓三氏、宮保淳子氏、深村智山氏、吉田弘信氏、敷田芳行氏、見寺義弘氏、前田国男氏を始め、多くの方々にご高配、ご配慮をいただいた。改めて、感謝したい。特に、大部の資料の掲載をお許しいただいた石川近代文学館の新宅剛理事長、本論考刊行をすすめてくださり、粘り強く擱筆を待っていただいた奥平三之氏に、心からの謝辞を申し上げます。

平成二十六年一月七日 還暦

秋山 稔

〈初出一覧〉

序論 転成する物語

転成する物語 覚書（『鏡花研究』13号、平成25年3月）

第一章 泉鏡花の出発

『冠彌左衛門』考

〔「冠彌左衛門」考—泉鏡花の出発—〕、「国語と国文学」昭和58年4月）

『貧民倶楽部』と慈善の時代

〔慈善の時代の文学—『貧民倶楽部』の試み—〕、『論集 泉鏡花』、有精堂、昭和62年11月。「資料紹介—石川近代文学館蔵泉鏡花草稿、『貧民倶楽部』『乱菊』『大和心』（『金沢学院大学紀要 文学・美術・社会学編』第5号、平成19年3月）

明治二十七年の鏡花・忍月・悠々

〔明治二十七年の鏡花・忍月・悠々〕、「金沢学院大学（文学部）紀要」第2集、平成9年3月）

『乱菊』の成立

〔「乱菊」の典拠—『金城美譚如月雪』を中心に—〕、「鏡花研究」第8号、平成5年9月）

『乱菊』本文考

〔資料紹介—石川近代文学館蔵泉鏡花草稿、『貧民倶楽部』『乱菊』『大和心』—〕（『金沢学院大学紀要 文学・美術・社会学編』第5号、平成19年3月）

『秘妾伝』の成立

〔泉鏡花『秘妾伝』考—石川近代文学館蔵初出本文と典拠をめぐって—〕、「鏡花研究」第12号、平成22年3月）

『義血俠血』の背景

〔「義血俠血」—草稿における構想の原点—〕、「解釈と鑑賞」、平成元年11月）

『取舵』考

〔泉鏡花『取舵』考—明治二十七年の上京をめぐって—〕、「金沢女子大学紀要（文学部）」第四集、平成2年12月）

第二章

豊饒な物語をめざして

『照葉狂言』懐旧と離郷

〔「照葉狂言」の背景—懐旧と離郷—〕、「鏡花研究」第9号、平成12年3月）

『勝手口』試論

〔勝手口から戦場へ—泉鏡花『勝手口』試論—〕、「日本近代文学」第79集、平成20年11月）

『七本桜』本文考

〔「な、もと桜」本文考〕、「鏡花研究」第11号、平成19年3月）

〈越中もの〉の素材

〔泉鏡花の〈越中もの〉について—『義血俠血』『黒百合』『湯女の魂』を中心に—〕、「日本文学研究年誌」第12号、平成15年3月）

『黒百合』の生成

〔泉鏡花『黒百合』の生成〕、「金沢学院大学紀要 文学美術社会学編」第10号、平成25年3月）

『風流線』の一考察

〔「風流線」の一考察—巨山五太夫のモデルについて—〕、「三田國文」第4号、昭和60年10月）

『湖のほとり』から『風流線』へ

〔「湖のほとり」から『風流線』へ〕、「論集 泉鏡花」第二集、有精堂、平成3年11月）

第三章 自然主義への抗い

自然主義と鏡花

〔「自然主義と鏡花」〕「解釈と鑑賞」、平成21年9月)

『無憂樹』の語りとイメージ

〔「泉鏡花『無憂樹』論―語りとイメージの連鎖―』、『論集 泉鏡花』第三集、和泉書院。平成11年7月、)

『春昼』『春昼後刻』における夢

〔「鏡花文学における夢―『春昼』『春昼後刻』を中心に―』、『日本文学研究年誌』第十号、平成13年3月)

第四章 招魂へ向かう文学

『桜心中』の素材とモチーフ

〔「泉鏡花『桜心中』論―輻輳するモチーフ―』、『鏡花研究』第10号、平成14年3月)

『夫人利生記』の周辺

〔「泉鏡花『夫人利生記』の周辺』、『金沢学院大学文学部紀要』第7集、平成14年3月)

『夫人利生記』の成立

〔「泉鏡花『夫人利生記』論―成立背景を中心に』、『論集 昭和期の泉鏡花』、おうふう。平成14年5月)

〔目細てると子どもたち』の物語

〔「金沢もの」再考―目細てるの子どもたち―』、『文学』、平成16年7月)

『縷紅新草』招魂の機構

〔「帰郷小説としての『縷紅新草』―観光から招魂への転成―』、『昭和文学研究』第64集、平成24年3月)

結論 紅葉門下における〈転成〉(書き下ろし)

【著者略歴】

秋山 稔 ● あきやま みのる

昭和29年1月 千葉県館山市生まれ
昭和56年3月 慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了
4月 都立高校教諭（鮫洲工業高等学校、赤坂高等学校）
昭和63年4月 金沢女子大学文学部講師
現 在 金沢学院大学・金沢学院短期大学 学長
泉鏡花記念館 館長

泉鏡花 転成する物語

2014年4月24日 第1刷発行

著者 秋山 稔

発行者 能登隆市

発行所 梧桐書院

〒101-0024

東京都千代田区神田和泉町1-6-2

TEL 03-5825-3620

FAX 03-5822-2773

振替 00120-8-102169

制作 能登印刷出版部

デザイン 西田デザイン事務所

印刷 能登印刷株式会社

落丁・乱丁本は小社にてお取り替えます。
© Minoru Akiyama 2014 Printed in Japan
ISBN978-4-340-40206-9